東方扇仙詩

サイドカー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夜の繁華街で自称「何でも屋（日雇い）」を営む青年は、ある日の晩、奇妙な金髪美女の話し相手を引き受けたばかりに現代から知られざる世界「幻想郷」へと飛ばされてしまう。

その先で早くも厄介事に遭遇した彼は、右腕に包帯を巻いた桃色の髪をもつ少女、茨木華扇と出会う。

これは、カッコつけで若干ぶっきらぼうでチョイとヘタレな人間と、マジメでちょっぴり早とちりしやすくて意外と積極的な仙人が送る、そんなオハナシ。

目　次

プロローグ「ハートフルストーリーの幕開けたぜコノヤロウ！」　1
第一話「出会い　～はじまりは突然になの～　」　5
第二話「桃色の少女は仙人様？」　14
第三話「何でも屋は移転しました」　24
第四話「働きたいでござる」　30
第五話「探し物はぬこですか」　37
第六話「マヨヒガ　ニャンニャン」　45
第七話「何でも屋、蹴られる」　53
第八話「異世界屋台　～お前に食わせるタン塩はねェ！～」　60
第九話「二日酔いにはラムネ菓子が効くんだと」　68
第十話「ＲＡＮＳＡＭＡ　×　ＬＡＮＳＡＭＡ」　77
第十一話「初代ゾイドでは仲間に運び屋の女キャラがいた」　83
第十二話「登場キャラは全員二十歳以上の設定って逆に苦しくない？」　91
第十三話「仙人だって甘えたい！」　97
第十四話「赤髪エンカウント　～人里のろくろ首　前編～」　103
第十五話「赤髪エンカウント　～人里のろくろ首　後編～」　111
番外編「人里のメリークリスマス」　118
番外編　続「聖なる夜は桃色に染まる」　126
第十六話「赤髪エンカウント　～サボりな死神～」　134
第十七話「赤髪エンカウント　～サボりな死神　ｐａｒｔ２～」　143
第十八話「いばら荘の華扇さん」　152

第十九話　「ノートレーニング　ノーライフ」 161
第二十話　「もう一人の外来人」 169
第二十一話　「円卓会議はお茶の間で」 178
第二十二話　「冴えない彼氏（ヒーロー）の鍛え方」 185
第二十三話　「茨木華扇の華麗なる一日」 192
第二十四話　「邪仙現る！　美女の色香にご用心!?」 200
第二十五話　「フタリノ夜」 208
第二十六話　「エロ同人みたいに！」 215
第二十七話　「鬼襲来！　～酒は飲んでも飲まれるな～」 224
第二十八話　「イツワリノヒメゴト」 231
番外特別回　「るんるんびより　前編」 241
番外特別回　「るんるんびより　中編」 252
番外特別回　「るんるんびより　後編」 261
第二十九話　「三割の月が昇る空」 269
第三十話　「孤高のグルメ」 278
第三十一話　「あー、女神サマぁ?」 286
第三十二話　「どっちを選ぶの!?　～仙人サマｏｒ女神サマ～　前編」 295
第三十三話　「　どっちを選ぶの!?　～仙人サマｏｒ女神サマ～　後編　」 304
第三十四話　「ユーレイコワイ」 313
第三十四・五話　「独白　ｐａｒｔＡ」 327
第三十四・五話　「独白　ｐａｒｔＢ」 335
第三十五話　「吊り橋効果ってやつじゃんよ」 344
第三十六話　「クンカクンカ」 354

第三十七話「動き出すかもしれない物語」――364
第三十八話「準備万端（レディ・パーフェクトリー）」――372
第三十九話「ｐｉｅｒｃｅｄ　ｅａｒｒｉｎｇｓ　～傷だらけの割引券～」――381
第四十話「サザンがクロイワ伝」――392
第四十一話「四等分の仙人」――403
第四十二話「ラッキースケベでインガオホー」――412
第四十三話「電気ネズミといってもポケットなアレじゃない」421
第四十四話「世の中案外ダメもとでも言ってみるもの」――427
第四十五話「夜は永いし歩けよ仙人」――435
第四十六話「玉座に座るのは誰だ」――447
第四十七話「慢心しなけりゃ王は勝つ」――457
ＧＷ番外編「屋根より高いコイゴコロ」――468
第四十八話「ビンボー神やっ！」――476
第四十九話「これがキョウイの格差社会」――484
番外特別回「もしも茨木華扇とキャンパスライフを過ごしたら　前編」――492
番外特別回「もしも茨木華扇とキャンパスライフを過ごしたら　後編」――505
第五十話「やられたらやり返す」――521
第五十一話「宵に良い酔いヨヨイノヨイ」――533
第五十二話「ピンク×ピンク×ピンク」――541
第五十三話「仙人掌って読める人おる？」――552
第五十四話「仙人掌（サボテン）　花言葉は『枯れない愛』ですって

よ」 559
第五十五話 「Ｐｅ：フロから始まる同棲生活」 567
第五十六話 「仙人ちゃんは語りたい！」 577
第五十七話 「修学旅行のお土産といえば木刀か変なプリントＴシャツ」 589
第五十八話 「花の都のエイドリアン」 602
第五十九話 「そして彼はいなくなった」 614
第六十話 「怨念が中におんねん」 624
第六十一話 「ケガニンスレイヤー」 638
第六十二話 「介抱と甘やかしプレイは全然違う」 647
バレンタインデー特別回 「恋と仙人とチョコレート」 654
第六十三話 「バカとポン酒と幻想郷」 663
第六十四話 「茨木華扇は○○が上手？」 671
第六十五話 「汝は仙人なりや？」 678
第六十六話 「仙人が絶対に負けないラブコメ」 686
第六十七話 「ＭＥＧＡＮＥ」 696
第六十八話 「暑中お見舞い申し上げます」 705
第六十九話 「それでもオレはヤってねぇ」 715
第七十話 「酒は飲んでも死ぬな」 724
第七十一話 「あと五分で本当に起きれるやつはいない」 731
第七十二話 「見える男くん」 740
第七十三話 「頭文字ミッドナイト早朝版」 751
第七十四話 「旧都アンダーグラウンド」 762
第七十五話 「ゴッドシスターズ」 769
第七十六話 「逮捕されちゃうぞ！」 779

第七十七話　「人は見た目で判断されがち」――――――788
第ｉｆ話　「少年は自転車に乗った瞬間から少しだけ大人になる」
798

プロローグ「ハートフルストーリーの幕開けたぜコノヤロウ！」

ふと思い立って、夜中に港を訪れた。

静かだ。自分以外に誰もいない。ロクに街灯も立っておらず、己の身体が暗闇と交わっていくような感じを覚える。

出発前か、あるいは到着したところなのか。貨物船と思しき汽笛が低い唸りを上げ、さざ波の音を打ち消してしまう。頭上を見やれば、灯台の赤いライトが規則正しく回っては目印の役目を果たしていた。

季節は夏、暦をいうなら文月。時刻は午後八時を過ぎたばかりだった。

知り合いから受けた仕事をさくっと片付け、心地良い夜風にあたりながら仕事終わりの一杯を味わう。

この時間帯になってようやく涼しくなってきた。日中なんてクソ暑い時に外に出るなど自殺行為でしかない。そう、オレは夜に生きる男。

短い黒髪をオールバックにまとめ、黒いワイシャツの上にブラックカラーのネクタイを締めさらには闇色のスキニーを身に纏うファッションスタイルは、ネオンライトが煌びやかに彩る繁華街によく映える。と、オレは信じてやまない。

華々しくも騒々しい愛しの繁華街から数キロほど離れたこの港は、なんだか生気を全て街に吸い取られたかのように静まり返っている。もし明るい時間帯に来ていれば、太陽の光を受けてキラキラと輝く海がお目にかかれたであろう。ま、オレには縁のない話だ。

外国ラベルの瓶ビールを片手に、フッとニヒルな笑みを零す。

「良い夜だ」

「ええ。本当に素敵な夜ですわね」

女性の声。

振り返ると、見慣れない女性が微笑みながら立っていた。誰だ？

「こんばんは」

腰まで届きそうな長い金色の髪を下ろした艶やかな美女。紫色のドレスと白い手袋のコーディネートはホステスにも見えるが、おそらくは素の服装なのだろう。ホステスが仕事着のまま一人でこんな場所にくるとは到底思えない。

気品ある笑みを崩さない傍ら、その裏に得体のしれない何かさえ感じる。ぶっちゃけて言うと、どこか胡散臭い。しかも大抵、そういう類の輩には面倒な依頼を持ちこまれたりするワケで。

「あんた、オレに仕事の依頼しにきたのか？」

「生憎と、ただの通りすがりですわ。久しぶりにこちら側の世界に足を運んでみましたの。そうだわ。もしよければ私の話し相手になってくださらない？　それとも、これも仕事の依頼になるのかしら？」

女は芝居がかった口調で言葉を紡ぎ、口元を隠すように扇子を広げた。あんなもの、いつの間に持っていた？　まるで気付かなかった。ますますもって怪しいが、かといって追い払う理由もない。まぁいい。あえて誘いに乗るのもまた一興だろーよ。

立ち話をするならせめて飲み物の一つくらいあった方が良いだろう。幸い、瓶ビールは二本持っていた。未開封だった方の栓を抜き、件の女に渡してやる。

「ならねーよ。他愛のない世間話ぐらいで金がもらえるとは思っちゃいねぇ。そういうのはホストの仕事だ」

「あら、お優しいのね。有難くいただきます」

ところで、仕事の依頼って言っていましたけど、何のお仕事を？

――便利屋っつか何でも屋。この街の厄介事を報酬次第で請け負っている、フリーランスなオシゴトだ。

へぇ。どのような依頼が来ますの？

――店のヘルプに掃除に工事現場から引っ越し手伝いまで色々だな。駅のコインロッカーからブツを回収してこいって運びの依頼もあれば、尾行だの人探しだの探偵のマネゴトも頼まれたりする。

なぜ、そのような仕事を始めたの？

――オレにも複雑な事情があんだよ。普通だとか平凡だとか、そういう真っ当な生き方には縁がなかったってこった。もとよりオレは

夜に生きる男、裏の世界に身を置くのが性に合っている。
　酒が入ったせいか、あるいは語るうちに自分に酔ったか。次第に気が大きくなったオレは次々と饒舌に答えていった。
　話し相手になってほしいという割には、女は質問してばかりで自分に関して話そうとしなかった。こちらに質問を投げては楽しそうに耳を傾けるばかり。
「裏の世界、ねぇ……うふふ」
「そんなに可笑しいか？　あんただって似たようなもんだろーに」
「当たらずとも遠からず、ですわね。そうね……面白いお話と美味しいお酒のお礼に私からも一つ。もし此処ではない別の世界があるとしたら、どうかしら？」
「なんだそりゃ？　ヤバい宗教ならいらねーぞ。その手の新世界とか知ったこっちゃない」
「いえいえ、宗教の勧誘なんてしません。もしもの話。まるで物語のような出来事に満ち溢れた、全てを受け入れる残酷で美しい御伽の国。そんな場所があったら、行ってみたいと思う？」
　子どもが思い描きそうなメルヘンチックな問い。この女、意外とロマンチストなのか？
　数ヶ月前に二十歳を迎えた大人の男がマジになって考えるのも憚られる内容だが、なぜだか不思議と答えはすんなり出た。そんな世界があったのならば、オレはどんな風に過ごすのだろうと思いを馳せて。
「……行ってみてーかもな。ま、あったらの話だけどよ」
「そう。それは良かったですわ。では、後ろをご覧ください」
　言われるがままに振り返る。だが、つい今しがた一人で眺めていた景色が変わらず続いているだけだった。真っ黒な夜空と、それと同じ色に映る海が彼方まで。水平線もおぼろげな、どこまでも闇色に染まる風景。
　てっきり面白い仕掛けでもあるのかと思いきや、肩すかしを受けていささか拍子抜けしてしまう。
「おい、何も……」

ないじゃねーかよ、と言いかけて。
向き直ったその先にあった光景にを前に、オレは途中で言葉を失った。
奇術か。あるいはトリックか。はたまたヤバい幻覚でも見せられてしまったのか。
目の前にある空間が切り開かれ、その内側から無数の目玉模様が施された異形（あと悪趣味）な謎の亀裂が顔を覗かせていた。
「はァアアンッ!?」
仰天のあまり今どきエセ外国人ですら出さないような発音が迸った。なッ、なんだこりゃあ!?
そんな反応などお構いなしばかりに、その亀裂は巨大クジラさながらに大口を開けると、硬直するオレを容赦なく飲み込んだ。一口で。バクリ、と。おかわりはない。
夜の暗闇どころか完全無欠にブラックアウトする視界のなかで、そいつの声が耳に木霊する。
「ようこそ幻想郷へ。貴方を歓迎いたしますわ、何でも屋さん」

うそーん……
あの女、もしかして冗談抜きでヤバい奴だったんじゃねーか……？

つづく

第一話「出会い　～はじまりは突然になの～」

諸君、異世界モノはお好きだろうか。

昨今は転生して人生リスタートする主人公をよく見かけるが、一昔前であれば転移するものが多かった気がするというのが個人的な感想だ。後者の場合、よく分からんアクシデントに巻き込まれて飛ばされたり、どうにか元の世界に帰ろうとする途中でその世界のゴタゴタにも巻き込まれたりと、大忙しである。

今流行りの転生主人公に関していうなら、初っ端から定住するしか選択肢がないけどな。なお、異世界もスマートホンが使えれば十分やっていけるらしい。

さて。

柄にもなく異世界モノのレビューを始めた理由として、オレの近況を聞いてほしい。

ガキの頃にハマったゲームやマンガみてーな展開を、なんと今まさに身を以って体感しちまっているのだコレが。

かの川端康成の小説にはこうある。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。

今のオレの状況を表すならこうなる。

趣味の悪い亜空間を抜けるとあぜ道であつた。

「フッ……世の中にはまだまだオレの知らない裏側があんだな」

怒りが限界を超えると逆に笑えてくるように、ド派手に怪我をするとむしろ冷静になるように。想像を絶する事態に陥ると、人はパニックを通り越して普段通りに落ち着くと知った。

周囲を見渡す。先ほどまでいた港とも、慣れ親しんだ繁華街とも似ても似つかない。完全無欠に田舎の風景だった。いや、何処だよ。

遮るものがない広い平野を突っ切って、長ったらしい一本道が延々と続く。知らずオレは道端のド真ん中に立ち尽くしていた。ここ最近めっきり聞くことがなかった鈴虫の音色が、微風に乗って流れてくる。

「街の近くにこんな田舎ねーよなぁ。一体なんだったんだ、あの女……？」

スマホを取り出してみたものの、案の定『圏外』と表示される。幸いにも、日付や時刻は数分前と大差ない。

唯一分かっているのは、この状況がリアルだという信じがたい事実。最後あたりに交わした会話を思い出す。

まさかガチな異世界なのか、それとも東北地方にワープしてしまったのか現状では判断が付かない。しかしながら、いつまでも人っ子一人いない砂利道に突っ立っていたところで変化もなし。

どのみちオレをここに連れてきた仕掛け人が一向に姿を見せない以上、こちらから出向くしかねーワケで。

「ありがてーことにヒントはあるしな……」

前方に目を凝らす。遠目からでも暗闇の中に明かりが群がっているのが見て取れた。村かなんらかの集落があるはず。

もっとも、此処が異世界という仮説が事実だとしたら、アレが盗賊のアジトである可能性も否めない。ま、そん時はそん時でやりようはある。伊達に依頼のせいで危ない連中と鬼ごっこした経験しとらんわ。

記念すべき第一歩を踏み出しつつ、念の為にベストの内側に手を入れてみる。切り札はいつものポジションに収まっていた。

まさかの事態に唖然とする。

「おい、マジかよ……」

着いた場所は期待通り、人々が生活する居住区だった。しかしそれは同時に、オレの予想を裏切る結果でもあった。

なんてこった、ここにきてタイムスリップ説が浮かび上がってきやがったぞ。

なにしろ道行く人の服装が今時のそれではない。和服、着物なのである。一人二人じゃない、どいつもこいつも揃いも揃って。建物も年季の入った古臭い一軒家ばかり、挙句には長屋まであった。

もちろんアスファルト舗装など一切なく、農家の軽トラが一台たりとも走っていない。

オレが知っている異世界と違う。むしろ庄内映画村と言われた方が納得できるまである。

「ま……まぁいーや。とりあえず、まずは情報集めからしねーと」

色々と挫けそうになるが、どうにか気を取り直して進む。

生活文化が江戸時代のド田舎だろうが、いつの世も情報社会なのは揺るがない。情報を制する者が勝利を掴む。オレも街では情報屋（タバコ屋のトメさん、御年八十九歳）に世話になったもんだ。

そして、この時間帯で人と情報が集まる場所なんて何処も同じ。目星はついている。

――酒場だ。

「フッ、計画通り」

この程度なら特に聞き込みをせずとも、人の流れや賑わいの大きいところを探っていけば目的地は容易く見つけられる。今宵も冴えているぜ。やはりオレは夜に生きる男。

『酒』『飯』と記された暖簾が垂れ下がっている、その辺の民家とは少々造りが異なる平屋。現在地からはそこそこ距離があるにもかかわらず、何人もの野太い笑い声がハッキリと耳に届く。一日の労働を終えた皆様が乾杯しているのだろう。

現代日本の通貨が使えるのか定かではないので、下手に注文はできない。しゃーない、話しだけでも聞いてみよう。

酒場で呑めない悲劇を嘆きつつ、いざ乗り込もうと近付いたまさにその時だった。

突如、例の酒場から食器が割れる音に続いて怒声が響き渡った。不穏な二重奏のなか、店から男が一人、逃げるような勢いで飛び出してくる。誰かが叫んだ。

「食い逃げだぁー!!」

「ほう……」

逃げるように、ではなく本当に逃げていたらしい。よく見りゃ確かに人相も悪けりゃ格好もみすぼらしい。なんとも使い回されたキャラ設定のＮＰＣだ。よりにもよって、モブ男は俺がいる方に向かって走ってくる。

すると、店内からさらに誰かが外に走り出てきた。ほんの少し垣間見ただけだが、それが若い女性だと分かる。タイミングから察するに彼奴の仲間という可能性は低い。おそらくは食い逃げ犯をとっ捕まえようと追いかける正義感の強いタイプか。

いずれにしてもオレの方が近い。思わず口の端がニヤリと上がる。ここ最近はめっきり少なくなったが、この手のトラブルは慣れている。久しぶりに一発かましてやんぜ。

逃げるのに必死なのか、まだ目が暗がりに慣れていないのか。食い逃げ男は自分が逃げる先にオレが立っているのに気付いていない。街灯がほとんどないうえに、全身ブラックなコーディネートじゃ無理もない。しかも尾行の依頼で身に着いたステルス能力も効いている。やはりオレは夜に生きる者。大事なことなので何度でも言おう。

モブ男がオレの横をすり抜ける間際。通りすがりのフリをしつつ、その足をガッと引っ掛けてやった。

「うわぁあ!?」

全力疾走の勢いを余すことなく生かし、男が大胆に宙を舞った。そのまま顔面ごと地に滑り落ちて土煙が上がる。うーわ、食後にありゃキツいわ。できれば吐かないでほしい。

「なッ、何しやがんだ!?」

「お、吐かなかったか偉い偉い。だが偉いのはそこだけだな」

「あ〝あ〝!?」

「テメーには失望した。食い逃げなんてしょっぱい犯罪しやがって、まったくもって個性がねえ。せめてやるなら成功率百パーセントの伝説の食い逃げでも目指せや」

「ふざけたこと言ってんじゃねぇぞ!」

怒りと酔いで出来上がったツラで吠える食い逃げ（笑）。威勢よくガン飛ばしているが、地面に腰を着いたままじゃ余計に負け犬っぽいぞ。

いやはや懐かしいわ、こういうの。おかげでオレも遠慮しなくて済む。

ベストの内側に手を伸ばし、相棒を引き抜く。黒光りする無骨な塊

が一丁姿を現した。その先端を男に突き付けるや否や、瞬く間に奴の顔が恐怖に歪んだ。いくら田舎者でもコレが何なのかは分かるか。

「ま、滅多に見れるもんじゃねーけどな――拳銃なんてよ」

「おい……ウソだろ……？　な、まっ、待ってくれよ……!?」

「うっせ。例え食い逃げだろうと危ない橋には相応のリスクがあんだよ。失敗したときのバッドエンドを覚悟しておけや、三下」

冷淡に吐き捨てて睨み返し、引き金を引こうと――

「待ってください！」

凛とした声が、この場にいる全員の動きを止めた。

銃口を逸らさず、その声が放たれた背後を振り返る。例の店から追いかけてきた女が強い眼差しでオレを見据えていた。

若い女性と思ったが、もはや少女と言っても遜色ない。オレとさほど年齢が変わらないようにも思えた。

ショートヘアとセミロングの中間ほどの長さに揃えた、柔らかな桃色の髪に真っ白なシニョンが二つ。白い半袖に茨模様が施された紅色の前掛けを重ね、胸元には薔薇の花が添えられている。髪の色と同じく、ピンク色の薔薇だ。新緑に染めたミニスカートの下から、キメ細やかな肌の素足が覗く。

何より気を引くのが彼女の両腕にあった。左手首には鎖付きのブレスレッドを嵌めて、右手は指先から肩ほどまで隙間なく包帯を巻いている。

随分と個性豊かな人物が出てきたもんだ。顔立ちが整っている分、なおのこと印象深い。

中華を連想させる服装の少女は、説教染みた口調で言葉を続けた。食い逃げ犯ではなく、オレに対して。なんでや。

「確かにその人は罪を犯しました。ですが、それならば謝罪した後にしかるべき償いを全うするべきです。むやみやたらに断罪するのは人としてあるまじき行いではありませんか」

「ごもっともだが、その理屈はコイツが反省しているのが大前提になるんじゃねーか？」

「は、反省している！　すまなかった金がなかったんだ……！　もう

しない、だから、だからッ……命だけはどうか……ッ!!」
オレと少女の会話に割って入ってモブ男が地面に額を擦りつける。
さっきの威勢はどこへやら、ガクブルと震えながら許しを乞う。よもや食い逃げしたせいで通りすがりの男に拳銃を突きつけられるハメになるとは、夢にも思わなかったろう。
狙い通りの展開になった。あとは仕上げに入るだけだ。
恥も外聞もなく土下座で謝り倒す罪人の弱り切った体に、桃色の髪をした少女が諭すように、さらにフォローを重ねる。
「ほら、彼もこう言っています。ですから、あなたもそれを下げてください」
「ま、反省はしているみてーだな。あとは落とし前だけキッチリつけなきゃなんねーわけだ」
「そうですね、だから――」
少女の言葉を遮って、あくどい獰猛な笑みで処刑宣言を謳う。
「二度と悪さをしないためにも、なァ!!」
「!?」
引き金にかけた指に力を込める。ついでに空いた手で片耳を塞げば、男が「ヒィッ!?」と情けない声を上げて後ずさった。
テメーも運が悪かったな、わざわざオレがいる方向に逃げてくるなんてよ。判決、ギルティ。
「待って――!」
少女がオレを引き留めるべく包帯に包まれた右手を伸ばすが、もう手遅れだった。
パァンッ!!
温い夜風に乾いた銃声が溶けていく。眼前で起こった惨劇に、彼女の赤みがかった瞳が大きく見開かれた。
白目を剥いた男がスローモーションで後ろに崩れ落ちる。どさり、と呆気ない音をたてて仰向けに倒れた身体に、もはや微塵も力が残されていなかった。
銃口にふっと一息かけて、地面に伏した罪人に告げてやる。
「理解したか。これがリスクを負うということだ――うぉッ」

グイッと力任せにネクタイを掴まれて引き寄せられる。やったのは件の少女だった。頭一つ分の身長差があるせいで、下から見上げるかたちでオレを睨みつけてくる。

端正な顔立ちを憤怒の形相に染めて、瞳の奥では怒りの感情が烈火のごとく燃え滾る。

「なんでっ……なんで撃ったんですか!?」

「言ったろ、二度と悪さしないための落とし前だって」

「だからって撃つのが許されるとでも!? こんな簡単に人の命を奪うなんて……！　あなたは生命をなんだと思っているの!?」

「いいから落ち着けや」

「これが落ち着いていられますか!!」

ミシミシと彼女の手に力が籠る。私は貴方を許さないと言いたげに眼光がギラついてやがる。どうしようもなくマジ切れだ。

つーかやべぇ首が締まる！　お前こそオレの命をなんだと思ってんだコラ！　このままだと本当に死人が出んぞ！

シニョンを飾った女子が殺意の波動を溢れさせている。こいつぁマズイ。早く誤解を解かねばむしろオレが殺される。

ギリギリまで締め付けられた喉からかろうじて霞んだ声を絞り出せた。

「オイ……言っておくが、お前は一つ勘違いをしてんぞ……」

「何ですって!?」

「そこの男、生きてっからな」

「……へ？」

怒りの炎が一瞬にして鎮火する。残されたのは疑問のタネ。ここにきてようやく乙女らしいあどけない表情をみせた。そのまま固まってしまっているのはご愛嬌。

力が緩んだものの未だにネクタイを掴んだまま動かない彼女に代わって、おそらく店主と思しき中年の男性が恐る恐ると倒れているモブ男に近付いた。次いで、ぎこちないながらも顔を覗き込んだり脈を測ったりしていく。

ほどなくして、彼は顔を上げて「えっと……」と気の抜けた様相を

こちらに向けた。
「気絶しているだけみたい、です。出血もありませんぜ……」
「ったりめーだ。出てたまるか」
「え、え……えぇえええ……？」
　中華衣装の女子の視線が忙しなくオレと男の顔を交互に行き来する。どうでもいいけど、そろそろ手ぇ離せよ。この姿勢だって結構キツいんだからな。
　しゃーなしと溜息を吐きつつ、彼女にも分かるように懇切丁寧に教えてやる。このままじゃいつまでたっても収集つかんし、切り札のネタ晴らしといこう。
「スターターピストル。実弾どころかＢＢ弾も入っとらんわ。オレは何でも屋であって殺し屋じゃない」
　学校の運動会とか陸上競技で使うアレ、要するに空砲である。
　この仕事をしていると、時にはヤバげな依頼もくる。そういった依頼をこなす際に、ハッタリや護身用としてコイツを仕込んでいるワケだ。連射はできないが、オモチャの火薬銃よりよっぽどデカい音が出る。
　そこの男も撃たれると思い込んだ恐怖が度を過ぎて気絶したんだろーさ。実際、持ち主のオレでさえ耳を塞がないと堪えるレベルの音量だし。
　愛読書は博多豚骨ラーメンズだが殺し屋になりたいとは思わない。あくまでオレは街の厄介事を片付ける便利屋もとい何でも屋。そいつがオレの主義だ。
「わかったか？　だったらそろそろ右手を解いてほしいんだがな」
「……!?」
　ようやく包帯塗れの右手がネクタイから離される。
　全て自分の早とちりだったのだと理解し、数秒とかからず彼女の顔が宵闇でもハッキリ分かるほどに赤みを増していった。先のは怒りだったが、今度は紛れもなく羞恥の感情によるもの。なんせ、盛大に勘違いしたままお門違いな説教をかましたのだ。
　あれだけ真面目に熱弁してしまったら、そら恥ずかしいわ。ドンマ

イ。
「ま……ば……」
「あ？」
俯いてプルプルと震える右手包帯な少女の口から微かに声が漏れ始めて、何の気なしに耳を傾ける。
直後、彼女はやや涙目になって再びオレを睨みつけて、獅子の咆哮さながらの絶叫を世界の果てまで轟かせた。
「紛らわしいのよ馬鹿者ォオオオオオオオオ!!」

これが、オレと彼女の最初の出会いである。

つづく

第二話　「桃色の少女は仙人様？」

「先ほどは失礼しました……」

テーブルを挟んで向かい側に座って早々に、件の少女がしおらしく頭を下げる。その拍子に桃色のミディアムヘアがさらりと流れた。

申し訳なさげなしゅんとした顔をされては、強く言い返す気にもなれない。それどころか、こっちまで罪悪感が出てきてしまう。はぁ……やれやれだ。

弾切れのマグナムを指で弄びつつ、気にしていないと態度で示しておく。

「ま、別にいいってこった。そもそもコイツはハッタリで使うモンだから、ああいうリアクションしてもらわないと逆に困るし」

「そ、そうですよ！　そんな物騒な道具を使って騙すなんて人が悪いです！」

「んなこと言ったって、仕事柄要るときがあんだよ……」

落ち込んだ様子で謝ってきたかと思えば、今度はプリプリと怒り出しやがった。変わり身の早いやっちゃな。

オレらが陣取っている四人掛けテーブルを見下ろせば、山盛りの料理が乗った大皿や酒が入った徳利が所狭しと並べられていた。食い逃げ野郎を一瞬で捕まえたことへの店主からのお礼と、あらぬ誤解で胸倉を掴んで怒鳴ってしまったことに対するそこの女子からのお詫びの両方がある。

二人しかいないのにもはや宴会コースの品揃え。完食できんのかコレ。

挙句には、店にたむろっていた野次馬どもから「あんちゃん凄かったぞ！」「ありゃ大した手並みだ」「つーか黒いな！」などといった歓声が浴びせられ、オレは今や時の人となった。褒め称えるのは良いけどバシバシ肩叩くなやイテーよ。

気さくというか大らかというか、オープンで友好的な連中が多い。この集落の気質なのかもしれない。

なお、オレの大好物であるフライドポテトは「揚げ芋」という呼び

名で出された。不揃いなチビジャガイモに衣をつけて揚げた田舎料理として。どっちかといえばイモ天じゃねえかよ！

なし崩しでお新香をつついていると、同席するチャイナ娘が「あっ」と声を上げた。なんや。

「そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。私は茨華仙、これでも仙人をしている者です」

「綿間部　将也（わたまべ　しょうや）。ま、知り合いからは『黒岩』の名で通っていんだけどな。何でも屋っつか便利屋やってる」

互いに自己紹介を終えて、改めて彼女の容姿を確かめる。街でもそうそう見かけないほどの美人だ。中華衣装をアレンジしたような服を違和感なく着こなしており、個性的で目立つはずなのに周りから一切浮いていない。付け加えて自らを仙人と告げおった。おいおいキャラ濃過ぎだろーが。

食事に戻ろうとした折に、新たな人物から声をかけられた。

「ああ、やはりここに居たのか。それに華仙殿も」

落ち着いた涼やかなトーンの声は、またしても若い女性だった。

茨華仙の全体イメージカラーがピンク色なら、その女は青色であろうか。ロングスカートも含め、衣服のほぼ全てが青で占められている。ストレートで水色な長い髪を携え、四角型の独創的な帽子を被っていた。なんだあのデザイン。

声と遜色なくピシッとした誠実さが伝わってくる。仕事がデキる女タイプに該当しそう。

実をいうと、彼女を見るのはこれが初めてではない。引っくり返って気絶するモブ男が連行される際、周りに色々と指示を出していたのがこの女だ。おそらく、それなりの立場にある重要人物。

並みの男だったら勘違いをおこしかねない愛想の良い笑みで「同席しても？」と聞いてきたので、別に構わないと返しておく。では失礼して……、と彼女は茨華仙の隣にあった椅子に腰を下ろした。

「初めまして、私は上白沢慧音。この人里の守護者、といっても普段は寺子屋の教師をしているよ。今回は手間をかけさせてすまなかった。それとありがとう」

「黒岩だ」
「もう、それは偽名なんでしょう。慧音さん、あの男性はどうなりましたか？」
「泣きながら反省していたよ。それはもう号泣だった」
上白沢女史が詳しく事の顛末を話し始める。
モブ男は目を覚ますなり自分がまだ生きていると安堵して泣き崩れたらしい。その後は食い逃げの罪を悔やんでさらに泣き、事情を洗いざらい白状した。まともな蓄えもなく空腹に耐えられず、つい出来心から間が差してしまったのだという。結局、飲み食いした分の代金は迷惑料込みで後日キチンと支払うと固く誓ったそうだ。そら殺されるくらいなら代金払った方がマシだわな。
概ねの内容を聞き、茨華仙が表情を和らげてほっと息を吐く。
「改心したのね。よかった」
「二人には感謝しているよ。けど、人里であんなに大きな銃声が鳴ったときはさすがに肝が冷えたかな」
「安心しろ。逆にいえば出るのはデカい音だけだからよ」
「そういう問題じゃありません！」
再び茨華仙が目を吊り上げて声を荒げる。彼女が両手でテーブルをバンバンと叩く度に、卓上の料理や日本酒たちが軽く跳ねた。クラス委員長みたいなやっちゃな。どうでもいいけど零すんじゃねーぞ。勿体ないから。
ともあれ、オレにとってもコレは丁度良い展開となった。仙人様に人里の守護者様とくれば、情報を集めるのにこれほど優れたカードは他にあるまい。さりげなく言っていたけど人里っていつの時代だよ。
「茨華仙、それと上白沢女史。この世界についてある程度の情報が欲しいんだが、知っている範囲でいいから教えてくれねーか？」
オレがそう切り出すと、前に座る二人の女性はキョトンと目を瞬かせた。隣同士で顔を見合わせた後、再度こっちを向く。なんやこのコントっぽい反応。
最初に茨華仙が訝しげに口を開く。
「此処は幻想郷ですけど……え、待って。あなたが外来人なのは身な

りで分かっていたけど」
「君は何時からこの場所、いやこの世界に来たんだ？」
「ついさっきだ。一時間も経ってねーな」
『えぇ……』
今度はオレの事情を彼女達に伝える番だった。
仕事を片付けて港で海を眺めていたら、長い金髪をもつ奇妙な女に話しかけられたこと。話し相手を頼まれたので適当に付き合っていた最中、目玉模様の悪趣味な空間がいきなり現れて為す術なく飲み込まれてしまったこと。そんで気付けば全く見覚えのないあぜ道のド真ん中に突っ立っており、ひとまず遠くに見えた明かりの群れを頼りに歩いてきたところまで。
食い逃げ野郎の件については今更説明するまでもないだろう。まして片やその場に居た当事者だ。
大雑把に話し終えると、それまで黙って聞いていた茨華仙がポツリと口にした。
「八雲紫」
「やくもゆかり？」
「その女性、あなたを幻想郷に連れてきた者の名前よ。スキマを操る能力を持つ妖怪の賢者。この幻想郷を創り出した張本人でもあるわ」
「っかー、ここにきて妖怪かよ。いきなり異世界要素をブチ込んできやがったな」
しかも創造主にして賢者だと？　個性強過ぎんだろ。
いよいよもって異世界らしくなってきたわな。もっとも、あんなワケわからん亜空間を見せられちゃ疑う余地もありゃしない。認めるしかあるまい、此処はオレの知る世界とは違うのだと。
というか此処に来てまだあの女と出くわしてねーんだけど。人のこと拉致しといて放置プレイとか、放任主義者にもほどがあんぞ。
「只者じゃねえと思っちゃいたが、いくらなんでもキャラ濃過ぎねーか？」
「うふふ、そんなに褒められると照れてしまいますわ」
「うぉっ!?」

振り返ったら奴が居た。正確には俺の隣だが。
噂をすればご本人が同じテーブルで煮魚をつついていた。おかげで四人掛けの席が全て埋まる。
断りなく料理に手を出されたのもあってなのか、またまた茨華仙が眉間にしわを寄せて身を乗り出す。お前さっきから怒ってばっかじゃねーかよ。
「紫！　あなたはまたそうやって！」
「はぁい。まさか幻想入りして僅か数十分でこうも派手にやってくれるなんてね、何でも屋さん？」
「ミス八雲」
「あら、そのような畏まった呼ばれ方をされるなんて思いませんでした」
「あんた、この世界の創造主にして妖怪の賢者なんだろ？　どう考えても最強ランクじゃねーか」
「お褒めに預かり光栄ですわ。それで、この世界は気に入っていただけましたか？」
「少なくとも退屈することはなさそーだな」
お伽噺みたいな状況が現実に起こっている。子どもの頃に憧れた摩訶不思議に満ちた世界。
この短時間で仙人にワーハクタクに妖怪の賢者と、強烈な個性の持ち主と三人も知り合えた。実に愉快、あまりに痛快。きっと他にも多種多様な輩がいるのだろう。
インパクトあるキャラどもを相手に、オレという個性を存分に発揮できると思うと、自ずと高揚してくる。
「こらー！　無視しないでください！」
「まぁまぁ華仙殿、ひとまず冷静に……」
外野がうるさいが、とにかく当面の方針は決まった。幻想郷とかいうこの世界に、オレの存在を轟かせてやろう。夜の街に生きる男、報酬次第で仕事を請け負う何でも屋。ただし、殺しと一部の依頼はカンベンな。
繁華街はしばらく留守になるが、どうせここ最近はおつかいみたい

な雑用しか依頼がこなかったのだ。ちょっとの間ぐらい、オレが居なくても何とかやっていける。むしろ不在になったことでオレの存在感の大きさを知るがよい。

「では、交渉成立と。慧音、人里の住民が一人増えることになるけどいいかしら？」

「構わないが、今すぐ彼が住める空き家があるかどうか……」

「でしたら、餞別としてこちらをどうぞ」

そう言って八雲紫が一旦箸を置き、虚空に指をかざす。すると、例の亀裂（スキマ、と呼ぶらしい）が生じて中から何かがドサッと床に落ちた。

くたびれたボストンバッグに、キャンプ用のテント一式が入ったナップザック。なんともはや、オレにとって非常に身近なものであった。なぜならば、

「うっわ、マジかよ。オレの家財まるっと全部じゃねーか……」

「あなた向こうでどういう暮らししていたんですか……？」

茨華仙が怒りを鎮める代わりに呆れの様相を浮かべる。言っておくがホームレスじゃねぇかんな。

簡潔にいえば、知り合いの貸倉庫で寝泊まりしていたのだ。しかし所詮は単に寝床としての拠点に過ぎず。それさえも帰る頻度は少なく、実際はあちこち転々とした。テントは万が一に備えて用意しておいた仮住まい。

ま、コレで当面はやり過ごせるだろ。台風とかが来たら、その時は宿にでも泊まればいい。要はいつもと変わらない戦術である。フッ、繁華街だろうと幻想郷だろうとオレはオレのやり方を貫くまで。

「んじゃ、テキトーに邪魔にならん所にでも拠点を構えさせてもらうわ。ついでだ、ここでも何でも屋の仕事を始めさせてもらうけど良いか？」

「ああ、了解した。君の方こそ困り事があったら遠慮なく言ってくれ。力になろう」

「私も手伝います」

上白沢女史に続いて、なぜか茨華仙も協力を申し出てきた。出会い

がしらの無礼をまだ気にしているのであれば、酒と肴でとっくにチャラにしている。いくらオレでも清算済みの件を蒸し返すほど悪趣味じゃねえ。

その旨を伝えると、彼女はゆるやかに首を横に振り、出会ってから初めて見るたおやかな笑みをオレに向けた。

「確かに出会いはあのような形になってしまいましたが、ここで繋がるのもまた縁。それに、私は人に近付きたかったから仙人になりました。これは私の望みでもあるのです。ですから、協力させてください」

「……そーか」

周りをそっと包み込むかのような穏やかな雰囲気は、仙人というよりまるで天女の姿を彷彿とさせた。真面目で説教くさい性格かと思ったが、他者に寄り添う真心があればこそなのかもしれない。

厚意を足蹴にするのはあまりに不躾だ。そもそも未知の世界にいる以上、味方は多い方が良い。別に茨華仙の綺麗な笑顔にほだされたワケじゃない。

真摯に見つめてくる彼女に、こちらも軽く頷いて返してやる。

「オッケー。なら頼むわ、茨華仙」

「どうかこれからは名前で呼んでください。華扇、と……」

「ヴェ？　いや、そりゃちょっとな……」

知り合って間もない若い女を早くも下の名前で呼び捨てろって、オレにそんなチャラいマネをしろというのか!?　うっわ、想像しただけで背中がムズムズしてくる。いくらなんでも夜に生きる男には似合わない。

だが、どう返したもんかと煮え切らない態度を取るオレに、彼女からさらなる追い打ちがかけられてしまう。

「あなたは何でも屋なのでしょう？　では、これが私からの最初の依頼です。報酬は、そうですね……料理を一品追加でどうでしょうか」

「……なんつーか、何でも屋ってのを都合良く解釈されている気がしねーでもねーんだが」

「どうしても嫌……ですか？」

「ぐぅ……」
あー、くそったれ。女性と話す機会が少なかったから答えに困る。
なにゆえ彼女がそうまでして名前呼びに拘っているのかは解せないが、どう見てもオレがイエスと言うまで終われない無限ループの流れだ。
しゃーねえ、降参だ。
「はぁ……わーったよ。これからよろしく頼むわ、華扇」
「はい、綿間部」
「……！」
「綿間部？　どうかしましたか？」
「あ、いや……何でもねえ」
「？」
こてん、と可愛らしく小首を傾げる茨……華扇からわずかに目を逸らす。
初対面の相手から名前を間違えられず呼ばれたのは初めてだ。いつも渡辺と間違えられるのに。そういう事情もあって黒岩の呼び名が定着していたというのに。
ちなみに黒岩の名称は、街であらゆる人から「にーちゃん（格好が）黒いわー」「あなた本当に（服装が）黒いわね」などと言われているうちに定着したものである。
ぶっちゃけると黒岩の方がオレ自身も馴染んでいるんだが、久しぶりに本名で呼ばれるのも……案外悪くなかった。
上白沢女史と八雲紫が生暖かい眼差しで見守っているが断固無視する。明らかに勘違いしてるヤツだ。
ご要望に応えたおかげだろうか、やけに上機嫌な華扇がニコニコとオレに徳利を差し出してきた。
「さあ、一献どうぞ。幻想入りの記念と、私たちの親睦の証に」
「わりーな」
お酌された日本酒をクイッと喉に流すと、間髪入れずに酒を注がれる。
「さ、どうぞ」

「お、おう？」
　それを飲むとまたもや次がお猪口の中に流れ込んでくる。
「さあさあ」
「え、えぇ……華扇？」
　なんだろう、やたらグイグイ来るんですが。しかも笑顔が崩れていないのに言葉に表し難い圧がある。どうしてこうなった……？
　はた、と。一つの心当たりに行きついて、同時にイヤな汗が背中を滴り落ちた。恐る恐る、真相を問いただす。
「なあオイ、華扇」
「何ですか？」
「……お前、さっき人前で恥かかされたこと怒ってねーか？」
「ふふ、いやですね。そんなはずあるわけないじゃないですか。それよりも飲みましょう？　私が注いであげますから……イツマデモ」
「いやこれもう絶対に根に持ってるヤツだろォ!?」
　アウトォオ!!　この女、オレを酔い潰して仕留める気満々やでぇ!!
　ここにきて桃色の髪をもつ幼気な乙女の背後に、滾る闘気と般若の幻影を垣間見てしまった。コイツ本当に仙人か!?　むしろ鬼かなんかじゃねぇの!?
　ヤバいヤバいヤバい、このままでは我が命が風前の灯だ。そうだよ、今がまさに困り事じゃねーか。
　時は来たれり。救いの女神に一縷の望みをかけて、彼女らの名を呼ぶ。
「上白沢女史、ミス八雲。助けてくれ」
「あはは……彼女はウワバミだから気を引き締めてかかるんだぞ？」
「女に恥をかかせるのは罪。罪を犯したらキッチリ落とし前をつけるべきなのでしょう？　黒岩」
　救援要請を軽く流して、二人とも素知らぬ顔で料理に箸を伸ばす。
んだよもー！　オレよりもメシかよ！
「逃がしませんよ？　綿間部」
　砂糖が蕩けるような、あまりに甘すぎる声に背筋が凍った。

百二十点満点の眩い笑顔を張り付けて、華扇がこちらにズイッと迫ってくる。うわっ、よく見ると目が笑ってねえ！

負けずに言い返してやりたいところだがおっかなくて無理無理。夜を生きる男たるオレが敵わないとは、どうやら幻想郷はとんでもねえ世界のようだ。

「イ、イタダキマス……」

結局このあとメチャクチャ飲まされた。

つづく

第三話　「何でも屋は移転しました」

「ぐおぉ……くっそキツい……」

遮光性に優れたキャンプ用のテントの中で、深酒した名残りとか諸々に恨み節を吐く男が一人――そう、オレだ。

おのれぇ華扇のヤツめ、ちったぁ手加減ってのを知らんのか。危うく物理的な意味でも酒に溺れて死ぬところだったじゃねーかよ。朦朧とする意識でこのアジトを組み立てられたのは、もはや奇跡に近い。

「確か、ストックがまだあったはず……」

うつ伏せのまま体を這いずり、手探りでボストンバッグの奥を漁って散らかす。どうにか発掘した液キャベ（二日酔いに効く激マズのドリンク）を一飲みし、空き瓶を無造作に放り捨てた。っかー、マジで後味ひでぇな。

ま、ひとまず応急処置は済ませた。どうせ夜まで時間はたっぷり余っている。その間に回復しとけば問題ねーだろ。そう思って、ぐったりと再び身体を横たわらせる。

と、テントの前に誰かが立ち止まる気配を感じ取った。聞き覚えのある声が耳に届く。

「綿間部、いますか？」

「華扇か……？」

「はい。おはようございます」

「おぉー」

昨日知り合ったばかりの自称仙人なうら若き乙女。あの柔らかな桃色の髪が、今でも深く印象に残っていた。

手伝うと言った故に、早速オレの様子を確かめに来たのかもしれない。ホント、マジメで律儀なこって。昨夜は彼女自身もあれほど呑んでいたというのに、何事もなく元気そうだった。

まさしく上白沢女史が言っていた通りの酒豪っぷり。可愛い顔して大した女だ。けどオレを酔い潰させやがったのは一生忘れねぇかんな。

一向にテントから姿を現さないオレを不思議に思ったのか、華扇が素朴な疑問を放り込む。
「もうとっくに日は出ていますよ？　動かないんですか？」
「冗談じゃねえ。こんな炎天下を出歩くなんざ勘弁してくれ」
「えっ……ですが、何でも屋の仕事を始めるんでしょう？」
信じられないとでも言いたげな声のトーンで、桃色の髪をもつ仙人がさらに尋ねてくる。
そうは言っても世の中誰もが明るい時間帯に働くとは限らんだろうが。ま、アレだ。よそはよそ、うちはうちってヤツ。オレにはオレの道があんだよ。
どうでもいいけど、こちとらまだ眠気が残っているし早うもう一眠りしたくてしんどいのだ。わざわざ来てもらったのに悪いが、さっさと会話を打ち切らせてもらう。オレの体内時計では良い子は寝る時間なんだよ。
煩わしい音を遮るようにガバッとタオルケットを頭から被りながら、適当にあしらうことにする。
「黒岩の何でも屋さんは日没からの営業でーす、またのお越しをお待ちしておりまーす」
「な!?」
「んじゃ、オレはしばらく寝るから。また後でな……」
「……」
なにやら華扇が黙りこくってしまった。未だにテントの前から立ち去ろうとしないのが気がかりだが、こちらの営業時間も伝えたわけだしマジメな仙人様なら理解して――
「……ふふっ、ふふふふふ」
刹那、外から聞こえてきた「プチッ」という何かが切れる音と不自然なほど穏やかな笑みに、ぞわぞわと一斉に鳥肌が立つくらいに背筋が凍った。バカな、なんという既視感……!?
「オ、オイ。手荒なマネだけは……」
猛烈にイヤな予感がして入口の向こうに牽制を投げる。だが、残念ながらそれは微塵も意味を為さなかった。

あっという間にマジメ少女のお怒りに触れて、めでたく本日一発目の説教が炸裂しちまった。
「こんの馬鹿者ォオオオオオ!!」
「うぉあ!?」
「あなたが『外』でいかに不規則な生活をしていたのか、よーく分かりました。こうなったら私自らの手であなたを正真正銘の真人間にしてあげますからね！　覚悟してください、綿間部!!」
叫ぶや否や、なんとあろうことか彼女はテントの内側に突撃してきた。さらに勢いのままにオレを叩き起こそうと身体の上に跨り、両手でタオルケットを引っ掴んで無理矢理にでも剥がそうとする。
「おぉおおおいッ!?」
華扇に続いてオレまで叫んでしまったが当然の反応であろう。予測していた事態を遥かに凌駕した。おかげで眠気まで素っ飛んでいく始末。
って何しやがんだコイツはよォ!?　実力行使にもほどがあんだろ！
ペラッペラの薄布で綱引きをしながら、なんかもう色々とアウトな言い争いが勃発する。
「ちょバカッ止めろ！　つーか男の寝床に躊躇いなく飛び込んでくるヤツがあるかァ!?」
「ひ……人を痴女みたいに言わないでくださいッ！　綿間部が悪いんですよ!?」
「いやオレ何もしとらんやんけ！」
「うるさい！　いいから、さっさと、起きなさーい!!」
痴女のちーちゃん扱いされた恥ずかしさからか、綺麗な顔を真っ赤にして華扇の両手に一段と力が込められる。お前もうヤケになってんだろ!?　だぁあああ覆いかぶさるなァアア!!
タオルケット越しに圧し掛かられる度に、ありえないほど豊満で柔らかい二つのナニカがムギュッと身体に押し当てられるわ、桃を思わせる仄かに甘い匂いが顔のすぐ間近から漂ってくるわの大騒動に、オレの理性が容赦なく削られていく。

このままではマズイ！　こんなラッキースケベみてーな展開はオレのキャラに合わねぇんだからよォ！

「か、華扇！　とにかく一旦離れろ！」

「そうしてほしいなら大人しく抵抗を諦めなさい！」

派手に激しくテントが上下へ左右へと暴れ回り、内側からは男女のギャーギャーと喧しい応酬が否応なく外部に垂れ流される。

もはや年齢指定でくんずほつれつなアレの誤解を招くには十分すぎるシチュエーション。現に耳を澄ませば「お母さん、アレなーに？」「しっ、見ちゃいけません！」とか凄まじくテンプレすぎる通行人のヒソヒソ話まで聞こえてくるではないか。暴走気味の華扇は綱引きに熱中するあまり周りの声に気付いちゃいねぇ。だーもう!!　何だコレ!?

幻想郷ライフの初日は、夜を生きる男には全くもって不釣り合いなドタバタから始まっちまった。一生の不覚。

「こんなん……オレの生き様じゃねぇえええ!!」

ご想像の通り、根負けした。

おそらく数週間ぶりになるのか。オレは日が出たばかりの超健康的すぎる時間から外に連れ出されてしまった。ギラギラと照りつける夏の日差しに、貴重な体力もじわじわと奪われていく。

おお、愛しの夜よ。まだ来てくれねぇのか。とてつもなくお前が恋しいぜ……

「ぐわー、太陽眩しい気温高いマジキツいもう無理ホント無理。このままじゃ灰になっちまうぞオイ……」

「吸血鬼じゃあるまいし。むしろ健全な人からすれば、こっちの方が正しい生活なんですからね」

ビシッ！とオレの鼻先に包帯に包まれた人差し指を突きつけて言い放つ桃色の少女に、ガックリと肩を落とす。何やその勝ち誇ったような顔は。あと、ただでさえデカいんだからあんま胸張るなよ。目のやり場に困るじゃねーかよ……

はぁ、しゃーねぇ。ここまできたら行動するしかあるまい。渋々な

がら、だがな。あっちぃけど。せめてオールバックの髪型が崩れないことを祈りたい。

少しでも涼しくなるため、今はネクタイもワイシャツのボタンも外してある。もちろんベストも着ていない。おかげで切り札を置いていくことになった。もっとも、そもそも隣に居るこの女が「ダメ、ゼッタイ」と胸元で大きなバッテンを作りやがったので、どのみち持ち歩けないのだが。よって、フル装備は我が時間即ち夜までお預けとなった。フッ、やはりオレは夜に生きる男。

華扇はオレが諦めて表に出てからすっかり上機嫌だった。鼻歌交じりの楽しげな様子でこちらの顔を覗き込んでくる。ちょっと前ががみになる仕草がなんかあざとい。

「まずはどうしましょうか？」

「いっそ夕暮れまで待機ってのは――」

「ダメです」

「わーった、冗談だっつの。だから真顔で拳を握り締めるな怖ぇーよ」

迂闊にもポロッと口走った瞬間、あどけない笑みから一転して無表情になったのを目の当たりにして、すぐさま発言を取り消した。やっべ、危なかったわ。っていうか殴る気だったのか今の!?

「あーあ、なんでオレこんな時間からオシゴトしてんだ……？」

しかし実際のところ、手を打たないといけねぇってのはその通りでもあんだよな。此処は顔馴染みばかりの繁華街とは違う。そこら辺を適当に巡回していても仕事は入ってこない。この幻想郷では、まだオレの名前も何でも屋の存在も全然知られちゃいないのだから。

ゼロからのスタート。なんともライトノベルみてーな言い回しだが、現在のオレはまさにそうとしか表せない。しかたねぇ、やりますか。

「ひとまず状況を整理しねーと何も進まねぇか」

「作戦会議ですね。あ、それならあっちの団子屋に行きませんか？美味しいのでお勧めですよ♪」

「それお前が食いたいだけなんじゃねーの……？」

「いいじゃないですか。頭を使うには甘いものが一番ですし。ほら、

行きますよ」

そう言って、華扇は軽やかにステップを踏んでいった。どんだけ楽しみなんだよ。一足先に団子屋に向けて歩き始めた彼女に、フッと零してからオレも続く。ほんっと、仕方ねぇなあ。

どうやら仙人様であっても例外に在らず、やはり女性というのは甘い菓子がお好きらしい。

つづく

第四話　「働きたいでござる」

店先の腰掛けに横並びで座り、オレは緑茶を、華扇は三食団子を口にする。ふむ、悪くねぇ味だ。星三つ！

桃色の少女は「ん～♪」と頬っぺたに手を添えて舌鼓を打っている。こうも美味しそうに食してもらえるのなら、作り手も冥利に尽きるだろうな。

幸せいっぱいの華扇を横目に、こちらも湯呑を傾ける。ところで作戦会議どこいった？

「……ん？」

ふと、腰掛けの端っこに折り畳まれた新聞が置いてあるのに気付いた。ご自由にお読みくださいってか。江戸時代っぽいわりには瓦版じゃねぇのな。なんとも中途半端なこって。

何気なしに手に取ってみる。パッと見た感じは現代にもあるような普通の新聞紙。名称は「花果子念報」。そして、コレがあるからにはこの世界にも新聞記者がいるはずだ。まともなヤツならイイんだけどよ。

幻想郷については昨晩のうちに大体聞いているが、もっと細かい情報集めに役立つかもしれない。物は試しだ、読んでみるか。

まず見出しに「記者は捉えた！　宴会で思わぬハプニングを激写！」デカデカと文字が踊り、すぐ下に画像が続く。大学生らしき茶髪のツンツン頭の青年が、西洋人形をイメージさせる金髪碧眼の少女を挟んで壁に手をついている――いわゆる「壁ドン」をかましている真っ只中の場面。

「……」

写真に写った若造は「ヤベッ！」って感じの慌てた表情を浮かべ、金髪少女の方はカァアッと耳の先まで紅潮させている。見つめ合ったままフリーズする二人に、周りにいる女子たちが目を輝かせていた。なんだこのラブコメ。

まったく役立つ情報が得られないゴシップなネタに呆れていると、「お、黒いあんちゃん」と野太い男の声がかかった。紙面から顔を上げ

ると、酒場の店主がこちらに片手を上げつつやってきた。
「昨日はありがとうなぁ。仙人様も、本当に助かりましたぜ」
「なに、大したことたぁしてねーよ」
「こちらこそ大事にならなくて良かったです。でも、この人がもっと穏便に解決していれば……」
「あーあー、聞こえねぇなー」
ジト目で睨む仙人の小言を、耳を塞ぎながらの棒読みでテキトーに聞き流しておく。生憎だが、あれこそがこのオレ、黒岩のコードネームを持つ夜に生きる男のやり方だ。文句は言わせねぇ（キリッ）
すると案の定、女はみるみるうちに頬を風船のごとく膨らませてお説教モードに入る。
「綿間部！　誤魔化そうとしたってそうはいかないわよ！」
「がっはっはっ！　仲が良いようで羨ましい限りですぜ。ところで、黒いあんちゃん。何でも屋なんだって？　昨晩に続けて悪いんだけどよ、折り入って一つ頼まれちゃくれんかねぇ？」
「あん？　依頼ってことか。つーか黒いあんちゃんじゃねぇよ黒岩だよ」
「やりましたね、綿間部！　早速お仕事ですよ」
パァッと顔を輝かせて華扇がオレの手を取った。当人を置いてけぼりにしてこの喜びよう。怒ったり笑ったり忙しいヤツだな。ま、見ていて飽きねぇけどよ。
今にして思えば、なぜ華扇と自己紹介したときに先に本名を言っちまったんだか。我ながら気が緩んでいたのか。初めて出会ったばかりだったというのに？
「んで？　どんな仕事を頼もうってんだ？」
「店の仕出しで積み荷を下ろさなきゃいけないんだが、どうにも最近腰をやっちまってなぁ……うちで働いている若い娘もここ数日ばかり休み続きで」
どこか哀愁の漂う苦笑いで、おっさんが腰をさすりながら話しを続ける。さっきまで馬鹿笑いしていたってのに、今や本当に困っているのがひしひしと伝わってくる。随分参っているみてぇだな。

「そんなわけでよ、我ながら情けない話だが手伝ってくれると非常に助かる。もちろん礼はする」
「そういうことでしたら、是非お任せください」
「なーんで華扇が即答すんのかねぇ……」
仕事の内容を聞いていたオレを押し退けて、やる気に満ちた華扇が身を乗り出してきた。お前は何でも屋じゃねーだろうが仙人さんよォ。
勝手に決められて、働く前から疲れ切った溜息を吐いてしまう。そんなオレに向けて、華扇は「だって……」と一息置いてから、まるで花びらが舞うように優しく微笑んだ。
「あなたの仕事は、困っている人を助ける立派な仕事なんでしょう？　そういうところ、私は尊敬しているんですよ。綿間部、引き受けてくれますか……？」
「……っ!?　わ、わーったよ。引き受けますよー」
「うふふ……はい！」
あーくそ、オレとしたことがダサくどもっちまった。その不意打ちは返しに困るじゃねぇかよ。
混じりっ気のない純粋な気持ちに慣れていないせいでたじろいでしまう。そのうえ、彼女の容姿レベルはかなり高い。だから、そういうのを急にやられると……なんつーか、アレなのだ。
かくして、幻想郷での初めて受けた依頼は荷下ろしという、なんとも地味で地道なものとなった。ったく、結局こうなるわけかよ。
ま、街でもバーとかクラブでこの手の裏方やっていたから抵抗ねーけどな。

そう思っていた時期が、オレにもありました。
「ぜぇ……ぜぇ……荷下ろしって、荷運びとセットだったのかよ……ちくしょうやられた」
まさか問屋から台車に積むところからスタートとは騙された。とんだ肉体労働になっちまったが、一度引き受けたからにはやるしかねぇ。その分、報酬はガッポリいただくから覚悟しとけよオヤジ。

えっちらおっちら人力車を引き摺って、どうにか酒場の裏手にある蔵まで到着。すぐさま荷下ろし作業に取り掛かった。荷台に仰山詰め込まれた壺やら木箱やらを担ぎ上げては、あらかじめ指示されていた位置へと収めていく。あとはひたすら蔵と台車の間を往復、繰り返し、リピート。なお、おっさんは厨房へ仕込みをしに行った。腰やられてんなら大人しく休めよ。労働者の鑑か。

とりわけ重そうな水瓶をチャプチャプいわせながら運び終えたタイミングで、ちょっくら一休みさせてもらう。ついでに、そこの娘に文句も含めてジトッとした眼差しをぶつけておく。

「なぁオイ、お前も少しは手伝ってくれてもいいんじゃーの？」

「あなたが何でも屋として受けた依頼でしょう。私の役目は、こうやって綿間部がちゃんと仕事を終えるまで見届けることです。ほらほら、もうひと踏ん張りですよ」

「っかー、現場監督かよ……」

その辺の段差に腰を下ろして、頑張れ頑張れと声援を送る華扇。今度はチアガールってか。いっそポンポンでも振ってほしいもんだな。

しっかしまぁ、人が汗水垂らして動き回っている姿の何がそんなに面白いんだか。ニコニコとオレの社畜っぷりを眺めている少女の気持ちが分からず、オレは内心こっそり首を傾げた。

その後もブツクサ言いながらも、何だかんだで数だけは着実にこなしていった。

ふいに、かつて何でも屋を始めたばかりのロクに仕事を選ぶ余裕もなかった頃を思い出した。あのときもこんな仕事ばかりだった。フッ、よもやこんな形で原点に立ち戻る日が来るとは……

懐かしい記憶に思いを馳せつつ、作業を進める。

そして、ついにラストの一箱まで運び終えるのだった。

「っだー！　終わったぞくそったれ！」

「はい、お疲れ様でした」

労いの言葉をかけながら、華扇が手拭いと水筒を手渡してくれた。いつの間に？　おっさんに頼んで準備しておいてもらったのだろうか。なんでぇ、随分と気が利いたマネしてくれんじゃねーの。

「お、わりーな。助かる」
「うふふ、いえいえ」
やや乱雑に汗を拭きつつ、よく冷えた水を喉の奥に流し込む。っかー！　うめぇなコノヤロウ！
って、コレすでに飴と鞭でほどよく調教され始めている展開とかじゃねーよなぁ……？
依頼完了の報告をするべく酒場に顔を出すと、待っていた店主から大げさに感謝された。
「おう戻ったか！　すまんなぁ助かった。礼としちゃなんだが、仕込みついでにメシを用意したから食って行ってくれ」
「……まさかと思うが、それが今回の報酬とか言わねーよな？」
現物支給なんてされたら、いよいよもって何時代か分からなくなんぞ。もしや幻想郷じゃ貨幣よりも物々交換が主流だったりすんのか？　そういや昨日も華扇から名前呼びを頼まれたとき、報酬が一品追加だったわ。うーわ、マジかよ……
疑惑の視線で問うと、店主は「ガッハッハッ！」とまたもや豪快な笑い声をあげた。いちいち声でけーな、このおっさん。
「大丈夫だ、そっちについてはちゃんと金で払う。こいつは感謝の気持ちだ。だから遠慮なんかしないで召し上がっておくれ。ささ、仙人様もどうぞ」
「ま、そういうことなら遠慮しねぇけど。その、なんだ。疑って悪かったな」
「ありがとうございます。いただきます」
「……ん？」
間。
ここで一つ、素朴な疑問が生まれた。さも当然のように会話が繰り広げられていたがよ。ちぃーとばっか可笑しくねぇか？
促されたテーブルには焼き魚定食が二人分用意してあった。そう、二つだ。誰の分かなんざ聞くまでもなし。
向かい合わせの席に座る女に、胡乱な目を向ける。
「お前、ずっと見てただけじゃね？」

「失礼な。言ったでしょう、見届けるのが私の役目ですって」
「……へーへー、そーですか」
だから、その勝ち誇った顔やめーや。そういうの世間じゃドヤ顔って呼ばれてんだぞ。
オレの言葉なぞどこ吹く風で、早々に箸を取って焼き魚の身をほぐす仙人サマ。さっき団子食ったばかりだってぇのに、よく食べるもんだわな。ま、下手に小食アピールされるよりかはよっぽど健康的で良いけどよ。
それに何より、出されたものを残さず食べるのは食に対する礼儀でもある。意外かもしれんが、これもまたオレの主義だ。ま、とりあえずいただいちまうか。
遅れながらも箸を手にして、いざ食事に取り掛かろうとした時、ふと大人げない思考が過った。我ながらあくどいのだが、彼女には負けてばかりだったし。ぼちぼち一発逆転しときたいよなぁ？
つーワケで。
ちょっとした仕返しに、ニヤニヤと意地悪く笑みを浮かべて言ってやった。
「ったく、食いしん坊なやっちゃな」
「なっ!?　お、女の子に向かってその発言はどうかと思いますッ！」
よっしゃ、華扇さんってば狙い通りの反応してくれやがったぜ。クックックッ。
顔を赤くしてプリプリと頬を膨らませる彼女を見れた優越感に箸が進む。やっぱり、毎度毎度やられっぱなしじゃ性に合わねーよな。なんせオレは夜に生きる男なのだから。
中華衣装の少女から浴びせられる拗ねた視線と説教（というより非難）をのらりくらりと躱し、オレは気分よく朝メシ兼昼メシを味わうのであった。フッ、勝ったな。
その後、女の子に恥をかかせた罰と称して、食後のデザートに饅頭と大福とあんみつと煎餅を奢らされ、苦労して手に入れた報酬の大半があっという間に消えた。

つづく

第五話　「探し物はぬこですか」

「おはようございます。もう朝ですよ？　起きてください」
「だからオレは夜に働く男だと言ってんだろーが……！」
　可愛らしい声で爽やかに挨拶を交えつつ、今日も華扇が容赦なく掛け布を引き剥がしてきやがった。叩き起こされた抵抗にタオルケットを奪い返そうとしたが、二度寝させまいと勝手に畳んで片付けられる。
　光景だけを見れば、さながら幼馴染が朝起こしにきた一幕だろうか。そういう妄想が滾る一部の野郎共からすれば泣いて喜ぶシチュエーションなのかもしれねぇな。実際、華扇の容姿レベルはかなり高いってのはオレも認める。シニョンで括った桃色のミディアムヘアも、黄緑色のミニスカートと合わせた中華衣装も、どれもが彼女によく似合っていると思う。
　ただし、それとこれとは話は別だろうがよ。
　こちらからしてみれば安眠中に襲撃を受けた以外の何物でもない。というか、何当たり前みたいな顔してテント内に居座ってんだ、お前は。
　寝ぼけ眼のジト目で抗議したところで、少女には全くもって効果なし。包帯が巻かれた右手を唇に添えてクスクスと笑みを零すだけ。
「ふふ。意外と寝顔は穏やかなんですね」
「くぁ……ったくよぉ、今日は何だってんだ？　しかもずっと人の寝顔見てたのかよ……」
　いつから居たのか知らんけど、一歩間違えなくても不法侵入だかんな。
　欠伸を噛み殺しながら怠い動きで起き上がる。本音を言えばコイツをスルーして寝ッ転がりたい。だが、それをやろうものなら昨日と同じく飛び掛かってこられるだろう。
　何用かと仙人サマに問えば、彼女は「ああ」とか言いながらポンと手を打った。何やその今思い出したかのような反応。すっかり用事を忘れるほどオレの寝顔が面白かったのか？

「そうでした。慧音さんに綿間部を連れてきてほしいと頼まれていたんです」
「上白沢女史が？」
「はい。ですから、早く支度してくださいね。いつまでも待たせるわけにはいかないでしょう」
「はぁああ……へいへい、今すぐ準備しますよっと」
人里の重要人物から呼び出しをくらったのならしゃーねぇ。しかもこの女がいる以上は夜まで待機も使えない。夏休みのガキじゃあるまいし、何故にオレは二日連続で早起きさせられてんだろうか。
早く早くと急かしてくる華扇をあしらいダラダラと支度する。とりあえず軽く汗ばんだタンクトップを脱ぎ捨てた。
「きゃあ!?　な、なんで服を脱ぐんですか!?」
「着替えるからに決まってんだろ……見てないで外出てろよ」
「そッ、そういうのは前もって言ってください！　破廉恥ですよ!?」
咄嗟に両手で瞼を覆いながら、僅かに顔を赤らめて華扇がお叱りを飛ばしてくる。朝っぱらから説教とはついてねぇ……
二日連続で押しかけてくるし通い妻じゃねーんだからよ。こちとら結婚どころか恋人がいた経験も無し。
羞恥を誤魔化しているのがバレバレな説教を背中越しに聞き流しつつ、真新しい黒シャツを着る。
どうでもいいけど、目隠しじゃなくて外で待ってろと言っとるだろうが。赤面しながら指の隙間からさり気なくチラ見すんなや。
寺子屋とは、江戸時代において以下略な学問施設である。要するに学校とか塾の類いだ。
「なるほど、こりゃ確かに寺子屋だ」
「どういう感想ですか……」
おおよそ人里の雰囲気や家々の造りから察した通り、その場所もまた時代を感じる佇まいをしていた。どことなく道場を彷彿とさせる瓦屋根の和風屋敷。ここで上白沢女史が教鞭を振るってんのか。
お邪魔させてもらうと、なかなか広い畳部屋に低い長机と座布団が三枚の組み合わせが等間隔に並んでいた。これぞ学問のすゝめ。い

かにも一休さんとか寺の小坊主が勉学に勤しんでそう。
「わざわざ来てもらってすまないね」
「別にいい、どうせ今更だから気にすんな。今日はガキどもはいねぇのか？」
「こら！　口が悪いですよ、綿間部。失礼でしょう!?」
「はは、別に気にしていないよ華仙殿。今日の寺子屋は休み、元気に遊ぶのも子どもの仕事だからな」
「ほーん……んで、オレを呼び出したからには依頼なんだろ？」
　上白沢女史の顔を窺う。彼女は表情を引き締めて首肯した。
　とりあえず出されたお茶をズズズと啜る。どこが粗茶だ、めっちゃ美味いじゃねーかよ。
　文句があるとすれば、どいつもこいつもオレの営業時間を守らねぇってことか。夜で良いじゃんかよ。まさか日中にオレを引き摺り出すために華扇に頼んだのか、この女教師。
　……いや、それはねーか。たぶん彼女自ら率先して「私が呼んできますね！」とか言ったんだろ。
「話が早くて助かる。今回、君に頼みたいのは……実を言うと猫探しなんだ」
『猫探し？』
　思いもよらない発言を受けて、オレと華扇の声が意図せず重なった。マジか。朝っぱらから人を呼び出しといて、いざ蓋を開ければペット捜索かよ……
　訝しげに眉をひそめるオレと小首を傾げる華扇。先に口を開いたのは彼女の方だった。
「詳しく聞かせてもらえますか？」
「うむ、教え子が飼っている猫が三日ほど前から帰ってきていないんだ。おかげでその子が随分と心配している。まだ子猫だった頃から一緒にいてかなり可愛がっていたらしい。私も何とかしてやりたいんだが……」
「猫だったら案外そのうちひょっこり帰ってくるんじゃねーの？　って言ったところでガキんちょ相手じゃ意味ねぇか」

「ああ、その通りだ」
　さらに聞けば、件の子どもが人里を隅々まで探したものの結局見つからなかったのだという。おそらくは里の外に出てしまったのではないか、と。どうしようもない不安に襲われたその子は、親よりも頼りになる大人に相談したっつー流れだった。
　可愛い教え子の悩み事となれば、この見るからに良い教師な人物が放っておけるはずもねぇわな。
「大丈夫だと励ましているけれど、もしかしたら私の知らない間に子どもだけで遠くまで探しに行ってしまうかもしれないと思うと落ち着かなくてね。そんな時に、黒岩のことを思い出したんだ。どうか力を貸してくれないか、何でも屋さん？」
　上白沢女史が紳士な眼差しで助力を願ってくる。依頼内容はアレだが、彼女なりに真剣なのは伝わる。
「……はぁ～～、よもや迷い猫を捕まえる仕事とはなぁ」
「綿間部……まさか受けないつもりなんですか……？」
　オレの深い深い溜息をそう捉えたのか、華扇の瞳に微かな失望と悲しみが混じる。堪えるように己の手をきゅっと握り締める姿は、あまりにも痛ましげで辛そうに映った。
　ったく、まーたコイツは早とちりしやがってからに。
「ちげーよ、そうじゃねぇ。誰が受けねぇ言ったよ？」
「え……？」
　ただ、数奇な運命を感じて浸っていただけだ。昨日といい今日といい、懐かしい依頼が次から次へと舞い込んできたこの運命を。
　そう、オレはかつて猫探しの依頼を受けたことがあるのだ。あれはオレがまだ黒岩ではなく無名の雑用係でしかなかった頃。
　当時はまだギリギリ未成年だったとしても、二十歳手前の男が虫取りアミを振り回して猫相手にガチンコ対決を繰り広げたという、ちょっとした黒歴史。フッ、昔の話しだ……だからそれ以上触れるな……ッ！
　何でも屋を名乗るからには、殺しと一部を除けば大抵の依頼は引き受けるのが我が信条。やれやれ、今日も日勤になっちまうのか。

「言っておくが、幾らショボっちい雑用でもタダ働きはしねぇぞ。あと、幻想郷の地図があったらくれ」
「綿間部……！」
「ああ、今すぐ用意しよう！　ちょっとだけ待っていてもらえるか」
オレの答えを受けて、嬉しそうに上白沢女史が教室を出て行った。さすが寺子屋、地図くらいあって当たり前ってか。
パタパタと足音が遠ざかっていくのを聞いていると、華扇が上白沢女史に負けず劣らず喜色満面の笑顔でオレを見つめているのに気付く。柄にもなく顔を背けちまった。あーくそ、何となくハズいじゃねぇかよ。
……幻想郷を調べて回るのに丁度良かっただけだっつの。そのガキを早いとこ安心させてやりたかったとかじゃねーかんな、勘違いすんじゃねぇぞ。
しばらくして、上白沢女史が持ってきた地図を机の上に広げて、改めてこの幻想郷について確認することにした。っていうか筆書きかよ。しかも地図らしい地図じゃねぇ。ゲームのマップに似た、大雑把な場所と地名が書いてあるだけのヤツだわ。ま、そんなんでも無いよりかはマシなのか……
大きく描かれた山は「妖怪の山」で、正反対の位置に広がっている「迷いの竹林」の中に「永遠亭」なるものがあるらしい。小さい山の方に行けば「無名の丘」という場所が存在するようだ。あとは「魔法の森」に「太陽の畑」それから……「何々の～」って名前多すぎだろ。
「ひとまず捕獲用の網とエサでも調達しとくか」
「その必要はありません。うふふ、ここは私の出番ですね！」
俺の独り言にピクリと反応して、なにやら華扇が自信ありげに顔を寄せてきた。昨日と違って今日は手伝ってくれるらしい。
「何か秘策でもあんのか？」
「ふふふ……私、動物の扱いには長けているんですよ」
「ほー、そら便利なこって」
そいつも仙人特有のお力ってやつなんだろーか。動物と心を通わせることができる仙人の少女、まるでジブリじゃんかよ。デッケェ狼

に跨って森を駆け巡ったりすんのか。何となく想像してみたら意外と絵になっていた。

行方を眩ましたニャンコ（特徴とかは聞いた）を見つけるべくいざ出発といこうとした時、再び上白沢女史に呼び止められた。今度は何や。

「あー、その……大変聞きにくいことなんだが……」

「どうかしたんですか？」

ここにきて、仕事ができる女教師が何故か言い淀んでしまう。気まずそうに視線を泳がせては、なかなか本題を言い出せないでいる。なんつーか、ロクでもねぇ話しの予感がしてならんのだが……

なぜなら守護者様の瞳の先が時折、オレと華扇の間を交互に行き来してんだよな。どう見てもオレら二人に関する内容なのは明白である。

「気がかりがあるなら今のうち言っとけ」

「あ、ああ……そうだな。ごほん。えっと……まるで信憑性はないのだが、人里でちょっとした噂になっているんだ。その、君達がな……？　あ、朝から男女のそういう、ゴニョゴニョ……をしていたとか何とか――」

「バ――」

「はぃいいい!?」

オレが言いかけた言葉さえも打ち消すほどに、華扇の素っ頓狂な叫びが教室に響き渡る。ついでにオレを突き飛ばしやがった。

十中八九、昨日テントでやらかした騒動が原因だろうな。だから早く離れろって言ったじゃねーか。

「そそ、そんなの何かの間違いに決まっています！　だだだっ、誰がこんな人とッ!!」

「そ、そうだな。私もそう思っていたんだ、ハハハ……」

バタバタと慌てふためき華扇が全力で弁明を捲し立て、上白沢女史がコクコクと何度も頷いて苦笑いを浮かべる。二人とも大人びているのに変なところで初心なこって。畳に突っ伏したまま嘆息する。

座布団がなければ即死だった。

というか華扇さんよぉ、野郎の寝床に躊躇なく飛び込んで来たり上に覆いかぶさったりしてきたお前にも原因あんだからな？　こんな人呼ばわりとか失礼なやっちゃなオイ。

紆余曲折あったものの、ようやく人里の外に出られた。

初めて此処に着いた時は夜だったのもあって把握しきれていなかったが、人里の周りは田畑で囲まれていた。実際、そこかしこでジジババが農作業に勤しむ姿が確認できる。繁華街に居た頃にはなかった日本の田園風景が広がる。長閑すぎて欠伸が出ちまいそうだ。

手始めにもう一度地図を広げて狙いを絞っていく。

「さて、どこから行くか……」

よもや今のご時世に、紙の地図を広げて歩き回るハメになるとは。しかも、人里から見た大体の方角と地名ぐらいしか分からねぇし。これ地図と言うよりどこぞの画伯が描いた筆絵じゃねーの？

ともあれ、幸いにもこの世界には自動車は走っていない。よって車に轢かれて死んでいたなんて在り来たりで悲しい結末にはならないのは救いだ。このオレが引き受けた以上、成功報酬を貰わねば何でも屋の名が廃る。

それに今回は心強いパートナーもいる。早速、動物の扱いなら任せろと言っていた仙人少女に尋ねてみた。

「なぁオイ、華扇。心当たりのある場所ねぇのか？」

「そうですね……」

オレと地図の間にスッと肩を割り込ませて、華扇も一緒になって紙面を眺め始める。すぐ間近に迫る桃色のショートヘアから甘い香りがして鼻孔をくすぐった。

だから近いっつの！　こういうところ無自覚なんかよ。さっきは真っ赤になって取り乱していたってぇのに。コイツひょっとしなくともド天然な性格なんじゃねーか？

無防備に身体を寄せていることなど微塵もお構いなしに、おもむろに彼女はある一点を指差した。

「あ、此処なら手がかりが得られるかもしれませんよ」

「どれだ……マヨヒガ、って読むのか？」

「はい。分かり難い場所にあるんですが、猫達の隠れ里になっているところです」
「……オイ」
それもう答え確定じゃなくて……？
むしろ何で今まで行かなかったのか疑問を抱くが、どうやら例の妖怪の山とやらの付近あるいは内部にあるようだ。そらガキだけで行かせるわけにゃいかんわな。
いずれにせよ、最初の行き先はマヨヒガに決まった。華扇がいれば道に迷う危険もない。
道を歩きながら、もし探している猫がいなくても有益なヒントが聞けるかもしれないと華扇が意気込む。野良猫どものネットワークを上手く活用するつもりだとか。ついでに色々と話しを聞いてみるのだそうだ。
「ま、さっさと見つけて捕まえるか」
「はい、頑張りましょうね♪」
しかし、猫連中に話を聞くって何だよ……
その場所には喋る猫（ジブリ風）でも居るのか？
つづく

第六話　「マヨヒガ　ニャンニャン」

幻想郷生活が始まり早くも二日目。いや、初日も含めれば三日目になるのか。

前日は引越しセンターの短期アルバイトさながらに働き、今日にいたってはペット捜索に精を出す。澄み渡る青空を舞う涼風に煽られ、草木が気持ちよさげに揺れ往く。

なんたることか、夜に生きる男にはあまりに不釣り合いではないか。いっそ初っ端に遭遇したアクシデントの方がよっぽどオレの性分に合っていたまである。

こんな調子じゃ溜息の一つでも吐きたくなるわ。

「はぁあ……ったく、イイ天気だなぁチクショーが」

「そう思うならもっと元気よくしてください。何ですか、その無気力な態度は」

「だからぁ、オレの時間は日没からなんだと言っとるだろーが……」

隣から浴びせられるお小言は適当に聞き流しておく。

ピアノもねぇバーもねぇ、バスは一日一度来るどころかそもそもバス自体が皆無という幻想郷。ブッチギリのド田舎な異世界で、シニョンの少女と仲良く二人であぜ道を歩いていく。相変わらず説教が絶えないのは玉に瑕だが。お前は逆に元気すぎんだろ……

ひとまず情報を整理しとくか。一応の目的地としているマヨヒガ（「ヒ」と書くが発音は「イ」らしい）は、地図を見る限り妖怪の山の何処かにあるようだ。他者の話を聞いてもそれは確か。

妖怪の山。まさに読んで字のごとしなのだが、この土地には妖怪が蔓延っているらしい。かくいう上白沢女史も八雲紫も妖の類い。だとすれば、妖怪といえど容姿が個性豊かなくらいで人間と大差ないのかと考えてしまう。が、生憎そうは問屋が卸さねぇ。

ここで厄介なのは知性を持たない低級妖怪。獰猛な獣と違わないのも存在し、それこそ妖怪らしく人を襲うという。村人たちからすればそっちのが身近で脅威なのだと、上白沢女史が渋い顔をしていた。

他にも異変がどうたら弾幕ごっこなる決闘方法がどうたら教えて

くれたが、詳しいところはオレにもよく分からなかった。博麗の巫女とやらがこの世界でわりかし重要な存在らしいってのは記憶している。

「で、オレらが向かっている場所にはどんな輩がいるってんだ？」

「独自の社会を築いて大きな力を持っているのは天狗と河童でしょう。かつては鬼も妖怪の山に住んでいましたが、今は……」

鬼。その単語を口にする間際に、華扇がどこか遠くに思いを馳せる表情をしたのを見逃さない。

また随分と有名どころが揃い踏みと来たもんだ。聞けば、そいつらも見た目は人は変わらず。天狗については翼はあれど鼻は高くなく、河童にいたっては頭の皿も背中の甲羅もなしと。

そして、

「鬼は……山を去り地底に移り住みました。もはや地上に住む鬼は、私もせいぜい一人くらいしか知りません……」

僅かに顔を俯かせて、肩まで隙間なく包帯が巻かれた右腕を左手で庇いながら、彼女はそう告げた。

どうにも鬼と浅からぬ繋がりがあるのは目に見えている。だが、ワケありな深い事情を聞き出すには、まだオレ達は知り合ってから日が浅すぎた。

……はぁああ、仕方ねぇ。

「ところでよ、仙人ってのは何ができるんだ？　動物の扱いが上手いってのはさっき聞いたが」

少しばかり露骨だが話題を変える。とはいえ、実をいうと気になる話しでもあった。

こちとらいきなり仙人と言われても、長いヒゲのジジイが岩山で霞を吸い込んでるシーンとか、そういうマンガっぽい想像しか出てこねぇんだ。少なくとも、桃色の柔らかな髪をシニョンで括った中華衣装の美少女ではない。

しかもこの女、霞みを食って生きるどころか、酒豪なうえに食通ときやがった。こんなん思わず「仙人とは何ぞや」などと哲学的な問いをしてしまうのも致し方ねぇだろうがよ。

すると、自分自身についてオレから質問されたのが意外だったのか、彼女は始め目を瞬かせていた。それも束の間、すぐに得意げな顔になって語り出す。えへん、と。

「そりゃまあ色々できますよ。仙人であればこそ、日々修行を積み超人的な能力を得た後も決して驕らず鍛錬を欠かしてはなりません、時に死神と相対し、時に人々の助けとなる。私の理念は、天道と共にあります。あ、ちなみに動物の扱いについては仙人というより私個人の能力です」

「お前、今さらっと死神とか言わなかった？　あれか、仙人になるともれなく地獄行きになっちまうのか」

「それもまた仙人の宿命なのです。そもそも彼らとの勝負に敗れなければ問題ありませんし、たまにサボりの死神が屋敷を訪れることも珍しくないくらいですから……もっとも、私の場合は色々と例外ですけど」

「死神が仕事サボってんのかよ。大丈夫なのかそいつ」

あと最後らへんに小声でボソボソ呟いていたが、聞き返すのも野暮だろう。まさか死神まで存在するとは。リンゴとノート用意した方がいいのか？

ともあれ仙人サマも一筋縄ではいかねぇってワケか。血反吐吐くほどのキチガイな修行したり人々を導いたり、にもかかわらず死神がお迎えに来てその度にお茶漬け食わせて塩撒いてると。

ここにきて仙人ライフのブラックな環境が明かされた。想像するだけでもゲンナリする。そんなオレの面を見て華扇が含み笑いを浮かべた。

「もし綿間部も仙人になりたいのなら、しっかり修行して死神に負けないことね」

「今それ言うか？　ま、オレが地獄に落ちるのを心配してんなら、そいつぁ無用なこった」

「地獄が怖くないの？」

含み笑いを消して、赤みがかった瞳が心を見透かそうと真っ直ぐにこちらを射抜く。

このオレが地獄に落ちるのが怖くないかだと？　フッ、今更すぎて笑っちまう。

どうせまともな人生歩んじゃいねぇんだ。ならばオレはオレとして生きて死ぬまで。クソッタレな有象無象の一端として終わることだけは許さん。夜に生きる男として。

大体、死後の行き先が天国か地獄かなんざ考えるだけ無駄なのだ。なぜならば、

「そもそも行く必要がねぇ。オレ達が、地獄だ!!」

「達って誰ですか!?　もしかして私も入っているの!?」

その後も無駄話を交わしながらの珍道中が続き、いつしかオレ達は噂の妖怪の山まで足を踏み入れていた。山奥に進むにつれて、いかにも邪魔くさい木々や茂みに視界を遮られる。上白沢女史には申し訳ねぇが、貰った地図はもはや役に立ちそうになかった。

大層な名前からしてもっと禍々しい魔窟かと身構えていたが、事実は小説と奇なり。案外ありふれた山の風景だった。むしろ妖怪よりも野生の熊や猪に遭遇しそう。そっちのが危ないんじゃ……？

「あっ」

ふいに華扇が足を止めた。手を伸ばしてそこらの枝にぶら下がっていた果実をもぎ取る。彼女が手にした実は赤黒く、且つドラクエのスライムを思わせる形を成していた。字面にすると食欲が失せるが、そこまでグロくはない。おそらくフルーツの一種だろう。

「ほら、見てください。イチジクが成ってます。一部の地域では不老長寿の果物とも呼ばれていますね」

「ほーん、不老長寿か。仙人サマにピッタリの果物やんけ。コレ食えんのか？」

「もちろん。生食もできますけど、他にもお菓子に練り込んだりジャムにしたりと用途は多岐にわたります。初夏からが旬だから、これからの時期が特に美味しいわね。あ、食べるならちゃんと皮を剥いてからでないとダメよ？」

「言われんでも野生のブツをいきなり口に入れたりはしねーよ……」

お前はオレを何だと思ってんだ。この歳で得体のしれない果実を

躊躇いなく食うバカがいてたまるか。どんな副作用が起きるか分かんねぇだろうが。

というか、こんな道すがらでも果物を語り出すあたりどんだけグルメなんだよ。裏でこっそり食レポ放浪記でも書いてんじゃなかろうか。

結局、特に妖怪にも野生動物にも遭遇することなかった。

さらに奥へと足を進めると、生い茂る木々に覆われていないポッカリと開けた場所に出た。

まず真っ先に目に映ったのは古びた一軒家。廃墟というよりボロ屋と表した方がしっくりくる。長年にわたって放置されていたのであろう。その証拠に壁も所々剥げていたりヒビが入っている。ついでに雑草も茫々と生えていた。トトロに出てくるカンタ少年にお化け屋敷扱いされるレベルである。

どう足掻いても人が住む場所には思えぬ荒れ地。事実、そこは人ではない連中の住処と化していた。

ニャー　ミィ　ナァーゴ　ミャァア　ゴロゴロ……

「……はー、冗談抜きで猫ばっかりじゃねぇか」

「それはそうでしょう。だって此処は彼らの楽園ですもの」

オレ達を出迎えてくれた光景は、もしこの場に愛猫家がいたら狂喜乱舞するであろうもの。パッと見ただけでも二十匹は超える数の野良猫どもが、そこかしこで呑気に自由にやっていた。日向ぼっこする白黒のブチ猫もいれば、毛繕いに勤しむトラ猫に、仲良くじゃれ合っているチビ猫二匹。さらにはオレ達をジーッと見てくる黒猫も。此処は沖縄なのか。行ったことねぇけど。

手始めに近くにいるヤツらだけでも片っ端からチェックしてみる。しかし、残念ながらオレ達が探すものと特徴が一致する猫はいなかった。

「だ、誰ですか」

「あ？」

舌足らずな幼い声が鼓膜に当たり、作業中断して声の主を捜す。意

外にも答えはすぐ近くにいた。オドオドとおっかなびっくりにこちらを観察するちっこい少女。

スカート調の真っ赤な服を着た、見た目レベルなら小学生と変わらない子ども。だが、明らかに一般人と異なる箇所がある。緑色の緩いデザインの帽子の下からピョンと飛び出しているのは、紛れもなく猫科の耳。さらに背中の陰から二本の尻尾が揺れて見え隠れする。

まるで隠すつもりなど更々ないと自己主張する二つの特徴から鑑みるに、この少女も妖怪。それも猫にまつわる種族なのは言うまでもねぇ。

「お前、猫又か？」

「橙は橙です。式神です。お兄さんたちはどうしてマヨヒガに来たですか？」

チェンってのはこの子の名前といったところか。繁華街での生活が身に沁みついているせいで、どうにもガキの相手ってのは慣れねぇんだよな。

とりあえず質問に答えるべきだろう。敵と認定されては堪らない。

「仕事だ。人探しならぬ猫探し。行方を眩ました他所の飼い猫を捜すハメになってんだよ。あわよくば此処に居るんじゃねーかと踏んで来たんだが」

「何か心当たりはありませんか？　例えば、ここ数日のうちに見慣れない猫が増えている、とか」

華扇がしゃがんで目線の高さを子どもに合わせる。そのおかげもあって、自称式神の少女からさっきのような怯えた態度は薄れていった。こういうのは女の方が有利だよな。

彼女の質問に猫っ子は「んー……」と思案していたが、ほどなくして首を横に振った。

「みんな好きにやってるのでわかんないです」

「そうですか……」

ま、そう上手い話があるわきゃねーか。

もしやコイツが猫どものボスなのかと思ったが、たむろっているだけらしい。所詮相手は何の変哲もない野良猫に過ぎない。どっちか

と言えばこの少女も、猫連中にとっては住処を提供してくれる大家に近い存在なのかもしれない。
「橙つったな。お前まさか一人で此処に住んでんのか？」
「？　橙だけじゃなくてみんなもいますよ？」
「いや、そうじゃねぇんだが……自分で式神だとか言ってただろ。ってことはご主人様がいるんじゃねぇのか？」
　こんなちっこいガキが山奥に一人で住んでいるのかという、素朴な疑問が生じた。念の為に言っておくが、別にこのチビ助を心配しているんじゃねぇ。ちょっと気になっただけだ。
　それに、にわか知識だが式神ってぇと陰陽師が使ってる感じのアレだろ？　札を飛ばして何かそれっぽいヤツを召喚する。ひょっとして、安倍晴明みたいな平安時代の遺物までリアルタイムで存在すんのか？
　ところが、オレの推測は外れることになる。挙句の果てに、予想の斜め上をいく答えが返ってきやがった。
「橙は藍しゃまの式神です。それにちゃんとお家に帰ってます」
「ハァアアッ!?　乱射魔ぁああ!?」
　オレの脳裏にイメージ映像が過る。ランボーやらコマンドーやら、図太い腕に重火器を担いだ褐色筋肉ムキムキの漢の姿が鮮明に映った。脳内を占めるガチムチが戦場で一斉射撃をブッ放つ。それも「ちぇぇえええん!!」とか叫びながら。猫っ子を引き連れて。
　昨日に教わったばかりの弾幕ごっこというフレーズが浮かぶ。いやコレもはや「ごっこ」じゃねーだろ!?
　しかも実に恐ろしきことに、悪夢はまだ終わらなかった。
「藍しゃまは九尾のスゴイお方です。とっても強いです」
「……ッ!?」
　瞬く間にイメージ画像が描き換えられる。半裸の身体に予備の弾薬を巻き付けた褐色モリモリマッチョな益荒男がボディビルをキメてくる。引き締まったケツに九本のキツネ尻尾をことごとくブッ挿して、足元に猫耳のガキを仕えさせている地獄絵図。バカな……オレ達が、地獄のはずだ……ッ！

「どうかしたですか?」
「……フッ」
もう笑うしかなかった。このガキ、とんだ修羅場を潜ってやがる。
あの繁華街だとしても、絶対に出くわしてはならない超危険人物トップ入り待ったなし。陰陽師で妖怪退治じゃなくて鉛玉が飛び交う紛争地帯の最前線だった。
圧倒的な実力の差を前にして震えが止まらない。違う、こいつぁ武者震いだ。面白れぇ、予想以上じゃねぇかよ。幻想郷、やってくれるぜ。
気付かず脂汗が顎を滴り落ちて地面を濡らした。おそらく手汗も酷いことになっているだろう。それでもどうにか、些か掠れてしまったが声を絞り出す。
「華扇、やっぱスゲーな此処はよォ……」
「少なくともあなたが考えていることは間違いなく間違っているということだけは断言できます」
この時、オレは初めて冷め切った目をした華扇を見た。

つづく

第七話　「何でも屋、蹴られる」

「探している猫が紛れ込んでいるかもしれねぇ。おい猫娘、案内を頼めるか？」
「お願いできますか、橙さん」
「わかりました。ついてきてください」
　少しも渋ることなく快諾した式神の後ろに続いて、本格的にマヨヒガの敷地内に入る。同じくして、一斉に猫集団の注目を肌で感じ取った。警戒されたか？　マタタビを用意しておかなかったことが悔やまれる。ま、いざとなりゃ華扇がどうにかするはず。多分。
　まずは外を一通り調べて回った。不運にも、やはり標的は見つからなかった。残るは例のボロ屋のみ。玄関で一応靴を脱いでから上がらせてもらう。爪痕でボロボロに破れた障子の戸を開けると、そこにも寛ぐ野良連中の姿があった。
　畳の上でゴロゴロと背中を擦りつけているのもいれば、柱で爪とぎするお約束なヤツもいる。そして、数匹集まって井戸端会議と思しき猫達の中に、他の奴らと比べて毛並みが良い猫が一匹ばかり混ざっていた。
「あ、いやがった」
「あら本当」
　思わず二人して間の抜けた声が漏れる。
　間違いない。事前に聞かされていた特徴と寸分違わず一致する。さっき不運といったが前言撤回。よもや依頼を受けたその日のうちに標的を見つけられるとは、こいつは幸先が良い。
　さっさと捕まえて日勤は終わりにしてやろう。そして帰ったら夜になるまで仮眠する。誰にも異論は認めさせてなるものか。
「華扇、アイツが逃げられねぇように入口を塞いどいてくれ。オレが捕まえる」
「大丈夫なんですか？　私が話してきた方が早いと思いますが……」
「フッ、心配すんな。要は気付かれる前に取り押さえればイイだけだからよ」

これも何でも屋に来た仕事。だとすれば、最初から他人任せにするのはどうにも釈然としない。早い話、単なるオレの意地なのだが。それに、数多の依頼のおかげで経験豊富な今のオレに手にかかれば、猫畜生の一匹や二匹簡単に捕獲できる。無名だったあの頃とは違うんだよ。

姿勢を低くして構える。息を潜め、自らの気配を最小限に留める。お得意のステルスによって足音もなく、僅かでも確実に距離を縮めていく。

ふと、ターゲットの耳がピクッと動いた。しかし彼奴がこちらに気付くよりも一歩早く、その胴体を持ち上げてやった。

「ほい捕まえた。ってオイコラッ、暴れんなや！」

シャーッ!!　フカーッ!!

毛を逆立たせて牙を剥き出しながら小さな猛獣が全力の抵抗を見せ始める。前足をバタつかせるたびにオレの手に引っ掻き傷ができる。痛ってぇコイツ爪立てやがった！　だけどコイツさえ押さえれば……

そう思っていた時期が、オレにもありました。

ここで予想外の事態が巻き起こる。なんと井戸端会議していた他の猫どもが、囚われた仲間を助けんとオレに襲いかかってきたのだ。

ニ〝ャアア〝ア〝ッ!!　ナァアアアゴ!!

「あだぁッ!?　このヤロッ……えぇい、止めぃやテメー等ぁああ!!」

「ちょっと綿間部!?　大丈夫なの!?」

「はわわぁ……」

全身のバネを駆使したしなやかな体裁きで一斉攻撃を繰り出す小さな戦士たち。華麗にかつ容赦なく入り乱れるその様は、まるで心の怪盗団のようであった。

「いって……！」

その時、一匹から手の甲を引っ掻かれた拍子に、うっかり力が緩んでしまう。この機を逃すほどヤツも野性を捨ててはいなかった。

「やったぜ」とばかりに迷い猫が拘束から抜け出す。

「おのれぇ逃がさん……ッ！」

四肢を伸ばして宙を泳ぐ逃亡者を追って、こちらも両手を伸ばして飛び掛かる。我ながら見事、再確保に成功した。だが、勢いは殺し切れるものではなかった。

その結果、まるでフライ球をキャッチした甲子園球児みたいに、オレは腹からスライディングをかますハメになってしまった。

「ぜぇ……ぜぇ……もう逃げらんねーぞ」

「わ、綿間部……？」

「……あ？」

頭上から聞こえてき華扇の声に、視線の先を猫から前方へとずらす。

まさしく目と鼻の先だった。すぐ間近に女の素足が立っていた。靴下もストッキングも穿いておらず、スラリと細くキメ細やかな美肌を余すことなく表に晒す。足フェチには堪らないだろうな、などと下世話な感想を抱くあたり、オレも疲れているのだろうか。やはり柄にもなく朝っぱらから働いたのが原因か。

そのまま何となしに視線をさらに上に持っていくと、ミニスカの裾を両手で押さえて顔を赤らめた桃色の少女がオレを見下ろしていた。ワナワナと肩を震わせてながら。

二人の眼差しが交錯する。ようやく自分が華扇の足元に滑り込んだのだと理解した。それと時を同じくして。

仙人サマの羞恥と怒りの火山が大噴火した。

「どっ、どこ見てるんですか馬鹿者！　厭らしい人ですね!!」

「ごばぁッ!?」

スカートを抑えたまま美脚を後ろに振り被り、目にも留まらぬ速さでサッカーキックを叩き込まれる。狭い和室の中で放物線を描いて仰け反るオレを前に、橙と猫連中はただただ言葉を失う。彼らの呆然とした顔を最後の記憶に、呆気なくオレの意識は途切れた。

かのイエスキリストは、右の頬を打たれたら左の頬を差し出せと説いたという。

ならばオレは神に問いたい。右の頬を容赦なく蹴り飛ばされた場合はどうすれば良いってんだ？

「ったく……チョー痛いんですけどぉ」
「だから最初から私に任せてくれれば良かったんです！　どさくさで破廉恥な行いまでして、綿間部はスケベな人だったんですね!?」
「ありゃどうみても偶然の産物だろーが……」
「それとこれとは話が別です!!　だいたい――」
　目覚めたら、あれだけ逃げようと暴れ回っていた猫畜生が華扇の胸に抱かれて大人しくしていやがった。んだよもー！　テメッ、女が相手なら大人しくなんのかよ！
「ちょっと綿間部！　聞いてるんですか!?」
「聞いてるって……」
　何せこちとら、ガミガミと説教を垂れる桃色の髪の仙人サマによって正座させられているのだ。
　ちなみに説教と説明が半々の話しをまとめると。彼女も自負する動物の扱いに長けた能力についてだが、彼らと意思疎通ができる領域にあるそうだ。つまり、そこの猫畜生に飼い主が心配して帰りを待っていると伝えて一発解決したのである。それもオレが失神している間にな。泣けるぜ。
　一方その頃、一部始終を見届けていた猫娘はというと、
「スゴイです。みんながあんなに一致団結したの初めてです」
「あぁうん、確かに凄まじい一斉攻撃だったぞ……ま、蹴りの方が百倍痛かったけどよ」
「綿間部？　何か文句でも？」
「……いーえ、滅相もねぇですよ」
　ニッコリと魅力的な笑顔でオレに詰め寄る華扇から即座に目を逸らす。鬼気迫るナニカさえ感じた。
　やれやれ、色々と疲れる結果となったが依頼は半ばクリアってところか。あとは帰って上白沢女史に下手人を引き渡すだけ。
　財布から百円玉を取り出し、橙の手のひらに乗せてやる。
「騒がしたな。こいつは協力してくれた駄賃だ。持っとけ」
「いいんですか？」

「働きに応じた正当な手柄だかんな。実際、お前のおかげですぐに片付いたしよ。オヤツでも好きなもん買えや。じゃな」

長居は無用。さっさと立ち上がりボロ屋ひいてはマヨヒガに背を向ける。決して仙人サマの説教から離脱できそうな絶好のタイミングだったからではない。

あれだ。早く届けて飼い主を安心させてあげようというオレの心意気ってことで。

帰り道、いつの間にか機嫌を取り戻した華扇がおもむろに口を開いた。

「ちょっとだけ見直しました。小さい子どもに対しても、きちんと働きに見合った対価を支払ったんですね。立派な考えです」

「どうせこの後に成功報酬も貰うしな。それに」

「それに？」

「……いや、何でもねぇ」

大した理由じゃない。相手を見下したり足元を見るやり方はオレの主義に反するってだけに過ぎない。

言ったろ。ショボっちい依頼でもタダ働きはしないと。そして、そのスタイルはオレ自身に限らず協力者にも当てはまる。それだけのことだ。

そういえば言い忘れてしまったが。噂の乱射魔とやらによろしくと伝えるべきだったか？

人里に戻ってからの顛末については、別にこれといって特筆するものはなかった。飼い主のガキんちょと忠猫タマ公による感動の再会シーンがあったぐらい。その際、華扇がタマ公に「もう心配をかけさせないように」と注意していたし、アフターケアにも抜かりはない。

そして、オレは上白沢女史から依頼達成の金を受け取っているところだった。

「頼んだ私が言うのもなんだが、その……本当にこれだけで良いのか？」

「ああ、どっちみち大したヤマじゃなかった。この辺が互いにとって

も相応の額だろうよ」
「しかし……」
ったく、見た目通りの真面目なやっちゃな。この先生も。
申し訳なさげに眉尻を下げる女教師を見ていると、あまりの人の良さに呆れて嘆息してしまう。ちなみに彼女がそうなった原因は、この一件に対してオレが微々たる額しか報酬を求めなかったため。
このままじゃ埒が明かないので、こちらとしては貰った金銭で何も問題はなく、よって上白沢女史が気にする必要は何一つないと懇切丁寧に伝えてやることにした。
タダ働きはしないが、かといってボッタクリもしない。こちとら居なくなった猫を見つけてきただけ。それでも気になるなら初回限定サービス価格ってことにしとけ。
「そうか……うん、ならもう気にしないよ。今回もありがとう。黒岩」
「フッ、毎度あり」
小銭を片手に子屋を出ると、軒先で桃色の髪をなびかせて少女が待っていた。彼女はオレの姿を捉えると、声を弾ませて駆け寄ってきた。
「戻ってきましたね。では、成功祝いに行きましょう！」
「……え、今から？」
「はい、今からです♪」
ルンルン気分の華扇の笑顔が眩しい。どうでもいいけど楽しそうだな、お前。
もちろん彼女に手伝ってもらった手前、報酬も二人で山分けすべきだ。なのだが、ぶっちゃけると半々に分けられるほどの金額もなかったりする。我ながら迂闊過ぎて言い訳できねぇ……
確かに、こりゃ二人のメシ代の足しに使った方が手っ取り早いかもしれんな。フッ、二日続けて収入が食費に消えるとは……泣けるぜ……
「ま、いいけどよ。今度は何が食いたいんだ？」
「そうですねぇ……あ、お蕎麦なんてどうですか？」
「ふーん、いいんじゃねぇの」

コイツといると食ってばっかな気もするが、案外それも悪くない。いつしか、そう思い始めている自分がいた。っていうか今日まだまともに食事してなかったわ。寝起きに液キャベ飲んだだけやんけ。

早速と歩きつつ、ふと思い出したことを口にする。

「まさか動物と会話できるなんてなぁ……」

「むっ、もしかして信じてなかったんですか？」

「そういう意味じゃねーって。ところで、お前はペット飼ってないのか？」

「飼ってますよ。虎と鷲と、あと龍もいますね」

何やそのプロ野球チームみてぇな組み合わせは。つーか物騒なのばっかじゃねぇかよ。怖ッ！　しかもさりげなく龍とか言い出しおったぞ、この女。

ペットという枠組みを余裕でブチ抜くメンツに驚きを隠せない。やはり仙人ってのは伊達じゃないってか。しばし呆気にとられるオレに華扇がクスクスと笑みを零し、おまけに可愛らしくウインクを決めてきた。

「もちろん皆私の言うことを聞きますよ。よければ今度、私の屋敷まで遊びに来ませんか？　お望みなら修行もつけてあげます」

「あーうん、まぁ……そのうちな」

「約束ですよ？　もし嘘ついたら後で酷いですからね」

「へいへい」

華扇と他愛のない会話を交わしながら、彼女がご所望する蕎麦屋に向かう。

その道すがら、オレは密かに一つの決心を固めていた。

――次こそは、今度こそゼッタイに夜になってから活動してやるかんな！

つづく

第八話　「異世界屋台　～お前に食わせるタン塩はねェ！～」

模様すらない黒いネクタイを締める。少し緩め、ラフなスタイルに仕上げた。オレにとっては大事なファッションアイテムの一つ。やはりコレがないとどうにも気持ちが引き締まらない。

次いでベストを羽織る。当然こっちもブラック単色なのは譲れない。昼間は暑くてしんどい重ね着も、この時間帯ならさして苦にならない。何より全身をあらゆる黒で統一してこそ、オレの二つ名が活きるといえよう。

最後にオールバックの髪型を今一度手櫛で梳いて、息を吐く。

「行くとするか」

テントのファスナーを下げ、いざ外へと身を乗り出す。ひゅう、と夜風が吹いた。

わざわざ見渡すまでもなく、辺りはとっくに薄闇に包まれていた。天上の遥か彼方には、光年単位の煌めきがポツポツと疎らに点在する。ネオンライトがやけに眩しい繁華街では、まともに星を見てなかった。つい立ち尽くしてじっくり眺めてしまう。

フッ、帰ってきたんだな。喜びもあまりニヒルな笑みが零れるが、それを咎める者など誰もいない。

皆々様方お待ちかね、いよいよ夜の幕が上がるのだ。ここからがオレの時間だコノヤロウ。

「さてと、お仕事開始といこうじゃねーか」

そう、オレは夜に生きる男。例えモノローグでもこのセリフを言わねば始まらねぇってな。

連日続けて朝っぱらから押しかけてきやがった某仙人の目を欺くため、オレはこっそり拠点を人里の隅っこ、それも裏通り付近の特に目立ち難い場所へと移していた。さらにカモフラージュとして、そこら辺の資材置き場から簾を拝借してテントに被せておけば、非の打ちどころがない隠れ家と化す。

その効果たるや期待通り。おかげで今日は華扇の襲来を受けず、日没まで英気を養うことができたのであった。ったく、最初からこうしとけば良かったわ。

「ま、別にあの女を避けているワケじゃねーけどな。せめて営業時間くらい守れってんだ……」

独り言をぼやきつつ、裏通り抜け出て人里の往来を歩いていく。

数は多くはないものの表通りに沿って明かりが灯る。さすれば宵口の雰囲気と合わさって得も言われぬ情緒を醸し出す。行燈の滲んだ黄色が輪郭を浮かび上がらせ、軒先に吊るされた提灯が揺らり揺れる。果てはレトロなガス灯らしき街灯まであった。

って明治時代の初期か、此処は。何かもう色々と入り混じり過ぎて統一性ねぇよ。文明開化の音がすんぞオイ。

未だに慣れない時代錯誤な景観の中を、ひとまず中心地を目指して進む。やがて近付くにつれて人々の喧騒が聞こえてきた。なのだが……

「……!!」

「……――ッ!?　……ッ！」

「あ？」

イマイチ飲んで騒いでのドンチャン祭りってな感じがしない。どちらかといえば、言い争う怒声に近かった。んだよ、どうにも穏やかじゃねーな。

もしやと思い、僅かに足を速める。曲がり角を通り抜けた先には案の定、互いに胸倉を掴んで睨み合う男二人組の姿があった。

「馬鹿野郎どこ見て歩いてんだ!!」

「テメーの方からぶつかってきたんだろうがッ!!」

「……はッ」

場違いにも鼻で嗤っちまった。

何やこのテンプレ。どっちもどっちで既に酔っ払っており、酒気帯びの赤ら顔はあたかもタコのようであった。海に帰したろか。

上白沢女史曰く、人里の秩序は守られているそうだが。とはいえ人が集まって住めば、多少なりともいざこざは避けられないというも

の。ましてや、下手に酒が入ろうものなら度が過ぎた輩も出てくるだろう。まさにこんな風にな。一見平和そうでも毎週アンパンとバイキンが殴り合っている世界だってあんだよ。

もっとも、オレからすれば陳腐としか言えない在り来たりな場面でも、通りすがりの村人達には堪えるようだ。いつストリートファイトに発展してもおかしくない空気に竦み、ハラハラと狼狽える者ばかり。「誰か、慧音様を呼んで来い！」と騒ぎ立てる声を受けて、何人か走り去っていった。無情だが、彼らが戻ってくる頃にはもう手遅れなんじゃね？

この場をどうにかできそうな適任者は、一人。

「しゃーねぇ、黙らせるか」

早速こうなるとは、オレもツキが回ってきたか。言うても悪運の方だかんな。

そうそう起きないハズの人里の揉め事。そいつをこうも連続で引き当てるとは、もしや悪魔でも憑りついているのではなかろうか。ま、そうだったら面白いとさえ思えてしまうオレもオレで大概だわな。

さて、今にも第一ラウンドをおっ始めそうだし、ここは手っ取り早いやり方で片付けてやろう。ベストの内側に手を入れる。

――相手は二人。彼らにとっては幸か不幸か、今夜のオレは切り札を二つとも持ち歩いていた。

「――へぇ、そんなことがあったんだ。お客さんカッコいいね」

「フッ、この程度なんざ容易いこった」

お通しの枝豆を口に放り、その殻を小鉢に落とす。塩も使っていないのか。茹でただけなのだが、だからこそ素材の味が活きて美味い。日本酒の香りと炭火の煙が、さらに味わい深さを引き立てる。

月夜の下で、道端にひっそり佇むナニカの赤い灯を偶然見つけた。人里を後にしてあぜ道を散策していた折の出来事だ。

近付くと、その正体は居酒屋それも移動式の屋台だと分かった。今時にしてはあまりに珍しい。興味本位で暖簾を潜れば、すぐさま木目

調の褪せたカウンターが客を出迎える。古いが趣のある大正浪漫。
その店の雰囲気を気に入ったのもあり、ふらりと誘われるように一杯引っかけていくことにした。
「お客さんモテるでしょ?」
「生憎だが生まれてこの方、一度たりともそんな経験ねーよ。言わせんな恥ずかしい」
「えー、うそだぁ」
オレの話に相槌を打つのは着物姿の少女。名前をミスティア・ローレライといった。
小豆色に染めた反物から楚々とした和の風情を見出す。焦げ茶色の帯と合わさってなお、地味さなど微塵も感じさせない。どこぞの仙人を思い出させるピンク色のショートヘアに藍色の頭巾を被っており、少女でありながら女将スタイルがよく似合う。そして、彼女の背中には鳥類らしき羽がしっかりと広がっていた。
「あら、お酒が空じゃないの。もう一杯いかが?」
着物少女におかわりを勧められる。ちなみに、この屋台は彼女が一人で営んでいるそうだ。こちらに話しを振ったりしながらも調理の手は休めない。その手際の良さに感心してしまう。
個人的にはバーボンが好きなのだが、そもそも幻想郷に洋酒があるのかも定かではない。なかった場合は今後どうしたものかと悩みの種が芽を出した。
ま、此処の日本酒はやけに美味いし今日の晩酌はコレでいいだろ。しかも竹筒をグラスとして使っているのがまた風情がある。やってくれるじゃねーか。
「なら同じやつを頼む。一合で」
「はーい。それじゃ失礼して」
カウンター越しにうら若き女将からお酌してもらう。と、あやうく溢れて零れそうになり慌てて口をつけた。よく冷えた喉越しを追いかけて、喉の奥でカァッとした熱を発する。くーっ、この清涼感とアルコール分の繋ぎが堪らねぇんだよな。
「何か食べる?」

「あぁ、だったら刺身でも一つ」
「いいわね、ちょうど今日捕ったばかりの川魚があるのよ」
着物姿の少女がニコッとスマイルを咲かせる。
明るくて愛想も良し、そしてこの女も容姿が整っていた。彼女目当てに来る男性客も少なからずいるだろう。って、つくづく美人が多くねぇか幻想郷。オレはともかく女に弱いヤツが来たらどうなるんだか。
何となく、刺身だけでは物足りない気がしてきた。追加でもう一品ばかし欲しいところ。そう思い、オレは深く考えずにこう口走ってしまった。
「ついでに唐揚げか手羽先あたりも頼めるか？」
「……お客さん」
「ん――うおぉッ!?」
顔を上げた瞬間、ズバッ！と鼻っ柱に菜箸を突きつけられて目を疑った。この間僅か数秒足らず。き、急に何すんだオイ!?
身動き取れないオレに対して、営業スマイルを失くして女将が声を低くする。無論、箸はそのままである。包丁じゃなかっただけ救いがあるのかもしれないと、現実逃避せざるを得ない。
「あたしの背中見てわかんないかなー……これでも夜雀、れっきとした鳥の妖怪なんだけど。そんなのを前にして鶏肉料理が食べたいなんてデリカシーに欠けるんじゃない？」
「わ、わぁーった悪かったよ。今のなし、やっぱりフライドポテトにすっから」
「フライドポテト？　なぁに、それ？」
「……揚げ芋でお願いします」
苦し紛れに言い直す。「はいよろこんでー」と返事をして、再び笑顔に戻った夜雀が調理に取り掛かった。女将のお料理風景を肴にして、チビチビと日本酒を舐める。び、ビビってねーし！
しかし此処ではバーガーとポテトのセットは存在しえないのか。はたまたこの鳥娘が偶々知らなかっただけなのか。幻想郷の謎は尽きない。アメリカンな妖怪はいねぇのか……？

「〜〜〜〜♪」
リズミカルな包丁さばきを披露しながら、いつしか少女は歌を口ずさみ始めた。
女性らしい澄んだ歌声が酔い始めた耳に心地良い。聞き覚えのない歌だが、彼女が即興で作ったオリジナルというセンも有り得る。そういえばローレライつってたな。なるほど、その名の通りってか。
「上手いな、歌」
「ありがと。自分でも得意だとは思ってるけど、やっぱり誰かに褒めてもらえると嬉しいね。お客さんも歌は好き？」
「人並みには。まぁ何だ、歌声が綺麗な女は嫌いじゃねぇ」
「やだもう、照れるじゃない」
満更でもなさそうにはにかむミスティアを見て、不覚にもオレまで口元が緩んでしまう。
繁華街で過ごしていたときも、生演奏や歌姫のコーラスを聴ける落ち着いた店で、カウンター席でバーボンを飲むのが好きだった。それに、ああいう静かな雰囲気は依頼の話しをするにも持って来いなワケで。ほんの数日前までの日常が、やけに遠く感じる。
しばし物思いに耽っていたが、コトッと皿を置かれる音で意識が現実に帰ってきた。
「はい、お刺身。揚げ芋もすぐにできるから」
「ん、どーも」
醤油皿にワサビを溶かし、刺身の両面にたっぷり浸してから舌の上に転がす。確かな歯ごたえと、舌から鼻にかけて突き抜ける青い刺激が自ずと酒を進ませる。
人里から幾分か離れているおかげで他者のざわめきもない。耳に届くのはミスティアの歌声と、外に集う鈴虫の囁き。まるで静寂という水面に落ちた一滴の旋律。小波を揺らすようなほろ酔いに身を委ねる。
あぁ、良い夜だ。やはりオレの生き様はこうでなければ――
「見つけましたよ！　綿間部!!」
オレの時間、終了のお知らせ。

ここ数日ですっかり耳に馴染んだ女の声が、オレのすぐ真後ろから体当たりしてきやがった。言わずもがな、振り返ればヤツがいた。赤みがかった目をこれでもかと吊り上げて、プンプンと怒りを露わにする桃色の仙人サマのご登場である。

あと何故か知らんが、今夜は一段と不機嫌そうだった。言っとくがオレ何もしとらんやろ。

「よう、華扇」

「よう、じゃありませんッ！　一体どこに隠れていたんですか!?　昼間いくら探し回っても居ないし、道往く人に尋ねても知らないと返されるし……心配しちゃったじゃないですか!!」

「そらご苦労なこって……どっちみち、こうして見つかったんだからイイじゃねぇかよ。とりあえず落ち着けや」

「ダメです許しませんこのッ馬鹿者ぉお！」

「だーもう！　店で騒ぐなっつの！　せっかくのムードが台無しじゃねぇか」

「ムードですって!?」

ついさっきまでのセンチメンタルなひとときは、華扇が来たことによって瞬く間に霧散してしまった。これは酷い。大体、たった一日会わなかったぐらいでどんだけ大騒ぎしてんだよ、お前は。

そんなオレと華扇の喧しいやり取りを見兼ねたのか、女将が仲裁役を買って出る。

「まぁまぁ、二人ともケンカはその辺にして。それより仙人様もどう？　お腹空いてない？」

「むぅう……じゃ、じゃあ食べながらお説教ですからね。あなたには言いたいことが山ほどあります」

「っかー、おいマジか……」

口をへの字に結びながらも、華扇はオレの隣を陣取った。お互いの肩が触れ合いそうなほど隙間なく。いやどう見ても狭いだろうが。

「おい」

「……つーん」

どうやら彼女もこちらが言いたいことは察しているらしい。だが、

むしろ頑なに距離を広げようとしなかった。なんでやねん。あと、わざわざ声に出してつーんとか言うなや。

兎にも角にも狭くて動きづらいことこの上ない。もう一度だけ言ってやろうと……

「ダメ、ですか……？」

「ふぐぅ……ッ!?」

潤んだ瞳で見つめられ、ほんの一瞬だが頭が真っ白になった。

急にしおらしくなってしまった華扇の表情を目の当たりにして、変な声とともに口を噤んでしまう。そしてふと気付く。先ほどの彼女のセリフにあった一言に。

『心配しちゃったじゃないですか!!』

「……はぁあ。へーへー、好きにしてくれ」

「綿間部……はい、好きにさせてもらいますっ」

ったく、降参だ。そんなん反則だろ。

オレが白旗を上げると、桃色の少女はみるみるうちに顔に輝きを取り戻す。やれやれ嬉しそうなこって。ま、落ち込まれるよりかは百倍マシだけどよ。その調子で説教も水に流してくれればもっと有り難い。

「あーあ、酒が美味いぜチクショー」

とりあえず、真横と正面それぞれの女達から向けられるむず痒い視線を誤魔化すべく、オレは酒に逃げることにした。

思えば、こうやってこの女と飲み交わすのは三日振りか。ってまだ三日しか経ってないんかい！

つづく

第九話　「二日酔いにはラムネ菓子が効くんだと」

「聞きましたよ。喧嘩を諌めるためとはいえ、またあの鉄砲を使ったそうですね？　しかも今度は両成敗で、片方には刃物を喉元に当てたんですって？　そのことについて申し開きはありますか？　言い訳ぐらいなら許してあげます」

「うぉい……もう知ってんのか。ったく、耳が早いやっちゃな」

まさしく文字通りに駆けつけ三杯をあっという間に飲み干すや否や、「さぁ本番ですよ」と言わんばかりに華扇が据わった目つきをオレに向けた。傍から見ればあたかも絡み酒みたいだが、その実態はクッソ真面目なお説教タイムである。チクショウ、早速これかよ。ついてねぇ……

ま、全て事実だから訂正のしようがないんだけどよ。

華扇の鋭い眼差しから目を逸らし、オレはつい先ほどの出来事を思い返した。

「そこまでにしとけ」

「うわッ!?」

「な、なんだお前……！」

唐突に間に割って入った全身黒ずくめの存在に、一触即発の空気だった二人組が慄く。しかしながらそれも束の間に過ぎず。通りすがりが余計な茶々を入れてきたのだと察し、気色ばんだ男がオレに掴みかかる。

「てめ――っ!?」

ところが、ヤツの手はオレまで届かなかった。

「そこまでつってんだろーが。分かれやとっとこモブ太郎」

「うっ……」

伸ばしかけていた野太い腕が、まるで金縛りにあったかの如く虚空で固まる。もう片方の男も身動きが一切とれずに、かろうじてヒューヒューと掠れた呼吸音を漏らすのみ。そのうえ、彼らの額にはどちらも尋常じゃない量の冷や汗が滲んでいた。

原因は極めて単純明快。連中がどうこうするよりも先にオレが仕掛けたからに他ない。

ベストの内側から引き抜いた二つの切り札を左右の手で構える。黒光りするマグナムの銃口を一方の眉間に、そして尖ったナイフの切っ先でもう一人の喉元を狙う。もし少しでも動けば無残な末路を辿るハメになるのだと睨みを利かせる。

「テメーら、ケンカすんなら表でやれや。近所迷惑って言葉を知らねぇのか？」

観衆の中から「いや、ここ外なんだけど……」とか要らん一言が飛んできたが敢えて無視する。う、うっせぇな！　ちょっと黙ってろ！

かくしてオレの介入は酔っ払いコンビには効果覿面であった。酔いも怒りもすっかり冷めたようで、代わりに今にも失禁しそうな事態に陥っている。漏らすんじゃねぇぞ。

やがて両者の足がガクガクと震え出したのを見計らい、後は野となれ山となれ。突き付けていた得物を下げると、仲良く揃って腰を抜かして尻餅をついた。なお、股間は濡れていなかった。めでたし、めでたし。

さて、容疑者どもはほどなく来るであろう上白沢女史に押し付けるとして、この場はさっさと退散しちまうに限る。現に遠くから「こっちか!?」と知った女性の声と、あわせて複数の足音が騒がしく近付いてきた。あとは任せたぜ、人里の守護者サマ。事件は会議室じゃなく現場で起こってんだよ。

そういうワケで、人目を盗んでそそくさと人里を離れておく。

で、その矢先に夜雀が営む屋台に流れ着いたのであった。

「……フッ」

いざ回想を終えると何ともはや、我ながら上手くキメたもんだわな。やはりオレは夜に生きる男。

しかし、どうやら上白沢女史を含む駆けつけたメンツの中に華扇も混じっていたようだ。つまるところ、遅からず彼女には見つかる運命だったというわけか。ったく、どうしようもねーな。

溜息とともに、ベストの内側に手を差し込む。取り出したそいつは、屋台の明かりを受けてギラリと鈍い光で反射する。鏡のような銀色を宿した鋭利なモノ。刃渡り十センチにも満たない小振りなナイフが、その身を呈する。

すぐさま華扇の顔色が変わった。

「本当に持っていたんですね……あなたという人は……」

「お客さん、そういう人だったの……？」

これにはさすがにミスティアも引き気味であった。あるいはオレを野盗か通り魔あたりと勘違いしていそうな様子。まったくもって心外なことこの上ない。

「違ぇっつの。よく見とけ」

そう言って右手でナイフをしっかりと握る。その意図を察したのか、華扇がハッとした表情になった。

「――ッ！　綿間部、待って!?」

彼女の言葉にも耳を貸さず、刃物の先端を左の手のひらに躊躇いなく突き立てた。一気に柄まで達したのを目の当たりにして、その場に居合わせた二人の少女から悲鳴が上がる。

「バカッ何しているの!?　早く抜いて手当てしなきゃ！」

真っ先に我に返った桃色の仙人が、語気を荒げながらオレの左手首を掴み上げる。が、

「あ、あれ……？」

鬼気迫るほどに怒涛の勢いだったのが、数秒とかからず意気消沈してしまう。あげくには声に戸惑いが混じり出す。さもありなん、彼女が握り締めたオレの左手には刺し傷どころか掠り傷一つ見当たらない。カウンター越しに着物姿の少女も凝り固まったままでいた。

なんだよ、まだ分からんのかコイツ等は。もっと分かりやすくしてやるか。

今度は刃の切っ先を人差し指の腹に当てて、そのままグッと押し込んだ。ほんの一瞬だけ華扇が体を強張らせる。

少女達に緊張が走るのを揶揄するように、刀身が柄の中に徐々に沈んでいった。

『……』

「こういうこった。二人とも理解できたか？」

百聞は一見にしかず、あえて説明するまでもねぇだろ。皆さんもお分かりいただけただろうか。

刃のない刀身を出し入れすれば、その度に内蔵されたバネが伸縮するショボイ音ばかり繰り返される。酷いコントがあったもんだ。

すると、それまで唖然としていた華扇の顔つきに変化が生じる。口を横一線に結び、両頬がまるで風船のように限界まで膨らんでいく。さらに眉間にしわを寄せて肩を震わせ始めたあたりで、オレはさり気なく耳を塞いだ。

「こんのっ……馬鹿者ォオオオオオオオ!!」

怒りに満ちた少女の叫びが夜の屋台に響く。直撃を受けた女将が哀れにも被害を免れず、引っくり返りかけていたのが視界の端っこに映った。

「まったく、どうしていつもいつも物騒なやり方で強引に止めようとするんですか!!　少しは穏便に事を済ませようとは考えないの!?　あの時だって、私が止めたにもかかわらず撃ったりするし！　あ、八つ目鰻一つ。大体、今日も私が探してたのにコソコソと隠れて寝てるなんて、あまりにもだらしなさすぎです。不健全です。許しません。もっと規則正しく健康的に生きないと――」

「へーへー、おっしゃるとおりですねー……」

「真面目に聞きなさいッ!!」

というかお前、ちゃっかり注文しただろ。しかも途中から口撃対象がオレの生活スタイルに変わっとるやんけ。もはや収拾がつかない有り様で非常に辛い。誰でもいいから助けてくれ……

なけなしの願いが天に届いたのか、仙人サマの説教という荒波を掻き分けて一隻の助け舟が入った。ミスティアがオレと華扇それぞれの前に皿を置く。

「はい、八つ目鰻お待ちどうさま。冷めないうちに食べてね」

「……いただきます」

「お客さんには揚げ芋ね」
「ああ……恩に着る」
「いえいえー」
停戦協定。ようやく誰もが待ち望んでいた平和が訪れた。
やはり美味しい食べ物の力は偉大であった。濃厚なタレを塗した蒲焼きを一口でも食すれば、たちまち華扇の顔が幸せそうに綻ぶ。本当に美味そうに食うなぁコイツ。
こちらも負けじとフライドポテトに成り損なったモドキ料理に箸を伸ばす。油でカラッと揚げた後に塩で味付けしてある。チビイモを丸ごと一つ摘まんで咀嚼した途端、内部に蓄えられていた熱々の具が崩れて火傷を誘う。ハフハフと犬みたいな息をしつつ冷酒を煽って鎮火させる。それによって熱さと冷たさが絶妙に入り混じった後味の良さが残った。
僅かに説教が止んだのを目敏くも逃さず、女将が話しを振る。さすが客商売が上手い。オレとしても非常に助かった。ただ、含みのある企み笑いなのがどうにも気に掛かった。ぶっちゃけ良い予感がしねぇ。案の定、
「お二人さん仲良いね。もしかしてコレ？」
楽しげに言いながら、彼女は中指を立てた。
「いやどれだよ」
「あれ、何か違った？」
「言いてぇことは察しているけどよ。そりゃ小指だろーが、それだと意味が全然ちゃうわ」
着物が似合う少女からいきなり笑顔で中指を突き立てられたら、相手によっては泣き崩れかねない。間違ってもミスティア目当ての男性客にはやんなよ。一生モノのトラウマになるから。
なお、ジェスチャーの意味が伝わらなかったらしく、華扇は「？」といった具合で首を横に傾げていた。特に気にした風もなく、日本酒が入った竹筒を唇に重ねる。仙人サマは俗世には疎いようだ。もっとも、今はかえって好都合なのだが。
その様子を横目に見ながら、ミスティアが変な深読みをしないため

にも教えておく。
「ついでに言っとくが、オレとこの女は会ってからまだ三日しか経ってない。そうなる要素がまるでねーよ」
「ふーん……」
そう告げると、女将は何やら思案顔で腕組みし始めた。彼女もうら若き乙女故に恋バナに飢えていたのかもしれない。残念だが聞く相手を間違えたな。どう見ても明らかに人選ミスだろ。
と、ミスティアの瞳がキランッと光った。いかにも頭の豆電球が閃いたといわんばかりの明るい表情をみせる。あろうことか、彼女は見当違いにも華扇に向かってこんな話題を差し出した。
「ねぇ仙人様、知ってる？　お客さんって歌が上手な女性が好みなんですって」
「――――ッ!!」
刹那、彼女の肩がピクッと跳ねたような気がした。いや、恐らく見間違いだ。
その証拠に、華扇は落ち着いた所作で酒器をカウンターに置き、いかにも興味なさそうな態度で返した。
「へ……へぇ？　そうなんですか？　良いと思いますよ、ええ。ち、ちなみに私も歌には多少なりとも心得があるんですよ……？」
訂正、あからさまに挙動不審だった。お前どうした？
どこか明後日の方向に視線を彷徨わせて、棒読み且つ裏返った感じの声で何度も頷く仙人サマ。いや、どんだけオーバーリアクションしてんだ。オレまで反応に困るだろうがよ。
そもそも歌の上手い女性と恋愛したいとは一言も言っとらんし。ミスティアも拡大解釈すんなや。拡大し過ぎてえらいスケールまで広がってんじゃねぇか。
どうにも華扇にはこの手のネタは苦手そうに見える。ならば、ここは話題を逸らすのが賢明か。第一、オレの好みの女性タイプなんか知ったところで誰得でしかない。
それよりも華扇が歌を嗜んでいる方が興味深い。
「で、どんな歌が得意なんだ？」

「……和歌とか俳句です」
「……歌なのか、それ」
「い、いいじゃないですかっ!?　音楽だけが歌じゃないんですー！」
　明らかにジャンルが異なっているのを本人も自覚しているのか、華扇が頬を赤くして拗ねたように喚く。分かったから暴れんなっつの。ただでさえお前に詰め寄られているせいで狭いってぇのに。このままだと長椅子から転げ落ちんぞ。オレが。
　すっかりへそを曲げて一人でヤケ酒し始めた桃色の髪をもつ少女。しかし可愛い顔してよくあれだけ平気で呑めるもんだわな。しかも酔った素振りすらねぇときた。
　酒豪と呼ぶに相応しい飲みっぷりに感心しつつ、ふと何気なく思ったことが言葉となって出た。
「ま、お前の声なら和歌とか俳句も似合うだろうな。よく通るっつーか……凛としてて綺麗だし、耳に心地良い」
「……へ？」
「あらぁ」
　華扇が目を丸くし、ミスティアが口の両端を吊り上げた。
　実際のところ、彼女の声は張りがあって真っ直ぐなものだと思う。そのうえ仙人でもあり。優雅な言葉遊びをその声に乗せたらさぞ絵になるだろう。情景が容易に想像できる。奥の細道とか似合いそう。
　もっとも、日々の説教による賜物だとすれば何とも言えないところだが。いずれにせよ、いつか機会があれば彼女の歌を聞いたみたいというのは本音だった。言っただろ、綺麗な歌声は嫌いじゃねぇってな。
　しばし呆けたようにオレを見つめていた華扇だったが、ふいに相好を崩した。まるで花びらが春風とともに舞い散るように、柔らかく。
「……ズルい人」
「って、何でそうなんだよ」
「うるさいです、馬鹿者」
　嬉しそうに馬鹿者呼ばわりされるとは思わなかった。いや、マジで何でや。

相変わらず表情豊かな彼女の横顔を盗み見るが、まるで原因に心当たりなし。心当たりがない以上、いくら考えたってしゃーねぇ。ま、美人の笑顔を前にして損する男はいないだろ。

ともあれ、今夜もなんだかんだとあったものの、不思議と悪くない雰囲気だった。

そう、だった。過去形である。

元凶はコレだ。

「ところで仙人様、もう一つ聞いてくれる？」

「はい、何ですか？」

いつの間にやら上機嫌になってニコニコと笑顔を咲かせる桃色の仙人に、夜雀の女将が意味ありげな口振りで話しかける。

それが、終わりの始まりを告げる合図となった。

「さっきね、このお客さんったらあたしを見ながら『鳥が食べたい』なんて言ってきたの」

「……」

その瞬間、華扇が笑顔のままピシッと固まる。むしろ表情どころか全身が石化した。

何を思ったのか、着物姿の少女がわざとらしく己が身を庇うように細腕を前に回す。次いで強調するように内容を繰り返しやがった。

「こう、飢えた野獣みたいなギラギラした瞳であたしを見ながら『鳥が食べたい』って言ったんだから」

「オイ何で二回言った」

確かに唐揚げだの手羽先だの注文しかけたが、わざわざ華扇にチクるほどじゃなくね？　鳥心は複雑なのか。もしくは、もっと売り上げに貢献しろって意趣返しとか。とんでもねぇセールストークだな。って、幻想郷に来てから食費掛かり過ぎじゃねーか？

密かに財布の中身と相談しようとした時、ついにあの女が動いた。

「綿間部……？」

甘く蕩けるような声色が、オレの名を呼ぶ。この甘ったるい声のトーンも、間もなく来るであろうオチも、かつての経験から身を以っ

て知っている。確実にまたロクでもない勘違いしとるわコレ。
恐る恐る真横を見やれば、さらに笑みを深めた桃色の仙人がいた。美しい顔立ちもあって、事情を知らないヤツであれば見惚れていたかもしれない。だが無意味だ。
その直後、彼女が手にしていた酒器が脈絡なく砕け散る。もちろん笑顔のままで。まさか一発で握り潰したのか!?　どんな握力してんだ、この女!?
「お、おい……」
「うふっ、ふふふふっ」
いやフツーに怖ぇえーよ!?　目が笑っとらんがな！
包帯に包まれた右手から酒の名残りが水滴となってポタリポタリと落ちる。蛇どころか鬼に睨まれた気分だった。どうにか弁明しようにも、この期に及んで口が上手く回らない。そうか、コレが恐怖か。
とうとう可愛らしい笑みが一転した。般若の幻影を背に纏い、憤怒の形相に染まった中華衣装の少女が感情を爆発させる。同時に拳も突き出してきやがった。
「こんのっケダモノォオオオオオオオ!!」
「へぶしっ!?」
真っ直ぐな正拳は微塵も外れることなくオレの顔面を的確に捉え、その威力から場外まで吹っ飛ばされる。星空の下、あぜ道の上で伸びているオレを気にも留めず、鈴虫どもが夜更けまでコーラスを続けていた。
その後、鳥というのがミスティア本人ではなく鶏肉料理のことだと知り、またしても早とちりしたと気付いた華扇が羞恥で真っ赤になりながら、「ややこしい！」と説教を垂れるのだが。
普段から酔っ払い客をあしらうので慣れている女将にはさして効果なく、笑って聞き流されるのであった。ドンマイ。
ちょい待て、ひょっとしてオレだけ殴られ損じゃねぇのか……？

つづく

第十話「ＲＡＮＳＡＭＡ　×　ＬＡＮＳＡＭＡ」

　些か早起きし過ぎてしまったらしい。外に出て、そう気付いた。
　まだ日は沈み切っていなかった。オレンジ色と薄紫色が入り混じった斑模様の空が広がる。表通りでは今晩の献立を考えるお袋さんが、店先に並べられた野菜だの魚だの見比べている。子ども達は遊び疲れて家路を急ぐ。
　夕暮れ。さながらオールウェイズ三丁目の夕陽といったところか。もっとも、妖怪が実在しているあたり昭和もクソもあったもんじゃねぇけどな。
　仕事を始めるには微妙に早い気もするが、たまには勤勉になってみるのも悪くない。
　ここ数日で馴染みつつある人里の往来に身を投じる。さぁ今日も地道に働くとするか、などと柄にもないことを思いながら。はたしてこれも華扇の影響なのだろうか。
　ところが、行き交う人はどれも主婦ばかりで、オレの出番となる展開は望めそうになかった。やはり、せめて一時間くらい遅らせてから出掛けるべきだったかもしれない。数秒前までの考えをあっさりと覆しそうになる。
　労働意欲に目覚めたかと思ったが、やっぱいつも通りだったわ。
「なんだ、アレ……？」
　そんな折に、買い物客の中に異彩を放つ存在を見かけて、思わず足を止めた。
「九尾の……狐？」
　かの者、黄金色に波打つ毛並みの房が九つ。いずれも一本一本が相応の大きさをもつため、真後ろからだと肝心な本人の姿が隠れてしまう。
　尻尾の持ち主は豆腐屋で品定めをしているようだった。しばらく成り行きを観察していると、どうやらお眼鏡にかなったらしく、品物と金銭の受け渡しを済ませてこちらを振り返った。はた、と互いの目が合う。やべぇ、ガン見しちまったか。

「そこな御仁、私に何か用かな？」
涼しい声が当人の口から発せられる。その妖狐は女だった。
青い前掛けと合わせた道着を彷彿とさせる服装。九つの尾と同じく黄金色の短い髪に、八雲紫や橙と似通ったデザインの帽子を乗せている。もしかして幻想郷で流行ってんのか、そのデザイン。
上白沢女史に近い口調もあって、彼女からも聡明そうな印象を受けた。人里の守護者が歴史に博したタイプだとすれば、こちらは数式に秀でたタイプとでも表そうか。
「すまねぇ、九尾の狐を見るのは初めてだったもんでな。特に用事があったわけじゃねーんだ」
「そうか。人里にはそれなりに顔を出しているのだけれど、まだまだ私も新参者ということか」
この場は素直に謝っておく。幸いにも、本人はさして気にした様子もなかった。静かに笑う動作がどことなくインテリ染みている。あれだ、世にいうイケメン女子ってやつか。
「それを言ったら、むしろオレの方が新参者だろうよ。なんせ、幻想郷に来てから日が浅いし」
全くもって自慢にもならんが、こちとらやってきてからまだ一週間も経過していないのだ。ブッチギリの新顔なのは間違いあるまい。
「なるほど、外来人だったのか。はて、その黒い服装で外来人……？ひょっとして、お前が黒岩？」
「知ってんのか、オレを」
まさか初対面の相手、それも九尾のお狐様から名前を当てられるとは。一体どういうカラクリだというのか。いつの間にか何でも屋としての知名度が上がっていた？　それこそまさか。まだ荷物運びと猫探しくらいしかしてねーぞ。自分で言ってて酷いなオイ。
疑心と僅かな警戒心が渦巻く。謎かけの答えとなったのは、こちらも知っている意外な人物の名だった。
「紫様が面白い外来人を招き入れたと仰っていてな。その際に聞いた特徴と重なったから、もしやと思ったんだ。やっぱりそうだったか」
自らの推理が見事的を射たのがお気に召したのか、女狐は満足げな

表情をみせた。って、いくらなんでも女狐だと言葉が悪過ぎるだろ。語弊を招く恐れすらあんぞ。

「あんた、ミス八雲の関係者なのか？」

「これはすまない、申し遅れた。私は八雲藍、紫様の式神さ」

「式神……？　ってぇことはマヨヒガに居た猫っ子と同じか」

山奥に住んでいたちっこい猫娘を思い出す。すると、オレの呟きに反応して八雲藍が「ああ！」と顔を輝かせた。合点がいったと言わんばかりに、

「橙が言っていた男というのもお前だったのか」

「オイオイ、あいつとも繋がんのかよ」

「あの子は私の式神だよ。臆病なところがあってね、私や紫様以外から褒められる機会が少なかったんだ。そんなあの子が、この間『人の役に立てた』と大層喜んでいたものでな。フフフ、私も鼻が高いよ」

「そら良かったな……って、つまりオメーが噂の乱射魔ァアア!?」

「ら、乱射魔……？」

大袈裟に指を差して仰け反ったオレを前にして、八雲藍もとい乱射魔が困惑気味の様相を呈する。何のこっちゃと言いたげな顔だが、オレからすればそれどころの騒ぎではない。

なんと、想像とは全然違った。筋肉質な益荒男どころか賢明な美女じゃねーか。そもそも九尾の時点で気付くべきだった。藍様が舌足らずになってらんしゃまだったというオチかよ。紛らわしいなチクショウ！

しかし、八雲紫の従者で橙のご主人様とはコイツもキャラ濃いな。つーか、式神が式神を持つのありなんか。何気なく視線を彼女が持つ手提げ袋に落とす。すぐそこの豆腐屋で買ったと思しき油揚げが顔を覗かせていた。さすが狐、期待を裏切らない。

八雲紫と橙のダブルネームの効力は予想以上に大きく、それから八雲藍が親しげに世間話を振ってきた。乱射魔については聞かなかったことにしてくれるらしい。

「ところで、幻想郷での暮らしはどうだい？」

「悪くねぇぜ。つっても、せっかく仕事しても報酬がすぐ食費に消え

ちまうせいでイマイチ稼げねぇのが辛いわな」
「フフッ。なんだ、見た目のわりに大食漢なのか」
「いや、オレじゃねーんだけどよ……」
「？」
おもむろに暗い影が差した面構えになったオレをみて、お狐様が首を傾げた。こっちにも色々あんだよ。
桃色の少女が脳裏にチラつく。笑ったり怒ったりと表情豊かな仙人に振り回されたのは、一度や二度ではない。
「ふむ、そういう事情なら私からも一つ依頼を出そう」
「依頼だと？」
一つ頷いて、彼女は手提げ袋の奥底から木箱を取り出した。小さいガキんちょが両腕でギリギリ抱えられるぐらいのサイズだろうか。祝い事や贈呈品にありがちな、上質そうな白木が用いられている。
そのまま仕事の内容について話しが進んでいく。
「今夜、博麗神社で宴会が行われる。さしあたってコレを博麗の巫女まで届けてほしい。決して壊したり失くしたりしないように。無論、くれぐれも取り扱いには注意してくれ」
しっかりと蓋が閉められており、歪みのない直方体が象られている。神社が届け先だとすれば、恐らくは神器の類いと察する。さぞ貴重な逸品がこの中に眠っているに違いない。
「中身を聞いてもいいか？」
「そこは内密にさせてもらうよ。その方がお前らしいのだろう？」
「フッ……よく分かってんじゃねぇか」
含み笑いをみせる九尾狐にオレも同様の笑みで応える。この女、意外にもノリが良い。いいじゃねぇか、気に入ったぜ。
そうそう、こういう依頼を待ち望んでいたんだよ。シークレットでワケありな、そんな裏事情が錯誤するスリルが堪らない。この仕事、断る理由など一切なし。なぜならオレは夜に生きる男。
二つ返事で依頼を引き受ける旨を伝える。その後、彼女は懐から少なくない額の金銭をこちらに寄越した。
「前払いだ。これくらいでいいかな？」

「オイオイ……随分と気前がいいじゃねーの」
「この仕事にそれだけの意味と価値があるということさ。博麗神社は東方にある。人里を出たら道なりに進むといい。今から発てば丁度良い頃に着くはずだ。頼んだぞ」
「了解、博麗神社か」
「外来人なら知っておいた方が良い。あの場所が『外』に帰るための正規ルートでもあるからな。いつか黒岩にも必要になるだろう」
もしかして、その辺も見越したうえでオレに今回の仕事を任せてきたのか？　もしそうだとしたら、至れり尽くせりでしばらく頭が上がらないんですけど。前払いで結構な金額くれるわ、わざわざ博麗神社が関わる依頼をしてくれるわ、なんとも有難いお狐様であった。八雲藍、その正体はお稲荷様だったとかじゃねぇよな……？
ともあれ、幻想郷に来て初の大口取引が舞い込んできたワケだ。こいつを逃すわけにはいくまい。宴会に間に合わなければ元も子もなし、彼女の助言通りに早いうちに出発すべきだろう。
「で、あんたも宴会に行くのか？」
「まあね。せっかく油揚げも買ったことだし、稲荷寿司でもこしらえてから向かうとするさ」
「あ、そゆこと」

夕焼け小焼けで日が暮れて。カラスが鳴いたらいざ出陣。
草木と石ころしかない田舎道を一人でトボトボと歩み行く。しかしながら、こうも徒歩移動が続くとなると、バイクの一台でも欲しいところだ。もっとも、此処ではチャリですら存在するのか危ういのだが。さすがに馬に乗って走らせるなんて真似事だけは勘弁願いたい。こちとら暴れん坊将軍でもナポレオンでもねぇんだからよ。
九尾狐に託された木箱を小脇に抱えて、ひたすら博麗神社とやらを目指す。あと、運んでみて分かった。コイツ予想に反して結構重い。余計に中身が気になってくるところだが、依頼の品を無許可で開けるなど何でも屋としての沽券に係わる。
そういえば、今日は華扇と会っていなかった。ま、たまにはこうい

う日もあるだろ。
「って、なーんでオレが気にしてんだか……」
シニョンと中華衣装の仙人のことを考えていた、まさにその時だった。
「――ッ！」
突如、お世辞にも良いとはいえない視線を感じ取った。狙われているのは……荷物か!?
咄嗟に横っ飛びで今しがた自分が立っていた位置から距離を取る。まるで姿はないが、何かが飛び付こうとした気配だけは伝わってきた。オレが躱したおかげで空振りに終わったようだが。
八雲藍の言葉を思い出す。
『決して壊したり失くしたりしないように。無論、くれぐれも取り扱いには注意してくれ』
ったく、取り扱い注意ってそういうコトかよ。他者に奪われないようにしろとか、そこら辺の意味合いも兼ねていたと。前払い報酬の高さにも納得がいった。
フッ、上等じゃねぇか。要するに早速お出ましってワケかい。

つづく

第十一話　「初代ゾイドでは仲間に運び屋の女キャラがいた」

殺気こそ感じられなかったものの、運搬中の品物が狙われたことについては疑う余地もない。何処の誰だか知らんが、生憎だったな。この手の輩は繁華街にいた頃から相手してんだよ。

木箱を持っていない側の片手をベストの内側に差し込む。二つ目の切り札を取り出し、不可視の襲撃者に向けて見た目だけなら鋭い切っ先を突きつけた。その直後、

「ひいっ！」

「わぁっ!?」

「きゃうっ！」

「……あ？」

やけに幼い声が三つほど聞こえてきた。

さらに、まるであぶり出しのような現象が目の前で起こり始める。無色から半透明を経て、犯人の姿が浮き上がる。あやふやだった輪郭が次第に確かなものになっていく。

不可視の襲撃者の正体は小さい子どもだった。その数は声と違わず三つ。外見をいうならマヨヒガの猫娘とそう大差ない年頃になりそうだ。ついでに、三人とも身を寄せ合ってアワアワと口を震わせている。

なんとも予想外な結果に拍子抜けしてしまう。んだよ、ただのチビじゃねーか。身構えて損しちまった。

オレが脱力する一方で、件の三ガキは怯えながらも口々に言葉を放った。

「ごっ、ごめんなさいぃ……」

「命だけはぁ……」

「出来心だったんですぅ！」

ちょい待て。今のオレって、傍からは怖がるガキどもを脅しているキチガイに見えるんじゃね？

これはマズい。それこそ華扇にでも見つかろうものなら拳骨そして説教の連鎖は免れない。慌てて周囲を確かめるが、幸いヤツの姿はなかった。

別の意味で安堵しつつ、ナイフ（ただし切れ味は無）をベストの内側に仕舞う。

「で、何やオメーら」

野盗にしちゃエラく可愛らしい。十中八九、適当にイタズラするつもりだったのではなかろうか。ったく、遊び相手はよく選べや。

オレが問い質すと三ガキのうちの一人、あたかも太陽のような明るめの髪を左右に括った少女が、ガチガチに緊張した声を張り上げた。

「わわわ、わたしたちっ！　よ、妖精です！」

「妖精だぁ？」

オウム返しに尋ねれば、残り二人もコクコクと凄まじい勢いで首を縦に振った。確かにコイツらの背中を見れば、いかにもそれっぽい薄い羽が付いている。どこぞの夢の国にいるマスコットキャラみたいなやっちゃな。しかし妖怪の次は妖精ときやがったぞ幻想郷。次は何だ、神ってか？

さらに、二つ結びの発言に続くかの如く他二名も後を追った。自分達の狙いを洗いざらい白状する。

「人間がたった一人で歩いているのが見えたから、ちょっとイタズラしちゃおうって……」

「お兄さんが持ってる木箱が急になくなったらビックリするかなって……」

「……ま、そんなこったろうと思ったわ」

『ご、ごめんなさい!!』

ジロリと見下ろせば、ちんまいガキのくせして三人とも立派な土下座を披露した。

オイ止めろ、誰かに見られたらオレが誤解されんだろうが。年端もいかない少女達に道端で土下座させたクソ野郎になっちまうわ。表を上げい。

どうにか土下座は止めさせたものの、未だに正座を崩そうとしない

三ガキに内心溜息を禁じ得ない。
どこぞの仙人じゃあるまいし、別に説教するつもりは欠片もねぇわな。所詮はガキの戯れ。吐き気を催すほどの邪悪ではない。
「まぁ何だ、こっちもやり過ぎた。仕事中でスイッチ入ってたもんでよ」
「お仕事……ですか？」
栗色の髪を縦ロールにした白い服の妖精が、オレを見上げて聞いてきた。どことなく、ちょっとだけ鈍そうな子だ。こう、一人だけ逃げ遅れたり何もない所でコケたりしそうっつーか。
縦ロールの質問に木箱を示しながら答える。
「コイツを博麗神社に持っていくんだよ。今夜中にな」
「そういえば、今日は宴会だったっけ……？」
黒髪ロングの子がポツリと呟く。と、妖精トリオは顔を見合すや否や、その場でトライアングル陣形になってヒソヒソ会議を始めやがった。ここまで堂々とした内緒話も珍しい。いくらなんでもオープン過ぎんだろ。全然隠れてねぇよ。いっそコイツらをこのままスルーして先に進んじまうか？
そう考えて逃走するタイミングを見計らう。と思いきや、さして時間を置かずにまたもや三ガキが横一列に並んで正座した。ただし、今度は熱意の籠った眼差しをこちらに向けて。なんつーか、このあとのオチが読めるわ。
その予想は的中し、
「じゃあじゃあ！　私たちお手伝いします！」
ツインテールの子が、どこまでも平坦な胸を張って高らかに宣言した。
「神社まで案内します！」
黒髪ロングな子が、気合に満ちたガッツポーズで両こぶしを握った。
「お守りします」
縦ロールの子が、任せろと言わんばかりにフンスッと息巻いた。
『だからイタズラのこと誰にもバラさないでくださいッ！　お願いし

ます!!』

そして、三人が声を綺麗にハモらせて再びその場に土下座した。

だから止めろと言ってんだろうが！　お前らそんなにオレを逮捕させたいのか!?

ふいに、目が笑っていない絶対零度の微笑みとともに、甘く蕩けた声でオレを呼ぶ桃色の仙人のビジョンが浮かんで、一瞬にして背筋が凍った。なしてオレが悪いみたいになってんだ……

この様子じゃ意地でもついてくる気満々みたいだが、それを許可する前に一つ気になることがある。こんな全方位がガラ空きの場所でいきなり現れたことと、先ほどの浮き出るような登場の仕方について。

ひょっとして、

「オメーら、姿を消せるのか?」

オレが問うと、妖精トリオは正座ポーズから一転して意気揚々と立ち上がった。揃いも揃ってドヤ顔というオマケ付きで。かくして各々が名乗りを上げる。

「サニーミルク！　光の屈折を操って姿を消せるわ！」

「スターサファイアよ。私の能力があれば生き物の居場所が分かるわ」

「ルナチャイルド、周囲の音を消せるの」

いきなり自己紹介を始めやがったぞこのガキ共。

ツインテールの先ほどからやたらハイテンションなのがサニーミルク。黒髪ロングでリボンも服も青ベースなのがスターサファイア。何となくだが、こっちは他の二人より賢そう。ただし、ちゃっかりしているとか狡賢いとか、そういう方面で。そんで、縦ロールのドジッ子そうなのがルナチャイルドか。

って、今思ったんだけどコイツら案外に有能なんじゃ……?　つまり三人で連携すれば、姿を見えなくして音も消せてさらに周囲のサーチもできるってんだろ。マジモンのステルスやんけ。

言い方は悪いが、この依頼においては大いに使える連中ではなかろうか。それに、「要らないから帰れ」と突っぱねようものなら、泣いて

縋りついてきそうな勢いしてやがる。こんな場所で押し問答している時間も惜しい。

ならば、ここは一つ、試しに任せてみた方が手っ取り早いかもしれない。

「わぁーった。誰にもチクッたりしねぇから、しっかり道案内と護衛すんだぞオメーら」

『はーい！』

子どもらしい元気な声で返事をする三妖精。一応といえど、妖精の加護が身に着いたってか。

しかしながら、子連れの道中は決して容易いものではなかった。そのことをオレは早々に知るハメになる。

再出発してから十分と経たずに、

「ぎゃあ！　犬がこっち見てる!?」

「音は消せても匂いまでは消せないのー！」

「お、お助けぇ～」

「だーッ！　よじ登ってくんなお前らァ!!」

折り返し地点まで行き着いたところで、

「お地蔵様だ」

「いつ見てもハゲねぇ」

「違うわ、スキンヘッドよ」

「フツーに坊主頭って言えよ……なんでちょっとロックに言い直してんだ……」

ようやくゴールの兆しが見え始めてきた頃には、

「宴会、宴会ッ♪」

「お酒、お酒ッ♪」

「ごはん、ごはんッ♪」

「えいえいおー♪」

「オイ今なんか無意識に一人増えてなかったか？　オレの気のせい？」

ちょっと進むごとに立ち止まっては、何かしらのイベントが発生するという状況。そのせいで、なかなか先に進むことができず無駄に時

間を食ってしまった。なんやこのスゴロク。しかも、
「ワタナベさん、こっちー！」
「もうすぐ博麗神社よ、ワタナベさん」
「ワタナベさん」
「へいへい」
いやもう慣れているから敢えて何も言わねぇけどよ。
黒岩が通り名であることをうっかり口走ってしまったのが運の尽き。三月精（三妖精のグループ名称らしい）から本名を教えてくれと駄々っ子みたいに強請られて、仕方なく綿間部将也と名乗った。そして案の定、間違って覚えられる。
やがて、寄り道だらけの珍道中も終わりを迎えて、いよいよ博麗神社の入り口にあたる場所まで辿り着いた。なのだが、オレの顔色はイマイチ優れなかった。なぜならば、
「……で、コレを今から上るのか」
「うん」
サニーミルクが無慈悲且つ無邪気に肯定する。それを受けて渋々と前を見上げる。
無駄に長ったらしい石段がびっしりと最上階まで続いていた。これがスポ根マンガだったら過酷な筋トレに使われるであろう険しい道のり。上からの眺めはさぞ良い景色に違いない。現実逃避の遠い目になってしまう。
こんなん参拝客だって諦めて帰っちまうだろ。修行僧じゃあるまいし。大丈夫なのか、この神社。つーか、これを乗り越えて宴会するとかどんだけ猛者の集団なんだよ。元気有り余り過ぎだろーが。もはやツッコミが追い付かんわ。
とはいえ、予定より遅くなってしまったのもまた事実。今や完全に夜の真っ只中である。恐らくこの上では既に始まっている頃だろう。
「しゃーねぇ、行くか」
『おー！』
「……お前ら、マジで息ピッタリだな」
さすが三月精。日と月と星の名をそれぞれ冠する仲良し三人組は

伊達ではないってか。途中で子どもらしい口喧嘩もあったが、それさえも微笑ましい。ま、おかげで時間も押してんだけどな！

よし、と気合を入れ直して初めの一段に足をかける。あとは休まず振り返らず一気に上り詰めるまで。妖精どもはフワリと空中に浮いて、オレに続いた。

「……」

だよなぁ、羽あんだからそら飛べるわな。得も言われぬ理不尽さに、終ぞ言葉が出なかった。

「ぜぇ……ぜぇ……おぉ、やってるな」

最後の一段を上り切ったその先は、あたかも縁日の会場のようであった。

境内の広さを存分に活かした眺めはこれまた圧巻で、まさに宴会と呼ぶに他ない。あちらこちらで個性豊かな少女達が、沢山の酒や料理を前にして大いに盛り上がっている。

目の前に広がる光景を端的に表すのであれば——彩り。

いつの間にかサニーミルク達はどこかに飛んで行っていた。どうやら友達を見つけたらしい。見れば、三人と同じくらいの背丈をした青髪と緑髪のガキんちょに突撃するところだった。次に会った時に駄菓子の一つでも奢ってやろう。経緯はどうあれ、仕事を手伝ってくれた駄賃だ。

「さて、と」

であれば、オレはオレで最後の仕上げを済ませるとしよう。例の博麗の巫女とやらにこの木箱を届ければ依頼達成である。この場を取り仕切っているのだとすれば、あの辺に居そうだと目星を付ける。

賽銭箱がある方へと進むと、三人の少女が段差に腰かけていた。そして驚いたことに、その中に見知った顔があった。今日は遭遇していないと思ったが、こっちに来ていたってぇのか。

オレが近付くと向こうもこちらに気付き、目を見開いた。赤みがかった瞳に、柔らかな桃色の髪が夜風になびく。

「……綿間部？」

「よう、また会っちまったな」

手前で言っておきながら笑えてくる。本当に、コイツと会わない日が未だに無いのってが不思議で仕方ねぇわ。まったく、どうなってんだ？

オレと彼女――茨木華扇の間には、何か見えないチカラでも働いているのかもしれない。

つづく

第十二話　「登場キャラは全員二十歳以上の設定って逆に苦しくない？」

「知り合い？」

華扇と一緒にいた少女の片割れが彼女に尋ねた。石段に腰かけたまま、じっと桃色の仙人を見やる。こくり、と仙人が頷いて肯定した。

「ええ。彼は外来人なのです。綿間部、彼女が博麗の巫女です。博麗の巫女については前に説明しましたよね？」

「博麗霊夢よ。そこの仙人が言った通り、この神社で巫女をやってるわ」

「巫女……ねぇ」

不躾ではあるが、顎を指でこすりながらまじまじと件の少女に視線を送る。

確かに紅白の衣装を身に纏っているあたり、それらしくもある。手首に行くほど垂れ下がっていく幅広い袖口や、袴に近しいスカートの作りからも、一応と呼べるぐらいには巫女の残滓が伺える。

しかしながら、ノースリーブで脇が露出していたり、セミロングの黒髪に大きく目立つ赤いリボンを結んでいたり。些かアレンジが効き過ぎなのはいかがなものか。幻想郷の巫女服はこういうデザインがデフォルトなのか？

さらに、博麗の巫女の自己紹介に合わせて、もう一人の少女も名乗り出てきた。黒いトンガリ帽子の下から長い金髪を伸ばし、白いエプロンを巻いたモノクロの衣服を着こなした身なり。まさしく、

「私は霧雨魔理沙だ。魔法の森に住む普通の魔法使いだぜ」

「だろうな」

誰がどう見たってそうだわな。しかも、だぜ口調のボーイッシュな魔女っ娘ときた。小さい子から大きなオトモダチまで誰もが大興奮する変身モノの魔法少女ではなく、童話の絵本に出てくる魔女スタイル。溌剌とした雰囲気もあってか、元気に外を走り回ってそうな印象を受ける。

博麗霊夢も霧雨魔理沙も明らかに未成年であるにも関わらず、さも当然のように酒を飲んでいやがった。もっとも、異世界で日本の法律を当てはめるだけ無駄であろう。

ま、オレも成人する前から呑んでいたし、人のこと言えねーか。

互いに名前を告げ終えると、華扇の赤みがかった瞳が再びこちらを向いた。

ちなみに、オレが何でも屋であることを告げた時、紅白娘は「妖怪退治は私の仕事よ！」と言い張り、白黒に至っては「商売敵だぜ！」などと言い始めやがった。どうやらそこの金髪っ娘は魔法の森で似た商売をしているらしい。適当に聞き流したが。

「ところで、どうして此処に？」

「仕事だ。九尾のお狐様にコイツの配達を頼まれてんだよ」

小脇に抱えていた木箱を見せつける。すると、博麗霊夢の表情がパァッと輝きを増した。かと思えば、飛び付くようにブツを引っ手繰られてしまう。とても神仏に仕える乙女とは思えぬ所業。別にいいけどよ。どのみち届け先はお前だったし。

ウキウキといった具合で紅白衣装の娘が声を弾ませる。

「これこれ！　この日をずっと待っていたわ。紫から話を聞いちゃったせいで、どうしても一度くらいは飲んでみたかったのよ～」

「あ？　飲んでみたかった？」

どこか不自然なセリフに反応してしまう。てっきり祭事に使う神器なのだとばかり思っていたが。

オレの疑惑などお構いなしに、少女は鼻歌交じりに紐の結びを解いていく。さながら玉手箱の如く蓋を開き、ついに中身が明かされる。

均整のとれた曲線を描きつつも、ズッシリとした重量感を放つ佇まい。焦げ茶色の全貌に映える筆記体で綴られたラベルからは、厳かさと親しみ易さを感じる。

霧雨魔理沙がゴクリと喉を鳴らした。月下の元に晒された一本。其は――

純米吟醸酒　『八海山』

「って、酒かよ！」

「？　宴会なんだからお酒に決まってるじゃない」
　何を当たり前のこと言ってんだコイツ、とでも言いたげな顔で博麗の少女はオレを見た。何だこの敗北感。
　そら取り扱い注意だわ。ワレモノですから。つまりオレは此処まで後生大事に酒瓶を運んできたってぇのかよ。幻想郷じゃ向こうの酒は珍品だった模様。元の世界だったらフツーに買えるわ。
　ラン姉ちゃんよぉ……初めてのおつかいにしちゃ駄賃奮発し過ぎだろうが。くそ、知りたくなかった真実を見ちまった気分だぜ。
　巫女と魔女は早速とばかりに栓を抜いて飲み始めている。早ぇよ。まぁいい、結果どうあれ依頼達成したことに変わりなし。だとすれば、此処に留まる理由もなかった。
　無言で踵を返すと、目敏く気付いた華扇が声をかけてきた。
「もう帰るんですか？」
「何よ。どうせなら宴会に参加していけば良いじゃない。今更一人増えるくらいどうってことないわよ」
「そーそー、お酒は皆で楽しく飲もうぜ！」
　仙人少女に続いて紅白と白黒も誘いの言葉を投げてくる。彼女達もオレが加わったところで気にもしないのだろう。つくづく幻想郷の輩は大らかなヤツが多い。
　しかし残念だが、この場は辞退させてもらう。なぜならば、
「勘弁してくれ。どう見ても女子会じゃねーか」
　つまり、そういうワケだ。
　周りを見渡してみる。ここに居る三人だけならいざ知らず、ざっと何十名は届くであろう女性陣が境内に集っていた。こちとら女子会に迷いなく飛び入り参加できるほど、チャラい生き方してねぇんだよ。
　あっさり断られたその理由を聞いて、博麗の巫女が「ああ」と手を打った。
「大丈夫よ。ちょっと遅れているみたいだけど、もうすぐ男の人も来るはずだから。それなら問題ないでしょ？」
「いや、どんなハーレム野郎だよ……色々と度胸あり過ぎんだろ、そい

つ」

「うーん……むしろ一途な感じだぜ？　なにせ、私達の親友が想いを寄せる相手だからな！　もちろん悪い奴じゃないぜ。まー、女の子に弱いってところは認めるけど……」

「そいつも外来人だし、話が合うかもしれないわよ。会ってみれば？」

新たな情報をエサに再び誘いを受ける。お前ら良い奴らだな。

オレ以外にも幻想郷に飛ばされた人物がいるというのは、全く気にならないといえば嘘になる。が、それとこれとは話は別というものだ。つーか、わざわざ女子会に混ざっておきながら見ず知らずの男を待つとか、どう考えても気色悪いだろうが。

結論、やはり俺の意思は変わらず首を横に振った。

「別にいい、お前らはお前らで楽しくやってた方が良いだろ。じゃ――」

あとはヨロシクと、今度こそ立ち去ろうと一歩踏み出す。

ところが、どういうわけかそこから先に進むことができなかった。その原因はすぐに分かった。誰かに引き留められてしまっているらしい。それも物理的な意味で。包帯に包まれた細い手が、オレの左手を離すまいと繋ぎ止めていた。

白のシニョンを飾る少女が、あたかも瞳を覗き込むようにオレを見上げる。ポツリ、と。寂しそうな声が零れた。

「本当に、帰っちゃうんですか……？」

「……オレが居たってしゃーねぇだろ」

もうじきイレギュラーな存在が来るみたいだが、かといってオレまで女子会に居座るのはどうかと思う。やるならせめてもうちょい男女比を調整してほしい。

言っておくが、ヘタレとかそういう類じゃねーぞ。オレなりに空気を読んだんだよ。分かってくれや。

しかし、華扇は一向に手を握ったままで緩めない。それどころか、やけに一生懸命になって交渉もとい説得まで試みてきやがった。何でやねん。

「綿間部、聞いてください。何事も情報集めは大事でしょう。幻想郷

に住む顔ぶれは覚えておいて損はありません。丁度、この場に来ているのは名の知れた者ばかりです。そうなると、今後のお仕事にも関わってくるんじゃないですか？」

「そりゃごもっともなこって。けどなぁ……」

華扇の熱心な誘い文句を受けてもなお渋る。どうしたもんかと後頭部を掻いた。これならオールバックな髪型は崩れない。

ほんの数秒でしかない、僅かな間が経つ。やがて、今にも消え入りそうな小声が耳に触れた。

「……やっぱり、帰るの？」

「ぐ……っ」

握られた力はそれほど強くない、むしろ弱いぐらいだった。とても竹の酒器を握り潰した輩とは思えない。今なら振り解くことも容易いだろう。けど、それだけは絶対にしてはいけない気がした。

まったく、いつの間にかオレも甘くなっちまったもんだなぁ……

舌打ち――は行儀が悪いので、いつもながらの溜息一つで白旗を上げる。

「ま、キャラ濃い連中にオレの存在を知らしめるっつー野望もあったし、仕込みしとくのも悪くねぇか。つっても、今日は隅っこでコッソリ様子見するだけだかんな。何度も言うが、オレは女子会のド真ん中に飛び込むほどチャラくねぇぞ」

「綿間部……！　はい、それならあっちに行きましょう♪」

「オイどこまで行く気だ？　つーか、いつまで手ぇ握ってんだ!?」

ちょいと前までとは打って変わって、幸せな笑顔を取り戻した仙人サマがいやがった。彼女は意気揚々と立ち上がり、そのまま何処へとオレを引っ張っていく。まったくもってゲンキンなやっちゃな。あと、なんで未だに離さねぇんだ。別に逃げたりせんわ。

現在進行形で繋がった手を通じて、少女の温もりと喜びがオレに届けられる。って、そこの二人とは呑まねぇのかよ！

茨木華扇と黒岩――本名は綿間部将也というらしい青年が仲良くお手々を繋いで歩いていく。その後ろ姿を、博麗霊夢と霧雨魔理沙が

さも珍しいモノを前にしたかのような顔で見送っていた。事実、かの仙人が特定の人物に、それも外来人の男性にこれほどまでに拘るところなんて、初めての出来事なのではないだろうか。

とんでもない光景を目撃してしまったと言いたげに、魔理沙が深く息を吐いた。

「いやー……まさかだぜ。あいつが霊夢以外にもご執心になる人間がいたなんて驚いた」

「どうりで最近華扇の説教が減ったわけだわ。あの男のおかげね。どうせなら、このまましばらく引き付けといてもらおうかしら」

「説教だけに避雷針って言いたいのか？　上手いじゃん、座布団一枚やるぜ。でもまぁ、外来人にも色々いて面白いな」

「そうね」

しみじみと二人して好き勝手に言いながら、霊夢も魔理沙もあの男に運ばれてきた八海山を飲み進める。気付けばもう三分の一ほど中身が減っていた。美味いのだから仕方ない。

飲んで飲まれてほどなくして、紅白巫女が鳥居の先に親友と連れ人の姿を見つける。順調に酔った満面の笑みで、大きく手を振って来訪者達を呼び招いた。

「あ。噂をすればってやつね。おーい二人ともー、こっちよー！」

さて、今日も奥手な親友の背中を押してあげようか。また壁ドンでも起こらないかしら。

つづく

第十三話　「仙人だって甘えたい！」

「さ、ここなら大丈夫でしょう」

あれよあれよと華扇に連れてこられたのは、神社の敷地ギリギリにある樹木の根元だった。おあつらえ向きに太い幹がちょっとした背もたれになっている。そのうえ、立ち位置からもこちら側は目立たずに境内を一望できた。んだよ、良い場所を知ってんじゃねーか。

もっとも、この女に引っ張られる途中で何人かにチラチラと視線を飛ばされた時は、若干胃が痛かったのだが。由緒正しき仙人サマが見知らぬ野郎の手を取って笑みを浮かべているのに、華やかな目撃者どもは唖然としていたようだった。

どうにもスキンシップが多いヤツかと思いきや、案外他ではそうでもないってぇのか？

「やれやれ……どっこいせ、と」

「ふふふ、年寄りみたいですよ？」

「そこは思っても言うなよ。地味に辛いだろうが……」

程良く根っこが盛り上がっていた部分に腰を下ろす。華扇もオレの隣に座った。いや、お前もかい。他の連中がいる場所に戻ればいいだろうに。

オレの訝しげな視線も意に介さず、仙人の少女は盃を手渡してきた。どさくさ紛れで持ってきたみたいだ。ちゃっかりしてんなぁと呆れつつ受け取る。ってオイ、何やこの鍋の蓋みたいなの。ヤクザが兄弟の契りを交わすときに使うような代物じゃねーか。

漆塗りのドデカい酒器に日本酒がドボドボと注がれる。次いで、彼女は自分用と思しき枡を取り出すと、「乾杯しましょう」と少女らしいあどけない笑みを向けた。なお、可愛い顔して手にしているのは一升枡である。マイボトルとかの次元じゃねーぞ。

「さっきの二人のところに戻らねーのか？」

「私がこうしていたいんです」

へーへー、さいですか。

別に追い払う理由もないし、こいつの好きにさせても問題なかろ

う。そう結論付けて、コンッと乾杯してから酒を煽る。幻想入りしてから日本酒のオンパレードだが飽きは来なかった。若干クセのある粗雑な味わいが、却って手作りの風情を醸しているようだ。古き良き、というやつかもしれない。

特に会話もなく、ただ二人で静かに酒を飲み進める。不思議とそこに気まずさはなかった。それどころか、気持ちが落ち着く。

宴会はまだまだ続く。お開きになる兆しなど全然ない。どいつもこいつも楽しそうで結構なことだ。華やかで、賑やかで、どことなく眩しくもあり。何となく似ているせいか、繁華街を思い出す。

さらに夜は更けて、天上を彩る星空に心を惹かれていた時だった。

「ねぇ、綿間部。何か勝負をしてみませんか？」

おもむろに華扇の澄んだ声が鼓膜をくすぐった。セリフとは裏腹に、穏やかな表情を浮かべている。物騒なものではないのは明白であった。せいぜい、呑みながらの遊びが欲しいのだろう。ま、付き合う分にはやぶさかじゃねぇわな。

とりあえず盃を脇に置いておく。コレずっと持ってると零しそうになんだよ。

「構わねぇけどよ。ただし飲み比べなら却下すっぞ。そんなん絶対お前が勝つだろ」

「勝負の方法はお任せします。そうですね……せっかくですし、負けた方は勝った方の言うことを一つ聞く、というのはどうですか？」

「フッ……いいぜ、乗った」

ありきたりな罰ゲームではあるが悪くない。これもまた一興。

とはいえ、結構な酔いが回っちまっているし、シンプルで勝敗が分かりやすいヤツが良いだろ。まどろっこしいのは無しだ。財布から十円玉を一枚だけ抜き取る。

「三回勝負でどうだ？　表か裏か、イカサマなしの運試しといこうじゃねーか」

「良いでしょう。己に誓って嘘も偽りも致しません。あぁ、それと投げた貨幣は地面に落とさず手で受け止めてくださいね。小銭の音を聞きつけた霊夢が飛んできてしまいますので」

「守銭奴なのか、あの巫女は……」
「う～ん……否定はしません」
そこは否定してやれよ。神職のくせして自販機の釣銭口を漁るタイプだったりすんのか。オレも昔やっていたけど。
公平を期すためコイントスは交互にやることにした。最初はオレから。
キィン、と金属音を立てて十円玉が空を飛ぶ。弾かれた銅貨は宙を忙しなく回り回って、やがて重力に従ってオレの手元に落ちてきた。着地と同時に空いた手を上に重ねて答えを隠す。
一切の迷いもなく、彼女は告げた。
「表」
「速攻で言い切りやがったな……じゃ、御開帳といくか」
乗せていた手を退かすと、平等院鳳凰堂の絵柄が姿を見せる。聞きかじった程度だが、世間一般ではこっちが表側だったはず。全然関係ねぇけど、コレと似た感じの名前をした中二病キャラがいたような……
見事、正解を当てた桃色の少女がクスリと笑みを零す。
「まずは私の一勝ですね。さ、交代です」
「ったく、悪運だったら多少マシなんだがな……」
負け惜しみを口にしながらも、十円玉を相手に投げて寄越す。ちなみに平凡な十円玉だ。ギザ模様はない。
彼女は放られたブツを落とすことなく掴むと、さっきの見様見真似で親指の上に銅貨を乗せた。そして、「それっ」と掛け声に合わせてコインを弾く。が、
「ぶべっ!?」
「ひゃ!?　ご、ごめんなさいッ！」
あろうことか彼女の手を離れた銅貨は勢いよく斜めに飛び、オレの顔面を直撃しおった。これは酷い。この女、まさかのノーコンかよ!?
微かに頬を赤らめた桃色の少女は「こ、こほん」と咳払いして、もう一度トライする。今度はちゃんと真上に舞い、彼女の掌に降りた。
気を取り直して、今度はオレが当てる番だ。すでに答えは決まって

いる。
「やっぱり裏だな。オレのイメージ的にも」
「もし外れたらその時点で私の勝ちですよ?」
「わぁーっとるわい。男に二言はねぇよ」
華扇が手を退ける。先ほどとは違う面、即ち数字の十が上を向いていた。
フッと勝ち誇った笑みを見せつけてやる。だが、華扇は悔しがった素振りをみせず、それどころか楽しんでいるフシさえあった。ほう、こういう展開がお好みってワケかい。
ともあれ、これで引き分け。ラスト一本。ピッチャーはオレ、いざ尋常に――
「表です」
「おい、投げる前に宣言すんのかよ」
「いいじゃないですか。泣いても笑ってもこれで決まりなんですもの」
「っかー、潔いこって。だったら隠す必要もねぇな」
ならばと景気よく先ほどよりも高くコインを飛ばす。何回、何十回と表裏を繰り返しながら銅貨が徐々に落ちてくる。
そして、いよいよもって勝負の行方が決まった。オレの掌に鎮座する審判が下したのは、表。
「……私の勝ち、です」
「へいへい、オレの負けですよ。で、何が望みだ?」
人差し指を唇に添えてパチッとウインク付きで勝利セリフを決められる。かなり様になっている仕草に、ほんの一瞬だけだが目を奪われてしまった。それを悟られまいとして雑な態度になった。思春期かよ。
何にせよ、勝負を始めるの前の契りに従って、華扇の望みを一つ聞かなければならなくなっちまった。つっても心配あるまい。マジメな仙人サマならば、外道なことは言わねぇだろ。
……いや、本当に大丈夫なのか? これを機に「何でも屋を朝から晩までの営業にしなさい」とか命じられたら超マズイ。あるいは彼女

の食い意地（説教不可避）から「料亭の高級料理が食べたいですねぇ」というセンも有り得る。もしくは「私の修行に付き合いなさい！」などという可能性も捨て切れない。

パッと考え付く限りでも、オレにとってはキツいものばかりじゃねーか。こりゃ早まったかもしれん。

身構える敗者に対して、ついに華扇が口を開く。

「そのまま動かないでください」

「は、何で」

「いいから。勝者の命令です」

そう返されては従うしかない。一体何をする気だ。まったくもってこの女の真意が理解できず、オレにやれることはただ待つのみ。そして――

「……ん」

とん、と。

まるで小鳥が宿り木で羽を休めるように軽く、華扇の肩がオレの肩に寄りかかる。

僅かに体重をこちらに傾けただけ、重さなど微塵も感じなかった。女性らしい華奢な身体が触れて、衣服越しでも柔らかさが伝わる。

ワケが分からず、つい思ったままの内容が口に出てしまう。

「どうなってんだ、こりゃ」

「しばらくこのままでいさせてください。それが私の望みです」

「……こんなんで良いのかよ」

「こんなのが良いんです。仙人だって、たまには誰かに甘えたくなるときがあるんですよ？」

おいおい……マジで他に何もなかったのか、お前ってやつは。

あくまで肩を貸すだけ。それ以外は望まないのだと彼女は微笑とともに言葉を紡ぐ。とても嬉しそうな顔で。

互いの身体が重なったところから、相手の体温が自分のものと溶け合っていく。酒のせいか少しばかり熱い気もする。それがオレなのか彼女なのかは定かではない。

『……』

いつしか華扇は目を瞑っていた。寝息は聞こえてこないあたり、ただ瞼を閉じただけなのだろう。僅か数センチ先にある顔をついまじまじと眺めてしまう。ホントに綺麗な顔をしてやがる。さすが仙人ってか。

たった数日の間で行動を共にしただけでも、彼女は表情豊かで親しみが持てた。口煩い説教も少なからずあったが、そこも含めてこの女の個性といえる。

多分これからも、泣いて怒ったりそして笑ったり誰かを愛したりするのだろう。花は咲きそして散っていく。それでも明日はやってくるワケで。

詩人を気取った柄にもないモノローグに、我ながら苦笑せざるを得ない。

ふいに微風が舞い、淡い桃色の前髪がさらりと流れた。何度か覚えのある甘い匂いがして、なぜか妙に意識してしまった。何だ、今の。

「しかし、まぁ……」

今更だが、これじゃ迂闊に動くことも儘ならない。おかげで帰ることすらできなくなっちまった。もしやコレが狙いだったんじゃねぇか、この女。ったく、まんまと一杯喰わされたってワケかよ。

こちらに寄りかかる少女が満足しない限り、この宴に留まる他に選択肢は許されないってか。

「フッ……やられた」

やれやれと頭を振って再び夜空を見上げる。天体の煌めきを背景にして、二人の少女が互いに数多の光弾をばら撒きながら飛び交っていた。

「って、何だアレ……!?」

酔いも場も雰囲気も無視して、思わずツッコミが入った。

なお、そいつが噂の弾幕ごっこだと知るのは、翌日の話である。

つづく

第十四話　「赤髪エンカウント　～人里のろくろ首前編～」

真っ昼間、イケナイ太陽が容赦なく灼熱の日差しを降り注ぐ。
人目につかない裏通り。我がアジトであるテント内で苦々しげに顔をしかめる。オレは夜を生きる男。どう考えたってこんな時間帯に起きている筈がない。にも拘らず、こうなっているのは当然理由がある。
その答えが低い呻きのような呟きとなって出でた。
「……眠れん」
ここ数日間にわたった、かの仙人による規則正しい生活という名の調教の成果ではない。フッ、そう簡単に夜型の生き様は覆らねーよ。もっとも、本当にそうなっていればあの女も鼻を高くするのだろうが。
というか、寝れるもんならオレだって寝たい。しかしながら、己が渇望してやまない安眠のひとときは、外部によって妨げられていた。
「とりや！　そっち行ったわよー！」
「わっわっ、取れ――きゃうッ!?」
「あらら、また落としちゃったわねぇ」
「……うるせぇ」
どうやらすぐ近くでガキ共が遊んでいるみたいだ。いかにも子どもらしい甲高い声が耳に突き刺さる。有体に言ってしまえば喧しい。恐らくオレがここに居るのには気付いてないだろう。隠れ家なのだからしゃーないと言われれば返す言葉もないけど。
しかし、どうにも遊びに熱中するあまりテンションも段々とヒートアップしていやがる。そのせいではしゃぎ声までデカくなってきた。こんなことなら耳栓でも買っときゃよかった。
「いっけー！」
「なんのー！」
「もらったぁ！」

ワーワーキャーキャー。まるで幼稚園の中庭か小学校のグラウンドだ。

ただでさえ浅い眠りだったというのに、それを叩き起こされてこの仕打ちは非常に辛い。とにかく寝直してぇ、休ませろ。だが、タオルケットを頭から被ってみたところで、防音にはクソの役にも立たなかった。マジで耳栓が欲しい。

「……だーもう、こんなんで寝れるかってんだ！」

とうとう我慢できなくなり、バネが跳ねるかの如く反動をつけて飛び起きる。あとは感情に任せて一直線。寝惚けとイライラが重なったお世辞にもよろしくない状態のまま、オレはテントから顔を出して辺り一帯に向けて叫んだ。

「うるせー！　寝かせろォ!!」

『うわぁああ!?』

よもや物陰から人が出てきて、そのうえ怒鳴られるとは思わなかったろう。すぐ近くにいたガキんちょ三匹がビックリした挙句に尻餅をついた。いかん、やり過ぎたか。泣かれたら後々面倒くせぇぞ。

やっちまった後悔が波となって急速に頭を冷やしていく。顔には出さないものの、内心ではヒヤヒヤしながらチビ連中のツラを覗く。

そして、思わぬ展開にこちらまで意表を突かれた。

「あ？　テメーら……」

目の前にいたのは見知った顔ぶれだった。ツインテールと黒髪ロングと縦ロール。んだよ、この間の妖精トリオじゃねーか。

さらによくよく見ると、彼女らの足元には海やプールとかで使うであろう風船ボールが転がっていた。なるほど、コイツで遊んでいたのか。つーか、人里の中でビーチバレーしとんのか、お前らは。水スポットなんざ用水路ぐらいしかねーだろうに。

すると、向こうもオレだったことに気付き、いつぞやの再来でまたしても口々に喋り出した。

「ワタナベさんじゃない。なんでこんな所にいるの？」

「もしかして、おうちないの……？」

「何かいる気配はしてたけど、まさかワタナベさんだったなんて」

サニーミルクは純粋な疑問を、ルナチャイルドは可哀相なものを見る瞳で、スターサファイアはしみじみと腕を組みながら、どいつもこいつも好き勝手に言葉をぶつけてくる。

ここがオレんちだっつの。あと、物陰でゴソゴソ生きてる黒いヤツみたいに言うなや。台所の天敵と類友か、オレは。というかオレが居たの察していたんかいコラ。

しかもコイツら、出てきたのがオレだと分かった途端に怯えの色が消え失せやがった。ま、泣かれるよりはマシってか。

ボリボリと頭を掻きながら、こちらも嘆息して返す。

「ったく、人が寝てるってぇのに大声出して騒ぐなよ……」

「えー、まだ寝てたの？　ワタナベさんってば、すっごいお寝坊さんね。もうお昼よ」

サニーミルクが茶化すように笑う。つっても昼になったばっかだろうが。まだ正午にもなってないし。

とはいえ確かに、フツーの至極真っ当な生き方している連中であれば、絶賛活動中の時間帯なのはオレも認めよう。ただし、あくまで規則正しい一般人であればの話だ。生憎だが、オレはそこら辺の凡人とは一味違う。なぜならオレは夜に生きる男。

欠伸を噛み殺しつつ、三ガキにオレのポリシーを語って聞かせてやった。

「オレは月と一緒なんだよ。日中はしっかり休んで、夜になったら輝きを得る。そういう男だ、分かったか？」

「へぇ、よかったわねルナ。あなたと相性バッチリみたいよ」

「私とワタナベさん、お似合い？」

スターサファイアのからかいをバカ正直に受け取ったのか、ルナチャイルドが首を傾げてメチャクチャなことを言い出した。なぜかこっちを見ながら。いや、オレに聞くなよ。そもそも名前が月とルナで被っただけだろ。

無論、このオレが子どものおませに狼狽えるはずもなく、鼻で嗤って受け流してみせる。

「けっ、ガキが生意気言ってんじゃねぇ。せめてあと十三年くらい成

長してから出直してこいや」
　ついでにしっしっとあしらう動作のオマケ付き。フッ、残念だったな。大人をからかおうったって、そうはいかねーぞ。
　ぶーぶーと抗議してくる三妖精を躱しながら言葉を続ける。
「とにかく、オレは寝る。頼むから静かに――」
「そうはさせませんよ、綿間部？」
　一瞬にして余裕が消し飛んだ。
「なん……だと……？」
　まさしく一生の不覚。いつしか割って入ってきた女の声に、ヤバいと思ったところでもう遅かった。右腕に包帯がトレードマークの仙人サマ。茨木華扇のご登場である。
　柔らかな桃色のミディアムヘアを揺らして、一歩また一歩とこちらに歩み寄ってくる。
「こんな所に隠れていたんですね？　彼女達が騒いでくれたおかげで、ようやく居場所を見つけられました。決め手はあなたの叫び声でしたけど」
「チキショーめ、自滅しちまった……！」
　あの時の怒鳴り声が敗因だった模様。泣けるぜ。
　テントに引きこもって籠城しようにも、それよりも早く首根っこを掴まれてあっさり引き摺り出されてしまう。まさかお前、今日までずっとオレの隠れ家を捜していたワケじゃねーだろうな。だとしたら凄まじい執念だぞオイ。
　はたして一体何がこの女をそこまで駆り立てたのかは知らん。が、こうして捕まってしまったからには負けを認めるしかあるまい。何に負けたのか自分でも分かっちゃいねぇけど。
　諦めの表情でやれやれと肩をすくめる。
「んだよ……そんなにオレに会いたかったのか？」
「バッ……!?　そそ、そんなわけないでしょう!!　何言ってるんですかぁ!?」
「おぐぇえええ!?　バカお前っ……首絞めんなっ、窒息するわ……ッ!!」

冗談交じりの皮肉のつもりだったのだが、言った直後に物理的な手法で黙らされそうになった。殺す気かコラ!?

ジタバタともがくオレを無視して、桃色の少女は振り返る。

「さて、私達は行きます。あなた達は気にしなくてもいいですよ。この場所で好きなだけ遊んでくださいね」

そう言って、仙人サマはガキんちょ共にニッコリと穏やかな笑顔を向ける。おうおう、子供には優しいこって。こちとら自力で首絞めから抜け出したってぇのによ。

そんな彼女の言葉を受けて三妖精が作戦会議を始めた。ちょっと待て。もしかしなくても、もう少し待っていれば勝手にどっか行っていたかもしれねーのか？　これは酷い。全てが無駄だった。無駄無駄。

俺の心に黄金の風が吹き荒ぶなど知る由もなく、三妖精のブリーフィングは続く。

「どうしよう？」

「ボール遊びも飽きてきちゃったし、別のことしない？」

「あ、それならさ！　アレ見に行こうよ、チルノが日焼けしたってやつ！」

こちらが放っておかれている間に、なんだかんだで意見がまとまったらしい。チルノとかいうのが日焼けしたことに一見の価値があるという。なんのこっちゃ。

個性豊かな妖精ズがふわりと宙に浮かぶ。

「私たちも行くわ、バイバーイ！」

「じゃあね、ワタナベさん」

「また今度」

一番元気なサニーミルクを筆頭に、仲良し三人組が手を振りながら飛び去っていく。あ、しくじったな。この間の駄賃も渡しとけばよかった。しゃーねぇ、また今度で良いだろ。時効にするつもりはねぇぜ？

ようやく静けさを取り戻したところで、またもや欠伸を一つ。のそのそとテントに戻る。

「じゃ、オレももう一眠り――」
「させないと言ったでしょう？」
「……ですよね」
美しく整った顔立ちに、目が笑っていない笑みを張り付けて迫りくる桃色の少女。逆らい難い華扇の圧力にあっさり屈した。オレってこんなキャラだったっけか……？
肩を落とすほどに脱力する。しばし遠い目になって、三ガキが飛んでいった方向を見上げたのであった。

ドナドナと家畜の如く連行されたままで天下の往来を引き摺り回させるワケにもいかない。オレのプライドにかけて。仕方なく、お客を求めるフリをしてウロウロと練り歩いていく。
こちとら小学生にでもなった気分であった。せっかくの夏休みにラジオ体操で早起きさせられている感じとでも言おうか。
とにかく打開策を練ろう。というか既に決まっている。何処か建物の中に避難するしかあるまい。この女は食い物で釣ればいい。
「とりあえず何か腹ごしらえしようや」
「それは賛成ですけど、今何か失礼なことを考えませんでしたか？」
「……気のせいだろ」
「そうですか……ところで、今の間は何かしら？」
女性は洞察力に長けていると聞くが、コイツも例にも漏れずそうであった。何やねん、その鋭さ。探偵かよ。危うく説教喰らうところだったじゃねーか。
ともあれ狙い通り。さらに、都合の良いことに此処からだと例の酒場が近い。あそこなら昼営業もあるのは既に知っている。先日の依頼を受けたおかけで。
ほどなくして店が見えてくる。ふと、前方からこちらに歩いてくる若い女性がいた。
赤くてクセのない短髪に青いリボンを付けた少女。クソ暑い夏だというのにマントなんぞを纏って首回りを隠している。かと思えば、下は華扇のよりも丈の短そうなミニスカート。こちらも赤色だ。日

差しにも負けない眩しい太腿を露わにしていた。
おいおい、上下で季節感バラバラ過ぎんだろ。リアルのマントなんて初めて見たわ。
「あの女性が気になるんですか？」
なぜか華扇が声を固くした。あの女に何か思うところでもあるのか。別に敵対している様子はなさそうだが。文字通り、赤の他人なんじゃねーのか？
オレをじっと見据えてくる仙人サマを横目で見つつ、顎をしゃくって件の女を示す。
「気になるかどうかって言えば、そらなるわな。目立つだろ、アレ」
彼女の特徴を表すなら「赤い」の一言に尽きる。またキャラ濃いのが出てきやがったな。
てっきり擦れ違うものかと思いきや、奇遇にも目的地が同じだったらしい。酒場の暖簾を前にして、オレと華扇そして赤女の三人の足が止まった。どちらが先に入るかタイミングを見失ってしまい、互いの視線が交錯する。
やや吊り目がかったすまし顔――世間一般で言うところのクール系ってやつだろうか。自己主張の強い色合いで全身を覆っている人物とは到底思えない。しかしながら、一見すると服装と矛盾しそうな顔立ちも、この少女に関しては妙にバランスが取れていた。
「何？」
「いや、オレらもここに用があんだよ」
「そう。悪いけど先に入らせて」
言うや否や、こちらの返事も待たずにそそくさと店内に入っていく赤い少女。彼女も食事に来たのであろう。一人飯、孤独のグルメってか。意外と気が合うかもしれない。
と、すぐ隣からどことなく強い視線を感じた。犯人は言わずもがな。
「ああいう娘が好みなんですか？」
「なーんでそうなんだよ……お前、機嫌悪くなってねぇか？」
「知りません、馬鹿者……ばーか」

「二回も言うなや。凹むだろうが」
脈絡なく人を連続でバカ呼ばわりしたかと思えば、オレを置いて一足先に華扇も暖簾を潜っていった。どことなく、怒っているというより拗ねているような印象を受けた。何というか、あのままではヤケ食いでもしかねない様子だった。
「ったく、やれやれ……」
兎にも角にも、オレもさっさと入るとするか。代金を全て押し付けられる前によ。

つづく

第十五話　「赤髪エンカウント　～人里のろくろ首後編～」

「おう、いらっしゃい黒いあんちゃん！　それに仙人様もご一緒でしたか。さぁさぁ、どうぞお好きな席に掛けてくだせぇ！」

ランチ営業中の酒場に入ると野太い声が飛んできた。今日も声でけーよオッサン。

今にして思えば、なんだかんだで人里にも顔見知りが増えてきたものだ。この店主も然り。着実にオレの存在が広まっている。そういう意味だと受け取っておくとしよう。

適当なテーブル席に着く。華扇も正面の椅子を選んだ。ま、そらそうなるわな。カウンター席ならまだしも、これで横並びに座られたら滑稽な絵面になっちまう。

オレ達が座ったのを見届け、「おーい、お冷二つだ！」と男が店の奥に呼びかける。やがて間もなくして、店員と思しき女がお盆に水入りのコップを二つ載せて出てきた。

「って、さっきのヤツじゃねーか」

「お客さんではなかったんですね」

「赤蛮奇。バイトよ」

つい今しがた店先で出くわした赤い服装の女は、ここのホールスタッフだった。そういや若い娘が働いているだとか前に言っていたな。コイツのことだったのか。

ミスティアみたいな愛嬌はないが、こういうクール女子の接客というのも一部から需要がありそう。もちろん男性客から。予想を裏切らず、彼女も美人ないし美少女の類いに当てはまった。やっぱりおかしいだろ、幻想郷。

淡々とお冷をテーブルに置く赤蛮奇。出会った時の服装のままだ。給仕服はないのかと、何気ない疑問を抱く。

ちなみに、メニューは壁に貼ってあるのがこの店の方式だった。不揃いに並べられた半紙は古く色褪せており、オレでもかろうじて読め

る書体で綴られていた。達筆なんだか下手くそなんだか、よく分かんねぇな。残念だが、オレに書道の心得はない。

さして悩む必要もなく、日替わり定食に決める。華扇も同じものにした。注文を請けた女性店員がオーダーを繰り返す。

「大将、日替わり二つ」

「よしきた！　ガハハッ」

豪快に腕まくりしながら、店主が厨房へと引っ込んでいく。数日前に腰をやってしまった男とは思えぬ元気を見せつけてくる。エラく治りが早い気もするが、スゲー効く薬でもあんのか？

なお、オレ達の他に客はいなかった。まだ昼営業が始まったばかりで、メシ時には些か早い時刻だからであろう。結果的に、赤蛮奇とやらを含めた三人がその場に残される。

「あなた、確かろくろ首でしたよね」

「そういう貴女は山の仙人様ね。で、そっちの男は弟子？」

「誰が弟子だコラ。って、お前ろくろ首なのかよ。じゃアレか、首が伸びるってぇのか？」

ろくろ首といえば、小さいガキでも知っている怪談の定番だろう。よもやこんな場所で会い見えるとは予想だにしなかった。

そもそも人里という名が付いているものの、この集落には人外も出入りしているのは周知の事実。乱射魔もとい藍様、三月精、何より守護者たる上白沢女史がワーハクタクである。

「私は首が伸びる方じゃないわ。頭を外して飛ばせるタイプのろくろ首よ。抜け首とも呼ばれているけど」

「ほーん……」

赤蛮奇の返答に気の抜けた相槌を打つ。ろくろ首って頭取れるヤツもいんのかよ。それ、どっちかといえばデュラハンの親戚じゃねーの？

恐らくこの女も、自身が妖怪であることを隠して人里に暮らしている類ではない。そうでなければ華扇が堂々と尋ねたりしない。もっとも、上白沢女史の性格を考えれば、種族だけで差別するような掟など作らないだろう。

他愛のない話をしていると、オッサンが厨房から出てきた。ご飯や味噌汁を乗っけた四角いお盆を二人分、左右の手でそれぞれ持つ。器用かつパワフルな真似をしながら、店主が会話に混ざってきた。

「バンキちゃんはうちでも人気があるんですぜ？　酒の余興にって、客の前で頭を飛ばしてみせてくれたりなぁ」

「大将、余計なコトまで言わなくていいから。大体そんなことやってたらまた腰痛めるよ」

ピシャリと口止めをしつつ、若い女店員は店主から片方の定食を奪い取る。親子かよ。大雑把な父親としっかり者の一人娘にしか見えんわ。

本日の日替わり定食は生姜焼きが主役であった。豚肉の上に山椒が散らしてある。さらに獅子唐まで添えられていた。夏バテ防止のピリ辛テイストという趣向か。

食べる前から仙人サマが嬉しそうに料理を眺めている。ろくろ首もどこか自信ありげな表情を浮かべる。もっとも、表情の変化が乏しくて分かり難いことこの上ないのだが。

「美味しそうですね」

「味は保証するわ」

箸を取る。いざ、いただきます。

「ごちそーさん」

調子に乗って二回も米をおかわりしてしまった。つっても、食える時に食っておかねば後々困る。意地汚いとは言わせねぇ。何でも屋は稼ぎが不安定なんだよ。

その後、外に出たくないので店に居座ってダラダラ過ごす。桃色の少女には、食後に激しい運動は健康に良くないとかそれらしい発言で納得させた。一応、勘定だけは先に済ませておく。

ついでにお茶を貰って一服する。俗にいう食休みというやつだ。できることなら、このまま夜まで休んでいたい。

その一方で、未だにオレ等を除いて客はおらず。儲かっていないのかと問えば、今日が珍しく閑散としているのだという。おかげで退屈

なのか、今度は赤蛮奇の方から話しを振ってきた。さすがに客と同じ席に着いたりはしないが。その辺は弁えているらしい。
「結局、二人はどういう関係なの？　まさか男女のソレ？」
「ち、違いますッ!!」
　顔を赤くして怒りながら、華扇が間髪入れずに早口で否定する。お前も声でけーよ。
　立て続けに「誰がこんな人と！」とか喚いている仙人サマに代わって、オレが正解を教えてやった。
「平たく言っちまえば、まぁ成り行きだわな」
「ふーん、そういうものなの？」
「そーいうもんだろ。特に深い事情はねーよ」
　ったく、どいつもこいつも似たような勘繰りしやがってからに。言っとくが、後で責められんのオレなんだからな。その辺よく理解して欲しいものだ。
　そんな具合でヤル気なく時間を潰している時だった。突然、外から威勢の良い声が飛び込んできた。
「新聞でーす！　皆さーん、『文々。新聞』の最新号ですよー！」
「げ」
　それを聞いた途端、どういうワケか赤蛮奇が苦虫を噛み潰したような顔をした。誰の目から見ても嫌がっているのは明白。ただの新聞配達ではないと見受けられる。もしや押し売り営業の輩か。
「どうした、何かあんのか？」
「知らないの？　あれは鴉天狗。誰彼構わず新聞を放り込んでいく迷惑な連中よ」
「彼らは新聞作りに強いこだわりがありますからね。取材意欲もさることながら、配達もその翼の速さを駆使して、あっという間に終わらせてしまいます。仕事に熱心なのは大変結構なのですが……ね、綿間部？」
「そこでオレを見んなよ……」
　忌々しげに吐き捨てるろくろ首の愚痴に、仙人サマがやんわりとフォローっぽいものを入れる。ついでに物言いたげな眼差しをオレ

に送ってきた。へーへー、いい加減で悪ぅございましたね。
しかし赤蛮奇の表情は晴れない。
「つい最近、あいつが投げた新聞が私の後頭部に当たったせいで首が取れたのよ。道のど真ん中でね」
「それは……ご愁傷様でした」
赤女のカミングアウトにはさすがの華扇も言葉を濁した。そら大惨事だわ。年寄りとか心臓が弱い人が近くに居たら地獄絵図やぞ。実際、ちょっとした騒ぎになったのであろう。
「新聞でーす！」
先ほどよりも声が近い。
どうやらすぐ近くまで現行犯が迫ってきている様子。すかさず赤蛮奇が頭を押さえてガードする。その読みは正しく、ビュンッと風が通り抜ける音とともに、一束の新聞紙が店内に突っ込んできた。
しかしながら、彼女は一つだけ読み間違えてしまっていた。
新聞は頭の高さではなく、地面すれすれの低空飛行で迫っていたのである。博多豚骨ラーメンズで得た知識が答えを算出する。あれは、サブマリン投法か！
ギリギリの際どいゾーンを攻める投球（紙束）は、なんと赤蛮奇とオレ等が座るテーブルの間を猛スピードで擦り抜けた。
そして不幸にも、伴われた強い風圧によって、神の悪戯としか思えぬ展開が招かれてしまった。
頭を守っていたせいで無防備だったミニスカートの裾が、突風に煽られてこれでもかと盛大に舞い上がった。それによって、アダルトなワインレッドとレース生地が施された乙女のヒミツが露わになる。どうしようもなく、ハッキリとオレの目に映ってしまう。
『……』
やがて、しょうもないラブコメチック風が収まり、ミニスカの裾は大人しく元の場所へと戻っていった。ただし、気まずい沈黙を生み出して。
「……見た？」
「……見てねぇよ」

「どうせ子供っぽいとか思ったでしょう？」
「あ？　むしろ逆だろ、どう考えたって大人向けだろうがあんなド派手なモン――あ〝」
オレとしたことが何たる迂闊だろうか。誘導尋問にいとも容易く引っかかっちまった。
静かに問い質す赤娘。相変わらずのすまし顔だが、やはり羞恥はあったようで向けられる眼差しに少なくない非難が含まれていた。
彼女は一言だけ放った。
「えっち」
「ぐぬぅ……ッ!?」
分かっちゃいたが、こういう場合、男の方が不利になるってぇのはいただけない。理不尽だろうが。明らかに事故でしょうよ。いや、確かに見ちまったけど。
ま、キャーの悲鳴もビンタも来ないのがせめてもの救いだと――
「わ　た　ま　べ　？」
嗚呼無情、例え被害者本人が怒っていなくても、もう一人の女が許してはくれなかった。分かってくれとは言わないが、そんなにオレが悪いのか。
そちらを見てはならぬと本能が警鐘を鳴らす。せめてバレないようにコッソリ盗み見るだけに留める。彼女は俯き、淡い桃色の前髪が垂れ下がっていた。どんな表情をしているのか、これでは分からない。
だが、少女の全身から滾る闘気が揺るぎないオーラとなって顕現していやがった。その姿は、まるで超戦士だった。メインディッシュたる説教の前に、鉄拳制裁という前菜が来ること待ったなし。
オレが取るべき行動は一つしかなかった。こうなったら……
「くそったれ！　捕まって堪るかァアア!!」
脇目も振らず全力で撤退する以外に生き残る術はなし。椅子に座った状態からノーモーションで走り出す。伊達に繁華街で逃走劇を繰り広げちゃいない。なにせ今回だけは、冗談抜きで命の保証ができねぇんだからなァ！

随分前に読んだマンガでも言っていた。逃げるんだよぉオオオオオ!!

「――逃がしませんッ!!」

まるで尻に火がついたような勢いで店の外へと飛び出した青年。そんな彼を捕えようと、茨木華扇は大胆にもテーブルを跳び越えて着地、そのまま追撃を開始する。危うく彼女まで下着を晒しかねなかったのに、本人は気付いていないようだった。危ないなぁ、と赤蛮奇は呑気に思う。

もちろん、赤蛮奇だって若い女だし羞恥心がないわけではない。なのだが、何分性格がサバサバしているせいか、いまいち反応は薄かった。繰り返すが、別に恥じらいがないのではない。単純に表に出難いだけだ。

怒声と悲鳴が次第に遠退いていく。まだ捕縛されていないあたり、意外にもあの黒い青年が奮闘しているらしい。

「大変そうね、あの二人」

まさしく台風一過であった。逃げる男と追いかける女が店を去り、残るは自分だけ。幸い代金は貰っていたので食い逃げの心配もなし。大将は騒ぎに気付いていないのか、厨房に引っ込んだままだ。もしくは放っておいているだけなのかもしれない。

とりあえず、店員として言うべき言葉はこれだろう。

「毎度あり」

つづく

番外編　「人里のメリークリスマス」

幻想郷にもクリスマス文化はあったらしい。

十二月二十四日。まさに聖夜と謳われる時刻となった。今宵、人里は見慣れた和風な景観ではなく、色鮮やかなイルミネーションが施されていた。あちらこちらに柔らかい光が宿り、道往く人を照らす。

しんしんと降り積もる雪化粧と相成って、夢と希望に満ちた冬の風物詩が拝めた。遥か天高くから白くて小さい冬の粒が舞い降りる。吐く息までもが白い。オレは何をするでもなくただぼんやりと夜空を見上げた。

「……雪だな」

当たり前すぎる独り言が息に混じり、冷えた空気に霧散していく。

人里に植えられた木は全てクリスマスツリーへと変貌を遂げた。連日かけて村人たちが総出で飾りつけした甲斐もあり、洒落た装いの並木が続く。

どうでもいい話だが、リア充どもを爆破してくれとか妬みに狂った依頼もなくて安堵している。ちょうど金髪碧眼の少女と茶髪ツンツン頭の青年が、お互いに相手を意識しながら歩いていった。特に金髪っ娘が気恥ずかしそうに顔を赤らめているあたり、そういうことなのだろう。幸せそうなこって。

ちなみに、本日の何でも屋は臨時休業だったりする。というのも、

「お待たせしました、綿間部」

もう何度も耳にしている凛とした声に振り返る。

桃色のミディアムヘアに白のシニョンを括った女が立っていた。首にマフラーを巻き、厚手の上着の袖から伸びた手にはミトンに似た形の手袋が嵌められている。整った顔立ちは寒さで鼻先が仄かに赤くなっているものの、嬉しそうな笑みを浮かべる。急いできたのか、彼女が息を弾ませるたびに小さな口から零れる吐息が白くなって表れる。

待ち合わせをしていた女性――茨木華扇が駆け寄ってきた。

「ごめんなさい、待たせてしまいましたか？」

「別にそうでもねーよ。オレも今しがた来たところだし」
「そうですか……うふふっ」
「なーんでそこで笑うんだか……」
今のやり取りのどこに笑う要素があったのかは知らんが、華扇の機嫌がさらに良くなる。その表情がイルミネーションの光に映えて、僅かな間とはいえ目が離せなくなった。
不覚にも呆けてしまったオレに対して、彼女は自然な動きで手を取ってきた。手袋越しでも彼女の手の温かさが伝わる。その拍子に二人の距離が縮まり、赤みがかった瞳に上目遣いで見つめられる。
「それでは行きましょうか」
「ま、いつまでも寒空の下で突っ立ってもしゃーねぇわな」
仙人サマに引っ張られるかたちで歩き始める。オレ達が今夜を過ごす場所に向かって。というか、行き先わかってんだから手繋ぐ必要なくねーか？
そう思ってもあえて口にしなかったあたり、ひょっとしたらオレも浮かれているのかもしれない。
雪掻きされた道に新たな雪が薄く積もる。その上に二人分の足跡を付けながら、オレは隣人にバレない程度に口元を緩めた。

「いらっしゃい。待ってたわよ」
オレ達が訪れた場所。もはや第二のアジトになりつつある酒場までもがクリスマス仕様になっていた。店の中に入ると、暖房の温もりがじんわりと身体に染み入る。
壁際に沿って、カラフルな折り紙の輪が繋がって店内を一周する。どこで調達したのやら、立派な植木の頂点には星飾りのアクセントが光沢を放つ。さらには雪に見立てた綿が所々に乗せられていた。予想よりも雰囲気が出ていたので感心してしまう。
ただし、看板娘のろくろ首は普段通りの服装だった。もっとも、サンタのコスプレされても反応に困るんだけどよ。もしそうなっていたら、可愛いだとか似合ってるだとか言って口説けばいいのか？　難易度高くてオレには無理だわ。

無論、この場にいるのは赤蛮奇だけではない。オレ達に気付いた知り合いどもが次から次へと声をかけてくる。
「お客さん、おそーい」
「ほぼ時間ピッタリやんけ。ところでよ、なんで女将の格好してんだ？　自分の店じゃねーだろ」
「ばんきさんだけじゃ大変だと思って、あたしもお手伝いしてるの。それに、お客さんも和服好きでしょ？」
愛嬌のあるスマイルを振りまきながら、和服と頭巾の鳥少女がその場でくるりと回ってみせる。あざとい。ミスティアも客のはずなのに、勝手知ったる要領で忙しなく行き来しておった。ここの店員と言われても誰も疑いはしまい。あと、いつからオレは和服フェチになったんだ？
さらにもう一人。こっちは働き者の鳥娘とは真逆に、カウンター席で寛ぐ怠けきった姿でプラプラと片手を振ってきた。
「ちーっす。二人がなかなか来ないもんだから勝手に始めちゃうところだったよ」
「まったくもう、どうしてこういう時だけ行動が早いんですか……」
「んー？　あたいはあんたと違って待たせている男もいないしねぇ」
「な……ッ!?」
まるで腐れ縁のダチのような態度で仙人に軽口を叩く赤髪の死神。サボりに定評のある彼女に先を越されるとは驚いた。ダメな方でやればできるタイプかよ。
その小町はといえば、早くも余計なコトを言ったせいで、お怒りの華扇に詰め寄られていた。相変わらず仲がよろしいこって。そのままガミガミと説教モードに入りそうだったところを、上白沢女史が間に入って宥めにいった。あとついでに店主のオッサンもいた。
幻想郷の顔馴染みとのクリスマスパーティー。繁華街のオシャレなレストランとは程遠く、下町の居酒屋というのも案外悪くない。高級レストランでクリスマスを祝ったことなんざ一度もねぇけどな！
ほどなくして、守護者サマのファインプレーによって怒りを鎮めた仙人サマがこちらに戻ってくる。まだ少し頬を膨らませたままなの

だが。おかんむりってやつか。
「本当にあの死神は人をからかってばかりなんですから……！」
「そういうお前も煽り耐性なさすぎじゃねーのか？」
「むー」
文句言いたげにジロリと睨まれた。こっちに矛先を向けてくるのは止めていただきたい。
フッと嘆息染みた笑いを零す。ここは上白沢女史に倣ってオレもこの女を宥めてやるとしよう。
「ま、旨いモン食って機嫌治せって」
「わ、私はそこまで食い意地を張ってませんッ！　綿間部はそろそろ女心を学ぶべきです！」
いかん、逆効果でした。やっぱり慣れないことはするもんじゃねぇぜ。
今度はオレをお説教の標的にしてきやがった華扇を連れて、そそくさと皆が集うテーブルに向かう。小言は適当に聞き流しておく。ってオイ、何故どいつもこいつもそんな生温かな眼差しを寄越してくんだよ。バカ止めろ、そんな目でこっち見んな！
その後、赤蛮奇とミスティアの手によって料理やグラスが続々と運ばれてくる。瞬く間にテーブルが埋め尽くされていった。
そして参加者も料理も全て揃ったところで、なぜかオレが音頭を取ることに。多数決という数の暴力に屈した。まぁいい。本日はお日柄も良く、などとお約束言ってないでさっさと終わらせようか。
この日のために用意したのだという、シャンパンが入ったグラスを掲げる。
「んじゃ――乾杯！」
『メリークリスマス!!』
なんでやねん。
グラスを交わす音を合図に、聖なる夜の宴が幕を開ける。
まずはシャンパンで乾きを潤す。高級酒のイメージを体現した透き通った口当たり、アルコールに混じった炭酸さえも上品に弾ける。

この脚付きグラスといい、よく準備できたもんだ。
オレの隣では美味な料理に舌鼓を打つ仙人サマがはしゃいでおった。
「あ、コレも美味しいですよ。綿間部も食べてみてください」
「ったく、楽しそうだな」
「もちろん、楽しまないと損ですからね」
取り皿が一杯になる勢いで、豪勢な食事に次々と箸もといフォークを伸ばす。この日を一番楽しみにしていたのは、あるいは彼女ではなかろうか。今の華扇は仙人というより、パーティーに浮かれる年頃の女子にしか見えない。
ご馳走に囲まれて幸せいっぱいの少女が眩い笑顔をみせる。ちなみに先ほどから彼女が頻りに勧めているのは牛ロースのステーキである。焦げ目までもが香ばしさを演出し、滴る肉汁が食欲を誘う。まさしくご馳走の名に恥じない豪華メニューの王道といえよう。
さらに不意打ち。見てばかりのオレに業を煮やしたのか、ついに華扇が強行手段に打って出た。
「はい、あーん♪」
「むぐぉっ!?」
熱ッ!?　……くはなかったけど危ねぇだろうが！
一口サイズにカットされたステーキを口元に運んできたかと思いきや、ノータイムで口の中に突っ込まれる。
いくら一口サイズとはいえど結構な厚切り。噛めば噛むほど牛肉の塊から肉汁が溢れ出し、濃厚な味付けのソースとのハーモニーを奏でる。グルメ番組にあるような口の中で溶ける類いとは真逆をいく、これぞ肉って感じの肉だ。
何度も何度も咀嚼してようやく飲み込む。ついでに酒で口直し。
そんな具合でオレが食べる様子をじっくり眺めていた女が、悪びれもなくニコニコと聞いてきやがった。
「美味しいですか？」
「そら美味ぇけどよ。タイムラグなしでフォーク突っ込んでくんなや……」

「もう一つ食べますか？」
「いや聞けって」
　コイツもう酔ってんじゃねーかと疑わざるを得ない。ただ、この女が酔っ払っている姿なんざ未だに見たことないんだけど。はたして泣き上戸か、あるいは笑い上戸か。
　結局、勢いに圧し切られてもう一つ食べさせられた。ったくよぉ、美味ぇじゃねーかよ。
　やがてクリパも佳境を迎える。
　あれだけあった料理も随分と減ってきた。こっそり揚げ芋を占領しながら、何気なしに思ったことを口走ってしまう。迂闊にも、まるで過去を反省していない内容を。
「つーか、あえてステーキなんだな。クリスマスなら七面鳥が定番だろうに」
「……お客さん」
「待て待て待て分かった分かった今のなし。マジでステーキ最高」
　気配もなく真後ろに立った鳥娘の威圧感を背に受け、秒単位で白旗を上げて許しを乞う。そうだった、この女がいたのを失念していた。そら鶏肉なんて出るワケない。
　両手をホールドアップしながら和服女将と向き直る。ヤツはケーキ用のナイフを持っていた。怖ッ！
「と、ところで今日は歌わねーのか？　クリスマスソングの一つや二つ知ってんだろ」
「そうねぇ、どうしようかなー……お客さんはあたしの歌聞きたい？」
「フッ、むしろ女将の歌を聞きに来たと言ってもいい。それがないとクリパじゃねぇ」
「やだもう！　そこまで言われちゃったら、リスエストに応えないといけないじゃない」
　満更でもなさそうにはにかみながら手で煽ぐ。よし、ご機嫌取り成功。やったぜ。
　なお、あからさまな言い回しだったせいか、華扇のジトッとした視線が痛い。頬が膨らんでいるのはメシを詰め込み過ぎたからであろ

う。お前はリスか。

「しょうがないな～」なんてしょうがなくなさそうに言いながら、ミスティアは全員から見える場所へ移動していった。彼女の行動に気付いた参加者達がお喋りを中断し、鳥の翼をもつ少女に注目する。

さりげなく赤蛮奇が店の明かりを落とした。瞬く間に辺りが暗転する。唯一、キャンドルの火が暗がりに灯った。まるで教会か礼拝堂にでもいるかのような感覚。幻想的な雰囲気と、皆が見守る静けさが辺りを包んだ。

そして、歌姫が今宵を祝う旋律を紡ぎ始める。

――ｓｉｌｅｎｔ　ｎｉｇｈｔ　ｈｏｌｌｙ　ｎｉｇｈｔ……

その場にいた誰もが聞き惚れた。ローレライの名に偽りない美声がメロディとなって流れていく。

キャンドルの灯に浮かび上がる歌姫の姿は、さながら祈りの歌を捧げる聖女を彷彿とさせた。幾人かは瞼を閉じて美しい歌声に身を委ねている。

「綺麗……」

桃色の髪をもつ少女が、感嘆の息とともに呟いた。確かに、相変わらず歌が上手い。

されど、ミスティアに見惚れる彼女の横顔もまた目を惹くほどに美しくあり。オレとしてはそちらの方が気になってしまう。この女は自分の容姿レベルの高さを自覚しているのか。どうせ無自覚なんだろうな……

ちょうど彼女の食事の手が止まっている。手近にあったグラスを二つ引き寄せてシャンパンを注ぐ。そのうち片方を華扇に差し出した。パチクリと瞬きする彼女に、讃美歌を妨げないように小声で言う。

「ま、なんだ。改めて乾杯しようぜ」

「……はい、喜んで」

その時の彼女の顔は暗くてよく見えなかったと言い訳させてもらおう。

わずかにグラスが重なる福音は、同じタイミングで歌い終わった鳥

少女に贈る拍手と歓声に消えていった。

to be continued

番外編　続　「聖なる夜は桃色に染まる」

楽しい時間はあっという間に過ぎる。というのも、よくある話だ。
あれから時を経て宴もたけなわ。一人また一人と帰路につき始めていく。クソ真面目な上白沢女史が後片付けを申し出ていたが、ろくろ首の看板娘に「気持ちだけで貰っておく」と言われ、さらに女将からは「いいの、いいの！　私達だけで十分だから！」と押し切られていた。もうミスティアも店員でいいんじゃねーかな。
守護者サマが申し訳なさそうに店を後にするのを、卓上に頬杖を突いたまま見送る。そもそも人里の飾りつけで指揮を執っていたのもあの人だ。仕事がデキる女ってのも辛いな。なんだかんだで一番大変だったんじゃねーのか？
奥の厨房に引っ込んでいった連中を除き、残っているのはオレと華扇。それと……
「くかーっ　すぴー」
カウンターに突っ伏して寝息を立てている死神娘の三人だけとなった。この光景だけ切り取ればいつもの酒場である。
お優しい仙人サマが、店から借りてきた毛布を掛けてあげていた。呆れながらもどこか優しげな雰囲気を感じる。今回ばかりは叩き起こす気はなさそうだ。
「しかし、コイツいっつも寝てんな」
「ですね。いつ起きるのやら……」
顔を見合わせて揃って苦笑する。
さっきまで一気飲みしては「っかー！」とか男前な声上げてたってぇのに、いざ寝てしまうと静かなものだ。若い女が店内で堂々と眠りこけるのもどうかと思うが。もっとも、それも今更ってか。
おかげでこの場で起きているのは、オレと華扇の二人だけ。
――待てよ？　これは絶好のチャンスじゃないか？　というか、タイミング的にも今しかないだろ。
「華扇、ちょっと手ェ出してくれ」
「はい？　どうしたんですか？」

「いいから」
怪訝な顔をするも彼女は素直に手を差し出してくれた。包帯に包まれた手のひらに、上着のポケットから出した小箱を載せる。贈り物用に包装されたものを見て、華扇が目を見開いた。
どうにも周りの目もあって隠していたままだったが、意外なところで機会が巡ってきたものだ。なんせ、他の連中の前で堂々と渡そうものなら何を言われるか分かったもんじゃねーし。
「えっと、これは……？」
「一応、オレなりのクリスマスプレゼントだよ……察しろ」
「……」
うぉい、なんでそこで黙っちまうんですかねぇ。
まるで信じられないものを目の当たりにしたかのような顔をされた。それほどまでにオレがプレゼントを用意してきたのが驚きだったらしい。うん、ぶっちゃけオレもそう思うから心配すんな。
小町の寝息だけが聞こえる静寂が何ともいたたまれない。そんな中、ようやく華扇が口を開いた。
「あの、開けてもいいですか？」
「好きにしてくれ」
おずおずと尋ねてくる彼女の表情をまともに見れなくて、顔を横に逸らしながら雑に答えてしまった。
我ながら気色悪いことに、照れ隠しが見え見えなぶっきらぼうな態度になっていやがる。とんだ捻くれ者がいたものだ。夜に生きる男がこの有様とは失笑だぜチクショーめ。
華扇がやたら丁寧に包み紙を解く。そして、蓋を開けると中に入っていたもの――リボンの髪飾りがその姿を覗かせた。
博麗の巫女や赤蛮奇が身に着けているような大きいデザインではなく、野花のように小さくて可愛らしいもの。女物のプレゼントを買った経験なんてないため、オレのセンスだとこの辺が限界だった。
柔らかな桃色の髪に添えるとすればどんなカラーが良いか想像し悩み抜いて、春の訪れを思わせる萌黄色を選んだ。オレなりに頑張ってみたつもりだが、受け取った相手はコレをどう思うだろうか……

緊張で手汗が滲むのを隠しながら、華扇の反応をうかがう。
「素敵……」
彼女は愛おしげに髪飾りを見つめていた。心なしか瞳が潤んでいるようにも映る。素敵、と言ったからには気に入ってもらえたらしい。恐らくは、そう解釈しても良いはず。って、何だこの青春劇は。
「付けてみても？」
「そら当然、良いに決まってんだろ。そいつぁお前のモンだからな」
「では……」
わざわざオレに確認してきてから、華扇は箱からそれを取り出した。片側のシニョンに合わせるようにして髪飾りを結ぶ。桃色のミディアムヘアに萌黄色の蝶々が留まる。
その髪飾りは彼女に似合っていた。少なくとも、オレがしばし見惚れてしまうぐらいには。
「どうですか……？　綿間部」
「い、いいんじゃねーの？　お前の好みに合うかイマイチ自信なかったがな」
「もちろん、とっても嬉しいです。ありがとうございます……ずっと大切にしますね」
そう言って、華扇はいつになく可愛らしく微笑んできた。髪だけではなく頬まで桜色になっている。刹那、心臓が高く鳴った気がした。これは、マズイ。
かくしてオレは己の限界を悟った。その辺に吊るしてあったコートを奪い取り、焦りから雑っぽく袖を通す。
「じゃ、そーゆーことで。あとはヨロシク！」
「えっ？　あ、わっ……綿間部ッ!?」
早口で捲し立ててついでにグッと親指も立てて、まるで逃げるかのごとく酒場を飛び出した。一陣の風と化して。困惑する華扇の声を背中に受けながら、無駄に熱くなった顔面を冬空の冷気で涼ませながら。
だーもう！　こちとら女にプレゼントを贈るなんざ、まともにやってきたためしがねぇんだっつーの！

お礼を伝えたら、彼が逃げ帰るみたいに店を出て行ってしまった。
未だに火照りが消えない頬に手を添えて、茨木華扇は深く息を吐いた。高鳴る鼓動が治まらない。
まさか彼からクリスマスプレゼントを貰えるなんて思ってもみなかった。いや、本音を言ってしまえばほんの少しだけ期待していたけれど。でも、ホントに貰えるなんて。
しかも、女の子が身に着ける髪飾り。私がこれを付けているところを想像して選んでくれたのかしら。そんな素振り、全く見せなかったくせに。反則だと思う。馬鹿者。
「……やっぱりズルい人」
「あーあー、惚気てくれちゃって」
「ひぁあああああああっ!?」
ガターンッ!と盛大に音を立てて仙人少女が飛びあがる。見れば、爆睡中だったはずの死神少女がニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべていた。油断した、よもや狸根入りとは。さっきまでとは違う意味で五月蠅い鼓動が鳴り止まない。
「こ、小町!?　あなた一体いつから起きていたんですか!?」
「ついさっきねー。起きようにもあんたらが妙な空気してるもんだからさ。いやはや困ったもんだよ」
「はぅっ……」
今の今まで繰り広げていた贈り物の一幕をしっかり傍聴されていた模様。知ってしまえば、恥ずかしさが一気に込み上げてくる。顔に熱が集まっていくのは避けられなかった。
パクパクと口を開閉させて声にならない声を上げている桃色の髪の乙女に、赤髪のお節介焼きが口の端を上げる。
「さーてと。あたいもボチボチ帰ろうっかなー。んで、お前さんはどうするのさ？　クリスマスはまだ終わってないよ」
小町がわざとらしい物言いで問うてくる。本当に、余計なお世話だ。
皆で楽しくクリスマスパーティもした。彼から贈り物だって貰え

たし、咄嗟だったけれどこちらも仕込みはしておいた。充実したひとときを過ごせた。

でも、このまま終わりにするのは、どうしても……

「……私は」

「はっ……はっ……」

息を切らせながら人里の中を駆け抜けていく。とはいえ酒も入っているせいで長くは保たない。曲がり角を抜けた先で足を止める。呼吸を整えていくうちに頭も鮮明になってきた。ったく、無駄に気疲れしちまった。

どうにも格好つかないが、無事にプレゼントを渡した事実に変わりはない。サンタクロースのマネゴトも楽じゃねーわ。もう二度とやるまい。多分。

悴んだ手を温めようと、空っぽになったポケットに突っ込んで――

「……あ？」

何かが指先に当たった感触が伝わってきた。可笑しい、ブツは渡したからもう何も入っていないはずなのだが。

中にあった物を引っ張り出す。すると、綺麗にラッピングされた小さい箱が出てきた。当然、オレがあの女にあげたものではない。水色の包み紙にメッセージカードがくっ付いていた。

『綿間部へ　メリークリスマス』

「……おいおい、仙人のくせに手癖が悪いんじゃねーの？」

いつの間にこんなのを入れられたのか、まったくもって見当がつかない。しかもオレよりも気障なやり方してくれんじゃねぇか。こっそりポケットに忍ばせておくなんてよ。つーか、オレもそうすりゃ良かったと今更になって気付いた。これは酷い。

ともあれ、オレ宛てなのだから開けても問題あるまい。帰ってからじっくりでも構わないのだが、どうしても中身が気になってしまう。結局、その場で開けることにした。

箱の中身は、艶が出るまで磨かれた楕円形の黒い石。宝石、というよりはパワーストーンの類いであろうか。さらによく見ると、内側に

もメッセージカードがもう一通だけ入っていた。
『黒曜石には、困難に打ち勝ち自分を成長させる効果があるといわれています。お守りとして持っていてくださいね♪』
「マジメか」
単純にオレの通り名から黒い石にしたのかと思ったら、ちゃんと相応の意味があったらしい。さすが、仙人サマは博識なこって。幸い、誰の目にも触れていなかったのは有難い。さすがに裏通りで人知れずニヤついているところを見られたら御用になっちまう。
決してなくさないように、黒曜石を上着の内側に仕舞い込む。彼女に託されたお守りを身に着けている。そう考えると、なるほど確かに気持ちが高揚する気がしないでもない。
そのまま立ち尽くしていると、おもむろに誰かがオレの背にぶつかってきた。いや、ぶつかるというより、背中にしがみついてきたといった方が正しいかもしれない。
伝わってくる息遣いと体温から、振り返らずともそれが誰か理解した。
「……華扇」
「綿間部……」
「お前、小町はどうしたよ?」
「彼女ならあのあとすぐに目を覚まして帰りました。どうしても、あなたに会いたくて追いかけてきたんです」
女の細腕がオレの腹辺りに回され、より一層に体が密着してくる。彼女は今、どんな表情をしているのだろうか。ついさっきまで共にいたというのに、わざわざ追いかけてきたという。その意図は。
心臓の鼓動を感じる。それが自分なのか彼女のものなのか分からない。
「ああそうだ。プレゼントあんがとよ。いつの間に入れたのかまるで気づかなかったわ」
「だって、綿間部が自分だけ渡して逃げるから。だから、こうするしかなかったんですよ……？　私だってちゃんと渡したかったのに」
「そいつぁすまんかったな」

前に回された腕にわずかに力が籠る。離したくないとでも言いたげに。華扇の吐息がすぐ間近に聞こえる。彼女があまりにしおらしいせいでオレまで落ち着かなくなってくる。どうしてこうなった。とりあえず、当たり障りのない口振りで問う。

「で、なぜにオレを追いかけてきたんだ？　忘れ物でもあったか？」

「……分かりませんか？」

桃色の少女が背中に顔を埋める。恥ずかしそうなか細い声が鼓膜をくすぐった。

「あなたと二人きりで過ごす時間も欲しかったんです……今日は特別な夜でしょう？」

嗚呼、これもクリスマスの魔法というやつだろうか。

彼女の腕を解いて正面から向き合う。顔を真っ赤にして俯く少女の髪に、萌黄色の髪飾りが雪明りに煌めいた。無意識のうちに、胸ポケットにしまったお守りの感触をコートの上から確かめる。形はどうあれ、プレゼント交換になったってか。やれやれ、回りくどいよな。お互いに。

やはりオレも今夜は浮かれているらしい。ただでさえ美人だというのに、華扇がいつにも増して綺麗に見える。フッ、夜に生きる男がエラくロマンチストになってしまったもんだ。

わずかに雪が付いた桃色のミディアムヘアをそっと撫でる。

「ま、これからがオレの時間だしな。寝るのはサンタを待つ良い子ぐらいだろうよ。とりあえず、どっか温かい所にでも行くとするか」

「はい。それと……私のサンタクロースは目の前に居ますよ？」

「……勘弁してくれ」

よくもまぁそんな小恥ずかしいセリフを言えるな、お前は。

さて、というワケでオレと彼女のメリークリスマスはもう少し続きそうだ。このあとどうなるかは、皆さんの想像に任せることにしよう。

再び歩き始めようとした時、ふいに華扇が顔を寄せて耳元で色っぽく囁いた。

「私をこんな気持ちにしてくれたんですから……責任、とってくださ

「いね？

Merry Christmas

第十六話　「赤髪エンカウント　～サボりな死神～」

オレは走った。

必ず、かの桃色仙人の女から逃げおおせねばならぬと決意した。気持ちだけならば少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。野を越えて山を越えて、どこまでも道なき道を突き進む。

ただし、限界も早かった。

そもそも夜型の人間が日中に全力疾走するなど苦行でしかない。これは酷い。

「ぜぇ……ぜぇ……おえっ」

案の定、スタミナ切れを起こして崩れ落ちる格好で道端に転がった。ご安心ください、吐いてませんよ。

人里からどのくらい離れただろうか。幸いにも、待てど暮らせど追手の姿はなかった。フッ、勝った。

ダサいことに身体中が悲鳴を上げていやがる。運動不足のつもりはないが、いかんせん無理をし過ぎた。仰向けのまま大の字に両手両足を伸ばす。視界一杯に夏色の青空が広がった。

「あーくそ、ダメだ動けねェ……」

緩やかな傾斜になっている草原。青春ドラマにでも使われそうなロケーションに居た。下り坂の麓あたりから清涼なせせらぎが聞こえてくる。

荒い呼吸はしばらく収まりそうもない。汗で衣服が張り付いて不快だった。唯一、涼しい風が吹くのが救いといえた。

ところで、何故にオレはこんな運動部みたいなマネをさせられているのであろう。いや、全てあの早とちり仙人が悪い。オレは悪くねェ。ありゃ不可抗力の事故だろうが。バッチリ見ちまったのは認めるけど、別にガン見したワケじゃねーぞ。って、一体オレは誰に言い訳してんだ？

まぁいい。もう少し休もう。どうせ他には誰も――

「ぐー……すやぁ……」

居たらしい。

「……ｏｈ」

怠い身体で起き上がりそちらを見やると、そいつが寝ッ転がっていた。

若い女だ。先のろくろ首に続いて二人目の赤い髪。こちらは左右で二つ結びにしてあるものの、ツインテと呼ぶには些か短かった。髪を下ろしてもせいぜいセミロングくらいだろう。

女性の中では背丈がある方か。さらに、華扇に負けずとも劣らない豊満な膨らみが衣服を押し上げていやがった。紺色と白を組み合わせた和服モドキの装束を黒い帯で締め、その上をなぜか小銭付きの紐で留めている。どういうセンスしてんだ、コイツ。

「むにゃむにゃ……」

盛大に眠りこけていても女としての矜持は残っているのか、いびきや鼻提灯は見受けられなかった。とはいえ、組んだ両手を後頭部に敷いて、いかにも三つ葉を咥えていそうな寝姿には逞しいものを感じる。男前なやっちゃな。

こんな場所でうら若き乙女（もはや慣れたが結構な美人）が無防備に昼寝している様子を晒して、色々と大丈夫なのだろうか。が、彼女の傍らにあるブツを見てしまえば、そんな邪な考えは跡形もなく消し飛んだ。

「うぉい、何やねんコレ……」

件の女の身長とほぼ同等の長さの得物。湾曲した刃が鈍い光を渡らせる。一目見ただけでもゾッとする、禍々しい大鎌が横たわっていた。

異議なし且つ弁解の余地なし。この女、誰がどう見ても死神である。そういえば、いつぞや華扇から仙人について聞いたとき、死神に関してもどうたら言っていたっけか。マジで出やがった。

しかしながら、コレを見ちまったら最後、巷に溢れる死神のイメージが覆されると言わざるを得ない。漆黒のローブにフードを被った髑髏アタマかと思いきや、現実はご覧の通りの有り様。そして、もはやツッコむまいと思っても言わずにはいられない。

なんだこの女子レベルの高さ。ラブコメの世界みてぇだなオイ。

一体主人公はどいつだ。
「う〜ん……んぅ？」
声に出さずにツッコんだのだが、こちらの視線を受けたせいか女が目を覚ました。
寝ぼけ眼でのっそり起き上がると、「んーっ！」と大きく背伸びをしてついでに欠伸も一つ。それから瞼を擦ると、ようやくオレと目があった。
死神女が呑気に尋ねてくる。
「誰だい、お前さん？」
「そらこっちが聞きてぇわ」
思わずそう返してしまった。幻想郷に招かれてからツッコミ役になりつつある気がする。いや待て、状況に流されるな。オレは夜に生きる男。クール＆スタイリッシュにいかねば。
それにしても、とても魂を刈り取る輩とは思えないのんびりした態度。飲み屋に行けば誰とでも打ち解けてしまいそうな、気さくな印象を受ける。だが、そこの物騒なブツが彼女の持ち物なのは間違いあるまい。
赤髪の女はその場に胡坐をかいてオレに向き直ると、にひっと笑ってみせた。
「じゃ、今から自己紹介しよっか。あたいは小野塚小町。しがない水先案内人さ」
「こりゃご丁寧にどーも。オレは黒岩と呼ばれている。夜に生きる何でも屋だ」
「夜に生きるって、今昼じゃん」
「不本意かつ複雑な事情があんだよ。そう言うお前こそ船頭気取りみてぇだが、ソレがあるってこたぁ死神なんだろーが」
刃が剥き出しで野ざらしにされているデカい鎌を指差す。あの世からのお迎えの象徴としては最たるものだろう。それも天ではなく地の方から来た者として。
オレが示す先を目で追った小野塚小町とやらが、納得した表情を浮かべて肩をすくめた。

「確かにあたいは死神だけど、そっちの担当じゃないよ。あたいの仕事は、あくまで魂を三途の河の向こう岸まで運ぶこと。自分の船でね。だから船頭というのも間違いじゃない」

そう言ってカラカラと陽気に笑い飛ばしてみせる。

つーか担当部署あんのかよ。まるっきり会社じゃねーか。かなり昔に観たドラゴンボールでもそんな感じだったが、死神ってぇのはあの世の公務員なのか。就職率高そう。

そんな具合で地獄とはまるで無縁そうな女子が、楽しげにオレとの距離を詰めてくる。近ぇよ。どっかの仙人を思い出すだろうが。

「これも何かの縁ってやつだね。ちょうど休憩時間だったんだけど、手持無沙汰で暇してたところでさ。ちょいと話し相手になっておくれよ」

「あ？　休憩中だぁ？」

「そ、休憩中」

休憩というフレーズを繰り返して頷く赤髪の女。

死神が休み時間とは平和なもんだ。ひょっとすると、桃色の仙人サマが言っていたサボりの死神ってコイツのことなんじゃねーのか？

その女は話し好きな性格だった。まるで立て板に水を流すような勢いで、彼女の身の上話が続いた。

小野塚小町は幻想郷を担当する死神であった。されど肝心の幽霊が無口なため話し相手が務まらず、船の上では一人語りばかり。その一方で、彼女の上司はとんでもない説教好き。一度始まると終わりが見えなくなると愚痴を零していた。説教と聞いてオレまで頭が痛くなってくる。類友ってか。

ついでに、かつて幻想郷中の花々が季節ガン無視で咲き誇る異変があったことも聞かされた。魂が溢れて輪廻が云々とか解説もされたが、一言だけ言わせてもらおう。なるほど、分からん。

やがて死神少女がひとしきり話し終えれば、必然的に今度はオレの話題に移り変わる。

「で、なんでお前さんはこんな所にいるのさ？　彼岸に行きたいなら別の道だよ」

「とある理由で説教バカの仙人から逃げてきたんだよ。来たくて来たワケじゃねェ。気付いたらここまで来ちまっただけだ」
「あー……あいつかぁ。うちの上司といい勝負だよ？　あの説教好きときたら。いやはや、お互い様で嫌になっちゃうね」
おどけるように小町が大げさなリアクションをとってみせた。やはり知り合いだったか。
ところで死神の上司って誰だ。もしや魔王あるいは閻魔大王か。しかも、そいつも女の予感しかしないんですけど。
「って、今彼岸とか言わなかったか？」
「そうだよ。あれ、お前さん知らなかったのかい？」
きょとんとした顔で返される。
聞けば、生きている人間も三途の河へ歩いて行けるというデタラメっぷり。妖怪の山の裏側、中有の道を通ると件の場所まで繋がっているそうだ。駅から徒歩五分みたいな軽いノリで言える方も大概である。ま、死神だから仕方ない。
もっとも、死者の通り道にわざわざ足を運ぶとかオレだったら御免被る。
「それよりもお前さんの話も聞かせておくれよ。外来人なら『外』の世界の面白いネタの一つぐらいあるんだろう？」
「どうだかなぁ。笑い話は少ねーぞ」
期待の籠った眼差しを向けられる。実際は少ないどころか、人に聞かせられる類いの面白エピソードなんて持ち合わせていない。
無論、繁華街で何でも屋として生きていくのは一筋縄ではいかなかった。ドン底の最底辺から這い上がってくるような日々。今のオレに至るまで、それはもう幾つものヤマを越えてきた。
楽しかったかどうかはさて置き、そういう意味では多少なりとも充実していたと思う。
そこには確かに生きている実感があった。「オレ」という存在を証明できた。不良グループやヤクザ紛いのチンピラ連中が関わってくる危ない依頼になるほどに、その感情はより一層強くなる。
ギリギリのスリルが、命を張る瀬戸際が。そして、失うものがない

己だからこそ実行できるという自負が、この身体を駆り立てた。
自分にしかできない依頼を引き受ける、フリーランスの何でも屋。
それこそが他ならぬオレの個性であり、同時に、有象無象に埋もれてなるものかという叫びでもあった。
別に死にたがりだったワケじゃない。だが、少なからずオレも狂っていたのかもしれない。まったくもってオチもなければ救いもない、どうしようもない話だ。
八雲紫と出会った時のように、初対面の相手にそんなコトまで喋ってしまっていた。場の空気が辛気臭くなる。何やってんだ、オレは。
気分転換に小さな水流にまで近付いて頭を冷やす。綺麗な水で顔の汗を洗い流していると、背中越しに小野塚小町の声が聞こえた。
「お前さん、碌な死に方しないだろうね」
「だろーな。天国なんてオレには眩しすぎるってもんだ」
憐れむトーンにはあえて気付かないフリ。というか話題を蒸し返すなよ。あとで思い返した時に恥ずかしくなるだろ。
しかし、死神に言われると説得力が半端じゃないわな。地獄に落ちるほどの大罪を犯した覚えもないが、決して褒められた生き方はしてこなかった。ったく、まともじゃねーよな。
ま、何でも屋などと名乗っちゃいるが、それで誰かのために生きたことなんざ――
『あなたの仕事は、困っている人を助ける立派な仕事なんでしょう？
そういうところ、私は尊敬しているんですよ。綿間部、引き受けてくれますか……？』
「……」
「どうしたのさ？」
ふいに思い出した。いつぞやあの女に言われた、何てことない会話の切れ端が記憶の映像となって表れる。報酬次第で依頼を引き受ける。ただそれだけの仕事だと、そう思っていた。けれど、そういう見方もできるらしい。
やれやれ、そんな大それたモンじゃねーんだけどなぁ……どういうワケかあの女が絡むとどうにも調子が狂ってしまう。どうなってん

だか。

濡れた顔のまま、死神少女に向き直る。タオルやハンカチを持ち歩くような几帳面ではない。この程度なら自然乾燥で良いだろ。

フッとニヒルに笑い、夜に生きる男らしく気障に答える。

「何でもねぇよ。どのみちオレ自身が地獄だ。とっくに落ちるとこまで落ちているってな」

「へぇ……」

ただし、どうやらその一言は彼女にとって禁句だったらしい。

その身に纏う雰囲気がガラリと変わった。相棒の大鎌を携えながら、死神が立ち上がる。

「人間風情が一人で地獄を名乗ろうなんて、死神も舐められたもんだねぇ」

「何だ、気に障ったか？」

「いいや。ただ、ちょーっとお灸を据えてやる必要はありそうだと思ってねぇ。寿命を延ばすのも大罪だけど、死にたがりってのも辛気臭くていけない。それに、命を粗末にするのは罰当たりってもんだろう？」

陽気な笑みは変わっていない。にも拘わらず、声色は冷たく化していた。もしやこれは俗にいう地雷ってヤツではなかろうか。僅かに背筋が凍る。そもそも死にたがり違うと言ってんだろ。

そう訂正したところで目の前の相手は聞く耳を持つまい。飄々としながらも見せつけるように大鎌を弄んでいやがる。フッ、これあかんやつや。

とはいえ、お灸を据えてやると言われてハイそうですかと受け入れる筈もなし。生憎と、こちとら説教も折檻も間に合っているのだから。

「本当ならあたいの仕事じゃないんだけどね。たまには死神らしいマネするのもありかな」

「あーそうかい、そら仕事熱心なこって。さぞかし上司も鼻が高いだろーなぁ？」

「あ、やっぱりそう思う？　これなら多少のサボりは大目に見てもら

えるかも」
「って、サボりかい」
物騒な状況とは正反対に、オレと死神は他愛のない軽口を交わした。なお、休憩は自主的なものだった模様。サボりと自覚しておきながらこの堂々たる佇まい。さすが死神である。
禍々しく曲がった刃がこちらに向けられる。当たれば即死の威力を兼ね備えているのは想像に容易い。
「心配しなさんな。なにも命までは取らないよ。ほんの少しだけ痛い目に遭ってもらうだけ。そうすれば、死ぬことがどんなに恐ろしいことか身を以って知るだろう？『限りある命、大事にしましょう』っていうお勉強の時間だと思って受け入れなよ」
「そういう気遣いならノーサンキュー……つっても遅いか」
諸君、本物の死神を前にして安易に地獄を語るなかれ。脅しでも冗談でもドッキリでもない、偽らざる本気なのだとその瞳が語っている。
というかさぁ、死なない程度に手加減しながら相手をいたぶるとかドSかコイツ。峰打ちだから安心――なワケあるかい！　あんなリーチの長い棒切れ（下手すりゃ鉄製）で打ん殴られたら一発で骨まで達するわ！
さて。本日のオレのスケジュールには死ぬ予定も殺される予定も入っていない。当然、死神女にボコられる予定も。だったら、どうにかしてこの場を切り抜けるしかないだろ。お前こそ、夜の繁華街を生き抜いてきた何でも屋をナメんじゃねーぞコラ。
小野塚小町が得物を掲げ、さながら大道芸人のような華麗な手さばきで回していく。得意げな顔が若干腹立たしい。コイツもドヤ顔しやがってからに。
再び凶器を構え直し、黄泉の使いがハッキリと告げる。
「お前の魂いただくよ！」
ってオイ!?　やっぱりタマ取る気満々やないかーいッ！

つづく

第十七話「赤髪エンカウント　～サボりな死神　ｐａｒｔ２～」

「そぉらっ」
「おわッとぉ!?」
　風を切り裂く音が迫る。膝を曲げて姿勢を低くし横薙ぎの一閃を躱す。空振りした凶器が頭上を通り過ぎた。危うくオレまで赤蛮奇みたいになる寸前の出来事であった。
　うぉい、躊躇いなく喉を狙ってきやがったぞあの女!?
　仙人から逃げていたら今度は死神に襲われる。八雲紫に招かれて（実質拉致）きたが、幻想郷とは凄まじい魔境だった。これぞ異世界などと呑気している場合じゃない。
「ほらもう一丁！」
「だーもう！　危ねェだろうがッ!?」
「あっはは！　危ないの一言で済ませるんだねぇ、お前さんは」
　胴体を真っ二つにせんと死神の刃がギラリと閃く。対して、バックステップで間合いをとる。紙一重で射程距離から外れられた。切っ先がシャツを掠め、夏だというのに冷たい汗が出てくる。
　これぱかりは洒落にならん。当たったら「ちょっと痛い目」で済むどころの騒ぎじゃねーぞ。
（……しかし、まぁ）
　死神に向かって地獄を名乗るのがＮＧワードだとは我ながら失態としか言えない。
　ただ、小野塚小町には申し訳ないが別に深い意味はなかったりする。ＳＫＬの名が付くマジンにあった名台詞を借用しているだけに過ぎない。なにしろダークヒーローはオレの憧れ。なぜならオレは夜に生きる男。目指せシティハンター。
「うおっ……」
　足首狙いを跳躍で避ける。オレに代わって雑草が刈り取られていく。理不尽な巻き添えを喰らった草どもの断末魔が聞こえた気がし

た。すまぬ。

とはいえ、人気のない野原で死神に狩られてひっそりと野垂れ死ぬってぇのは御免だ。理想の最期とは程遠い。

「あらら、これも避けられちゃったか」

さして気にした風もなく赤髪の死神がピュウと口笛を吹く。世にも物騒なお遊戯はまだ終わりそうもない。

（可笑しいなぁ……）

小野塚小町は心の中で首を傾げていた。

もともとはちょっとしたお節介のつもりだった。ハッキリ言ってしまえば、件の発言については何も気にしていない。そもそも、そんな程度でいちいち怒ったりするものか。

サボりついでに笑い話でもと期待してみれば、返ってきたのは何でも屋としての彼の生き様。おかげで、この外来人が「ワケあり」だと察するには十分だった。

どういう過去を背負っているのかは知らないけれど、恐らくは無自覚であろう自己犠牲の精神。生き方としてはあまりにも歪な形をしていた。自ら進んで危険な橋を渡りたがり、好んで災いの渦中に飛び込もうとする。

（けど、それじゃあいけない）

そのような生き方を繰り返していたら、いずれ本当に死を迎えた時、上司であるあの方から「黒」と判決が下されかねない。なぜならば、それは善行と呼ぶには卑屈過ぎる。

地獄から死神がお迎えに行く、というのは我々が広げた嘘だ。それどころか、限りある命で精一杯に生きている人間を見ると嬉しくなってくる。反対に、自分の性格からいっても陰湿なのは嫌い。人生楽しくてなんぼだ。

だから軽く小突いて喝を入れてやろうと思った。しけたマネしてんじゃないよ、と。死神らしい雰囲気を出しておちょくってやろうという出来心も少しだけあって、つい調子に乗ってしまったけれど。

……でも、これはちょっぴり予想外。

「おりゃあ！　まだまだぁッ！」
「ちょおまっ、待てや！　いい加減にオレの話しを聞けぇい!!」
　これまで見てきた死にたがりや八雲紫に食料として連れてこられた外来人とは明確に異なる、その目つき。ぶっきらぼうな瞳の奥に途方もない執念の炎が燃え滾っている。
　さらに、先ほどから攻撃が全然当たっていない。ことごとく回避されている。しっかりと目を逸らさずに、こちらの動きを見切っている。
　死神の鎌を差し向けられてなお彼の態度は変わらない。へっぴり腰になるでも這いつくばって逃げ惑うでもなく。
（お前さん、実はとんでもない男だったりするのかい？）
　もちろん多少の手心は加えている。そうはいっても、ただの人間しかも外来人が、死の使いを前にしてこうも堂々といられるものなのか。
　やがて小町は「そうか」と考えを改めた。彼は自分が思っていたような自己犠牲の塊ではない。死にたがりなんて以ての外。あの何でも屋は幾度も修羅場を切り抜けていくなかで己を培ってきたのだろう。より強くあるために。ドン底から這い上がってくるためのハイリスクハイリターン。それこそが、現在の彼を作り上げた礎なのだ。
「参っちゃうね、こりゃ……」
「あ？　何がだ？」
「んーん、こっちの話しさ」
　生きることに投げやりな不届き者かと思いきや、その正体は野獣のような執念の持ち主だった。嬉しい誤算に気分が高揚する。面白い。もっと知りたい。この男に興味が湧いてくる。
　弾幕ごっこやスペルカードルールなら手札を全て避けられた時点で勝敗が決していた。だけど、これは弾幕ごっこではない。だから、まだ終わりじゃない。
（もっとあたいを楽しませておくれよ！）
　横薙ぎ、振り下ろし、掬い上げ、袈裟切り、大回転。死の狂想曲が

踊り狂う。
　仰け反り、横っ飛び、バックステップ、しゃがみガードから滑り込みの緊急回避で全ていなす。
「ぜぇ……はぁ……くそったれ」
　悪態の一つでも吐かねばやってられない。いつまで続くんだ、この展開。
　しかしながら、ヤツの得物がデカい鎌で逆に助かった。振り被る動作が大きいから攻撃パターンもおおよそ分かる。殺気だとか狙われている気配を何となく察することができる。
　おっかない連中を撒く逃走劇で身につけたモンだが、数少ないオレの特技だった。ま、さすがに鉛玉を避けられるほど人外じゃねーけど。兎にも角にも、避けと逃げはオレの十八番ってワケだ。ちなみに奥の手が切り札を使ったフェイクの脅しである。
「あはは！　お前さんスゴイ、スゴイよ！」
　ところで赤髪の女が途中からメッチャ楽しそうにしていやがる件について。あるいは標的を狩る喜びに打ち震えているのかもしれない。やはり死神ということか。とても寝起きとは思えないアグレッシブな動きに戦慄する。
　アクション洋画ばりの神回避を披露しつつ言葉を返す。
「そりゃどーも！　じゃあ止めにしねーか？　さっきのが気に障ったなら謝るからよ」
「別に気にしちゃいないよ。それよりも、女をその気にさせておいて終わりってのはあんまりじゃないかい？」
「誤解を招く言い方やめーや」
　いつの間にか趣旨が変わっていた。どうしてこうなった。っていうか気にしてなかったんかい。今までの件は何だったんだマジで。
　このままじゃ埒が明かない。それ以前にオレが力尽きてしまう。忘れているのかもしれんが、こちとら全力疾走で逃げてきたばかりなんだよ。
　複数の意味でくたばる前にさっさと逃げるしか――
「あ、逃げようったって無駄だよ？　あたいの能力でお前さんはもう

逃げられない」
「マジかよ……!?」
さらりと残酷な事実が告げられる。
死神からは逃れられない。笑えないブラックジョークがあったもんだ。能力云々はどうあれ最良の手が潰されちまった。だったら――
―
「降参もなしだよ」
「鬼かチクショウ」
「残念、死神さ」
うるせーよ。なにまたドヤ顔してくれちゃってんの、お前は。
残された方法は一つ。やられる前にやる。だが、こいつには相当な縛りがかかってしまう。オレの男としての意地。女は殴れない。
逃走不可、降参も不許可、あげくには抵抗も儘ならない。万事休す。だとしても、こっちが無抵抗のままで終わるってぇのは違うだろ。大体、女一人にボコられたなんてカッコ悪くてあの世に行けねぇぜ
(既に華扇から殴られたり蹴られたりしている)
「……ふぅー」
腹は決まった。
勝利条件、小野塚小町から大鎌を奪い取ること。死神のアイデンティティを取り上げられてしまったら、さすがにあの女も冷静ではいられまい。ただし、あれはリーチが長く広範囲に届いてしまう厄介な代物。迂闊に飛び込むワケにはいかない。
好機は唐突に訪れた。赤髪の死神が踏み込んでくる。あたかも剣道の面打ちの如く、高く大きく後ろに振り被る。
「とりゃぁああ!!」
威勢の良い掛け声とともに落とされた処刑のギロチン。間一髪、掠めるか否かの瀬戸際で身体を横向きに逸らす。擦れ擦れのところで禍々しい切っ先がザックリと地面に突き刺さった。こうも深く刺さっちまえば容易に引っこ抜けねーだろ?。
「そのブツもいただいてくぜ、死神サマよぉ!」
「や、ヤバッ……!?」

オレの台詞と伸ばされた右腕からこちらの狙いに気付いたのか、彼女の顔が焦りをはらむ。大事な相棒を奪われまいと、彼女は大鎌を引き抜こうと力任せに踏ん反り返った。運は女を味方した。オレの手が届きかけた僅差で、さながら童話の大きなカブみたいに先端がスポッと地面から抜けた。

しかも小町もテンパっていたせいで全力を出したのだろう。すっぽ抜けた勢いを失っていない相方に翻弄されて、まるで万歳をするかのように両腕が真上に掲げられた。

そして、またしても事故は起こってしまった。

むにゅっ

「きゃん！」

「……あ〜」

真っ直ぐに伸びたオレの手は、かつて得物の柄があったハズの、今やガラ空きとなった空間を通り抜けていき、そのまま小町の豊満な胸に吸い込まれていった。いっそ潔いほどに、しっかりと手のひら全体で。

瞬間、全ての思考がフリーズした。

「ん……ふぅ、んあっ」

手のひらに収まりきらない大きな膨らみが、僅かな指先の力加減にも応じて形を変えながら感触を返してくる。マシュマロの柔らかさに合わさって少女の甘い声が鼓膜をくすぐった。想像の斜め上を行く結末に身動きがとれなくなる。主にオレが。

ワンサイドで命懸けな勝負の行方は、どうしようもない形で決着がついてしまった。赤髪の女が戸惑い混じりの上ずった声をあげる。

「さ、さすがにコレはちょっと……んっ！」

「わっ、悪ぃ、決してワザとじゃ……！」

「わ……分かってるから。だからさ？　その、手を……」

気まずさこの上ない空気が辺り一帯を漂う。繰り返すが、さっきまで一方的な命の削り合いをしていた間柄にも拘わらず。不幸中の幸いなのは、小町が羞恥心よりも混乱に心を占められていること。キャーの悲鳴で首チョンパにならずに済んだのだから。

とにかく動けオレの身体、早くそいつから手を放せ。そしてお互いにこのハプニングをなかったことにしてしまえば万事解決――

「わ　た　ま　べ　？」

「――……」

このタイミングで一番聞きたくなかった声を聞いてしまった。どこまでも甘く蕩ける声がオレの名を呼ぶ。それも真後ろから。

ギチギチとぎこちない動作で振り返る。見たら最後、激しく後悔すると知っておきながら。ゆっくりと背後に目を向ける。

「ふふっ、うふふふふっ」

鬼がいた。仄かな光すら宿っていない虚ろな瞳で笑みを浮かべる桃色の髪をもつ説教の鬼が。美しい顔の上側に薄暗い陰が差しており、全身から恐ろしい気炎が立ち上っておった。

悲報、試合終了のお知らせ。

今の今まで居なかったというのに、一瞬にして至近距離まで詰められていた。どうなってんだコイツ。これも仙人の技か。現実逃避でオレまで笑いたくなってきた。

まるで世間話をするかのように、華扇が言葉を紡ぐ。額に青筋を浮かべた笑顔のままで。

「赤蛮奇さんの下着を見たかと思えば次は小町の胸ですかそうですか。やはりあなたは破廉恥な性格だったみたいですね？　手当たり次第に次から次へと、そんなに我慢の限界だったんですか？」

「待て待て待て話しを聞けや。だからよ、さっきのもコレも事故だって言っとるやろ。状況をよく見ろって、な？」

早とちりが止まらない仙人サマに弁解を試みる。確かに今回のはオレにも非がなくもないのかもしれない。けど、少しぐらい釈明の余地はあってもよかろう。

再び無罪を主張する。何度も言うがこれは事故だから。不可抗力なのだと。華扇はただ静かに聞いていた。やがて、濡れ衣を聞き終えた彼女は「そうですか」と一度だけ頷いた。フッ、分かってくれたか。

乙女の笑みがスッと変わりゆく。ただし、修羅へと。

「そう思うならまずその手をさっさと放しなさいッ!!　いつまで触っ

てるんですかこんのっ……どスケベーッ!!」
「おごぉッパァ!?」
昇竜拳。顎をかち割る鉄拳が天高く突き上げられた。小宇宙の煌めきと果てたオレは暗転する意識のなか、むしろ清々しい気分でさえいた。
死神とかそれ以前に、どうやらこの仙人から逃げられないらしいと悟りを開いて。

「綿間部は煩悩が溢れすぎです！　最近ちょっと見直してきたのにすぐこれなんだから！　人を導く仙人として、あなたをこのまま見過ごすわけにはいきません！　しばらくうちで修行して心身共に改めてもらいますからねっ!?　返事は!?」
「いや、その男とっくに気を失っているんだけど」
気絶した男の襟首を掴んでガックンガックンと揺らしながら、怒り狂った声で荒ぶる茨木華扇。さすがに哀れに思い小野塚小町がやんわりと止めに入るものの効果なし。ちなみに男は白目を剥いたままである。
無抵抗に首が振り回されてそのうち頭が取れそうだった。ひょっとして死んだんじゃないかと小町の方が不安を覚える。死神なのに。
「よし、善は急げですね」
何かもう一人で勝手に意を決していた。当然ながら青年は何も言わない。というか言えない。
おもむろに華扇が包帯に包まれた右手をかざす。すると、頭上に黒い暗雲が立ち込めていく。狭い範囲に限定された不自然な悪天候の訪れ。ゴロゴロと稲光が漏れ出でる雷雲であった。直後、滝のような土砂降りが轟々と降り注ぐ。そして、一際大きな雷の唸りが響き渡った瞬間――龍が降りてきた。
かの神獣は地に降りると青年（気絶中）の後ろ襟を咥えて持ち上げた。さらにその背中に桃色の仙人が跨る。龍は華扇の飼っている従者の一匹だ。もちろん小町は知っているので特に驚きはしない。
「小町」

「あ、一応気付いてたんだ。あたいが居たの」
「？　当然でしょう。私達は行きますが、この人に何か言っておきたいことはありますか？」
「うーん、そうだねぇ……今度一緒に呑もうって伝えといて」
「はぁ……分かりました。その時はサボりではなくキチンと休みをとってくださいね」
「あいあーい」
　気のない返事を受けて華扇がむっと何か言いたげな顔をする。だが、やはり「こっち」が優先だったようで従者共々彼方へと飛び去って行った。妖怪の山、茨華仙の屋敷がある方角に。
　龍とその主がいなくなったことで雷雨がパッタリと止む。びしょ濡れになってしまったが、夏のお天道様ならすぐに乾かしてくれるだろう。へっきし、と男前なくしゃみが出る。
「あの堅物仙人がここまで執着する男か……これは、もしかするともしかしちゃうのかもねぇ」
　今日はアレコレと面白いものが見れた。どうせなら近いうちに酒を持って遊びに行くとしよう。
　ついでに目を覚ましたら強制で修行が始まるであろう黒い青年にご愁傷様と念を送っておく。女心は複雑なのだ。文字通り、身を以って学ぶことになるだろうけど、せいぜい頑張っておくれ。
「さて、と。あたいは服が乾くまで一休みするとしようかな。仕方なくね」
　濡れた衣服じゃ仕事も捗らないし、こればかりはどうしようもないことなのだ。いやはや、困った困った。
　ぐぐっと大きく背伸びをして快晴に戻った青空を眺める。昼寝するにはうってつけの天気だ。
　その後、上司に見つかってメチャクチャ説教された。
　つづく

第十八話　「いばら荘の華扇さん」

「……何処だ、ここ」

目を覚ましたら知らない和室に寝かされていた。いや、冗談抜きで身に覚えがないんだけど。どういうこっちゃ。ついでに顎もヒリヒリ痛む。こっちの原因は言わずもがな、あの女がキメたアッパーカットで間違いあるまい。猪木みたいにしゃくれちまったらどうすんだ。元気ですか。

さらに違和感はそれだけに留まらない。気を失っている間にでも着替えさせられたのか、オレの服装はトレードマークな黒一色のスタイリッシュファッションではなく、まるで旅館の浴衣を羽織ったような恰好になっていた。しかも模様が一つもない真っ白なやつ。むしろ死に装束じゃねェかコレ。白い黒岩とは是如何に。

疑問符塗れで途方に暮れる。と、ふいに襖が滑らかな音を立てて横にずれた。噂をすれば何とやら、桃色の髪をもつ少女が姿をみせる。

「やっと起きましたね」

「オイ華扇、全くと言ってイイほど状況が分かんねーぞ。つーか、ここは何処なんだよ。あとこの服は何や。オレの服どこいった」

「ちゃんと順を追って説明しますから。まず、ここは私の屋敷です。飼っている龍を使ってあなたを運びました」

「マジか」

「マジです」

仙人ともあろう者が「マジ」なんて俗っぽい言葉を使っても問題ないのか。ま、そいつはさて置き。

どうやらオレはこの女に連れ去られた立場にあるらしい。華扇の家ってぇことは妖怪の山の一角か。彼女の家がどの場所にあるのかは前に本人から聞いている。

女にお持ち帰りされちまったとか、男としてダサいやらハズいやらで目も当てられない。オレも語るに落ちたな……

もっとも、場所が分かったところで服が変わっている理由は皆目見当もつかないのだが。いつ棺の中に入ってもおかしくない白装束の

袖を振るう。見た感じはアレだが着心地は存外悪くなかった。
「綿間部の衣服ですが濡れていたので外で乾かしています。代わりの着物はこちらで用意したものです。ついでに着替えも私の方でさせてもらいました。さ、さすがに下の、肌着はそのままですが……」
「やったら事案だかんな」
意識のない異性の衣服を勝手に脱がす。もしオレと彼女の立ち位置が逆であったならば即逮捕である。変な想像でもしたのか、女は仄かに赤面して「ご、ごほん」とわざとらしい咳払いをしてきた。まさか実はやりかけたとかねぇよな？　大丈夫だよな？
華扇はオレの正面すぐ近くに腰を下ろした。さすが、お手本のような姿勢の正しい座り方をしている。
「正座」
「あ？　なんだって？」
「いいから正座しなさい」
有無を言わせぬ気迫で正座を強要される。彼女の顔は真剣そのもので、下手に逆らったらどうなるか分かったもんじゃない。とりあえず言われるがままに膝を折る。膝小僧を向かい合わせにして華扇の顔を窺う。お見合いか。むしろ将棋の対局が近いかもしれない。
さて、と前置きして仙人サマが本題を伝える。
「あなたにはうちで修行してもらいます。目的はもちろん、そのふしだらな性根をキッチリ叩き直すためです。私の指導のもと、綿間部には理性的な真人間になってもらいますからね」
「オイ、人をケダモノみてぇに言うなよ……」
「あら、違うとでも？」
あたかもカエルを睨むヘビの如く、スッと目を細めて静かにされど覇気をもった眼力が突き刺さる。まだ根に持っていらっしゃるご様子。ちと今回ばかりは分が悪過ぎた。見たのも触ったのも事実。それでも僕はやってないとは口が裂けても言えない。
ツイてないが仕方もない。そのうち遊びに行くと口約束した手前でもある。適当に付き合ってやった方が良さそうだ。第一、この女の機嫌を損ねるとロクなことにならない気がする。今後のオレの安寧

のためにも、この場は受け入れるしかないだろう。
やれやれと見せつけるようにホールドアップして肩をすくめる。
「わぁーったよ。好きにしてくれ」
「ええ、素直でよろしい」
ふふん、と得意げに鼻を鳴らす。ついでにその豊かな胸も張って。
どうでもいいけど、もうちょいマシな服はなかったんか。これで頭に三角巾でも付けたら完璧やぞ。
しかしまぁ何というか。よもやこのオレが修行のマネゴトをする日が来ようとは、つくづく世の中分からんものだわな。

さて、経緯はどうあれ初めて訪れた華扇の屋敷。まずは案内してもらうところから始まった。「ついてきてくださいね」と嬉しそうな家主に続いてオレも和室から外に繋がる廊下へ出る。
虎が居た。
「おうちょっと待てや何かそこに放し飼いにしたらあかんヤツがいんぞ」
「この間も言ったでしょう、私のペットです。門番と敷地内の警護を任せています。心配はいりませんよ。自分からは手を出さないように教育してありますから」
黄金色の猛獣はのっそりとした足取りでこちらに歩み寄ってきた。グルルと低い唸り声を上げながら、何処の馬の骨とも知れぬ来訪者を見定めている。が、飛び掛かってくる気配はない。華扇が喉を撫でるとそいつは気持ちよさそうに目を細めた。
さらに、現れたのは虎だけではなかった。
「何だ……!?」
「あ、戻ってきたようですね」
上空から大きな翼が羽ばたく音がしたかと思えば、瞬く間に大鷲がオレの眼前に降下してきた。よく見れば鋭い鉤爪に風呂敷を引っかけている。
「おかえりなさい、竿打。ご苦労様」
桃色の少女が風呂敷を引き取りながら大鷲を労う。結び目を解く

と生肉やら野菜やらが出てきた。前者はカットして形を整えてあるうえに包み紙が被せられている。どう見ても野生で狩ってきたものではない。

猛禽類をおつかいに行かせるとか凄まじい芸当しやがってからに。一人でできるかなってレベルじゃねーぞ。でもちゃんと買ってこれたあたり店の人もフツーに対応したってぇのか。人里連中の肝っ玉据わり過ぎじゃね？

「そいつもペットか？」

「ええ、そうですよ」

大鷲は竿打という名前らしい。虎は……せっかくなので「寅さん」と呼ばせてもらおう。オレの中で。男はつらいんだよ。

「そういや、龍もいるとか言ってたな。オレを拉致した共犯者でもあんだろ？」

「むっ、人聞きの悪い言い方しないでください。いつもは上空を自由に泳いでいるのですが、会ってみたいのでしたら呼びましょうか？」

「いやいい。一度に全員集合されてオレにどうしろと」

猛獣に猛禽類ときてそこに龍まで加わるなんざサファリパークも真っ青だろうが。個性だけならどこの動物園にも負けはしない。上野のパンダも燃え尽きて真っ白になっちまう。

屋敷の外観を眺める。和風とはまた異なったデザインだった。中華貴族あるいは唐の時代の名残りを思わせる独創的な造り。白塗りの壁には正円形の窓が施され、瓦屋根の下では露台が建物を一周する。紅色の手すりが柵の役割を果たしており、また合わせて屋敷の特徴にもなっていた。

なるほど確かに屋敷と呼ぶのも頷ける立派なご自宅であった。雰囲気も茨木華扇のイメージにピッタリと当てはまる。これで一人暮らしだというのならペットも飼い放題待ったなしですわ。

屋敷の案内が終わると、早くも生活指導もとい修行を開始するハメになった。解せぬ。

「ったく、どこまで行こうってんだ？」

「いいから。黙ってついてきなさい」

「へいへい」
やけに気合が入った華扇に連れられて敷地内を外れ山奥へ歩いていく。ほどなくして轟々とした物音が聞こえてきた。足を進めるとそいつは次第に近くなってくる。やがて茂みを掻き分けたその先に、滝が構えていた。
「ほー……」
溢れんばかりの大量の水が凄まじい勢いで雪崩れ落ちてくる。その迫力に目と耳が圧倒される。水流の高さは十メートルほどあるだろうか。ふと、鯉は滝を登ると龍に為るという逸話があったのを思い出した。
それはそうと、もしかしなくてもこのパターンは、
「まずは滝行をしてもらいます。心も体も清めて明鏡止水の境地へと至るのです」
「……」
案の定、なんともベタな修行メニューがきやがった。あまりにもテンプレ過ぎてツッコむ気すら起きない。ついでに今更になって、オレがこんな格好をさせられていることにも合点がいった。こういう格好で滝に打たれているシーンを何かで見た記憶がある。
ちなみに華扇もオレと同じく白色の薄着を纏っていた。いつもの中華衣装ではないからちょっと新鮮さを感じたのはここだけの話だ。しかしながら、何とも微妙なペアルックがあったもんだ。嬉しくねェ……
茨木華扇（白装束ｖｅｒ）が赤みがかった瞳を閉じてウインクを投げる。顔立ちが整っているおかげで様になっているから余計に性質が悪い。文句のつけようがなくなる。
「私も一緒にしますのでご安心を。それに、あまりモタモタしていると……」
華扇がチラリと横目で虎にアイコンタクトを送る。主の命令を受けた猛獣がこちらに狙いを定めてきた。黄金の瞳が「早よ行かんかい」と告げている。もし行かなかったら彼奴のオモチャかオヤツと成り果てるだろう。南無三。

想像したくもないバッドエンドに思わず数歩下がってしまう。お前ッ、このために寅さんも同伴させたんかよ！

「分かった、分かったっつの！　それ立派な脅しだかんな!?」

「綿間部がこの期に及んで抵抗しないようにするためです。さ、始めますよ」

うげぇ、としかめっ面を浮かべてやったが、華扇は意に介さず一人先に滝へと身を投じた。その間にも虎が一歩ずつ確実に近付いてくる。究極の二択を迫られた。もう覚悟を決めるしかない。あんな牙でケツを噛まれるなんざ御免被る。

「えぇい、くそったれ！」

桃色の仙人サマに倣って滝の中へ飛び込んだ。直後、土砂降りを何十倍にもした威力の川水が頭の天辺から襲いかかってきた。バケツを引っ繰り返したなどと甘い例えではない。紛うことなき水の圧力であった。

オールバックの髪型が一瞬にして崩れてしまう。しかも冷たいというよりもメチャクチャ痛い。

「あだだだ!?　オイッおま、いつまでやればイイんだよ!?」

「余計な事は考えないで！　今は集中っ!!」

「いや結構大事なコトやで……ッ!?」

華扇から叱り声が飛ぶ。すでに彼女は瞼を閉じており、合掌のポーズで直立不動を維持していた。その姿を見れば普段からやっているのは想像に容易い。まるで揺らぎがなかった。まさしく仙人たる佇まいがそこにはあった。チィッ、やるしかねーのか!?

怒涛の如く押し寄せる水流に全身で以て受けて立つ。負けて堪るかと決して膝は曲げない。なけなしの反骨精神が己を奮い立たせた。荒ぶる水の奔流が耳元で五月蠅く響いた。

「うぐぉおお……!」

山籠もりする修行僧にでもなった気分だった。ネオンライトが眩しい繁華街を闊歩していた頃の自分がこの状況を見ようものなら、「お前アタマ大丈夫か?」と心配するに決まっている。

けど、この女がいると案外こういうのも悪くないと思えてしまうの

は何故なのか。ホント、調子狂うぜ。
「うむ、もういいでしょう」
「よ……ようやく終わりか……!?」
三十分、一時間と時が過ぎただろうか。その頃になって、ようやっと指導者から切り上げの合図が出された。
這う這うの体で滝から抜け出す。圧し掛かる水の重みが消えた途端、やけに肩が軽くなったような感覚に陥った。憑き物が取れたように心身が冴えている。どうにも上手く乗せられてしまったみたいで癪ではあるが、気分が良い。
無論、またやりたいかと問われれば絶対にノー。だが断る。お一人様一回限りで十分だ。
すぐさま手櫛で前髪を掻き上げてオールバックの型に整える。ったく、整髪料まで洗い流されちまったやんけ。黒服に続いてこっちのアイデンティティまで奪われたら自分が何者か分からなくなるだろうが。
「だーもう、オレの個性が――ッ!?」
何となしに華扇の方を見やった瞬間、出かけた言葉が喉の奥で詰まった。というか実際窒息しかけた。完全に不意打ち。思わぬ展開を前にして目を見開く。
「……？　どうかしましたか？」
それに対して彼女は変わらずキョトンとした顔をする。ピンク色のミディアムヘアから水の粒が滴り落ちる。当然、濡れているのは髪だけではない。
スタイル抜群の体を包む薄着が多量の水を吸って直に張り付く。その拍子に濡れた衣からキメ細やかな肌色が所々に透けて見えてしまっていた。瑞々しい身体が色っぽく艶を増す。彼女のあどけない表情と相まって大変よろしくない光景が映った。
今にも零れ落ちそうなたわわな果実の谷間が鮮明に浮かび上がる。気付いてすらいないせいで少女はそれを隠そうともしない。
「ぬぉうッ!?」
「綿間部？」

あられもない姿を無防備に晒している桃色の少女から咄嗟に目を逸らす。野郎の口からは非常に言い辛いのを我慢して教えてやった。できれば自分で気付いてくれ、頼むから。

「とっととタオルで拭くなり着替えてくるなりしろ。目のやり場に困るだろーが……」

「え？」

オレの言葉を受けて華扇の視線が徐々に下へと向けられる。それと同時に、自身が現在どのような状態になっているか理解したようだ。みるみるうちに白い柔肌が赤く染まっていく。そんな気がした（後ろを向いているから分からん）

「キャッ!?」

短い悲鳴を上げて、彼女は豊満な胸を隠すように両腕で己の身を抱きながら背を向けた。慌てて動いた際に足元からバシャッと水飛沫が跳ねる。そんな感じがした（後ろを向いて以下略）

『……』

二人仲良く濡れ鼠のまま相手に背中を見せ合う。気マズい。会話も途切れてしまった。されど振り返るワケにもいかず、下手に目を合わせることもできない。

「……あ？」

その代わり、なぜか前方に居た寅さんと目が合った。「何やってんだオメーら」という呆れの色が潜んでいるようであった。動物から哀愁の眼差しを向けられている件について。そう思うなら何とかしてくれと声を大にして言いたい。

緩い風が吹いた。寒気からブルリと身震いしてしまう。あと鼻もムズムズしてきた。あ、くしゃみ出そう。

「イーッキシッ！」

「き、着替えましょう！　このままでは風邪をひいてしまいます！」

我ながらどことなく時代を感じるくしゃみが出ちまった。タライが落ちてきそうな感じ。ともあれ事態は好転したので結果オーライと言っておこう。

華扇は着替えを提案すると急いで水辺から上がった。そのまま逃

げ足で屋敷へと駆けて行く。飼い主を追ってペットも後に続いた。
一足遅れてオレも水辺から離れる。
「っかー、こりゃ先が思いやられんぞ。へ……へ……イーッキシッ!!」
ゲンナリしつつ再びブッ放した盛大なくしゃみは滝の轟音に飲み込まれていった。風邪オチだけは勘弁してくれよ。
つづく

第十九話　「ノートレーニング　ノーライフ」

予想外の一悶着はあったものの、気を取り直して修行は再開された。

さすがに今回ばかりは華扇も自らの不注意を理解しているのか、先刻のすったもんだについてお咎めはなかった。その代わり、恨みがましい目つきが「何も言うな」と語っておった。わざわざ言われずとも藪を突いて八岐大蛇を呼び出す趣味はない。さっさと忘れてしまおう。オレの為にも、コイツの為にも。

互いに見慣れたいつもの格好に戻り、場所は再び屋敷の敷地内へ移る。ブラックファッション&オールバックでスタイリッシュなコーディネートが全身によく馴染んでニヤける。フッ、これでこそ本来のオレであろう。

満足げに頷くオレに向けて、人差し指を突き付けながら仙人サマが告げる。桃色のミディアムヘアがさらりと靡いた。

「次は座禅です」

「またベタなやっちゃな」

「む、文句あるんですか？」

「いーや？　なーんもねぇよ」

アメリカンコメディさながらに大仰に肩をすくめてみせる。どうやらお気に召さなかったらしく彼女は唇を尖らせた。こんくらいで拗ねんなって。

申し訳程度に敷かれた茣蓙はそういう意味と受け取って間違いなかろう。時代劇で罪人を座らせる場面を思い浮かべたのはオレだけではないハズ。せめて座布団を寄越せよ。

挙句には、邪念雑念その他諸々がみられたら即座に喝を入れるので覚悟せよとのお達しを受けた。古典的にも細長い板切れで叩くつもりなのか。華扇の攻撃性に拍車がかかっている気がしないでもない。お前それでも仙人だろうが。

「さぁ、座ってください」

「へーへー」

「もう！　ちゃんと返事しなさい！」
　ついでにお小言も止まらない。ま、今のは自業自得だわな。
　茣蓙の上に正座する。フツーは胡坐だと思うのだが、どういうワケか華扇からこの姿勢を命じられた。
　それだけではない。オレのすぐ傍らには大鷲が控えていやがった。虎に代わって今度はコイツがお目付け役ってコトか。さっき見たヤツとは違う。コイツの方が一回り大きいし、どことなく年老いている。
　もっとも、ご老体でも猛禽類に変わりはなく、至近距離でガン見してくる状況は非常に落ち着かない。むしろ年季が入っている分、貫録がある。なかなか渋いじゃねェかよ。
　しかし精神統一と言われてもイマイチよく分からん。というか、ただ静かに座っているだけというのも結構暇――
「集中ッ！」
　欠伸しかけたところに仙人サマの一喝が容赦なく飛んでくる。あわせて膝の上にずしりと四角い石板が乗せられた。
「ぎゃぁあああッ!?」
　硬い重みに膝が悲鳴を上げる。ついでにオレ自身も悲鳴を上げた。何しやがんだこの女!?
「お前コレ拷問の仕方だろーがァ!?」
「いいえ、修行です」
　キッパリと言い切られる。その自信は一体どこから来るのか、是非とも問い質したい。明らかに修業とは異なるベクトルに突き進んでいた。このための正座だったというのか。コレは酷い。
　いよいよもって修行なのか調教なのか体罰なのか分からなくなってきた。いや、拷問だったな。
「ぐぉおお……ッ!!」
「ほらほら、もっと集中して」
　苦渋の呻きを漏らすオレに対して、仙人サマがパンパンと手を打ちながら声援を送る。心なしか楽しそうな表情で。だーもう、熱血教師かよ！そのうち夕日に向かって走れとか言ってきそう。

ったく、あの死神女といいこの仙人といい、この異世界には妙なところで気合が入っちまう連中ばっかじゃ――

「他の女性のことを考えましたね……？」

「ちょバカッ止め――重ォオオオオ!?」

酷く冷淡な声色とともに石板をもう一枚追加される。見るに堪えなかったのか大鷲にまで目を逸らされてしまった。どことなく申し訳なさそうな空気を出して。

というか、当たり前のようにやりやがったけど、まさかオレの考えが読めるとか言わねぇよな？　華扇さんよぉ……

その後も桃色の少女に振り回され、気付いた頃にはとっくの昔に日が暮れていた。ちなみに、当の仙人サマはご満悦であった。オレとのテンションの落差がスゴイ。

晩飯の支度をするから手伝うように命じられ、家主と共に調理場へ足を運んだ。ここで一つ暴露すると、こちとら料理スキルなんざ持ち合わせていない。なにせ、あの繁華街に自炊できる環境はなかった。仕方あるまい。

いくら何でも屋といえど、当然できないことだってあるというもの。黄金比の水割りぐらいなら作れるが。ウイスキーがあれば作ってやれたのに、残念だ。

ま、だからといってそうは問屋が卸さないってぇのも分かり切っているのだが。

「それでも手伝ってもらいますからね」

「へいへい。ちったぁ役に立ってみせますよ」

「うん、殊勝な心がけですね。結構」

どうにも勘違いされていそうだが、何もオレは不真面目なタイプってぇワケじゃない。ただ、活動時間が一般人と異なるに過ぎないのだ。分かっていただきたい、切に。

屋敷が大きいだけあって台所も相応に広かった。竈の内側でパチパチと音を立てて火が弾ける。ＩＨどころかガスコンロでもない時代の名残り。幻想郷ではまだまだ現役らしい。

ちなみに竈は二つあった。それぞれに蒸し器と土鍋が置かれている。蒸し器は中華料理のイメージにありがちな茶色くて円い型だった。せいろ、という調理器具だったか。彼女の服装と髪型もあって、組み合わせが非常に似合う。むしろ違和感がなさ過ぎた。

「えっと、小皿は……」

「コレか？」

戸棚の一番上にあった小さめの食器を取ろうと、少女が爪先立ちになって手を伸ばす。その後ろから代わりに取ってやった。オレの方が背が高いし余裕で届く。

小皿を手渡すと、ちょっとだけ驚いた様子で華扇がオレを見上げた。

「あ、ありがとうございます」

「……おう」

油断した。いつも人に近いとか言っているクセして今のはオレが近付きすぎてしまった。桃色の髪からふわりと甘い匂いがする。変に悟られないように、さり気なく一歩下がっておく。

彼女はといえば、土鍋で煮えている汁物を受け取った小皿によそって味を確かめていた。次いでもう一回掬ったかと思えば、今度はそいつをオレに渡してきた。されるがままに一口だけ味見させてもらう。出汁が濃過ぎず薄過ぎずバッチリ丁度良い。驚くほどオレ好みの味付けだった。

「どうですか？」

「ん、美味ぇ」

感想を伝えると彼女は顔を綻ばせた。と、もう片方も頃合いの兆しを見せる。火傷しないように布巾で取っ手を掴み、いざ蓋を開けると濛々と熱が籠った白い煙が舞い上がった。

やがて湯気が晴れると、蒸し器の中では出来立てのシュウマイが綺麗に並んでいた。見た目からして食欲をそそられる。グルメな仙人サマは料理もお上手らしい。食べ専じゃなかったのか。

「今失礼なこと考えませんでした？」

「考えてねーよ……」

だから何で分かるんだよ、お前は。つーか、これでも褒めたつもりなんだがな。

出来上がった料理を並べていたところに、久しくもない奴がやってきた。

「やっほー、来ちゃった」

「はぁ、小町……」

「狙ったかのようにメシ時に来やがったな。わざとか？」

「いやいや偶々だって。それに、ちゃーんとショバ代も持ってきたからさ。ほら！」

そう告げながらテーブルの上にドン！と置かれたのは、やはりというか日本酒であった。無論、一升瓶である。貼られたラベルには「魔王」の文字。冗談なのか本気と書いてマジなのか。

目の前では小野塚小町と茨木華扇が軽口を叩きあっている。

「どのみち帰れと言っても帰らないでしょうね」

「さすが、わかってるじゃないさ。そゆこと」

「まったくもう……勝手になさい」

仲良しという感じではなさそうだが、されど互いに遠慮のない間柄と見受けられる。腐れ縁と表するのが妥当かもしれない。よもや仙人と死神のツーショットにこのような華やかさがあるとは。世の男どもが知ったら騒ぎやぞ。

小町本人と差し入れも加わって、夕餉は晩酌を兼ねた酒盛りに早変わり。乾杯もロクにせずお猪口でグイッと一息にやってる死神女から「ぷはーっ！」と景気の良い声が上がった。男前っつか、豪快なやっちゃな。

すぐさま二杯目を自酌で注ぎながら、赤髪の娘がニヤニヤ顔で尋ねてくる。

「で、修行の成果はどんなもんだい？」

「どうもこうもねーよ。滝に打たれるわ石を乗せられるわ、筆舌に尽くしがたい苦行だったっつの」

「ありやま、容赦ないねぇ。可哀相に」

「当然です。修行なんですから、甘やかしたりなんてしません」
わざとらしく目を丸くする死神に対して、仙人サマが得意げに胸を張った。言っておくが自慢するような内容じゃねぇからな。
箸で摘まんだシュウマイを口の中に放り込み、じっくり味わって咀嚼する。シニョンとミニスカ中華衣装は伊達じゃなく、フツーに美味い。次は肉まんでも作ってもらおうか。コンビニとは比べ物にならない逸品が期待できる。
ふいに、赤髪の女が悪戯染みた表情でオレへとにじり寄ってくる。絡んでくる気満々なのが嫌でも伝わってきた。じりじりと距離を埋めながら舌なめずりしてやがる。様になっているのが逆に腹立たしい。
「あたいもお前さんが気に入っちゃったよ。どうだい？　ここは一つ、もっと親睦を深めようじゃないさ」
「そら構わんが狭ぇよ。親睦を深める前に距離感を掴めや」
「もう、つれないねぇ」
いいから離れろと一蹴する。からかう相手を間違えたな。生憎その辺にいるちょろい野郎とは一味違うのだ。なぜならオレは夜に生きる男。
すると、今度は反対側にも人の気配を感じた。見れば、ジト目になった華扇が密着寸前にまで間隔を詰めてきていた。ここまでくると最早くっついているのと大差ない。実際、オレと彼女の腕も触れているというか当たっている。何がしたいんだ、コイツは。
オレの無言の抗議を無視して、桃色の仙人が赤髪の死神を牽制する。
「小町、あまり綿間部を誑かさないでください。折角の修業の意味がなくなってしまいます」
「ふーん？」
「どうでもいいけど、とりあえず離れろって言ってんだろうが。聞いてる？」
腹の探り合いはその後でやれ。そもそもパーソナルスペースどんだけ狭いんだよコイツら。自分らの容姿レベル自覚しろと何度言え

ば。

おもむろに華扇とオレの顔を交互に見比べて不思議そうに首を傾げる小野塚小町。直後、ハッとした顔になった。ついでに若干引き気味になりながら、恐る恐る声を震わせる。嫌な予感しかしない。

「こんなイイ女を二人も侍らせて喜ばないなんて……お前さん、もしかしてそっちの人なのかい？」

「んなワケあるか！　いきなり真顔になったかと思えば何ブッ飛んだコト言いやがんだコラ」

失礼極まりない発言をされてズッコケそうになった。暴論にも程があるデタラメな推理に各国の名探偵も真っ青である。死神は想像力が豊かすぎる模様。泣けるぜ。

すかさず日本酒をかっさらい、なみなみと盃に注ぐ。急にホモ扱いされたこの理不尽、魔王の力を借りねばやってられん。

死神女に負けず劣らず一気飲み。かなり辛口で喉が焼けるが、酒そのものは美味であった。ヤケ酒にはもったいなかったかもしれない。だが、もう遅かった。

そのまま売り言葉に買い言葉。酒の勢いも上乗せされてオレもイキがったのが運の尽き。ついつい虚勢を張ってしまった。そいつが後に自爆になるとも知らずに。

「ったくよぉ。オレだってなぁ、惚れた女の一人や二人――」

「いたんですか？」

真っ先に反応したのは小野塚小町ではなかった。思わぬところから食い気味に台詞が重ねられた。振り向けば、据わった目つきをした華扇と視線が交錯する。

幻聴だと信じたかった。かつてないほど凄まじく冷たい声が発せられていた気がする。まるで聞き捨てならないと言いたげに。さらに吹雪の幻覚が見えてきた。修行が過酷すぎて疲れたのだろう、多分。そうであってほしい。

けれど現実は都合よく逃避できるほど甘くない。

「……あ、ぅ」

底知れぬ圧力に押し迫られて一瞬にして酔いがさめる。それどこ

ろか、違う意味で呂律が回らなくなってくる。
「いや、それはだな……」
「イタンデスカ？」
怖ぇーよッ!!　全然目が笑ってねぇよ！
初めて会った夜のトラウマ（アルハラ）が蘇る。どうして彼女がここまで拘るのか全然分からねぇ。だが、これで話題を変えたり食事に逃げたりしたら殺されかねない。比喩ではなく、ガチで。
もはや今更だが、正直に言うと惚れた女なんていない。むしろキャバ嬢にも貢いだことないある意味で健全な男。それがオレだ。さらに言うと彼女いない歴イコール年齢でもある。当然、ホモでもなければゲイでもない。
「ねぇ、綿間部……？」
先ほどよりも更に詰め寄られていき、いつしか壁際にまで追い込まれていた。これ以上の後退は叶わない。逃げられない。
美しく整った顔立ちの赤みがかった瞳に射抜かれる。華扇の顔が間近に迫った。このままだとマウストゥマウスに発展しかねない危険領域。いやマジでこれ以上はマズイって！周りっつか状況よく見ろって！
「か、華扇ッ落ち着け……ッ！」
「ねぇ、答えて？　いたの？」
「だーもう！」
グイグイくる桃色の髪の少女に叫ばずにはいられなかった。どうしてこうなった。
視界の片隅では小町が腹を抱えて爆笑を堪えていやがった。肩が震えているのが微塵も隠せていない。チクショウ、何わろてんねん。
結局、洗いざらい白状させられた。屈辱の極みであった。この日をオレは生涯忘れないであろう。
あと、オレには惚れた女も恋人もいないと知ってから、なぜか華扇がずっと上機嫌なままだった。解せぬ。
つづく

第二十話　「もう一人の外来人」

桃色の仙人サマに攫われてから修行は三日間に及んだ。もはや拉致監禁と大差ないんじゃねーか。

だが、ついにこの日々からも解放される。無駄に長かった。もういい、オレは人里に帰る。そして夜型の生活に戻ってみせよう。

茨木華扇の屋敷――正確にはその周辺には特殊な術が施されている。と、本人が言っていた。特定のルートを通らねば辿り着くことはできないらしい。そもそも、仙人の元にそう易々と行けるのが可笑しいだろう。ただし、小野塚小町は例外とされる。オレも詳しくは知らんが、距離を操る程度の能力者だとか。テレポートでもすんのか、あの女。

ちなみに、その逆は別であった。

敷地を抜け出る。妖怪の山の何処かも分からない場所に通じていた。鬱蒼と生い茂る樹木に囲まれる。枝葉の合間から覗ける空は青く、白い雲が流れていた。まさに大自然。もののけ姫のロケ地かと思った。

ったく、朝帰りどころか昼帰りしかも三日ぶりだぞコンチクショウ。

「で、今から下山しなきゃなんねぇってか。面倒くせーなぁ」

「それなら良い方法がありますよ」

オレのぼやきに華扇が待ったをかける。人を誘拐したあげくキッチリ付きっきりで調教してくれやがった張本人の姿がそこにはあった。

白いシニョンを括った桃色のミディアムヘアが目を惹く。赤いバラの花飾りを付けた中華衣装に合わせた緑色のミニスカがひらりと舞う。見目麗しい顔立ちもそうだが、露わにした素足も女性らしく美しい。

「良い方法だぁ？　プランBでもあんのか」

「この妖怪の山にも、最近になって索道――ロープウェイができたんです。それに乗れば麓まで迷うわず真っ直ぐに行けますよ。人里の

皆さんも利用しているようですし」
「ほう……」
正直驚いた。思いもよらずハイテクなブツが出てきたもんだ。相変わらず文明レベルがメチャクチャではあるが、ともあれ利用しない手はない。
詳細を問うべく、少女の赤みがかった瞳をしかと見据える。
「そりゃありがてぇが、何処にあんだ？　というか使えるモンなのか？」
「ロープウェイは守矢神社が管理しています。彼女たちにお願いすれば快く乗せてくれるでしょう」
「っかー、神社にロープウェイとかどんな組み合わせしてんだオイ……」
神社というワードから、つい先日訪れた博麗神社を思い出す。その守矢とやらもあんな感じなのだろうか。大体、こちとら寺にも神社にも疎い現代人だってぇのに。初詣だってここ数年からっきし行ってねぇぞ。
さらに華扇が新たな情報を付け加える。そこには興味深い内容も含まれていた。
「守矢神社は此処からさらに山を登った場所にあります。それとですね、彼女たちは綿間部と同じく『外』の世界から幻想郷に来たんですよ。巫女は真面目でとても良い娘です」
「そうか。考えてみりゃオレと同じ境遇のヤツとまだ会ってなかったわな」
いつぞやの宴会にも野郎が一匹居たらしいが結局合わずじまいだった。しかしながら、クソ真面目な仙人サマにまで「マジメ」と言われちゃ世話ないぜ。どんな優等生なんだか。
さて、ここで選択肢は二つ。このまま徒歩で山を下るか、ひとまず頑張って山を登った後に乗り物で楽に帰るか。ま、後者だろ。悩むまでもない。
今は華扇がいるとはいえ、オレからすれば現在地すらも分からんのだ。もし彼女とはぐれでもしたら即座に遭難待ったなし。冗談にし

ても笑えないオチとなる。
「決まりだ。守矢神社に行くぞ」
「ふふ、綿間部ならそうだろうと思っていました」
「ったく、そうかよ」
分かっていたと言わんばかりに得意気になって、桃色の髪をもつ女が笑った。どうにも考えが見透かされているようで眉をひそめる。が、楽しそうなコイツを目の当たりにすると、何だか毒気が抜かれて調子が狂っちまう。
結局、「けっ」といじけたガキみたいなリアクションをとるハメになった。
山道なんだか参拝道なんだか、少なくとも獣道ではない砂利道に沿って足を進める。
結構歩いたのだが、どういうワケか意外にも疲れがこない。もしや修行の成果だとでもいうのか。だとしたらイマイチ認めたくねぇ。何か負けた気がするから。
遥か高みの頂を目指したその先に、件の神社は聳えていた。鳥居の門を潜ると、そこそこ立派な造りの御殿が構える。
どうにか無事に着いたところで、やっと一息つく余裕が生まれた。
「ここか……」
「はい、守矢神社です」
第一印象は「わりと新しそう」であった。土地が広いにも関わらず細かい部分まで手入れがされており、小奇麗なのも理由の一つだろう。新しいというよりも丁寧に扱われてきたと表すのが正しいか。
心なしか、博麗神社に比べるとこっちのが建物も大きいようにも見受けられる。いや、決して博麗が貧乏といっているワケじゃない。他意はねぇから、誤解すんな。
落ち葉一つない石畳の上を歩く。しばらく行くと、少女が一人だけ立っていた。竹箒でせっせと道を掃いている。境内が美しく保たれているのは彼女のおかげであろう。
少女に近付きつつ、華扇が声をかけた。
「早苗」

「あ、これは山の仙人様。こんにちは」
「ええ、こんにちは」
その女子はオレたちに気付くと恭しく頭を下げた。所作だけでも礼儀正しさが伺える。なるほど、いかにもイイ子って感じがする。よくよく見ると顔立ちも良い。もう驚かねーぞ、幻想郷。
「今日はどうされたのですか？」
「少し、お願いしたいことがあって」
彼女が例の巫女で間違いないだろう。マジメと聞いていたが、物腰の柔らかくてお淑やかな少女であった。コレが清楚ってヤツか。そんな巫女娘の雰囲気に合わせて仙人サマもたおやかな笑みで答える。なんともお上品な会話が繰り広げられていた。オレがアウェーになってるのはさて置き。
と思いきや、巫女少女がおもむろにこっちに視線を向けてきた。華扇とは面識があるようだが、生憎オレとは完全に初対面である。そら気になるわな。
「あの、こちらの男性は？」
「彼とはちょっとした縁で知り合いました。粗雑なところが目に余ったので、しばらく私の屋敷で修行をつけていたのです。実はこの人、あなたと同じ外来人なのよ？」
「へぇ！　そうなんですか？」
最後の一言だけは口調を崩して、茶目っ気あるウインクと一緒に仙人サマが伝えた。すると、それを聞いた相手も年頃の少女らしく顔を輝かせる。なんだ、そういう表情もできんじゃねーかよ。
そして、しっかりとオレに向き直ってから、巫女娘が名前を告げた。
「ようこそ守矢神社へ、私は東風谷早苗です。ご覧の通り巫女を務めています。よろしくお願いします」
腰まで届く長い緑色の髪が微風に流れる。博麗が紅白ならば、こちらは青と白を組み合わせた巫女服を着ていた。ただ、なぜか袖が分離しているせいで脇が露出しているのは変わらず。だから何なん、そのデザイン。
恐らく年齢はオレよりも二つか三つぐらい下であろう。となれば

女子高生あたりか。
「ああ、オレは何でも屋をしてるモンだ。よろしく頼む」
「こら綿間部！　ちゃんと名乗りなさい！」
「へーへー、黒岩とでも呼んでくれや」
「黒岩さんですね。あれ？　でも今、わたなべって……あれ？　わたまべ？」
「気にすんな。こっちのが慣れてんだよ」
「はあ……？」
やはり本名はややこしいから面倒くさい。だから名乗りたくねぇ。この巫女さんも戸惑っている。ま、オレからすればいつもの反応なのだが。
今のところ、幻想郷でオレを本名で正しく呼ぶのはこの女だけだ。しかも初めて名乗った時に聞き間違えなかったオマケ付き。それに彼女の声で本名を口にされるのは、まぁ、何だ。……案外悪くねェ。
頭上にハテナを浮かべつつも言われた通りに了承する東風谷早苗。てっきり名字も守矢だと思っていたのだが、どうやら違ったらしい。ひょっとしたら先祖の名字なのかもしれない。
しかし、ＪＫ巫女（美少女）までもが異世界入りとは。キャラ要素が濃過ぎてラノベ一本書けそうだわな。
自己紹介も済んだところで、本題に入る。
「頼みってぇのは他でもない。人里に戻りたいんだが、お前らが持ってるロープウェイに乗せてくれねーか？」
「そういうことでしたら喜んで。……あの、急ぎますか？」
使用許可と同時に、守矢巫女がおずおずと尋ねてきた。
もしや不具合があるのだろうか。こちとら別に急ぎでも何でもないし、いくらでも待つつもりだ。わざわざ登ってきたのに此処から徒歩下山となるのだけは真っ平御免被る。文字通りの無駄足になっちまう。
「そうでもねーが、何でだ？」
「よければお話ししませんか？　私も外来人の方とお会いする機会は少ないので」

もちろんお茶も出しますから、と誘いを受ける。んだよ、そっちかい。

ここにきて同郷の輩を新たに見つけ、多少の興味を持たれたようだ。ま、そらポンポンと異世界入りしてたら敵わんわな。八雲紫の話だと、幻想郷は現代社会から隔離した場所らしいから。

そういえば、この娘っ子はなぜ、どうして幻想郷に居るのだろうか。オレと同じく八雲紫に招かれたクチか？

まぁいい。この辺で一つ、幻想郷で外来人とのコネを作っておくのもまた一興。もっとも、ＪＫ巫女じゃ客になるかは微妙なセンではあるが。

「いいぜ。どのみちこっちからお願いしにきたワケだしよ。話し相手ぐらいならお安い御用だ」

「あっ、ありがとうございます」

「うんうん、綿間部も正しい身の振るまいを覚えてきたようですね」

「ったく、お前はオレを何だと思ってんだ……」

「破廉恥な不届き者ですが、何か？」

ニッコリと笑顔の圧力が放たれる。思わず一歩退いてしまった。ついでに下手くそな口笛を吹きつつ明後日の方角に目を逸らす。度重なったハプニングはまだ時効にならない模様。言っておくが、華扇の無防備さが原因だったこともあんだかんな。

オレとこの女の間で何があったのか知らない東風谷早苗だけが、不思議そうに首を傾げていた。

彼女が普段生活しているという母屋へ案内された。そのまま廊下を渡り、客間（居間か？）と思しき和室に招かれる。

中に入ると、その部屋には既に先客がいた。貫録ありそうな女と屈託なさそうな幼女の二人組が、それぞれ畳や卓袱台に突っ伏してだらけていやがった。

「神奈子様、諏訪子様。お客様の前ですよ」

東風谷が呼びかけると両者揃って「んー？」と首だけ動かしてこっちを向いた。凄まじい寛ぎっぷり。しかし、巫女娘がわざわざ様付けしたあたり結構な偉い立場と思われる。

「何だ、山の仙人じゃないかい」
　小野塚小町とも違う、新たな男前キャラの女がのたまう。
「そっちの黒いのは……まっくろくろすけの擬人化？」
「誰がまっくろくろすけだコラ」
　金髪幼女から飛んできた一言に脊髄反射で言い返す。睨みを利かせるが、見た目幼女の何者かには効果なし。冗談だってー、と軽いノリで流されてしまう。一体何だってんだ、このコンビは。
　掴みかねていると、オレの傍らに寄り添った華扇がこそっと耳打ちしてきた。頬が触れそうな近さに、仄かに甘い匂いが鼻孔をくすぐる。さらに自己主張の激しい二つの膨らみが体に当たり、弾みと柔らかさがいかんなく発揮される。むにゅっと、衣服越しに押し潰されて形を変える感触が伝わった。
　だから無防備だつってんだろうが！　コイツらよりもこの女の方がイロイロと危ねーわッ！
「綿間部、あのお二人は神様ですよ」
「あ？　神いいい？」
　我ながらアホっぽい声が出ちまった。これまで妖怪にも妖精にも出くわしたが神は初遭遇なのだから仕方なかろう。今更テンプレ染みたヒゲジジイな神様が出てくるとは思っちゃいなかったが、このパターンは予想してなかった。どっちにしてもキャラ濃いっつの。
　貫録ありそうな女が身を上げて「よいせっ」と胡坐をかき、見定めるような視線をぶつけてきた。藍色のボブカットで、色濃い服と胸元にある円い鏡がやけに目立つ。だがそれ以上に、背中に装着された注連縄の輪っかの存在感が凄まじい。コレが神ファッションか、ついていけねぇ。
　もう片割れのちんまいガキ？も然り。巫女服にも似たヒラヒラした袖もそうだが、何よりバケツみたいな深い帽子に目玉としか思えない丸い物体が二個くっついているのが気になってしょうがない。こっちも神トレンドか。なるほど、分からん。
　ほんの少しだけオレから身を離して、仙人サマが神とやらを紹介する。

「こちらが八坂神奈子、大和の軍神と謳われた戦の神。そしてこちらが洩矢諏訪子、ミシャグジを統べる祟り神です。早苗も含めて、守矢神社は彼女たち三人――いえ、三柱とともに『外』の世界から幻想郷に引っ越してきたんですよ」

「ほーん……」

「すみません、本来なら私から紹介しなければいけないのに……」

一人で全て説明してしまった華扇に、早苗が申し訳なさそうに謝る。

とりあえず、巫女の反応からみても嘘や冗談ではなさそう。どちらも本物の神サマだってぇのはよく分かった。とはいえ、オレが神仏に疎いのは変わらない。目の前で神だとか言われたところで、気の抜けた相槌を打つのが関の山だった。

八坂神が男前に口の端をクイッと上げてみせる。なんだこのイケメン。

「いやいや、ご丁寧に説明してもらってすまないね。まー、色々あって今はもう此処の住民さ。ところで、お前さんも『外』から来たんだろう？」

「フッ、分かるのか？」

「そりゃ分かるとも。幻想郷にはない科学技術の匂いがする。ある意味、懐かしいともいえるね」

「そいつはオレが排気ガス臭いってぇコトか？　失敬なやっちゃな」

いやいや、と首を横に振る八坂神奈子。さすがに不躾だっただろうか。だが、当の本人は気にした様子もない。さすが、神サマは寛大なこって。

その代わり、華扇が目を吊り上げてオレを睨んでいやがるのだが。触らぬ神ならぬ触らぬ仙人に祟りなし。気付かなかったことにしよう。

「では、私はお茶の支度をしてきますね。仙人様と黒岩さんはどうぞお寛ぎください」

育ちの良さそうな仕草で座布団を勧められたので、オレと華扇は一旦座った。今時の女子高生にも礼儀正しいのがいんだな。容姿もイ

イし、さぞかしモテるだろう。
「ありがとう、早苗」
「わりーな、お言葉に甘えさせてもらうわ」
オレたちが礼を述べると、守矢巫女はにこりと微笑んで、お茶を準備しに立ち上がった。襖を開け、和室を出ようとした時にふと立ち止まる。なんや。
こちらが問うよりも早く、彼女は振り返って身内に対してこう言い放った。
「神奈子様、諏訪子様、お客様に失礼のないようにお願いしますね」
「はいはい」
「わかってるって」
『……』
伝えたいことを告げると、彼女は今度こそ居間を後にした。洩矢神が「いってらー」と呑気に片手を振る。八坂神に至っては大欠伸していた。ヤル気ねぇな、この神ども。
一方で、オレも華扇も何とも言えずに互いに目を合わせた。華扇が乾いた苦笑いを浮かべて小声で零す。
「私たちではなく、神の方に忠告ですか……」
「こっちに来てからすっかり逞しくなっちゃってね～」
「って、逞しいで済むのかよ。仮にも神に仕える巫女じゃなかったのか。何かもう色々と逆転してんぞ大丈夫か？」
「大丈夫さ、問題ない」
やっぱり本人たちは気にしていないのか、相変わらず洩矢神がケロケロと笑っていた。いいのか、それで。
東風谷早苗、清楚な女子かと思いきや……侮れない。
つづく

第二十一話　「円卓会議はお茶の間で」

「なるほど、八雲紫から直々のご指名で幻想郷に来たっていうのかい」
「キミさぁ……自分がどれだけ珍しい立場にいるのか分かってる？」
「フッ、知ったことかよ」
神々と卓袱台を囲んで茶を飲みつつ談笑する。いざ言葉にしてみると、テメェのことながらつくづく何やってんだかと呆れてしまう。いやマジで何やってんだろうか。
東風谷早苗の淹れたお茶は美味かった。お茶請けにはおかき。ほど良い塩気に口の中が乾いたところを水分で潤す。ありきたりだが、実に相性の良い組み合わせだ。
酒も美味けりゃ茶も美味い。幻想郷は日本よりも日本を体現しているのかもしれない。もはやこの地において粗茶は粗茶に非ず。
無論、ただ飲み食いしているだけではない。オレは夜に生きる男、その辺に抜かりはない。こっちの事情を放した代わりに向こうの事情も聞き出していた。
「かくいうあんたらは新しい信仰を求めて幻想入りか。ハッ、世知辛いこって。現代社会じゃ神も呆気なく消えちまうってか」
「綿間部、そんなハッキリ言わなくても……！」
「いえ、構いませんよ」
眉尻を上げてオレを睨みつける華扇を緑髪の巫女が諫める。
無情だが、現代では昔のような信仰は得られない。根拠のない呪いよりも科学とテクノロジーが世の常だ。本気で神仏に祈るのは神職ぐらいであろう。
そのせいで八坂神と洩矢神は消滅の危機に瀕していたという。信者の信仰によって存在を維持できる彼女らは、新天地――幻想郷へ引っ越しを決意した。新たな信仰を求めて。
東風谷早苗は思った通り女子高生だった。それでも、現代に生きる一人の少女の天秤はこちら側に傾いた。
友もいたであろう。親もいたであろう。現役の高校生として青春を謳歌する時間もまだまだ残っていたハズだ。

にもかかわらず、その少女はそれら全てを差し出して、幻想入りを果たした。敬愛する二柱の神と共にあるために。もっとも、彼女自身も一介の巫女ではなく、現人神とかいう神モドキらしいのだが。

「帰りたいとは思わねーのか？」

「……確かにそういう時期もありました。けれど、そんな私のために相談に乗ってくれて、優しく励ましてくれた友人がいたんです」

「ほーん、お人好しなヤツらがいたもんだな」

「ええ、本当に。でも、そんな彼らとの出会いも幻想入りしたからこそ得られたものでした。私にとって、この縁はかけがえのないものなんです。ですから、私は後悔していませんし、これからもするつもりはありません」

「フッ、そうかよ。ならオレがとやかく言うのはお門違いだわな」

「そう……強いのね、早苗」

彼女から揺るぎない意志をしかと感じ取り、ニヒルに相好を崩す。守矢巫女の純粋な眼差しと言葉に、華扇も尊ぶような穏やかな表情をみせた。

「……」

人に近付きたかったから仙人になった茨木華扇。この女だって生まれながらの仙人だったワケではない。だが、考えてみればこの少女について知らないことが多かった。そりゃそうだ。オレが聞いてないのだから。過去に何があって、どうして仙人になるに至ったのか。それも含めて。

「綿間部？」

「……いや、何でもねぇ」

些か見過ぎてしまったか、おもむろに少女がこちらを振り向く。かといって今どうするワケにもいかず、適当に誤魔化すしかなかった。胸の内を曖昧な感情が燻っているのが、何となく釈然としなかった。

お茶のおかわりが入り、話題も心機一転して違うものに移った。主にオレについて。

「あの、黒岩さんは何でも屋さんと仰っていましたが……どんなお仕事をされていたんですか？」

「お、知りてぇか？　育ちのイイお嬢さんが聞くにはちょいとアレだが、それでも平気か？」
「大丈夫です。私も幻想入りしてから強くなりましたので」
ほっそい腕で力こぶを作る仕草をしておどけてみせるお淑やか女子高生。ちゃんと冗談も言えるタイプだったか。なら良し。保護者（神）も逞しくなったと言っていたし、話しても問題あるまい。
実際、神コンビもさることながら華扇があからさまに聞き耳を立てていた。どうでもいいけど、おかき食い過ぎだろ。オレの分がなくなるだろうが。
「そいつぁ僥倖。ならば聞かせてやろう」
少し勿体つけてから、これまでオレが請け負ってきた仕事を語って聞かせた。調査尾行潜入運搬回収奪取囮役客引きホールスタッフ等々挙げればきりがない。時には汚れ仕事もあった。ただ、殺しの仕事だけは引き受けなかった。オレは殺し屋ではない。何でも屋だ。
裏社会のスパイスが効いた身の上話をあらかた喋り終えると、東風谷はポンと両手を合わせてまとめに入った。いっそ清々しいほどに明るく、
「つまり冒険者みたいなお仕事なんですね」
「何がどうなってそーなんだよ。全然違うだろ、剣も魔法も振るっとらんわ」
「え？　だって、皆さんからの依頼（クエスト）を受けてその報酬を貰うんですよね？　ほら、冒険者そっくり」
曇りのない眼で一切の疑いを持たずに言われると、こちらとしても非常に返し辛い。逆に納得させられそうになる。恐るべしＪＫ巫女。
「むむむ、いや……言われてみれば確かに似てなくもねーどよ……だからってなぁ」
よもやそんなファンタジーなヤツと同類にされるとは思わなんだ。せめてよろず屋、万事屋、仕事人……ダメだ。やっぱり何でも屋ってぇのが一番しっくりくる。そして何より、オレは夜に生きる男。
質問タイムは止まらない。やがて、いかにも高校生らしい内容まで飛んできた。

「私とそんなに歳の差はありませんよね。じゃあ、高校を卒業した後は進学ではなく就職を選んだんですか？」
「フッ、ある意味じゃ似たようなモンだがな……卒業はしてねぇけどよ」
「あっ……ご、ごめんなさい！」
東風谷のにこやかな笑みが一転した。「しまった」と顔に書いたような大慌てで頭を下げてくる。ちょっとだけ声も震えている。下手をすれば泣きかねないほどであった。
そうだ、オレは高校を中退している。それも卒業まで残り数ヶ月もない時期であった。ま、そうでなければ夜の繁華街で何でも屋なんてするハズもなし。オレは新卒にもなり損ねたクソッタレなのだ。
もっとも、今更過ぎて欠伸も反吐も出ない。情報料も取れない退屈な昔話でしかないのだが。
「気にすんな。少なくともオレは気にしちゃいねーからよ」
「ですが……」
マジメな優等生のお嬢さんには、何でも屋の仕事よりもこっちのがキツかったらしい。しかもよくよく見れば、華扇まで「知らなかった……」と呟いて膝の上で拳を固く握っているではないか。ったく、このクソ真面目どもが。
舌打ちしたくなるような染みったれた空気が蔓延する。こういうのは好きじゃないし、オレの精神衛生上よろしくない。適当に流してしまおう。
「とにかく、だ。そういうワケだから仕事の依頼があったら呼んでくれや。夜だったら大抵、赤蛮奇がバイトしている人里の酒場かミスティアの屋台に居るからよ。もしくは人里を適当に歩いてらぁ」
「そこの仙人と同棲してないの？」
「違ぇーよッ!!」
「違いますッ!!」
ケロケロ金髪幼女からの助け舟現る。ただし味方ごと吹っ飛ばす威力をもって突っ込んできやがった。話題転換のUターンどころかスリップ事故である。

洩矢神のデタラメな一言にオレたちの大声が重なった。華扇に至っては両手でテーブルを叩いて身を乗り出していた。その拍子におかきが宙を舞う。幸いにも零れることはなかった。

ピンクな暴走仙人の勢いは止まらない。

「ななな、なぜそうなるのですかッ!?」

「えぇ～、だってぇ～」

仙人サマの気迫にも臆さず、幼女姿の神はやはりケロケロと悪びれなかった。さすが祟り神。厄介そうだわ、コイツ。

「それはそうと、うちに入信する気はないかい?」

「おいおい、話題の切り替え方が強引過ぎんだろ。起承転結って知ってるかぁ?」

「もちろん。四コマくらい見るよ」

今度はこっちかよ。洩矢神に続いて八坂神からも流れを無視した発言が飛んできおった。神サマってぇのはどいつもこいつもそうなのか? っていうか、神が四コマ漫画を読んでるのかよ。

早苗からお茶のおかわり（二杯目）を貰う。幸い、さっきの重苦しい空気はなくなった。皮肉だが祟り神の御利益だ。

改めて一服しながら、オレは軍神からの誘いを蹴った。

「悪いがオレはどこにも属さない。とーぜん宗教も、だ。全てにおいて無所属のフリーランスを貫いてんだよ。これだけは譲れねぇ」

「ふむ……なぜそこまでして拘りを持つ?」

「……色々事情があんだよ。言わせんな」

痛いところを突かれて自ずと語気が弱まる。つい歯切れ悪く言葉を濁してしまった。けれど、こいつに関してはオレの生き様に直結するモンだ。たとえ神が相手だろうが軽々しく話すつもりはない。

「綿間部……」

オレの雰囲気があからさまに豹変したせいだろうか、その影響が華扇にも及んでしまっていた。

悲しげな声色でオレの名前を口にする。心配しているかのように、どこか寂しそうに表情を曇らせて。オイ、どうしてお前がそんな顔をしなくちゃならねーんだよ。

くそ、折角まともな空気になっていたのに逆戻りになっちまった。
案の定、またしても早苗が謝ってきた。
「すみません、失礼なことを……」
「何でもねぇって。だからいちいち気にすんじゃねーよ。謝ってばっかいると損すんぞ」
「はい……」
それっきり誰もが黙り込んでしまう。沈黙が痛い。息が詰まる。
鉛のような空気の流れを変えたのは、またもや祟り神だった。ただし、今回はふざけなかった。
「キミとそこの仙人は似てるね」
声のトーンだけは見た目相応に軽く、だけど年季の入った重みもあった。全てを見通す神の眼が一匹の人間を貫く。
「あ？　何が言いたいってんだ。オレとコイツが似ているだと？」
「そうだよ。彼女、私が知ってる他の仙人とは明らかに違うしね。だって仙人なのに無宗教っていうか、そもそも宗教にこだわってないじゃん。こないだの宗教戦争にも関わらなかったみたいだし。まー、ウチも乗り損ねたから他人様のことは言えないけどね」
「洩矢諏訪子。貴女は……」
「どこにも属さないって意味では、あんたも彼も似通っていると思うよ？　理由はどうあれ」
語り出した金髪の祟り神と桃色の仙人の視線が交錯する。
オレからすれば、仙人と宗教に直接的な繋がりがあることさえ初耳なのだが。とはいえ、洩矢神が言った通りでもあった。華扇が布教活動をしているイメージなんざちっとも湧かない。
人に近付きたかったから仙人になった、彼女がそう口にしていたのは覚えている。なお、美味いモン食ったり人に説教したりで俗世を謳歌している模様。
それと、理解が追い付いていないのはオレだけじゃなかった。
「つまり、どういうことですか？　諏訪子様」
己が仕える神の真意が分からず、巫女が片手を上げた。分からないなら素直に質問できる優等生の鑑である。

己が身を祀る巫女の問いに神が神にあるまじきニヤリと意地悪な笑みを浮かべる。そして、祟り神の幼女は極めてデタラメにまとめてくれやがったのであった。

「んー、早い話が二人がお似合いだってことさ。丁度良い例を出そうか。外来人の青年と幻想郷の女子、早苗ならよく知ってるんじゃない？」

「はい！　それはもちろん！」

「何でやねん……」

東風谷早苗が女子高生らしい眩い笑顔で大きく頷いておった。まったくもって分からん。どうしてそうなった？

ま、お通夜ムードがなくなったのは救いってか。また変な誤解をされている予感がしてならないけどよ。しかしまぁ、洩矢神の掴みどころのなさはどうにも厄介だ。敵に回したくないタイプだぜ。

兎にも角にも、ひとまず一件落着とみて良いだろう。無駄に気疲れして深い溜息を吐く。ついでに隣にいる桃色の髪をもつ少女を見やった。

「オイ華扇、こいつらに何か言ってやれ」

「い、今こっち見ないでください！　馬鹿者ッ！」

「何でやねん（二回目）」

ところが、両手でグイッと押し返されて反対側を向けさせられてしまった。ついでに馬鹿者呼ばわりも忘れない。ほんの一瞬だが、彼女の顔が僅かに赤かったような……？

どうでもいいけど、今ので首の骨が折れてたらお前のせいだかんな。

つづく

第二十二話　「冴えない彼氏（ヒーロー）の鍛え方」

お茶もお菓子もスッカラカンになった頃、洩矢神が東風谷に意味ありげことをのたまった。

「ところで早苗、そろそろあの二人が来る時間じゃない？　準備は大丈夫なの？」

「あっ、そうでしたね。いけない、すっかり話し込んじゃいました」

お淑やかな巫女がお行儀良く口元に手を当てて目を瞬かせる。柱に掛けられた時計を見上げると、長針が一周するところだった。この部屋に入る際に、さり気なく時間を確かめておいた記憶がある。

すると、神サマと巫女サマのやり取りが気になったのか、そこに仙人サマまで会話に加わった。

「来客の予定があったんですか？」

華扇がそう尋ねると、守矢巫女は小さく頷いた。そういう事情であれば後は決まっている。

底に僅かに残っていた茶をさっと喉に流す。すっかり冷めてしまっていたが気にするほどでもない。今度こそ空っぽになった湯呑を置いて、華扇と早苗を交互に見ながら告げる。

「そろそろお暇するか」

「そうですね。その方が良いでしょう」

オレの意見に仙人サマも同意する。こういう時は話が早くてありがてぇ。ま、先約を優先するのは至極真っ当なことだわな。そもそも、ここに来た目的はロープウェイだしよ。

きっちり空気を読むオレたちに巫女娘が申し訳なさそうに眉尻を下げる。

「すみません。こちらから誘っておきながら……」

「いえ、私たちも長居してしまいましたから」

「そーいうこった。あと美味かったぜ、ご馳走さん」

茶と菓子の礼を述べると、東風谷は柔らかく微笑んで応えた。つくづくよく出来た娘だ。オレが父親なら嫁に出すのが勿体ないぐらいである。

ともあれ、軽く駄弁るつもりが予想外の長話になっていたのもまた事実だ。ほとんど話題も尽きたところでもあったワケだし、帰るタイミングとしては申し分なかろう。

長らく座り続けた腰を僅かに上げる。だが、その途中で巫女娘から「あのっ」と声をかけられて止まった。何や。

「黒岩さん。最後に一つだけお聞きしても良いですか？」

「最後ねぇ……まぁいい。言ってみろ」

妙に改まったというか畏まった素振りに訝しむものの、とりあえず聞くほかあるまい。答えられるかどうかは別として。微妙な中腰になっていた姿勢を一旦戻す。オレに倣って華扇も座り直した。

ありがとうございます、と守矢巫女が一礼する。その後、ゆっくりと口を開いた。

「あなたは仙人様のことをどう思っているのですか？」

「さっ、早苗ッ？　何を……!?」

彼女の問いかけに仙人サマが上擦った声で狼狽える。そらそうだ。いかにも誤解しがちな内容なのだから。ぶっちゃけ、またその手の質問なのかと辟易するまである。面倒くせぇなオイ。

「お前なぁ――」

が、文句を言おうとした声が中途半端に途切れてしまった。対面する娘の顔を見て少しばかり驚いたことによって。こちらが想像していたのと違ったために。

東風谷早苗が真剣な眼差しを直球ストレートでぶつけてくる。よくある恋バナしたがりなＪＫの表情ではなかった。本気と書いてマジと読む、極めてシリアスな雰囲気があった。

少なくとも下世話な話として聞いてきたワケではないのは見て取れた。恐らくは彼女なりに真面目な質問なのだろう。もっとも、何故そんなことを知りたがるのかは不明だが。

「綿間部……」

華扇までこちらの顔を覗き込むように見上げてきた。オレを映した赤みがかった瞳が微かに揺れる。まるでガーネットのような美しさに息をのむ。その煌めきに意識が引き寄せられ、知らず知らずのう

ちに吸い込まれていく。
オレは、茨木華扇をどう思っているのだろうか？
自問自答の渦が押し寄せ、あらゆる思考回路が巻き込まれる。光の届かぬ深層心理の海底へと沈んでいく。
つい今しがた、彼女について知らないことの多さに気付かされたばかりだった。そんなオレが彼女についてどのくらい知っていると言えるのか。
超が付くほどくっそマジメでたまに説教くさいのが玉に瑕だということ。
オレが今まで見てきたどの女よりも美人で、端正な顔立ちにスタイルも抜群だということ。そのくせ、時折とんでもなく無防備になってヒトを動揺させてくれやがった。
風船みたいに頬を膨らませて怒ったり、ちょっとした冷やかしに一々大げさに反応したり、ぱぁっと花が咲いたような満面の笑みを見せたり。あたかも季節が移ろうように表情が豊かだということ。
それでいて、たまに寂しそうな顔をすることも。なぜかコイツのそんな様子が妙に気になっちまう……って、これはオレのことか。今のなし。忘れろ。
あとは、仙人のクセして美味いモンが大好物でしかも酒豪だってぇことぐらいか。幻想郷の連中ならもっと色々と挙げられるのであろう。何にせよ、オレとそいつらじゃ付き合いの長さが違う。
だとしたら、今のオレが出せる答えといったら、これしかねーだろ。
「……ま、悪いヤツじゃねーとは思う」
『そうですか……』
「うぉい、何やそのリアクションは」
ところが、折角ヒトが答えてやったというのに、巫女と仙人が二人揃ってガックリと肩を落として気の削がれた声を零しやがった。その態度から見ても、彼女らお気に召さなかったのは言うまでもなし。前向きな発言だっただろうが。ったく、ワガママなやっちゃな。
一方で、神コンビまで「あっちゃぁ」やら「あの二人みたいにはいかないねぇ」やら好き勝手に言ってくる有り様。これ見よがしに額に

手を当てたり肩をすくめたり。んだよ、どいつもこいつも。これじゃオレが悪いみてぇじゃねーか。つーか、あの二人って誰だよ。知らんわ。

「はぁ……」

華扇がどんより沈んだ面持ちで溜息を吐く。やけに落ち込んでいる様がじわじわと効いてきて落ち着かない。心の内側に不可思議な靄がかかる。このままでは寝覚めが悪くて敵わない。

だーもう！　こういうのはガラじゃねぇから黙っておきたかったのだがしゃーねぇ。半ばヤケになって付け加えてやった。ぞんざいな口調なのは元からだ。

「……なんつーか華扇がいるのがもう当たり前になってんだよ。今やコイツも日常の一部ってこった。長い付き合いになりそうっつか、少なくともオレが幻想郷に居る間は一番深い関わりになるだろ。ま、オレもやぶさかじゃねぇしよ」

「え……？」

華扇が弾かれたように顔を上げてオレを凝視した。目を丸くしているので、赤い宝石のような瞳が一層に目立つ。つくづく反応が面白いのが彼女らしい。苦笑いしそうになる。

が、それ以上にヘンなコトを口走ったむず痒さがハンパない。彼女の熱い眼差しをモロに受けながらも、「そーいうこった」とぶっきらぼうに顔を背ける。

毎日のように行動を共にしているうちに、いつの間にかそいつが「いつも通り」と思えるくらいにはなっていた。気付けばそのくらいの付き合いが続いていた。説教だとか折檻だとか面倒くせぇのはあるものの、だからといってオレが彼女を拒む理由にはならない。多分、これからもこんな関係が続くだろう。

……何をカッコつけてんだか。いやいや、カッコつける分には問題ないのだ。なぜならオレは夜に生きる男。あーくそ、余計に混乱してきやがったぞコンチクショウ。

チラリと盗み見れば、桃色の仙人が落ち着きなくモジモジと指を弄んでいる。いつしか頬にも朱が差していた。

「あの、綿間部、私も……えっと」
「あーあー、とにかくもう帰るからよ。早いところロープウェイの場所まで案内してくれや」
　仙人サマが何か言いかけていたが、強引に話題を変えさせてもらった。こちらに集中する生暖かい眼差しに我慢ならず、急かすかたちになってしまう。言っておくが、オレが一番ハズいんだかんな。
　（精神的な意味で）生き残るためには、ここは戦略的撤退しかあるまい。
「つーワケで頼めるか？」
「うふふ、はいっ」
「いや何わろてねんこの巫女さん」
「えへへ～、それはもちろん」
　だというのに、むしろ東風谷早苗に笑われる始末。しかも途中からふにゃっとした感じになっておった。
　ちなみに華扇は頬を膨らませて不満そうな顔をしていやがった。
「むー！」とか言ってる。先ほど台詞を遮られたからなのか。相変わらず機嫌の落差が激しい女だ。
　そんな中でも八坂神と洩矢神のニヤついた面構えが煩わしいことこの上ない。全て分かってますよと言いたげな態度が腹立たしい。神だからってか。やかましいわ。
「オイ華扇。何してんだ、行くぞ」
「へ……？　あ！　は、はいっ」
　急に呼びかけられて驚いたのか、仄かに赤みを帯びた頬で桃色の少女が慌てて立ち上がる。ただでさえピンク要素が多いというのに、ますますピンクになっていやがる。どうでもいいけど、早くしろよ。
「ほほぅ。さも当然みたいに彼女を連れて行くんだね、キミ？」
「うるせーよ神サマ……ッ！」
　帰り際に祟り神からトドメの追い打ちがかけられ、相手が神であるにも関わらず悪態をつかずにはいられなかった。
　ちくしょう、覚えてやがれ！
　例のロープウェイはあたかも分離した櫓が縄で繋がれたような構

造をしていた。屋根も含めて全て木造なのが特徴だった。座席もなければシートベルトもない。おまけに窓ガラスも付いていない。さすが異世界クオリティである。安全性？　落ちなきゃ平気ってコトだろ。

乗り込んでしばらく待つと、ガタンと大きく揺れた後にいよいよ索道マシンが起動した。

乗客入りの箱が麓を目指して緩やかなスピードで下り始める。吹きさらしの景色がゆっくりと流れていく。ふと後ろを振り返れば、胸元で小さく手を振って見送る早苗の姿が徐々に遠くなる。さらば守矢神社。今日のことは忘れない（屈辱的な意味で）

それにしても、高所恐怖症な輩だったらチビリそうな乗り物だ。幸いオレはその類ではないため、真ん中にドスンと座って終着駅に着くのを悠々と待っていられる。

ついでに人里でやらねばならん仕事も増えちまったのだが。

「で、土産がビラ配りの依頼ってか」

「いいじゃないですか。今後もタダで乗せてくれると言うのですから」

「つかー、フリーパスの前払いかよ。どこの遊園地のアトラクションだっつの。神サマのクセしてセコいんじゃねぇ？」

八坂神に押し付けられた紙束を、風で飛んでいかないようにしっかりと押さえる。清楚な巫女サマのイラストに「守矢神社」のポップな文字が踊る。さらにあちらこちらに勧誘文句が星座の如く散らばっていた。人里に帰ったら配ってこいとのお達しである。神サマ直々の依頼がチラシ撒きとは是如何に。

二人だけの貸し切り車両だというのに、わざわざオレの隣に座った華扇がニコッと明るい笑顔をみせる。吹き抜ける微風に乗って桃色のミディアムヘアが艶やかに梳かれていく。

「私も手伝いますね」

「動物絡みじゃねーのにか？　どういう風の吹き回しなんだか。言っておくが、見ての通りメシ代も出ねぇ仕事だぞ」

「だって、私も貴方と一緒にいたいから……では、ダメですか？」

「――ッ!?」

上目遣いで儚げな雰囲気を醸し出す少女に、たった一瞬とはいえ心が騒いだ。バレてからかわれるのも癪なので景色に気を取られているフリをして誤魔化しておく。あと、心の中でツッコませてもらおう。

だから、そういうこと軽々しく言うなつってんだろうが！

「そ、そうかよ。だったら好きにすりゃイイさ」

「はいっ、好きにさせてもらいます♪」

そう言って蕾が花開くように顔を綻ばせる彼女は、とても幸せそうだった。

なお、守矢神社のビラ配りはその日だけでは終わらず、数日にわたった。

そのせいで、「夜な夜な紙を配る全身黒尽くめの不審者」の噂が人里中に蔓延し、上白沢女史の夜警と見回りの仕事を増やしてしまったのは、それなりに申し訳ないと思っている。

あぁ、そういえば……ロープウェイを降りたときに同い年らしきカップルと擦れ違ったっけか。ま、どうでもいい話だ。

つづく

第二十三話　「茨木華扇の華麗なる一日」

妖怪の山。その一角。

白狼天狗の見回りも届かない、人の気配がない場所は静けさに包まれる。静寂という真っ新な紙の上を、轟々と滝が雪崩れ落ちる唸りが塗り潰していく。

雄々しい水流が降り注ぐところに、粛々と滝行を続ける人影が一つだけあった。

艶に濡れた柔らかな桃色の髪。キメ細かく瑞々しい肢体は水をはじく。申し訳程度に羽織る薄着が透けているのにも意に介さない。傍からは天女が水浴びをしていた最中に映ることだろう。されどその女性は天女ではなかった。

この山に住まう仙人、茨木華扇。

真っ直ぐに伸びた姿勢を微塵も崩さず、寒さに鳥肌を立てることもない。あたかも彫刻の如く只々沈黙を貫く。まさに身も心も清める「静」の域。瞼を下ろし、己の精神を一点に集中させる。

「……ふぅ」

順調に日課を終え、少女が滝から身を離す。修行の一環であるにもかかわらず芸術的な美しさがあった。彼女の動きに合わせて舞った水滴さえも、日光に煌めいて桃色の乙女を魅せる。あるいは真珠の粒が輝くように。

そんなことなど露知らず、当人の華扇は本来修業とはこうあるべきだと納得する。己を磨き、邪念を払い、健全な魂を身に付けるための行いなのだと。仙人たる者、清廉潔白でなければならない。

そう、決して、最近気になっている男性にあられもない格好を見せるつもりなんて――

「ななッ、何を考えているの私ったら!?」

はたしてどういう場面を思い出したのか、冷水を浴びたばかりだというのに少女の顔が赤みを帯びていく。わたわたと慌てる様子は一人芝居をしているみたいだった。幸いにも、周囲に人はおろか動物もいないおかげで、彼女の不審な行動を訝しむ輩は存在しない。

パンッ!と両手で頬を張って気合を入れる。些か強くやってしまったせいで痛むが、こうでもしなければ治まらない。恥ずべきだと自分を叱責する。

「……もう一度やり直し」

真面目な仙人は自らペナルティを課す。まだ上がってから数分も立っていないのに、再び彼女は滝の中へと身を投じる。

「これも全て綿間部が悪いんですからね……ッ!!」

もっとも、原因となった雑念は若干残っているようだった。

「彭祖は引き続き屋敷とその周辺の警護を。竿打は……買い物はこの間してもらったから、今日は休んでいいわよ」

出掛ける前に、従者の動物たちに次々と指示を出していく。

茨木華扇は仙人ではあれど、だからといって特定の弟子をとっているわけでもない。屋敷で共に暮らすのはペットだけ。彼らとは意思疎通ができるので扱いに困ることもない。むしろ従順なくらいである。

「さ、久米。行くわよ」

少女よりも二回りも大きな体躯の老鷲の背に乗り、大空へと飛び立つ。妖怪の山を発ち、幻想郷の自然豊かな景色を見下ろす。

これも動物の扱いに長けていると自負する彼女の特技であった。もちろん自力でも飛べるのだが、大抵の場合、彼女はこうして飼っている動物を使う。

「そういえば……」

ふいに思い出したことがあった。

地底――旧地獄には、心を読める覚妖怪がいて、彼女もペットを多く飼っているのだと聞いたことがある。同士として、どんな子たちがいるのか興味が湧く。それに、あの場所にはかつての同僚も暮らしていた。大江戸の歓楽街らしき賑わいをみせる旧都で、強力自慢の集まりは今も楽しくやっているのだろうか。

そんな風に思いを馳せて、やがて力なく首を横に振るう。その拍子に桃色のミディアムヘアがさらりと流れる。

(けれど、今の私が行くわけにはいかない)

なぜなら今の自分は仙人だから。加えて、怨霊が飛び回る地底は正直あまり好きじゃない。

嗚呼。でも、彼も「外」の世界では繁華街を活動区域にしていたらしい。それなら案外、旧都とは相性が良かったりするのかもしれない。ちょっと口は悪いし粗雑なところもあるけど、さりげない優しさもある黒い青年。あのぶっきらぼうな顔を思い浮かべてふっと相好を崩して、

「って、どうしてまた綿間部のこと考えているのよーーーーッ!!」

かと思えば、赤鬼もかくやといわんばかりの見事な赤面で叫んでいた。仙人少女の絶叫が青空の彼方まで突き抜けた。

そんな主のこれまで見せたことのない奇妙な態度に、老鷲は怪訝そうに鳴くと翼をはためかせた。

博麗神社。

その地名をいうと、参拝客が少なく(なのに宴会場になりやすく)どこか貧しげな印象を抱く者は少なくない。しかしながら、かといって明日のメシにも困るようなド貧乏というわけでもない。とはいえ何分巫女が守銭奴染みているため、残念なことにそう思われてしまうのだ。

茨木華扇もその一人であり、よく様子見がてら博麗の巫女の面倒をみて、時には厳しい説教もかましていた。

「むぐ……あ、華扇じゃない。もぐもぐ、素敵なお賽銭箱ならあっちよ」

「こんにちは霊夢。ところで何を食べているのですか?」

博麗霊夢の賽銭要求は完全なまでにスルーしてやった。それよりもモゴモゴと口を動かしながら(行儀悪い)出迎えてくれた紅白の少女が気になって、素朴な疑問を投げる。

口に含んでいたものを飲み込んでから、巫女は仙人の問いに答えた。

「やしょうま。友達が作り過ぎたからって持ってきたのよ」

「やしょうまって……涅槃絵に食べるものではありませんか」

あまりにも季節外れなお裾分けに、桃色の仙人もつい苦笑いを浮か

べる。一体何がどうなって夏にやしょうまを作るに至ったのか。しかもよくよく見てみれば、そこの少女を模したと思われるデザインや可愛らしいハート型などイマドキなものまであった。というよりそっちの方が多い。

仏舎利、すなわちお釈迦様の遺骨も、どうやらうら若き女子力には敵わなかったとみえる。

「やしょうまも良いけれど、ちゃんとご飯は食べていますか？　キチンと栄養も摂らないと」

「そりゃそれなりに食べてるわよ。でも、お賽銭が少ないんじゃ贅沢もできないんだからどうしようもないじゃない。それもこれも参拝客が来ないのが悪いのよ」

えらく投げやりにのたまって、だらりと寝そべりながら団子を頬張る博麗の巫女。その姿はポテチ食いながら床に広げたファッション雑誌を読む学生と変わらない。今日はヤル気が出ない日らしい。

ぐでーっと休日モードな霊夢を前にして、華扇がこめかみのあたりを指でトントンと叩きながら溜息を吐く。

「はぁ……あなたね――」

「あーあ、誰かが毎日お賽銭だけでも入れてってくれないかしら。そうすりゃ苦労ないのに」

昼間の気温の高さもあって霊夢はすっかり油断していた。そのせいで碌でもないことまで口走ってしまう。人はそれを暑さによる思考回路の低下という。

「そうだわ。いっそあんたが毎日参拝してよ。お賽銭も入るし、仙人が毎日通う神社ってことで宣伝にもなるし」

「……」

繰り返して言おう。夏バテ混じりの霊夢は完全に失念していた。

この幻想郷において、「説教」の代名詞に当たる人物といえば二人いる。一人は地獄の閻魔、そしてもう一人はこの仙人だということを。

「……ふふふふふ」

「――ッ!?」

桜の花びらがそよ風に泳ぐような笑みを耳にした瞬間、彼女は持ち

前の勘の良さで己の危機を悟った。しかしながら、すでに手遅れであった。

桃色の髪をもつ仙人が怒涛の一喝を叩きつける。

「こんの馬鹿者ぉぉおおおおおおおッ!!」

久方振りに喰らった華扇の怒声に「しまった」と顔をしかめる。だが、本日も説教絶好調な桃色トレインは走り出したら止まらない。一度出発してしまったからには途中下車はできないのだ。

「そのような考え方でどうするのです!? 巫女たる者、人から信頼を得ると共に彼らに安寧を与えるのが務めでしょう! それをあなたはお金欲しさに参拝を要求するなど言語道断、しかも私を宣伝に使おうだなんて許しません! ええそうです、夏バテだからといっていつまでも堕落していては本当にダメ人間になってしまいます。これは早急に手を打たなくてはいけませんね。さぁ立ちなさい!」

「えー……ちょ、ちょっと勘弁してよもう。明日から、明日になったら本気出すから」

激おこ仙人の気迫に圧され、やや引きながら霊夢はいよいよもって本格的にダメな発言をやらかす。もし今の紅白巫女を親友二人が見たならば、一人は爆笑しもう一人は困ったような顔をするに違いない。

火に油を注ぐ愚行のせいで怒りのボルテージがワンランク上がった存在を前に、どうにか説教から逃れられないかと、紅白色の少女は必死に考えを巡らす。そして半ば思いつきで手を叩いて言った。

「ほら、あんたには他に気にしておかないとマズい人がいるんじゃないの?」

「誰のことですか?」

「えーっと、あれよ。この間の宴会でうちに来ていた……くろ、わたなべ? とかいう人」

「な――」

『……なんつーか華扇がいるのがもう当たり前になってんだよ。今やコイツも日常の一部ってこった。長い付き合いになりそうっつか、少なくともオレが幻想郷に居る間は一番深い関わりになるだろ。ま、オ

レもやぶさかじゃねぇしよ』

みるみるうちに華扇の顔が紅潮していく。淡い髪の色よりもなお色濃く真っ赤に染まり、ついでに仙人の体温も急上昇した。不意打ちに脳裏に浮かんでしまった彼の顔と、この前の言葉が決め手となった。

勝負あり。ついに地雷は踏み抜かれた。茨火山……もとい茨華仙が大気を突き抜かんばかりに大噴火する。

「いいいっ、今は関係ありませんッ!!　まずは大掃除です！　守矢神社に負けないぐらいにピカピカにしますよ！」

この時をもって、博麗の巫女はその整った顔をかつてないほどの絶望に染め上げた。厄日だ、などと神職とは思えない一言を呟いて。

「はー……」

たっぷりとお湯が張られた浴槽に身を沈めると、凝り固まった肩が解きほぐされたような吐息が零れる。

年末大晦日でもないのに神社の至る所まで掃除させられた霊夢がしきりに入浴を勧めてきたのだ。あきらかにこれ以上の労働を免れるための無理矢理な口実なのだったが、なんだかんだで彼女の鬼気迫る勢いによって流されてしまった。

いっておくが、「女の子なら身体はキレイにしておかなきゃ」なんて甘言を真に受けたからではない。断じて違う。

あと、どうにも彼女の中では自分はこれから彼に会いにいくことになっているらしい。何より、そう言われて満更でもなかった気持ちが恥ずかしい。

「やっぱり綿間部が悪いんです。ズルいんです」

本人が居ないのに文句を垂れながら、頭の天辺まで湯船に潜る。ぷくぷくと気泡が水面に浮かんでは割れていく。

『……なんつーか華扇がいるのがもう当たり前になってんだよ。今やコイツも日常の一部ってこった。長い付き合いになりそうっつか、少なくともオレが幻想郷に居る間は一番深い関わりになるだろ。ま、オレもやぶさかじゃねぇしよ』

（ふみぁあああああ!?）

リプレイされる彼の声とその台詞に、堪らずザッパァン！と勢いよく浮上した。派手に動いたことによって身体の周りにも飛沫が散り、柔らかくたわわに実った双丘が揺れた。なお、湯気の効果で大事なところは隠されている。

はぁはぁと呼吸を乱していたのを落ち着かせ、再びお風呂に浸かる。

「何やってるんだろう、私……」

温かい水滴が伝って落ちる前髪を指先で弄る。

それでも、実をいうと今後の予定はとっくに決まっていた。それも霊夢が言った通りに。

「仕方ありませんよね。だって私は綿間部の監視役みたいなものなんですから」

誰でもない自らに言い張って、これ見よがしに一人で頷く。ちょっとわざとらしい。

すっかり温まった身体でお風呂から上がる。いつもより念入りに身だしなみを整えて、おめかしにも時間がかかっていたことには、おそらく彼女も分かっていない。

夜の帳が下りたといえど、まだまだ宵の入り口に立ったに過ぎない。

人里の往来に明かりが並び、道往く人は今夜はどこの店で呑もうかと嬉しい悩みに練り歩く。探している彼も今頃は仕事を求めてうろついているはず。未だに夜こそが自分の時間だと言って聞かないのだから。

もっとも、今回に限っていえばそれが却ってありがたいのだけれど。

「ふむ……ついでなので何か差し入れでも買ってあげますか」

ちょうど通りがかった焼き鳥屋で数本ほど見繕って包んでもらう。後で一緒に食べよう。そう思って。

これから会いに行くのだと思うと少女の足取りが軽くなった。彼女は自覚していないのだろう。あと口の端がニマニマと緩んでいることに。

「～～～～♪」

さながらステップを踏むかのように、小さく鼻歌を口ずさむ。

そんな彼女に視線を向けて、立ち止まったり歩みを遅くしたりする者も出てきた。ご機嫌な仙人様を不思議がるのもいたし、綺麗な女の子の幸せそうな表情に見惚れている連中も含まれていた。

「あっ」

やがて、捜し歩いていた青年の後ろ姿を視界の端っこに捉える。夜景に溶け込みそうな全身真っ黒という珍妙な格好。見間違えようもなかった。思わず嬉しげな声が出た。

なぜか黒い青年は、わざわざ裏道からさらに逸れた細い通路に入り込んでいった。またペット捜索の依頼でも受けたのだろうか。それとも小銭が落ちていないか調べているとか。前者なら手伝ってあげてもいい。後者ならお説教だ。みっともない。

さてどうやって声をかけようかなんて考えながら、件の男性が消えて行った路地裏をチラリと覗く。もちろん彼はそこに居た。なのだが、意外なことに単独ではない様子だった。

「わたま――」

とりあえず名前を呼ぼうとして、なのに出かかった声がぷつりと途切れて虚空に消えてしまう。

赤みがかった瞳が大きく見開かれる。目の前の光景が、すぐには理解できなかった。

青い髪を二つ輪に纏めた妖艶な美女が、その蠱惑的な身体つきを惜し気もなく彼に差し出している。ねっとりと絡みつくような熱い抱擁を授けている真っ只中であった。

「え……？」

それが自分の口から発せられたものだとは終ぞ気付けなかった。

あまりにも弱々しい切なる声音は当人らに届くはずもなく。

包帯が巻かれた右腕から力がなくなり、焼き鳥の入った包みがするりと彼女の手から零れ落ちて、無残にも地面に叩きつけられた。

つづく

第二十四話　「邪仙現る！　美女の色香にご用心!?」

日暮の鳴く頃に。

ただし陰湿な殺人事件が起こる前触れではない。単に今の時をそれらしく表現したに過ぎない。いや、実際にはもっと遅い時刻かもしれねぇけど。

とうの昔に陽は傾いており、頭上を彩るオレンジ色を通り過ぎて薄紫色に染まった疎らな星空と、その真下にポツポツと灯りが点き始めた人里があった。交互に眺めていると、鏡を向かい合わせたかのではないかと錯覚に陥る。

今夜という舞台が始まって間もない。眠りにつくには早過ぎると言わんばかりに、老いも若きも人々が往来を行き来する。むしろオレにとってはこれから一日が始まる。日中にガッツリ寝れたおかげで頭は冴えて体も軽い。絶好調である。

「さぁて、それじゃいっちょ行きますか」

コキコキと首を軽く鳴らして準備完了。ダンディズムな足取りで今宵も街灯りの中に颯爽と消えて行く。フッ、やはりオレは夜に生きる男。

「ってなワケで仕事ねーか?」

「ないね」

慈悲の欠片もあったもんじゃない門前払いに「あぁそうかよ」と脱力してカウンターに頬杖をつく。

御用聞きは一件目にして早くも空振りしちまった。つっても、頼み込むほど仕事に飢えている状況でもないため大して気にしちゃいない。そもそも仕事がないのも今に始まったことじゃねぇ。

これまで何度か通っているうちに馴染みになりつつある酒場を訪れた。都合よく依頼客が転がってないか探したまでは良かった。しかしながら、生憎と右も左も呑兵衛ばかりで喧しい。

「当然。うちの店はこの時間帯が書き入れ時だから」

「ま、飲み屋ならそうだろーよ」

ポーカーフェイスでオレに視線を飛ばす赤いショートヘアに青リ

ボンが特徴の看板娘。ついさっき僅か三文字で即答してくれやがった張本人でもあった。給仕の真っ最中なのだが、首元を隠すマントにミニスカのコーディネートは相変わらず。

「バンキちゃーん！　もう一杯ッ!!」

「はーい」

「バンキちゃん！　こっちも頼むよー！」

「今行くから待ってて」

「スゲーな……」

クールなろくろ首少女の人気は以前より聞いていたが、実際にその光景を目の当たりにするのは初めてだった。あっちこっちで彼女に来てもらおうと全然黄色くないだみ声が飛び交う。

酒のおかわりを頼むお客様にはスマイル一つない接客で追加を持っていき、さりげなく屈んでミニスカの中身を覗き見ようとする不届き者にはお盆チョップが脳天に突き刺さる。セクハラ野郎の散りゆく潔さと女店員の容赦のなさの両方に肝が冷えた。そもそも、そこまでして見てぇモンなのか。

「……」

かつて突風に捲れ上がった時に垣間見えてしまった（ガン見はしてない）アダルティな紅色の布地を危うく思い出しかけた。ここから先は色々とアウトな気がして咳払いで回想を追っ払う。

「えっちなこと考えなかった？」

「……考えてねぇっつの」

「間があったわね」

ジロリと看板娘にあるまじき冷め切った目つきで一瞥された。うっかり目を合わせないように気を付けながら誤魔化しておく。だからどうして女ってぇのはどいつもこいつも勘が鋭いんだよ。怖ぇだろうが。

その後も彼女を求める声――正しくは酒と肴か、いずれにしても酔っ払い衆からのお呼びは鎮まる兆しを見せない。赤蛮奇も店内を忙しなく動き回っていた。これもうミスティアあたり連れてきた方がいいんじゃねーか？

「悪いけど忙しいの。注文しないなら相手しないから」
「っかー、わぁーったよ。また来る」
赤い娘からそっけなく返されてはこちらも応じるしかあるまい。そう考えながら席を立つ。
一仕事もせずにいきなり飲み始める気分でもなかった。とりあえず、しばらく適当にその辺を回ってからまた来るとしよう。なに、今宵は始まったばかりってな。
「じゃーな」
悲しいことに、注文の一つもしなかったせいで「毎度あり」の一言もなかった。ったく、世知辛いなオイ。
いっそのことヘルプの依頼でもしてくれれば手っ取り早かったものを。ま、今更言っても仕方ねーか。
酒場の暖簾を潜り、外に出ると闇色の夜空と眩い月星の独壇場となっていた。独特の大人びた雰囲気を醸し出すこの時間帯はやはりオレにこそ相応しい。フッとニヒルな笑みが生じる。
表通りから少し外れた道を歩いていくと、次第に通行人の数が減っていった。ついでに灯りの数も減る。しくじったか。そもそも客になりそうな対象がいないのでは意味がない。
どうやら今日は運が良くない夜らしい。ま、そんな日もあるわな。しゃーねぇ。
「もし、そちらのお方」
当てもなく彷徨っていたところに、ねっとりと絡みつくような甘ったるい女の声に掴まった。
念の為、左右を確かめてみたが人通りは皆無に等しい。たった一人、妖しげな色気を放つ女を除いて。長屋の壁に背中を預けて、誰かと待ち合わせているかのような立ち姿。
海よりも深い青色の髪を二つ輪の形に束ね、高質そうな簪を挿した美女だった。雄を惑わし惹き付けてやまない豊満な身体を見せつけ、大きく胸元をはだけさせた上下一体の水色の衣装。あまりにも妖艶な風貌に、キャバ嬢を通り越して風俗嬢なのではないかと疑ってしまう。

ぶっちゃけエロいな、この女。やっぱりそっち系の店の回し者だろうか。裏通りだし。

「オレに言ってんのか？」

「まぁ酷い。わたくしたちの他に誰もいないではありませんの」

暗闇でも分かるくらいに白い指を唇に這わせ、くすくすと囁くように愉しげな笑みを向けてくる。女性らしく長いまつ毛の下から、髪と同じ色の瞳で流し目を送ってオレを映す。さながら蝶が花々を遊覧するようでもあり、されど獲物を狙っている捕食者の目にも感じる。男なら誰しも虜にする危険な色艶があった。

現にこの女に堕とされちまった野郎も少なからずいるであろう。コイツは「女」を武器にするのに己がとてつもなく優れていることを理解している。そういう手合いの貌をしていやがる。

アダルトな遊び場へのご招待でも受けるのかもしれない。すると、件の女が唄を詠むような口調で言葉を紡いできた。

「他人の物ほど欲しくなることって、ありませんこと？」

「あ？　そりゃ隣の芝生は青いってヤツか。つーか誰だよお前」

「あらあら、これは失礼を。申し遅れてしまいました」

ゆったりと、やけに余裕を含む足の運びで青い美女が近寄ってくる。腰を揺らしてしなを作る動作に、偶然にも運悪く（あるいは運良く）通りかかってしまったモブ男がいとも容易く目を奪われていた。が、女が先ほどオレにしたのと同じく流し目で微笑むと、男は気色悪く顔を赤らめながら足早に去っていった。野郎の赤面なんざ見たくねぇなオイ。

やがて無駄に近い距離まで詰められる。さらに、たゆんと揺れる谷間から青い女が名刺を取り出し、そいつをオレに差し出した。って、名刺持ってんのかよ。

というか近過ぎんだろうが！　大体お前どこにしまってんだよ！

艶めかしく人肌が残ってんじゃねーか！

ひとまず受け取った紙切れに視線を落とす。花のイラストがあしらわれた媚びた文字でこう書かれていた。

『仙人　青娥娘々♡』

「は……仙人だぁ？」

真っ先に飛び込んできた見逃せない単語に思わず声を上げる。このエロい女が仙人サマだってぇのか。いやいや冗談だろ。

ところで娘々ってどう読むんだ。あ、下に振り仮名あったわな。どうやらコレで「ニャンニャン」と読むらしい。絶対源氏名だろ。あざとさこの上ない。

とにかくツッコミどころがありすぎて名刺から女へと視線を移す。満足そうに片目を閉じていやがった。ハートマークの一つでも飛んできそう。

「そうですわ。仙人は彼女だけではなくてよ、夜に生きる何でも屋さん？」

「けっ、知ってんのか。オレの個人情報はとっくにバレてるってことかよ」

「ええ、何せわたくしには壁などあってないようなもの。例えそれが噂話の壁であったとしても筒抜けなのですわ」

得体のしれない言い回しとともに、彼女は髪に挿していた簪を引き抜いてチラチラと見せつけてきた。その髪飾りにどういう意味があるのかは定かではない。

とりあえず、コイツと華扇が面識あるらしいことは何となく察した。ひとえに同業者だからなのか。

しかしながら、八雲紫とはまた違った胡散臭さがプンプンしやがる。妖怪の賢者のそれを「計算高さ」と言い換えられるとすれば、一方こっちのエロ仙人は「腹黒さ」とでも表そうか。

一度嵌まれば二度と抜け出せない。危険な罠だと知っていながらも、なれど理性は逆らえずに引き寄せられてしまう。甘々しい毒の蜜がドロリと滴る。

突如として現れた妖艶な美女の正体は、まさかの仙人であった。ま、仙人がアイツ一人だけなワケねぇか。柔らかな桃色が脳裏をかすめる。

青い仙人がオレの顔を覗き込む。彼女から漂う香水の匂いが嗅覚をつつく。いやに雌の存在を意識させられる香りにクラリとくる。

「動物と山住まいの仙人がご執心の殿方がどんなお方なのか。とても興味がありましたの」
「そうかよ。で、結局のところオレに何用だってんだ」
「うふふ、そう焦らずとも。実は折り入ってお願いがございますの。聞けば、どのような依頼も引き受けてくださるのでしょう？」
「フッ、報酬次第だな」
ニヒルな表情で意味ありげに答える。なぜならオレは夜に生きる男。なかなか渋いだろ？
やらしい店の勧誘かと勘繰ったりもしたが、どうやら客だったらしい。オレとしたことが早とちりしちまった。ったく、あの説教好きじゃあるまいし。またもや出てきたピンク色の膨れっ面をしっしっと打ち消す。
「どうかなさいまして？」
「いや、何でもねぇ」
とにかく、そういうことであればオレとしても都合が良い。無駄足にならずに済んだだけじゃなく、本日の初仕事ときたもんだ。得体のしれない連中から依頼を受けた経験なんざ、繁華街に居た頃から何度もある。多少の厄介事なら手馴れている。むしろ望むところだ。上等。
依頼内容は何だと問えば、青娥娘々なる女仙人は微かに首を横に振って瞼を伏せた。どうでもいいけど、ちょっとした仕草にも妙な色気を孕ませるのはワザとやってんのか。
「ここでは人目もあるやもしれません……少し、場所を移してもよろしくて？」
「ま、いーけどよ」
先ほどのモブ野郎の他には誰も来ちゃいないというのに、目の前の女性は移動を申し出てきた。
よほど内密に済ませたい重大な案件なのかもしれない。しかし、そのわりには焦った様子は見られなかった。その矛盾が一層の怪しさを生む。もっとも、仙人ともあろう者が慌てふためいたり……してたわ。すげーあったわ。

謎の美女に導かれるままに足を進めていく。ほどなくして、彼女はススッと路地裏の闇に吸い込まれていった。街灯の明かりも届かない湿気た物陰染みた空間が奥に続く。青い女に次いでオレも身を滑り込ませる。

もはや抜け道と大差ない細過ぎる通路を数歩ほど進んで、ようやく相手の足が歩みを止めた。漆黒に包まれた暗さの中心に、かの女の深い青色が一際に映える。さながら舞台に立つ女優みたいに思えた。

「ここなら良いでしょう」

毒々しい甘味を垂らした蕩ける声色が僅かに反響し、鼓膜の奥を撫でていく。

「んじゃ、依頼について話してもらおうか。言っておくが、引き受けるかどうかは聞いてからだ。内容による。それで構わねーよな?」

「うふふふ、そんな大それたものではありませんわ。そう、とってもカンタンなこと……」

そう呟いて瞬く間に、先刻よりも至近距離にまで詰め寄られてしまう。迂闊にも身動きが固まった。脳ミソが痺れそうな濃厚な甘い匂いが鼻孔をくすぐる。

「――ッ!?」

我に返り、後ろに退いて間隔を取ろうとするが、こちらが動くよりも手早く女が仕掛ける。豊満に熟れた双丘を押し当て、しなやかな細腕が白い蛇の如く背中に絡みつく。ついには乳房だけではなくその全身が密着する。あたかもオレの身体の隅々まで溶け込もうとしているかのようでもあった。

「オイ……ッ、何しやがる!?」

「何をと仰いましても、お支払いの一部をしているのに過ぎませんわ」

「んだと……!?」

「ねぇ……わたくしのモノになってくださらない?」

幾人もの男共を虜にしてきた妖艶さを兼ね備えた美女が差し出す、甘美な誘い。

しっとり濡れた息遣いが耳元に迫る。ふぅ、と息を吹きかけられてむず痒さに背筋が震えた。下手すりゃそのまま頬擦りまでしかねな

い色気に満ちた声が、上っ面の理性を剥がそうと指を這わす。
誘惑という夢に溺れさせようと、青い仙人が一つ、また一つと言葉を吹き込む。
「もし、受け入れてくださるのであれば……」
一度でも口にすれば堕ちる禁断の果実をチラつかせる林檎売りの悪女は、チロリと舌なめずりをしながら最後の誘い文句を言い放つ。
「わたくしのことを好きにしても構いませんから……ええ、思う存分に……」
その一言が、オレの中で全ての答えを叩き出した。もはや、そこに迷う余地などなかった。

ゆっくりと、まるで憑りつかれた亡者を彷彿とさせる酷く緩慢な動きで腕を伸ばしていく。
そして、全身に纏わりつく女の肩に手のひらを重ね――

ほんの一瞬だけ、よく知った桃色の髪をもつ少女の悲しげな声、その脆く消えてしまいそうな幻聴が聞こえた。
つづく

第二十五話　「フタリノ夜」

「要らん」
「あぁん」
纏わりつく悪女を引っぺがす。肩を掴んで押し返したときにエロい声されたが気にも留めない。逆に興醒めしたといってもいい。
『ねぇ……わたくしのモノになってくださらない？』
フン、と鼻を鳴らして青髪の女を見据える。
「そーいう依頼ならお断りだ。オレは誰かの所有物に成り下がるつもりはねーよ」
男を惑わす色香で籠絡する算段だったのだろう。が、生憎と逆効果でしかなかった。
打算に塗れた色仕掛けなどオレには通用しない。繁華街で幾度の夜を過ごしてきた。その積み重ねてきた経験の為せる技だ。中には人を都合よく利用してやろうと、ハニートラップを企んでいた女連中にも何度か覚えがあった。そしてこの女は、そいつらと同じ匂いがする。
「覚えておけや痴女が。企画モノのＡＶみたいな見え透いたマネはむしろ冷めんぞ」
だからこそ、無自覚とか天然でグイグイ迫ってくるようなタイプには困るワケで。なにせ、そっちの方が耐性がないのだから。またもや淡い桃色のミディアムヘアの幻が頭の片隅にチラつく。まったく、お前のことだかんな。
いずれにしても、こんなわざとらしい美人局紛いに引っかかるとしたら童貞か女好きぐらいなモンだろ。フッ、夜を生きる男に搦め手は意味がないということを知るが良い。
やはり今夜は碌なことがなかった。青娥娘々とやらも既に話す内容は尽きたハズ。当然、オレから話すようなこともなし。
「悪いが用済みならオレはもう行くぞ。あばよ」
こういう場合は、余計なコトを言われる前にとっとととズラかるのが正解だ。捨て台詞を残して背を向ける。

すると、振り返ったその先に誰かが突っ立っていた。得意の夜目が効いているおかげで、暗がりに紛れた輪郭であってもスタイルの良さが把握できる。柔らかな桃色の髪を夜風に靡かせ、薔薇付きの中華衣装を着こなした人物となれば、もはや心当たりなど後にも先にも一人しかいない。

「んだよ、いたんかい」

軽口を叩きながらお馴染みの仙人サマと鉢合わせる。

青い女に抱きつかれた最中に微かに耳に届いたアレは幻聴じゃなかったらしい。つーか、見てたんだったら止めてくれたっていいだろーが。見捨てんなよ。

ところが、どういうワケかオレが声をかけても華扇は棒立ちのまま動こうとしない。まるで時間が止まったかのような彼女を不審に思い、眉をひそめて凝視する。

「……」

「オイ、どうした」

再度声をかけてみたものの、やはり応答なし。どうしたんだ一体？

呆然と立ち尽くす彼女の足元に何らかの包みが落ちている。恐らくはコイツの物であろう。それすらも気付いていないってぇのか。ったく、しゃーねぇな。

彼女のところまで行き、その場で屈んで代わりに拾ってやる。おう、焼き鳥のテイクアウトじゃねーか。旨そう。

幸いにも包みごと落下したため地面に直接バラ撒かれる悲劇は避けられていた。これならば三秒ルールも必要あるまい。それにしても、この女が食いモンを疎かにするとは珍しい。

「お前、食べ物を粗末にすんなよ。勿体ねぇだろーが」

折角だ、拾ったついでに一本貰っておく。口に運ぶと鶏肉のクセのない味わいがじんわりと染み出してきた。購入してからまだ間もないのかそこそこ温かさが残っている。塩か、悪くねぇ。

ちなみにオレとしては皮は好きじゃない。あのゴムみてぇな食感がどうにも苦手だ。やはりモモ肉こそ至高といえよう。安いし。

「何を勝手に食べてるんですかぁあああ!!」

ようやくハッと正気に戻った華扇が間髪入れずに大声で叫ぶ。いや、うるせーよ。

赤みがかった瞳は先ほどまでの虚ろな暗い色ではなく、確かな生気と色彩をしっかり宿していた。相変わらずテンションの落差が激しいやっちゃな。とりあえず怒気は引っ込めてほしいところである。

拾い上げた包みと食いかけの焼き鳥をそれぞれ手にして肩をすくめる。

「一本ぐらいイイだろ。分けてくれや。つか、落し物を拾ったヤツは一割貰えるんだぜ」

「ばかッ、ばかばかばか！　この大馬鹿者ぉ！」

「いやバカ言い過ぎじゃね？」

こっちの両手が塞がっているのを良いことに、桃色の女が体当たり気味に飛び込んできた。目尻に薄らと涙が浮かんでおり、ガーネットのような眩い瞳が艶やかに潤んでいた。そいつがやけに綺麗だったせいで、不覚にも身動きを止めてしまう。

オレの動揺などお構いなしに、彼女は駄々っ子みたいに鼻を啜りながら胸元に縋りつき、そのうえでポカポカと左右の拳で叩いてくる。されるがままに今度はこちらが立ち尽くす。

マジか……そんなに焼き鳥を取られたのが嫌だったのかよ。さすがに罪悪感を覚えちまうわな。あと今でこそ威力も軽くて可愛らしいが、コレがいつリバーブローに発展するのかと思うと気が気でない。

バカ呼ばわりと連続パンチを立て続けに受けつつ、全然離れようとしない華扇を宥めようと、ぶっきらぼうに言い聞かせた。

「わぁーったっつの。あとで一杯奢ってやっから。そいつで勘弁してくれ」

「すんっ……そういう意味じゃ……でも、約束ですよ？」

「へいへい」

むー、と変な唸り声を上げる仙人サマをようやく引き剥がす。それと同時に――

「交渉決裂、ですわね」

深い青色の髪をもつもう一人の仙人が会話に割り込んできた。さも残念そうに見せかけて。されど、それさえも上回って愉しげな声音が夜の空気と戯れる。こっちもまだいやがったのか。

「青娥！　貴女という人はッ！」

「まぁ怖い。別に良いではありませんの。ただお話ししていただけですわよ？」

「白々しい……ッ！」

仙人と仙人が睨み合う。華扇の方はといえば、さながら背中の毛を逆立てて「フシャーッ！」と威嚇している雌猫の如く。あまり仲はよろしくなさそうに見受けられる。同業者であっても仲間に非ずってか。

軽く嘆息してから一歩前に出る。華扇を背中に庇うような立ち位置につく。ちょうど二人の女の視線を遮る形になった。オレの不意な行動によって両者が目を瞬かせた。

悪いがキャットファイトを見たい気分じゃねぇんだよな。やけに華扇からの妙な視線を後ろに感じるが、ひとまず今は置いておこう。

色仕掛けの悪女と対峙する。

「ったりめーだ、出直してこいや。もうちょいマシな別の仕事持って来い。そしたら話ぐらい聞いてやる」

「あらあら……フラれてしまいましたわ」

よよよ、と泣き崩れる格好でおどけてみせる青い美女。だが、オレが無反応を貫くとあっさり切り替えて、妖艶な笑みを貼り付けた。早変わり過ぎんだろ。やっぱり芝居だったか。

兎にも角にも、どうやらあちらさんは今宵のお遊びはここまでにするつもりらしい。

色っぽい女仙人が後ろ向きに一歩下がりながら、他愛のない挨拶を交わすかのように別れの言葉を紡ぐ。

「また会いましょう」

こちらの返答は聞かなかった。暗闇に美女の香りを滲ませて、青娥娘々がさらに奥へと消えていく。徐々に溶けていくかのようにして、ついには跡形もなく姿を眩ました。もはや気配すら残っていない。

最初からそんな輩が居たことさえも疑わしくなってくるほどに。
野良猫一匹通らない細い路地裏に、男女二人が残される。
いつまでも無言のまま突っ立っていても仕方ない。こちらも行くとしよう。迂闊にも一杯奢ると口走ってしまった手前、どのみち酒場に戻らなければなるまい。
「あーあ、結局今夜は無収入かよ……」
ボヤきつつ歩き始めると華扇も続く。横に並ぶと、おもむろにオレの片腕に自身の両腕を絡ませてきた。身体がくっ付けられた際に、彼女から仄かに石鹸の香りが漂ってきた。少し前に風呂に入ってきたばかりなのだろうか。ふわりと鼻孔をくすぐられて、どこか落ち着かなくなる。
表通りに出たことによって周りの目も気になり始めたのもあって、
「とりあえず離れろって」
「嫌です」
どうにか冷静を装って口を開くが、華扇からは即答でしかも是非もなし。断固拒否といわんばかりであった。
極めつけに桃色仙人の巨乳に己の腕がカンタンに挟まれてしまっているのだから手におえない。この女、どんだけデカいんだ……
というか、お前まで引っ付いてくんのかよ。仙人ってヤツは皆そうなのか？
「オイ……」
「いーやーでーすぅー」
「ったく、我儘か。つーか焼き鳥の包み持たせたままじゃねぇか。もう一本食っちまうぞコラ」
こちらが文句を垂れても言うこと聞かず。それどころか、何故か不満そうに唇を尖らせて頑なに離れようとしない。むしろ余計に強く腕に抱きついてくる。そのせいで、むにむにと当たるご立派な双丘の柔らかい感触がより一層しっかりと伝わってしまう。
だーもう！　だからッ、こーいうのがオレにとって最も性質が悪いんだと言ってんだろうが！
青髪の女に絡みつかれた時には感じなかったハズの、得も言われぬ

感情が込み上げてきた。そいつを意地でも押し留める。結局、道中ずっと変に意識させられながら歩き続けるハメになった。

「それじゃあ、ごゆっくり」

何だか無駄に気疲れしたが、とりあえず場所はいつもの酒場に戻る。

数十分前と変わらずに呑兵衛どもでごった返している店内を進み、どうにか空いたテーブル席を見つけて華扇と相席する。今回はちゃんと注文したので、テーブルの上には徳利が数本並んでいる。オレの支払いになるのは言わずもがな。

野太い喧噪や音程外れの演歌モドキが波乗りするドンチャン騒ぎの海を、赤蛮奇が手馴れた様子で捌いていくのをぼんやり眺める。

「結局、何者だったんだ？　アイツは」

「霞青娥。彼女もまた私と同じく仙人なのですが、あまり良い噂を耳にしたことはありません」

「霞青娥……そいつがあの女の本名ってか。やっぱりコレは源氏名だったんだな。んだよ、娘々って」

なし崩し的に受け取ってしまった名刺を扇子で煽ぐみたいにして振る。それを見た華扇の目つきがすっと細められた。

「彼女から貰ったんですか……？」

やけに冷め切った声音が喧騒を縫って突きつけられる。その研ぎ澄まされた怒気はどうにかできねぇのか怖ぇだろーが。

「成り行きだっつの。欲しけりゃやるよ」

「いえ、結構です」

雑な答えとともに紙切れを渡そうとすると、彼女はゆっくりと首を横に振って断った。ついでに少しだけ機嫌も直ったようだ。それと小さい声で「よかった……」とか呟いていておった。もっとも、何がどう良かったのかは皆目見当もつかねぇ。

その後も引き続き、霞青娥について華扇から情報を集める。時折、酒やつまみを口に運びつつ集まった内容を整理した。

壁抜けの邪仙、霞青娥（別名を青娥娘々）邪な考えで行動する仙人。

つまり邪仙。自分の利に繋がることであれば周りがどうなっても構わないという、ある意味清々しい性格だという。なお、簪だと思っていた髪飾りは正しくは鑿で、アレが壁抜けの二つ名を持つ所以らしい。これまで虜にされた男の数は不明。あとエロい。

「さらには死人使いでもあり、その実、キョンシーを従えています。他にも仲間はいるそうですが、彼女の場合は単独行動か従者を連れているのが大半ですね。自らの気持ちの赴くままに動いているのでしょう」

「っかー、仙人でネクロマンサーとか何やねん。いくらなんでも矛盾し過ぎだろ。しかも無駄にエロいしキャラも濃いしよ」

エロい、という単語を口にした瞬間に再び華扇の目つきが鋭くなったのはさて置いて。

あくまで推測でしかないが、青娥がオレを手中に収めようとしたのは華扇への当てつけにするつもりだったのではないだろうか。もしそうだとしたら勘違いも甚だしい。

オレはこの女の弟子でもなければ、付き合っている関係でもない。邪仙の邪推はお門違いってワケである。ったく、迷惑なこって。

去り際にまた会おうなどと言われちまったが、オレとしては当分会いたいとは思わなかった。あの女が美人なのは認めるけどよ。そういう相手ならこちとら華扇がいるから十分だ。

「ま、しばらく出くわすこともねーだろ」

「だといいのですが……」

「さすがに懲りただろ。テメェの目論見が外れちまっただけじゃねぇ、ご自慢の色仕掛けが効かなかったんだからよ」

フッとニヒル且つ楽観的にのたまって、オレは麦酒の入ったジョッキに口を付けた。霞青娥、敗れたり。

なぜならオレは夜に生きる男。そう易々と手玉に取られるようなことなどあろうものか。おとといきやがれってな。

ただし、世間一般ではそれをフラグと呼ぶ模様。

つづく

第二十六話　「エロ同人みたいに！」

再会の日は早くも訪れた。というか翌日であった。

時は夕方。規則正しく起床するや否や、ふと妙な違和感に襲われた。何気なく隣を見下ろせば、そこには青髪をメビウスの輪みたいな形に括った美女が添い寝で横たわっている。

他人様のテントに勝手に潜り込んでいやがったそいつは「う……んぅ」などと悩ましげな声を唇の間から漏らす。色気を滲ませて仰向けに寝返りを打てば、洋画の女優さながらに額に腕を乗せる。

現状を把握するのに幾らかの時間がかかった。よくマンガでありがちな、沈黙を表す木魚の低音に次いで鐘の高音が脳内に木霊した。直後、

「ホワァタァアアッ!?」

衝撃のあまり北斗の拳みたいな裏返った叫び声を上げていた。燻っていた眠気が一気に消し飛ぶ。このふざけた時代へようこそ、ってやかましいわ。

未だに一緒になってタオルケットに包まり目を覚まさない青色の女仙人。招かれざる客に驚愕と混乱と動揺の真っ只中で頭がイカれそうだった。しかしハプニングは留まるところを知らず。これまた予想だにしなかった方向からも刺客がやってくる。

「綿間部！　どうしたのですか!?」

なぜか華扇がテント内に飛び込んでくる。お前まで来んのかよ。こっちもこっちでタイミング良過ぎんだろ。が、それよりもこの展開は非常にマズイ。だが、止める暇もなかった。

血相を変えて駆け付けた桃色仙人が、目の前に広がる光景――男女二人が薄い布一枚に同衾しているシチュエーションを目撃してしまう。

あっという間に、美しい顔立ちからありとあらゆる感情が消え失せる。あたかも能面の如き無表情。

やがて、この状況を理解していくにつれて、少女の顔色が再び生命の火を宿す。朱く、どこまでも紅く。火種は次第に大きさを増してい

き、ついには憤怒という烈火の炎にまで燃え盛った。
大きく息を吸い込んで、怒髪天を突いた説教の鬼が咆哮を迸らせる。
「ナニやってたんですかこんのっケダモノォオオオオオオ!!」
あわや場外まで吹き飛ばされそうな威圧感に思わず仰け反る。目を吊り上げ、あと額に青筋を浮かべてオレを睨みつける凄まじさたるや、もはや筆舌に尽くし難し。これほどまでに激しい怒りを露わにした彼女は初めてかもしれない。
「待て、誤解だ。別に何もしとらん――」
「うるっさい!!」
叩きつけるように一喝すると、そのままこちらに向かってダイブしてくる華扇。狭いアジト内では避けられる余地もなく、真正面から体に受けてしまう。さらに勢い余って床に押し倒された。圧し掛かられて身動きが取れなくなる。
またかよ！　つか、コイツやっぱり力強ぇえ!?
間近ですったもんだの大騒ぎを繰り広げれば、さすがに眠っていた相手も目を覚ます。霞青娥が小さく欠伸をしながら薄目を開いた。そして、オレと華扇が押し相撲しているのを見るなり優雅に微笑む。どちらかといえばオレに向けて。
「あぁ……ふふ、昨夜はお楽しみでしたわね」
「何ですってぇ!?」
「オイコラァ！　この状況で変なコト言うんじゃねぇ！」
この悪女が！　待ってろ、今すぐとっちめてテメーから洗いざらい全て吐かせてやるかんな。
華扇と手四つで押し合い力比べをしながらも青髪の女を睨みつける。どういうワケか華扇はオレばかりを狙って霞青娥など眼中にない様子だった。何やってんだお前っ、元凶はあっちだろーが!?
諸悪の根源たる青娥娘々はといえば、厭らしく身をくねらせて両腕を己に回しつつ色っぽい声をあげやがった。
「あぁん怖い。殿方から乱暴にされてしまう前にお暇するといたしましょうか」

「テメェ……逃がすと思ってんのか……！」
「ご心配には及びませんわ。だって、貴方にご執心の仙人様が足止めしてくださっていますもの」
憎き相手に挑発されているにも拘わらず、確かに青娥の言う通りで華扇は俺しか見えていない。いや、こんなん嬉しくねぇぞ。マジメな仙人サマは錯乱していて手が付けられない。
カンペキに頭に血が上っておりヒトに馬乗りになったまま喚き散らす同業者を横目で見やり、邪仙がくすりと笑みを零す。
「では、あとはお二人でごゆっくり」
青い髪に挿していた簪――正しく鑿らしいが面倒くせぇから簪としておく。高質そうな髪飾りを引き抜いてテントの側壁に翳した途端、真ん丸の円形を象った大穴がぽっかりと空いた。切り取ったのではなく、まるで抉り取ったかのように一部分が消滅する。
「って、穴ぁぁあああ!?」
この女、不法侵入しただけじゃ飽き足らず、他人様のアジトまで壊しやがったぞ!?　テロリストや！
驚愕のあまり硬直してしまい（ただし華扇との押し合いは継続中）ツッコミとか諸々の処理が追いつかない。その間にも、青娥は自ら堀った穴を通り抜け、ちゃっかりテントの外側に逃れることに成功していた。
「ごめんあそばせ」
最後に邪仙が今一度向き直り、ハートマーク付きのウインクをかまして悠々と去っていく。完全にしてやられた。それでも遠ざかっていく犯人をみすみす取り逃がすなんざ、夜を生きる何でも屋のプライドが許さなかった。
今なおオレに跨って癇癪を起している桃色の仙人サマをどかそうと、なりふり構わず奮起する。
「オイ華扇！　アイツ逃げんぞ！」
「私だって……私だってぇ！」
「だーもう！　聞けっつの！」
イマイチ要領を得ないことを口走りながら、紅い中華衣装の女は

まったく周りが見えていない。それはもう酷く取り乱していやがった。どうにもオレとあの女が一緒に寝ていた光景が余程ショックだったらしい。だから濡れ場も一夜の過ちもないと言ってんだろーが！

これではいつまで経っても何一つ解決しない。くそ、こうなりゃ仕方ねぇ！

「きゃっ」

それまで真っ向から力をぶつけ合っていたのを、不意を突いて横にずらしてバランスを崩させる。

乗っかっていた女と諸共、ゴロリと身体を反転させて今度はこちらが彼女を床に組み敷く。ついでに両方の手首をしっかりと掴んで抵抗できないようにする。

急な変化が功を成したのか、ようやく華扇が大人しくなる。パチクリと何度か瞬きをした後、互いの目と目が合う。見つめ合ってる間に、女性らしくまつ毛が長いことに気付く。綺麗な顔、と場違いな感想を抱いた。

そうして赤みがかった瞳がオレの顔を捉えると、今度は何やらあわあわと慌てだした。ボッと一瞬にして顔を沸騰させて。

「や、やっぱりまだダメですッ！　こんなの早過ぎますぅ！」

「ちょバカッ、暴れんな！」

「いやぁ！」

熟れたトマトみたいに紅潮して涙目になった桃色の少女がジタバタともがき始める。これ以上この女を野放しにしたら、いよいよもって我が住居が壊されかねない。そしたらオレはめでたくホームレス連中の仲間入りになっちまう。

そうはさせまいと、彼女を身体の上から押さえつけるとさらに抵抗が激しくなる。何でや。

「いいから大人しくしろ！」

「やだぁ！　やるならせめて優しくして……？」

「だーもう！　ワケわかんねーこと言うなや！」

その後、オレの拘束を無理矢理に振り解きやがった華扇が大暴れ。

包帯の拳が顔面に減り込んでくるわ膝蹴りが飛んで来るわ引っ叩かれるわ。ありったけの蹂躙の限りを受けたのであった。

婦女暴行疑惑の通報を受けた上白沢女史が走ってきたのは、五分後のことである。

「あらら、大変だったわねぇ」

「痛ぇ……まったくだぜチクショウ」

「し、知りませんっ」

低い声と恨みがましい視線を投げつける。気まずいのを誤魔化そうとしているのも加わり、拗ねたようにそっぽを向かれた。お約束の早とちりで勘違いな妄想してしまったのを恥じているのだろう。横顔から覗く耳が赤くなっていた。

一方で、こちとら殴られたところの青痣やら平手打ちの痕やらのせいで、顔面で一人じゃんけんをしているかの如し。繁華街にいた頃でさえ、十対一で乱闘したときでもここまで傷は負わなかった。

そんなオレに和服が似合う女将スタイルな鳥少女が絆創膏を貼ってくれていた。屋台で使う醤油を切らしてしまい、買い出しに来ていたところを偶然通りかかったのだという。寺子屋に連行されるオレ達の姿を見かけて、その付き添いと今はこうして手当まで担っている。絆創膏は寺子屋の備品。

面白半分と苦笑半分に女将が茶化してくる。あざとい。

「モテる男の人は辛いわね」

「コレのどこがモテるってぇんだよ。くそ、あの悪女め」

冗談だとしても笑う気になれなかった。散々引っ掻き回した挙句に逃げ遂せやがった青い邪仙を思い浮かべて悪態をつく。

しかも、どうやら不法侵入されただけではなくガサ入れもされていたらしい。ボストンバックの中身が漁られていた形跡が後になってから見つかった。もっとも、金目の類いなんざほとんど持っちゃいないおかげで、盗まれたブツは何一つなかったのだが。これぱかりはざまぁと言わざるを得ない。ざまぁ。

ちなみに、奴の能力によって抉じ開けられたテントの大穴は、謎の

カラクリでしばらく時間が経過したら自然と塞がっていた。次に会ったら弁償させようとも考えたが、杞憂で終わった。ま、直す手間が省けただけ良しとすべきか。

ほどなくして、オレ達が集まっていた教室の戸が滑らかな音を立てて真横に流れる。人里の守護者、上白沢女史のご登場。彼女は入ってくるなり、悲惨なことになっているオレの顔面を見ると、ミスティアとは異なり百パーセントの苦笑いを浮かべた。

「黒岩、大丈夫か？」

「ダイジョーブそうに見えるか……？」

「はは……」

控えめな乾いた笑みで誤魔化されてしまう。華扇は気まずそうなままだった。思っていた以上に堪えているようだ。

不幸中の幸いで、冤罪だったのはすぐに伝わった。通報現場でオレと華扇を目の当たりにした時の、上白沢女史の何とも言えなさそうな表情は当分忘れられそうもない。それと「またコイツ等か」と言わんばかりだったことに物申したい。

ともあれ野次馬も出始めた場所に留まるのはあまりに分が悪く、ひとまずこうして引き摺られてきた。もっとも、いきなり牢屋にブチ込まれていないのだけマシというもの。むしろ匿ってもらっている状況に近い。

「さて、詳しく聞いても良いだろうか？」

念の為、何がどうなってああなったのかぐらいは、人里を統べる者として知っておかねばならないそうだ。ご苦労なこって。

「やれやれ……取り調べを受けてるみてえだな」

「すまないな、気を悪くしないでくれ。もちろん冤罪なのは疑っていない。霞青娥が絡んでいるのだろう？　それに――ああ、丁度来たようだ」

廊下を渡る足音に上白沢女史が顔を上げた。耳を澄ませば聞こえる程度だった物音が徐々に近付いてくる。件の足音が教室の前で止んだ。

引き戸が数回ノックされた後、訪問者が姿を見せる。

「お待たせ。ご注文の品よ」
　まさかの赤蛮奇だった。ついでにラーメン屋で見かけるような出前ケースを両手で携えておった。さらに、彼女は持ち前のポーカーフェイスでオレを見るなり、一言。
「女の敵ね」
「何でやねん」
「二股したうえに婦女暴行なんでしょ。しばらく噂になるわね。ご愁傷様」
「ぐぬぬ……ッ！」
　あっちからも笑えない発言をされて呻くしかない。その間にも、ろくろ首の看板娘が出前ケースを開いて、注文の品をオレの手前に置く。
　炊き立ての煌びやかな白米を下にして、粉の衣をつけて油で揚げた豚肉の塊を乗せ、仕上げに黄色い卵で閉じた一品料理――其の名も、カツ丼。
「これもう本格的に取り調べの空気じゃねぇ!?」
　ここは警察署か。というか、一体何処からこんな知識が幻想郷に通っているのか疑問が尽きない。八雲紫は何処を目指してんだ。レインボーブリッジ封鎖してぇのか。
　配達が終わったにも拘わらず、赤蛮奇が帰ろうとしない。取り調べを傍聴していくつもりらしい。もう勝手にしてくれと、ついには脱力して肩を落とした。
　ところが、案外悪いことばかりでもなかった。
「あ」
　半ば投げやりになったおかげともいえる。それまですっかり忘れていたけれど、ずっと気になっていたことを思い出した。
「華扇」
「う、何ですか」
　また文句を言われると思ったのか仙人サマが身構える。
　ったく、いつまでもしょぼくれてんじゃねーよ。お前がそんなんじゃオレまで調子狂うだろうが。

「別にもう怒っとらんわ。というかハナっから大して腹も立ててねぇしよ。大体、悪いのはお前じゃなくてあっちの仙人だろ」
「本当に……怒ってませんか？」
「だからそう言ってんだろ。嘘じゃねぇ。ちったぁオレを信じろ」
「そう、ですか。……でも、やはりちゃんと謝らせてください。申し訳ありませんでした」
己が反省の意を伝えるべく、桃色の髪をもつ女が律儀に頭を下げる。どっちかといえば、ボコッたことに対する謝罪なのかもしれない。
結果どうあれ彼女の警戒が解けたところで、頭の片隅に引っかかっていた素朴な疑問をぶつけてみた。
「お前、どうしてあんなタイミング良く入ってこれたんだ？　何つーか、ずっと外で待ってたみた――」
「――ッ!?　そそそ、そんなの偶然に決まっていますッ!!　別に綿間部に会いたくなって来たんじゃないんですからね!?　勘違いしないでください！」
「わ、わぁーったっつの。いちいち大声出すなや」
「綿間部が変なこと聞くからです！」
オレが言いかけた言葉を遮るように、やや食い気味になって女のセリフが重ねられた。何を焦っているのか定かではないが、やけに早口で捲し立ててきた。
いかにも怪しい。もしや、オレにも言えない隠し事でも――
「違いますからね！」
「だから心を読むな」
胡乱気な眼差しを向けるオレに対して、ビシッと人差し指を突きつけてと謎の宣言を高らかにする仙人サマ。なぜか周りの連中はオレとコイツを生暖かいツラで見守っていやがった。何や、その目は。
周囲の微妙な雰囲気など気付いていないのか、華扇がますますヒートアップする。ま、こっちのがらしいといえばらしいのだが。って、なんで安心してんだ。
「もうっ本当に分かってますか!?」

「へーへー」
「もぉお！」
牛かよ。

余談だが、女三人寄れば姦しいというからには、四人も集えばなおのことなワケで。
取り調べらしき質疑を受けている間、ミスティアはからかい赤蛮奇がジト目を向けて上白沢女史には呆れられて。そして華扇からは、邪仙の接近を許したことについて説教されたり、終いにはカツ丼を取られたりした。せめて半分はオレにも寄越せよ。
女難の相が出ていないか博麗か守矢の神社で視てもらおうと思った。そんな夜の出来事であった。
つづく

第二十七話　「鬼襲来！　～酒は飲んでも飲まれるな～」

「では、こちらが報酬となります」

畳が敷き詰められた一室。白い壁に吊るされた書道の掛け軸は、さぞ名のある匠の品か、もしくは本人が傑作と称する自慢の一筆か。障子の戸を隔てた外から、ししおどしが打ち付けられる毎に甲高い音色が響く。

御膳を乗せたりするのに使いそうな漆塗りの小机が、畳の上に置かれる。控えめにオレの方へと押し進められた。天板にはキッチリ並べられた貨幣が見える。慣れ親しんだ現代社会の日本円。両やら小判やらではなくて拍子抜けした。あくまでタイムスリップじゃなくて異世界転移ってか。

今ほどの声の主と対面する。中学生かそこらの年代と思しき少女が一人。その様はさながら生け花を彷彿とさせる。

紫陽花のような髪色を真っ直ぐに短く切り揃え、百合？らしき白い花弁の飾りを挿している。黄緑色の和服と山吹色の着物を重ね着が気品を誘う。

ご令嬢の身だしなみに遜色なく、年齢にそぐわない作法の行届いた振る舞い。全く違和感なく極々自然にこなしていた。まだまだ成長期であろうハズなのに薄命そうな儚げな印象まで伺える。見る人が見れば大和撫子と謳うであろう。アレだ。立てば芍薬、座れば何とやら。

稗田邸。

人里で最有力の位置付けにあたる大屋敷。『幻想郷縁起』なる書物を代々に継いで記し、幻想郷の歴史を後世に残す務めを担っている、と聞いた。

そして、かの少女こそが稗田家の第九代目当主、稗田阿求その人であった。

そっと触れたとしても容易く折れてしまいそうな華奢な風貌。童

顔からは貫録と呼べるものはない。しかしながら、しおらしさの中に一輪の花にも近しき凛とした雅さをもつ。

あるいは、時代が時代だったのであれば嫁いでいても可笑しくない年頃なのかもしれない。未成年飲酒がまかり通っているこの異世界だ。不思議ではない。というか、妖怪とか神サマが実在している時点で現代の常識を当てはめるだけ無駄だわな。

ふと思考が脱線を始めたあたりで、此度の雇い主たる小柄な乙女が微笑む。まるで日本絵の肖像から現れたかのような光景であった。たかが小娘には到底マネできまい。オレじゃなければ惚れていたかもしれん。

「上白沢先生のおかげでとても良い人を紹介していただけました」

「そりゃどーも。で、これにて依頼は達成ってことでイイんだな？」

「はい、本当に有難うございました」

今回、オレが請け負っていた仕事は要人警護、平たくいえばボディガードであった。護衛対象はもちろん当主となる彼女――稗田阿求。

もっとも、ボディガードといっても命を狙われてもいなければ脅迫状も届いていない。人里の中は基本的には安全地帯。

じゃあ何かと問えば、傍から聞けばよくある話だった。丁稚の男が夏風邪を拗らせて寝込んでしまった。つまるところ、門番を除けば女中と爺くらいしかいない稗田邸が男手不足に陥ったという。ただ、それだけのこと。

ま、そうはいってもそこは大きい御屋敷。人手不足はわりと深刻な問題だった模様。そこで稗田嬢が頼れる上白沢女史に相談したところ、最近になって人里に住み着いた外来人の何でも屋、即ちオレに白羽の矢が立った。

人里の守護者サマからの仲介となれば信用も厚い。しかも彼女だけではなくもう一人とっておきがいワケで。

「山の仙人様ともよくご一緒されているとお聞きしましたから」

「へーへー、さいですか」

良くも悪くも華扇と共に行動しているのを多々目撃されており、おかげで初対面にもかかわらず好印象。いつぞやの邪仙と違いマジメ

な説教仙人なら信頼度は高かろう。こればかりは感謝しないでもない。

正式に依頼を引き受けて、稗田邸にヘルプとして入ったのが今日の明け方。ちなみに丁稚野郎の夏風邪は一日で治る見込みだとか。幻想郷には何やら凄腕の医者がいるらしい。ブラックジャックか、そいつ。

ともあれ、オレも上客との大口契約で損もなし。午前中からの出勤に多少渋ったものの、まずまず上出来といえた。フッとニヒルな笑みが出ちまうのも無理はない。

「ま、大したことはしてねーけどな」

「いえ。黒岩様は立派に職務をこなされたではありませんか」

「あ？　そうだったか？　せいぜい調理場に出たゴキ――」

「それ以上はいけません」

「お、おぉ……」

あわや言いかけた単語を当主サマがマジな真顔と揺るぎない声音でもって制止した。人里の禁忌に触れてしまったかのような気迫に密かに戦慄した。

女性は総じてあの黒いのが苦手らしい。アレが出没した時は天地が引っくり返らんばかりの大騒ぎであった。とりあえず、その辺にあった新聞紙（『文々。新聞』だったか）で仕留めておいたが。繁華街であれば路地裏のゴミ溜まりにいる類い。珍しくもない。

それを除けば特に何事も起こらず。日没、宵の始まりとともに依頼は終わり。オレ的に昼夜逆転で体内時計が狂いかけているのだが、報酬に色をつけてもらったので文句は言うまい。壁に耳あり障子にメアリー、地獄のサタンも金次第ってな。

金銭を財布の中に放り込んで、座布団から腰を上げる。

「毎度あり。確かに受け取ったぜ」

「またお願いいたしますね」

「フッ、こっちこそ」

幼くも美しい大和撫子に見送られて大屋敷を後にする。門の外でオレを出迎えてくれたのは、今にも落ちてきそうな真ん丸の満月で

あった。門番の目礼を受けて背を向ける。
——嗚呼、今夜はこんなにも月が綺麗だ。
夜道を目的地もなくさすらう。
柄にもなく明るい時間帯に働いたせいか、引き続いて依頼を受ける気力も残っちゃいねぇ。かといって、今すぐ帰って眠りにつきたいほど疲れているとも違う。何とも中途半端な状態だった。
したがって、満月を眺めながら散歩と洒落込む。ふらりふらりと徘徊しているだけの時間が続く。偶にはこんな夜も悪くなかろう。
「あ、綿間部」
「よう、今日も会うとはな」
偶然にも華扇とバッタリ出くわした。オレの面を見て早々に、桃色の仙人が嬉しそうに駆け寄ってくる。何がそんなに楽しいのかはよく分からねぇけど。多分、良さげな出来事でもあったんだろ。
これは噂だが、聞くところによると、最近の彼女は以前よりも人里に来る頻度が増しているらしい。実際はどうかはさて置き、こうもよく会うとなりゃその信憑性は高そうだわな。
遭遇パターンは多岐にわたる。華扇が買い食いしているときにオレが通りがかったり、今みたいに往来をのんびり歩いているところを鉢合わせたり。はたまた誰かを待っていたのか、その辺に寄りかかってぼんやり空を眺めているのを見かけたり。
その後は会ったついでに食事を一緒にしたりすることも偶にある。いや、偶にじゃなかった。割とあったわ。直近でいえば昨日じゃねーかよ。何なん、この遭遇率。
あと時折だが、当たり前のようにさり気なく手を繋いでくる。相変わらず異性との距離感が無防備な仙人サマなのであった。
「今日はどうしたのですか？　お仕事をしているようには見受けられませんが」
「むしろ仕事帰りなんだよ。稗田嬢の屋敷から出てきたばっかで夜勤する余力もねぇ。だから今はオフだ」
「ふふ、明るいうちに仕事をするとは感心ですね。でしたら私もご一緒しても良いですか？」

「好きにせい」
「はい、好きにしますね♪」
　これといって拒む理由もなく、華扇と肩を並べて歩いていく。月夜に微笑む仙人サマと共に帰路につく。ヤマもなければオチもない緩やかな道のりと穏やかな時間が流れる。
　それが意外と心地良かったのは、今宵が満月だからだろうか。きっとそうだ。深い意味はない。
　ところが、ようやくテントまで戻ってこれた時、束の間の平穏が終わりを告げた。呆気なく壊されてしまう。
「……おいおい、勘弁してくれ」
「綿間部？　どうしたの？」
　我がアジトを目の前にしていきなり足を止めたオレに、隣を歩いていた華扇が不思議そうな眼差しを向ける。赤みがかった瞳が月明かりを受けて眩き、それこそ幻想的に美しかった。
　こちらを見つめるあどけない表情に待ったをかける。回りくどい言い方は一切なし。どこまでも短くたった一言で状況を伝えた。
「誰かいやがる」
「えっ」
　テントの内側から気配を感じ取った。恐らく数は一つ。ヒトが留守にしている間に勝手に上がり込んでいる何者か。ったく、稗田邸じゃなくてこっちに侵入者が来るとはよ。確かにセキュリティもクソもねぇけど。
　真っ先に思い浮かぶのは青いエロ仙人。というか、それ以外に心当たりがない。もう一人いないこともないが、生憎そいつは今まさにオレの傍にいる。しかしあの女、性懲りもなくまた来やがったのか？
　いや待て。そもそも青娥娘々と決まったワケじゃない。薄汚いコソ泥という可能性も有り得る。あらゆる事態を想定しろ。
　できるだけ足音を立てずに一歩踏み出す。同時に、ベストの内側に仕込んでいる切り札のトリガーに指をかけ、常に抜けるようにする。
　見たところ、まだオレ達に気付いていないようだ。ならば――先手を打つ。

「華扇はここに残れ。いいな？」
「あっ、待って――」
悪いが仙人サマの返事は待っていられない。言いたいことだけ告げ、オレは勝手知ったる入口を蹴飛ばすようにして突撃した。
バンッ！と勢いをつけて転がり込む。それから、すぐさま片隅でゴソゴソやってる人影を見つけた。電灯もつけていないため顔も体も曖昧だが、そこは重要ではない。相手が何かしてくるよりも早く銃口を突きつけた。
「動くんじゃねぇ！」
「んあ？」
緊張感の欠片も無いような、どうにも気の抜けた声とともに奴さんが振り返る。真っ暗闇にオレの視界も馴染み始め、ようやく空き巣の素顔が分かってきた。同時に、ピクッと眉が訝しげに動く。
霍青娥じゃない。あの女にしては明らかに身長も小さ過ぎるし身体つきもお粗末だ。これで豊満かと尋ねられれば鼻で嗤うわ。どっちかと言えばガキんちょと同程度といってもいい。ならば三月精の誰かとも疑ったがそれも違う。
そいつは、初めて見る顔だった。
小柄な体格はもはや小学生と見紛う。身長と大差ないぐらいに伸ばされた豊かな長髪を下で縛って垂らしている。あと赤蛮奇に似た感じで大きなリボンを後頭部に結んでいた。
もちろんそれだけでは驚きはしない。件の輩には隠しきれない特大レベルの特徴があった。
左右の側頭部から生える二本の角。僅かに湾曲がかった長いシンボルが天を突く。さらには球体やらキューブ状の物体を繋いだ鎖を身に着けている。動いた拍子にジャラジャラと金属音が鳴る。そのうちの一つに瓢箪があった。
鎖のアクセサリーという部分にふと既視感を覚える。が、それよりも角から目が離せない。限りなく答えに近いヒントとして。
コイツ、鬼か。
もちろん悪口ではなく種族的な意味で。

「お邪魔してるよぉ。ヒック、うぃ～……」

二本角の鬼っ子はまるで一足先に飲み会を始めたダチみてぇなセリフをほざきやがった。いや、本当に邪魔なんだが。

不法侵入にあるまじきいっそ清々しいほどの潔さ。見た目は子どもも、頭脳はともかく中身は絶賛酔っ払い。そいつが抱えているのは、当然ながらファンシーなぬいぐるみなんて可愛らしいモンじゃなかった。オレの荷物に紛れてあったブツでもある。

スコッチウイスキー、それも四リットル規格の業務用ペットボトル。それがヤツの仕業によってキャップが開けられていた。例の鬼娘はあろうことかそいつを水筒のように軽々と片手で持ち上げて、ゴキュゴキュと喉を鳴らして飲み干していく。

では諸君、聞いてほしい。

人んちで初対面の鬼が勝手に晩酌しているんだがオレはもう限界かもしれない（現実逃避）

つづく

第二十八話　「イツワリノヒメゴト」

角生えとる幼女が四リットルサイズのウイスキーをストレートでラッパ飲みしている。自分で言ってて世紀末な絵面だが、現に目の前で起こっている事実なのだから他に例えようがなかった。しかもその酒もオレの所有物ときた。ファックと言わざるを得ない。

さながらスポーツドリンクを飲む運動選手よろしくグビグビと飲み進めていく鬼娘。そいつがようやくボトルから口を離したのは、半分近くが失われてからであった。ファックと言わざるを得ない。

「っかぁ～、旨いッ！」

さよか。

わざわざ近付かなくても酒臭さが伝わってくる息。ドンッと元気よく容器の底で地面を叩く。ペットボトルだから逆に割れずに済んだ。と、思われる。

今も拳銃を突きつけられたままだというのに、小柄な侵入者は微塵も動じた態度を見せない。さて、どうするか。引き金を引いたところで無意味だろう。ビビってない相手にはこの脅し技は役立たない。

「お前は……」

「綿間部！　大丈夫なのですか!?」

問い質そうとしたタイミングと重なって、外で待機を命じておいたハズの華扇まで入ってきた。「やっぱり心配です」と分かりやすく顔に書いてあった。その様子にどこか安心して相好を崩す。相変わらずマジメな仙人サマなこって。

すると意外な展開が起こった。彼女の介入に真っ先に反応したのは、まさかのチビ鬼だった。

桃色の仙人へと視線を向けるや否や、小娘の表情がみるみるうちに愉しげなものに変化する。口の端をニィッと上げて、わざとらしい声音を発してきた。

「おや？　おやおやおやぁ～？」

「うげ……」

対する華扇は件の少女に気付くとあからさまに顔をしかめた。

つーか、うげぇとか言いおったぞこの女。ここまで誰かを毛嫌いしたリアクションを示すのは、こちとら初めて見るのではなかろうか。

あげく、警戒心ＭＡＸな華扇に腕を引かれて鬼娘から距離を取らされる。

「彼女から離れてください」

「知り合いみてぇだな？」

「はい、アレは鬼です。それも鬼の中でも特に強大な力を持つ部類の」

「久しぶりに会ったってのに、アレ呼ばわりされちゃうなんて悲しいねぇ」

クックッと喉を微かに鳴らして余裕を含んだ笑いで鬼が言う。

二本角を見た時点で大方察していたため、彼女に言われても驚きは少なかった。人外との遭遇も慣れちまった。ま、それもそれで大概だがな。

どちらかといえば、華扇があちらさんに敵愾心というか随分と警戒している理由の方が不明だ。

「それじゃ改めて名乗るとしようか。私は伊吹萃香。かつて酒呑童子と謂われ、人の世に畏れられた鬼の頭でもあった大悪党さ。華扇とは……まぁ旧い仲ってやつだね。ククッ」

酔っているからなのか芝居の掛かった口上で鬼が語る。旧友という部分をやけに強調したのが若干気になった。一方で、華扇は油断ならぬと言わんばかりの真顔で鬼を見据えている。なぜかオレの腕を掴んだまま。いや、何でやねん。

鬼。現代でも馴染みのある有名な物の怪。ゲームやマンガはもちろん、由緒正しき伝承にも現れる大妖怪。人を攫うだの襲うだのと敵とみなされ討たれるのが大半でもあり、されど片や、泣いた赤鬼などイイ奴もいたりする。ま、ピンキリ（死語）だわな。

この伊吹某とやらもひとまず敵ではないだろう。そう判断し、実弾の出ない拳銃を黒ベストのいつものポジションにしまう。とはいえ気を抜くワケにもいかなかった。

どうせこのガキも見た目相応の年齢ではあるまい。何てったって鬼なのだから。

「その鬼サマが何しにこんな場所に居座ってんだ？　つーか、不法侵入と窃盗罪の現行犯で逮捕すんぞコラ」
「いやね、そこいらを漂ってたらヘンテコな秘密基地があったもんで。面白そうだと思って入ってみたんだ。そしたら嗅ぎ慣れないお酒のイイ匂いがするじゃあないか。で、ちょーっとだけ味見させてもらってたのさ。これ、『外』の世界のお酒なんだろう？　ひひっ」
「テメェのちょっとが並みのボトルを空にしとるがな。未開封だったやつが半分以上なくなっちまってんじゃねーか。どうしてくれんだオイ」
「萃香……」
　事情というか経緯は非常によく分かった。とりあえず、何わろてんねんと言いたい。
　華扇もすっかり呆れ顔であった。どうやらこの鬼娘、かなり自由奔放な性分をしているとみた。こいつぁマジメな仙人サマとは対極なタイプだ。
　突如、伊吹とかいう鬼の愉快げな瞳が今度はこっちに向けられた。
「さて、今度はお前さんの番だよ」
「んだと？」
　いきなりオレのターンと言われても知ったことか。何のことやらと訝しげに眉をひそめると、さらに言葉を畳みかけられた。
「そっちこそ華扇の何なんだい？　その恰好、外来人なんだろう？　どうして華扇と一緒にいる？」
「何だとかどうしてだとか言われてもよ。そりゃ知り合いだからに決まってんだろ。ま、おかげでしょっちゅう説教されてんだがな」
「そっ、それは綿間部が普段からふしだらだからです！」
　質問に答えてやると、伊吹ではなく華扇が反応して文句をぶつけてきた。不満そうに頬を膨らませて、怒った表情でオレを見上げる。いや、今はそういう場面じゃねーだろ。後にしろって。つか、そろそろ手ェ離せよ。
「ふぅん。かなり親しそうに見えるけれど、知り合いねぇ……」
　意味ありげな言い回しで伊吹萃香が「知り合い」の単語を二度三度

と反芻する。しかもよくよくアイツの視線を追えば、オレと華扇の腕に固定されている。未だに離れていない、その箇所に。

伊吹萃香が再びペットボトルを持ち上げ、ぐびりとスコッチを口にした。

って、まだ飲むのかよ！　マジで空っぽになっちまうだろうが！

「お前さんは茨木華扇についてどこまで知っている？」

「あ？」

いよいよブチ切れてやろうかと思った矢先、あまりにも脈絡のない問答を出されて呆けた面で応じてしまった。声のトーンにもふざけた抑揚がない。酔いが醒めたような鋭い眼差しだった。瞬く間に場を掌握されてしまっている感覚。小さな体に眠る得体のしれない圧力に慄く。

急展開と意表を突かれたのもあって、すぐには質問に返すことができなかった。

「萃香ッ！」

話題の中心たる仙人サマが負けず劣らず真剣な顔つきで割って入る。

まさに一触即発な緊張感に支配される。いつ戦いのゴングが鳴ってもおかしくない。そもそも、旧い仲とはいっていたが仲が良いとも悪いとも言っていない。鬼と仙人ではその関係も定かではない。

桃色の仙人と双角の鬼の視線が真っ向からぶつかり合う。前者が睨みつけているにもかかわらず、後者が意地悪く口元を歪めた。より一層、妖怪らしく。

「鬼は嘘吐きが大嫌いでね。その女はとある真実を偽っている――いや、正しくは隠しているかな。まぁ、そういうのがあるんだよ。そしてそれは霊夢にだって知り得ないことさ。だけど、とーっても重要な秘密」

「そのとっておきのシークレットな情報を、お前なら知ってるってぇ言いたいのか？」

「あぁそうだよ。なんなら教えてやろうか？　そいつの正体は――」

「言うなッ!!」

全てを掻き消さんばかりの怒りに満ちた咆哮が轟いた。華扇が吠え、目にも留まらぬ速さで伊吹萃香に掴みかかる。相手の胸倉を力一杯に締め上げた彼女は、激しい感情の揺れで呼吸が荒れていた。その様相を見れば、鬼の所業がかの少女にとっていかに許し難いものであったか言うまでもなかった。

襟元を絞められた鬼は、仙人サマの憤怒に染め上げられた顔が近くにあれど恐れを抱かない。余裕さえ崩さない。それどころか、いよいよもって挑発的な面構えで彼女を煽る。

「いいのかい？　仙人様がこんな真似して？」

「萃香……これ以上余計な事を言ったら容赦しないわ。消されたくなければ今すぐ出て行きなさい」

「くっくっ。あぁ怖い怖い。じゃあ今日はこの辺にしておこうかね」

ざわり、と空気が震える予兆があった。二本角の鬼から顔や体が崩れ始める。さながら枯葉が突風に舞うかの如く。時間をかけて全身が霧散していく。ニヤついた表情も体勢も変わらず。

最初はてっきり華扇が引導を渡したのかと疑ったが、どうやらそうではなさそう。恐らく、伊吹萃香が自らを散らして姿を消そうとしている。能力、というやつか。

やがて華扇の手が虚空を掴んだ時、桃色の髪をもつ彼女は小さく舌打ちをした。行儀悪いなオイ。

『次はもっと美味しいお酒を用意しておくれよ』

己が身を霧散させた不可視の鬼の捨て台詞。いかにも妖怪らしいケタケタと耳障りな笑い声を木霊した。ついには気配すらも感じ取れなくなる。どうやら行ったようだ。

飲みかけのウイスキーだけが鬼娘が陣取っていた場所に取り残される。せめて酒代ぐらい払っていけや。

二本角の酒呑童子が文字通りに散った。

ようやく気を緩められた拍子に、ドッと疲れが押し寄せてくる。ったく、どうして自分のアジトで気付かれしなければいかんのだ。やっぱ日中に仕事するとロクな目に遭わねェ。やはりオレは夜に生きる

男。

悔しげに唇を噛む華扇を尻目に息を吐く。追いかけるつもりはないのだろう。それにしたって空気が重くてしんどい。あの鬼が残していった厄介な置き土産に再び嘆息する。

もはや三分の一にまで減らされちまったボトルを拾い、軽く振る。チャプンと水音が鳴った。

「ま、何だ……とりあえず飲むか？」

「……はい」

チビ鬼の件は一旦置いておこう。華扇も控えめではあるが頷いた。それで良い。嫌な出来事なんざ酒飲んで有耶無耶にしちまえ。本来ならあまり褒められた行いではないとしても、今日ぐらいは大目に見ても構わねーだろ。

ボストンバッグからショットグラスを二つ引っ張り出す。残念ながら氷も炭酸水もないため、飲み方はストレートしかできない。が、この女の酒豪っぷりをみれば問題あるまい。自前の一升枡で呑んでやがるくらいだ。

グラスの片方を仙人サマに握らせ、スコッチをなみなみと注ぐ。自分の分はセルフサービスでやった。琥珀色の水面に見慣れた顔面が映る。鼻を近づければ燻された麦を思わせる芳醇な香り。

「ほれ、手ェ出せ。乾杯」

「乾杯、です」

互いのグラスをコツンと軽くぶつけて、ショットの名通り一息に飲んだ。喉が焼ける。水割りでは得られない強烈なパンチ。これぞウイスキーってぇモンよ。

あぁそうだ。次にあの鬼娘が来たら鬼殺しでも飲ませてやろうか。我ながら洒落が効いている発想だ。ま、売っていればの話だがよ。

「美味しいですね」

「だろ？　オレのお気に入りだからな」

嬉しい感想にこちらもニヤリと笑って返す。

つっても業務用サイズのボトルで売られている安酒でしかない。本当のお気に入りをこの地で呑むことは叶わないだろう。いつかは

コイツにもバーボンを飲ませてやりたいものだ。
次いで二杯目を注ぐ。今度は少しずつ舐めるように、ゆっくりと時間をかけて味わう。その間に会話はない。こちらから詳細を聞き出すつもりはなかった。
テントの天井に吊るされたランタンが桃色の髪を照らす。あたかもバーに備えられたスポットライトを彷彿とさせた。なかなか絵になっている。美しい女には似合う演出だと思う。
「ツマミもあった方が良いか」
特に返事を待つわけでもなく、独り言のようにぼやきながらもう一度荷物を漁る。蒸留酒を飲まれたことを除いて被害はなかった。青蛾娘々と同じく、目ぼしいものを見つけられなかったのであろう。
適当に弄っていたら未開封の乾き物が出てきた。賞味期限も問題なし。意外と探せばあるものだ。
「ナッツでいいか？　ま、正確には炒り豆だがよ」
何気なしに聞くと、なぜか華扇は身体を強張らせた。ビクッと肩まで跳ねさせて。
思いもよらなかった過剰反応にオレまで驚いてしまった。沈黙が数秒に亘って続く。しばらく経って、ようやく華扇が申し訳なさそうに口を開いた。
「ごめんなさい。豆は苦手なんです」
「ふーん。仙人サマにも好き嫌いがあったとはな。待てよ？　もしかしてお前――」
「――ッ!!」
「さては大豆アレルギーとか？」
「……はぁああ。ええ、まぁ、似たようなものです」
半ば冗談で軽口を叩けば、何やら盛大に安堵したような溜息を吐かれた。いつにも増して変だぞ、お前。
さすがに嫌いなモノをわざわざ目の前で食して見せつけるほど、オレも性格悪い男ではない。乾き物をボストンバッグに戻す。しかし、よもや本当に大豆アレルギーとは。華扇の意外な一面を知った。
この時のオレは、その程度のこととしか考えていなかった。

「あの」
三杯目に差し掛かった時、おもむろに華扇が顔を上げた。どうした、と視線で問う。
ところが、少しだけ悩んだ素振りをみせたり、言葉を発しようとして途端に詰まらせたり。どうにも言い辛いのかなかなか続きが出てこない。こちらも固唾を飲んで……はいないが、黙って待つ。
やがて一度だけ大きく深呼吸をして、彼女は表情を引き締めた。
「もし、もしもの話しですよ？　私が仙人じゃないって言ったら……どうしますか？」
「あ？　仙人じゃないなら何やねん」
「そ、それは……」
自ら話題を振ってきたにもかかわらず、仙人サマは目を伏せて言い淀んでしまう。ぶっちゃけ唐突だし全くもって意味が分からねぇ。たられば話にしてはややこしいお題がきやがった。
これまでずっと仙人を自称してきた茨木華扇。仮に、それが偽りだったとしたら？
チラリと相手の表情を伺う。瞼どころか顔まで俯かせており、お通夜を連想させる沈んだ空気を纏っていた。何となくで試しに聞いてみたにしてはシリアスな雰囲気過ぎる。あるいは、伊吹萃香とのやり取りに思うところがあったのか。彼女自身の隠し事と。
一応、オレなりに考えてみる。
その結果、さして時間もかからずに答えが出た。
で、だからどうした。
下を向いているせいでこちらに向けられた柔らかな桃色のミディアムヘアに、オレは自分の手のひらを置いた。ぇ……、と聞き逃してしまいそうな微かな声が零れる。
いつもとは逆の立場で可笑しい感じだが、たまにはオレから説教するのも悪くない。いや、説教なんて大層なモンじゃねぇか。ただの偏屈だ。それもオレみてぇな真っ当じゃない男がほざく。
けれど、そういう夜が少しぐらいあってもイイだろ？
「何が言いたいのかオレにはよくわかんねーけどよ。仙人ってぇのは

要はカテゴリーだろ。なら逆に聞くがよ。茨木華扇は仙人であることだけが全部なのか？　仙人じゃなかったらアイデンティティーもキレイサッパリなくなって、手元には何一つ残らねぇのってぇか？　ハッ、んなワケねぇだろーが。テメェが何者かって、そりゃ茨木華扇だろ。自分を一つだけの括りで量ろうとすんな」

「……ッ！」

一言二言で済ませるつもりが、自分でも驚くほどに言葉が出てきちまった。

それでも、生憎とオレはそういう扱いが何よりも嫌いだった。有象無象とか、「その他大勢」のうちのナニカとしか見なされない。一個人をないがしろにして、個性が埋もれてしまう。まるで端っからなかったかのように。居なくなったことすら気付かれないように。

ああ、そうだ。オレは、絶対にあんな惨めなザマにはならねぇ……！

知らず、ショットグラスをキツく握ってしまっていたことに気付く。その辺を誤魔化すため、華扇の頭に乗せていた手で雑っぽく彼女の髪を撫でた。初めて触れたのだがとてつもなく髪質が良い。正直驚いた。ずっと触っていたくなる。

どさくさに紛れて好き勝手やっていたら抗議の声が飛んできた。

「ちょ、ちょっと。女性の髪を軽々しく撫でないでくださいっ」

「そりゃすまんかったな」

「もぉ……他の女の子にもこんな風にしてませんよね？」

「するか。お前以外にやったことなんざねーよ。出来心だ、出来心」

「そ、そうですか……」

苦し過ぎる言い訳を口にしながら手を放す。オレの仕業によって乱された前髪を整えようと、華扇が手櫛で直し始める。髪は女の命とも言われている。軽率な行いだったのは認めねばなるまい。

仙人サマもむすっとしていたが本気で怒っているワケでもなさそうだった。頬に朱色が差しているが、さっきまでの憂いはなかった。やったことはアレだが結果的には良かったのではなかろうか。

しかしながら、よくよく思い返してみると、結構チャラかったかも

しれない。つか、出来心で女の頭を撫でるとか何だよ。どこのイケメン王子様だそいつ。

「嫌だったか？」

って、何を聞いてんだオレは。そこは別の話題で逸らせよ。馬鹿者なのか。

「別に……嫌じゃなかったです、けど……」

しかも、目を合わせないで恥ずかしそうにしてるクセして、華扇も華扇でちゃんと答えちまってるし。そこはスルーしとけよ。マジメなのか。

先ほどとは違う意味で、テントの中が何とも言えない微妙な空気に包まれる。お互いに続きの言葉が出てこない。モヤモヤとした思考だけが延々と回り続ける。

落ち着け、オレは夜に生きる男。フリーランスでハードボイルドな何でも屋。この程度のことで狼狽えてどうする。ったく、この女が絡むと調子が狂ってばかりだ。

さらさらと髪の手触りが残っている手のひらをなるべく意識しないように努める。ついでに咳払い。ふいに華扇が照れ笑いみたく表情を緩めているのが、僅かに視界に入った。つい見入ってしまう。

すると、オレの視線に気づいた彼女が、慌てて口元を隠すようにショットグラスに口を付けた。それに倣い、こちらもウイスキーの残量を喉に流し込んだ。

あぁ、チクショウ。やっぱりアルコール度数がキツかった。

喉だけじゃなくて顔まで熱くなってきやがったのは、間違いなくこの酒が原因なのだ。

つづく

番外特別回　「るんるんびより　前編」

飛行機雲を見つけた。

絵に描いたような青空に、真っ白い一本線が引かれていく。アレは何処へ行くのだろうか。柄にもなく感傷に浸った思考を浮かべながら、オレはどこまでも伸び続けるホワイトラインの行方を目で追った。

チャイムが鳴る。学び舎お約束のあのメロディ。今のは本日ラストとなった授業の終了を意味する。しかしながら、こちとら何十分も前から校舎の屋上で耽っていた。それが意味するのは、まぁそういうこった。なぜならオレはちょいワルな男。

フェンスの金網に背中を預ける。夏服のワイシャツは生地が薄く、背もたれとするには好ましくないジグザグした感触がより鮮明に伝わってくる。些か不満だが、こればかりは我慢するしかない。

「ん……んん」

ふと、すぐ近くのベンチを占領して惰眠を貪っていた、もう一人のサボり魔がモゾモゾと身動ぎし始めた。どうやらお目覚めらしい。同学年の女子生徒だった。

解けばセミロングくらいありそうな赤い髪を、丸粒の飾りが付いたゴムで左右に結っている。一般女子の平均よりも背は高い。だらしなく着崩したセーラー服からは胸元が覗く。何気にデケぇ。短いデザインのスカートから伸びる足を大胆におっ広げ、なかなか整った顔は寝顔でも気さくさが伺える。

小野塚小町。同学年といったが、そもそもクラスメートである。オレを上回るほどのサボり魔で、此処に来たときには既にコイツがいやがった。おかげで地面に直座りを余儀なくされる始末。椅子取りゲームはヤツの勝ちだった。

くぁ、と欠伸しながら居眠り娘が起き上がる。

「ふぁ～あ……もう放課後？」

「ああ。つーかお前、こんな場所で寝んなよ」

「襲っちゃいそうだから？」

「けっ、んなワケねーだろ」
うしし、と悪戯っぽく笑いながら茶化してくる女子を一蹴する。とはいえ、彼女の容姿レベルの高さは偽りなく、オレじゃなかったら割と危ういところなのかもしれない。ま、この女に限ってそんな安っぽい失敗はねぇとは思うけど。
突如、バァン！と盛大な物音がいきなり響き渡った。
「コラーッ！　やっぱりここでサボっていたんですね!?」
凛とした綺麗な声が屋上を突っ切る。出入り口の扉が開け放たれ、その先ではプリプリと怒った様子の女子生徒が立っていた。
初夏の風にさらりと靡く、柔らかな桃色に色付いたミディアムヘアは花弁のように淡く。彼女の特徴たる二つのシニョンも健在であった。マジメさが滲み出ている顔立ちは美しく、赤みがかった瞳はガーネットを彷彿とさせる瞬きを宿す。
さらに、小野塚小町と同等か下手すりゃそれ以上の大きな膨らみが、白いセーラー服の胸元あたりを押し上げていた。膝丈に届かないスカートはキチンと穿いたとしてもどうにもできず、キメ細やかな素足が露わになる。太腿に至るまで。
「んだよ、華扇かい」
「なっ……私じゃ不満なんですか!?」
「その言い方やめーや」
オレのぼやきも聞き逃さず、怒りの形相で委員長サマがズンズンと歩み寄ってくる。
この女子生徒の名は茨木華扇。ニックネームは茨華仙。オレや小野塚小町と同じクラスの委員長を務める。性格は見ての通りで大真面目ってかクソマジメ。容姿もスタイルも成績も良いと三拍子揃った、どこまでも優等生の模範みたいな女だ。
来るなり早々にこのテンションなのはいつものこと。ま、どうせ上白沢女史から捜索依頼でも受けたんだろ。わざわざ面倒事を買って出るとは、相変わらず物好きなこって。
入学してからの付き合い（ただし、そっちの付き合うではない）なのだが、オレが素行不良していると決まって口出ししてくる。やや不

良なオレとコイツとでは凸凹コンビも甚だしい。そのハズなのだが、どういうワケか周りの連中は何にも言ってこない。むしろ日常の一コマとして受け入れていやがる。ったく、どうなってんだか。

華扇が乗り込んできたのを見て、もう一人のサボりが口笛を吹く。

「ひゅぅ、嫁さんが迎えに来ちゃったね？」

「誰の嫁だコラ」

「誰が嫁ですか！」

オレ達のツッコミ声が重なってしまい、赤髪の女子が「ほーら、息ピッタリ」としたり顔で指差す。うるせぇよ。

初心なうえに堅物な委員長サマは、どうにもこの手の煽りに耐性がない。オレが辟易した態度でツッコむのに対し、彼女は毎度毎度とも真に受けて大袈裟に反応するというのが、もはやテンプレとなっていた。そいつは今日も変わらずで。ったく、小学生か。

あの女が余計な一言を口走ったせいで、華扇がますますヤル気になって闘牛の如く息巻いている。この後の展開が読めてしまって溜息が出る。勘弁してくれ。マジで。

「二人とも正座しなさいッ！　先生に代わって私がみっちりお説教してあげます!!」

ほら見ろ、誰も得しない世界の完成だ。

案の定、彼女の十八番「説教」が飛び出してきた。一に説教、二に説教。この女はそれが趣味なんじゃねぇかってぐらい、とにかくソレが多い。大抵の場合、何かやらかした愚か者が標的となる。

だというのに、どうも最近オレばかりに向けられている気がしてならない。そこまでガチ不良じゃねーよ。ちょいワルってぇ絶妙な力加減がわかんねぇかな。この女は。

プンスカと効果音が付きそうな表情の委員長サマとは正反対に、サボり女生徒はニカッと白い歯を見せると、体操選手染みた身のこなしでベンチから飛び跳ねた。ミニスカートが風圧で捲れた瞬間、華扇が慌ててオレに目隠ししてきた。

「オイコラ」

「み、見ちゃダメですッ！　エッチ！」

「何でやねん……」
　視界が黒く染まる中、濡れ衣もいいところな罵声を浴びせられた。お前はオレはどんだけスケベ野郎だと思ってんだ。そこまで飢えてねぇよ。こちとらハードボイルドだっつの。
　再び世界が色を取り戻す。小野塚小町は見事な着地をキメられたらしく、満足げなツラをしていやがった。しかも逃げる準備も整っており、
「あたいは遠慮しとくよ。説教なら映姫先輩で間に合ってるからさ」
「あっコラ！　待ちなさい！」
　桃色少女が包帯の巻かれた（その割には難なく動かせている）右手を伸ばすが、直前までオレに引っ付いていたせいで出遅れてしまう。するりと躱した赤髪少女が「じゃーねー」と片手をヒラヒラ振りながら去り往く。
　さすがサボりの常習犯の王座を維持し続けているだけある。こういう時の逃げ足の速さはお手の物ときた。是非とも見習い……たくねーわな。
　出入り口の向こうで、陽気にステップを踏む足音が遠ざかっていく。数秒とかからずに階段を下る音が聞こえなくなり、マジメな女生徒が悔しげに地団駄を踏んだ。
「もうっ逃げられるなんて……！」
「あーあ、ドンマイだな」
　他人事のように――というか実際に他人事なワケだが、適当に声をかけてやると、彼女はオレの隣にすとんと腰を下ろした。隣の席よりも近い距離。「あなたは逃がしませんからね」と目が物語っておった。ったく、別に逃げねーよ。
「小町と一緒にいたんですね、綿間部」
　どことなく拗ねたように頬を膨らませて、さらにジト目のオマケ付きで桃色の髪をもつ少女が言葉を落とす。いかにも面白くなさそうにして。さっきまで怒っていたかと思えば今度はイジケやがった。
「偶然だっつの。大体、先にいたのはあっちだ。サボりの罪ならあの女の方が重てぇだろ」

「だからといって綿間部が授業を受けなかった事実に変わりはありません。このままだと留年するわよ？」
「フッ、オレがそんなヘマすると思うか？　言うほど成績も悪くねぇし」
「本当ですか？　俄かには信じがたいですね」
ミニスカの裾を下から押さえた体育座りの膝に頬を乗せて、からかいの眼差しを投げてくる。何か腹立つな。いっそデコピンでもかましてやろうか。
「お前……テスト期間中ずっと付きまとっていたヤツがそれを言うなや」
「なぁ!?　ひっ、人を重い女みたいに言わないでくださいッ!!」
「へーへー」
一転してまたギャーギャーと騒ぎ始める華扇を適当に聞き流す。
というか、そこでストーカーっぽい発想にいくあたり、この女もなかなか妄想力豊富だわな。普段はマジメない委員長サマは耳年増ってか。いや、高校生にもなればそれがフツーなのかもしれん。
さて、と。
改めて自己紹介でもしとくか。
オレこと綿間部将也は、この学校に通う二年生の男子高校生である。あだ名は黒岩。華扇とは……ま、友人ってぇところか。それ以上でもそれ以下でもない、ハズだ。
二人きりの屋上。
桃色のミディアムヘアがそよ風と戯れる彼女と肩が並ぶ。わざわざ放課後になって屋上に来る物好きはいない。オレ達を除いて。
何気なしにフェンス越しに見下ろせば、帰宅する学生連中の後ろ姿がチラホラとあった。その一つに目が留まる。金髪でショートヘアの女子生徒と茶髪ツンツン頭の男子学生。密かに手を繋ごうとしてあと一歩のところで手を引っ込めてしまう、というのをどっちも繰り返している。お互いに、相手が同じコトをしているとまるで気付いてない。っかー、青春してんなぁ。
「どうかしましたか？」

「いや、何もねぇわ」
　初夏に入れば日も長くなる。これから部活動に勤しむ輩も多かろう。が、生憎こっちは帰宅部である。特にこれといって決まった予定もなし。暇人？　自由を謳歌していると言って欲しい。
　華扇が立ち上がり、綺麗な顔を綻ばせながら手を差し伸べる。
「帰りましょうか」
「そーだな」
　幸せそうに微笑む彼女の手を取る。女子らしい、オレの手よりも小さくて柔らかな手のひらだった。
　校舎を後にして、帰り道を歩く。つっても、ちょいワルな不良学生やってるオレが真っ直ぐ帰宅するワケなく。むしろ寄り道してこそ帰宅部の醍醐味といえよう。
　最初の頃は「寄り道なんて……ッ！」と渋っていたマジメな委員長サマでさえ、買い食いの味を占めてからというもの、今やすっかりその誘惑に勝てなくなっちまっていた。そして今日も。
「いらっしゃい、お二人さん」
　和菓子屋「夜雀」は、定番ルートにあるオレ達にとってはお馴染みの店でもあった。
　店構えがどことなく屋台っぽい作りというか、街角のタバコ屋に近いだろうか。通行人からも見えるように、軒先にショーケースを置いて店頭販売しているのがウリだ。まさに買い食いのためにあると言っても過言ではない。
「よう」
「こんにちは。いつもアルバイトお疲れ様です」
「ふふっ、そうでもないわよ。好きでやっていることだもの」
　ニコッと愛らしく、そしてあざとくもある笑顔とともに、店番の女がオレ達を出迎える。この少女もまた、同い年の女子高生。名をミスティア・ローレライという。
　可愛らしい容姿をしており、そのうえ性格も明るく親しみやすい。おかげで男子共から密かに人気を集めている。学業よりもアルバイトを頑張る、勤勉なんだか不真面目なんだかよく分からんタイプでも

ある。まだＪＫのクセして早くも社畜の素養を秘めてんだよなぁ……

　現在彼女はピンク色のショートヘアに藍色の頭巾を被り、焦げ茶色の和服に小豆色の帯を締めている。若女将を連想させる格好も見慣れた。しかし、コレがまたよく似合うのだから性質が悪い。

　この女子店員を目当てに買いに来る客もいることだろう。ま、オレは違うが。

「今日のお勧めは新作メニューね。最近始めたの、蒲焼き」

「って、和菓子屋で蒲焼きかよ！」

「だって夏だとスタミナ要るでしょ？　それに甘いのだけじゃなくてしょっぱいの食べたいってお客さんもいるもん」

「先ほどから炭火の煙が上がっているのはそれだったんですね……」

　華扇がポツリと零した通り、和菓子屋だというのに狼煙が上がっていた。目立ち過ぎだろ。

　一応、他の商品に匂いが付かないための配慮であろう。店の隅っこでやっているとはいえ、明らかに気になる。そのうえ、炭の爆ぜる音と香ばしい白煙を見てしまうと、少なからず食欲を刺激される。考えてみれば、昼飯を食ってから大分時間が経っている。

　それに、余所とは一味違った個性を出すその姿勢は嫌いじゃない。

「じゃ、本日のイチオシにしとくか」

「私にも同じものをお願いします」

「はーい。毎度どうも」

　鼻歌を口ずさみながら若女将（アルバイト）が板についた手さばきで仕事をこなす。その様子には華扇も感心していた。さすが、週五でシフト入っているだけのことはある。もう正社員でイイんじゃねぇかな。

　少女の歌声をＢＧＭに聞いていると、ほどなくしてブツが来た。仕事の速さも変わらない。

「はい、どうぞ」

「サンキュ」

「ありがとうございます。お代はこちらに」

いただきます、オレと華扇の声を合図にいざ出来立ての蒲焼きをその場で食す。

照って滴るタレを服に零さぬよう注意しつつ、一口。ほろりと解れる白身に染み込んだ旨味が瞬く間に舌の上に広がった。ギュッと凝縮された味わいが隅々まで解放される。特製のタレが絡まり、甘いのにしょっぱいという矛盾が、独特な風味へと膨らんでいく。

濃く、されどしつこくない美味さ。まさに逸品。これは白米が欲しくなる。

「……ッ！」

華扇も目を輝かせて夢中になって頬張っていた。ただでさえ美味しいモノには目がない女だ。言葉に出ずとも食べっぷりが如実に感想を述べていやがる。いつもながら惚れ惚れする食べっぷり。今回に限っていえば、それはオレも似たようなものだった。

がっつくオレ達を、ミスティアはニコニコと満足そうに眺めていた。一つ一つに愛嬌があって彼女が人気なのも頷ける。ったく、あざといなオイ。

「そうそう知ってる？　バンキさんのアルバイト先なんだけど、今一番忙しいんですって。大丈夫かなぁ……」

「ま、酒屋ならそらそうなるわな。夏祭りもありゃビアガーデンもあるしよ。大量発注の一つや二つぐらい来るだろ」

食った後は世間話で適当に駄弁る。この日はミスティアと類友のバイト女子が話しのネタになった。

バンキさんこと赤蛮奇は、若女将とは真逆にクールでポーカーフェイスな同級生を指す。短い赤髪に私服も赤がほとんどという、名は体を表すを再現した女子高生だ。あと結構美人でもあり。

今にして思えば、この学校っつかこのクラスにおける女子の容姿レベルが異様に高いのが謎過ぎる。無論、華扇もその一人なのは言うまでもなし。喜怒哀楽と表情が豊かなこの女も、男共からの注目を集めていそう。

その割には誰一人とアピールしてこないのだが。どいつもこいつも、まるで初っ端から自分には勝算がないと分かっているみたいに。

所謂、高嶺の花と思われているのかもしれない。つーか、オレがフツーに喋っとるがな。

ちなみに赤蛮奇もか弱い？女子なのでビールケースを運ぶなどと力仕事はしない。専ら接客を担う。あの冷めた対応で問題ないのか疑問を抱かないでもないが、意外と客受けは良いらしい。それはそれで需要がある模様。

「ま、これからクソ暑くなるし。キンキンに冷えたビールは旨かろうよ」

「どうして綿間部がそんなこと知っているんですか……？　まさか！」

聞き捨てならないと、眉間にしわを寄せて委員長サマが一歩詰め寄る。発育が良過ぎるせいで些細な仕草でも当たってしまうことに、未だに本人は自覚していない。あまりに無防備でコイツの将来が不安になる。悪い奴に騙されないことを願いたい。

……ま、オレの目が届く範囲では絶対にそんなコトさせねぇけどよ。

むにむにと柔らかく豊満な膨らみにイロイロと反応してしまわないうちに、ぶっきらぼうな雰囲気を装って肩を押し返した。

「ったく、一般論だろうが。テレビのＣＭ見てりゃ誰だって分かるわ」

「それなら良いです」

なぜかドヤ顔で「ふふん」と許しを施してくださりやがった委員長サマに嘆息する。腰に手を当て、胸を張った拍子にたわわな果実が揺れた。このシーズンは夏服でそういうのが余計にハッキリ分かってしまう。

もう勝手にしろと言わんばかりに目を逸らす。ついでに肩の力も抜いた。こうでもしなければやってられん。

「……けっ」

とりあえず、ホントに呑んだ経験があるってぇコトはしばらく黙っておこう。ほんの少し、味見しただけ。けど、この女の方が将来的に酒豪になりそうな気がすんだよな。何となく。

「ホント相変わらず仲が良いわね。羨ましい」

ガラス張りのショーケースの上で腕を組み、ちょこんと顎を乗せたミスティアが生暖かい目をしながらほのぼのと言った。
「ったく、どこがだ。大体そーいうお前だってモテんじゃねぇかよ。それこそ気になる野郎はいねぇのか？」
「そうねぇ……強いて言うなら？」
おもむろに言葉を区切って、同い年の和服女子がチラチラとこっちに意味ありげな眼差しを投げかけてくる。まるで「察して」と言いたげなアイコンタクトに固まる。え――
「だっだだッ！　だめっダメですぅううううッ!!」
「ぬおぅっ!?」
「あらあら」
唐突に且つ凄まじい声量で華扇がテンパった勢いで叫んだ。かと思えば、バスケのディフェンスのようなポーズでオレとミスティアの間に身体を滑り込ませた。ご丁寧に両腕を左右に真っ直ぐ伸ばして、えらく俊敏な動きで割って入る。何やってんだ、お前。
突拍子もない行動にオレは只々意表を突かれるだけであったが、どうやら和服な彼女はそうでもなかったらしい。何つーか、一言で言うならメッチャ楽しそう。あざとい。
ふつふつと込み上げる笑いを押し殺せていない表情で「やぁねぇ」と声を弾ませながら手で仰ぐ。井戸端会議の主婦かよ。
「ふふ。冗談、ちょっとした冗談よ。誰も取ったりしないから安心してね？」
「――ッ!?　も……もぉおおおお!!　綿間部の馬鹿者ぉ!!」
「って、オレか!?」
どういうワケかこちらの所為にされた。嗚呼、本日も理不尽なり。
じんわりと頬っぺたを赤くして華扇が恨めしそうにオレを見上げてくる。そんな彼女に代わり、オレがミスティアに文句を込めてガン飛ばす。パチッとウインクで返された。違う、そうじゃない。
それから委員長サマの機嫌を直したのは、からかったお詫びという名目の和菓子の試食サービスであった。ったく、花より団子とは上手い事言ったもんだわ。

なお、華扇とミスティアの二人がかりによる「買ってほしいの」なキラキラ眼差しに根負けし、彼女らが気に入った和菓子をなぜかオレが買わされるハメになったことを、最後に記しておく。

フッ、これだから男ってヤツはよぉ……

つづく

番外特別回　「るんるんびより　中編」

その区域は繁華街と呼ばれていた。

テナントのビルが軒並び、縦も横もチカチカと眩しい電光が視界を埋め尽くす。カラオケボックスや二十四時間のファミレスといった、オレ等みたいな学生向きの全国チェーンが大通りに続く。裏通りを行けばパブやスナックなど、ネオンライトで演出された大人な店が佇む。十八禁な享楽も探せば在ろう。

暗くなるにつれて賑やかさと煌びやかさを増していく、矛盾に満ちた街。どことなく都会の空気を醸し出していることから、巷では繁華街なんて通り名が付けられた。実際、夜になればストリートでライブしているシンガーだとか、金属アクセサリーを売るガイジンっぽい露天商も出没する。

居酒屋が営業中の札を吊るした。仕事帰りのオッサンどもが夕飯がてら寄っていく。オレ達の他にも多くの人々が行き交う。

不良男子高校生グループ、ケバい化粧したギャル、ホストっぽいチャラ男。そんな見て呉れの奴らばかり。まともに考えても、これから塾に行くようなマジメ君が来る場所ではあるまい。

時には激しく踊り狂い、時にはしっとり濡らすように歌う。それが此処、繁華街。

いわば愛しの我がホーム。そしてオレはこの街のプライベートアイ……で、ありたいと思っている。なぜならオレはちょいワルな男。

「フッ、帰ってきたな」

「……」

ニヒルに口角を上げるオレの傍らで、茨木華扇はどこか肩肘に力を張った様子でいた。ついでに顔まで強張っていやがる。オレとは真逆な反応だ。

これまでにも何度か来ているとはいえ、この女みてぇなクソマジメ系の優等生には居心地が悪かろう。それでも律儀についてくるのは彼女なりの意地なのか。もっとも、こんなところで頑張る必要なんざねぇけど。

精一杯の強がりで、桃色ミディアムヘアな少女が苦笑いを浮かべる。
「……やっぱり、まだ慣れませんね」
「そーか」
緊張しているのかもしれない。だから、制服のズボンの後ろポケットにこっそり指を引っ掛けられていることには触れないでおいた。気付いていないフリで通した。
「よっす、黒岩」
「よう」
「黒岩、来てたのかよ。久しぶりじゃん」
「まぁな。オレだって忙しいんだよ」
「たまにはこっちにも顔出せよなー」
「わぁーったっつの。そのうち行くからよ」
遠巻きに声をかけてくる知り合いにこっちも雑な返事しつつ歩いていく。顔は知っているが名前は知らないなんてヤツも珍しくない。そういうドライな距離感がこの場所には相応しい。その方が、オレも彼らもクールにスタイリッシュにカッコつけていられる。
ま、それはそれとして。
「おうおう、今日は女連れですかぁ!?」
「ヒューヒュー！　黒岩さんカッケー！」
「さすくろ！」
「やかましいぞコラァ！　つか最後の何やねん!?」
オレが華扇を連れているのを見てデートだの同伴出勤だの茶化してきた連中にはガン飛ばしてやった。余計にからかわれた。ファックと言わざるを得ない。
そんなやり取りが次から次へと続くのを目の当たりにして、華扇がちょっと見直したように感想を述べた。
「知り合いが多いんですね」
「そらオレのホームだかんな。ま、お前までこんな場所に慣れちまう必要はねーだろ。見ての通り、クソッタレどもの溜まり場だしよ」
それに、この女は顔もスタイルも良い優良物件だ。良くも悪くも目

立つ。おかげでさっきから視線を感じてやまない。
　知り合いじゃない男等がオレ達の横を通り過ぎる度に、彼女を好意的な（ゲスな言い方をすればいやらしい）目で眺める。中にはキザッたらしく口笛を吹くナンパくせぇチャラ男までいやがった。
　もし、委員長サマが単独で此処に来ればあっという間に捕まってしまうことだろう。あるいは、こうしている間にも、虎視眈々とタイミングを伺っている輩だっているかもしれない。
「……」
　なぜだろうか。そういう想像をすると、どうにも気に入らない。不快な感情が込み上げてくる。
　華扇がオレから離れてしまわぬよう、歩調を合わせる。ついでに彼女の少し前を行くことで好色の視線を遮った。これで男共から不埒な眼差しを向けられるリスクは多少なりとも減るであろう。
　現に、残念そうなツラして散っていく男子グループが複数あった。けっ、おうちに帰ってちゃおでも読んでろクソッタレが。
「ありがとうございます」
「……さて、何のことだかさっぱりだな」
「ふふっ、不器用な人」
　わざわざ振り返らずとも、委員長サマがたおやかな笑みを浮かべているのが伝わってきた。どう返したものか思いつかず、フンと鼻を鳴らす。それが余計にツボったのか、クスクスと控えめな笑い声が耳をくすぐる。チクショウ、何わろてんねん。
「綿間部は慣れない方が良いと言いましたけど。それでも、私はまたここに来たいです」
「っかー、マジかよ。どうしてそこまでこだわってんだ？　優等生には悪影響しかねーぞ」
「えっ!?　そ、それは……だって……」
　急に口ごもる華扇。一瞬だけ盗み見ると、制服ズボンのポケットに引っ掻けた人差し指はそのままで、頬に仄かな朱が差した彼女の姿があった。
「ま、何だってイイけどよ」

「……そうですか」
なしてそこで拗ねるのか。
「あら、黒岩さんではありませんの」
「あ？」
「むむむっ！」
繁華街の中心まで来たところで、その声からしてねっとりとエロい女がオレ達の前に立ちはだかった。
青い髪をメビウスの輪のような独創的なヘアスタイルに仕立て、豊満な乳と肉付きの良い尻を強調する衣装を身に纏う。妖しい色香を振り撒いて、瞬く間に男を落とす美女――いや、魔性の女。
妖艶な美女の登場に、あからさまに委員長サマの機嫌が損なわれていく。凄まじいしかめっ面で女を睨んだ。色々と台無しになってんぞオイ。
「んだよ、霍青娥か」
「もう。フルネームではなくて愛称で呼んでくださいまし。娘々、と」
「呼べるか！」
突如現るエロい女。其の名は霍青娥なり。またの名を青娥娘々といふ。
まさに夜の蝶たる風貌なのだが、一応これでも近郊の短大に通う女子大生である。ただし、バイト先は見た目通りにキャバクラであった。No.1ホステスもかくやという勢いで幾人もの男に貢がせている、なんてとんでもねぇ噂を聞いたことがある。もっとも、本人に真偽を確かめたところで色っぽくはぐらかされるのがオチだ。
するりと流れるような動作で霍青娥が白い細腕をオレの腕に絡めてきた。魅了の微笑みがすぐ近くにまで迫る。
「なぁッ!?」
エロい女子大生の速攻過ぎるスキンシップに、華扇が素っ頓狂な声を出した。ワナワナと肩を震わせる委員長サマを無視して、艶やかな流し目で青い美女が囁く。
「ねぇ……今夜はヒマなんですの？」

柔らかな肢体と、女の香水の匂い。媚薬が混ざってんじゃないかと疑わずにはいられない。

あまりの情欲を醸す空気に、オレよりも周囲の男連中が鼻の穴を大きく膨らませて息を荒げている始末。ドン引きするレベルで目がギラギラしておった。怖えよ。

「オイ――」

「離れなさいッ！」

「あんっ」

その刹那。まるで落雷の如く、マジメ娘の一喝が降り落ちた。しかもそれだけでは終わらない。

なぜか華扇までもが反対側の腕に飛び付いてきた。引っ張られた拍子にエロ女の拘束から逃れることに成功。ただし今度はこっちがくっ付いているため、あまり状況に大差ない。どうしてこうなった。

「とりあえずどっちも離れんかい」

「綿間部は渡しませんから！」

「ふぅん……」

「いや聞けって。つかお前今何て言った!?」

さらにギュウッと力一杯に、オレの腕をその豊かな胸元に抱え込む桃色の少女。その光景は、ゼッタイに離しませんと言わんばかりであった。それを目の当たりにして、さっきまで興奮して鼻息ハァハァしていた野次馬共がこぞって血涙を流しながら歯ぎしりし始めた。だから怖えって！　ホラー映画か！

「今日は私と一緒にいる予定なんです！　貴女が入る余地はありません！」

「それを言うなら今日もでしょうに。独占欲が強い女は男性に嫌われましてよ？」

「余計なお世話ですッ!!」

シャーッ！と猫染みたな威嚇をする華扇に対して、色欲の女子大生は絶えず余裕をみせる。チロリと舌なめずりすると、再びにオレに双眸を向けた。まだ続ける気なのか。

「客引きすんなら貧乏な男子高校生じゃなくて、もっと金持ってそう

な大人を狙えば良いだろ」
「そうはいきませんわ。これはわたくしの問題ですもの」
諦めの悪さに辟易するが、正直いうと心当たりがないワケでもなかった。
やはりアレか。かつてコイツの色仕掛けを完璧なまでにスルーしたのが原因だろうか。男を惑わし続けた女のプライドに泥を塗ったというのか。意地でもオレを堕として一矢報いる腹積もりなのかもしれない。
青い美女の誘いは止まらない。
「それでしたら、日を改めてデートなどいかがです？　よければ今週末にでも――」
「わわわ綿間部ッ！　そこのゲーセンで遊びましょう！　ええ今すぐに!!」
そうはさせまいと、桃色の髪をもつ女子高生が咄嗟に周りを見渡して、すぐ近くにあった遊技場を指差す。トドメとばかりに抱きしめた腕ごとグイグイと引っ張り、この場を離れようと躍起になる。
「急いでくださいっ時間は有限なんですからね！」
「分かった！　分かったから引っ張んな！」
だからそのデカいマシュマロを押し当てんの止めろ！　むしろ挟まっとるわ！
さすがの霍青娥もこうされては手出しできないらしく、まさにお手上げと肩をすくめるだけ。結果から見れば華扇の目論見は上手くいった模様。もはや勢いで誤魔化した感じが否めないが。
青髪の女に見送られる中、オレは委員長サマにゲーセンへと引き摺りこまれていくのであった。これ拉致じゃねーのか。

照明の少ない薄暗い空間に、冷房のひんやりした空気を肌で感じる。
「そういや考えてみれば、お前からゲーセンに行きたがるなんざ貴重だったな」
「確かにそうですね。まぁ……結果的にですけれど」

四方八方に映る液晶モニターの光が網膜を刺激し、ゲームのＢＧＭや電子音が引っ切り無しに鼓膜を突いてくる。『ＹＯＵ　ＷＩＮ！』などの音声だったりキャラの決めセリフなんかも混じって聞こえた。

それにしても、入店してすぐにアーケード機の配置とは随分とマニアックだなオイ。こういうの二階とかにあるもんじゃねぇのか。ひとまず、オレもこの女も格ゲーはスルーの方向で。

華扇を連れて店の奥に足を進めると、先ほどのガチゲーマー空間とは打って変わって、女子高生やガキんちょでも楽しめそうなアトラクション系のエリアに変わった。

ダンスや太鼓の音ゲー。ＵＦＯキャッチャーにクレーンゲーム。ガンシューティングもあればレースゲームも揃っている。なかなかバリエーション豊富だ。というか、フツーにこっちのを入口側に置けよ。一見さんお断りか。どこの京都だ。

「あっ」

そのうち、ＵＦＯキャッチャーの一つを見つけるや否や、隣の女子高生が声を弾ませて駆けて行った。

「わぁ可愛い……」

うっとりとした様子で委員長サマが景品を見つめている。ガラスケースの中にはアニマル系のぬいぐるみが詰め込まれてあった。さながらサファリパークとでもいおうか。

そういやこの女、無類の動物好きだったわ。それも唯の動物好きではない。例え初見でも向こうから懐かれるという特殊能力を持つ。もののけ姫の末裔なのだろうか。

休みの日にはよく一人でペットショップで動物観察しているそうだが、ぬいぐるみでも同じであった。欲しいと言わないあたり、見ているだけで満たされるクチらしい。それか全員気に入っちまってどれか一つに選べないとか。

どうせなら他にもコイツが好きそうなのがないか探してみる。すると、良さげなブツを発見した。つい意地悪く口元がニヤける。折角だ、ちょっとからかってやろう。

ややトリップ気味な動物好きに声をかけてやる。

「こっちはイイのか？」
「えっ？」
　正気に戻った華扇が、オレが指差す先に視線を追わせる。そっちには、駄菓子が積み木の如くタワーを築いたクレーンゲームが鎮座していた。上手く雪崩れを起こせれば食べ放題も夢じゃない。試す価値はあるだろう。
　オレが言わんとしていることを察した途端、委員長サマが怒りに目を吊り上げる。そのうえ風船みたく頬っぺたを膨らませた。
「失礼ですね！　私はそこまで食いしん坊じゃありませんッ！」
「フッ、そうかぁ？」
「もぉお！　綿間部の馬鹿者！　女心知らず！　鈍感！」
「いや鈍くねぇよ。んなラブコメ主人公みてぇな属性なんざ持ち合わせとらんわ」
　鬼の形相で詰め寄ってきた華扇を軽くいなしつつ、それからオレ達はゲーセン内を順繰りに回り始めた。
　華扇がダンスゲームで遊ぶ。桃色の美少女が踊りステップを踏んでいるのに観衆が沸き立つ。得点でハイスコアが出た時にはもはや祭り会場の如く盛り上がった。
　ガンシューティングに移ればオレの出番となる。密かに練習したスタイリッシュな二丁拳銃の腕前を見せつけた。しかし、華扇からは「二回遊んだ方がお得なのでは？」と身も蓋もないことを言われちまった。泣けるぜ。
　レースゲームは二人プレー。華扇がアクセルとブレーキを踏み間違えてスタートダッシュで出遅れてしまう。よっぽど恥ずかしかったのか、しばらく顔を真っ赤にしていたのはしばらく忘れられそうもない。
「綿間部！　次はあれ行きましょう♪」
「へいへい」
　途中で両替が必要になるくらい、オレも彼女も片っ端からゲーセンを楽しんだ。こういう時間は悪くない。恐らく、オレ一人だったらここまで遊び込んではいなかったと思う。

今はまだ、言葉にはできないが。
きっと、そういうことなのだろう。
今度こそ後編につづく

番外特別回　「るんるんびより　後編」

「ほらよ」
「もうっ、投げないでください！」
休憩スペースの自販機で買ったジュースを華扇に放り投げる。
フッ、ナイスキャッチ。
こいつはエアホッケーの対戦で負けた罰ゲーム。ほぼ互角だったのだが、最後の最後で油断しちまった。我ながら不覚。
あとはダンディ印の缶コーヒーも購入する。こっちは自分用として。もちろんブラック以外は選ばねぇ。プルタブを開けて一服していると、何気なく壁に貼ってあったポスターの一枚に目が留まった。確か、アイドルをプロデュースするソシャゲの新キャラだっけか？
ピンク色のセミロングヘアーとデカい胸が特徴の女だ。男物と思しき大きめのシャツだけを着ており、丈がギリギリで太腿の際どいところまで見えちまっている。所謂、彼シャツとかいうファッションだったか。当然だが顔も良い。
桃色でやや短めの髪型とバストサイズに既視感を覚える。いや、気のせいだ。そうに違いない。
「こういう女の子が好みなんですか？」
「オレに聞くなよ……好みかどうかは知らんが、まぁイイんじゃねーか？」
目敏く気付いた委員長サマの質問に投げやりになって返す。あいにくとソシャゲに課金はしていない。ま、美少女キャラだし人気はあんだろうよ。そうでなきゃこんなデカデカとポスターになったりはしまい。
ブラックコーヒーを飲み終えて空き缶をゴミ箱に突っ込む。その間にも、華扇はそのポスターをまじまじと凝視していた。かと思えば、自分の髪に触れたり胸元を見下ろしながら小さくガッツポーズときた。行動が謎過ぎんぞオイ。
しかも「あとはシャツがあれば……」とかなんとかブツブツ呟いてんだが。まさか、コスプレに目覚めたとか言わないよな？

さてと気付けばかなり遊び回っており、興味を持ったゲームもほとんどやり尽くした。財布の中も大分寂しくなってきた頃。次をやったら帰ろうということで互いの意見も一致した。

「綿間部、最後にアレやってみませんか？」

「どれだ――って、マジか……？」

最後は華扇からのリクエストであった。ところが、そちらを見やった直後、まさかの選択肢に思わず固まるハメとなる。

女子高生、いや、年頃の女子にとってはお馴染みであろう。写メってシールが出てくるパリピのゲーム？　プリクラのボックスが待ち構えていた。その外観からして既にキャピキャピしており、この上なく入り辛い。

顔が引きつる。そんなオレとは対極に、委員長サマは憧れに満ちてキラキラと瞳を輝かせておった。もはやアレ以外はアウトオブ眼中の模様。

幸か不幸か、先客も見物人もいない。入るなら今のうちだろう。とはいえ、ここですんなり頷けるほどオレも女遊びに慣れちゃいない。自慢じゃないがデートすらマトモにしたことがねーわ。

「一度でいいからやってみたかったんです。ね、良いでしょう？」

「待て待て待たんかい、せめて女友達とやれって。オレには無理だわ。絶対似合わねぇ、ホントマジで無理だって！」

「大丈夫ですって。ちょっとだけ、すぐに済みますから」

「先っちょだけみてぇな言い方すんなや。とにかく、よく考えろ。このままじゃオレとお前のツーショットになんぞ」

「それが何か？」

「……」

キョトンと不思議そうに小首を傾げる少女に頭を抱えそうになる。いやいや可笑しいだろ。そこは察しろよ。どこまで天然なんだ、コイツ。とりあえず、無防備を通り越したソレに勘違いしそうになった自分を殴りたい。思春期かコラ。

ともあれ、どう考えてもキツいのは変わらない。絵面的にも。オレのような不良モドキがプリクラでキャッキャッできるワケがなし。

そうなったら明日にはクラス中の笑いネタにされちまう。
やがて、華扇が粘ったりオレが渋ったりしているうちに、あんなに楽しそうだった彼女の表情が徐々に曇った。目に見えて元気が失われていく。
細い肩を落とし、ポツリと小さな問いを零した。
「私と一緒に撮るのは、そんなに嫌ですか……？」
「うっ……!?」
赤みがかった瞳を薄らと涙で濡らして、オレを見上げる。悲しげに揺れるそれを目の当たりにして答えに窮する。
こういう顔されると非常に困る。凄まじい罪悪感に襲われるのだ。しかも、この女が相手だと尚更そうだ。どうしても、強く出ることができなくなってしまう。言っておくが決して日和ったワケじゃないけれど……
だーもう！　しゃーねぇ。降参だ、降参！
泣き顔ギリギリ寸前になっている頭に軽く手を乗せる。けれど目線は明後日の方向へ逸らして。限りなくぶっきらぼうに言い放つ。
「……一回だけだかんな。それ以上はやらん」
「――ッ！　はい♪」
「っかー、嬉しそうなツラしやがってコンチクショウ」
「えへへ。だって綿間部のそういうさりげなく優しいところ、だいす――」
「ダイス？」
「んんっ！　な、何でもありません。ほら行きましょう」
またまた表情を一転させて、満開の笑顔を咲かせる桃色なミディアムヘアの女子高生。
一足先にプリクラ機の内側へと飛び込んでいったかと思えば、カーテンから顔を出して「早く早く」と手招きしてくる。どんだけ楽しみにしてんだよ。
「……ったく」
あんな幸せそうな顔を見せられちまったからには、いい加減に腹を括ろう。やれやれ、オレも大概甘いヤツだわな。

いざ内部に潜ってみると想像していたよりも広かった。何人かで撮るのが前提になってんだから当たり前っちゃあ当たり前だが。さすがに証明写真とは違う。あと、そこかしこから女子力の片鱗を感じる。やはり場違いなのではなかろうか。

「つーかお前も初挑戦だろうが。ちゃんと操作できんのか？」

「むっ、馬鹿にしないでください。これでも霊夢から聞いたんですから」

「へーへー、さいですか」

「まったくもう……」

オレの素朴な疑問に心外だと頬を膨らませて文句を垂れつつも、委員長サマがタッチパネルに触れていく。意外にも手馴れた指さばきに、今更ながらコイツもイマドキのＪＫだったと思い知らされる。これも女子力ってヤツかもしれない。

『あやや、準備はＯＫですか～？』

画面越しにカメラマン（女でもカメラマンで合ってんのか？）らしき黒髪ショートの小娘が喋った。こういうヤツって天使っぽいキャラじゃねーのか。黒い翼してんぞ、この女。悪魔……いや、カラスの方が近いだろうか。

いよいよ撮影開始らしく、黒髪の女子が画面の端っこに移動してカメラを構えた。メイン画面には四角い枠に囲まれたオレと華扇が映っている。自撮りなんざしたことねぇから違和感がハンパない。世の中の女子はこんなコトばかりやってんのか。逆にスゲーわ。

『ではでは！　カウントダウンいきますよー！　五秒前……四……』

「え、ウソッ、時間制限あるの!?　どどどっどうしよう……!?」

「そらあるだろ」

焦った様相で華扇がこちらを見上げてきたが、極めて冷静にツッコミを入れてやった。

手馴れていると思いきやそうでもなかった。タイムリミットが想定外だったみたいでテンパり始める始末。どうやら任意のタイミングで撮影ボタンが押せると思っていたらしい。ドンマイと言わざるを得ない。

当然、プリクラ機に待ったと言ったところで聞くハズもなく、無慈悲にもカメラ女子がやたら明るいボイスでカウントダウンを刻む。

『さーん……にー……いーち……』

「え、えーい！」

「ぬぉおああ!?」

何をトチ狂ったのか華扇が両腕をオレのうなじに回してきた。二人の身体が密着する。その直後、シャッターチャンスいただきましたと言わんばかりに、謎の効果音が鳴った。

ピチューン

ゲーセンを後にすれば辺りはすっかり暗く、あらゆる街灯りが眩しく光る。人工の光の群れは、例えるならば都会の蛍とでもいおうか。なかなか洒落ておりこのまま夜を楽しんでいきたくなる。

しかしながら、こちとら明日もガッコな高校生。大人の時間には入れない。この時ばかりは霍青娥が羨ましく思う。

繁華街を外れて、帰り道の途中にある自然公園へと場所を移す。丁度空いていたベンチを見つけたので、二人で並んで腰掛けた。

夜のお散歩デート中のカップルだとかジョギングするスポーツマンとも出くわすことなく、今夜は誰も通らない。そのせいなのだろう。やけに静けさを覚える。こんな日は珍しい。それはそうと、

「どうすんだソレ……」

「あはは……」

さすがの委員長サマも乾いた笑いで誤魔化すしかない。片や包帯の巻かれた手元には、つい先ほど撮ったプリクラのシールが収まっていた。

茨木華扇がオレに抱きついている決定的瞬間。その一枚を。

なんとこの女、最初の写真で一発ＯＫしやがったのである。もちろん事故だ。テンパったままタッチパネルに触った挙句、うっかり手を滑らせたのだ。より具体的にいえば「取り消し」と「撮り直し」を見間違えてキャンセルしてしまった。ダメだこりゃ。

「ったく、ポーズとるなら他にも色々あっただろーが」

「そ、それは……やむにやまれず本能に従ってしまったと言いますか……」

「何だそりゃ」

ゴニョゴニョと口ごもる華扇を胡乱な目で見やる。大体いくらなんでも知り合いだからって異性に引っ付くのは問題であろう。イロイロ危ねぇだろが。つーか、恥ずかしがるくらいなら最初からやんなよ。

「えと、とりあえず半分どうぞ」

「ん」

半分子に切り分けられたプリクラの片割れを差し出される。どこからどう見ても撮影ミスにしか見えない。けれど、この女は「これも記念ですから」と言って取り出し口から受け取っていた。それはそれは大事そうに。

ただ、オレが貰ったところで貼れる箇所もなく扱いに困るだけだ。そんなのは最初から分かり切っていたこと。だから、本来なら受け取るべきではない。

「……」

そのハズだったのだが。

どうしても、そいつを「要らん」と突っぱねることができなかった。霍青娥の色仕掛けを相手にするみたいにはいかなかった。無意識のうちに、手放すのが惜しいと思った。あぁ、思ってしまったのだ。オレとコイツのツーショットを。

彼女の赤みがかった瞳を眺める。儚くも美しくさえあり、知らないうちに意識が吸い込まれていた。さながら星明りに照らされているかのように映った。ふいに柔らかな桃色のミディアムヘアが夜風に靡く。

「綿間部……あんまり、見つめられると……その、恥ずかしい、です……」

「うぉ!?　わ、わりぃ」

「いえ……」

モジモジと肩を縮ませながら頬を染める華扇の言葉を受けて、弾か

れたようにして正気に戻った。何やってんだ、オレは。

『……』

それっきり会話が途絶えてしまう。

真横に突っ立っている街灯は物静かに、オレ達が座るベンチだけに絞って明かりを落とした。遠くからカエルの鳴き声が聞こえてくる。それ以外に何もなかった。偶然にも重なった幾つもの条件が、今この場所に二人きりであることを強く意識させる。

互いに上手い言葉を探していき、ついに華扇から口を開いた。それは、特別な何かで、

「もう一つだけ、お願いしても良いですか……？」

祈るような声音に、切なげな表情を浮かべて。上目遣いで瞳を潤ませる彼女と向き合う。結局、最後まで言葉にはせず、代わりに黙って頷くことにした。これがオレの答えだと。

「……ん」

華扇がそっと瞼を閉じる。僅かに顎を上げて小さな口を薄く開き、その身をオレに捧げる。

はぐらかせる状況ではない。この女が求めているものが言われなくても分かっていた。だからこそ、逃げるワケにはいかない。止まるつもりも、ない。

あぁ、そうだ。とっくに分かっていたとも。彼女の想いも……オレの気持ちも、同じだということも。

ゆっくりと、夜景をバックにして華扇の顔へと近付けていく。暗がりのシルエットが一つになる。やがて、二人の――

「く　ち　び　る　が……っと。やった、出来ました！」

最後の一文字まで書き終えたと同時に、東風谷早苗は声高らかに天井へ告げた。達成感に満ちた笑み。もちろん万歳のオマケ付きで。

守矢神社の巫女の前には、ここ数日にわたる努力の成果があった。一仕事終えたばかりの原稿用紙とインクの減った万年筆が転がっている。まるでどこぞの鴉天狗の仕事場に類似していた。

一度の失敗では諦めない。この少女、再び知り合いを題材にした小

説を執筆したのだ。当の本人はといえば、やっぱり学園モノは青春ですねと悦に浸っている。恋する乙女……を題材にした少女作家は強かである。間違いない。

『早苗ー、ちょっと来てくれるかい？』

「あ、はい。今行きます。神奈子様」

自らが仕える神の一柱に名を呼ばれ、いそいそと少女が自室を後にする。部屋を出た際に、ほんの少し隙間風が入った。出来立ての作品が小さなそよ風に乗り、僅かに舞い上がった。誰かに読まれる日を、今か今かと待ちわびながら。

数日後、宴会で披露された新作は、人知れずヒロインにされた恥ずかしさもあって赤鬼と化した仙人少女の手によって、一夜にして紙吹雪となった。

執筆した風祝の絶叫と読みかけだった幻想郷の少女等の悲鳴が飛び交う中、端正な顔を真っ赤にしたメインヒロインが叫んだ。

「だだだっ誰があんな人とぉおおおおおッ!!」

時を同じくして、人里のどこかで全身真っ黒な青年が立ち止まる。

「へ……へ……イーッキシ！　っかー、誰かオレの噂でもしてんのか？」

特別番外編　おしまい

第二十九話　「三割の月が昇る空」

三日月が白い弧を描いた夜。

ガキはとっくに寝かしつけられる時刻。だというのに、無駄なくらい元気いっぱいなチビ集団と出くわしちまった。うち三人は背中に薄透明な羽を生やし、誰がどう見ても妖精。というより、知ってる顔なんだが。

声をかけるよりも先に反応したのは、意外にも三月精の中で最もトロそうな印象をもつルナチャイルドであった。縦ロールな髪型も栗みてぇな口も相変わらずなソイツは、オレの顔を見て目を瞬かせる。

「あ、ワタナベさん」

「何してんだオメーら。また得意のイタズラか？」

「違う違う。ピースに人里を見せて回ってんの」

「ピース？　誰だそりゃ」

サニーミルクの口から聞き慣れない名前を告げられ、おうむ返しに尋ねた。ピースとはまた平和的なネーミングセンスがあったもんだ。なら相方はラブってか。

「あたいのことさ！　地獄の妖精、クラウンピース様だぁ！」

全然平和的じゃなかった。地獄だと。

チビ集団のうち唯一の新顔であったガキんちょが、ふんぞり返りながら一歩前に出しゃばってくる。もっとも、どれだけ胸を張ったところで真っ平と書いてまったいらと読む。ここまでくるといっそ清々しい。

緩いウェーブのかかった金髪を背中あたりにまで伸ばし、いかにも勝気そうな顔立ち。サンタ帽の亜種みたいな被り物もさることながら、服装がアレ過ぎた。ド真ん中を境目に縦割りのデザインなのはまだ良い。ならばどの辺がアレかといえば、その模様に尽きる。片側が赤と白とストライプで、もう片側が青ベースに星が散らばる。

敢えて言おう。完全にアメリカじゃねぇかコレ。

しかも足を包むタイツでさえも同じデザインしていやがるもんだから、上から下まで完全無欠な米国スタイルときた。ある意味、まさ

に妖精と言えなくもない奇抜な格好。グリム童話かよ。
　というかグリム童話ってアメリカだったか。イギリスだったような気もする。ま、どっちでも大差ねぇだろ。
　フンスと誇らしげにピースだかクラウンピースだかが仁王立ち。その脇にスターサファイアが並んだ。やれやれと大人ぶったリアクションをしながら、ちゃっかり常識人を気取っている。
「ピース、この人はワタナベさん。姿も音も消して近付いた私たちを一発で見抜いた凄腕のエスパーよ」
「さらりと嘘言うんじゃねェよ。誰がエスパーやねん」
　エスパーワタナベとか胡散臭さこの上ないわ。どこの芸人だ。
　オレのツッコミを余所にサニーミルクも会話に割って入ってくる。夜でも元気なお日サマの妖精か。もうわかんねぇな。
「ワタナベさんは今日もお仕事？」
「まーな。つっても、まだ始めたばかりだがよ」
「ン、何の仕事してんの？」
　ふんぞりポーズを解いてアメリカン娘がオレを見上げながら首を傾げた。他の妖精連中と同じく、かなり身長差があるため自然とこちらも見下ろすかたちになる。
「フッ、オレの仕事か……？　夜に限られたフリーランスの何でも屋だ。お望みとあらば厄介事も引き受けるぜ。ただし、報酬次第でな」
　裏社会の闇を匂わせる意味ありげなセリフに、ニヒルな男の顔を上乗せする。キマッた。そう、オレは夜に生きる男。
　すると、はじめはポカンと呆けていたクラウンピース。それがどういうワケか、徐々に顔を輝かせていった。やがてファッションだけではなく瞳の中にまでキラキラ星が浮かぶ。夜中だってぇのに笑顔が眩しい。
　ついには、そいつはハイテンションに飛び跳ねながら感嘆の叫びを上げた。
「Ｃｏｏｌ！　チョーカッコイーね!!」
　嬉々とした表情で周りをクルクルと駆け回り始める。その様相といい、さながらちっけぇ子犬に懐かれた感覚に近い。どうやらオレの

生き様がコイツの琴線に触れたらしい。
　どうでもいいけど、咄嗟にネイティブ発音が出るあたり生粋のアメリカっぽいと思った。あと金髪だし。
「あたい決めたよ！　これからアンタについていくぜ、ブラザー！」
「って、何抜かしてんだコラ」
「ぷぎゅ」
　どさくさに紛れて意味不明な宣言をかました新キャラ妖精の頭を押さえつける。
　ようやく走り終えたかと思えば、ビシッと敬礼を放ってコレだ。油断も隙もねぇな。空気が抜けたみたいなリアクションになってるのもお構いなしに、そのままグリグリと回してやった。「あ～れ～」と外国チックな見た目に反して時代劇染みた反応が返ってくる。ヤバい、何気に面白いんだが。
　それはともかくとして、だ。頭シェイクを継続しつつ三妖精にもジロリと視線を向ける。
「オメーらも何か言ってやれ。ダチなんだろーが」
「えーっ！　いいんじゃないの？」
「私もサニーに賛成。ワタナベさん、不束者だけどピースをよろしくね」
「たぶんダメって言っても勝手についてくると思う」
「こやつら……」
　三者三様に好き勝手なことを口走り、ついでにクラウンピースのフォローにも走られた。ったく、こんなところで友情パワーを発揮すんじゃねぇ。
　しかし、てっきり三月精が四月精になったのかと思ったのだが、どうもそういうワケではなさそうだ。コイツが別行動を取る分には構わないという。むしろオレが構う件について。
「よろしくな、ブラザー！」
「だぁああ！　引っ付くな！」
　腰の辺りに引っ付きながら自称シスターが白い歯を見せてスマイル一つ。そういうのはマックでやれ。というか、いつからオレの妹に

なったんだ、お前は。
　どうにか引き剥がそうにも、見事な膠着状態でしがみかれたせいで手こずってしまう。まるで昔流行った風船人形を彷彿とさせた。おまっ、足まで絡めんな！　だいしゅきホールドかコラ！
「みんなはどうすんの？」
「今夜はパスしておくわ。夜更かしは美容の大敵だもの」
「はっ、ガキんちょがいっちょまえ言うなや。つーか、何当たり前みてぇに話し進めてんねん」
　黒髪ロングのスターサファイアがお肌の調子を確かめる要領で頬に手を当てながら、残業続きのＯＬを思わせるセリフを口にする。近頃のチビ共はこんなにもマセてんのか。だからあと十五年くらい成長してから言えと。
　そもそもの話、いつからオレはガキ共に纏わりつかれるような優男風情になっちまったんだ……？
　結局、つくづく妖精とは自分勝手というか自由気ままな奴ら、あれから三月精は新キャラをオレに押し付けるとマジで帰ろうとしていた。
　チキショーめ。いつぞや仕事を手伝った褒美をくれてやろうと思ったのだが、今日はお預けにしてやる。それどころか面倒事を押し付けられたんだからな。
「まったねー！」
「でも浮気はダメ」
「仕方ないわルナ、据え膳食わぬは男の恥なのよ」
「オイコラそこの二人戻ってこい。説教してやるから」
『お断りします』
　帰り際、大人しい口調のクセしてルナチャイルドがとんでもねぇコトを言い残すわ、スターサファイアが明らかに間違った助言をするわ。今すぐとっちめてやりたいところだが、すでに奴らは空の上。上手く逃げられちまった。
「……ったく」
　次会ったら首根っこ引っ掴んでやるかんな。覚悟しておけよ。

「ねぇねぇブラザー、今日はどんなお仕事すんの？」
「オレの呼び方はそれで確定なんか……」
いつもの如く当てもなく適当にうろつけば、その斜め後ろや真横をぴょこぴょことついてくるマイシスター（謎）
追い払う気なんざ既に失せた。縦ロールな妖精が言った通り、どう言ったところで追いかけてくるのは目に見えている。ま、こうやって好きにさせておけばそのうち飽きるだろ。妖精なんてそんなモンだ。
って、もうそんな幻想郷知識まで身に着いちまったのか、オレは。些か馴染み過ぎではなかろうか。
「先に言っておくが、毎日必ず依頼がくるワケじゃねーぞ。暇な時もある。ちょうど今みたいにな」
「ふーん……？　でもそれってイイコトなの？」
「どうだかな。良くも悪くも平穏ってこった。ま、オレの収入は危うくなるけどよ」
世界が平和でありますように。誰かの祈りが届いたのなら、オレ一人が貧乏なくらい些細なコトなのかもしれない。そんな風に気障にキメつつ三日月を仰ぎ見る。
未だに依頼はなし。この調子だと、今宵はただのお散歩コースで終わっちまう。どうする気もないが、どうしたものか。
熱意の欠片も無い考えが堂々巡りで渦巻く。どこぞの仙人が聞いたら説教が飛んできそうだ。そんな中、ふいにクラウンピースがオレの前に回り込んで立ち止まる。お得意のニヤリ顔で。
「ヘイ、あたいにグッドアイデアがあるぜ！」
「ほーん……？　とりあえず言うてみぃ」
「ふっふっふっ」
すると彼女は一層笑みを深めて、「じゃーん！」とどこからともなく松明を取り出して掲げた。いやちょっと待てマジでどこから出しやがった？　バッチリ火点いてんぞ。
物理法則を無視したナニカなど意に介さず、妹（仮）が意気揚々と語り出す。燃え滾る松明を振りながら。アマゾネスか。

「あたいの火を視たら最後、誰もが正気なんか保っていられない。あっという間に心を惑わすことができるのさ。これで村人たちを狂わせて、事件になったところをブラザーがとっちめるってのはどう？」

イカしてない？」

「イカしてない。お前それマッチポンプじゃねーかよ。却下だ、やり直せ」

「えぇ～!?　じゃあじゃあ、松明の火でボヤ起こしてからの火消しは？」

「逆に文字通りになっとるがな。どっちにしてもイカサマだろうが。そこまでして仕事する必要はねーよ」

「大丈夫だってば。バレなきゃイカサマじゃないんだぜ？」

「どっかで聞いたことあるセリフで誤魔化すな。その考えは嫌いじゃねぇけどよ」

とはいえ、これでも一応コイツなりに考えたつもりなのだろう。自作自演のパフォーマンスばかりなのは独特ではあるが。やはり地獄でしかも妖精ってか。発想がダークなうえにイタズラ寄りに傾く。

にしてもやけに熱心だ。まさかとは思うが、実はコイツがやりたいだけなのではあるまいな。

立て続けにダメ出しされたのが気に食わなかったのか、作戦変更。アメリカ妖精がメラメラ燃える松明を手にしたまま猫撫で声で擦り寄ってくる。ちょぉおお!?

「ねぇ～ん、いいでしょおブラザぁ～？」

「だぁぁあ！　火ぃ点いてんだろーが危ねーわ!!」

可愛らしい声を出しておきながら行動がクレイジーである。

もはや意地なのかヤル気に燃えており、その熱意たるや仕掛けずにはいられないと顔に書いてある。これが成果主義の外資系スタイルか。意識高い系もこうやって生み出されるのかもしれない。さすが米国。

んなコトよりも、このままゴタゴタしてたらオレがその熱意よりも先に物理的に燃やされちまう。近ッ！　熱ッ！

「わぁーったつの！　やればイイんだろ、やれば!?」

「うんうん、その通りだよ。さすがあたいのマイブラザー♪」
「この……」
「その話、詳しく聞かせてもらっても良いですか？」
「――……」
とてつもなく聞き覚えのある女の声が会話に混じってきた。あるいは、最初からそこに居たのか。クラウンピースの猫撫で声よりもさらに上を行く甘く蕩けるトーンに、対するオレは一瞬にして固まった。
柔らかな桃色に色付いたミディアムヘアに白いシニョンを飾り、胸元に薔薇が咲いた中華衣装と緑色のミニスカ。極めつけは右腕に巻かれた包帯と鎖の繋がった腕輪のアクセント。
ニコニコと見た目だけなら麗しい笑顔を張り付けて、茨木華扇がオレたちに微笑みかける。
「うふふ、聞き間違いですよね。よもや綿間部が詐欺行為を働こうとしているなんて」
まるで「天気が良いのでお出かけしましょう♪」と言いたげな甘ったるい声音で言葉が紡がれる。が、瞳が一切笑っていない。それどころか光すら灯っていない。だから怖ぇえよッ！
非常にマズイ。上手く言いくるめなければオレたちの明日はない。むしろオレの明日がなくなる。
「ふっふっふー、パーフェクトな作戦だろぉ？」
「バカかッ!?　お前はだーっとれぃ！」
「え？　ホワイ？」
ここにきてクラウンピースがまさかの空気読めない発言をかましやがった。慌てて止めようにも、一度出てしまったものはどうすることもできない。手遅れともいう。
「……へぇ」
同時に、華扇の声のトーンが氷点下まで落ちた。あ、これもうダメな展開だわ。
スゥーッと深く息を吸い込む仙人サマ。そして――
「こんのっ、馬鹿者ぉおおおおおおおお!!」

眉尻を吊り上げてついでに怒声も張り上げてお説教シャウトが人里の隅々にまで響き渡った。あまりの五月蠅さに堪らず耳を塞ぐ。オレの脇では、初見かつ直撃を受けたアメリカ娘が「Ｗｈａｔ☒ｓ!?」とネイティブ発音とともに引っくり返っていた。オイ、いくらタイツ穿いててもスカートだろーが。

そんなオレたちのもとへ一直線に距離を詰めると、華扇は覗き込むようにしてオレを睨みつけた。赤みがかった瞳がこちらを鋭い視線で射抜く。

「見損ないました！　破廉恥なだけならまだしもこんな姑息な手段で稼ごうとするなんて、恥を知りなさいッ!!」

「誰が破廉恥やねん……」

「黙りなさい!!　良いですか、働くとは本来誰かの役に立つこと。言うなれば、貴方の仕事もそうであったでしょう。困っている人から悩み相談を聞いて、それを解決することで感謝の気持ちとして対価を頂戴する。そういうものだったでしょう？　にも拘わらず……今のはなんですか！　自ら他者に迷惑をかけようとするなどと！　情けないとは思わないのですか!?　しかもこんな小さな女の子相手に密着されて甘言を囁かれて、あまつさえ陥落しそうになるなんて！　もしやそういう趣味だとでも!?　もうっ、だから綿間部は心配で仕方ないんです！　ちょっと目を離せばすぐにこれなんだからッ!!」

「だーもう！　夜中に大声で叫ぶんじゃねぇって！　あとそういう趣味ちゃうわ！」

怒涛の勢いで捲し立てる華扇から一歩退きつつ負けじと言い返す。だが、こちらが一歩下がればその分あっちも前に詰めてくる。逆に逃がすかとばかりに余計に狭まってしまう始末。この喧しさ、間違いなく近所迷惑確定だろう。また上白沢女史が飛んでくるぞ。

説教がノンストップな桃色仙人の傍ら。ようやく起き上がった金髪妖精がポンと納得した表情で手を打った。

「Ｏｈ、これが巷で噂のチワゲンカ。ブラザーのハニーって仙人だったのね！」

「何もかも違ぇよ！　つーか、さりげなく他人事ポジションすんな。

そもそもの発端はお前だろうが」
「Ｒｅａｌｌｙ？」
今更だが所々にネイティブなカタカナ入れてくる感じで個性を確立してやがんな、コイツ。ひょっとしたら、今まで出会った中でもキャラの濃さがダントツかもしれない。あとクラウンピースってぇ名前からして微妙に長いんだよ。だからピースなのか。
などと思考を逸らしたところで現状が解説するハズもなし。「聞いているのですか!?」と、華扇がぐいぐいと迫ってくる。だから近いっつの！
「大体どうして地獄の妖精が綿間部と一緒にお仕事してるんですか！私だってまだ少ないのに！　私だけじゃ物足りなかったというの!?」
「そうなのブラザー？　もしかして、あたいとも遊びだったの!?」
「ぼっ!?　お前ら道のド真ん中で何叫んでやがんだコラァ!?」
仮にも女二人が男を間にそんな発言をしようものなら、またもやオレの悪名（誤解）が広がっていくのは止められない。人の噂も七十五秒で行き届くこと待ったなし。村社会かよ。
ほら見ろ。通りがかった女らのクソを蔑むような視線がオレに集中し始めた。あるいは一切の感情が込められていない虚無の眼差しが突き刺さる。おい今誰かロリコンって囁かなかったか!?
嗚呼無情。三日月も揺蕩う静かな夜だったというのに、瞬く間に人里はカオスに包まれていった。上白沢女史が出動するまであと何分だろう。フッと笑みが零れるが、ニヒルではなく自虐のそれなのは言うまでもなかった。
「綿間部!!」
「ブラザー!!」
「だぁチクショー！　何なんだコレ!?」

本日の収入金額、ゼロ。
つづく

第三十話　「孤高のグルメ」

月に叢雲、花に風。あの三日月から数日過ぎて、今宵は半月。

「Ｈｅｙ！　ブラザー、また会ったね！」

「よう、今日は一人か？　ダチ公はどうした」

「いつも一緒にいるわけじゃないよ。だってあたいは地獄の妖精だもん」

「どういう理屈だそりゃよ……」

やたら大袈裟に手を振ってくるクラウンピースとエンカウントした。そのままパタパタと駆け寄ってくるその様は冗談抜きでワンコを連想させる。ビーフジャーキーでも与えたくなってきたわ。

当然ながら、ちょいと言葉を交わしてハイ終わりとはいかず。いつぞやと同じく、アメリカンな金髪フェアリーがちょこちょこと後ろをついてくる。「仕事中だ」と告げれば「見ればわかるよ」と白い歯を見せて笑いやがった。懲りないヤツめ。

例の如くオレを兄呼びする妖精は、頭の後ろに指を組んでどこか勿体つけるような口振りで言った。

「まぁ？　あたいもマスターから重大なオシゴト任されてるしぃ？」

「って、お前にも主人いんのかよ」

「Ｙｅｓ！」

主人と言っても旦那とか亭主とかの意味合いではない。ダーリンじゃなくてマスター。というか、妖精ってぇのはフリーランスなんじゃなかったか。自然の権化だとかエラく大層な肩書きを持っていたハズでは。もしくはコイツが例外なのか？

はたして地獄の妖精が誰の元に仕えているのか、何気に気になる。ちょっとした好奇心で尋ねてみれば、予想の斜め上を行く答えが返ってきた。

「あたいの主は女神だよ」

「……っかー、女神ときたか」

一気にスケールがデカくなっちまったなオイ。さすがに予想外だわな。会ったこともねぇしよ。

いや、八坂神と洩矢神も女の姿をした神という意味ならば、女神とも言えなくもない……のか？　知らんけど。ついでに実感もイマイチ湧かない。

どうにも女神といわれると、金の斧とかで出てくる泉（湖だったか？）の精霊みたいな聖女をイメージしてしまいがちになる。さもありなん。美術品だの女神像だの、よくある造形といえよう。

もっとも、クラウンピースのマスターがどういう感じの女神なのかは、当然オレには知る由もねぇワケで。あるいは、女神と妖精の組み合わせと考えれば案外違和感はないのかもしれない。

「で？　その女神サマとやらからお前は何を命じられたってんだ？」

「んっと、幻想郷に住んで見識を広めてこいって」

「オイ……はじめてのおつかいにしちゃアバウト過ぎねーか？」

ＯＪＴにしてはぶっつけ本番にも程があんだろ。いきなり現場に放り出すとかブラック企業じゃねぇか。黒はオレのトレードカラーだが、そういう黒さは求めるところじゃねーわな。

とりあえず、見たところこのチビ助が嫌がっている様子はない。無理矢理に放り出されたクチではないと結論付けておいた。ガンバッて社会勉強してきなさいってか。スパルタなんだか親心なんだかわかんねーな。その女神サマ。

ま、それにガキとはいえこんなでも妖精の端くれ。コイツ自身もエンジョイしているみてぇだし、何だかんだでどうにかなっているのであろう。おかげでこうして兄弟呼びで懐かれちまってんのだが。

「ふっふっふ、心配ないさ。いざとなったらコレがあるからね！」

「だからいきなり松明を掲げんなっつってんだろーが！　蛮族かお前は!?」

「あたいに触れると火傷するぜ？」

「そらそうだろうよ……」

キメ顔でイイ感じなセリフを口にするアメリカン妖精。しかしながら、その光景はあまりに不釣り合い。なにせ奇抜な身なりしたガキんちょが火のついた棒切れを振り回しているのだ。

むしろハロウィンだったら似合っていたかもしれん。お菓子要求

のイタズラが着火を意味するとすれば大惨事でしかないけど。それただの放火やんけ。
「そんなことよりブラザー、あたいお腹減った。ポテト食べたい」
「……今何つった？」
「だーかーらー、フライドポテトが食べたいの！　アイム　ハングリー！」
「わざわざ英訳せんでいい。つーかお前、フライドポテト分かんのか」
「え？　あったりまえじゃん」
思わず耳を疑ってもう一度だけ問い直した。しかし、そいつは聞き間違いではなかった。朗報、ここにきて同志を見つけたり。
例えるならば砂漠のド真ん中でオアシスを発見したかのように、喉の奥から掠れた息がじわりと漏れる。
「マジか……幻想郷の連中には誰一人として通じなかったってぇのに……」
「Ｒｅａｌｌｙ!?　どんだけ田舎なのさ……」
「ホントそれな」
オレがいた現代からすればド田舎なのは揺るがぬ事実であろう。んなモン、八雲紫に連れてこられた初日から分かり切っている。
しかしながら、どうやら米国スタイルの服装は伊達ではなかったらしい。確かにコイツならバーガーもコーラも似合いそう。いっそマスコットキャラにでもなればいい。ヘンな色した着ぐるみよりよっぽど人気者になれる。それはさて置き。
実際問題、この手の類いは伝播するのが厄介なところ。余計なコト考えたせいでオレまで無性に食べたくなってきちまった。ましてやフライドポテトは我が大好物である。あの健康とは真逆を突っ走るジャンクフードが堪らなく恋しい。
「あーくそ、今更別のモンで我慢する気にならねぇぞ……」
どうにかしてソレを食せないものか。傍から見れば下らない悩みだが、今のオレとクラウンピースにとっては死活問題ですらあった。分かるだろうか、この気持ちが。
あの繁華街だったら即座に解決する問題も、この異世界に置いては

難易度が高く厳しい。マックもねェモスもねェ、バーガーキングは都市伝説。ロッテリアもラッキーピエロも幻想郷にはありゃしない。あ、詰んだわコレ。

だったら自炊すりゃイイだろってか？　バカ言うなや、仮暮らしのテント野郎にできるワケねぇだろーが。

いや待てよ？　それならいっそ……

「誰かに作ってもらうっつー手段もあるな。レシピさえ説明できりゃ何とかなるだろ」

「心当たりあんの？」

「フッ、オレの人脈をなめんじゃねぇ」

こちとら幻想入りしてからそこそこ日数の経った何でも屋。見知った顔ならそれなりに増えた。しかもなぜか女ばかり。意図してやったことじゃねぇから。偶然だ、偶然。

ともあれ、メシ処の伝手も幾つか手札あり。パッと思いつくのは、ミスティアの屋台か赤蛮奇が働く酒場。いや、後者は赤蛮奇が調理スタッフしているワケじゃねぇけど。店主のオッサンよりもあっちの赤髪ショートの方が印象深いせいだ。

さて、どちらに頼みに行くのが正解か。距離的に近いのは赤蛮奇。頼めばすんなりＯＫしてくれそうなのはミスティア。どちらも捨てがたい。

無駄に頭を悩ませていると、偶然にも桃色ミディアムヘアで中華衣装な仙人サマが通りかかった。

「何を悩んでいるのですか？」

パチクリと瞬きしながら小首を傾げて華扇が問いかける。

和服女将な鳥娘もそうだが、コイツもコイツで結構あざとい仕草が多い。どっちも髪色がピンクという共通点もあった。むしろ華扇の方が全体的にピンクカラーなのかもしれない。服装も瞳の色も含めて。

「ああ、実は――」

「ブラザーがどっちの女でご馳走になるか決めらんないの」

「は……？」

「いや待て誤解すんな真顔になるな拳を握り締めるなオレの話を聞け」

クラウンピースの余計過ぎる一言を真に受けて――しかも微妙に間違ってやがるし、包帯の巻かれた右手で拳骨の構えをとる桃色仙人をこちらも真顔になって押し止める。まるで凍土のような一切の感情を失った瞳に冷や汗が溢れる。

大抵の場合、このあと説教と折檻のセットが続くのだから意地でも阻止せねばなるまい。というか、どうしてこの金髪フェアリーはやたら火に油を注ぎたがるのか。そういうとこやぞ、お前。

「……そういうことでしたか」

「あぁ、そーゆーこった。分かってくれたか？」

「ええ。そもそも、あんな紛らわしい言い方さえしなければ私だって無闇に怒ったりしません」

「そーかぁ？　お前さっきの面構えガチだったじゃねーかよ。ぜってぇキレる一歩手前まで来てたろ」

「う、うるさいですっ！　ところで……その、そんなに美味しいものなのですか？　ふらいどぽてと？　というのは」

「そらオレが愛してやまない郷土料理（ジャンクフード）だかんな。マズいワケがねぇ」

「……ッ!!」

華扇の質問に対して好物であることを告げると、桃色の女は大きく目を見開いた。いや、別にそこまで驚くようなこと言ってなくね？

「ふむ……」

すると今度は腕を組んで考え込み始める。なんでや。今の会話に深く考える要素なんざ微塵もないと思うのはオレだけなのか。

ようやっと考え事が済んだかと思えば、チラチラとこっちに視線を投げながら「んんっ」と咳払いしてきた。ちょっとわざとらしいうえに、どこか落ち着きがない。

「も、もしでしたら……私が作ってあげてもいいですよ……？」

「Ｒｅａｌｌｙ!?」

驚異的な反応速度で飛び付いたのはクラウンピースだった。最初に食べたいと言い出した手前、まさに願ったり叶ったりな申し出なのは言うまでもなく。ったく、純粋というか単純というか。

お目目のお星さまがキラキラ状態な妖精に、華扇は柔らかく微笑みかける。

「まずは調理しなければならないので少しだけ時間はかかりますが。それと、屋敷に来てもらう必要がありますけれど、構いませんか？どうせ綿間部は料理道具なんて持ってないでしょうし」

「フッ、よく分かってんじゃねーか」

「それはもちろん。あのような住まいで自炊しているとは思いませんから」

「んだよ……そこまでお見通しってか。抜け目ねぇなオイ」

「あなたのことはいつも見てますからね」

ニヒルに笑って応えるとあちらも相好を崩す。自ずと見つめ合うようなかたちになった。やれやれ、仙人サマの監視の目は細かい所まで行き届いているらしい。

クラウンピースがオレと彼女を交互に見て「Ｏｈ」とか抜かしておったが、他意はない。断じて。

「いただきます」

「イタダキマース！」

「はい、召し上がれ」

ニコニコ顔の華扇の言葉を合図に、大皿に山盛りなフライドポテトに臨む。食べ放題でもお目にかかれないほどのボリューム感。山盛りっていうかもはや山峰そのものであった。マウント・イモ。

……些か作り過ぎじゃないですかねぇ。今回だけでどんだけジャガイモ使ったんだ、この女。

「綿間部の大好物ですからね！」と腕まくりして気合を入れていた桃色少女が台所に消えて行ったのが数十分前のこと。その間、オレとクラウンピースは出来上がりがくるまで大人しく待機を命じられた。

いや、アメリカン妖精については寅さんの背中に跨ってはしゃいで

いたけど。ジャングル大帝かよ。
「ンー、デリシャス！」
クラウンピースがその小さな両手でフライドポテトを鷲掴みにして次から次へと口の中に押し込んでいる。どうでもいいけど、熱くねぇのかお前。
「綿間部は食べないのですか？」
「いや、貰うわ」
「ええ、どうぞ♪」
オレも揚げたてのポテトに指を伸ばす。それにしても、仙人サマお手製のジャンクフードとは如何に。あと、ご本人がさっきからジッとこちらが食べるのを観察してきていやがる。まさか、どれか一つに香辛料を大量に盛ったロシアン・ルーレット式だったりすんのか。
「……フッ」
ま、この女に限ってそりゃねーか。もしやるとすれば何らかの意趣返しとか、そういう時だろう。
金髪フェアリーのように鷲掴みにはせず、適当に選んだ一本を齧る。僅かに溶けたイモの表面が油でコーティングされ、まるでビスケットのようなサクサクとした食感を生み出す。
内部から穀物の果肉が舌の上へと零れる。表面は程良い固さで内側はソフト。そこに旨味を損なわない余熱と大雑把な塩気が混ざり合う。素朴ながらも、いや、だからこそと言うべきか。
作り方は皮剥いて切ったジャガイモを油で揚げて塩振っただけ。その単調さにも違いは生じる。作り手の性格が表れているのか、ジャンクフードというよりもキチンとした単品料理になっていた。
「まだまだありますからね」
「ヤフー！」
「どこの検索エンジンだお前は」
「うふふ、そう言いながらも綿間部だって美味しそうに食べてますよ？」
「……ほっとけ」
華扇の温かな眼差しも意に介さず、オレはシスター（諦）と一緒に

なって久方振りの好物を堪能した。
結論からいうと、タバスコ入りは一つもなかった。
華扇がどうしてオレをずっと見ていたのかは疑問が尽きねぇが……ま、不機嫌なツラで睨みつけられるよりかは百倍マシだろ。
つづく

第三十一話　「あー、女神サマぁ？」

「Ｒｅａｌｌｙ!?　ブラザーって外来人なの!?」
「あー？　言ってなかったっけか」
「初耳だよ！」
「そーかい、そらすまんかったな」
　はたして何度目のリアリーだろうか。多分四回目くらいだな。
　イモマシマシに聳えていた特盛マウンテンを頂まで踏破し、食後の一服。腹の中が炭水化物で埋め尽くされている感。満腹を通り越して若干キツくすらあった。いくら好物つってもしばらくは食わなくてもいい気がしてきた。
　テーブルを叩かんばかりに興奮するクラウンピース。こうなった発端は、幻想郷の連中も知らないジャンクフードをどうしてオレが知っているのか。取るに足らないちっぽけな疑問への答えも、このガキんちょには大発見だったらしい。
「スゲーッ！　本物の外来人なんてあたい初めて見た！」
「別にマジモンもパチモンもねぇだろーが」
「ねぇねぇ、『外』の世界のモノ持ってきてないの？」
「そーだな。例えば……ホレ、壊すんじゃねエぞ？」
「Ｆｏｏｏｏ!!」
　ついに発狂したかと思うほどのテンション爆上がり。巷で噂のウェーイ系ですらこうはいくまい。
　切り札のピストルを貸してやれば、ネイティブかつ甲高い歓声を上げやがった。今にも飛び跳ねそうである。とりあえず落ち着け。事前に弾は抜いておいたから引き金を引いたところで意味ねぇけど。
　そんなのお構いなしに拳銃を構えて金髪アメリカンがニヤリと不敵なツラで決め台詞を言い放つ。
「あたいに触れると火傷するぜ？」
「それお気に入りなんか」
　ゴルゴ１３でも読んでんのか、コイツは。
　ちんまい見た目のせいで全然キマッてないシスター（諦）をゲンナ

リした目で見やる。ハリウッドなアクションシーンを再現したいなら色々と成長してからにしとけ。

間近でオレとクラウンピースの掛け合いを聞いていた仙人サマがくすりと笑みを零す。

「他の妖精の時もそうでしたが、意外と子どもに好かれる性分なのかもしれませんね。心が無垢だからかしら?」

「はっ、オレが無垢とか片腹痛いわ」

真逆だ。決して有り得ないと一蹴する。

無垢だとか純粋だとか、そんなキレーなコトバとは最も無縁な男。それがオレなのだ。逆にこの女にこそ似合うだろう。より正確には、無自覚とか無防備とか天然とか。

「というかアイツ、地獄の妖精なんだろーが。むしろダークサイドじゃね?」

半ば冗談だったが言い得て妙かもしれない。動物連中と一緒になってキャーキャーやってるチビ娘を視界に収めて、地獄だ何だというのも想像し難い。かつて繁華街じゃ子どもなんざいなかった。だから余計に懐かれる理由が分からん。

ともあれ。小野塚小町とか死神やら、クラウンピースのようなヘルフェアリーやら。それらの存在は地獄と称される場所は確かに在るのだと示していた。そのうち天国からの使者も来るんじゃなかろうか。

「なぁオイ、結局地獄ってぇのはどぉなんだ? 面白ぇのか?」

「まさか。地上に住むことの許されない、ただの罪人が居る場所です。生者が無闇に近付いて良い場所ではありません」

「チョーヤバイところだぜ。焚き火よりも何倍も熱い火が燃え続けてたり、栗のイガイガよりも何倍も鋭い棘で覆われている処もあるし、闇だって深いし。あたいじゃなきゃチョベリバだね」

「それ英語じゃねーよ。つーかいつの時代の生まれだオノレは」

やけに淡々と切って捨てる華扇と、指折りつつ特徴を並べるクラウンピース。どちらの答えを聞いてもマトモじゃないのは明白。ま、そら地獄が快適だったらどうしようもないわな。

「やっぱりロクなトコじゃねぇってか」
「当然です。でも大丈夫ですよ。綿間部が地獄に堕ちないように私がしっかり導いてあげますからね」
「何一つ大丈夫ちゃうわ……」
やけに自信たっぷりに豪語する桃色の女に、半目になって気疲れの溜息が出る。最近やっと本来の夜勤形態に戻れたというのに、ここでまた炎天下に引き摺り出されるなんざ洒落にもならん。

あれから数日。真ん丸の満月が浮かぶ夜が訪れた。
「ブラザー、お散歩しようよ。人里の外とか行ってみたくない？」
「いいですね」
「……なしてお前らが当然みてぇなツラしてんのかは敢えて聞かんぞ」
待ち合わせていたワケでもない。にも関わらず、金色と桃色の女二人組がオレの到着を待ち侘びていた。仙人と妖精がフツーにオレの生活サイクルを把握していやがる。こうも筒抜けだと驚きを禁じ得ない……と言いたいところだが、ここ数日で慣れちまっていたりする。
何の因果か連日連夜でオレ、華扇、クラウンピースの三人メンツで行動してばかりいた。それこそ初めのうちは偶然の鉢合わせであった。それが何時の間にやら自然な流れでついてくるのだ。どっちもオレを見つけるや否や。
もはや周りからもこの組み合わせが「いつもの光景」として扱われちまっていた。人里でのあらあらうふふと生暖かい視線と微笑ましげな笑い声が痛痒い。すっかり仲良しこよしな絵面に映っているのか。いや、下手すりゃ男と女とガキ一人でまたあらぬ誤解を生んでいる可能性も。嗚呼、頭痛くなってきた。
こちらの気がかりなど知ったことかと華扇がオレを連れ出す。
「さ、行きましょう。綿間部」
「へーへー」
抵抗する気力も湧かず生返事で応じる。結局のところ、あーだこー

だと悩んでおきながらもオレ自身少なからず受け入れつつあった。
そいつが果たして喜ばしいことなのか、オレには知る術はない。
先を行く女二人を追うようにして、こちらも足を進める。やれやれ、今日も仕事になりそうもねぇわな。
「Ｆｏｏｏ！　ワンダホー!!」
人里区域の外側に飛び出すなり、クラウンピースが満天の星空を目がけて全力で叫んだ。ついでに両腕も大きく広げて感動を表している。相変わらず騒がしいやっちゃな。
七夕の時期は終わってしまったものの、負けず劣らず普く天体が一つ一つ輝きを放つ。宵闇の中に無数の光の粒が集まり、まるで夜空を占領しようとしているかの如し。
しばらく待てば、そのうち流れ星の一つでも降ってきそうなほど。
クラピは喜び平野駆け回る。オレはその辺で立ち尽くす。ちなみに華扇はこちら側であった。ニヒルな笑みでアメリカンなチビ助を見守る。
「フッ……いつにも増してはしゃいでやがるぜ」
「だってだって！　あんなにくっきりした満月も、こんなにいっぱいの星も地獄じゃ見れないんだもん！　パーフェクトッ！」
「地獄は其の名に違わず、とても深い地の底にありますからね。月や星の光が届かないのは仕方のないことです」
「ほーん……」
さりげない華扇の補足になるほどと頷く。要は南国生まれが雪でテンション上がるのに近いのか。だとしたら確かに珍しかろう。気持ちは分からんでもない。
ま、そいつはさて置き、
「前から思ってたんだが、お前も妙に地獄に詳しいよな。それも仙人ってぇのが関係すんのか？」
「えッ？　え、ええまぁ……旧地獄なら足を運んだこともありますし……でも、偶々ですよ？　特別地獄に縁があるわけではありませんから」
「そーいうもんか」

地獄に旧いも新しいもねぇだろと思わなくもないが、異世界だしその辺も何でもありなのだと己を納得させておく。ちゃっかり生きたまま地獄に行けて、あまつさえフツーに帰ってこれるんだとさ。それもう地獄としてどうなんだ。フリーパスで往復自由かよ。

さらに人里から少し離れたところまで歩みを進める。そこは以前、ミスティアの屋台と遭遇した辺り。だが生憎と今夜は居なかった。どこか別の場所で店を構えている模様。

「……」

夜風が涼しく心地良い。今やネオンライトの明かりを久しく見ていない。けれど、良くも悪くもそのおかげで埋め尽くさんばかりの星空を眺めることができている。不思議なものだ。よもやテメェが異世界に拉致されるなどと誰が予想できよう。

だからといって、妖精娘と女仙人と三人で仲良く夜の散歩中な現状はどうなのか。つくづく何やってんだろーな、オレ。

「ざまぁないよな……」

「綿間部？　急に立ち止まってどうしたのですか？」

ただでさえ遅れ気味だったオレが完全に足を止めたのに目敏く気付いて、桃色の髪をもつ彼女がわざわざ引き返してきた。隣に立って怪訝そうにこちらを覗き込まれた拍子に、赤みがかった瞳と視線が重なる。

整った顔立ちと無防備な仕草。美麗な女というのは時として男にとって性質が悪い。いや、分が悪い……か。こういうのに動じるタイプじゃなかったんだがな、今までは。

ゆっくりと目を逸らして、美人の顔から夜空へとシフトチェンジする。

「何でもねぇよ。ま、アレだ。満月を眺めていただけだ」

「あぁ……そういえばそうでしたね」

オレの言葉につられて彼女も同じ方向を見上げる。遠巻きにクラウンピースのハイテンション過ぎてもはや奇声に近い感嘆も耳に入ってくる。忙しなく走り回っているであろうことは、わざわざそちらを見ずとも分かった。いやうるせぇよ。

『……』

流れ星どころか月そのものが落ちてきそうだ。ここまで形も大きさも立派に象られている満月は、ひょっとしたら生まれて初めて目の当たりにするかもしれない。あまりにも見事な黄白色の真円。

傍らに並ぶ桃色の少女も同じ感想を抱いたらしい。オレにしか聞こえないような声量でポツリと呟いた。

「月が綺麗ですね……」

「……」

「綿間部？　どうして黙り込んでしまうの？」

「いや、お前……」

つい反射的に硬直してしまった。思春期じゃあるまいに。情けねぇぜ。

しかし仙人サマとあろうお方が文学知識を持ってないとは。あるいは幻想郷にその類が来ていないというセンもある。よって深い意味はなく、この女が無自覚で言葉通りの感想を伝えたに過ぎない。

だから、もう死んでもいいとか、そういう返しを思い浮かべた時点でオレはイカれてやがる。大体、オレみたいなヤツがロマンチックな思考してんのがそもそもの間違いなんだからよ。

「だぁチクショウ！　もうこの話しは終いだオラ！」

「ちょっと、いきなり何なんですか!?　ちゃんと分かるように説明して下さいッ！」

「あーあー！　聞こえねぇなー！」

「わ～た～ま～べ～……ッ!!」

半ばヤケクソになり声を大にして会話をぶった切った。が、それは悪手だ。案の定、華扇が不満そうなのを隠しもせず詰め寄ってきやがった。もともと真横な立ち位置でさらに距離を縮めればどうなるか。もはや言うまでもなし。

彼女の匂いが伝わってくる密着寸前にまで近付かれてしまう。仄かに甘い女にしか出せない香り。そいつが妙にオレを揺さぶる。だから近ぇよこの無防備が！

間近で漂うソレだとか、身体に触れる柔らかなナニカだとか。意識

したら負けな気がするアレコレが容赦なく襲いかかってくる。ついでに小言まで付いてきやがった。

「大体あなたは――」

お淑やかにしていれば、月明かりの平原で佇む桃色ミディアムヘアの美しい女仙人の姿はさぞ絵になったであろう。だが現実は非常である。現実から目を背けるように、オレは今一度だけ大きな満月に視線を逃がした。物理的にも心情的にも遠い目になっていたのはしゃーなし。

さながら物語の描写にありそうなフルムーンに、心の声が漏れた。

「……月の使いが迎えに来そうだな」

「うぅん、迎えに来たのはあっているかな。でも、月の僕になった覚えはないんだけどなー」

まさしく不意打ちであった。頭上から女の声が降ってきたのは。

茨木華扇でもなければクラウンピースでもない。それどころかオレの記憶にもない誰か。初めて聞く声音にハッとなってその姿を探す。犯人はすぐに見つかった。

「こんばんは。良い月よね」

若い女が一人、月星の夜空を背景にするようにして宙に浮いていた。

外見からいえば二十代かそこらだろうか。ちんまい小娘には到底出せない年上の余裕めいた雰囲気を醸し出している。肩にかかるセミロングの赤髪を下ろし、僅かに吊り目がかったところも魅せる端正な顔立ち。

大胆に肩まで露出させた黒い半袖Tシャツには「Ｗｅｌｃｏｍｅ Ｈｅｌｌ」のプリント付き。下はチェック模様&グラデーション色で太腿ギリギリな丈のミニスカが翻る。しかもソックスどころか靴も履いてないせいで生足が爪先まで露わになっている。

極めつけはアレを帽子といっても良いのか、女の頭に乗せられているのは赤い惑星らしき球体。黒い土台の上に件の球体が収まっている感じ。そいつが首元のチョーカーと鎖で繋がっており、そのうえ赤いヤツとは別に青と黄色の丸い物体が同じく揃っていた。アクセサ

リーにしてはデカ過ぎる。
　この瞬間、上白沢女史の四角い帽子の遥か上を行く個性的なファッションに出くわした。とりあえず、ああいうタイプのオシャレして高い位置に居られるとこちとら問題しかねぇワケで。
「ちょっと綿間部！　どこを凝視しているんですか!?　この助平!!」
「バっどこも見てねェわ！」
「嘘吐きなさい！　私の目には誤魔化せませんからね!?」
「いや嘘じゃねぇから」
「ふふ……♪」
　ほらこうなった。華扇が眉間にしわを寄せて怒号を飛ばしてきた。負けじと言い返すがまるで痴漢冤罪に遭った気分だ。ヒトをパンチラ狙いみたいに言うなや。例の女は笑っていやがるし。
　肩出し半袖、素足むき出しのミニスカ。上も下も露出の高い思春期男子には刺激が強いであろうコーディネートの美人が、いかにもおねーさん染みた笑みでこちらを見下ろす。
　そんな中、我先にと飛び出したのはオレでもなければ華扇でもなく（むしろ頬を膨らませてオレを睨んだまま）件の謎女でもなかった。この場に居るのはあと一人。そう、全身米国マークな地獄の妖精であった。
「ヘカーティア様！」
「あ？　知ってんのか？」
「んもー、この間言ったじゃん。あたいのマスターだよ！」
『えっ』
　クラウンピースの発言にオレだけでなく華扇も驚いたらしい。おかげで声が重なった。おかんむりな不機嫌面から一転して目を丸くしている。
　あのキャラ濃過ぎなバリバリ目立つファッションの赤髪セミロングな女が、地獄の女神サマだという。いやまぁ、服装だけなら繁華街にもいそうな感じではあるのだが。逆に違和感ないかもしれん。
　噂の女神がそっと地上に降り立つ。裸足だけど大丈夫なのか……と思ったがよく見ると地面に足が触れていなかった。気になるなら

靴くらい準備してこいよ。
　来訪者はクラウンピースを見やり表情を緩める。それから、オレや華扇の方へと顔を向けてくすりと微笑を零した。落ち着きにちょっぴり茶目っ気を混ぜたトーンの声が女の口から放たれる。
「私もご一緒して良いかしら？」

つづく

第三十二話　「どっちを選ぶの!?　～仙人サマｏｒ女神サマ～　前編」

「はぁい、クラッピー、元気そうでよかったわ」
「ヘカーティア様！　いつ来てたの!?」
「ついさっきよ」
　ご主人サマのところへちっこい臣下が駆け寄っていく。やっぱりワンコにしか見えねぇ。もし尻尾でもあろうものなら千切れんばかりに振り回していたハズだ。間違いない。断言しても良い。
　ご機嫌にピョンピョンと飛び跳ねている小型犬モドキと飼い主が再会を分かち合う。
「幻想郷での暮らしはどう？　楽しくやれてる？」
「チョー楽しいよ！　あたいが知らなかったものもたっくさん見れた！　んっとね、んっとね」
「フフ、お土産話は後でいっぱい聞かせてちょうだいね？」
　伝えたいことが山ほどあって上手くまとまらないアメリカン妖精は大はしゃぎ。そんな忠犬クラウンピースにニコニコと微笑みかけるイカした黒Ｔシャツの女。その情景は近所の小学生に懐かれた年上のお姉さんを彷彿とさせた。
　やがて、チビッ子妖精の肩に手を乗せつつ赤髪セミロングの女がオレ達の方へと向き直った。イチイチ行動が仲睦まじいせいで姉妹じゃねぇのかと疑わずにはいられない。
「あなたたちがクラッピーの面倒を見てくれたの？」
「コイツらが勝手についてきただけだ。オレは何もしとらん」
「コラ、綿間部！　口のきき方に気を付けなさい。ところで今『コイツら』って言いましたよね？　まさかとは思いますが、私を含めたのですか!?」
「細けぇこたぁイイだろ。そんぐらいで騒ぐんじゃねーって」
「あなたはまたそうやって……！」
「まぁまぁ、ケンカしないで」

仙人サマから注意を受けていたら例の女自身がやんわりと止めに入った。

全くもって大人びた余裕が見受けられる。大らかというより穏やかな性格の持ち主という印象を抱く。あれがホントに地獄のお偉いさんだってぇのか？　今のところ地獄要素つったらプリント文字しかない。

オレの疑惑を余所に、露出の高いコーディネートで装った女はほっと胸を撫で下ろす。どうでもいいことだが、仙人サマに負けず劣らずデカい。ちょうど英文字のあたりが押し上げられている。

「でも安心したわ、良い人たちに出会えたみたいで」

「だからオレは――……まぁいいけどよ。で、あんたがこのチビを送り出した親玉か？」

「正解。この子、性格が元気過ぎるから。なのにいつまでも地獄の中だけに閉じ込めておくのも勿体ないし、どうせなら色んな世界を知ってほしかったの。あわよくば、少しでもこの子の成長に繋がればいいかなーってね」

そんなことを言いながら、彼女はクラウンピースを自身の真ん前に立たせると、後ろから両腕を交差するかたちで回した。さながら我が子に加護を与える女神のようであった。いや、マジモンの女神だったわ。

ちなみに妖精も気持ちよさそうに目を細めておった。口の形がωな感じになるくらいに。何やこの和やか空間。オレみてぇなヤツは場違いな気もしてきた。

ここまでくると主と従者というよりも、ただの保護者にしか見えない。これが地獄の女神と地獄の妖精のツーショットとは恐れ入った。ついでにまたしても一つ、これまでの常識が覆った。

「改めて自己紹介するわね。私の名前はヘカーティア・ラピスラズリ。クラッピーから聞いてもかもだけど、地獄の女神やってます」

自己紹介に合わせて手を差し伸べられる。Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌのプリントｔシャツはともかく、本人についてはマトモな対応をしてきた。むしろ良識が過ぎるほど。名前はややこしくて覚え難い

のだが。ま、当分は女神サマとでも呼ぶとしよう。
　ひとまず女神サマの手を握り返しながらこちらも名乗り返すことにした。フッとニヒルな笑みで男の生き様を示すことも忘れない。なぜならオレは夜に生きる男。
「何でも屋だ。黒岩とでも呼んでくれ」
　初対面だらけの幻想郷において何度も交わしたやり取り。今更気負うものもない。地獄の神だろうが閻魔だろうが死神だろうが、オレにとっちゃどーだっていい。
　すると予想外の反応が返ってきた。何故かこのタイミングでヘカーティアとやらの表情が少しばかり意表を突かれたものに変わったのだ。
　吊り目がかった眼を僅かに見開き、赤髪セミロングの女が口を開く。
「私が女神と知ってもなお態度が変わらないのね。博麗の巫女やその仲間たちとも違う……見たところあなた、特別な能力も持たない普通の人間よね。何ともないの？」
「何ともねぇもクソもあるかよ。あんたが女神ってこたぁ既に聞いとるわ。それともアレか、頭が高いとでも言いてぇのか」
「あ、うぅん。そうじゃなくて、ちょっと驚いただけ。それに……男の人にこうやって自然に手を取ってもらえるの、初めてかも。思ってたよりも良いわね……フフッ、クセになっちゃいそう」
「そりゃどーも」
　可笑しそうな微笑を浮かべてオレと握手したまま、女はさらに指の力加減を僅かに変えて感触を確かめてくる。いや、いつまで握手してりゃいいんだよ。つーか手ぇ柔らかいなオイ。さすが女神サマってか――
「ンンンッ！　ゴホンゴホン！」
　やけにわざとらしい、いっそ刺々しい咳払いが割り込んできた。オレらの会話を強引にでも断ち切ろうと放たれたような。見れば、華扇が目つきを鋭くしてこちらをジロリと見据えていやがった。より正確にはオレだけに狙いを定めて。何でや。

ヤツの狙いはどうあれ結果として意味はあった。ヘカーティア・ラピスラズリがオレから手を放す。

次いで、先ほどと同じく今度は仙人サマに向けて握手を求めた。勿論マジメな彼女が拒むハズもなく、互いに名乗り合いながら女神と女仙人が手のひらを交える。

ところが、どういうワケかまたもや肩出しシャツの女が首を傾げた。具体的にいうと、茨木華扇が自らを仙人と告げた辺りに。

「あら、あなた……？」

「――ッ！」

女神のぼやきに華扇がピクッと肩を跳ねさせた。が、それも一瞬のこと。Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌなソイツはふっと息を吐いて首を横に振った。

「……いいえ、気のせいだったみたい。変なこと言って気を悪くしたらごめんなさい」

「いえ、こちらこそお気遣い感謝します」

女同士でしか通じないであろう会話。オレが入り込む余地もない。女性は勘が鋭いなどといわれている昨今だが、案外こういうところからも来るのかもしれん。で、オレは蚊帳の外ってか。

かろうじて読み取れるのは、ヘカーティアが何らかを察したうえで敢えて黙っているらしきこと。華扇の方もどこか意趣返しのような含みのある礼の言い方をしていたのが気にかかった。わざわざこっちから首を突っ込むつもりもないが、あとはお手上げだ。

「っかー、サッパリ分かんねぇ」

「女にはヒミツが付きものなのよ。例えばそう……密かに抱く片思いなんかも」

「はっ？」

女神のコトバに思わずというか素でビックリしちまった。よもや桃色の仙人サマが恋慕の真っ只中だったなんざ知る由もなし。しかも片思いとか言わなかったか。

これほど美人でスタイルも良い女が好意の矢印を向けてんのに振り向かない野郎がいんのかよ。とんだ贅沢者がいたもんだわな。は

たまた気付いてすらいないってぇのか。けっ、どんだけ鈍感な男なんだ。ラノベの主人公かよ。

どうしてか自分でも知らんが何となく複雑な心境に陥る。無意識のうちに彼女に視線を向けていた。目が合った拍子に、恋する仙人サマが顔を真っ赤にして慌てふためく。

「そっ、そんなわけないでしょう!?　違いますからッ!!　急に何を言い出すのですかまったく！」

「あ、ひょっとしてもう両想いだったかしら？」

「そういう意味じゃありません!!」

むきーっ！と一喝すると同時に頬を膨らませてそっぽを向く茨木華扇。オイどうすんだ、拗ねちまったぞ。とばっちりは全部オレに向けられんだから勘弁してくれ。

結局のところ、彼女の態度からはどっちが正解かまでは読み取れなかった。

何一つとして遮るものがない平原。

どこまでも見晴らしが良く、あらゆる方角から風が吹き抜けていく。夏とはいえ夜になれば涼しくもなる。さらに頭上には煌めく星々の群れ。演出としては悪くない。

もっとも、その下で囲うようにして座って駄弁っているオレらは、周りの目からはどんな集まりに映るやら。天体観測？　そのわりには、望遠鏡はおろか完全手ぶらで地べたに直座りときた。ま、深夜にコンビニの駐車場でたむろっている不良どもよりかはマシといえよう。

「でねでね！　この人があたいのブラザーになって――」

「フフフ、そうなの？」

とにかく話したいこと聞いてほしいこと盛り沢山でネタが尽きないクラウンピースが喋りっぱなし。その内容というか様子は、とてもじゃないが上層部へ近況報告している下っ端と呼ぶには程遠かった。ちんまい幼稚園児か小学生が今日の出来事を一生懸命に伝えようとしている、などと例えた方がしっくりくる。

しかも、保護者のおねーさんも適度に相槌を入れながら耳を傾けてんのも拍車をかけてやがる。子ども相手に聞き上手なこって。

そんな中、ヘカーティアとクラウンピースの会話を盗み聞き――いや、距離的に聞こえないハズもねぇけど。どうにも俄かに信じがたいものがあり、すぐ近くにいる華扇にコソコソと耳打ちする。

連中を横目に見ながら、

「なぁ……あの女、マジで地獄の女神なのかよ？」

かの地獄の者でしかも偉いヤツというからにはてっきり高飛車な女帝の如き悪女と思い描いていた。オホホとか高笑いが似合いそうな類い。だが現実はどうだ。此処にいるのは服装こそパンクだが至って常識的な大人の女である。何というかもっとこう、世紀末なテンションじゃねーのか？　小野塚小町だっていきなり大鎌で切りかかってきやがったぞ。終いには華扇に殴り飛ばされたしよ。

オレに合わせて華扇も声量を抑えて返す。

「間違いありません。彼女からはとてつもない力量を感じ取れます。守矢の二柱のような信仰による力とは異なりますが、妖力とは全く別物です。神力とでも言い換えられましょうか」

「ほーん……お前がそこまで言うならマジらしいな」

「私だってまさかこのような形で地獄を司る神と会い見えるとは思いませんでした。それに……」

「あ？　どうした」

「いえ、何でも……」

後半チラチラとオレを覗き見てきたが、理由は分からなかった。どうでもいいけど、身体ごとこっちに寄せる必要はないのではなかろうか。小声だけで十分だろーが。

そうこうやってるうちに、ふいに女神サマの関心がオレに向けられた。魅力的な吊り目が興味深そうにこちらを捉える。

「クラッピーにお兄ちゃんができるなんてね」

「だから違ぇって言っとるだろうが」

「でも、この子がこんなにも懐いているんですもの。それだけでも結構なことよ？」

「偶々趣味が合っただけだろ。何度も言うがオレは何もしてねぇかんな」

あちらさんは八割ぐらい冗談のつもりなのだろう。が、こっちからすりゃ笑えない。女子供を従えて練り歩いているのがいつもの光景化されてんのだ。オレのイメージ像が崩れかねない状況。ハードボイルドでダンディな夜に生きる男が台無しになっちまったらどうすんだオイ。

それと、丈の際どいミニスカで体育座りして正面に居られると目のやり場に困るから止めろと言いたい。この女もそうだが、華扇も赤蛮奇も揃いも揃って短すぎやしないか。しかも全員漏れなく素足ときた。ガード甘過ぎだろ。特にこの仙人サマは他にも全体的に無防備という始末。

露出の高い女神サマがおもむろに一つの提案を持ちかけてきた。

「あなたはそう言うけれど。クラッピーがお世話になった恩に変わりはないし、ちゃんとお礼がしたいかな。ね、何か叶えたい望みはない？」

富でも名声でも、女神の私が叶えましょう。赤い髪を肩まで伸ばした彼女は悠々と述べた。確かに、神の御力をもってすれば並大抵の願い事などカンタンだろうよ。両腕でも抱え切れないほどの札束も、誰もがひれ伏す圧倒的な権威も。望むがままに手に入る。まさに人生の勝者。

はっ、ガキ一匹に懐かれただけで随分と破格な待遇が巡ってきたものだ。わらしべ長者でもこうはいくまい。

チラリと視線を動かせば、華扇はオレに任すと言いたげに様子見に回っていた。むしろ「どうしますか？」と試している節さえある。いっそオレに代わって「旨いモンを腹いっぱい食いたい」とか言ってくれた方が手っ取り早かったのだが、それは無理そうだった。赤みがかった瞳がオレだけを捉えて離さない。

ま、コイツがどう思っていようがやることに変わりはない。フン、と鼻息を吐く。

「だからいらねぇっつの。そら依頼で引き受けたんなら報酬は貰うけ

どよ。だがコイツは違えだろ。このチビがテメエでやったことだ」
「あら」
いつまでも貧乏でいたいワケでもないし、底辺の泥を這いつくばる者で居続けるつもりもない。なれど、百パーセント他人様のおこぼれだけでのし上がってきて、はたしてオレ自身は満足できるのか。否。そいつは女神サマの力であってオレの力じゃない。
ハードボイルド。クールでニヒルなダンディズム。夜に生きる何でも屋。そんなオレに相応しいのは五分五分なギブ&テイクだ。依頼と報酬のビジネスライクなやり方に他ない。
「……フッ」
などと御託を並べてはみたものの、現実味がないというのも大きかったりする。ぶっちゃけ、貰えるモンは貰っといて損はなかろう。だとしても、今回のは度が過ぎた代物といえた。ガキんちょの子守りの礼など、せいぜい酒の一杯でも奢ってもらえれば釣り合う。あ、そう言ってやれば良かったのか。今更ながら失敗しちまった。だがもう遅い。言葉に出してしまった後だ。
ぶっきらぼうに突っぱねてやると、女は口元に手を当てて二度三度の瞬きをした後、視線をオレから仙人サマへ移した。
「彼、変わっているわね。無欲なの？　悟りでも開いちゃった？」
「いえ、無欲ではありません。いつも報酬がなければ仕事はしないと本人も言っていますから。ですが守銭奴というわけでもないのです。客の足元を見て大金をふっかける真似もしませんし、それどころか自分から安く提示することもあるくらいですよ」
「つまり、金次第って言うけれどそこまでお金に拘らない？」
「ふふっ、そうですね。もしくはどこか捻くれているのかもしれません。なのに妖精には好かれやすいみたいですし、変な人なんです」
「オイコラ、張本人がいんのにボロクソ言うなや」
すかさずオレが言葉を挟むが逆効果であった。仙人サマと女神サマが顔を見合わせて笑い出す。余計なことを口走るとさらに自分の首を絞める展開になりそうだ。「けっ」としかめっ面で身体ごと背けてやった。

それさえもお構いなしにヘカーティアが未だに笑いを抑えられない状態で話しかけてきた。そういう意味で声が震えている。何わろてんねん。

「ごめんごめん、それなら貸し一つってコトでもいい？」

「ったく、好きにしたらええだろーがよ」

ちゃっかり諦めていなかった律儀な女神サマに、もうどうでもよくなったオレはぶっきらぼうに言ってのけた。

よくよく考えれば、女神に貸しを作ったってぇのもとんでもねぇ話だなオイ。

つづく

第三十三話　「　どっちを選ぶの!?　～仙人サマｏｒ女神サマ～　後編　」

「ん～、それにしても……」
「どうしたのヘカーティア様？」
　まじまじとオレの顔を眺める主の行動に気付き、全身隈なくアメリカ仕様の妖精が疑問の声を上げる。
　どうやら当人も意識して呟いたワケではないらしい。「あぁ」とようやく自覚したかのような反応を見せた。
「ごめんなさい、ちょっと気になっちゃって。彼ったら全然動じないんだもの。ほら、私はこれでも女神だし、そこの彼女は仙人なんでしょう。ただの人間には気まずかったりしないのかなーって」
「いいや、まったくこれっぽっちもねーわな」
「まぁ……綿間部の場合は無礼なだけかもしれませんけど。言葉遣いも乱暴ですし」
「んだよ、やっぱり跪いとくか？　女神サマの天罰が下る前によ」
「うぅん、そのままでお願い。私が地獄の女神だと知っても変わらない態度で接されるの、男の人が相手なのは新鮮だから。私もその方が嬉しいかな」
　気さくなことを口にしながら地獄の女神がオレに眼差しを送る。微かな笑みを浮かべて。
　またエラく友好的な神がいたもんだ。そのうえ服装もイマドキという。下手すりゃ今までで一番馴染みやすい格好かもしれない。ドンキで似たようなコーディネート再現できそう。帽子のアクセは知らんけど。ま、地球儀かプラネタリウムセットで代用できなくもなかろう。
　傍らで、仙人サマがぷくぅっと頬を風船みたいにしてお小言をぶつけてきた。
「ですが、そろそろ綿間部は態度を改めるべきです」
「あ？　本人がイイつってんだからいーだろ。気にすんなや」

「そういう問題じゃありません！」
　雑っぽい態度であしらおうとしたが余計に不興を買ってしまった。クソマジメ系には見過ごせない事態らしい。とはいえ今更オレがどうこうするつもりもない。よって不可。
　そんなワケでいつも通り説教を聞き流す。すると、ますます唇を尖らせる桃色ミディアムヘアの女。だからイチイチ距離を詰めんなっつの。顔が近ぇだろうが。
　責める華扇と責められるオレを、さも愉快そうにヘカーティアが傍観に徹する。クラウンピースは欠伸してやがった。こちとら漫才やってるワケじゃねぇっつの。笑ってないで助け舟を寄越してほしい。
　ほどなくして、女神サマからも質問が飛んで来た。
「結局、あなたの名前はどっち？　自分で名乗ったのと彼女が呼んでいるので違うみたいだけど、私はどう呼ぶべき？」
「別にどーもこーもねぇだろうが。呼び方なんざ適当に決めろって」
「あ、だったらブラザーかな」
「それだけは止めろ」
「Ｂｏｏｏｏ！　いくらヘカーティア様でもダメ！　ブラザーって呼んでいいのはあたいだけだもん！」
「あらら」
　ちんまいガキんちょのちっぽけな我儘に困らされたみたいな苦笑いを浮かべ、でもどことなく楽しそうに頬に手を重ねる。あたかも我が子の微笑ましさを見守る母親の如し眼差しは、確かに女神らしくあった。この場面を絵画にすれば美術館にでも飾れるかもしれん。もっとも、コレで題名が「地獄の主従」ってんだからある意味世も末ってか。
　つい話しが逸れちまった。それで、オレの呼び方についてだったか。正直、ブラザー以外なら何だって構わない。そもそも悩むことでもあるまい。慣れ親しんだ呼び名で十分だ。
「黒岩でイイだろ」
「フルネームは？」

「多分ありませんよ。そちらが偽名ですから。本名は綿間部将也です」
「オイコラ、勝手にヒトのプライバシーをバラすなや」
「何を言いますか。名前など隠すことでもないでしょうに」
「だからってお前なぁ」
「へぇ、なるほど……」
オレに代わって華扇がベラベラと何もかも暴露しやがった。ったく、こういうのは本名を伏せるからこそカッコいいんだろうが。
ま、黒岩の通り名はオレが名乗り始めたものではなく、いつの間にか勝手に付けられていたモンなのだが。ともあれ、ただでさえ呼び間違えられる名字している身からすれば、こっちのが色々と都合が良いのは事実だった。いっそ本名よりも名乗った回数が多いまである。
しばし考え込む女神サマ。そして彼女が導き出した結論はよりにもよってコレであった。
「じゃあ、今から将也くんって呼んでもいい？」
「え〝――」
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」
オレのリアクションを掻き消して、素っ頓狂な大声ともども華扇が勢いつけて立ち上がった。もはや挙動不審な域でそわそわしてやがる。「何で!?　どうして!?」と疑問符が顔中に書かれている有り様であった。いやその反応が何でだよ。
とりあえず謎の奇行に走った仙人サマは一旦スルーして（どうしたらいいのか分からん）、オレは彼女の提案を受け入れることにした。別にクソみてぇな渾名を付けられたワケでもなし。些か意表を突かれちまったものの、よくよく考えずとも拒む理由は思い浮かばなかった。
テメエの好きにしろというニュアンスも込めて、ちょい悪な渋い笑みをキメる。
「フッ、いいんじゃねーのか」
「うん。よろしくね、将也くん♪」

「……おぉ」

ところが、いざ本当に呼ばれてみるととてつもなく違和感があるのだと身を以って知るハメとなる。下の名前で呼ばれたのなんざいつ以来だったか。あまりにも呼ばれ慣れていないせいで、不意打ちでやられると自分を指しているのかさえ分からなくなる。我ながらどうかと思うが。

しかも茶目っ気混じりのトーンでやられたから動揺しちまった。こりゃ勘違いするチョロい男子が続出しても可笑しくねーわ。おねーさんキャラの思わせぶりな態度ってぇのは、下手な色仕掛けよりもよっぽど心臓に悪い。

ふいにシャツの肩口をくいくいと引っ張られた。位置的に誰がやったかなど確かめるまでもない。案の定、犯人は薔薇付き中華衣装の仙人サマであった。いつの間にか座り直していた模様。

やけに緊張しているというか妙に強張った面持ちでオレを上目遣いで覗き込んでくる。赤みがかった瞳が僅かに潤んでいる。口ごもりながら、彼女は控えめに言葉を零した。

「あ、あの……し、しょう……」

「って、誰が師匠やねん」

「違いますッ!!　やっぱり何でもありません！　わたまべ!!」

「なんで強調すんだよ……」

「ふんっ」

数秒前までの殊勝な態度はどこへやら。鋭い眼光で思い切り睨みつけられた後にそっぽを向かれた。理不尽過ぎる。つーかよぉ、いきなり師匠呼ばわりされたら誰だって意味分かんねぇだろーが。

前触れなく緊張したり急に怒ったり、相変わらず感情表現が忙しい桃色仙人に為す術なし。今夜は特にテンションの温度差が激しい気さえする。それに振り回されるのがオレだけというのも割に合わない。どうしてこうなった。

なけなしの文句混じりに同席者を見やれば、ヘカーティアはやはりくすくすと笑いを堪えられておらず、クラウンピースもぽかんとしていた。やはり漫才の類いと勘違いしてないか、この女神サマは。

「そろそろ行こうかしら。クラッピーも一緒にね。帰ったらお話しの続き、聞かせてくれるかしら？」
「ラジャー！」
　米国アーミーをマネしたつもりなのか金髪フェアリーが敬礼で応じる。ただしラフ過ぎて敬意の欠片も無い。もはやコイツ地獄じゃなくてアメリカの妖精なのではあるいまいな。
　いつまでも野原のド真ん中で喋り込んでいるワケにもいかない。やがて頃合いを見計らってヘカーティアが腰を上げた。グラデーション色＆チェック柄のミニスカ越しに尻の辺りを手で払えば、それに合わせて短い裾がチラチラと際どく踊る。最後まで裸足のままであった。
　彼女を筆頭に残った面々もお開きムードで立ち上がる。なお、女神と妖精のコンビは地獄に戻るそうだ。そもそもヘカーティアの目的はクラウンピースのお迎えだったのだ。そらそうなるわな。
「しばらくしたら、またこの子を幻想郷に送るから。その時はお願いできる？」
「はい、構いませんよ。ね、綿間部」
「勝手に返事したうえで圧をかけんなよ。……ま、気が向いたら考えてやらんでもない」
「まったくもう、素直じゃないんだから」
「そんなもんだろ」
　少なくとも否定はしてない、ぐらいの返事で言葉を濁しておく。その返しのせいなのか、華扇が妙に生暖かい笑みを寄越してきた。そのうえ、「ありがと」と女神サマからも微笑まれた。あちらとしてはそれでも十分らしい。明らかにヤル気の感じられない態度だったにもかかわらず。ったく、どいつもこいつも調子狂わせやがって。
　地獄の女神と地獄の妖精が立ち去ろうと背中を向ける。されどその時、保護者の方が「あ、そうだ」と思いついたように振り返った。早々に足を止めてきただけに面食らってしまう。
　イカした黒Tシャツのおねーさんがオレと顔を合わせて言葉を紡

いだ。
「やっぱり貸しじゃなくて、私なりに考えたお礼で今すぐ返しても良い？」
「っかー、律儀な女神サマだこと」
「そりゃ女神ですから。そうでなくても恩には報いるものよ。それで、どうかな？」
「そこまで言うなら気が済むようにやりゃイイだろうよ。オレは止めねぇ」
「フフ、じゃあ――」
脈絡なくヘカーティアがオレの右側に回り込む。大人っぽいだの年上の余裕だのと表現したとて、そこはやはり女性。横に並ぶとオレより身長は低く、赤いセミロングヘアの頭頂部がちょうどこちらの肩と同じくらいの高さに届く。
一体何をするつもりなのかと怪訝に思っていると、次の瞬間、彼女は両腕を首の後ろに回してきて背伸びを取った。

ちゅっ

「……ハ？」
「んなぁっ!?」
さながら小鳥が啄むように、頬に微かに触れた小さく柔らかい唇。一秒にも満たない出来事なのに、その音だけはハッキリと耳に届いた。
向こうは既に身体を離しており、パチッと手馴れたウインクを投げてきた。
「正真正銘、本物の女神からの祝福のキスよ。ちなみにファーストキスだからね」
「ウソだろ、オイ……」
「な、なっ、なななぁあああああ!?」
予想の斜め上を突っ切るお礼の仕方だった。もはや唖然とするしかない。つーか何してくれてんだ。

呆気にとられて棒立ちするオレとは裏腹に、仙人サマがガクガクと体を震わせながらオレを指差す。つくづく今夜は一段と感情の落差が著しい。何が彼女をそこまで大きく揺さぶるのか。にしても過剰反応にも程があんだろ。ポルターガイストを目の当たりにしてもこうはならんわ。

挙句の果てにこれだけでは終わらなかった。まさかの模倣犯が現れやがったのである。

「ヘカーティア様だけズルい！　あたいもやる！」

「ちょおまっバカ――」

トチ狂ったことを抜かしやがった金髪フェアリーが主とは反対側のポジションまで突撃をかます。そのまま助走をつけたジャンプでオレに飛び付いた。

むちゅぅーっ！

先ほどとは違って押し付けるようでもあり若干吸ってる感触が左頬に伝わる。こっちは三秒くらいかけてから離れていった。

してやったりな得意げな顔をしたクラウンピースが勝利のVサインを決める。ピースだけにってか。って、何抜かしてんだオレは。怒涛の急展開に理解が追い付きそうもねぇ。誰か説明してくれ。

「本物の妖精からの祝福のキスだぜ！　もちろんファーストキスな！」

「お前ら主従揃ってどんな考え方してんだ……!?」

左右の頬に残る仄かな湿り気が生々しい。このご時世にお礼のキスだと。妙なところでグローバル化しやがってからに。特にクラウンピース、ズルいとかそういうレベルの中身じゃねぇわ。

「またね、将也くん。ちゃお」

「バァーイ！」

スマートなウインクに片手を軽やかに振る女神。イラストに描いたみてぇな動作ですら完璧にこなしていた。彼女の容姿や性格の為せる業であろう。違和感なさ過ぎて逆に驚きだわな。妖精の方は見

た目通りつき敢えて何も言うまい。
今度こそ地獄ペアが手を振り去っていく。連中がいなくなったあたりで、そういえば華扇がすっかり静かになっていたことに気付いた。ほんの数秒前まで悲鳴を上げて騒ぎ立てていたくせに、どうしちまったんだか。
そう思い、そちらへ顔を向けると、
「はぅ……」
目をグルグルと渦巻き状に回して腰を抜かし、その場にへたり込んだまま頭から湯気を出している桃色仙人の姿があった。
「オィイイイイ!?」
思わずオレまで大声出しちまった。ちょいと目ぇ離している隙にどうしてこんな風になってんだよ。今にも魂が抜けそうなレベルで気を失っているヤツの肩を掴んで揺する。
「ちょバカッこんな所で気絶すんじゃねーって！　ここをキャンプ地にする気かコラ！」
もし置き去りにしてオレだけ帰ろうものなら後日説教と折檻のオンパレードがオチなのは目に見えている。「何で勝手に帰ったんですかぁ!?」と喚かれること必至だ。というか、酔いつぶれたワケでもないのに介抱されられるとかどうなってんだ。
かといって、タクシーも通らないド田舎異世界じゃ送り届けることもできない。しかもコイツの家あんのは山奥ときた。せめて八雲紫がこの場にいたならば、あの奇怪な亜空間経由でどうにかなったであろう。だが無情、スマホも普及してないんじゃ呼び出せねぇ。コレ詰んだわ。
絶賛放心中の華扇はしばらく戻ってきそうもない。もしかしなくても、コイツが目を覚ますまでこのまま何もない野っ原で待ちぼうけ確定の瞬間であった。
オイコラ地獄の主従コンビ！　全然祝福の効果ないんですけどォオ!?

地獄へ戻る途中。

「ねーねー、ヘカーティア様」
「ん？　なぁに、クラッピー」
　クラウンピースが主であるヘカーティア・ラピスラズリを呼ぶ。何かと問えば、つい今しがたの出来事について聞きたがった。妖精らしい純粋な眼差しを受けて、地獄の女神も優しげに続きを促す。
「どうしてほっぺにしたの？　キスってマウストゥマウスじゃないの？」
　幼さゆえか恥ずかしげもなく直球で質問を投げる妖精。何ともはや、良くも悪くも怖いもの知らずである。
　さりとて、たとえおませな質問であっても大人のおねーさんは茶化したりしない。それどころか、よくぞ聞いてくれましたとばかりに笑みを深めた。ただし、どことなく面白そうな様相にも見えた。
「フフッ、それはねクラッピー」
「うん」
　真摯に耳を傾ける可愛い臣下に主は諭すように言い聞かせる。
　ぶっきらぼうな黒に連れ添うマジメなピンク色を思い浮かべて、地獄の女神は内緒のポーズに似せて唇に人差し指を当てながらイタズラっぽく片目を閉じた。
「その場所はもう、とっくに予約が決まっているところだったからよ」

つづく

第三十四話　「ユーレイコワイ」

「で？　オレを呼んだのはあんたか。上白沢女史」
「うむ、よく来てくれた。黒岩」
『何でも屋を見かけたら、彼に集会場まで来る旨を伝えてほしい』
　とかいう言伝が人里中に出回っていたらしい。今宵も仕事探しがてらうろついていたら複数の村人連中から呼び止められた。どいつもこいつも口を揃えて同じ内容を告げてきたのは記憶に新しい。意外と浸透していたのか。オレが何でも屋というのも。
　そいつぁさて置き、こちとらテントで仮住まいの身の上。特定の場所に店舗を構えているのでもなく、居所は常に不明というのがセオリーである。ド田舎異世界な幻想郷ではスマホも役立たず。そもそもこの地の輩はケータイなんぞ持っちゃいない。
　アナログ通り越して原始的でさえあるが、伝言というのは理に適ったやり方といえよう。唯一の欠点は、あっちこっちで転々と伝播していくせいで肝心の言い出しっぺが分からんことか。それ一番重要じゃねーのか。
「ま、行けばハッキリすんだろ」
　そのうち掲示板でも設置すべきなのかもしれん。当然、合言葉はＸＹＺ。殺し以外なら引き受ける何でも屋。そう、オレは夜に生きる男。
「ここか……」
　道に迷うこともなく指定された場所まで足を運ぶ。いかにも人々が集まる目的で作られたような和造建築が眼前に構える。実に分かりやすい目印だった。
　一階建てだが見劣りはしない。それどころか、その辺の民家と比べて大きさも広さも上回っているほど。一つのスペースに相応の人数を収容するレイアウトなのは言うまでもない。稗田邸には及ばないにしても、カタブツ染みた厳かな風貌をしていた。
「呼び鈴もなし、か……しゃーねぇ」
　ノックもせずに出入り口の引き戸に手をかけ、勢いよく全開にして

来訪を告げる。
　オレを待っていたのは、見知った顔の女教師。腰まで届く青い髪と青ベースの洋服に四角い帽子が平常運転であった。集会場と謳っておきながらテーブルすらないがらんどうの空間に、一人静かに腰を下ろす。彼女はオレを見ると相好を崩した。
　そして冒頭の会話に至る。以上。
「立ち話も疲れるだろう。さぁ、上がってくれ」
「おう」
　上白沢女史に促されて遠慮なく土足を脱ぎ捨てる。その後、適当な所に見当をつけてドスンと雑に胡坐をかいた。かろうじて座布団ぐらいはあったので勝手に使わせてもらう。
　その間にも、彼女は自ら持参したと思しき水筒から麦茶を注ぐと、すっとオレに差し出した。
「どうぞ」
「どーも」
　あまり冷たくない麦茶で喉を潤していく。温いというほどでもないし文句はない。水分補給ができるだけ十分だ。
「急に呼びつけてすまないな」
「気にすんな、仕事だろ。にしても寺子屋じゃねぇのは珍しい」
「フフ、私だって常に寺子屋にいるわけではない。住居だって別にあるよ」
「ほーん……てっきり寺子屋があんたの家だと思ったんだが。職員室が自室とかな」
「まさか」
　世間話に花が咲く。いきなり本題に入るのではなく、他愛のないトークで場を温めるくらいには互いに親睦を深めていた。オレだって誰彼問わずビジネスライクな冷血漢ではない。繁華街にもそれなりに近しい間柄もいたしよ。
　しょーもねぇ雑談で和んだ矢先に、人里の守護者サマが表情を引き締めた。どうやら本題に入るらしい。さて、お仕事の時間といこうか。

「わざわざ場所を此処にしたのも、できるだけ大事にしたくないからなんだ。君にある調査を依頼したい」
「調査だぁ？」
曰はく、ある日を境に夜な夜な人里の桜の下に現れる女がいる。
曰はく、里の若い男連中が、あたかも夢遊病の如くふらりふらりと彼女の元へ引き寄せられる。件の女に操られているのではないか、との説が囁かれている。
曰はく、女は男と逢瀬を交わし、男から恋文を受け取る。それが目的か。
曰はく、標的となった男らには操られいた間の記憶が一切なく、誰もが同じく「その日の夜は家でぐっすり寝ていた」と供述する。どうやら冗談抜きで覚えてないらしく、何らかの思惑あってその女を庇っている、といった素振りもない。
――そして、当事者がご覧の有様であるからして、噂の女が一体何処の誰なのか、その正体は誰にも知り得ない。
「なるほど、それは奇妙な話ですね」
「ってオイ、いつから居たんだお前はよ」
上白沢女史が事のあらましを話し終える頃には、いつの間にかこの場に居る人物が一人増えていた。
包帯の巻かれた右手を顎に添えて、マジメな顔して考え込んでいる仙人サマの姿あり。真顔でシリアス決めていやがった。相変わらず、オレの行く先々で出くわす女であった。
ちなみに人里の守護者サマも特に驚いてなかった。あるいは、途中から居たのに気付いてたか。
「ったく、どこからともなく出てきやがって。ミス八雲かよ」
「む、失礼な。私はあそこまで好き勝手ではありません。ちゃんと弁えています」
「どっちも似たようなモンだろーが」
「……へぇ、そうですか。どうやら綿間部とは一度きっちりお話しをしなければなりませんね」
無駄に圧のかかった無表情で華扇が詰め寄る。中華衣装の胸元に

咲くバラの花飾りがすぐ眼下にまで迫る。毎度のことだが近ぇっつの。

ヘカーティア・ラピズラズリの一件があって以来、この女のスキンシップというかボディタッチというか、とにかく無防備さが増した気がしないでもない。何の偶然か知らんけど。

「ま、まぁまぁ二人とも。えっと、話を戻しても良いだろうか」

「あっ、すみません」

見兼ねたのか守護者サマが申し訳なさげに間に入る。その雰囲気を察して、華扇もバツの悪そうな顔で頭を下げた。ざまぁと言う代わりにフッと鼻で笑ったら肘で小突かれた。だから痛ぇって。それ立派なエルボーだかんな。

地味に痛む脇腹を摩りつつ、オレは諦めたような溜息を吐いた。またコイツに振り回されそうな予感がする。

「要するに、その女について調べりゃイイんだろ？」

「その通り。黒岩には本人に接触し、素性を明らかにしてきてもらいたい。それが今回の依頼になる」

「調査すんのは構わねぇけどよ……そこまで気にすることか？　聞いてる限りじゃ、何人もの野郎共をとっかえひっかえしてラブレター貢がせてるだけのただのメンヘラ女じゃねーか。いやまぁ、それもそれでヤベーけどよ」

オレがそう問うと依頼人は小さく頭を振った。その表情は若干苦々しい。

「確かに今のところは、な。怪我を負ったとか直接的な被害は出ていない。それでも、操られている間の記憶が一切ないというのは、やはり穏やかじゃないだろう。いざ何かあってからでは遅い」

「そーか。人里の責任者ってぇのも大変だな」

「私からも一つ良いですか？　そもそも、当事者が忘れているのになぜそのような話が出回っているのでしょう？」

ごもっともな質問を華扇が投げる。言われてみりゃ確かにそうだ。頭良いな、お前。

されど感心したのも束の間。その答えは実に単純なものであった。

トリックもクソもなし。世の中そんなもんである。

「既に人里内で噂が流れているんだ。おかげで変にざわついてる節もチラホラと……もはや怪談の扱いさ。未だに実害がないというのも、危機感を薄れさせているのだろうな」

「はっ、どこも噂話がお好きなこって」

皮肉交じりに鼻で笑い飛ばすと、上白沢女史がさらに眉尻を下げた。おそらく、注意して回ってはみたもののイマイチ効果がなかったとか、そんなところであろう。

出会った瞬間に殺されるだの物騒ならまだしも、相手がメンヘラじゃどうしようもねぇわな。

しかし、どうやって記憶を奪っているのやら。薬物を盛ったか記憶飛ぶほどディープに魅了したかあるいは物理的な手段に出たか。おおよそ見当はつくが、確信には至らない。

「実物を見ないことには分からずじまいってか」

いずれにしても、上白沢女史の言い分もあながち的外れでもなかろう。何せ、このままラブレターを貰うだけで満足な清いお付き合いのマネゴトで終わる保証もないのだ。

男と女に因んだ問題。俗にいう痴情の縺れってぇのは時にドロドロした生々しさを併せ持つワケで。恐ろしいこって。昼ドラみたいな展開にならなきゃイイが。

「ま、噂の内容がそっくりそのまま正解とは限らんか。ひょっとしたら、狙った男を骨の髄までしゃぶり尽した後に置き捨てる淫乱ビッチなんつーオチも有り得る。それなら記憶がごっそり抜け落ちてんのも分からんでもねぇ。イロイロと搾り取られましたってか？」

「綿間部ッ!!」

オレのぼやきにすかさず華扇が怒鳴り声を上げた。怒りと周知に赤くなった顔には「破廉恥です！」「はしたない！」「このスケベ！」「馬鹿者！」等々ありとあらゆる非難のメッセージが浮き出ている。

これ見よがしに初心染みた反応していやがるが、コイツ自分が普段どんだけ無防備なところ晒してんのか分かってねーだろ。はしたないのはどっちだ。

「へーへー、すんませんねぇ」
「何ですかその態度は！」
桃色仙人の睨みつける攻撃を適当に受け流してやりすごす。上白沢女史も赤面こそしていなかったが、気まずそうにオレ等と目を合わせようとしなかった。

「つーかよぉ、わざわざオレが行かなくてもあんた一人でどうにかなるんじゃねーのか？」
人里の守護者ハクタクならメンヘラ女の一人や二人、現行犯で取り押さえるぐらいなんてことなかろう。
が、彼女はオレの意見に否を唱えた。
「かの者は男性を前にしたときにしか現れないらしい。私が待ち伏せしてもあまり意味を成さないんだ。変装で男のフリをすることも考えたけれど、それも見破られるかもしれない。そう考えると、やはり男性が出向くのが最も確かな手法だ」
「ま、だろうな」
「ですね」
オレと華扇が揃って頷く。だったら聞くんじゃねェよとは言わないでほしい。
ついでにチラリと人里の守護者サマと仙人サマを順繰りに見やる。中性的な顔立ちをしているならいざ知らず、どっからどうみても女それも見目麗しい美人ときた。
しかも両者ともにサラシを巻き付けたくらいでは到底誤魔化せないであろう、豊満に女性の象徴が出ている。平たくいえばグラマラスなスタイルの持ち主。男装なんざ端っから無理だわな。
どうにも先の質問もあってオレが渋っているようにでも映ったのかもしれない。依頼人は苦い表情のまま言い辛そうに明かす。
「他に当てがないこともないんだ。ただ……」
「ただ、何だってんだ？」
「いや……そのうち一人は何というか、女性に弱いところがあってな。下手をすればミイラ取りがミイラになる恐れも」

「ダメだろそれ。敵に塩送ってどーすんだよ」
「分かっている。もう一人ならばその点の心配はいらないのだが、生憎と『外』の世界から流れついた物や骨董品にしか興味がない。だから人里まで足を延ばすことも滅多になくて」
「ああ、あの男ですか」
「知ってんのか？」
「ええ。魔法の森で古物商を営む変わり者です。半分妖怪でもあるので人選としては悪くないのですが、彼女の言う通り協力を仰ぐのは難しいでしょう」
お手上げと言わんばかりに首を横に振る華扇。寺子屋の先生サマも苦労しているようだ。里の男どもはむしろカモにされている身なので戦力外だ。消去法からいっても使えそうな手札は決まったも同然。すなわち、オレを除いて他になし。
事情を喋っているうちに守護者サマの口調に熱が籠り始める。まさに力説といった具合に。どうにかしてオレに協力を取り付けたいのが十分過ぎるほどに伝わってくる。
別に断る腹積もりなんざこれっぽっちもないのだが。とりあえず、このまま聞いてみるか。
「黒岩なら霍青娥の色仕掛けも効かなかった実績もある。仕事柄、それなりに腕も立つと聞き及んでいる。そして、例の者が出没するのは決まって夜だ。どうだろう、彼に任せても構わないだろうか。華仙殿？」
「待てや、なしてオレじゃなくてこっちに聞くんだよ。おかしくねーか？」
「え？　それは、まぁ……」
面白半分で好きに喋らせていたら、最後らへんで妙な展開になってきて思わず待ったをかけた。そらそうだろ。本人差し置いて偶々この場にいた仙人サマに許可を求めるとか。
すると、さっきまでの苦々しい顔はどこへやら。「言わなくてもわかってるくせに」と言いたげな生暖かい視線に照らされる。ちっ、これ下手に言い返すと却って墓穴を掘るパターンだわ。ノーコメント

が正解だ。
　一方で、許可を求められた華扇はといえば、ほんの少しだけ考える素振りを見せた後、晴れ晴れしく頼りがいのある笑みを浮かべて大きく頷いた。
「構いません。困っている人がいるとあれば、手を貸さぬ理由などありませんから。確かにこの件、綿間部が適任でしょう。この人が簡単に魅了されてしまうような男性ではないことはよく知っています。……だから苦労してるんですけど」
「何でお前が苦労すんだよ」
「んなぁッ!?　きき、聞こえたのですか!?」
「この近さで聞こえねぇハズねーだろうが。難聴持ち鈍感系主人公じゃあるめぇしよ。やるならもっと小声でツイートしろや」
「わっ忘れなさぁあいッ!!」
「ちょバカお前――」
　飛び掛かってきた華扇に押し倒される。オレの腹に跨った桃色仙人の体重と尻の感触をモロに受ける。彼女は身動きとれぬオレに向けて両手を伸ばし――

～しばらくお待ちください～

「お、お見苦しい所を……」
「い、いや……大丈夫だよ。ハハハ……」
　乱れた着衣を整えながら桃色ミディアムヘアの女が肩を縮こまらせる。これには上白沢女史もぎこちなく乾いた笑みで応じるしかない。オレは床に大の字で寝ッ転がったままであった。頭がクソ痛ぇ。
　自爆した華扇に胸倉を掴まれて、忘れろ連呼しながら前後にガクガクを凄まじく揺さぶられ、その度に後頭部を床にしこたま打ち付けられた。畳じゃなくて木の床だったのも余計にダメージが効いた。瘤できたらどうすんだ。
「とにかく！　私も手伝います」
「それは助かる。もちろん私も立ち会うつもりだ」

「んだよ、お前らも来るのか」
　ようやく頭の痛みとふらつきが抜けたところでのっそりと起き上がり、愚痴っぽく呟いた。ついでに華扇に今しがたの理不尽について物申してやろうとしたら、ぷいっとそっぽを向かれた。オイコラ。
「私と華仙殿は物陰に隠れて様子を見る。そのくらいなら向こうも気付かない筈だ。もし不測の事態に陥ったしても助太刀できるし、黒岩にとっても悪いことではないと思うぞ」
「ま、保険があるに越したことはねぇか。それでええわ」
　無論、たとえ相手が女一人だとして油断するつもりはない。メンヘラなだけならまだマシだが、サイコパスだった暁には包丁の一本でも隠し持ってるかもしれん。その程度でオレがやられる状況にはなるまいが、念の為ってやつだ。
「作戦はこうだ。まず、黒岩があらかじめ準備しておいた偽の手紙を持って例の場所へ赴く。私と華仙殿は近くで待機。その後、張本人が現れたら――」
「手紙を細切れに破り捨てて『お前を殺す』とでも言えばイイのか」
「そんなわけあるか」
「そんなわけないでしょう馬鹿者」
　軽く冗談のつもりで口を挟んだのだが思いの外マジになって否定されちまった。ったく、泣けるぜ。あと馬鹿者は余計だろーが。
　作戦と呼ぶほど大袈裟なモノでもねぇ。早い話、噂のメンヘラ女がのこのこ姿を見せたら、どこのどいつか確かめるだけ。もし可能だったらその場で確保して上白沢女史に引き渡す。何ならオマケで仙人サマの説教でもつけてやれ。
　各々の役割を再確認したところで、女教師が「よし」と手を叩いた。
「決行は明日の晩にしよう。手紙は私が準備しておく。黒岩は……折角だ、できればそれらしく身なりを整えておいてくれ」
「遠回しにオレのファッションセンスをバカにしてねぇか？」
「違う違う。別に他意はないよ。念には念を入れておきたいだけだから。とはいえ、気に障ったのなら謝ろう」
「そこまで豆腐メンタルじゃねーよ。だから謝んな」

それに彼女が言わんとしていることも理解している。
あたかも女に魅了されて誘い出された哀れな男を演じる必要があるのだ。なのにいつもの感覚でオレが乗り込んで行ったらカチコミと大差なくなっちまうわな。メンドクセー注文がきやがったのに変わりはねぇけど、より確実な依頼達成のためだ。しゃーねぇ。
「その辺りは華仙殿に頼めますか？」
「お任せください。真っ直ぐで誠実な男性に仕立て上げてみせますね♪」
「オイ、分かってんだろうな？　あくまで恰好だけやぞ。ここにきてまた修行とか言い出すなよ」
「最短で良ければ一日でも修行できますけど？」
「頼むから止めろ。勘弁してくれ」
余計なマネをされないように、前もって釘を刺しておく。嬉しそうな声出しやがって、まさかまた滝に放り込むつもりだったとか言わねぇよな。
ひとまず、今夜のうちにでも酒場に行って他にネタがないか探りを入れておこう。何も目撃情報に拘る必要もない。ソイツがマトモかそうじゃないかの判別ができれば上出来だ。
女に手を上げるのは正直いって気が進まないが、会話の通じないキチガイだった場合、切り札を突きつけて脅すのもやむを得ない。いくらメンヘラでも拳銃かナイフを向けられたら降参すんだろ。
「改めて黒岩。今回の依頼、引き受けてくれるだろうか？」
「フッ、いいぜ。乗った」
調査の依頼は繁華街でもやってきた手前、そこそこ慣れている。よほどのヘマをしない限り、失敗はまずない。
さぁて、腕が鳴るとはまさにこのこと。何でも屋の本領発揮といこうか。
「報酬は出来高にしとくぞ。金額交渉も犯人をトッ捕まえてからだ」
「了解した。では、皆で協力して挑もう……
怨霊に」

……pardon?」

うっかりクラウンピースの口調が感染しちまった。

待て待て待て待てマジで待って欲しい。たった今、女史からとんでもねぇ単語が飛び出したきやがったんだが。オレの聞き間違いか？

呆気にとられて次の言葉が出てこないオレの横で、さして驚いた風もなく華扇が尋ねる。

「状況からいって妖怪の仕業なのは予想していましたが、確かなのですか？　怨霊というのは」

「恐らく、の域は出ないのが正直なところだ。とはいえ、現れるのも消えるのも脈絡なく、まるで煙のようだったという証言もあった。そのうえ、ただの幽霊の仕業にしては些か悪質な行いだと思わないか」

「なるほど。それもそうですね」

「……あと褒められたことではないのだけど、この一件にはもう『怨霊の恋文』なんて名前まで付けられている。大事にしたくないと言った手前情けないことだが、実のところ結構周知の事案でな……」

「そこまで知れ渡っているのに霊夢は一体何をやって――あぁ、女性の前では姿を見せないのでしたね」

女二人の会話が耳に入ってこない。より正確には、聞こえてはいるのだが素通りするだけで頭に入ってこないのだ。背中にじわりと滲み、纏わりつく冷や汗が不快極まりなかった。

落ち着け。まだコイツらにはバレていないハズだ。このまま上手くやり過ごせ。

「黒岩はどう思――って大丈夫か!?　凄い量の汗だぞ!?　というか毬みたいに縦に揺れてて怖いんだが!?」

「お、おぉおおお可笑しなコトを言うものだな、きゃみ、上白沢女史ぃ？　ふゅ……フッ、オレはいたっていつもどぅおぉりですがナニカ？」

「いやいやいや、微塵もそうは見えないぞ。顔色も真っ青じゃないか。もしかして具合が悪いのか？」

「気にすんな」
「しかし……」
「問題ねぇから。マジで」
「……そ、そうか」
ニヒルに笑ったつもりが口の端が引きつってヘンな感じになってしまう。そこも力技でゴリ押した。とにかく、具合が悪いだけと思われているなら不幸中の幸い。女教師の追求から逃れるように顔を背ける。
と、こちらを見ていた華扇とバッチリ目が合った。赤みがかった瞳が純粋な眼差しを送ってくる。
この時ばかりは咄嗟の返しができなかった。しかしながら、それが痛恨のミスとなった。この失態を、オレは数秒とかからずに後悔することになる。
「……」
はじめはただ視線が重なっただけだった。
「……？」
キョトンと小首を傾げて不思議そうにオレの顔を眺めていた彼女は、
「――っ！」
やがて何かに思い至ったかのように頭上の豆電球を光らせると、
「……へぇえええ？」
クッツソ意地悪そうなニヤけたツラでサムズアップをかましやがった。声のトーンも後半に行くにつれて高くなっていく。右上に曲がった矢印を再現したような、そんな上げ方であった。
そしてついに、ヤツは言ってはならないことを、ハッキリと言い放った。
「もしかしてぇ……綿間部ったらお化けが怖いの？」
「Ｂａｋｋａ　Ｏｈ　Ｙｅａｈ!!　ンゞンゞッ――ばっバカを言え！　そ、そんなワケねぇえーだろ！　そんなワケねぇえーだろぉおおお

!!」

口をへの字にして天井を見上げる勢いで踏ん反り返って荒い鼻息を飛ばす。ガッチリと両腕を組んで男らしさを見せつけるが、胡坐した膝がカタカタと震えているのは隠せなかった。

当然、そんなオイシイ部分をみすみす見逃す茨木華扇ではない。

「へぇ～～？　へぇ～～～⁇」

愉悦に塗れた声を漏らして、中華衣装の女がオレをニヤニヤと覗き込んでいるのが嫌でも伝わってしまう。コイツっ、今までにないぐらいに楽しそうにしてんぞ。きっと極上の笑顔を浮かべているに違いない。

やけっぱちになって麦茶を一気飲みしようとして、されど中身が入っていなかったことに気付く。やっちまった。もはやただのアホだろ。

空の容器に対して憎々しげに舌打ちするも、お構いなしにヤツからの追い打ちがかけられる。むしろ隙を見せてしまった。

オレの耳元で桃色ミディアムヘアの仙人が甘い声で囁いた。

「まさか綿間部にこんな弱点があったなんて、良い事を知ってしまいました……♪」

「だから違ぇと」

「うふふ。心配しなくても怨霊なら私の手で捕まえられますから、ちゃーんと守ってあげますね？」

「ぐぬぬ……ッ」

いつも取り乱されている（大抵自爆）仕返しのつもりなのか、意気揚々とからかってくる茨木華扇。包帯の巻かれた右手をグーパーと開いたり閉じたり。してやったりなドヤ顔が腹立つわ。

「にへへぇ～」

「ったく、何わろてんねんチクショウが」

あっけなくバレてしまったオレの隠し事の一つ。

白状しよう。オレは、幽霊の類いが大の苦手なのである。

目の前でじゃれ合っているとしか映らない男女。そんな彼らの様

子に人里の守護者、上白沢慧音はどこか不安そうに言葉を零した。
「本当に、大丈夫なのか……？」

つづく

第三十四・五話「独白　ｐａｒｔＡ」

一つ、過去話に付き合っていただこう。
あれは一年前、いや半年前だったか。まぁいい。どっちにしても、まだオレが繁華街にいた頃の出来事だ――

オレの名は黒岩。この街でフリーランスの便利屋、もとい何でも屋を営んでいる。
オレの元には数多の依頼が舞い込む。中身もしがねぇ雑用からキナ臭い厄介事まで幅広い。ま、そーゆー仕事柄なのだから当然っちゃあ当然なのだが。ただし人殺しと一部の仕事は引き受けない。オレは殺し屋ではなく、あくまで何でも屋だ。
無論、報酬の差も激しい。札束とまではいかずとも諭吉センセーが十枚近くと羽振りのイイ時もあれば、バーで一杯奢ってチャラにする日もある。依頼人が報酬額を提示することもあれば、オレの方で決めちまうこともある。後者の場合、ぼったくるようなマネはしない。
さながらギャンブルみたいな不安定な収入だと嗤うだろうか。蔑むだろうか。なれど、夜に煌びやかな繁華街であればこそ、そんな生き様が性に合う。
そう、なぜならオレは夜に生きる男……
ある日、いつにも増して胡散臭くて怪しげな依頼が一件、オレのところに流れてきおった。そして、この依頼こそがオレの生涯に記憶されるトンデモ騒ぎの始まりでもあった。
トゥルルルル……
「あ？」
着メロもクソもありゃしない飾りっ気のねぇ着信音が鳴る。初期設定からちっとも弄ってないスマホは今晩も律儀に働いてくれた。ポケット越しに伝わるバイブレーションも合わさって「早う出ろや」と急かしているようだ。
「へーへー、今出ますよっと」
ケースすら被せていない真っ裸のスマートホンを取り出し、画面に

表示された番号を一瞥した後、通話ボタンをタップする。
「おう、オレだ」
見慣れた番号であったため、ぶっきらぼうな口調で応じる。もっとも、見知らぬ番号でも同じ態度であっただろうことは、オレ自身がよく理解している。
電話の相手はたまに仕事の仲介をしてくれる男からだった。なお、職業は案内所の客引きである。どんな店に客を連れて行くかなどという野暮な質問はしないでくれ。
つーかコイツ、オレから依頼の仲介料を貰うのに味を占めてから、本業よりもこっちにのめり込んでいねーか。助手を雇った覚えはねぇっつの。とはいえ、持ちつ持たれつでやっていくのがこの夜の街だ。文句は言えない。
例にも漏れず、今回もオレに依頼したい人がいるとのこと。スピーカーに耳を当て、詳しい内容を促す。仕事の内容はこうだった。
某賃貸住宅の一部屋に一週間ほど寝泊まりしてほしい
フッと思わず鼻で笑っちまった。こうもあからさまに裏事情を匂わせる仕事は久し振りだ。が、珍しい話でもなし。
後になって情報屋（タバコ屋のトメさん）を通じて探りを入れてみた。案の定、胸糞悪い話しが明らかとなった。入居者だった不幸な女が当時付き合っていたらしきＤＶ男に金品取り上げられて心も体もボロボロにされた行く末に、最期は自ら首を吊って命を絶ったのだと。そのせいで、某賃貸住宅は俗にいう事故物件となっちまったとさ。
早い話、自殺した輩の幽霊が憑りついていないか身を以って実証してほしいといったところか。正直言って、馬鹿馬鹿しいと思わずにはいられなかった。今時、心霊番組だって大抵がヤラセであろうに。ユーチューバーだかどっかの芸人にでも任せればイイものを。
依頼主はその賃貸住宅のオーナーだという。どうにもチキンかつケチな性分らしく、開き直って放置できる肝っ玉もなければ、かといってガチなお祓いするには金が勿体ないとソロバン弾いて溜息吐いたりと、しょうもない悩みを抱えていた。

そんな折、オレの存在を聞き及んで喜んで飛び付いてきたそうだ。どうせまたこの男がテキトーにあることないこと吹き込んで取り入ったんだろうよ。お得意の客引きトークで。

「で、報酬は？　……ほーん、なるほどねぇ。そーきたか」

ぶっちゃけ高くもなければ安くもない。仕事内容からすれば少なくとも悪い取引ではないだろうと思わせる、ケチな商売人の鑑ともいうべきイヤらしさ。上手いところを狙った額に却って感心しちまった。

それくらいの相手の方がオレとしても丁度良い。上等だコノヤロウと口角が上がる。

「フッ、了解した。その依頼、オレが引き受けてやろうじゃねーの」

先方にもそう伝えるように告げてから通話を切る。

やれヤクザ紛いだやれチンピラだの不良グループだのと対峙するのに比べたら、肝試しごっこで金が入るのだ。こんなオイシイ話はそうそうなかろう。

どのみち何も出ないに決まっている。今や科学とテクノロジーが飛び交う情報社会ときた。ま、言い出したのは向こうなのだから、別にオレが詐欺を働いたんじゃない。ただ美味い儲け話に乗っかっただけだろ。

実のところ、この時から既に「マジで幽霊が出るらしい現場」としてネット界隈でもちょっとした噂になっていたらしいのだが。

所詮はガセネタを面白おかしく脚色しただけだろうと、当時のオレは気にも留めていなかった。

悲報。ワケあり物件とやらはとんでもねぇオンボロアパートであった。地縛霊よりも貧乏神が憑りついていそう。ゴミ屋敷でなかったのが救いってか。

こんな貧相な場所で細々と暮らしている女が有り金を奪われちまうとは、何とも不憫な人生なこって。惨たらしいことすんじゃねーか、そのＤＶ男。ま、他にも諸々の前科もあってあえなく逮捕されたみてぇだが（トメさん情報）

もともと家賃が安いだけあって、室内はさほど広くもなかった。フローリングの床板も年季が入っており、所々に踏むとギシ……と嫌な音が返ってくる。そういえば、上の階に住んでいた女が落っこちてくるエロい漫画があったわな。

「しかし暇だなオイ」

いわば部屋の安全を保証するための仕事でもあり、出来るだけ外出は控えなければならない。ところが、病人でもないのに一日中寝ッ転がっているというのは地味に辛かった。ましてや、何も起きるハズがねぇワケで。それがさらに退屈を助長させる。

気だるげに視線を一巡させる。さすがに事件当時そのままなんてヤベー展開もなく、しっかり特殊清掃も入っていた。なので見た限り違和感はない。ほんの僅かに臭わんでもない気もしないこともないのだが、この部屋が事故物件だという前情報がもたらした錯覚だと割り切った。幻聴ならぬ幻臭ってか。

ちなみに隣人も居ない。それどころか他の部屋全てが蛻の殻である。そのうえ郊外なのもあって内外共々に静か過ぎた。

「……けっ」

何もなさ過ぎて時間の進みがどうしようもなく遅く感じる。

そんな状況から動きがあったのは数日後。契約期間が折り返しを迎えた頃であった。

四日目に差し掛かった晩に、奴らはやってきた。

あえて照明も点けず、暗い部屋の窓から月を眺めていると、ふと外から物音が聞こえてきた。

「む……？」

これまでなかった事態の変化。こういう時のオレの反応は素早い。その正体を探るべく全神経を聴覚に集中させる。

まず、カンカンという金属音。安っぽいスチール板の階段を上っている音だと察しがついた。次いで、廊下を歩く複数の足音に移り変わる。恐らく数は二つ。どういうつもりか段々と近付いてくるようであった。さらによくよく耳を澄ませば、息を潜めたヒソヒソ声も混じっている。

現在全て空室となっているこのアパートに来客なんざ有り得ない。ならば、依頼人が様子見に来たのかとも考えが浮かんだが、そいつも即座に否定した。チキンな輩がわざわざこんな夜中に事故物件に顔を出すものかよ。

足音が止む。よりにもよってこの部屋の前で立ち止まった模様。その証拠に人の気配がしかと感じられる。

「この部屋ね……」

「間違いないわ。……ねぇ、蓮子。やっぱりやめない？　嫌な予感がするわ」

「怖気づいちゃダメよメリー！　世の不思議が今まさに目の前にあるのよ！」

「オカルトとホラーは少し違うんじゃないかしら……？」

「細かいことは言いっこなしよ」

扉の向こうで筒抜けな会話。こんなベニヤ板みたいな材質じゃ防音もあったもんじゃねぇわな。

いつでも動けるように玄関口でオレが待ち構えたのと、薄っぺらい板切れ越しに「よし、開けるわよ……」との合図が示されたのは大体同じであった。

キィ……と痛んだ金具が軋む耳障りな不協和音を奏でつつ、扉が少しずつ開かれる。ほどなくして、招かれざる客が控えめに顔を突っ込んだ。

「おじゃましま――ぇ？」

当然ながら、ヤツの目の前にはオレが立ち塞がっていた。恐らく中腰の姿勢だったのだろう。すぐ近くにあった黒服を纏った男の腹部に目が留まったソイツは、そろそろと顔を上げていき、ついにはオレともバッチリ目線が重なった。

『……』

オレと近い年齢と思われる若い女であった。少女と大人の女性の中間といった整った容姿と顔立ちから、恐らく大学生あたりと推測する。女子高生にしては全体的に大人っぽい。

短めの黒髪にあわせてイマドキ流行りのハットを被り、服装は襟付

きの白シャツにネクタイと黒いスカートとシンプルな組み合わせ。その後ろにはもう一人の姿もあった。ナチュラルな金髪で少しばかり意表を突かれたものの、繁華街でも外国人くらいフツーにいるのでそこまで驚きはしない。こちらは上下一体で紫色のゆったりしたデザインの洋服を着ていた。あと帽子もゆるふわ系だ（多分）

たっぷり十秒くらい時間をかけて、黒髪の方が顎が外れんばかりに大口を開いて叫んだ。

「ぎゃあーーーーーーッ!!」

とても年頃の乙女が出すべきではない濁音混じりの悲鳴が鼓膜を貫いた。

「オイうるせぇぞ」

「どっどうしようメリー!?　化け出た！　出てきちゃったんだけど!!」

「落ち着いて蓮子！　被害者は女性よ。男の人じゃないわ」

「でも現にそこに居るじゃない！　いやー！　こっち見てるぅ！　○されるぅうう!?」

芸人ばりのリアクションをかます黒髪の娘に、多少は動揺しつつも相棒を窘める金髪ガイジン。そんな光景を見せつけられていくうちに、逆にこっちが冷静になっていった。むしろ冷めたわ。何なん、コイツら。

ま、これだけ盛大にやらかして例のオバケってぇことはねーだろ。しかし三人寄らずとも二人の時点で十分姦しいこって。

「ったく、勘弁してくれ……」

いつまでも騒ぎ立てる女どもに、オレは溜息を禁じ得なかった。

招かれざる客の素性は思った通り女子大生の二人組であった。しかもオレと同い年に当たるらしい。

秘法倶楽部だか不思議発見クラブだか知らねェが、大学でオカルトサークルを二人だけで立ち上げて以来、世の中の摩訶不思議を求めてあっちこっち飛び回っているそうな（世界の裏側を暴くとか大層な物言いをしていたが）

このアパートもホントに幽霊が出るのだと大学でも密かな話題に

なっており、そこに目をつけて忍び込んできたと供述した。ま、立ち入り禁止にはなってねぇしお咎めはなかろう。不法侵入を除けば。

てっきり面白半分で首を突っ込んできたのかと思いきや、当人どもはえらく真剣に取り組んでいるようで。不謹慎なＤＱＮどもと一緒にするなと憤慨されちまったほどだ。

どーでもいいけど、こんな夜更けに人気のない郊外を若くて顔もイイ女がたった二人でトボトボ練り歩いてきたのかよ。そっちのが危機感に欠けてんじゃねーか。

あれから、オレが紛うことなき生きた人間であることに安堵して、ついでに自分らとタメであることが判明してからやけに馴れ馴れしくなった片割れ――黒髪の娘、宇佐見蓮子がちゃっかり部屋に上がり込んできやがった。必然的にもう一人の金髪ガイジン、マエリベリー・ハーン（宇佐見はメリーと呼んでいた）も付いてくる。

ひとまず互いに自己紹介やら事情やらを話し終える。と、宇佐見がやたら勢いよく立ち上がり言った。

「手を組みましょう！　私たち、目的が一緒みたいだし」

「何でやねん」

「もう、蓮子ってば……」

いきなり手を差し伸べられても反応し辛い。宇佐見よりかは常識人らしく、マエリベリーもオレと同じく呆れた態度を見せていた。

何が悲しくて乗り込んできた女子大生ズと組まなければならんのか。大体、そっちは幽霊を期待してたんだろーが。生憎こちとら何事もないのを証明せねばならん身の上だわ。どう考えても目指す方向が正反対じゃねぇか。

さっさと追い返そうと思い始めた矢先、おもむろに先ほどの態度とは打って変わってマエリベリーが少し思案し始める。恐らく、オレと組むメリットとデメリットを羅列しているのであろう。何となく嫌な予感がして「おい止せ」と言いかけたがもう遅い。

確かに一理ある、と金髪ガイジンまでもが意見を翻しやがった。多数決ならオレが圧倒的に不利な状況に陥る。

「でも、男の人がいてくれるのは心強いかもしれないわね」

「っかー、お前もかよマエリベリー」
「そりゃ目的は正反対かもしれないけれど、手段は一緒でしょう？ここに居座って確かめる他ない。違う？」
「そうよそうよ！　皆で張り込みすればいいじゃない！」
「お前らなぁ……」
その後もあーだこーだと言い合ったりしたものの、最終的には「住所がバレてんだから拒否っても来るわよ！」という半ば脅迫に近い宇佐見の一言により勝敗は決した。
まったく、女は強かとはよくいったものである。
宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンが仲間に加わった。ドラクエかよ。

後半へつづく

第三十四・五話「独白　ｐａｒｔＢ」

大学生っつーのは案外ヒマなんだろうか。

最終日たる七日目まで、秘封倶楽部は足繁く通ってきやがった。挙句には、ここに来る途中でコンビニに寄って酒とツマミまで買ってくる始末。どうしてこうなった。

「やっほ、クロ」

「だからその犬みてぇな呼び名どーにかなんねぇのかよ」

「え？　無理」

「ったく、即答か」

「今晩は。お邪魔するわね、黒岩君」

「……どーぞ、ご自由に」

帰れと突っぱねたとしても強引に押し入ってくるのは二日目で実証された。無駄な抵抗はせず、渋々といった具合に招き入れてやった。女子大生どもは遠慮なく和気藹々と上がり込む。

しかしながら、宇佐見みてぇな突撃タイプの相方をしているだけあって、マエリベリーも何気に肝が据わっている。あるいは単にどっかズレてんのか。いや、だからこそ息の合ったコンビなのかもしれん。

事故物件で女子大生それも日本人と外国人に挟まれて宅飲み。今更だが、つくづく意味が分からん状況だと自分でも思う。もっとも、そうなった理由は分かり切っている。心霊現象など何一つ起こらなかった。これに尽きる。

「じゃあ今日も一日お疲れ様でしたぁ！　カンパーイッ！」

「テンション高ぇーな」

「というより、これからが私たちにとって本番なんだけどね。一応は」

「何よー、いらないっていうの？」

「そうは言っとらんだろーが」

五分と経たずに絡み酒と化した黒髪の女子大生から缶チューハイを引っ手繰り、一気飲みする勢いで喉を鳴らす。金髪の女子大生は柿ピーをポリポリ齧っていた。良いところのお嬢さん染みた容貌に反

して、意外と庶民的な菓子が似合う。そのギャップがなかなか面白い。

何となく見入っていたからだろう。マエリベリーが訝しげにこちらに視線を向けた。

「えっと……どうかした？」

「何でもねぇよ。オレにもそっちくれや」

「ええ、どうぞ」

誤魔化しがてらちゃっかりツマミも貰っておく。ありきたりな味だが定番とも言い換えられる。安酒には妥当な組み合わせであろう。大体、こんな場所で高級酒を飲んだところで風情もへったくれもありゃしない。

「でさー、聞いてよクロ。キャンパス内で私とメリーに堂々とナンパしてくるチャラい男たちがいてさぁ。やんなっちゃうわ」

「そーかい。ま、見た目イイからなお前ら」

「お、褒めてる？」

「フッ、どーだろうな」

「えー……そこは肯定するところじゃないの？」

所詮、噂は噂の域を出るに至らず。『マジで幽霊が出る』なんてデマが流れるのもよくあるパターンでしかない。そもそも、オバケだ幽霊だなんて代物は妄想の産物に過ぎないのだ。幽霊の正体見たり枯れ尾花。心霊写真なんぞ影が人の顔っぽく映っただけの偶然をこじ付けただけ。

「そしたら蓮子ったら『私たちには一週間毎日会いに行っている男性がいるので無理です』なんて言い出すんだもの」

「もしかしなくてもオレのこと言ってんのか。つか、その言い方だとオレが二股かけてるみたいじゃねーか。しかも隠そうともしてねぇし」

「でも、発言内容に嘘は含まれていないでしょう？　実際こうして黒岩君のところに来ているもの」

「っかー、屁理屈コネやがって」

そう、この時までは思っていた。

最初に異変に気付けたのはマエリベリー・ハーンだった。
「ねぇ……二人とも……あれ、何……？」
「え？」
「あぁ？」
強張った表情と声音で金髪ガイジンが指を差す。指先を追いかけてオレと宇佐見が揃ってそちらを向く。記憶が正しければ、そこには狭苦しい玄関口しかない。
そのハズだった。つい先ほどまでは。
だが、今は違った。
人が居た。気味が悪いほどに全身に血色が感じられない、青白い肌をした女。いつの間に侵入してきたのか。扉を開けた音すら聞き逃させて、ソイツは気配もなく玄関口に佇んでいた。
まるでどこぞのホラー映画を彷彿とさせる。ノースリーブで白だけを用いた薄い格好。これで青空と草原が背景であればさぞ清涼なシチュエーションだったであろう。けれど、現状では違う意味で寒気を感じてしまいかねない。
女は沈黙を保ったまま俯いている。不自然に長い前髪がダラリと垂れ下がり、顔を覆い隠す。
またしても招かれざる客のお出まし。されど女子大生どもの反応を見る限り、コイツ等のダチが遅れてやってきたという展開は考え難い。
「念の為に聞いておくが……知り合いじゃねぇんだな？」
「う、ううん。知らない人」
焦った様相でブンブンと首を横に振りながら宇佐見が否定する。ひょっとしたら、あの女も噂の真実を確かめにきたクチなのかもしれない。いかにも陰キャくせぇしよ。
「オイ、あんた何者だ？」
問いかけるが無反応。返事はおろか顔を上げようとすらしない。軽く酔っているのも加わって、ちっとばかしイラッとした。あからさまな不法侵入の時点で十分アウトだってぇのに、こっちの質問にも答えないときやがった。この仕打ち、秘封倶楽部よりも性質が悪い。

シカトぶっこく謎の人物を睨みつける。今度はマエリベリーがなるべく穏やかなトーンで話しかける。
「あの、部屋を間違えていませんか？」
残念ながらそれはない。例の自殺事件があったどさくさで、ただでさえ数少なかった住人が軒並み立ち退いてしまった。もはやこのアパートには誰も住んでいない。そんなことは初日に確認済みだ。
同性からの問いかけにもヤツは微塵も反応を示さなかった。その不審さに黒髪と金髪も不安を覚え始める。
「ちょっと……何かヤバくない？　あの女の人」
ほろ酔いなど吹っ飛んでしまった宇佐見が声を潜めてヤツの異様さを訴える。同感だ、と軽く頷いた。どう考えてもマトモじゃねぇだろ。
まず顔色どころか露出した肌の色が上から下まで隈なく青白い。血色が悪過ぎるにも程がある。アル中とヤク中とニコチン依存のトリプルコンボをキメればああなるのだろうか。はたまた、夢遊病患者が施設を抜け出してこの部屋まで彷徨い込んできましたってか。どうあれ、あんなザマで健康体なんてこたぁなかろうよ。
しかしながら、答える気もない輩にいつまでも問答かましたって埒が明かない。
「……ったく、クソッタレめ」
悪態をつきながらも立ち上がり、一歩ずつ、侵入者の元へ足を進める。
「あ、クロ……」
「気を付けて」
背中にかけられた心配する声に「わかっとるわ」と雑っぽく返しつつ、オレは謎の女と対峙した。気色悪いぐらい生気が感じられない。
さて、サツと救急車のどっちを先に呼んだものか。
「このまま立ち去らねぇなら通報すんぞ。いいのか。嫌なら何か言いやがれ」
脅しをかけても相手は喋らない。ピクリともしない。初っ端からこちらの声など聞こえていないかの如く、只々そこに在る。

ブッ続けでガン無視するその態度が、いい加減に癪に障った。
「せめて顔ぐらい見せたらどーなんだ？　オイ」
普段ならば無闇に女には手を上げたりしない。だが、それも堅気であればこそ。よって今に躊躇う義理もなし。不審者確定な女の肩を掴もうと右手を伸ばす。
しかし、その手のひらは肩に触れることなく素通りした。
「……は？」
擦り抜けた？
理解できず目を疑った。いくら瞬きをしても眼前のソレは変わらない。
確かに女の肩に手を乗せたハズだった。間違えようがない。視界や手元が覚束なくなるほど酔ってもなければ、かといって避けられて空振ったワケでもない。なのにコレはどういうことだ。他人に触れた手応えなど、全くもって伝わってこない。
代わりに感じ取れるのは、冷蔵庫の奥に指を突っ込んだのにも似たヒンヤリとした冷たさ。
何より、
手首から指先に至るまで全てが、女の体内に尽く埋もれてしまっていた。

『――――――――……』

刹那、部屋中の空気が凍り付き、死に絶えた。オレも宇佐見もマエリベリーも喉に息を詰まらせた。ゾワゾワと鳥肌が立ってくる。嫌な予感がして堪らない。
ふいに。青白い女がゆらり、と身体を揺らした。やがて、恐怖を煽る不気味な緩慢さを伴って、それまでずっと俯かせていた顔を上げていく。長い前髪が開け、そのツラが露わになった。
感情はおろか生命すら喪い果てた白目を剥いて、オレら三人を射抜いた。
『ギャアアアアアアアアアアアアアア!?』

絶叫。刃物や拳銃を向けられるのとはワケが違うおぞましさが背筋を逆撫でした。

ホログラム、手の込んだイタズラ、性質の悪いドッキリ企画。ありとあらゆる可能性が片っ端から崩れ去っていく。アレがこの世ならざる存在なのだと、脳ミソが警鐘を鳴らした。理屈ではなく生存本能が次の行動を起こした。

オレは即座に身を反転すると、腰を抜かして座り込む（こんな時でもちゃっかり女の子座り）女子大生どもの脇腹にそれぞれ左右の腕を回して担ぎ上げた。

「きゃあ!?」

「あんっ！」

女とはいえ二十歳そこらの人間を片腕一本ずつで持ち上げられたのは、咄嗟に湧き出た火事場の馬鹿力に他ない。脇腹が敏感なのか金髪の方が変な声を上げやがったが気にかけてなんざいられない。

秘封倶楽部を道連れに窓辺へと全力で走る。夏場だったのが幸いした。窓は全開にしてある。網戸が邪魔だが、あの程度であれば障害にもなるまい。

「ちょお!?　ここッ、二階……!?」

宇佐見が喚くが知ったことか。繁華街の乱闘で仕込まれたミドルキックで網戸を蹴破った。ベリィッ！と容赦のない音を立ててブチ抜けば、その先に夜の世界が広がる。皮肉にも、今宵も良い夜空。

やがて宙に留まる一時の浮遊感が終わりを告げる。あっという間にかのアインシュタインが唱えた万有引力による落下感へと移り変わった。まさしく文字通りに転落していく。

「いやぁあああああああ!?」

「キャアアアアアア!?」

再三にわたって乙女達の悲鳴が迸る。コイツ等を離すまいと両腕を気張らせた。

数秒後、約十メートルの高さからアスファルトの地面を踏みつけた。三人分の重みを一身に受けた衝撃が痺れとなって靴裏から脳天にかけて立ち上る。クッソ痛ぇ。それでも着地成功。骨も折れてな

ければ二人も無事だ。
　となれば、残された策はただ一つのみ。
「逃げるんだよぉおおおおおおおおおおッ!!」
　オレは現役女子大生を右と左に一人ずつ脇に抱えたまま、人通りのない夜道を叫びながら走り抜けていった。振り返ったらオワリだと。立ち止まったらヤられると。決して足を止めることなく。

　あのあと「アレはヤバいマジでヤバい」という証言をいち早く伝えんと、依頼主に連絡を取った。
　オレの報告を受けたスピーカー越しの声がガタガタと震えており、あっちも顔面蒼白なのは想像に容易かった。念入りにお祓いするか、思い切って取り壊すか。後処理はオーナーの采配に任せるとしよう。
　生憎と調べるまでがオレの仕事。その先についてはオレが関わるところじゃねぇ。
　秘封倶楽部の二人とはそれから会うことはなかった。思えば現地集合の日々だったため、連絡先を交換する必要もなかった。どこの大学かも聞いてなかったし、オレも居所が不特定な何でも屋。再会する機会はまず訪れない。
　さすがに彼女等も今回の一件でサークル活動を自重するのだろうか。いや、あの二人、特に宇佐見のことだ。喉元過ぎちまえば熱さもすっかり忘れて、そのうちまたあちこち飛び回るに違いない。そんでマエリベリーも何だかんだで付き合う。そういう連中であった。
　さて、とんでもねぇ騒動になっちまったとはいえ、とりあえず依頼は完遂したワケで。ようやく普段通りの日々に戻れるかと思いきや、むしろここから先が本題だったりする。
　それから数日間、オレの身の回りに不幸なコトが相次いだ。しかも、どれもこれもが妙なタイミングの悪さによるものばかり。
　馴染みのバーに飲みに行こうとした時。外付けタラップを上る途中、足を乗せた一枚が外れて危うくオレまで落下しかけた。しかし不可解なことにブツの劣化は見受けられなかった。
　お洒落な高級ラウンジで飲んでいた最中、真上にあったシャンデリ

アの吊るし紐がプッツリ切れてオレの脳天目がけて降ってきた。紙一重の差で回避が間に合ったが、周りに飛び散った大量の破片が最悪のシナリオを物語っていた。こちらも劣化はおろか装飾を取り換えたばかりだと言われた。

キャバクラで飲んでいたら、偶々近くを通りがかったキャバ嬢のヒールが前触れなく折れた。あっさりバランスを崩して転ぶのになぜかオレも巻き込まれた。その拍子に彼女の胸や尻を思い切り掴んでしまう。

兎にも角にも、不慮の事故の大盤振る舞いが三日三晩も続くとあらば、いくらオレでも気が滅入る。野暮ったい目つきが日に日に悪くなるのは仕方のないことだった。

これもうアンラッキーデイを通り越してアンラッキーウィークなんじゃねぇか。

半ばヤケクソになって繁華街の占い師（インド人、占う度にブッ叩きつけていちいち三万円もする水晶をブッ壊さなければならない）の店へ愚痴りに行った。

ところが、よりにもよってそこで事の真相が明らかとなる。

占い師はオレに悪霊が憑りついているなどと抜かしやがった。悪ふざけも大概にしろと食って掛かるオレを制して、悪霊とやらの特徴を次から次へと羅列していく。一つ一つが告げられる毎に、数日前と同じ寒気を味わった。

なぜなら、あの時に出くわした得体のしれないナニカと何もかも一致したのだ。占い師が「悪霊の名はッ!!」とかやけに迫力込めて叫んでいたがちっとも耳に入ってこない。ぐにゃり、と視界が歪んだ。

アレはあの晩から既にオレに付きまとって、いや憑き纏っていた。恐らくは、現に今も狙い続けている。憑りつかれたオレには一切見えず感じ取れないかたちで。こちらには為す術もないというのに。

結論からいえば、オレが呪い殺されることはなかった。まさか占いのオプションサービスでお祓いやら除霊やらが可能とは思うまい。サービスとか言いつつそれなりの額で追加料金も取られちまったが、

ついでに諸々と聞くこともできた。

原因はいくつかあったらしい。アレに触れてしまったのもその一つに考えられるそうだ。他にも男に対する恨みつらみとか。だとすれば、あの女子大生どもには被害はなかろう。どちらにも該当しないのだから。

その後、冗談抜きで不可解なアクシデントの連続はピタリと止み、今度こそ事件は幕を下ろしたのであった。そして再びオレは夜に生きる男として、繁華街を颯爽と歩いていく。

ただ、あの時に右手に感じた気味の悪い冷たさだけが、未だに記憶から消えてくれない。

第三十五話　「吊り橋効果ってやつじゃんよ」

「……フッ」

よりにもよって最悪のタイミングでトラウマの発端を思い出した。走馬灯の前払いだったりすんのか。外面じゃニヒルに笑ってみせて、そのくせ内心は焦りが募って相当キテる。

嗚呼、なし崩しだったとはいえ引き受けやがった過去のテメェが恨めしい。

華扇に対する意地もあっただろってか？　……そこを指摘されたら返す言葉もねーわ。

例のヤンデレメンヘラ怨霊女が出没するとタレコミのあった、桜の木。いかにもデートの待ち合わせの体を装って、オレはその場に一人寂しく佇んでいた。

花は桜、君は美し。歌手が誰だったかド忘れしちまった。割と好きな曲だったというのに。

「ま、花見の時期はとっくに過ぎてんだけどよ」

この季節に桜が咲くハズもなく、葉桜っつーか葉しかねぇ。夜桜と洒落込むには一足遅かった。

桜の下には死体が埋まっている。と謳ったのは梶井基次郎だったか。柳の下のドジョウなんて諺もある。木の下に何らかの意味を持たせたがるのは人の性なのか。もっとも、ドジョウ一匹で済んだらどれだけマシだったことやら。

心地良かった夜風も、今宵に限っていえば肌寒くすらある。冷や汗が滲んでインナーが湿っている。余計に体温を奪われて身震いしてしまう。

「あーあ……ミニマムボトルの一本でも持ってくりゃよかった」

ウイスキー、ウォッカ、ブランデー……次から次へと蒸留酒のイメージ映像が揺蕩った。軽く酔っといた方が上手くいくんじゃないか、などとアホな考えまでもが脳裏を過る。現実逃避なのは重々承知しているとも。いっておくがアル中じゃねぇかんな。

懐に手を忍ばせる。伝わってくる感触は使い慣れた拳銃ではなく、

只の紙切れ。このために用意された上白沢女史直筆の偽ラブレターである。白単色で無地の便箋はエラく事務的で色気の欠片も感じさせない。ま、あの女教師らしいといえばらしいのだが。

「別に白紙でもバレねぇとは思うんだがな。律儀なこって」

独り言が多い。余裕のなさが浮き彫りになっている。んなこと初っ端から分かっていた。

余談だが、コレを受け取った時に「上白沢女史からラブレター貰っちまったぜ」と軽口を叩いたら、鬼の形相を浮かべた華扇にメチャクチャ説教された。何もあそこまでマジギレせんでも。マジメな仙人サマには相変わらず冗談が通じなくて困る。

「はたまた裏をかいて便箋の中に博麗神社の除霊札を仕込ませる奇襲策っつーのもあったワケだが……」

生憎こちとらズブのド素人。何でも屋というでも除霊なんざ専門外だ。やった試しがない。あの時だって繁華街の占い師に助けられたのだ。

もし不発に終わって返り討ちにでもあったら目も当てられない。よって、オレはあくまで釣りエサもとい囮に徹する。それだけでイイ。

「ふー……」

幻想郷に来てから数週間。妖怪にも出会った。妖精にも出会った。神サマにも出会った。これだけ人外と出くわしてもなお、幽霊への耐性は身に付きそうもない。

深く根付いたトラウマがオレの心臓を締め上げる。訂正。やっぱり酒よりも胃薬が欲しくなってきた。

「……彼は大丈夫なのか？」

「恐らく大丈夫でしょう。あれでもやる時はやる人ですから。それに、万が一に備えてこうして私たちも見てますもの。準備は万全です」

「だといいが……」

黒い青年が無造作に突っ立っている桜の木から十数メートルほど

離れた物陰にて。上白沢慧音と茨木華扇がひっそりと動向を見守っていた。

彼女らの眼差しの先にはもちろん我らが何でも屋。桃色の少女が付きっきりで指導した甲斐もあり、衣服の着こなしもピシッと整えられている。まさに意中の女性と逢瀬を交わすために気合を入れましたと言わんばかり。

ただしその顔は真っ青であり、目つきの悪さに拍車がかかっていた。さらには視線を忙しなく虚空に彷徨わせる。邪仙が従えるキョンシー並みの生ける屍。多分、三月精あたりが見たらあまりのホラーっぷりに腰抜かす。

これには人里の守護者も疑念を抱かずにはいられない。実際問題、不審者まっしぐらな酷い有り様であった。

「うぅむ……もしかして人選を誤ったか？」

「そうは言っても、ここまで来たらもうアレで押し通すしかないでしょう。まぁ、借金の取立人に呼び出されたみたいになってますけど」

「……華仙殿はよかったのですか？　その、今更なのですが。芝居とはいえ黒岩が他の女性と逢い引きする光景なんて快くないでしょう」

「そそっそんなことはありませんよ!?　ええ、どうして私があの人のゴニョゴニョ……」

「あはは……」

最後あたりで口ごもった仙人少女の目が泳ぐ。どうにも煮え切らない返答であったが、寺子屋の教師は乾いた愛想笑いで応じた。分かりやすい、などと言えるハズもなく。

その後もいくつか言葉を交わしながら、時が訪れるのをひたすら待ち続けた。犯人がおびき出される、その時を。

決して油断ならぬ状況。にもかかわらず、慧音がふと隣を見れば華扇の口元が僅かに緩んでいるではないか。

「華仙殿？　どうかされましたか？」

「あぁ、いえ……何でもありません。お気になさらず」

「そうですか……？」

この場にそぐわない表情を見兼ねて尋ねても、彼女は緩やかに首を横に振って言葉を濁す。

茨華仙が熱心に見つめるのはただ一点。言うまでもなく、現在過剰なまでに周りを警戒する全身真っ黒ファッションの外来人。一挙手一投足がおっかなびっくりで滑稽に思えて、桃色の髪をもつ少女はくすりと控えめに笑みを零した。

(まさかあんな古典的な弱点を持っていたなんてね)

いつもいつもぶっきらぼうで口調も粗雑で。ぞんざいな態度にいなされては自分ばっかり空回りさせられて。時にはやきもきさせられることだってあった。そんな彼がお化けにビクついている。鴉天狗の言葉を借りるならば、一大スクープだった。

(もう、怖いなら怖いって素直に言えばいいのに……)

カッコつけて強がるんだから。でも、今までにない反応がちょっと面白いかも。もう少し見ていたい。そう、もう少しだけ。折角ですもの。

その心境は、気になる異性の意外な一面を知れた気持ちと何ら違わない。けれど、かの仙人がそこに気付く様子もない。だって彼を見続けることで頭が一杯なのだから。

しかしその状況は間もなく転換する。

「あっ」

「来たか」

桜の幹に背を向けている何でも屋の真後ろに、ぼんやりと浮かび上がるようにして若い女が忽然と現れた。

死に装束を思わせる白い浴衣。波打つ髪は長く、身体つきは細く女性的であった。顔は、ここからではよく見えない。だが、確かに良くないものを感じる。一方で、些細な違和感も覚えた。

(単なる怨霊ではない?)

「華仙殿」

「いえ、まだもう少し待ちましょう。綿間部が仕掛けるまで」

脈絡なく姿を見せた怨霊は、ほっそりした指を口元に当ててくすくすと囁くように笑う。その声が耳に届いたのだろう。彼――綿間部

の挙動不審だった動きがピタリと止んだ。あたかも吸血鬼が住まう館にいる従者が時間を停止させたように。

ギ、ギ、ギ、とコマ送りにも似た機械的な動作で青年が背後を振り返る。手を伸ばせば届く距離にいるのは噂の怨霊。目と目が合った瞬間、女が口の端をニィ……と歪に吊り上げて、嗤った。

同時に男の理性がプッツンした。

「■■■■■■■■ーーーーッ!!」

十二の試練を身に宿す英霊の咆哮が真夜中の人里に響き渡る。決してお茶の間にお流しできないキタナイ言葉を口走ったワケではないのであしからず。

こんな状況であっても黒い青年は己の役割をどうにか覚えていたらしい。すかさず手にしていた偽恋文を女に差し向ける。よし行け、と二人の女性が固唾を飲んだ。いよいよ手紙を受け渡して相手の尊顔を拝めるかと思いきや、まさかの事態が発生する。

彼女たちの視点でご覧いただこう。

ビリィイィィイイイイッ!!

「ぶっ!?」

「何やってるの綿間部!?」

何とあの男、怨霊の眼前で思いっきり縦二つに引き裂きやがった。その凄まじさたるや、ヒイロがリリーナからの招待状を千切ったスタイリッシュさとは程遠く、アクシズ教の入信書を豪快に破り捨てたクズマさんの行動であった。さすがにこれには人里の守護者も山の仙人も動揺しまくり。怨霊も固まった。

彼女宛ての恋文を本人の目の前で真っ二つにするという偉業を成し遂げた男はそのまま反転すると、

「■■■■■■■■■ーーーーッ!!」

またもや野太い絶叫を上げながら一目散に逃走した。これでも幽霊なんか怖かねぇと言えたらある意味大物である。

「綿間部ッ!」

こちらに向かって走ってくる男性にあわせて、今度こそ華扇と慧音も物陰から飛び出す。多少?異なる筋書きとなったものの、犯人と思しき者をおびき出せたことに変わりはない。あとは選手交代。仙人の手にかかれば怨霊であろうと捕えることができる。

余裕どころか人としての理性すら失っている彼との距離がどんどん縮まる。安心して、と目で訴えても効果はない。そりゃそうだ。バーサーカーやってますから。せめて一秒でも早く終わらせてあげようと拳を握りしめる。

ところが、ついに青年と擦れ違う間際、またしても思いも寄らない展開に転がった。そう、誰もが予想しなかった方向に。

「きゃっ!?」

あろうことかあの男は少女の肩を掴んで強引に抱き寄せたかと思うと、その勢いのままに自らの腕の中に収めたのである。一瞬何が起こったか分からなかった華扇だったが、すぐさま状況を理解して大いに狼狽えた。

「えええ!?　わ、わたまべ!?」

あわあわと呼びかけるが聞こえている様子はない。瞬く間に赤面してもがいても、力強く抱かれて思うように動けない。

肩に重ねられた武骨な手は硬く、男らしくて逞しかった。以前、目の前で着替え始められて上半身を見てしまったときの光景が生々しく思い描かれる。程良く引き締まった男の裸体を。

「ぁ……」

唇の間から吐息のようなか細い声が漏れた。次第に華扇の肢体から力が抜けていく。されるがままに身を委ねてしまう。

僅かに汗ばんだ臭いも決して良い香りとはいえないけれど、紛れもなく彼の匂い。そう思うと不快感はない。それどころか、心地良くすらあった。

すん、と鼻から息を吸い込んで匂いを嗅ぐ。そうすると、まるで酔ったかのように身体が火照ってくる。

「……んっ」

青年の胸元に耳を当てる。バクバクと激しく心臓が鼓動を繰り返

しているのがハッキリ聞こえてくる。日々の中で鍛えられた雄々しい筋肉も、体の温もりも、肌を通じて確かめられる。

それが尚更、少女にイケナイ気持ちを唆す。

「わたまべ……」

「かせ、ん……？」

彼の身体と彼の匂いが桃色仙人の全身に伝っていく。華扇の思考が甘く痺れ始める。こんなにも近くにこの人を、綿間部将也を感じられる。端麗な顔が熱を帯び、まるで共鳴するかのように心臓も高鳴る。

やがて肩と背中に回された腕に一段と力が加わり、さらに強く拘束されてしまう。甘い痺れがますます広がり、彼女の理性さえも溶かしていく。

（あぁ……もういっそのこと、このまま……）

蕩けた表情を浮かべて顔を上げる茨華仙。頬を艶めかしく上気させて、途方もない色香を放つ彼女は夢心地に囚われる。赤みがかった瞳に映るのは、いつも頭の片隅を占めていた男性の顔。憎からず想う人……

ついには自らも彼を抱きしめようと、大きな背中に両腕を回し――

「ごほん……あー、取り込み中のところ申し訳ない。こちらは片付いたのだが……」

「……へ？」

突如割って入った遠慮がちな声を受けて、ぼやけていた意識が現実へ帰ってくる。俄かに朦朧とした状態のままそちらを見やれば、苦笑いを通り越して気まずそうな上白沢慧音。と、彼女にぐったりと脱力して寄りかかっている小柄な女の子。少女には見覚えがあった。

普段は左右二つに結った髪型を下ろしている違いはあれど。人里の貸本屋「鈴奈庵」の一人娘。名前は確か、

「本居、小鈴……」

吹けば消えてしまいそうなぐらい微かにだが、先ほどの怨霊と同じ類の妖力を感じ取った。けれど、彼女は妖怪でもなんでもない普通の人の子だ。そこから導き出される結論は限られてくる。違和感の原

因も。確かに、単なる怨霊ではなかったようだ。
「どうやら噂となった怨霊の正体はこの子だったらしい。いつの間にか憑りつかれていたのか」
「きゅう……」
「まったく、大方また妖魔本に悪戯に手を出したんだろう。反省してもらわないとな」
当の少女はクルクルと目を渦巻いて気を失っている。ついでに頭に大きなタンコブを作っていた。寺子屋の教師がキツイのを一撃喰らわしたのは明らかである。
「え、と……ハッ!?」
ここにきてようやく華扇の理性が正常さを取り戻した。そしてそれは、つい先ほど自分がとんでもない痴態を晒したのを思い出すことにも繋がった。
というか、今もまだ彼の腕に抱かれている真っ只中である。
とうとう居た堪れなくなった女教師が視線を逸らした。その反応を目の当たりにして、彼女の赤みがかった瞳が大きく開かれる。直後、桃色の仙人の顔からボッと火が出た。
恥ずかしさやら焦りやらとにかく諸々がゴチャ混ぜになった激情は到底抑えられるハズなどなく。ということで、全部この男にぶつけられた。
「てっ、天誅ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!!」
「ぶぶはばげらぁッ!?」
後に上白沢慧音はこう語る。それはそれは見事な一本背負いだった、と。

翌日。
人里の怨霊騒動は片付いた。いや、正確にいえば知らぬ間に片付けられていた。それはイイ。いや、良くねぇけど。それより、
「あ〝あ〝ぁー……」
クッソ背中が痛い。まるで背負い投げで地面に叩き付けられたみたいだ。

情けねぇことに途中から昨夜の記憶がおぼろげだった。認めたくないが、恐怖のあまり気絶してしまったのだろう。上白沢女史に確かめても苦笑いではぐらかされるのが何よりの証拠だ。泣けるぜ。

「散々な結果だぜチクショーめ……」

ぶっちゃけ今回の働きをみりゃ報酬ゼロでも文句は言えない。だというのに、微々たる額とはいえ囮役を担った分の報酬まで貰っちまう始末。それがますます情けをかけられているようで地味に凹む。優しさが痛いってか。が、突っ返すのも憚られる。

ちなみに事の顛末も上白沢女史から聞かされた。

噂のヤンデレメンヘラ幽霊女の正体は、人里にある貸本屋の一人娘だったそうで。そこの嬢ちゃんがうっかり怨霊に憑りつかれてしまったのが諸悪の根源。どうにも妖魔本とかいういわくつきの本を集めるのに熱中するフシがあり、此度の原因もまさしくソレ。正気に戻った本人の自白と、店をガサ入れしたところ、案の定、霊が封印された昔の恋文が出てきたらしい。

しかも焼却処分しようとしたところ件の娘が「貴重な資料なんですーッ!!」と泣き喚いて止めに入ったのだとか。問題児かよ。結局、上白沢女史も博麗の巫女も念入りに供養することに留めたんだと。ジタバタする駄々っ子を前にして彼女らが頭痛を堪える様相が目に浮かぶ。

そんなこんなで噂話の一件は無事とは言い難いがとりあえず解決した。ところが、そうは問屋が卸さない。

まさかの問題は別のところにあった。それがコレである。

「よう、華扇」

「……何ですか」

「いや何ですかってお前……」

なぜか華扇が不機嫌そうな態度でオレに接してくる件について。どういうワケか、偶然見かけて声をかけてもジト目で返される。あからさまに様子がおかしい。タイミングから鑑みるに、昨晩のうちに何かしらあったのだろう。が、その先が思い至らない。大体、こちとら気絶してたんだっつーの。

だから何もないハズ、なのだが……
「なぁ、マジで昨日何があったんだ?」
「知りません」
「ならこっち見ろって、オイ」
「つーん」
理由を尋ねても取りつく島もなかった。おかげで謎が深まるばかりで解けやしない。二進も三進もいかず、溜息が出る。
ゲンナリする俺を華扇はチラリと横目で見て、すぐさまプイッとそっぽを向いた。これ見よがしに風船みたく頬っぺたを膨らませて。だから何でやねん。
いつもの説教かましてくるような怒っている感じとも違う。けれど、時折感じる眼差しがチクチクと痛いので非難されているのは疑う余地もなし。かといって、こうして会っているから避けられているワケでもなく。あー、ダメだわ。さっぱり分からん。お手上げするしかない。
極めつけは彼女が言い放った、この一言にあった。
「……いやらしい」
一体何したんだよ、オレ。

つづく

第三十六話　「クンカクンカ」

貸本屋の娘っ子がメンヘラ怨霊に憑りつかれた事件から幾夜が過ぎ去った。

辛い戦いであった。失われた犠牲は大きかった。何せオレが苦手とするモンがよりにもよってあの女にバレちまった。痛いっつーかイタいわ。

もっとも、意外にもその心配は杞憂で終わったのだが。

てっきり最高の笑顔でおちょくられるのだとばかり思っていたというのに、いざ蓋を開けてみれば何もなかったときたもんだ。拍子抜けしたというか身構えて損したというか。いや、何もなくもなかったか。謎の不機嫌期間があったわ。

最後まで原因不明なのは釈然としねぇけど、下手に刺激して思い出し怒りされるよりかはマシであろう。触らぬ仙人サマに祟りなしってか。

つまるところ問題は全て時間が解決した。んなワケで茨木華扇との関係はいつも通り――

「起きてください。もう朝ですよ」

――そう、相も変わらずいつも通りに収まった。他人様の寝床に勝手に忍び込んで、あまつさえご丁寧に叩き起こしてくれるところまで含めて、まったくもっていつも通りでしかない。

瞼を開かずとも誰だか分かっちまう聞き慣れた声に意識を揺すられる。うららかな微睡から引き摺り出されていく。ついでに腹に掛けていたタオルケットも奪われた。ってオイ、腹が冷えるだろーが。

「ぐぉ……？」

「やっと起きましたね」

眠気も抜けず、かろうじて薄目を開ける。そんな微かな視線さえも見逃さずに微笑みかける若い女と目が合った。柔らかな桃色のミディアムヘアと白いシニョンが目を惹く。かつてオレが居た繁華街でもそうそう見かけないレベルの美しい顔立ち。

女はさっきまでオレの腹にあったハズのタオルケットを胸元に抱

いていた。「渡しませんからね」っつー意思表示のつもりであろうか。ガッチリと強めに抱え込んでいる。

そのせいで、有り得ないぐらい豊満な二つの膨らみがますます強調されて目のやり場に困った。寝起きの男の前でその無防備さは余計に性質が悪い。もはや何も言うまい。

はぁ、と欠伸と溜め息が入り混じる。

「んだよ……まだ朝じゃねーかよ……」

オレがそう悪態をつくと、仙人サマはむっと眉間にしわを寄せて顔を近づけた。その拍子に女らしい仄かな甘い香りがした。凛とした声音がオレのすぐ目と鼻の先から発せられる。イロイロと近ぇよ。

「まだではなく、もうです。私が起こしに来ないとすぐにこうやって怠けるんですから」

「ったく、朝から説教は止めーや。つーか毎朝モーニングコールかますとかお前はオレの嫁か」

「よっ!?　よよよよよ嫁ぇえぇッ!?」

「だーもう！　いちいち大声出すな」

寝惚けながらの軽口ごときにメチャクチャ動揺しやがって。天下の仙人サマともあろう御方が、タオルケットを抱えたまま赤面してあわあわしておった。

お小言したかと思えば顔を真っ赤にしてテンパったり。こんな感じで表情豊かで見ていて飽きない。それが彼女、茨木華扇だ。

耳元で騒がれては二度寝もしんどい。だらしなく上半身を起き上がらせて盛大な欠伸をかます。夜に生きる男が女ひとりに振り回されるとは、カッコつかねぇぜ。

「あー……ねむ」

オレとこの女を取り巻く異世界ライフはまだまだ始まったばかりに過ぎない。忙しない日々は今日も続く。

なんつーモノローグごっこをしても今朝のイベントは終わらんのだが。

「もうッ！　いいから早く起きなさい！」

「いや起きとるやんけ。とりあえずタオルケット返せよ」
「屁理屈言わない！　身支度を整えて初めて起床したと言えるのです！」
「わぁーったっつの……お前こそ朝イチで騒ぐなって。まーた上白沢女史から苦情くんだろうが。なぜかオレまで目ェ付けられてるしよ。どうしてこうなった」
「あら？　それもこれも全て誰のせいだと思っているのですか？」
ニッコリとカンペキ過ぎる笑顔を貼り付けてオレに迫る。見惚れてもおかしくない綺麗な笑み。ただし、それも見た目だけならのハナシ。そのウラに潜む棘の鋭さは生半可な怒りの比じゃない。
二度寝で色々とハプニングがあった記憶もあり、渋々といった態度で起き上がる。あちらはオレが降参すると気を良くしたようで、ようやく離れてくれた。
「～～～♪」
リズミカルに鼻歌を口ずさみながらタオルケットを畳んでいく華扇を眺めて、ふと思う。こういうのも悪くないもんだな、と。夜雀の女将に負けず劣らず歌声も澄んでいて心地良かった。
「……まさか、な」
「どうかしましたか？」
「いや、どうもしねぇよ」
夜を生きるハードボイルドな男のくせして、ナニ青臭い感想を抱いてんだか。オレはそーゆーキャラじゃねぇだろうが。
嗚呼、やはり朝は調子が狂う。

そして今日も炎天下をデスマーチさせられる。何でや。
っかー、クソ暑いんですけど。大体こちとら夜型の人間なんですけど。散歩なんて生易しいモンじゃねぇんですけど。
「なぁオイ、知ってるか？　砂漠に住んでるヤツらは暑苦しい昼間に寝て、夕方から働き始めんだってよ」
「そうですか。此処は砂漠ではないので安心して規則正しい生活ができますね？」

「ぐあッ墓穴掘ったか……ッ!?」
「ふふっ♪」
ジリジリと日に焼けていく。そのうち身体から煤煙が出そうだ。
上から下までブラックなコーディネートはあらゆる熱を吸収する。せめてもの抵抗にノーネクタイにしてシャツのボタンを二つ外しておいた。が、こんなもんじゃ効果は薄い。死ぬ。溶ける。灰になる。吸血鬼じゃなくてもキツイだろ……
強烈な日差しが延々と照りつける。思わず目を細めた先を、華扇の後ろ姿が歩く。緑色のミニスカがチラチラと踊って翻る。生足魅惑のマーメイドよろしく素肌がふくらはぎまで見えそう。まるで日焼けしておらず色白に保たれている。オレを引っ張り出せてご機嫌なのか足取りが軽い。
日没まであと何時間だろうか。このまま燃え尽きてしまうのではないかと本気で不安になる。
「――べ……綿間部！　聞いてるんですか？」
「何か言ったか」
「さては聞いてなかったんですね!?」
余所見と上の空でうっかり会話を聞き逃してしまったらしい。いつの間にか華扇が振り返っていて、無気力な返事をしたオレに対して不満げな顔を見せた。頬をいっぱいに膨らませて腰に手を当てる。
今にも説教を始めそうな雰囲気を放っていやがった。
「へーへー、すまんこって。で、どーした」
「ですから、綿間部も朝日とともに起床し一日を始めることで心身ともに健全な生涯を」
「つかー、どっちみち説教じゃねぇか……」
逃れられぬカルマにまたもやヤル気が削がれていく。こんなんばっかかよチクショウ。
その後も他愛のないお小言に雑っぽく頷いては拗ねられたり。ヤマなしオチなし世間話をしながら歩いていく。完全にオフの日な過ごし方だった。
「いい天気ですね」

「そーだな」

歩幅を揃えて並び立つ桃色仙人の横顔を盗み見る。お散歩日和に出掛けられたのがとても幸せなことのように、それはそれは楽しそうであった。

オレみてぇなヤツと一緒に歩いて何がそんなに楽しいのか。それは彼女にしか分かるまい。

って、休みだったら寝てても良かったんじゃねーのか……？

「あ、丁度良いところに」

「お？」

「あら？」

偶然にも酒場の前を通りがかった時、馴染みの顔に呼び止められた。クセのない赤髪ショートに青いリボンを結び、真夏の気温のなんのそのでマントを纏って首回りを隠す。看板娘のろくろ首のファッションは今日もよく目立った。

赤蛮奇に話しかけられ、オレたちは足を止めた。彼女の周りには取り巻きよろしくガキんちょが三人ほど引っ付いていた。三月精ではない。どこにでもいそうな人間の子どもだった。ま、人里だしな。

「どうかされましたか？」

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど、いい？」

「フッ、悪ぃが営業時間外――いや冗談だっつの。だから睨むな」

「綿間部が意地悪なことを言うからです。本気だったらお説教でしたからね」

「さいですか……で、何や」

半ば本気だったとは口が裂けても言えそうもない。

とりあえず話しだけでも聞いてやることにした。オレが聞き返すと、赤蛮奇はすっと頭上を指差した。釈迦のマネゴトじゃないのは誰でも分かる。この流れで天上天下唯我独尊とか言い出したら脈絡なさすぎだろ。熱中症の疑いまである。

「そこの木の枝にあるものが見える？　この子たちが遊んでいた毬が引っ掛かっちゃったんだって」

「あぁ、確かにありますね」
「キャプテン翼かよ。どんなシュートしたんだ」
揃いも揃って同じところに注目する。Y字型に枝分かれした付け根のところに色彩鮮やかな球が挟まっているのが見て取れた。スッポリ収まっている感じが逆に狙ったとしか思えない。
あまりに安定し過ぎていて、多少の風が吹いて枝葉が揺れたぐらいじゃビクともしない様子であった。
「取ってこれない？」
「いや、取ってこいって……」
何気に高い位置に引っ掛かっていやがるのだ。赤蛮奇はもちろんオレが背伸びして手を伸ばしたって届かない。その辺の棒切れを使ったとしても似たような結果であろう。
この糞ジャップ共が三月精だったら自分らで取りに行けたんだろーな。と、そこまで考えてふと思いついた。
「お前も飛べるんじゃなかったか？　わざわざオレに頼まなくても行けんだろ」
「……この格好であそこまで行けって言うの？　何、どさくさに紛れて覗く気？」
「お、おぉ……そらそうか。スマン」
さりげなくミニスカの裾を両手で押さえながら冷たい視線を突き刺された。理由は言うまでもない。
さらに別の方向からも敵視の気配を感じ取る。ヤベェと思って振り返れば、ろくろ首と同じくジト目をした仙人サマがいた。むしろこっちのが酷かった。
「……スケベ」
「待て、別に期待して言ったワケじゃねーから。事故だ、事故」
「フン、どうだか。綿間部はいやらしい人ですからね」
「だから違ぇって言っとるだろ。ちったぁオレの話しを聞け」
「ふーんだ。知りません」
ツンとした態度でそっぽを向かれる。お前の中でオレのイメージ像はどうなってんだ。

オレと華扇の口喧嘩を糞ジャップ共は鼻垂れなマヌケ面で傍観していた。見世物じゃねーぞコラ。つーかリアルで鼻垂らすなバッチイだろうが。

それからもどんどん不利になっていく。どうやらオレの周囲に味方はいないらしい。泣けるぜ。

「ちっ、わぁーったよ。やりゃイイんだろ、やりゃ。特別サービスだ。今回に限りタダでやってやるわ」

「そうこなくちゃ」

「当然です」

「オメーらなぁ……」

クールな口調で囃し立てる赤蛮奇と、腕を組んでしたり顔で頷く華扇。どいつもこいつも好き勝手言いやがって。

女二人を同時に敵に回してしまったのが運の尽き。おかげで逃げるも断るもできぬ状況に追い込まれた。オレが首を縦に振らざるを得ないのは明白であった。

どうあれ、ここからじゃ手が届かないとなれば、あの場所まで直接取りに行くしかあるまい。

都会に生きるオレに木登りなんざできるのかって？　舐めんじゃねぇ。答えはイエスに決まってる。電柱とかカーブミラーを何度もよじ登ってきたわ。ヤベェ連中から逃げたり隠れたりするために。

襟付きシャツを脱ぎ捨て、インナーのみになる。先に薄着になっておくのが賢い。今以上に汗をかくことになりそうだ。

「オイ、華扇。これ持っとけ」

「ふわっ!?」

脱いだシャツを華扇に向けて放り投げる。不意打ちに面食らいながらもギリギリ落とさず受け取った。ナイスキャッチにフッとニヒルな笑みで応じる。

さて、と首をコキリと鳴らしつつ木の幹に手足をかける。始めは渋ったが実のところ余裕であった。

難なくボールの元まで上り詰め、下にいるガキんちょ共に落としてやった。待ち望んだ遊び道具が戻ってきて、ガキ共がわっと歓声を上

げる。
「ありがとー」と口々にお礼を言いながら駆け出して行く。赤髪の女が「もう引っかけたらダメだから」と声を投げた。一件落着。タダ働きはこれぐらいにしておきたい。
あとはオレも下りるだけ。この程度の高さであればわざわざ木を伝っていく必要もない。過去に二階アパートの窓辺から飛び立ったことがある。あの時に比べれば造作もなし。
「よっと」
今なお衰えぬ身のこなしで着地を決める。スタイリッシュに降り立ったオレの雄姿を目の当たりにして、赤蛮奇は二度三度の瞬きをした。
「お見事」
「フッ、どんなもんよ」
口ではそう言いながらもドヤ顔が止められない。称賛を浴びて悪い気などするハズもなかった。
ところで、もう一人からのリアクションが来ないのはどういうワケか。気になって視線を巡らせればすぐに見つかった。いや、逃げも隠れもしてないのだから見つけて当たり前なのだが。そもそも問題はそこじゃない。
どうにも様子がおかしかった。というか、茨木華扇が奇行に走っていた。
「んん……はふぅ……」
彼女はさっきオレが預けたシャツに鼻先を埋めてスンスンとニオイを嗅いでいた。
「ぁっ……んぅ……」
微熱に浮かされたように頬を上気させて、赤みがかった瞳が妙に色っぽく蕩ける。汗臭いだけだろうに、お構いなしに華扇は悩ましげな甘い声を漏らしながら息を吸う。
段々と瞳がトロンとし始める。何やら危なげな雰囲気が漂った。悪臭に耐える修行でも始めやがったのか。それ以前に何やってんだお前はよ。

「わたまべ……」
　魅入られたように謎の行動を繰り返す彼女に、オレは――
「そんなにクセェなら嗅ぐなよ」
「ひゃわぁぁあああああああああッ!!」
　いやうるせぇよ。
　はたしてオレが悪いのか。逆にこっちが引くぐらいにド派手に飛び上がられた。耳をつんざくほどの悲鳴を叫び響かせ、隅から隅まで真っ赤にさせた顔面を隠そうと黒シャツをオレ目がけてブン投げる。案の定、勢いよく飛んできたシャツを頭から被った。
　視界が遮られる中、絶賛テンパり中の華扇が上擦ったり裏返った声で捲し立てるのが聞こえる。ついでにシャツからは仄かに仙人サマの匂いが残っている、ような気がした。
「こっ、コレは違いますから！　そう！　ちゃんとお洗濯しているか確認していたんですッ!!　この季節は特に汗をかきますからね!?ね!?」
「だからってニオイ嗅ぐ必要も――」
「そ、それよりもッ！　終わったなら終わったってちゃんと言ってください！　ビックリしちゃったじゃないですか!?」
「声かけた結果がこれだよ気付けよ。というか人のセリフを途中で終わらすな」

　両腕をブンブンと振り回して弁明する桃色の仙人少女。一方、テルテル坊主モドキの格好で棒立ちする外来人。
　そんな面白おかしい一幕を、赤蛮奇は呆れた様相で見届ける。あんなの、傍から見れば誰もが痴話喧嘩と捉えるだろう。ましてや、桃色の乙女が分かりやすく赤面しているのだ。そう思うなという方が難しい。
　放っておこう、と結論付けた。こういうのは犬も食わぬと相場が決まっているのだから。
「ホント、何やってんだか」
　目の前の珍百景から背けるように、赤蛮奇は夏色の空を仰ぎ見る。

人里は今日も平和であった。

つづく

第三十七話　「動き出すかもしれない物語」

「――ってなコトがあったんだがよ、オレはどうすべきだったと思う？」

「爆発すればいいんじゃないかな」

霧の湖。

妖怪の山の麓に広がる水源は、山峰から渓流となりて下った天然の水を蓄える。辺り一帯を霧が立ち込めており、とりわけ霧が濃いときには視界の確保すら覚束なくなる。名前通りなのはもはや恒例行事だ。

ただし、その現象は日中に限られた。日が落ちて月が輝く時間帯となれば、薄白のカーテンは一斉に引いていく。さながら夜という舞台の開幕を告げる演出は、なかなかに洒落が利いている。まさにオレ好みといえた。

もう一つ情報がある。この場所は幻想郷でも有名な釣りの穴場だという。巷じゃ大物が釣れるなどと実しやかに囁かれているほど。いや、囁かれているなんつー生温いモンじゃねぇか。此処の住民の大抵が知っとるがな。

さて、何故に外来人たるオレが幻想郷のガイドよろしく一人語りなんぞしてんのか。答えは他でもない、只今夜釣りの真っ最中だからである。釣りバカ日誌かよ。

満天の星空が煌めくロマンチックな景観のもと、そこいらの草の上にテキトーに胡坐をかく。手には釣竿を携えて。もっとも、長い棒切れに糸と針を装着しただけのお粗末な代物なのだが。こんなモンで水面と向き合っているオレは、さながら太公望であろうか。

「ま、しゃーねぇか。これも依頼だ」

おおよそ一時間前の出来事を思い返す。

『ねぇ、お客さん。ちょこっと食材調達をお願いしたいんだけど』

『あー？　おつかいでもしてこいってか。米か醤油でも買ってくりゃエエのか？』

『そうじゃなくて。お魚を何匹か釣ってきてほしいの』

『買うんじゃなくて現地調達かよ！　っかー、またメンドクセェ仕事を――』
『おねがい♡』
『……へーへー』
というワケで、和服女将な鳥娘にナマモノの確保を頼まれてこの状況に至る。屋台で出す刺身が足りなくなりそうだと。看板メニューのヤツメウナギでなくても構わないから活きのイイヤツを何匹か、それが今回の依頼だ。ちなみに道具は女将から借りた。
女将は本日の営業と明日の仕込みで忙しく、そこに都合良くオレが居合わせたっつー次第だ。タイミングが良かったのか悪かったのか。軽く一杯引っかけるハズが仕事するハメになるとはな……
どーでもいいけど、その時のミスティアときたらもうアレだった。こう、両手の指先だけを唇あたりでちょんと重ねてからの上目遣いでおねだりと、凄まじくあざとかった。あの仕草を素でやってるとしたらトンデモねェ男性キラーである。並大抵のヤローならばあっさり惚れてたかもしれん。まだ他に客がいなくて良かった、のか？
ま、経緯はどうあれオシゴトだ。報酬は次の晩酌がタダ飯＆タダ酒になること。とりあえず今宵はあるもので乗り切るそうだ。よってオレが釣ったヤツは明日に用いる食材となる。ただ、早めに戻ってきてもらえれば、それはそれで助かるとも言われた。そら補充は早い方がエエわな。
途中、意外な発見もあった。ただでさえド田舎異世界の幻想郷だ。山の麓にある湖で夜釣りとくれば、街灯なんぞ欠片もあろうハズなく物理的な意味でもお先真っ暗――かと思いきや、思わぬ産物が光を生み出していた。
「ほぅ……」
無意識のうちに感心したような吐息を漏らす。それだけの価値あるものを垣間見た。
周囲を飛び交う豆電球サイズの光の粒たち。一つ二つでは到底収まり切らない。無数の明かりが、時にはまとまり、時には散り散りになって集う。

光の源の正体は、蛍。
かの虫は水辺の綺麗な所に住まうと聞く。都会の空気に毒されていないこの地は、彼奴らにとっても安息の地なのであろう。あちらこちらで飛び交いつつ、草原や水面を淡く照らす光景は、なかなかに神秘的でさえあった。
そして、その場に居たのは発光する小さき昆虫だけではなかった。
「こんばんは」
釣り糸を垂らしてしばらくすると、どこかハスキーなあどけない声色がオレに投げかけられた。
話しかけてきたのは小学生っぽい風貌のガキんちょ（最近どうにも子どもと縁がある気がしてならない）白い襟付きシャツに黒のハーフパンツを合わせ極め付けは漆黒のマントという出で立ち。その恰好はどこぞの魔法学校のパチモンを彷彿とさせる。
さらに、緑色の短髪の合間を縫って、角というより触覚らしき突起が二本ばかし生えていた。
そいつは人懐っこい笑みで近付きながらオレに尋ねてくる。
「おにーさん、釣れてる？」
「さぁな。まだ始めたばっかりだからよ」
これが蟲の妖怪、リグル・ナイトバグとの初遭遇である。
夜釣りの傍ら話し相手を務める。そういえば、八雲紫と最初に出会ったときも先に挨拶されて、その流れで雑談を交わしたのがきっかけだったか。そのまま幻想入りする原因でもあったワケだが。
ちなみに今ほど話題に上がっていたのは、先日あった仙人サマの奇行について語った。折角ついでに同性の意見を求めたら、物騒にもご覧の有様なのはさて置き。いきなり爆発をオススメしてくるあたり、コイツもなかなかキてる部類なのかもしれない。
そう、少年染みたファッションをしていやがるが、コイツの性別は女だ。
無論、夜を生きる男であるオレの眼には誤魔化せねぇ。で、お前女だろと指摘してやったら予想に反してエラく懐かれてしまった。聞けば初見で見抜いてもらえたのは珍しいそうな。本人も男子と間違

えられることも多いのが密かな悩みだと零していやがった。だったらそのコーディネート止めーやと言いたい。ボーイッシュな服装してんのも誤解を生んでるってぇ気付けよ。

あと、ミスティア・ローレライとも知り合いらしい。お互いに共通する人物がいるというのも手伝って、オレたちが打ち解けるのにさほど時間は掛からなかった。

「やっぱりね、一寸の虫にも五分の魂があるわけだよ。なのに、いくらなんでも見つかるなり叩き落とされたり踏み潰されたりするなんてあんまりじゃない。蔑ろにしないでほしいよね。だからボクは虫の知らせサービスを始めたんだよ。どうしてか反応は今一つなんだけど……」

「ったりめぇだろ。そら年頃の女からすりゃ、朝起きたらベッド周りに虫ケラが仰山いるとか誰だって悲鳴上げるわ。下手すりゃ失神モンだろーが」

「そお？　ボクはただ虫ってスゴイんだぞーってことを知ってほしいだけなんだけどなぁ。そして目指すは虫の地位向上！　いつまでも足蹴にされたり問答無用で退治されて堪るもんか」

「そーかい。ま、ガンバレ」

「うん！」

やってやるとばかりに虫っ娘が気合を入れてみせる。オレもテキトーながら声援を送っておいた。

まだまだ底辺を這いつくばる弱者なれど、いずれは強者へのし上がろうとするタフネスな精神は嫌いじゃない。己と通ずるモノを感じる。

なお、蝿の王でも目指すのかと軽口を叩いたら「ボクは蛍だ！」と憤慨された。そこは譲れない模様。

水中から釣り針を引き上げ、エサを取り換える。横に置いたバケツの中にはこれまでの釣果が入っていた。真上から覗き込めば、アユと思しき川魚が二匹仲良く泳ぐ姿が確かめられる。

さすが釣りスポット。ド素人がやってもそこそこ釣れる。おかげでボウズの懸念は既に消えた。

別にノルマは決まってないが、五匹くらいあれば足りるだろ。そう判断し、もう少し粘ってみることにした。
「ここは良い場所だね。水がキレイで蛍たちも喜んでる」
「やっぱり分かんのか」
「そりゃ蛍の妖怪ですから。ボクもここはお気に入りだしね。おにーさんみたいに釣りに来る人もよく見かけるよ」
「噂じゃ大物がいるっつーからな。実際、どんなのが釣れんだ？」
「ボクも魚は詳しくないけど……あぁでも、この湖には人魚が棲んでいるよ」
「は、人魚だぁ？」
「うん、人魚」
どんな魚が釣れるのかと尋ねれば斜め上を行く回答が来やがった。せめてカワハギとかサクラマスとかそーゆーのを知りたかったのに、人魚ってお前。
コイツの口ぶりからして、昔流行ったシーマンだかシャーマンとかいう人面魚じゃなく、童話のマーメイドなのであろう。そいつはもはや魚類の域を超えているのではなかろうか。
オレが大仰な声を出して反応したのを、ナイトバグは「そそ」と軽い調子で頷いて続けた。
「上品な着物を着てて。ほんわかした性格のキレイな人、いや人魚だよ。名前は『わかさぎ姫』って言ってたかな」
「和服の人魚姫ってか。浦島太郎の登場キャラかよ。まんま乙姫じゃねーか」
「おにーさんも間違って釣らないようにね」
「釣らんわ。むしろ釣れたらオレが困るわ」
んなモン持ち帰ったら女将だって手に余る。事案待ったなしだ。大体、こんな釣り餌に引っかかるのか。その人魚とやらは。
その後も夜釣りは続く。
タバコくらいの小箱からミミズを一匹選んで摘まみ上げ、手繰り寄せたフック型の針の先で貫く。人魚姫がこんなん食ってたら幻滅どころじゃねぇぞ。ドン引きするわ。

というか。リアルタイムでお仲間を生贄にしてんのだが。にも拘らず、一向に口を挟んでくる様子がない。大丈夫なのか。
「なぁオイ、こうしてエサにすんのはお前的にはセーフなのか？」
「食物連鎖は自然の摂理さ。さすがにそこは覆せない。そもそもミミズは昆虫じゃないし、ムカデやクモと比べると虫っぽくないし。だからあんまり親近感湧かないんだよね」
「お前……何気に辛辣っつか毒舌なやっちゃな……」
「虫だけにね」
「毒があるってか。やかましいわ」
さりげなく分かり難いギャグを挟む、意外にドライな虫娘であった。ちなみに、ミミズは環形動物門貧毛綱に属する動物の総称である。
ヒュンッと風切り音を立てて湖に目がけてエサ付き針を投げ込む。ポチャンと水音が返ってきたのが耳に届く。そこから数分とかからずに竿の先端がしなり始めた。
「お、早速ヒットしやがったか」
「おにーさんファイト」
「フッ、任せろ」
生憎とリールなんぞありゃしないので、腕力だけで獲物を水辺から引き摺り出すしかない。人と魚の真剣勝負が始まった。されど相手がサメやクジラでもない限り、逆に引きずり込まれる心配はない。ここ海じゃなくて湖だしよ。
やがて、アユよりも一回りデカい淀んだ体色の魚が水面から飛び出る。ナイトバグがまじまじと観察して、答えた。
「この魚は鯉だね。ところで、おにーさんは恋してる？」
「だから唐突にダジャレ混ぜんなや。しかも文字にしねぇと分かり辛いし」
「いいじゃない。で、どうなの？」
口走ったギャグを自ら軽く流すという高等テクをしながら、虫っ娘は恋バナに身を乗り出す。その辺はやはり女なのだと認識させられる。

どうしてこうなったと頭を抱えたくなるが、この魚が発端なのは言うまでもなかった。つーか、鯉ってどっちかといえば水が濁ってるところでも生きていける、しぶとい類じゃなかったか。何でこんな上流に近い所にいんだよ。

などと脳ミソの内部で御託を並べたところで、目の前の小童がむふーっと鼻を膨らませていやがるのに変わりはない。が、そんな眼差しを向けられてもどうしようもないのもまた事実。

恋だの愛だの恋愛だの、悪いがオレにはそんな相手――

『えへへ、綿間部……♪』

「……」

真っ先に思い浮かんだ彼女の顔に、自分でも驚いてしまった。どうしてアイツが出てくるんだ。いやいやまさかと首を横に振ってイメージを払拭する。それでも、鼓膜の奥でくすぐったい声の残滓が留まった。

恋バナを期待する小娘がそんな分かりやすいリアクションを見逃すハズもなく。

「お、その顔は気になる女性がいるね」

「やかましいわ。ガキんちょが恋愛語るなんざ三年早ぇよ」

「もー、別に照れなくてもいいよ?」

「だーもう、違ぇっつの」

してやったりな得意げな面立ちでからかう少年コスプレの少女をしっしっと片手であしらう。そもそも、その手のトークすんなら女子会でやれ、女子会で。間違ってもオレのような男に聞く内容じゃないだろうが。

そうだろうとも。なぜならオレは夜に生きる男。ハードボイルドな何でも屋。惚れた腫れたで浮き足立ったりなどしない。生まれてこの方カノジョがいた試しもありゃせんのだ。ボッチ言うなや。

「大体、そう言うオメー自身はどーなんだよ? ええ?」

「あぁー、わざと話逸らして誤魔化したなー?」

「うるせぇ、いつまでも減らず口叩くとお前も釣りのエサにすんぞコラ」

ニマニマと笑いながら今なお食い下がるショタ娘に睨みを効かすが、まったくビビったりしなかった。クソッタレェ……

もういい。気を取り直して続きするか。釣竿を握り直した時――

「きゃぁあああああああああッ!!」

女の切羽詰まった悲鳴が、妖怪の山の方向から木々の合間を突き抜けて響き渡った。

つづく

第三十八話　「準備万端（レディ・パーフェクトリー）」

「なっ、何だァ!?」

「大変だよ！　誰かが襲われてる！」

静かな夜釣り時間を、あたかもガラスが粉々に砕け散ったみたいな甲高い絶叫によって打ち壊された。あからさまに唯事ではない空気に包まれる。瞬く間に緊張感が走った。

周囲が静まり返っているとはいえ、こうもハッキリと悲鳴が聞こえた。ここからもさほど離れていないのだろう。事が及んでいる場所は。

リグル・ナイトバグが言うように誰か、具体的には女性が何者かに狙われている模様。未成年にしてはやや大人びた声色だったように思う。多分、ガイシャは二十歳前後といったところか。しかし肝心な犯人に関する詳細は不明確。

野盗や暴漢の類いか、あるいは妖怪の端くれか。山奥ならば熊や狼というセンも無くはない。

現時点において把握できる状況は一つしかない。うら若き女が危険な事態にあるということ。それだけが、確かな情報として脳を伝播していく。迷っているヒマなどない、一刻を争う修羅場に出くわしちまった。

ここでオレが取るべき選択肢は――

① 興味本位で現場に近付く

② 巻き込まれないように遠ざかる

③ 通報する

悩むまでもなく①を選ぶ。

このオレが近くにいるってぇのに揉め事たぁイイ度胸してんじゃねーか。

そこの虫娘にも気付けないほど微かに口角が上がる。

かつて、夜の繁華街に居た頃じゃ荒事なんぞ日常茶飯事であった。

路上の喧嘩だったり派閥の抗争だったり。片や酔っ払いが突っかかってくれば、片や不良グループやらヤクザやらの縄張り争い。さら

にはタイマンでの睨み合いから、暴動紛いの乱痴気騒ぎに至るまで。煌びやかなネオン街では数多の欲望が渦巻いた。

オレ自身も無関係では済まされない場合も少なくなかった。依頼を引き受けた数分後に渦中のド真ん中に放り込まれた時もあったし、偶然にも近場に居たせいで運悪く巻き込まれただけなパターンもあった。おかげで生傷が絶えない日々が続いたりもした。

だからだろうか。こちとら幻想入りしてからどうにも生温い平和なオシゴトばかりで鈍っていたのも否めない。欲求不満？　あながち間違ってないかもしれねぇな。

「行くぞ虫っ娘！お前もついてこい！」

「ちょっと!?　おしっこみたいな呼び方しないでよ！」

釣竿を投げ捨て、バケツも置き去りにして走り出す。口煩く喚きながらもナイトバグはオレの後ろを追いかけてきた。

さぁて、ヒーロー気取りの乱入者と洒落込もうか。

木々が乱立する合間を縫ってスルスルと駆け抜ける。低い枝は屈んで潜り抜けて進んだ。整備された山道から大きく外れていく。デコボコの砂利道が続いて足場が悪い。今更だが、悲鳴を聞いて飛び出すとかコナンかよ。

余計なことを考えた時に事故は起こった。前方の暗がり、上手い具合に死角になっていた樹木の裏側から何者かが飛び出し、オレと真正面からド派手にぶつかってしまった。

「おわッ!?」

「きゃあ!?」

オレも大概だが向こうも全力疾走だったらしい。まさに激突と呼ぶに相応しく、強い衝撃が身体を襲う。

こっちはどうにか踏み止まれた。しかし残念なことに先方はそうもいかず、謎の人影が突き飛ばされた拍子にバランスを崩して尻餅をつく。

「ってぇなオイ……あ？」

「いたた……え？」

双方の疑問符が重なった。思わず相手の顔を確かめた途端、オレた

ちは互いに似たようなツラを晒していたに違いない。まるで信じられない、とでも言わんばかりに。

目の前でへたり込む女。オレはそいつを知っていた。幻想入りする以前から記憶にあった。あれだけの事件があったのだ。忘れられるワケがねぇ。

「お前――」

見覚えのある金髪は以前と変わらぬ長さであった。ゆるふわな白い帽子も、紫色のワンピース系の洋服も、一年前の記憶と遜色ない。

彼女もオレの顔を見上げて呆然と目を見開いている。むしろオレ以上に驚いた表情で。依然尻餅をついたままなのは、もしや腰が抜けてしまって力が入らなくなったか。

自らの記憶と照らし合わせるように、彼女の名前を口にする。

「マエリベリー、か？」

「黒岩君!?」

予期せぬ再会が果たされた。明らかに予想の範疇を超えた展開に驚きを隠せない。

なしてマエリベリーが此処にいんだよ。仲良し宇佐見は一緒じゃねぇのか。数々のハテナが次から次へと湧き上がる。久しぶり、なんつーカンタンな言葉すら出てこない。

とにかくマエリベリーの手を掴んで立たせるべく引っ張り上げる。

「どうして私の夢にあなたが……」

「言っておくが、こいつぁ夢でもねぇしアニメでもねぇよ。ったく、どうなってんだ……？」

質問は山のようにあれど、相当テンパっている女子大生から諸々を聞き出すのは厳しかろう。可哀相に、現実が受け入れられずコレを夢の中だと思い込んでおった。もっとも、この状況に咄嗟に頭が追い付く方がどうかしているわな。

ま、しゃーねぇ。ひとまずコイツを――

「ッ!?　早く！　黒岩君も一緒に逃げなきゃ！」

「は？　いきなり何言って……」

「いいから!!」

どうにかしないと、などと考え始めた矢先のこと。女子大生が切羽詰まった様子で行動を起こした。

マエリベリーは必死の形相を浮かべ、彼女らしからぬ強引な口調でオレの腕を引っ掴んだ。その瞳に焦燥の感情を溢れさせて。細い指に込められた力は存外に強く、痕が付きそうなほど衣服越しに食い込んだ。地味に痛ぇよ。

ただでさえ不意打ちの再会だというのに、開口早々に逃げろと言われる始末。さすがのオレも面食らう。しかし、そんな余裕など許されていなかったと間もなく知ることになる。

ガサガサガサ……

「ひ……っ!?」

金髪の女子大生が引きつったように息をのみ、掠れた声を漏らす。オレを掴む指に一層の力が加わり、よくよく見れば小さく震えている。声だけでなく顔も怯え切っていた。

あぁ、そうか。そういうことか。オレとしたことがアタマが鈍っちまった。そもそも悲鳴を聞いたからここまでに来たんじゃなかったのか。

ガサガサガサ

不穏な物音がどんどん大きくなる。やがて、茂みを掻き分け、あるいは無理矢理に押し進むようにして——その集団はやってきた。異形な姿を目の当たりにする。

ヤツらには表情がなかった。いや、無表情なだけで済めばどれだけマシだったであろう。表情はおろか感情さえあるかどうかも疑わしい、あまりにも異質な容貌をしていやがった。

目もなく、耳もなく、肉もなく、皮膚もなく。血もなければ涙もない。あるのは人体構造の部位うちたった一つ、即ち、骨。

「ハッ……冗談キツイぜ」

病院とか理科室の標本として飾られていそうな人型の白骨が群れを成す。到底自立するなどありえないブツが、されど現実として自らの足で行進している。連中が歩みを進める毎に、関節が擦れて乾いた不協和音が鳴る。

眼球なんぞ持ち合わせてないというのに、確実にオレたちを狙っているのがヒシヒシと伝わってきた。只々真っ直ぐに標的が居る方向へと進もうとする光景が、ますます不気味さに拍車をかけて不安を煽る。

マエリベリーが膝から崩れ落ちそうになる。かろうじてそうならなかったのは、偶々オレの腕を掴んだままだったからに過ぎない。

「そんな……もう追い付かれて……」

「アレに追われてたってぇのか」

やはり例の悲鳴はこの女のもので間違いなかった。そらこんなんに追いかけ回されたら悲鳴の一つでも上げたくなる。そのうえ、いつも一緒にいた相棒も不在という孤独の追い打ち。きっと此処が何処なのかも分からぬまま闇雲に走ってきたのだろう。

「もう、いや……」

かの女子大生はといえば、すっかり絶望しちまって顔面蒼白になって震えていやがった。一心同体のパートナーがいないのが堪えたのかもしれん。秘封倶楽部は二人で成り立っていたのだ。心細かろう。

というか、あの時といい今回といいコイツらに関わるとホラー案件になってばかりな気がしてならんのだが。

モタモタしている間にもガイコツの団体は確実に距離を縮めてくる。目的はサッパリだが友好的な雰囲気は欠片もなかった。

今にも泣きそうになりながらマエリベリーがオレの腕を引く。

「黒岩君っ、早く逃げましょう。もし捕まったらどうなるか分からない……！」

「だろうな」

「何を呑気なこと言ってるの!?」

よくここまで頑張ってこれたもんだ。オレらと出会うまで、女ひとりでガイコツに追われながら異界の山奥をメチャクチャに走ってきたハズだ。いくら本人が夢だと思い込んでいても醒める気配は一向になく、恐怖は計り知れない。この女にとって最も不運なのは、これが現実であることか。

まずは彼女を早く安全な場所に連れて行くのが先決になりそうだ。

さて、どうする。
「……」
「黒岩君ッ!!」
この女を保護するなら人里に避難させるのが妥当であろう。そのためには人里に到着するまで連中を振り切らなければならない。が、マエリベリーはすでに散々逃げ回っており、疲労困憊で速く走れるかも怪しい。そのうえ精神的にも相当参っちまっている。
これじゃ下手すりゃ途中で一歩も動けなくなる危険性もある。そうなったら最後、ヤツらに捕まってゲームオーバーのバッドエンド。マエリベリーを無事かつ確実に逃がすには、あと一押しが足りない。
ま、成功率を上げる方法なんぞ初っ端から決まっているワケだが。
「ナイトバグ」
「リグルでいいよ」
「そーか。リグル、そこの女を人里まで連れて行ってやってくれ。あと置いてきた釣竿とバケツも回収して女将に渡しておいてもらえると助かる」
「注文多いなぁ……でも、いいよ」
「黒岩君!?　あなた何言ってるの!?」
ここまで付いてきたリグルが軽い調子で了解する。さすがガキんちょでも妖怪。やれやれと肩をすくめるぐらいの余裕を持ち合わせていやがる。つーか、ずっと黙ってたよなお前。
一方で、オレが口走った内容にマエリベリーが怒声を込めて詰め寄る。正直怒られんのは仙人サマだけで事足りてんですが。
「大丈夫だから心配すんなっつの」
いよいよ痕が付きそうになってる右腕から、彼女の指をなるべく優しめに剥がしていく。
コイツが逃げ切れないかもしれないなら、逆にオレがこの場に残って追手の足止めをしてやれば解決する。やっと知り合いに会えて安堵したであろう彼女には悪いが、こうするのが手っ取り早い。
「ほれ、あと少しだからガンバレや」
「あっ……」

女子大生の肩を軽く押して虫っ娘に授けた。ふらりと後ろに傾きかけたところを、リグルがマエリベリーの手を取ってこの場から離脱を始める。

薄らと涙を浮かべた金髪の女子大生と目が合う。フッとニヒルに笑ってみせた後、背中を向けて声を荒げた。

「さっさと行け！　邪魔になんだろーが！」

「お姉さん！　早くこっちに！」

「ま、待って、お願い……黒岩君ーーーーーーッ!!」

金髪の女子大生の悲痛な叫びを最後に再び静寂が戻ってくる。二十人近くいるにも拘わらず無言が貫かれた。ふいに夜風が通り過ぎていき、草木を撫でていく。

まるでそれを合図とするかのように、沈黙を破った。

「よう、待たせたな……って言っても聞かねェか」

白骨の群れに呼びかける。当然返事など返ってくるワケがない。狙い通り、マエリベリーを追いかける輩はいない。全てがオレを標的に定めている。

単純な行動パターン。偶々目についたものから手を伸ばしているだけ。自立歩行は出来ても知能はそれほどでもなさそう。ま、脳ミソねぇし当然か。

先頭にいたガイコツの一体が、干からびた指先をオレへと伸ばす。速くもなければ遅くもない。握手しましょうなんつー気さくな感じではなく、どちらかといえば食い物に手を伸ばす動作に映った。例えるならば、枝に成った果実をもぎ取ろうとしているかの如く。

印象通りなら掴まれたらゾンビ映画よろしく食われるのかもしれない。

ただし、相手がオレでなければ。

バキィッ

手を伸ばしていたガイコツの動きが一旦止まる。次いで、己の腕を確認するように首を動かした。　なんだ、そーゆー反応もできんじゃねぇかよ。

そいつの腕は折れ曲がっていた。関節の部分などと生易しいモンではない。手首と肘の間をポッキリとへし折られ、とても使い物にならない有り様と化していた。ギリギリのところで繊維が繋がっており、さながら提灯の如く頼りなくぶら下がっている。

「どうせ痛覚もねーんだろ。だったらこっちも手加減しねぇかんな」

即座に切り替えたのは場数と経験の為せる技。今のオレは素手じゃなかった。

左右それぞれ親指を除く四本の指に、連なった輪型デザインの装備品を通す。偽装のピストルと同じく黒色に染められ、さらには本物の鉄製で仕上げられている。コンパクトでありながら物騒な代物。

ピストルやナイフのハッタリが効かない状況、本格的な荒事に陥った際に用いる切り札――メリケンサック。

ヤらなきゃヤられる時にしか解禁しない、オレが持ち歩く中で唯一のガチな武器であった。殺し屋ではない心情のもと、致死のリスクを抑えながらも敵を容赦なく叩きのめせるお墨付き。まさしく何でも屋仕様といえよう。

無感情の自動人型に垣間見た反応にニヤリと口の端を吊り上げる。

「テメェらが何者かは知らん」

振り落した右拳を引く。足幅を広げ、両方の握り拳で構えを取る。我流の喧嘩技法で身に付けたファイティング・ポーズ。

「だがな、マエリベリーに手ェ出した時点でとっくアウトなんだよ。この先通せねぇ理由としちゃ十分過ぎんだろーが」

二十体近くのガイコツ共と対峙する。仮にコレがまたもや幽霊だったらオレも迷わず逃亡を選んだであろう。

しかし、別に何もオバケ全般が苦手なワケでもない。大事なのはオレがどーにかできるか、その一点に尽きる。だったら答えは単純明快。相手が実体を持った殴れる存在ならば、やってやれないことはなし。

数の不利はあれどオレにとっては些細な問題だ。むしろ連中が全員手ぶらなのが好都合でしかない。ドスやらナイフやら振りかざして襲ってきたチンピラ不良集団に比べれば、動くだけの人骨なんざ素

麺みたいなもんだぜ。
「どっからでもかかってきやがれ。一人残らず複雑骨折で地獄に送り返してやるからよ」
つづく

第三十九話「ｐｉｅｒｃｅｄ　ｅａｒｒｉｎｇｓ～傷だらけの割引券～」

――どうして。胸騒ぎがする。

不穏な予感を覚えた。静めていた気に微かな乱れが生じて、修行に支障をきたしてしまう。仙人にあるまじき己の不甲斐なさを叱咤しつつ、茨木華扇は精神統一の座禅を解いた。

「ふぅ……」

屋敷を覆う瓦屋根の上に居た。天には幾多の星々が煌めいており、邪なものなど欠片も存在しない。今日はサボりの死神も我儘な天人も茶化しに来ていなかった。美しいまでの夜の訪れ。

だというのに。彼女の心には拭い切れない違和感が残る。

例えば、あずかり知らないところで問題が起こっているかのような、言いようのない気持ち悪さ。

「少し様子を見てくるべきかしら」

そうぼやきながら、気晴らしがてらトンと地面に降り立つ。主の気配を察したのか、寝そべっていた虎がのっそりと起き上がる。ぐるる、と気遣うように低く唸り声を漏らして擦り寄ってきた。

「大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

強面だけど従順なペットに優しく語りかけて顎を撫でてやる。慣れた手つきに黄金色の獣は心地よさそうに目を細めた。かの仙人にかかれば虎も猫も大差なく、手懐けるのは容易い。

ライオンに匹敵する肉食獣を傍らに、撫でる手を止めることなく華扇は思考を巡らす。

（妖怪の山で諍いがあったのでしょうか……？）

否。正しくは今まさに何かが起こっているのかもしれない。

「ここは一つ仙人として、行かないわけにはいきませんね」

人を導く者として。我が道は天道と共にある。そう決意したのだから。そうと決まれば行動は早い。

「あとはお願いね」

華扇はペットたちに留守番を任せ、自らの屋敷を発った。
確証はない。思い過ごしかもしれない。けれど……
「綿間部……」
この胸騒ぎの渦中に、彼が関わっている気がしてならなかった。
はたして仙人ゆえの察しの良さだったのか、それとも女の勘だったのか。どちらにしても、彼女が抱いた不安が決して杞憂ではなかったと知るまで、そう遠くない。

妖怪の山の中腹から麓にかけてのおおよそ中間地点にあたる場所。
「やっぱり、変だわ」
名探偵華扇はズバリ結論を導き出した。自身が立っている地面の足元を見下ろす。
あたかもモグラが地中をほじくり返したような凸凹や、地上に這い出た痕跡らしき穴が幾つもあった。挙句の果てに、頭蓋骨まで転がっているという有り様。ここまできたら怪しむなという方が難しい。
決め手に、
「ここだけ嫌に淀んだ気配がする」
酷く歪な気が残り香となって漂い、包帯の右手で鼻を覆った。
地獄を彷彿とさせる骸の臭い。腐臭という意味ではなく、妖気あるいは怨霊の気質に近いもの。この類は覚えがあった。
屍を配下として従える忌み術。
こんなものを好き好んで使う輩など、あの邪仙を除いて他にいない。毒々しくも艶やかな色気を振りまく青髪の美女が脳裏をよぎった。
もっと詳しく見ようと、その場に屈んで土に指を這わす。
(キョンシーを増やそうと目論んだのかしら？　そのわりには手抜きが過ぎる。いいえ、彼女のこと。ほんの手慰み程度に試みただけなのでしょう)
あまりの適当さゆえに失敗したのか。無造作に散らばる頭蓋骨や人骨の残骸を見やれば、芳しくない結果に至ったのだと推測できる。
失敗を気に留めることもなく、あっさりと匙を投げたところまで。

「それよりも」
問題なのは、邪仙の失敗がどちらに転んだかということ。
何も生まれなかったのならまだ良い。だが、もし彼女の意に沿わない愚物が出来上がってしまったのだとしたら？
あの女が律儀に失敗作の後処理をするだろうか。まさか。現場ですら放置されていたのだ。そんなの、怠るに決まっている。興味がないと一蹴して。
足跡らしき陥没まで見つけてしまった。いよいよもって悪い予感が確信に迫る。
「もう少し調べる必要があるわね」
仮に何者かが生み出されたとして、それが人に害をなす存在であれば放っておけない。
あの邪仙の尻拭いをさせられているのが少し癪に障るものの、かといって無視するわけにもいかなかった。
ふいに、彼女の赤みがかった瞳がとある光景を映した。
「あれは……？」
虫の妖怪、リグル・ナイトバグ。氷の妖精をはじめ、子供たちとよく遊んでいたはず。その子が見知らぬ少女の手を引いて走っている。やけに急いだ様子だったのが気にかかった。
声をかけようか迷う。しかし、偶然にも二人の会話が聞こえてしまった。
「お姉さんは自分の身の安全を考えて！　一番弱いんだから！」
「でもっ、あんな場所に置き去りなんて危険すぎるわ！　ねえ、戻りましょう!?」
「お姉さんが戻ったってどうにもならないよ！」
「わかってる……！　だけど、このままじゃ黒岩君が――」
その名前を耳にした瞬間、華扇はすでに動き出していた。
「待ってください」
「――シッ！」
黒い鉄を纏った拳が顎を捉える。耳障りな音を立てて首の関節が

歪な方向へ捻じ曲がる。不気味に動いていた人型の骨があっさりバラけて崩れていく。

そいつを尻目に横にいた別個体の肋骨に左ストレートを捻じ込む。バキバキと容易く砕けいき、ついには反対側に突き抜けちまった。

「ハッ、脆ぇな。カルシウム足りてねぇんじゃねーのか?」

空洞の体内に減り込んだ腕を振り抜き、再び構えをとる。じわじわと取り囲まれつつあったが焦りはなかった。

こちとらとっくにスイッチ入ってんだよ。それよか大鎌振り回して襲ってきた小野塚小町に比べりゃ屁でもない。向こうは全員素手なのだ。

「どうした、見掛け倒しかよ? 大した事ねぇなオイ」

安い挑発を放つが反応は薄かった。ここで頭に血が上ってくれりゃ好都合だったのに。さすがにそこまで上手い話はないってか。

トン、トンとバックステップで距離をとり、助走をつけて一気に接近する。

「これでも食らっとけ!」

密集している連中を狙ってまとめて蹴り飛ばした。効果てきめん。後方に押しやられた拍子にドミノ倒しとなって他のガイコツどもも巻き込まれる。

かと思いきや、派手にいったわりに数を減らせなかった。転ばされた敵どもがカタカタいいながら自力で起き上がってくる。

「チッ! しぶといんだよこのダボがぁ!」

立ち上がりかけの隙だらけ集団に追い打ちをかける。頭蓋骨にヒビを入れ、腕や胴体をへし折ってやった。右と左を交互に駆使して次々と相手を屠った。

勇敢、あるいは無謀に挑んできた単体を迎え撃つ。まずは右拳で肘を叩き割り、さらに左でもう片腕も同じ有様に陥れ、トドメに喉元を鉄拳で貫く。

「ちっと本気を出しすぎたか――うおっ!?」

いつの間にか真後ろにいた一体に羽交い締めで組み付かれた。チャンスとばかりに他の髑髏どもまで押し寄せ、どんどん覆い被さっ

てくる。
「クソッ……!?」
生き埋めにさせるつもりか。それとも重みで押しつぶそうってぇハラか。
さながら山でも築くかの如く、白骨がオレの頭上を埋め尽くす。次から次へと数が増していって、ついにはマトモに立っていられず膝が折れ始めた。
しかし、決定打には至らない。さもありなん、重さで勝負しようってぇのが最初から間違いなのだ。
「んだくそっテメーら筋肉も脂肪もねぇだろうがぁあ!!」
圧し掛かってきた集合体をまとめて持ち上げ、力任せに振り解いて撒き散らす。ボーリングのピンみたいに飛び散る白骨。万歳のポーズでがら空きだった阿呆を正拳突きで刺し仕留める。
胴体を貫通されて無事でいられるハズもなく、動くガイコツはただの骨へと成り下がった。
「来いよ。まだまだこれからだろ」

「大丈夫ですから、落ち着いて。何があったのか教えてください」
「助けてください……黒岩君っ、知り合いが、私たちを逃がすために怪物の囮に……!」
「ボクはこのお姉さんの護衛と人里までの道案内を頼まれて」
息も絶え絶えになりながら、まだ若い金髪の女性が仙人に事情を伝える。リグルはいっそ暢気なくらいに平然と受け答えた。
見た目はさして自らと大差ない年齢そうなのに思わず助けを求めたのは、彼女が混乱状態にあったためか。あるいは、桃色の髪をもつ女性が纏う雰囲気に一縷の希望を見出したからであろうか。
どっちにせよ、彼女――マエリベリー・ハーンが頼った相手は正しい。
茨華仙が少女の瞳をしっかりと見つめて頷く。
「分かりました。あとは任せなさい。必ず無事に連れ出しますから」
なぜならば、かの乙女こそ、人と近づきたいと願う仙人だったのだ

から。

多勢に無勢？　だからどうした。

数の不利などものともせず、黒い単身が白の群れを蹴散らす。山奥のストリートファイトは大詰めを迎えていた。

「オラオラオラオラァ!!」

襲い来る無法者どもを相手取り、顎を勝ち割り、背骨を砕き、さらに同じ轍は踏まぬと背後に回った輩は裏拳でなぎ倒す。まさに一騎当千。これこそが夜の繁華街を生き抜いた男の真骨頂と知れ。

手近な木の幹を駆け上り、そこから宙返りで落下する。真下にいた二体がそれぞれ左右の靴裏でグシャリと踏み潰された。

「いよいしょオッ」

今度は別のヤツを踏み台にして高くジャンプして枝を掴む。

足の位置とガイコツどもの頭の高さが一致した、二度蹴り。顔面を直撃した髑髏が放物線を描いて遠くへシュートされる。頭部を失った体はしばしカタカタを動いていたが、ほどなくして最期を迎えた。

「げ……!?」

足首を掴まれた。マズい。がむしゃらに振り回すが、奴さんもここにきて意外な根性を発揮して離れない。

徐々に形勢が不利に傾く。

「このっ、離せっつの！」

足にばかり気を取られちまったのがいけなかった。枝を握っていた手の力が緩んだ。蜘蛛の糸に群がる罪人の如く幾つもの手から引っ張られ、地面に引きずり落される。

「あで!?」

受け身も取れずモロに背中から打ち付けた。

ようやく落ちてきた獲物に動く骨たちが喜々と集まる。さながらゾンビ映画。しかも似ていたのは絵面だけじゃなかった。

「ぐおおお!?」

ヤツら殴るでも蹴るでもなく、ホントに噛みついてきやがったのだ。腕や脛に続々と歯型をつけられる。痛覚が悲鳴を上げた。

「このヤロッ噛む力は一丁前しやがって……！　リカルデントかっ」
肉を食い千切らんとする歯牙。衣服の所々に血が滲み始める。仰向けに組み伏せられたせいで抵抗し辛い。それも仇となった。
なれど、この程度でくたばってて何でも屋が務まろうものかよ。
「なめんなぁぁあああああ!!」
全身を噛みつかれてんのもお構いなしに意地でも起き上がってみせる。そのまま四方の樹木やら岩やらに捨て身の体当たりをかましまくって、纏わっていたヤツを全て叩き落とす。
「ガァアアアア!!」
ケモノ染みた咆哮を上げながら人型の骨をへし折り、砕き、壊す。二桁に届く数をでたらめに殴り続けたせいでいつしか手の甲にも血が滲み出ていた。打ち砕いた際の破片で生じた切り傷だ。
それでも傷ついた拳が鈍ることはない。
「テメェでラストだ！」
バカ正直に真正面から突っ込んできた最後の一体をアッパーカットで打ち上げる。ブッ飛んでいった頭は運悪くその先にあった岩に激突し、ヒビ割れたオブジェと化した。
「ふー……は……」
静寂が戻ってくる。
自分の荒い呼吸だけが取り残される。喧嘩の構えを解いた腕がだらりと下がり、肩で息を繰り返した。
四方八方に散らばる骨の残骸を見渡す。油断なく確かめるが、幸い、復活して動き始める兆しはなかった。どれもこれも微動だにしない。完全に事切れている。
いや、そもそも骨だけの体な時点で生きてすらねぇのか。フツーは。これだから異世界ってやつはよ……
「ハッ、さすがに疲れたわ……」
久し振りに大立ち回りしたせいだろう。疲労感が一歩遅れて押し寄せてきた。アカンわ。
ふっと力が抜けて真後ろに倒れ込む。その先が固い地面なのがアレだが、少しだけ休んで……

「お疲れ様でした。綿間部」
春のそよ風を思わせる温かな声とともに、若い女の両腕に身体を受け止められた。
誰かなんざ確かめるまでもない。きっと今のコイツは柔和な笑みをたたえているのだろう。この声色を聞けば分かる。
とりあえず、前を向いたまま強がって悪態をついた。
「へっ……朝飯前だっつの」
もしくは夜食前と言った方がオレの性に合ってたかもな。

「黒岩君っ！」
「ってオイ、なんで戻ってきてんだよ」
なぜか人里まで逃がしたハズのマエリベリー（とリグル）までやってきやがった件について。何してくれんだ。
「私が連れてきました。道中の安全は保障してましたから」
「ふーん……」
ま、仙人サマがお付きだったら護衛としちゃ上等だわな。
いつまでも女に抱き留められたままなんざカッコつかねぇ。休みたかったのを我慢して華扇から身体を離す。
俺の元まで駆け寄ってきたマエリベリーは「よかった。無事で……」と見るからに安堵した表情を浮かべた。
「平気だっつったろ」
「あの状況で鵜？みにできるはずないじゃない」
「つかー、信用ねぇなぁ」
というか、今更過ぎんのだがコイツどうすりゃいいんだ。まさかこの女子大生まで幻想入りしちまうとは思うまい。これも八雲紫の筋書きなのか？
「心配無用。今の彼女にとって、この幻想郷は夢でしかありません」
「あ？　お前まで何言ってんだ」
「眠っている間、夢の中でだけ幻想郷に入り込む症状があるのです。彼女の場合はそれでしょう。今回に限って言えば、八雲紫は関わっていないと思います」

「んだそりゃ。というか、当たり前みてぇに心を読むな」
「まぁまぁ、見ててください」
そう言うや否や、仙人サマは女子大生の額を指先で軽く小突いた。すると、マエリベリーの体が淡く光り、次第に薄れ始めていく。
いきなり自身の体が消えそうになっている展開に本人も困惑を隠せない。そらそうだ。
「あの、これは……？」
不安に瞳が揺れる少女を前に、桃色の仙人が安心させるように微笑みかける。
「怖がらなくていいわ。これは夢。目が覚めればいつもの日々に戻れます。さぁ、おはようの時間です」
仙人の穏やかな口調に金髪の女子大生もほっと表情を和らげる。イマイチ状況は掴めずとも、おおよそ雰囲気で察したのであろう。ようやっと恐怖体験から解き放たれるのだと。
むしろオレの方がよく分ってねぇのだが。結局どういうこった。幽体離脱でもしてたのか？
「……ま、どっちでもエエか」
彼女が仲良し宇佐見のところへ戻れるなら余計な口を挟むこともなかろうよ。
「黒岩君」
ほぼ透明になりかけたマエリベリーがオレの名を呼ぶ。
「助けてくれてありがとう。夢の中だけど、また会えて嬉しかった」
「フッ、そーかい」
「うん。じゃあね」
「おぉ」
顔を綻ばせて軽く手を振りながら別れの挨拶を口にする女子大生。それと同時に、彼女の姿は掻き消えて、その場に僅かな光の粒子が残った。
「また会えて嬉しかった、か」
ついさっきまでガイコツの群れに追い掛け回されていたってぇのに、大したやっちゃな。だからこそ、あの女も秘封倶楽部の一員なの

だろう。

「んじゃオレらも帰るか。ってかリグルよ。お前、頼んどいた釣り竿とバケツはどーした？」

「あっ、いけなーい。すっかり忘れてたよ」

「マジかよ。まずソレ回収してこねぇとダメやんけ」

「いやー、ごめんねごめんねー」

「全然反省してねぇだろうが」

もっとも、途中までとはいえマエリベリーのボディガードをしてもらった手前もあるし、あんまり強く言えた立場じゃねぇけど。ったく、やれやれだ。

来た道を引き返し始める途中、華扇がオレの腕にすっと自身の細腕を絡めてきた。どういうつもりだと横目で見やれば、仙人サマは事もなげに言った。

「支えてあげます。ゆっくり行きましょう」

「大げさだっつの。かすり傷ばっかで大したことねーよ。一人でも歩けらぁ」

「いいえダメです。それに綿間部には聞きたいこともありますから」

絡めた腕をさらに密着させて華扇が寄り添う。柔らかな肢体とついでにデカい胸が当たった。

いつも通りの無防備さ。一体いつになったら自覚するのやら、この天然は。

「へーへー……で、何が聞きたいってぇ？」

ただ、今回はそこに加えて確固たる意思があるように思えた。そしてそれは気のせいじゃなくて、

「あの女性とはどういった関係なのでしょうか？　随分と親しげな印象を受けましたが。お互いに名前も知っていたようですし。しかも去り際に『また会えて嬉しかった』と言ってましたよね？」

にこやかに、されど決して逃さんとホールドしながら華扇が笑顔をみせる。

「ん、んん……!?」

はて、なんかおかしいぞ。主に雲行きが。
あえてゆったりとした足取りで歩く華扇に合わせざるを得ない。急ぎ足になろうにも拘束されては叶わないのだ。どうなってんだ。
よろしくない気配を感じ取り、リグルに助太刀のアイコンタクトを送る。
救難信号を受けた虫っ娘がドヤ顔でサムズアップした。どうやら伝わってくれたらしい。さすが虫の知らせサービスだ。誉めてやろう。
「ボク、先に行ってるね。釣った魚もミスチーに渡しておくから、あとは若いお二人でごゆっくり」
「違うそうじゃない」
思わず真顔で返しちまった。むしろ分かっててやってんじゃなかろうか。コイツ、毒舌キャラに加えて腹黒疑惑まであんぞ。
そそくさと立ち去って行った蛍の少女に見捨てられ、山道にはオレと華扇だけが残された。当然、腕を組んだまま離れない。
甘く蕩ける声で桃色の仙人サマが逃げ道を塞ぐ。
「人里までまだまだありますし、ちゃーんと聞カセテクダサイネ？」
帰るまでが遠足とはよくいうが、どうやらオレの本当の戦いはこれから始まるらしい。
……どうもこうもただの知り合いなんだが。
分かってもらえるのだろうか。
つづく

第四十話　「サザンがクロイワ伝」

「おンどれェ！　許さんぞお色気担当の悪女あんにゃろう！」

オレは激怒した。

必ずやかの邪知暴虐の邪仙にキッチリ落とし前つけさせねばならぬと心の底から決意した。何なら今すぐにでも乗り込んでやりたいほど。怒りの炎が燃えてんぜ。

「まぁまぁ。お客さん落ち着いて」

「そうですよ綿間部。気持ちはわかりますが喧嘩腰は感心しません」

ダブルのピンク色ショートヘア（片方はミディアムくらいあるのはご愛敬）が息巻くオレをなだめる。カウンターの隅っこではリグルが突っ伏して寝息を立てていた。いかにも至福そうな寝顔の鼻先は赤らみ、空になった徳利やら升やらが取り囲むように並ぶ。

未成年飲酒がまかり通る幻想郷だからこそ許される絵面だわな。どう見ても小学生なガキんちょが酔い潰れて眠るなんざ、「外」の世界じゃ一発アウトでしかねぇ。

負けじと手元に残っていた酒を飲み干し、地獄の谷よりも深い溜息を吐き出す。オーケー、落ち着いた。

ただし、それで不満が消えたワケじゃない。

「そーは言ってもよ、知り合いが襲われてんだぞこっちは」

あれから茨木華扇の文字通りドキドキ密着取材もとい事情聴取をどうにか切り抜け、オレたちはミスティアの屋台まで戻ってこれた。そして、満を持して仙人サマがタネ明かし。ガイコツ集団がどうして発生したのか知らされた。

そう、いつぞやのエロい邪仙が元凶であることを。

当然ながらオレは憤慨したのは言うまでもない。何してくれやがんだ、あの女。このうらみはらさでおくべきか。

ちなみにオレたちが帰還したとき、一足先に虫っ娘から事情を聞かされていた鳥少女が急ぎ足で出迎えてくれた。さらには「こんなにボロボロになって……」とオレの手を両手で包み込みながら。よもや魚釣りを依頼した相手が異形の群れと殴り合いしてきたなんざ誰が予

想できようか。
　もっとも、ミスティアが手のひらを重ねてきた数秒後に「そ、そこまでです！」とやけに焦った華扇に無理矢理引きはがされたんだけど。おまけに「どさくさに紛れて何やってるんですか馬鹿者！」となぜかオレが叱られる。何でや。説教すんならあっちだろ。
　そんなこんなで和服女将はあざといわ仙人サマはへそ曲げるわ虫娘は他人事だと思って面白がっているわ。そのうえ先客の大学生らしき茶髪ツンツン頭の男性客がこっちをガン見しながらリア充爆発しろとガチで悔しがってたり、ペアと思しき金髪碧眼の女子が野郎の頬を抓ったり。もはやワケがわからん混沌っぷりで収拾つかない。
　小さな屋台のハズが大衆居酒屋みてぇな大騒ぎとなった。
「だーもう、うるせぇよ！」

「それでお客さんは結局どうするつもり？」
「んなもん決まってんだろ。詫びの一つでも入れさせねーとオレの気が済まねぇ」
「でも、その青娥さんって人がどこにいるか知ってるの？」
「そりゃ……知らんけどよ」
「あらら、ダメじゃない」
　客商売のプロに見事に痛いところを突かれ、あえなく言葉に詰まっちまう。それを言っちゃおしまいだろうが。
　とはいえ一理あるのもまた事実。ヤツの居場所が掴めんのではどうしようもない。思えば、ファーストコンタクトもその次も向こうから仕掛けてきたのだ。
　あの時に貰った名刺にも住所は載っちゃいない。もしあれがマジモンの夜の蝶だったら店の情報とか記してあったかもしれない。ま、所詮はたられば話だ。
「八方塞がり、か……」
　もしくは万事休す。腕を組んで唸っていると、華扇がフフンと勝ち誇ったようなドヤ顔を浮かべてきた。
「私が連れて行ってあげましょうか？」

「んだよ、知ってんのか」
「まぁね。あそこには青娥の他にも仙人がいますし、話しに行ったこともあります」
　聞けば、例のアダルトチックな女仙人の拠点は仙界と呼ばれる場所にあたる。ある仙人を筆頭に、他にも配下の仙人だの弟子だの結構な数が揃ってんだとか。霍青娥もその一人ってぇワケだ。
　しかも厄介なのが、華扇の屋敷と同様に入り口は特殊な術が施されており、並大抵の人間じゃ辿り着けねぇときた。
「霊夢ならまだしも綿間部では至難の業でしょうから、私も同行します。もとより私としても此度の一件について彼女には物申したいところです」
　神妙な顔つきで華扇が指を組む。碇ゲンドウかよ。
　ともあれ人が襲われていたとあっては彼女とて穏やかではいられまい。あの時は偶々オレが近場で夜釣りしてたから間に合ったものの、一歩遅ければマエリベリーの身がどうなっていたことか。どこぞのＳＡＯよろしく現実でも目覚めなくなったら宇佐見に申し訳が立たない。
　兎にも角にも行き先が決まれば話は早い。獰猛な笑みを浮かべてポキポキ指を鳴らす。
「んじゃ早速行くか？」
「いいえ、今日はダメです」
「オイイ……」
　ところが意気揚々と立ち上がった矢先にあっさり出鼻を挫かれ、ガクッと崩れ落ちるハメとなった。コントじゃねーか。案の定、ミスティアにもクスクスと笑われる。カッコつかねぇ。
　気恥ずかしいのを誤魔化すようにして座り直す。恨みがましい視線をぶつけると、華扇はコホンと咳払いした。
「いくら文句があるとはいえ、こんな夜中に押し掛けるなんて迷惑行為です。明日にしましょう」
「つってもオレは夜にならねぇと――」
「明日にしましょう」

「……へーへー」
いっぱいに笑顔を咲かせて圧力をかけられてしまえば、オレに抗える手段もなし。渋々といった具合に白旗を上げる。こんなんばっかかコンチクショウ……
「お客さんって押しに弱いタイプ？」
「知らんて。どーしてそう思った？」
「んー、女の直感」
「そら確かなこって」
お冷を置きながら揶揄ってきた女将に嘆息混じりに応じる。
ただ、正直に言ってしまえば心当たりがないワケでもなかった。ま、だからといって口に出す気は更々ない。クールでダンディズムなオレのキャラに合わないから。
「？　どうしてこっちを見るんですか？」
「……フッ、どうもしねーよ」
キョトンと見つめ返してくる桃色ミディアムヘアの女にニヒルな態度で受け流す。どっちみち、無自覚なコイツは色々と気付いていないのだろう。
さり気ない真っ直ぐな言葉に不覚にもドギマギさせられたり。あまりにも無防備に距離が近かったり。天然モノの積極性がオレの理性を揺さぶる。増してや顔の良さもスタイルの良さも抜群ときたもんだ。
偶にとんでもない不意打ちが来てこっちのペースが乱されてしまう。こんなん意識するなという方が難しい。
打算とか計算高さとかハニートラップだったらまだどうとでもできたんだが。この女の場合はそーゆーのじゃねぇんだよな……
チビチビとお冷で唇を湿らせる。オレの横ではまだまだ酔う素振りすらない中華衣装の仙人サマが追加の酒を頼んでいた。とことんウワバミなやっちゃな。
ほどなくして出された日本酒を美味そうに飲みながら、赤みがかった瞳がオレを映す。
「ですので、綿間部には今晩うちに泊まってもらいます」

「『ですので』じゃねーよ。脈絡なさ過ぎんだろうが。理由を言え、理由を」
「その方が手っ取り早いからです。明け方になったら出かけましょう」
「待て待て。泊まる泊まらねぇは一旦置いておく。だとしても、だ。せめて夕方からでも遅くねぇだろ」
「ダメです。そう言って夜まで粘るつもりなんでしょう？　その手には乗りません」
　拒否権なし。聞く耳持たぬと華扇がピシャリと言い切った。こうなりゃ最後、テコでも動かんだろう。あーあ、また昼夜逆転かよ。それが正常？　やかましいわ。
「ったく、しゃーねぇなぁ」
「あっ」
　せめてもの仕返しに、華扇が飲んでいた日本酒をちょいと奪ってやった。上質な米とアルコールが織り成す芳醇な香りが鼻腔をくすぐる。無論、イイのは香りだけに留まらない。一口飲めばスッキリとキレのある喉越しが通り抜ける。
　勝手に酒を飲まれた仙人サマがぷくぅと頬を膨らます。
「むぅ、じゃあ私はこっちを貰いますからね」
　されど、やられっぱなしは御免だとオレからお冷を引っ手繰ると、コクコクと飲んで一息ついた。っかー、負けず嫌いめ。つか全部飲みやがった。
　その後もポツポツと言葉を交わしていった。他の客は軒並み勘定を済ませ、残った客はオレと華扇だけとなった。いつの間にかリグルもいなくなっていた。
　やがて、ふと会話が途切れる。
　肩を並べて色褪せた木目のカウンターと向き合う。ただ、それだけ。
　そこに気まずさも不快感もない。瞼を閉じたくなるような安らかな空気に包まれる。
　――嗚呼、これぞ屋台で呑むに相応しい大人の時間だと……

「今夜は寝かせませんからね」
「ンゞッ――ゴホゲホッゴッホォ!?」
「ひゃ!?　ちょっと大丈夫ですか!?」
むせた。大人の時間（笑）
「おまっ……いきなり何抜かしてんだウグフォ」
「あぁもう、今は喋らないで」
咳き込んだオレの背中を甲斐甲斐しく擦ってくれているがお前の所為やぞ。あーくそ、ちょっと鼻に入って地味にイテェ……
その発言はイロイロと誤解生むからやめーや。ほら見ろ、ミスティアが「あらまぁ」ってぇ感じで目丸くしとるやんけ。違う、ヘンな意味じゃない。どうせ徹夜で呑むとかそんなニュアンスだ。だから精力のつくメニューとか要らん。赤飯も炊かなくていい。
屋台を後にすると、華扇の口笛によって呼ばれた大鷲の協力？もあり、オレは懐かしの茨華仙の屋敷に無事連行されたのであった。
さり気なくとんでもねぇ経験してんぞ。よもや飛行機でもヘリでもなく鳥に跨って空飛ぶとは。ま、暗くて下の景色よくわかんなかったけど。
さらに華扇の家に着くなりズボンに手をかけられた。一悶着の果てに、傷の手当をしたかったのだと告げられる。最初からそう言えよ。トチ狂ったのかと危惧しただろうが。

翌朝。
「いよう。ここがあの女のハウスか」
やたら大仰な屋敷まで続く石畳に仁王立ちし、オレはポキポキと指を鳴らした（テイクツー）
喧嘩上等かかってこいやと覇気が漲っているが、かといってマジであの女に手を上げるつもりかと問われれば、んなこたぁない。
よっぽどのことがない限り女子供には手を出さない。それがオレのポリシー。なぜならオレは夜に生きる男。
ま、現在メッチャモーニングなんだが。倍プッシュで徹夜明けのテンションも上乗せされている状況。二日酔いじゃないのが唯一の救

いか。
「先に忠告しておきますが、粗暴な振る舞いは控えてくださいね」
「わぁーってるっつの。心配すんなや」
「ハァ……まったく、その口の利き方もどうにかしたいところでしたが。いっそのこと、もう一度修行しますか？」
「あーあー、聞こえませーん」
「綿間部？」
赤蛮奇みてぇなジト目で仙人サマが睨んできたので目を逸らしておく。見ざる聞かざる知らんぷり。おあつらえ向きに眼前にご立派な建物があったので、わざとらしくそっちに注目した。
茨華仙の屋敷も大概だったが、こっちもまた一段と広く大きな敷地に構えている。金持ちかよ。
見るからに大人数を招き入れることを前提とした建造であろう。道場と豪邸を足して二で割ったような印象を受ける。稗田邸の日本屋敷が腰を据えた重厚さとすれば、こっちは背筋を真っ直ぐ伸ばした誇り高さ。
歴史の教科書に出てくる豪族風情が住んでそう。どことなくカンフー染みている。清とか唐とか、その辺の時代を匂わせる。
しばらくして、屋敷の方から大勢でこちらに向かってくる集団があった。そいつらはオレと華扇の前で足を止めると、ズラリと横一列に並んだ。
どいつもこいつも同じ格好をしていやがるせいでモブにしか見えねぇ。量産型かよ。歓迎されてんだか警戒されてんだか。話しかけても同じセリフしか返ってこないオチとかねぇよな。
外見が違ったのはたった一人。その先頭にいたヤツが一歩前に出て、にこやかに言う。
「これはこれは。山の仙人様がいらっしゃるとは」
栗色の髪を猫耳っぽい形に整えた女子が、慇懃な一礼をする。
独創的なショートヘアを「和」と記された個性的な耳当てで挟む。セーラー服みたいな襟のノースリーブは、デザインに反して俗っぽさはない。むしろその逆で、スカートの装飾と相まって高貴ささえ漂

う。
　髪型やら服装やらこれまたキャラ濃いのが出てきやがった。それでいて、自然体で一つにまとまり浮きがない。端麗な顔立ちもあるのだろう。
　女の後方には道士服を着た配下と思しき連中が不動直立で控える。精錬された機敏かつ無駄のない動き。サイコパスに濁りがなさそう。
「あんたがここの親玉か？」
「いかにも。豊聡耳神子と申します」
　軽く胸に握り拳を当てて再び恭しく頭を下げる。豊聡耳神子とやらが一礼すると即座に配下も続いた。乱れがなさ過ぎて逆に怖ぇよ。洗脳されてんじゃねぇのか。
　顔を上げた亜麻色の女子が微笑みを崩さずに問いかける。
「それで、このような早朝からいかがな御用で？」
「んなモン――」
「霍青娥のことで話があって伺いました」
　キリッと表情を引き締めた華扇に押しやられた。ついでにセリフも奪われた。
「オイコラ。何すんだ」
「いいから綿間部は黙っててください。ややこしくなってしまいます」
「別にケンカ売ったりしねぇって」
「言い方というものがあるでしょう。ただでさえ口が悪いんですから」
　まさかの親玉そっちのけで売り言葉に買い言葉で言い合うオレたち。こっちから出向いておいて一体何やってんだか。
　そんな珍妙な二人組を気にした風もなく、豊聡耳神子は「ふむ……」と口元に手を当てて考えるポーズをし始めた。
「詳しく聞きましょう。どうぞ屋敷の中へ」
　豪華屋敷は神霊廟といった。
　通されたのは客間どころか大広間。
　よく極道映画なんぞで袴姿のヤクザたちが盃を交わすシーンにあ

りがちなアレ。されどその場に集うのは片手で足りるほどしかいない。モブな配下どもは修行に戻っていった。

——嗚呼、それにしても落ち着かない。

この部屋にいるのはオレと華扇、豊聡耳神子、さらに彼女が特に信頼を置いている側近が二名ほど。

——やっぱり、気になってしょうがない。

「なぁ貴公、さっきから私を随分と警戒しているみたいだが……私とは初対面だよな？」

「オ〝オ〝ッ!?」

「ぬわぁ!?　何じゃ何じゃ!?」

陰陽師染みた黒い縦長帽に深緑色の装束を纏った女が訝しげに話しかけてきた。思わず肩が飛び跳ねた。そのせいでもう片方の側近までビックリしておった。すまぬ。

声をかけてきた女は蘇我屠自古と名乗った。念のために言っておくが、決して目も合わせられないレベルの強面でも不細工でもない。それどころか八雲藍に近いタイプのイケメン寄りの美人といっても差し支えない。

ならば何故にオレがビビッて——いや、ビビッてなんかない。訂正。つい身構えてしまうのは当然ながら理由がある。

その女性には足がなかった。

足　が　な　か　っ　た

「えっと、私に何かおかしいところでもあるのか？」

あるよ。いや、あるべきハズのものがないんだよ。

そう指摘してやりたいが、喉の奥が乾いて声が裏返ってしまいそうだ。そのせいで迂闊に喋れない。

そんな中、苦笑いというよりも明らかに可笑しがっている桃色の仙人が場を和ますように伝えた。プークスクスと表現できそうな腹立たしい笑い方で、

「ごめんなさい。この人、こんなりして幽霊の類が大の苦手なんです」

「ちょバカお前っ!?」

「言わないわけにはいかないでしょう。それともまさか、その有り様で隠せているつもりだったんですか？」

いとも容易く人の弱みを暴露された。止める暇さえなかった。オレと華扇を除くその場にいた全員がパチクリと目を瞬かせる。

束の間、何ともいたたまれない空気が駆け抜けた。どうしてこうなった。

「そ、そうか。う～む、怖がってもらえるのは怨霊として悪い気はしないけれど、女としては複雑だな……」

「なんと！　お主、図体のわりには小心者じゃったか！　あっはっはっ！　あーっはっはっはっ！」

「布都、よしなさい」

蘇我屠自古とそっくりなデザインの帽子を被った銀髪ポニテの娘っ子が遠慮なく大笑いしてくれやがった。２チャンなら指さしてプギャーとでも言ってそうな勢い。さっきはすまぬと思ったが前言撤回。覚えとけよ。

ちなみに銀髪ポニテは物部布都だとかいうもう片方の側近で、あんなんでも仙人の端くれらしい。しかし言動やら態度からしてアホの子くさい。

そして、豊聡耳神子もまた仙人。つまりこの場には三人の仙人が集まっているというワケだ。いや、直に四人になるのか。

何しろ、そもそもの目的が……

「わざわざわたくしに会いに来てくださったなんて感激ですわ。何でも屋さん」

おっと、ようやくお出ましか。

真後ろの壁に穴を開けたのだろう。背後からネットリと絡みつくような色っぽい声が覆い被さる。

胡乱な目つきで振り返れば、いつぞやと変わらず青髪をメビウス型に括った艶やかな美女が蠱惑の瞳で誘いかける。

「ウフフ、お会いしたかったですわ。貴方を想わなかった日はありませんでしたのよ？」

壁抜けの仙人、青娥娘々が現れた。

「フッ、オレも会いたかったぜ」
「わ　た　ま　べ　？」
「待て違うそういう意味じゃない早とちりするな首に手をかけようとするな」

つづく

第四十一話　「四等分の仙人」

必要な役者が全て揃ったところで、こちら側の仙人サマがいの一番に切り出す。

ガーネットを彷彿とさせる赤みがかった瞳が青娥娘々を見据える。対峙する青色の仙人は余裕ぶった態度をとっていやがった。

「単刀直入に言います。あなた、妖怪の山で忌み術を使いましたね？」

「なぬ!?　青娥お主、儂らの知らぬところでそんなことしとったのか！」

「布都、口を挟むな」

喧しい方の配下がいち早く反応して素っ頓狂な声で喚く。すかさず亡霊女が状況をこじらせまいと注意を促した。似たような帽子を被っているワリに性格は正反対な模様。

肝心の本人はといえば、ハテナを浮かべて惚けた顔をしておった。まるで予想外のことを指摘されたかのような、何のこっちゃと言わんばかりに。

「青娥、どうなのですか？」

「そうですわねぇ……」

親玉にも問い質され、女は白い指先を顎に添えて記憶を掘り起こす。

うーんうーん、とこっちがイラつくぐらいに時間をかけて考え抜いて。やっとこさっとこようやく合点がいったらしく「ああ」と暢気に両手を重ねた。

「そんなこともありましたわね」

「オイコラその所為でこちとら大変だったんやぞ」

すっとぼけた物言いについメンチを切る。コイツにとっちゃ取るに足らない些細な出来事だとでもいうのか。ファックと言わざるを得ない。

ところがあの女ときたら、目つきの悪い男に睨まれているにも拘わらず、飄々と見つめ返してきやがった。あまつさえ、それだけじゃ飽き足らず蠱惑の微笑まで向けてくる。

その間にも豊聡耳神子が華扇に続きを促した。
「なるほど。具体的にはどのような事態が？」
「恐らくはキョンシーの失敗作だったのでしょう。人骨が群れを成し、山の中を彷徨っていました。数にしておよそ二十近く。運の悪いことに迷い込んだ人間が鉢合わせてしまったのです」
「そのようなことが……」
痛ましい、と呟いて猫耳モドキな女は首を振った。どうやらこの親玉にもあずかり知らないハナシだったらしい。そういや単独行動が多いとか何とか、いつだったか華扇が言っていた。
眦をキツくして説教の仙人が自由奔放な邪仙を詰問する。まるで取り調べだが、あながち間違いでもあるまい。
「なぜ放置したのですか？」
「だって、所詮は失敗作ですもの。それに、たとえ自立していたとしてもどのみち長続きしなかったはず。あんなもの放っておいても勝手に朽ちましたわ」
「あなたという人は……ッ！」
悪びれた様子もなくあっけらかんと言い返される。一体何が問題なのか。まるで理解できないといった風に青髪の女は肩をすくめた。
さらに、こっちを見ながら邪仙が畳みかけてくる。
「それもこれも何でも屋さんのせいですのよ？」
「あ？　オレだとぉ？」
「あなたがわたくしのものなってくださらないから。この満たされぬ気持ちを慰めるには何でも屋さんの代替品を生み出すしかないと、そう思っていましたのに。なかなかどうして上手くいかなかったんですもの。あんなもの、何でも屋さんとは似ても似つかないでしょう？」
「さらっとトンデモねぇこと抜かすなや。あれオレのパチモンのつもりだったのかよ。見た目どころか頭数も十九匹ぐらい多いだろうが。大体、どーやってオレの偽物作るってぇんだ？」
「ちゃんと媒体はありましたわよ？　ほら、前に褌を共にしたのを覚えていらっしゃる？　あのときに髪の毛を数本ほど採取させてもら

いましたの」
「チッ、あん時かよ。抜け目ねぇな」
荷物は何も盗られてないと安心してたらまさかの髪の毛とは。ハゲたらどうすんだ。しかもそれキョンシーじゃなくてクローン培養じゃねぇのか。今更どっちでもいいけど。
ネクロマンサーが従えるオレの贋作、想像しただけで薄ら寒い。
すると今度は青色の美女が探るような瞳で問いかける。人を見透かした微笑は相変わらずに言葉を紡ぐ。
「それで、贋作にすら届かなかった愚物はどうなりましたの？　山の仙人様が直々に手を下して？」
「いいえ。あいにくと私が駆け付けた頃には終わっていました。ここにいる綿間部が一つ残らず打ち壊したから」
「あら」
「なんと!?」
「ほぅ……」
「へー」
あちらさんが一様に、まさにハトが豆鉄砲を食らったみたいな反応を示す。誰もが華扇が片付けたと想像していたのであろう。驚愕の視線がオレに集まる。そういうこった、とニヒルに口角を上げてやった。
「うふふ」
青い髪をメビウス型に括った邪仙が愉悦と歓喜に肩を震わせる。舌なめずりしそうなネットリとした眼差しがオレに絡みつく。小悪魔チックどころかもはや蛇のそれであった。
色香を振り撒く艶姿の女が自らの身を抱き、しなを作って淫靡に腰を揺らす。いちいちエロい。
「あぁ、あぁ、やっぱり何でも屋さんは素敵ですわ。ますます欲しくなってしまいそう」
「――っ！　あげませんからね。彼は私の……ぁ」
「お前のものにもなった覚えはねぇぞ」
「わ、わかってます!!　言葉の綾ですから忘れなさいッ!!」

「だーもう、耳元で大声出すなっつの」
　仙人サマが意味不明なことを口走りやがったのでキッチリ訂正しておく。オレに言われたのが恥ずかしかったのか華扇は顔を赤らめて怒鳴った。物理的な意味で耳がイテェんだが。
　ひとしきり色っぽく笑い、やがて霍青娥はおもむろに居住まいを正した。三つ指ついて粛々とする態度は気品ある遊女を思わせる。
「つまりは、わたくしに報いを受けさせに来たというのですね。わかりましたわ。わたくしの身体でお支払いしましょう。さぁ、どうぞお好きになさって……？」
「ぶほっ!?」
　物部布都が吹いた。さっきからやたらリアクションでけーなコイツ。その脇で蘇我屠自古がイラ立ったように頭をガシガシと掻く。堪忍袋の緒が切れるまであと一押しか。
　大の苦手なゴーストタイプとはいえ、出くわしたのが朝っぱらなのも幸いして恐怖は少しずつ薄れてきた。だが、まだちょっと慣れない。
「青娥、慎みなさい」
「はい、太子様」
　三者三葉の手下どもを侍らせる親玉、豊聡耳神子がしゃんとした姿勢を崩すことなく青い女を咎めた。なして太子様？と思わなくもないが今はスルーしておく。あだ名か何かだろ。
　神子もとい太子（逆か？）がオレに向き直る。今更だが耳当てしても聞こえんのだろうか。ヘッドホンじゃねぇよなアレ。
「お客人、どうか今の発言はなかったことにしていただけませんか」
「ああ。どうせ要らん」
　弱みに付け込んで女に手ェ出した下衆だと吹聴されたら堪ったもんじゃない。下手すりゃ立場逆転してこっちが脅されるネタになっちまう。後先考えずに飛び掛かるほどお花畑なモンキーじゃねぇ。
　しかめっ面でしっしっと手を払う。だから華扇もその闘気を引っ込めろ。お前の方が喧嘩腰になってんじゃねーか。というかオレに向かって戦闘態勢とってねーか？

「はぁー、お主、小心者かと思いきやなかなかに剛毅な男じゃな。並みの男共であれば、青娥みたいな女を好きにできるとなったら目の色を変えフゴッ!?」

「いい加減黙れ!!」

蘇我屠自古の拳骨を脳天に落とされてしまい、哀れ物部布都が蹲った。マンガみてぇな鈍い効果音したんだが。さぞ痛かろう。

って、フツーに殴ってたけど実体あんのかよ。

「すまんな。阿呆なんだ」

「フッ、そんな気はしてたけどよ」

深緑装束のイケメン女子に男前な口調で謝られる。意外と自然体で応じられた。そこでダメージに呻いているアホの子がいるおかげかもしれん。サンキュー、そしてざまぁ。

騒ぎ立てる配下たちを頭目の仙人がパンパンと柏手を打って静めた。門下生も仰山いたし、リーダーシップというかカリスマはあるのだろう。高貴なオーラ出しとるし。

「では、せめて精一杯のもてなしをさせてもらいます。どうかそれで手打ちにしてもらえませんか。無論、彼女には後程厳しく言っておきますので」

「ま、迷惑料としちゃ妥当な落としどころだわな。いいぜ。朝飯もまだだったしよ」

食事の用意がされるのに合わせて、青娥娘々、物部布都、蘇我屠自古の三名は下がっていった。

オレの隣に華扇、正面には豊聡耳神子が座る。

とりあえず、やっと落ち着くことができるってぇモンだぜ。一応言っておくが、決して蘇我屠自古がいなくなって安心したワケではない。

修行中の仙人のメシというから、てっきり寺の精進料理みたいな粗食な献立かと思ってたがそんなことはなかった。もてなしと呼ぶのに遜色ない待遇がなされた。

旅館もかくやといわんばかりの立派な御膳が置かれる。白米と吸

い物を手前に、おかずに刺身やら筑前煮やらの小鉢が添えられる。ド素人の目利きでもわかる上物の器が使われていた。メニューの一つ一つが着飾ったように見栄えする。

配膳を終えた門下生が一礼して襖を閉める。しん、と部屋の空気が静まり返った。オレたちを除いて人の気配はない。

豊聡耳神子が息を吐く。そして、

「うん、今はいいかな」

これまでの厳かな雰囲気が跡形もなく抜け落ちて、その表情も年頃の少女らしい柔和なものに変わった。口調も違う。

「ほーん……そっちが素ってぇワケか」

「うん。門下生の前だとそれなりに威厳を保たないといけないから。もう慣れたんだけど、今でも時々肩が凝っちゃう。あ、さっきはあんな風だったけど、いつもは青娥たちの前でもこうなのよ？」

軽い調子でおどけてみせる亜麻色の仙人。今の彼女はどこからどう見ても年相応の少女でしかない。オレとしてもこっちの方が親しみやすくて気が楽だ。

実際、そんな華奢な体で四六時中にわたって肩肘張ってたら、さすがに疲れもするだろう。ノースリーブで露出した素肌はさながら箱入り娘のように色白だ。

「触ってみる？」

「あ？　何がや」

「私の肩のあたりをチラチラ見てたから、もしかして触りたいのかなぁって」

「ふーん、そうなんですか綿間部……？」

気付けば華扇の目つきが据わっていやがった。

この仙人サマ、どーにもその手のネタに敏感な節があるように思う。己は無防備なクセしてどういうこった。

「違ぇわ。ったく、仙人ってヤツはどいつもこいつも色仕掛けが得意技なんかよ……」

「なぁっ!?　わ、私がいつそんな破廉恥な真似をしたというんですか！」

オレが溜息ついでにぼやくと華扇が赤面しながら怒ってきた。そらお前は天然モノだかんな。

そういえば、猫耳ヘアが猫かぶりを止めてもこの女は驚いていなかった。つまるところ、知っていたというワケだ。オレだけ蚊帳の外だったんかい。

兎にも角にも、外交向きの顔ではなく素面になった豊聡耳神子が飾らない笑みを浮かべた。

「じゃあ、気を取り直していただきましょう」

「んー♪」

ハートマークが飛んでそうなほど幸せいっぱいに、桃色ミディアムヘアの仙人サマがご馳走を噛みしめている。相変わらず食にかける造詣が深いこって。

吸い物を啜る。徹夜明けの胃にも優しい薄めの味付け。具材も麩と三つ葉が少し入っている程度。それでいい。それがいい。

「本当にごめんなさいね。基本的に青娥は一人だけ別行動とっているから。たまに芳香を連れているんだけど……」

「まったくだ。つーか、誰だよ芳香って」

「青娥が一番お気に入りのキョンシー」

亜麻色の髪をもつ仙人の答えにあぁと納得する。そういやネクロマンサーだったわな。

沢庵を箸で摘み上げ、ポリポリと咀嚼する。そのまま白米を掻っ込んだ。こうも日本人らしい朝飯にありつけたのは久しい。そもそも、いつもなら寝ている時間だ。

おまけに幻想郷じゃジャンクフードの店もなし。ここのところムダに健康的になっている気がしなくもない。

「うちに来るために華扇さんに協力してもらったの？」

「ま、そんなところだ。コイツん家で徹夜したんだよ。おかげで寝不足だ」

「え」

短い声とともに太子サマがパチクリと目を瞬かせる。どこか気ま

ずそうに目を逸らし、それでもどうにかこうにか慎重に言葉を選ぶ。
「え、えぇーっと。昨夜はお楽しみでしたね……？」
「違いますッ!!」
さすがに聞き捨てならなかったのか箸を握り締めて仙人サマが叫んだ。なぜかオレが悪いみてぇな空気を醸し出して。つくづくこーゆー時は決まって男が不利となる。世知辛いことこの上ない。
うー、と恨みがましくオレを睨んでくる華扇に我関せず。お椀を手に取り再び吸い物を啜った。旨し。

「でも凄いわね。二十近くいた物の怪をたった一人で全部やっつけるなんて。正直言うと、外来人ってもっとこう……博麗の巫女に保護されるだけの人たちだと思ってた」
「フッ、コレにはちったぁ自信があんだよ」
これ見よがしに拳をチラつかせて得意気に言ってのける。
別に喧嘩好きじゃない。夜の繁華街ですったもんだやっている中で自ずと鍛えられたに過ぎない。いざという時に備えて多少のトレーニングもしたが、専ら実践主義の叩き上げ。所詮はチンピラ相手の喧嘩技法だ。
すると、豊聡耳神子が思惑ありげに口元を緩めた。
「それじゃあ一つ、何でも屋さんに依頼をしてもいいかな。もちろん報酬は別口で用意するから」
「そら構わねぇけど、内容によるぞ」
「よかった。華扇さんはどう？　少しだけ彼借りてもいい？」
「ええ、どうぞ存分に扱き使ってあげてください」
「ちょい待て、どーしてコイツにまで許可求めんだよ」
いとも容易く行われたえげつないやり取りに思わずツッコミを入れちまった。華扇も当たり前みたいにオーケー出すなや。オレじゃなかったら見逃してたわ。
オレが待ったをかけると豊聡耳神子が意外そうに目を丸くした。
「え、華扇さんの弟子なんじゃないの？」
「全然違う。オレはフリーランスだ。どこにも属さねぇ」

危うく誤解されたままいくところだった。もしや人里でもオレが華扇の弟子という設定になっていやしないだろうか。今になって心配になってきたんだが。

その後もあーだこーだと話が脱線したりしつつも、ひとまず依頼は引き受ける方向に進んだ。

さて、とノースリーブな女子が正座を整えて言い放つ。

「うちの門下生と組手をしてほしいの。その実力、是非とも見せてくれない？」

つづく

第四十二話　「ラッキースケベでインガオホー」

神霊廟のカンフー染みた建物を背景にして石畳を踏みしめる。
オレの周りを取り囲むように道士服の門下生共が立ち並んでいる。
太子サマがその中から三名ほど指名する。呼ばれた輩が毅然とした面構えで一歩前に出た。三銃士かよ。
食事風景の少女らしさは鳴りを潜め、すっかり外様向けの猫かぶりに逆戻りときた。笏らしき細長い板切れを携える立ち姿がなかなか様になっている。
親玉キャラの仙人が悠々とした表情と口振りで述べる。
「彼らは門下生の中でも特に腕が確かな者たちです。フフ、手強いですよ？」
「んだよ。てっきり全員でかかってくんのかと思ったんだが。一対二十で勝った実力が見たいんじゃなかったのか？」
「あくまで組手の試合ですから。見て学ぶのもまた良し。かく言う貴方も本調子ではないのでしょう？」
「ハッ……お見通しってワケか。ま、三人ぐらいなら丁度いいハンデにならぁ」
豊聡耳神子――いい加減にフルネームが面倒くさいので今後は神子と呼ぶ。
彼女は他人の欲を聞き取ることができるという。幻想郷お馴染みの能力者ってぇコトだ。その名も「十人の話を同時に聞くことができる程度の能力」オレが夜型だとバレバレなのも異能のなせる業である。
ところで、十人の話を同時に聞くといわれれば、歴史に聡い諸君なら薄々感づいたかもしれない。その通り。だからこそヤツは配下から太子様と呼ばれる。歴史キャラが美少女だったとかどこぞの教材かソシャゲの類か。
物部布都が声高らかに開戦の狼煙を上げる。
「これより！　山の仙人殿の弟子『だから弟子じゃねーって言っとるだろうが！』――ありゃ、違うのか？」

「布都、いいから始めなさい」
「わっかりましたぞ太子様！　うぉっほん、えー、それでは……始めぇい!!」
　ウザい系配下がえいやと力任せなフルスイングで銅鑼を叩く。空気を波打つ重低音が辺り一帯に響き渡った。
「イヤーッ！」
「イヤーッ！」
「イヤーッ！」
　合図が鳴り響くと同時に、鬨の声を上げて三銃士が躍りかかってくる。
　没個性の代わり映えしないモブと侮るなかれ。亜麻色の仙人が推薦するだけあって動きは俊敏でキレがあった。さすがに脳ミソのないガイコツ連中とは比べるべくもない。
　たった三人、されど三人。烏合の衆よりも遥かに難敵。だとしても、一方的にボコられる趣味もなし。
「――シッ」
　初撃の張り手を身体を横にずらして避ける。間髪入れず、空振りして通り過ぎた隙だらけの背中を蹴り飛ばす。
　二人目の正掌は手四つで真っ向から受け止めた。力が拮抗したと見せかけ、不意を突いて逆に引っ張り、爪先を躓かせる。そうなれば転倒は避けられなかった。
「――ッ！」
　最後の一人が眼前にまで迫り、咄嗟に腕を交差して防ぐ。直後、正拳突きがオレを襲った。
「グゥッ!?」
　ビリビリと痺れる衝撃が腕を伝う。一撃が重い。やるじゃねーか。だったら倍返しだ受け取りやがれ。
　地面すれすれの低空で足払いをかける。まさか防御したまま反撃がくるとは思わなかったろう。足首を刈られた門下生は受け身も取れぬままに石畳に倒れ伏した。コレで全員から一ダウンずつ奪ってやった。

「ほら立てよ。まさかこんなもんじゃねーだろ？」
揃ってオレに転ばされた連中に目掛けて、クイクイと「かかってこい」ポーズの挑発を飛ばす。
まだまだ依頼は始まったばかり。道士服トリオがむくりと起き上がったのに合わせて、こちらも得意のファイティング・ポーズを取った。
上等、そうこなくっちゃ面白くねぇわな。

「綿間部……」
茨木華扇は目の前で行われる試合の流れに意識を奪われっぱなしだった。
あの時、自分が駆け付けた頃にはすべて片付いていた。あの男の活躍を見逃してしまったのが惜しかった。だから、此度の豊聡耳神子の依頼はいわば渡りに船といえた。
はたして彼はどんな大立ち回りを見せてくれるのかしら。ワクワクしながら組手が始まるのを待った。
そして、いざ試合開始となって目の当たりにした光景は、彼女の期待をも軽々と上回る。
赤みがかった瞳が黒い青年の大胆かつ強靭な身のこなしを追いかける。ほう、と感嘆の息が漏れる。包帯が巻かれた右手が添えられた頬をほんのり桜色に染めて。
こっそり隣にまで寄り添った神子が、彼女にだけ聞こえるように声量を抑えつつ口調を崩した。
「華扇さんは彼を弟子にするつもりないの？　なかなか筋が良いと思うけれど」
「そうですね……」
もし、綿間部を弟子にしたら。そんな未来予想図に想像を馳せてみる。
一緒に修行して、あわよくば一つ屋根の下で暮らすこともあるかもしれない。怠けようものならいつでも喝を入れられる。自らの手であの男を真人間に仕立て上げるには、魅力的な提案だろう。

（でも……）

そっとまつ毛の長い瞼を伏せて、桃色の少女は頭を振った。

「いえ。だとしても、やめておきます」

「どうして？」

「綿間部とは上下関係になりたくないんです」

彼から師匠と呼ばれるのは満更でもない、と思う。

でも、綿間部には華扇と、いつまでも名前で呼んでほしいから。同じ場所で、隣同士で並びあっていたいから。

そんな願いを心に抱くと、少女の胸の奥が甘く疼いた。彼女にそっくりな淡い桃色の想いが秘かに芽吹く。

その蕾が花開く時は、きっと……

「オォオオッ！」

数の不利には地の利を活かして対抗する。

垂直に生える樹木を滝登りの如く駆け上がり、反動をつけた跳躍で道士服の真後ろに回り込む。再び足払い。この手の攻めに耐性がないのか簡単に引っ掛かってくれる。

いちいちセコい？一度にまとまった数を相手にしないための常套手段だ。文句は言わせん。ただし今回はそれだけで終わりじゃねぇ。

狙い通りに転がった男の足首をガッチリ掴む。直後、ヤツの胴体がオレの武器となり、円を描いて豪快にブン回される。ジャイアントスイングの旋風が巻き起こった。

「どぅぉおおらぁッ!!」

仲間をウェポン兼シールドにされてしまい、残り二人も迂闊に近寄れずたたらを踏む。

「ぼさっとすんじゃねーぜオラァ！」

そんな標的に狙いを定めて手を離す。放り投げられた人間砲弾は遠心力を上乗せした威力をもって、味方もろともブッ飛ばしていった。

ところが何というタフガイの集まりか。あれだけの大技が直撃したにも拘らずヤツらは未だに戦闘不能にまで至らない。なるほど確

かに伊達に鍛えられてねぇってか。
　偉大なる太子サマの前で無様を晒して負けられぬと、すぐさま立ち上がって挑みかかってくる。
「イヤーッ！」
「イヤーッ！」
「イヤーッ！」
「クソッタレ！　いつまでやればいいんだァ!?」
　悪態をつきながらも迎え撃つ。ちいっと疲れてきたのだが、終わりの合図は鳴る兆しすらない。
　つーか組手ってこんな感じでイイのかよ。ただの乱闘と大差ねぇぞオイ。
　もしやアレか、由緒正しい拳法の型だとか常識に囚われてはいけませんってぇ忠告を学ばせる腹積もりなのか。確かに、清く正しい修行中の輩からすれば、繁華街の喧嘩技法なんざ出鱈目で空手みてぇな型もクソもありゃしない。
「そこじゃ！　いけぇい！　んぁぁあッ何をやっとるかぁ！」
　銀髪ポニテの下級仙人が喚き散らしながらついでに手も振り回す。その度に握っていたバチが銅鑼に盛大に当たり、ひっきりなしにグワングワンと大音量が耳障り過ぎた。
　ギャーギャーと喧しいのと大気を震わす重音の二重奏が鳴り止まない。よくよく見れば組手の三人組どころか観衆の門下生までもが青筋を浮かべていた。それな。
「ハッ、お互い苦労するな！」
　ここまできたら全員倒すかオレが倒れるまで終わらない感じすらある。
　オレの懐を目掛けて飛び込んできたテレフォンパンチをバックステップで躱す。振り下ろした拳は空を切って地面を殴りつけた。チャンス到来。
「ちぃーっと失敬すんぜ！」
　さながらターミネーターの登場シーンにも似た低姿勢になっている男を踏み台にして、肩、そして顔面へと駆け上がる。

そのまま次のヤツ、さらに次のヤツへと顔面から顔面を目掛けて跳躍で飛び移った。
「よっ、ほっ、とぅ！」
「エェ―イッ!?」
「エェ―イッ!?」
「エェ―イッ!?」
ツラを踏んず蹴られる度に連中の口から妙な奇声が上がった。さっきから何なん、お前ら。
さすがに顔面だけで人ひとりの全体重を支えられるなどできるハズもなし。結果、そいつがトドメとなった。謎の奇声を断末魔に門下生どもが続々と膝をつく。
この瞬間をもって、勝利あった。
ただし、最後の最後まで油断さえしなければ。この後の悲劇は起きなかった……
「太子様」
「屠自古、どうかしましたか？」
「おおぉ!?」
しばらく姿を消していたゴースト女が脈絡なく現れる。つい条件反射で動揺してしまい、よりにもよって空中で体の均衡を崩す。バランス感覚が崩壊し、着地に失敗してしまう。
あわや足を挫く寸前だったがそこはどうにか避けられた。が、慣性の法則はどうにもできない。
「っと、っと……おぉおう!?」
幾ら足掻いても踏み止まれず、まるで片足飛びのような滑稽な動きでその先へと進んでしまう。桃色と亜麻色の仙人コンビがいる方向へ。
「どっ、どけぇぇえ!?」
「えぇっ!?」
「綿間部!?」
とうとう踏ん張り切れず、オレは前のめりに倒れ――

ふにゆっ

「きゃっ!?」

ほんのりと柔らかいクッションに顔が埋められた。

華扇のと見比べてしまうと些か慎ましい。サイズはCぐらいか。されど確かに包み込まれる女の膨らみ。おまけに鼻先からお香らしき匂いまで漂ってくる。

『……』

空気が死んだ。

コレはマズイ。すぐ横には説教の鬼が佇んでいるのだ。この手のハプニングは真っ平許せぬ、女の敵殺すべしな問答無用なヤツが。

「ま、待て華扇！　こいつは事故だろ!?」

説教されては堪らぬと、すぐさま言い訳を捲し立てる。バッと顔を離して、彼女を止めようと手を伸ばし――

むにゅう

「ひぁっ、あん！」

甘い嬌声とともに、手のひらが豊満なそれを鷲掴みにした。おそらくFは軽くいくであろう。片手の指に到底収まり切らないたわわな実り。指先まで余すことなくマシュマロみたいな柔らかい感触を確かめられる。ちょっと力が入ってしまうと、彼女の身体がわずかに跳ねた。

小野塚小町よりも一枚上手かもしれん。って、ナニ考えてんだオレは。

『……』

再び、空気が死んだ。

桃色ミディアムヘアで中華衣装の白いシニョンな仙人サマの整った顔立ちがみるみるうちに真っ赤に染まっていく。赤みがかった瞳は羞恥と怒りで潤み、わなわなと口元が震えた。

情状酌量などもってのほか。ついに茨木華扇が怒髪天を突く。

「こ、この……エ……エ……エロガッパーーーーーーーーッ!!」
「後生やぁあああ!!」
もはや弁明なんぞ何の意味を持たなかった。だからオレは逃亡を試みた。
逃げ惑うオレを怒り狂う華扇が追いかける。迫りくる裁きの鉄槌から逃れんと、思わず手近にいた門下生の一人を身代わりに前に押し出してしまう。コンマ一秒後、男の鳩尾に包帯の拳が減り込んだ。
形容し難い苦悶の表情で崩れ落ちる門下生から手を離し、なりふり構わず背を向ける。
すべてはオレが生き残るために。
「こんのぉおおおおおッ!!」
「ひぃいいいい!?」
桃色の修羅が襲い来る度に道士服たちを盾にして我が身を守る。巻き込まれた連中が次から次へと風に舞う木の葉の如く尽く蹴散らされていく。
「グワーッ!」
「グワーッ!」
「ア、アバーッ!　サヨナラ!」
「のぁあああああ!?」
「待ちなさーい!!」
組手の三人組がやられ、ついには観衆までもが犠牲となり始める。神子たちはちゃっかり避難していた。ブチ切れた説教の鬼を止められる者など、もはや誰もいない。
「粛清――――――ッ!!」
「ごばぁぁあああああッ!?」
全滅。

その後のことを少しだけ語ろう。
あれから、本物の仙人との圧倒的な実力差を肌身を通じて思い知らされた門下生たちは、遥か遠い頂に己の未熟さを痛感して、ますます修行に励むようになったという。原因が原因だけにちょっと複雑だ

と豊聡耳神子が苦笑いを浮かべていた。
そしてオレはといえば。
しばらく華扇から「綿間部」ではなく「スケベ」と呼ばれる日々が続き、人里でもヒソヒソと白い目で見られるハメになった。
泣けるぜ。

つづく

第四十三話　「電気ネズミといってもポケットなアレじゃない」

その晩は、雷雲が轟く悪天候だった。

「ぐぉ……ったく、もう夜か」

十分な睡眠で勝手に目が覚めた。スマホのアラーム設定なんざ使う必要もない。ド田舎異世界の幻想郷じゃタイムスケジュールを組んだってしゃーねぇ。

起床して真っ先に耳に届いたのは、雨粒が叩きつけ稲妻が唸る曇天のお知らせ。いや、曇天どころじゃねーわな。

こんな天気にわざわざ出歩く輩もいなかろう。よって、本日の臨時休業が決定した。

「……あ？」

ようやく脳ミソが覚醒すると同時に、ふとした疑問に首を傾げる。普段ならば暗がりに目が慣れる（暗順応だったか？）まで暫し時間を要するハズ。ところが、今夜に限っていつもと違うことに気付いた。スマホの画面も点いてないのにテント内が妙に明るい。

その犯人は、オレの足元にいた。

「何だコイツ」

小さい獣がおった。

ネズミとイタチと足して二で割ったような、珍妙な動物。頭の天辺から背筋を通って尻尾の先に至るまで続く、モヒカンもしくはトサカみてぇに逆立った毛だけ色が濃い。体長はせいぜい猫ぐらい。ネズミと呼ぶにはちぃっとばかりデカいかもしれん。

極めつけに、ソイツの全身にまとわりつくパチパチと静電気らしき小さな稲妻が爆ぜる。それが明るさの原因となっていた。

ヘンテコな生き物はオレにちんまい背中を向けて、テントの片隅に放置してあったボストンバックを爪とぎの如く何度も引っ掻いていた。意外と爪が鋭い。

「オイ、何してんだ」

声をかけると引っ掻き攻撃を止めて、こっちを向く謎の生物。何となくだが珍しい種族だとわかった。こんなヤツ見たことねーし、さっきからパチパチいっとるし。ワタパチかよ。

オレを見返すつぶらな瞳はいかにも何か言いたげであった。鳴き声もない。その代わりに静電気で主張しまくっている。電気ネズミ……いや、まさかな。

メッセージが通じないと悟ったのか、ヤツは何事もなかったかのように再びボストンバックを引っ掻き始めた。

「って、やめーや」

むんずと首根っこを掴んで持ち上げる。バチッときたが感電するほどでもない。というか、ネズミ（仮称）相手に話しかけるとか寂しい一人暮らしかオレは。

フツーなら野良ナマモノが侵入していたとなれば外に放り投げても文句なし。が、物珍しさもあってまじまじと観察してしまう。

「変なやっちゃな、お前」

思わずぼやくとパチッ！とちょい増しで紫電が荒れた。まるで抗議しているみたいで驚かされた。どうやら賢しいことに言葉が通じるらしい。

ま、頭が良くても所詮は動物。侵入した目的は何だと問われれば、おおよそ食い物が欲しかったんだろう。小動物を一旦下ろして荷物を奥まで漁ってみる。

最初に出てきたのは、いつぞや華扇が嫌っていたナッツ類。

「コレか？」

鼻先に近づけてみたがフイッと横を向かれた。反応はイマイチ。ハズレか。他に食糧なんざ持っていたっけか？あいにく保存食を蓄えるタイプじゃねぇぞ。それともカロリーメイトでも入っていたか？

ふいに、指先がとある袋詰めに当たった。

「うぉ、懐かし……って、まさかコッチなのか？」

オレ自身すっかり忘れていた代物が見つかった。半信半疑で呟きつつブツを取り出す。賞味期限が間近な店の余り物を押し付けられ

た記憶が蘇る。そんなこともあったな。

既に賞味期限切れだが未開封だしセーフだろ。そう自らに言い聞かせて、お徳用パックのポップコーンを静電気ケモノの前に置く。

すると、テンションが上がったかのように電気の勢いが増しやがった。心なしか嬉しそうにも見え、つぶらな瞳も輝いている気がしないでもない。

「マジか。お前こんなん食うのかよ?」

返事は一目瞭然だった。電気は口ほどにものを言うってか。

未開封だった袋を開け、試しに与えてみるとがっつくように飛びついた。シャクシャクと貪り、食い始める。塩も振ってない素焼きだから犬猫ネズミが食っても平気だと信じよう。

ぶっちゃけオレ自身はポップコーンがあまり好きじゃない。味気ねぇし。おかげで長らくほったらかしにしていたことすら見事に忘れていた。よもやナゾのネズミモドキの餌になるとは予想だにせんかったが。

しかしながら、全長三十センチかそこらの小動物が徳用サイズを一匹で完食できるハズもなく、ほとんど残して食うのを止めてしまった。さらに、用は済んだとばかりにそそくさとテントを抜け出していく。呼び止める暇さえなかった。

「何だったんだ、一体」

呆気にとられて呟きが零れる。

ヤツが去ったばかりのテントの入り口から雨水が少し入り、内側が濡れてしまっていた。

その後も数日にわたって雷雨を振るう悪天候は続いた。

簡素なテント暮らしには心臓に悪いことこの上ない。おまけに商売あがったり。勘弁してくれと言いたい。

次の日も例のネズミモドキが居座っていた。いつの間にか侵入しており、またもやボストンバックに爪を立てていやがった。

雨宿りか、はたまた住処にされちまったのか。知る由もない。わかるのはメシを寄越せというコイツなりの自己主張ってぇところか。

「ホレ、お前のせいで開けちまったんだから責任もって食えよ」
ただでさえ賞味期限がアウトだったのを開封してしまった手前、早めに片付けてしまいたい。昨日に続いてポップコーンで餌付けする。オレも一粒だけ齧ってみたが、やっぱり味気ない。
しばらくすると謎生物は満腹になり、さっさとテントから出て行った。まるで昨日をリプレイしているみたいで、オレも止めなかった。
「明日も来そうだな……」
その予感は、見事に当たることになる。
翌日も、さらに次の日も。毎晩欠かさずこの変な生き物はメシを集りに来やがった。
スマホのアラームもなし、悪天候のおかげで仙人サマのモーニングコール突撃もない。だというのに、惰眠を貪れず、ヘンな生き物に叩き起こされる。
「ったく、めんどくせぇなー」
もっとも、ダラダラと文句を言いつつもちゃっかり食わしてやってるオレも大概かもしれない。
そんな中、ふと思い至った。未開封の袋から匂いがはみ出ることはまずありえない。なのにコイツはここに来た。てっきりポップコーンに釣られてやってきたとばかり思っていたが、よくよく考えてみればそれだと違和感がある。
ひょっとして他にも気になる匂いでもあったのか……？
そこまでアタマを働かせたが、なぜか途中から急に面倒になってきて思考を手放した。
「あー……だりぃ……」

三日三晩続いた雷鳴轟く荒天がようやく過ぎ去った。
澄んだ夜空が広がる。まるで不純物を雨水が洗い流したかのようにスッキリしていた。
数日ぶりに依頼がないか人里を出歩く。焦る必要はない。そのうちお呼びがかかるだろうと楽観的に捉える。ただ、問題が一つだけあった。

「おかしいだろ……どーして夜なのに力が入らねぇんだ」
夏バテでもしたのか妙に身体が怠い。
気力を振り絞って出張ってきたはいいものの、オレの足取りは重かった。
夏風邪の症状とも言い難い。現に熱っぽさもなければ喉の痛みもない。ただし、異様なまでに全身が重く感じられた。
とにかくヤル気が湧いてこない。何をするにしても面倒くさくてしょうがない。
「どうなってんだ……？」
歩けば歩くほど倦怠感が身体中の隅々まで侵していく。両手両足、肩、背中、胴体すべてにウエイトを巻き付けて登山させられる錯覚に陥る。一歩進む度に見えない重圧に押し潰される。
異常なのは明らかだった。だというのに、この不測の事態を解決するのさえも億劫になる。体は鈍るわ頭も鈍るわの悪循環が廻った。
「あーくそ、歩くのもメンドくなってきた」
意味不明な戯言まで吐き捨てて、ついには立ち止まってしまう。ダメだ。立つのもやってらんねぇ……
前のめりに身体が傾く。この間のようなクッションもなく、あっさりと地面に倒れた。ドサリ、と己が崩れ落ちた音がどこか遠くに聞こえる。
突然に人がブッ倒れたとあって、すぐさま人だかりができ始めた。
「おい、あんた大丈夫か!?」
「この黒い恰好……何でも屋のあんちゃんじゃないか！」
「なにっ、華仙様の恋人か!?」
恋人じゃねーよ。そうツッコんでやりたいが怠くて声も出せない。
夜中とはいえ人里の往来のド真ん中とくれば、当たり前だがそら目立つ。いくつもの視線がオレに突き刺さった。
『外』と違うのは通行人が見て見ぬふりせず、それどころか率先して駆け寄ってくれることか。人情なこって。
動かねぇ、返事もねぇ、倒れ伏したまま無反応。微動だにしない有り様に周囲の人だかりもこりゃヤバいぞと緊張が走った。有志の男

たちがオレの腕を肩に回して立ち上がらせる。
もはや急患の扱いまである。一大事だと言わんばかりに大声が飛び交った。
「永遠亭に行くには遠いぞ！」
「まずは慧音様に知らせろ！」
「どこか横になれる場所を準備してやれ！　ひとまず安静にさせるんだ！」
ちょっとこれはシャレにならん。いくらなんでもエライことになってきた。無理矢理にでも声を絞り出す。
「いいから……その辺に、捨て置け」
「おぉ、気が付いたか。待ってろ、すぐに安静になれる所に連れて行ってやるからな」
「だーもう……」
やめろって。こちとらただ怠いだけなんだからよ。
しかしオレの要望など聞いちゃくれない。あれよあれよという間にオレは救急者（誤字にあらず）によってどこかへ運び出されてしまったのだった。
もうどうにでもなれ。抵抗するのもメンドクセー。

つづく

第四十四話　「世の中案外ダメもとでも言ってみるもの」

「どーしてこうなった」

寝っ転がり天井に向かって言葉を飛ばした。当然、返事はない。

気付けば集会場にまで担ぎ込まれた。この間の依頼で待ち合わせた場所だ。ちょっと前まで上白沢女史が来ていたが、「薬を探してくる」と言い残して一旦姿を消した。

だから病気じゃねぇっつの。だがしかし、弁明するにも気力が足りず、人里の守護者サマを見送ってしまった。

だだっ広い空間にただ一人取り残される。そのうち医者でも連れてくるんじゃなかろうか。仮病と疑われたら厄介なのだが、どうしたもんかね。

そういや、あのネズミっぽい珍獣を今夜はまだ見ていないが、現在進行形でテントにいたりしねぇよな？　尖った爪で荷物に穴を開けられてポップコーンが散乱する惨状を思い浮かべた。こっちもアカンやつや。

止めにいかねばならんのに、いざ動こうとすると気疲れが襲う。あ、コレ詰んだわ。

「綿間部!!」

動けぬ動かぬその矢先、彼女がやってきた。

切羽詰まった様相で華扇が勢いよく飛び込んでくる。息を乱しながら大声を張り上げて、よっぽど急いできたのが伺える。心配そうな顔に少しだけ乱れた前髪がそれを物語っていた。

「よう……」

「よう、じゃありませんッ！　道端で倒れたって本当なのですか!?　どこか怪我は!?　それとも病気なの!?」

「落ち着けっつの」

こんな時でもキチンと靴を脱ぎ揃えてから慌ただしく上がるという器用なマネをする。仙人サマが駆け寄ってきて寝そべるオレの顔

を上から覗き込んだ。その拍子にサラリと垂れ下がる桃色ミディアムヘアの艶やかさが目を惹く。

ともあれナイスタイミング。ちょうど誰かに頼みたいことがあったり。フツーだったら思っても口にしない内容だという自覚もある。けれど悲しきかな、あいにくと今のオレはイロイロとマトモじゃない。

「どーにも身体が重くてな……なぁ、華扇」

「何ですか？」

「膝枕してくれ」

「は……へぇえええ!?」

赤みがかった瞳を大きく見開き、上擦った声をあげて動揺された。ついでに顔も紅潮させて。ま、その気持ちもわからんでもない。我ながら何抜かしてんだと思う。

けれども現状の枕は薄っぺらい座布団を敷いただけ。おかげで後頭部が地味に痛くて敵わない。そのことを伝えようにも説明するのが面倒で以下略。

その一方で華扇はといえば、眉間にしわを寄せて悩んだり、かと思えば、だらしなく頬を緩ませてニヤけたり。さながら百面相ばりに表情をコロコロと変えながらやけに考え込んでいた。さすがにダメだったか？

彼女は指同士をつつき合わせながら目を逸らして、ポソッと控えめに言葉を漏らした。

「し、仕方ありませんね……今回だけ、特別ですよ？」

まさかのオーケーであった。いや、頼んだのオレなんだけど。

女はオレの頭を軽く持ち上げると生まれた空間に折り畳んだ膝を割り込ませた。後頭部に華扇の膝枕が敷かれる。

「おぉ……」

柔らかく、それでいて程好くハリのある弾力が伝わってくる。健康的で肉付きのイイ太腿が生み出す感触は、至高の一言に尽きた。女の柔肌から人肌の温もりに包まれる。

固い木の床や煎餅みてぇな薄っぺらい座布団なんぞ比べ物になら

ない。それどころか、そこら辺の枕にも勝る心地良さ。
「悪くねぇな……」
「そ、そうですか」
見上げるオレと見下ろす華扇、二人の目が合う。
目鼻立ちは整っており肌もきめ細やか、桃色のミディアムヘアを括る白いシニョンがよく似合う。顔の近さにうっかり見入ってしまう。つくづく美人だと思い知らされる。
しかも膝枕の効能なのか少しだけ身体が楽になった。その証拠に腕を伸ばすくらいはできた。僅かに上げた右手で華扇の頬に触れる。
「ぁ……」
「（メッチャ快適だし）ずっとこうしていたい」
「綿間部……」
仙人サマの瞳が潤み、熱っぽく蕩けた表情を浮かべる。声色も甘く、オレの耳をくすぐった。彼女もまたオレの方へと手を伸ばし、オールバックの黒髪を梳き始めた。
慈しむような眼差しで、桃色の少女が微笑みかける。ほんのり桜色に色付いた頬は微かに熱を帯びていた。
「ねぇ。どうしてこうなったか、心当たりはありませんか？」
「さぁな。夏風邪じゃねーけどよ」
「……うん、熱はないみたいですね」
手のひらをデコに乗せて、華扇は確かにと頷いた。むしろ熱があんのはそっちだろうに。
ちなみに熱を測り終えた後も手のひらは退かれなかった。煩わしさはない。女らしい滑らかな手触りが不快になろうものかよ。
いっそのこと、このまま寝落ちしてしまおうか。どうせ今夜は何もする気も起きないのだ。ま、一つだけ気がかりがあるとすれば、
「ネズ公に餌やってねぇことか……」
「ネズミですか？」
オレの独り言に、華扇がオウム返しに尋ねた。キョトンとした顔で瞬きを繰り返す。さすが動物の話題になると耳聡い。ついでに女将はあざとい。

隠し事でもなし。特に深く考えず、オレはここ数日の出来事をこの女に聞かせてやった。
「変なヤツがアジトに居着いてんだよ。ネズミっぽい生き物。静電気みてぇなモンで体をパチパチさせていやがんだわ」
「え」
「そんでポップコーン……つってもわかんねーか。平たく言えばトウモロコシの焼き菓子だ。それを集りに毎晩ウチに侵入してる」
「……」
「あぁ……考えてみりゃ、オレの調子が狂ってきたのもあのネズミモドキが住み着いてからか。妙な偶然もあったもんだわな」
「……」
「……華扇？」
急に黙り込んだ仙人サマの顔を覗き込む。
なぜか彼女は何とも言えない複雑そうなツラをしていやがった。
「やっちまったなぁ……」という自責の念と「そういうことか」という納得が合わさった感じ。
要するに、誰の目から見ても怪しさ満点であった。
「ったく、どーしたんだ？」
「あの――」
「黒岩、薬を持ってきたぞ」
幸か不幸か、仙人サマのセリフを遮るかたちで上白沢女史が戻ってきた。
まだオレたちに気付いた様子はなく、靴を脱ぎながら「鈴仙が置き薬を補充していってくれて助かったよ」と満足げに言っている。鈴仙とか知らんがな。
室内に上がったところで、ようやく彼女はオレと華扇の状況を目の当たりにした。それはもうバッチリと。タイミング遅ぇよ。
はじめは「え」と固まり、次いで右へ左へと目線を忙しなく泳がし、最終的には気まずそうな引きつった苦笑いで、
「お、お邪魔だったか？」
「ち!?　ちがっ、違いますから!!」

「あだっ」
女教師の間違った気遣いに華扇が赤面しながら慌てふためく。人を膝枕したのも忘れて立ち上がられ、後頭部を床にしこたま打ち付けた。鈍い音を響く。
誤解だ何だと早口で捲し立てる仙人サマに気圧されて、人里の守護者も頷くしかなかった。その光景を尻目にオレは依然転がったまま放置される。何だコレ。
ほどなくして、ひとしきり誤解を解き終わった華扇が改まったように咳払いした。照れ隠しにも見えなくないが、言わぬが花だろう。オレとしても他意はない。そのつもりだ。
「それよりも慧音さん。彼の体調不良が何によるものかわかりました。この症状に効く特効薬はトウモロコシです。芯ごと砕いたものを準備していただけませんか」
「あ、ああ。承知した。すぐに用意しよう」
「お願いします」
その前に湿布か氷嚢を持ってきてくれないだろうか。頭痛いんですけど。

「マジでトウモロコシ食ったら治っちまった……どういう理屈だ?」
「理屈がどうというより、先人の知恵ですね」
「ほーん。つっても芯ごと食わすこたぁねーだろ。トウモロコシの芯なんざ初めて食ったわ」
「文句言わない。それが薬なのですから。良薬は口に苦し、不味くなかっただけありがたいと思いなさい」
「へーへー」
これまで全身に圧し掛かっていた気怠さも、石を背負ったような重苦しさもキレイサッパリ消失した。まだ疲労感が残って清々しい気分とまではいかねぇが、今までが今までだけに十分マシだわな。
あれから上白沢女史には助かった礼と迷惑かけた詫びと、あとついでに膝枕の件は黙っていてほしいと頼み、華扇と一緒に集会場を後にした。なお、寺子屋の女教師は「もう慣れたよ」と達観っつーか悟り

を開いていた。そこは慣れんなよ。
とりあえず、今は華扇に言われるがままアジトに戻っている途中である。
驚いたことに、あの電気ネズミっぽいのがここ最近の無気力を招いた張本人なんだとか。ウソみてぇなハナシだが、仙人サマが真顔で言うもんで従うしかない。一応な。
テキトーに話しながら歩いているうちに拠点の前まで辿り着いた。入り口を捲ると、数日間のうちにすっかり見慣れてしまったものが視界に入る。ネズミとイタチを足して二で割ったような謎生物が相変わらず荷物に爪を走らせておった。
小さい獣を見るや否や、仙人サマは喜びと呆れを含んだ曖昧な顔でほっと息を吐いた。そして、キリッと表情を引き締め直すと「こら」と腕組みした。
「やっぱりあなただったのね」
桃色の女が一声かけるとケモノはピタリと動きを止めた。体を反転させて華扇の姿を捉えると、脇目も振らずまっしぐらに飛び込んでくる。パチパチ爆ぜる電気を気にも留めず、華扇がヘンテコな生き物を肩に乗せた。
お得意の動物調教の御業――いや、コイツは「やっぱり」と宣った。つまり知っていたことに他ならない。トウモロコシで治ると即断できたのもそーゆーこった。
「結局何なんだ？　この変なのは」
「えっと、私のペットの一員です」
ちょっぴり申し訳なさそうに眉尻を下げて仙人サマが白状した。
「なるほどねぇ」
「う……ごめんなさい。恐らく私の気配を辿ってここまで来たのでしょう。しばらく姿を見ていなかったのですが、まさかこんな所にいるなんて」
「そういうことか。ようやく全部繋がったわ」
どうりでやたらウチに来ると思ったら、飼い主の気配に釣られてきたってぇのがオチかよ。放し飼いだったのか脱走したのかは知らん

が、華扇の残滓が漂っていたのを目ざとく察知したのであろう。
　飼い主もペットに負けず劣らず毎日のように叩き起こしにきてくれやがっとるし、匂いの一つでも残っていても不思議ではあるまい。オレにはサッパリわからんが、動物の嗅覚なら嗅ぎ取れるぐらいにはあったんだろ。
　おまけに餌にもありつけて一石二鳥だったに違いない。ちゃっかりしてんな、コイツ。
「で、さっきから電気出しまくっとるこのちんちくりんは動物なのか？」
「雷獣といって、雷を呼ぶ非常に珍しい獣です。その生態を知っている者は非常に少ないと聞きます。ちなみに主食はトウモロコシよ」
「っかー、それでポップコーン食ってたのかよ。つまりコイツがいればスマホの充電くらいはやってくれんのか？」
　サイズからいってもその辺が頑張りどころだろう。まさか十万ボルトが使えるワケでもあるめぇ。これまでの餌代のツケとしてそのぐらいの働きはあってもイイんじゃなかろうか。
　オレが雷獣の静電気にちょっかいを出しているのを眺めて、華扇がふふっと意味ありげに笑う。
「すまほ、というのはわかりませんが……この子から電気をもらうのは覚悟した方がいいですよ？　綿間部も身をもって味わったばかりでしょう。雷獣には毒があるのです」
「あ？　毒……ってまさか」
「はい、廃れ忘れて痴れ者となる。元気もやる気も全て失って終いに何も考えられなくなってしまいます」
「おっかねぇこと言うなや。たかだかケータイの充電ごときに廃人化するリスクなんぞいちいち背負ってられるかい。どんだけ代償デカいんだよ」
「リスクのない恩恵なんてこの世にありません。肉を欲せば獣に命を脅かされる。灯りと熱を欲せば火事の危険に脅かされる。物事は表裏一体、都合の良いところばかりに目を向けていると痛い目に遭います。偏った知識のせいで判断を誤ったり、浅はかで迂闊な行動を取っ

たりしないためにも、常日頃から勤勉であることが大切なのです。そもそも――」

あーあ、まーたお説教のスイッチが入っちまった。

クドクドと長ったらしくご高説を垂れる仙人サマにバレない程度にこっそり嘆息する。つーか、色々語っとるけど発端はお前の監督不行き届きじゃねーか。

「綿間部？　聞いてるんですか」

「あー、はいはい。その通りでごぜぇます」

「もぉ！　ちゃんと聞きなさいっ」

ま、エエか。今夜ぐらいはアレもコレも大目に見てやらんこともなし。

さり気なく後ろ頭に手をやる。膝枕の柔らかさと温もりが仄かに残っているような気がした。

今日だけ特別、か……

ちょっとだけ惜しかったかもな。

翌日。

「つかー、つれぇわー。雷獣の毒にやられちまって今日は仕事できねぇわー」

「嘘おっしゃい！　私の目を誤魔化そうったってそうはいきませんよ！　さっさと起きる！」

「……やっぱダメか」

なお、新しい言い訳は五秒も保たなかった模様。

つづく

第四十五話　「夜は永いし歩けよ仙人」

「やあ、久しいな黒岩」
「あ？　なんだ、藍ネーチャンじゃねーかよ」
「ら、藍姉ちゃん……そのような呼ばれ方をされたのは初めてだな」
　インテリを体現したような声に呼びかけられて振り返れば、金色の九尾を携える狐サマが立っていた。この女と会うのは博麗神社で宴会があった日以来か。やたら大量に作られた稲荷寿司が旨かった。やたら大量だったけどよ。
　モフモフの尻尾を揺らしてゆったりとした足取りで八雲藍が歩み寄る。立ち姿もキャラボイスもクールな相変わらずのイケメン女子であった。女子にモテる女の風格が惜しげもなく晒される。バレンタインだったらチョコ貰う側にいそう。
「あれから調子はどうだい？」
「ま、ぼちぼちでんな。良くも悪くもよ」
「それは僥倖」
　聡明な笑みを自然に浮かべて女狐が首肯した。些細な立ち振る舞いですら一つ一つが悔しいほど様になっていやがりますわ。宝塚に出演した方がいいんじゃないかな。
　まぁいい。しかし今更だが九尾なんて大妖怪が人間の集落をフツーに出歩いてんのに、ちっとも騒ぎにならねぇのか。つーか、最初に出会ったときも油揚げ買ってたわな。庶民派かよ。
　ゆらりゆらりと揺蕩うボリューミーな尻尾の束を目で追いかける。存在感ハンパねぇなオイ。
「で、オレに何か用か？」
「いやなに、紫様が珍しいものを入手したそうでな、折角なのでお前に贈るようにと仰せつかっている。黒岩ならその良さがわかるだろう、とのことだ」
「ミス八雲か……しばらく会ってねぇな」
「ご多忙の身なのだ。察してくれると助かる」
　長い袖口をピタリと重ねた手合わせポーズを解き、八雲藍が懐から

ガラス瓶を取り出す。細長く、丸みを帯びたデザインはワインボトルを彷彿させる。差し出されたからとりあえず受け取っておいた。

サイズもワインボトル並み。透明なガラス越しに中身の液体が確かめられる。目の前にいる女とよく似て鮮やかな黄金色。ラベルこそ貼られていれど、雑な波線を書き綴ったようにしか見えない。アラビア文字とかこんな感じだっけか。

軽くボトルを傾けるとチャプンと水音が鳴る。

「酒か」

「ご明察」

何となしに口にしたら正解を引き当てちまった。もっとも、ボトルの形もといデザインからすればカンタンに答えが導き出せる。

「お気に召さなかったか？」

「フッ、まさか」

アルコールは嫌いじゃない。ましてや夜を生きる男にとっちゃ縁を切っても切れぬモノ。バーに飾っていそうな洒落た洋酒ボトルがオレの琴線に触れる。くれると言うなら断る理由もなし。

しかも珍しいことに、こんなデザインのやつはオレでも見覚えがない。八雲紫はオレの目利きを期待したみてぇだが、残念ながら知識も記憶も該当件数ゼロ。夜の繁華街でもコレを置いている店はなかった。

そのうえラベルが何語かもわからん始末ときた。こんなん文字じゃなくてただの模様だと言われた方がまだ頷ける。

「色合いからしてウイスキー……いや、ラムか？　それにしちゃ褐色どころか黄色に近ぇし、栄養ドリンクかよ」

「おや、『外』の世界の酒じゃないのか？　紫様が仰るには偽電気ブランという銘柄だそうだ」

「……は？　偽電気ブランだと？」

「ほう。やはり知っていたか」

「いや知ってるっつーか……」

八雲藍の言葉に耳を疑った。ついでに目を見張る。

その名前ならばオレも知っている。幻の名酒ともいわれているこ

とも含めて。
　幻の名酒ともなれば、そら珍しいし数も少なかろうし実物を見たことがねぇのもしゃーなし。と、並大抵の輩は思うだろう。けれどもそうじゃない。オレが驚かされたのはそんな生温い理由じゃねぇワケで。
　そもそも、偽電気ブランは実在しない。
　なぜならば、アレはある文学小説?にのみ登場するいわばフィクションの逸品。
　物語中では清水のように透き通った酒だとうたわれる。人生の虚無の味だと貶める金持ちもいれば、黒髪の乙女は人生を底の方から温めてくれるような芳醇な味だと誉めた。何処かでコッソリと作られては夜の街に運び込まれているという噂も浪漫がある。
　ちなみに本物の電気ブランは存在する。一本千円かそこらで買える。パチモンの方が架空ってぇのもなかなか皮肉なこって。
　さすが幻想郷。神も妖怪もおまけに幽霊もいる異世界は伊達じゃねぇ。その気になれば空想の産物なんぞも手に入れられるとは恐れ入った。ただし、どうやって調達したのかは妖怪の賢者サマのみぞ知るってか。
「さて、用は済んだから私は行くとしよう」
「んだよ。わざわざこのためだけに来たってぇのか？　ご苦労なこって」
「フフ、お前は紫様が直々にお招きした御客人だからな。あぁそうだ。たまにはマヨヒガにも顔を出してやってくれ。橙も遊びたがっている」
「あの猫娘がオレを？　物好きなやっちゃなオイ」
「お前は自分が思っているよりも誰かに好かれる男だ。何なら、思いがけず身近なところに特別な好意を抱いている者もいるかもしれないぞ?」
「ハッ、そらねーだろ」
「さて、それこそどうかな。ではまたいずれ」
　八雲藍はそう言うと背中を向けて立ち去る。去り際までインテリ

かつクールだなコンチクショウめ。
しかもやけに意味深な言い回しまでされたのが気になった。主従揃って遠回しで読めないやっちゃな。ただし猫娘は除く。
「しゃーねぇ。そのうち行ってやるか」
偽電気ブランなんつーレア物を貰ったからには、それなりに報いるとしよう。

「まさか小説上の洋酒が貰えるたぁ侮れねぇわ……」
もちろんデマという可能性も無きにしも非ず。が、わざわざ八雲藍を寄越してまでしょうもない悪ふざけするとも考えにくい。やはり本物の偽電気ブランか。って紛らわしいな。
とはいえ、いかに稀少な逸品だとしても酒は酒である。飲まねば意味がない。ワインコレクター染みた高尚な趣味もなし。集めて飾ってハイおしまいってぇワケにはいかんのだ。
「こりゃ今日は店じまい決定だな……いや待て」
ふと、勇んで踏み出した一歩に躊躇いが生じる。
これほどの上物を抱えた状態でアジトに戻って大丈夫なのか。いつぞやの伊吹何たらとやらに出くわしたら横取りされかねない。四リットルの業務用サイズを片手で軽々と呑むアランダラだ。見つかったら最後、絶対にロクなことにならん。
「あの鬼だけじゃねぇぞ……」
もう一人。そこそこ常識人だがトンデモねぇ酒豪を知っている。説教臭くて異性に無防備なピンクの仙人サマ。あの女には悪いが、こいつはオレだけの秘蔵として密かに嗜ませてもらおう。
「なるべく人目につかない場所に移動するっきゃねぇか……」
おあつらえ向きに今宵も月明りが冴えている。このまま人里外に出て月見酒と洒落込むのもまた一興であろう。そうと決まれば善は急ぐまで。
オレは得意のステルスで誰の目にも見つからないようにコソコソと身を隠しながら、月夜に紛れて人里を抜け出していった。

月に叢雲花に風。草木も眠る丑三つアワー。ただし現時刻は九時かそこらである。

夜景を肴に一杯引っ掛けるならロケーションも選びたい。間違ってもすぐそこの堆肥作りの生ゴミ捨て場とかゲロ以下のニオイがプンプンする場所ではない。

「ま、のんびり行くとすっか」

少し歩く。遮るものが何一つない夜風がオレに当たっては過ぎ去っていく。月明りが宵闇の道しるべを照らし、星の群れは疎らになって煌めく。今夜はミスティアの屋台も出てなかった。鈴虫のコーラスが静謐な空気に溶け込む。

花鳥風月。今宵も世界は美しい。

数十分ほどかけて人里へ続く道を逆行する。

そんな中、ふいに既視感を覚えて立ち止まった。オレが初めて幻想郷に落とされた場所。ちょいと歩くだけのつもりが、いつの間にか此処まで足を運んでしまっていたらしい。

ロケーションとしても悪くないし、この辺でイイだろう。グラスなしってぇのが風情に欠けるが、どーせオレしか飲まねぇなら直接口をつけても構うまい。

「Ｐｒｏｓｉｔ」

あえてドイツ語で乾杯を捧げる。ニヒルな笑みを浮かべて栓を抜く。いざ――

「綿間部、こんな場所で何をしているのですか？」

「ヤベ……ッ」

「？」

まさに狙ったかのようなタイミングの悪さに思わずつんのめった。咄嗟にズボンの尻ポケットに偽電気ブランを突っ込む。大丈夫だ、バレてない。我ながらファインプレーを褒めてやりたい。それはさておき。

出鼻を挫かれたやるせなさを万感の思いに込めて、ジロリと視線を向ける。

「まったくもう、相変わらず目つきが悪いですね」

「ほっとけ」
　胸元に咲く薔薇がアクセントな紅色の中華衣装と緑色のミニスカのコーディネートを着こなし、夜風に靡く桃色のミディアムヘアを包帯が巻かれた右手で押さえて乙女が佇む。赤みがかった瞳はガーネットを連想させる輝きを宿す。月夜の背景と相まってなかなか絵になっていた。
　行く先々で出くわすのはもはやお約束で、驚くこともなくなった。別にそこまでやましいことでもないのだが一度隠してしまった手前もある。ひとまず何事もなかったかのように取り繕う。
「お前こそどーした」
「綿間部がコソコソと人里を出ていくのが見えたので。お仕事ですか？」
「……あー、まぁ。そんな感じ」
「……怪しいですね」
　目を逸らしながら言葉を濁すイマイチ煮え切らない態度が仇となり、仙人サマが訝しんだ目つきになる。ジトッと疑いの眼差しが向けられる。うっかり冷や汗が出ちまいそうだ。
　しばらく華扇はオレをジロジロと見定めていたが「まぁいいでしょう」と力を抜いた。どうやら無事に誤魔化せたようだ。フッ、勝ったな。
「また余計な事を企んでいるのですか？　つくづく厄介事ばかり起こす人ですね」
「人をトラブルメーカーみてぇに言うなや。何もしとらんだろ」
「どの口がそれを言いますか。ともかく、依頼でしたら私も手伝いましょうか？」
「いや。どっちみち大したことじゃねぇし。むしろオレ一人でやった方が好都合なんだよ」
「そうですか……」
　ちょっと残念そうな微妙な反応で、華扇がしゅんと項垂れた。犬かよ。出番がなくてガッカリしたんか。
　兎にも角にも長居は禁物。あまり長引くとボロが出ちまうかもし

れん。この場は急いでいるフリしてさっさとおさらばするに限る。この女のご機嫌取りはまた今度にしておく。って、なしてオレはこんな後ろめたい感じになってんだ。

じゃあな、と片手を上げようとした時だった。すかさず華扇が口を開く。

「ところで綿間部、一つ質問があります」

「あ？　何だよ、わりと急いでんだが――」

「さっき、何を隠したのですか？」

「……なんも隠してねぇぞ？」

「へぇ……」

ニッコリと眩い笑顔を浮かべて核心に迫りくる華扇にオレは堪らず顔を背けた。

まるで推理小説のクライマックス展開。さながら名探偵に決定的な証拠を突き付けられた真犯人。マジで自白する五秒前。真実はいつも一つってやかましいわ。

バレた？　まさか。マジか。マズイ。どうする。撒くか。

脳ミソの中で思考と策が入り乱れる。無意識にのうちにじりじりと後退り、摺り足で靴底が目減りする。ガンマンの一騎打ちか侍の決闘を思わせる緊張感に縛られる。

ゴクリ、と唾を飲み込んだ。

華扇は笑顔を保ったまま崩さない。ニコニコとやけに楽しそうにオレの答えを待っていやがる。ただし見えない圧力が背中から立ち上っているのは気のせいだと信じたい。

切迫した空気に喉が渇く。さり気なくケツのあたりに手を伸ばす。その瞬間、華扇の瞳がキランと光った。

「えぇい！」

「どわっ!?」

桃色の仙人サマがムダに可愛らしい掛け声をあげて飛びついた。まさかタックルかまされるとは思わず後ろに押し倒される。背中は当然のこと、思いっきり尻餅をついて一瞬にして青ざめた。

「おまっ、割れたらどうすんだ!?」

「やっぱり何か隠してたんじゃないですか」
「な、なんのこった？　悪いがオレにはサッパリわからんなぁ」
「往生際が悪いですよ。いいから見せなさい。どうしても嫌だというなら無理矢理にでも見ちゃいますから」
「オメーは生活指導の先公か」
「仙人です」
しくじった。しかめっ面を晒して内心で舌を打つ。無意識にボトルを触ったのがこの女にブツの在り処を教えるヒントになっちまった。
オレの下腹部あたりに跨ったまま、さらに彼女自身も体を前に押し出して尻ポケットに手を伸ばしてくる。あっという間に密着度合いが増した。
「ちょバカ、やめ」
「んっ……あぁもう、抵抗しないで」
悩ましげな声色が吐息に混じって耳たぶをくすぐる。
大きく膨らんだ双丘がオレの胸板に押し潰されて、ムニュムニュと柔らかく形を変える感触が否応なしに伝わる。覆い被さったまま肢体を前後に揺すってくる度に聞こえる、衣擦れの音さえもイケナイ雰囲気がして生々しい。桃のような甘い匂いが鼻先から漂って惑わされる。
頭がクラクラして理性がイかれちまいそうだった。取り返しのつかないことになりそうなほどに。本能が危険信号を上げる。
「マジでやめろって！　イロイロとマズイだろうが！」
「むっ！　そんなに見られたら困るものなんですか!?」
「ちっげぇよ！」
オレの制止など意に介さず、それどころかますます意固地になって仙人サマが体をくっ付けてくる。危険信号が警告に変わった。
このままではガチでヤバい。もし生理現象が発生しようものなら一発でバレる。夜を生きる男にとって社会的な死が目前に迫る。いかん！
なりふり構わず華扇を引き剥がそうと彼女の脇の下に手を差し込

む。
「ひゃあぁぁんッ!?　ど、どこ触ってるんですかエッチ！」
「おまっ、ヘンな声出すんじゃねぇって！」
夜の野外に響き渡る女の嬌声。身体の敏感なところだったのか顔を真っ赤にして桃色の仙人サマが身を捩る。くんずほぐれつ。互いの身体が絡まり、至る所が擦り合わされる。
閲覧注意。ついに年齢制限がかけられてしま――
「何をやっているんだ、お前たちは」
涼し気を通り越した平淡な声が冷や水の如く浴びせられる。それと同時に、オレたちの色んな意味でギリギリな一悶着がピタリと止まった。
ギギギ、とぎこちなく二人仲良くそちらを見やれば、先ほど別れたばかりの九尾のお狐サマがどこまでもクールな眼でこちらを見下ろしておった。左右の袖口を合わせた謝謝ポーズも健在である。
そして、上白沢女史が時折見せるような気まずさやいたたまれなさは一切なく、目下で織り成された痴態を淡々とした態度で眺めていた。
さて、現状のオレたちはどうなっているか。
仰向けに寝転がった男の上に女が全身を隈なく密着させて乗っかり、さらに男は女の脇を撫でて甘い声を鳴かせて耳で愉しみ、女は男のケツに執拗なまでに手を伸ばす。トドメに互いに体を激しく動かした拍子に衣服も乱れ、オレはズボンがずり落ちかけているわ、華扇のミニスカもかなり際どいところまで捲れちまって白い素肌が大胆に露出していた。
結論から言ってしまえば、誰がどう見ても完全にアウトである。
やがて、八雲藍がどこか遠くを見ながら息を吐いた。
「愛を確かめ合うのは大いに結構。ただ一つ忠告すれば、野外プレイなら人目につかないように茂みの裏などでやるといい。こんな遮蔽物のない往来の真ん中で致すのはどうかと思うぞ」
「ちちちがっ、違いますッ!!　断じて誤解ですから！　勘違いが甚だしいにも程がありますよ!?」

「なな何言ってんだお前んなワケねーだろゼッタイ違ぇって気付けよつかわかれよ！」
「何だ、違うのか」
『当然だ（です）!!』
華扇どころかオレまで大いに取り乱して狼狽えてしまった。あまりにも相手が冷静過ぎると逆にこっちがハズイやつである。何たる屈辱。ガッデムと言わざるを得ない。恐るべし八雲藍。
つーか、インテリなツラして野外プレイとか抜かしやがったぞ、この女狐。

「ハハハ、そうかそうか。彼には珍しい酒を届けただけだったのだが、まさかこんなことになっているとは思わなかった。さすが黒岩」
「さすがじゃねーよ……いや、さすがじゃねぇだろうがよ」
「二回も言うことなのか？」
「もぉ……綿間部のせいで恥ずかしい思いしたじゃないですか。うぅ、穴があったら入りたい……」
「いやはや、茨木殿も大変だったご様子で」
九尾の寛容な精神のおかげでむしろオレたちのダメージが酷い。八雲藍がくつくつと笑い声を噛み殺しながら相槌を打つ。チクショウ、いつまでわろてんねん。
未だに羞恥が消えない頬を膨らませて華扇がオレを睨みつけてきた。説教時の迫力は欠片もなく、どっちかっていうと拗ねている感じのツラだった。八つ当たりともいう。
「それもこれも綿間部の日頃の行いがこういう結果を招いたんです。紛らわしいことばかりするから。今回のだって素直に見せてくれれば良かったのに」
「っかー、オレのせいかよ」
げんなりした顔でぼやくと狐サマと仙人サマが容赦なく追撃をかましてくる。片やスマートなインテリスマイルで、片や頬っぺたをいっぱいにした膨れっ面で言った。
「頑張るといい。女の声にちゃんと耳を傾けるのも男の甲斐性だぞ」

「そうですよ」
「うるせぇ、んなモンが男の甲斐性になって堪るか」
やけくそで言い返したが、同意してくれる者はいなかった。

すったもんだあった挙句、偽電気ブランを隠し持っていたことがバレたのは言わずもがな。八雲藍が今度こそ帰ってから、華扇と二人で呑むことになった。きっと最初からこうなる運命だったのだろう。
「……フッ」
改めて栓を開けて、まずは一口。喉から食道を通じて胃に落ちた瞬間、その美味さに目を見開いた。
花が咲き誇り、蝶が舞い飛ぶ。かの演出にも等しい神秘的な風味が膨らむ。幾度の夜を渡り歩いてきたかのような、心が充実した感覚に包まれる。
しばしの間、高揚感と余韻に浸る。数分前のゴタゴタなんざ水に流してしまえそうだ。上質な酒は時に幸福をもたらす。
「美味しいですか？」
「ああ、こりゃ大したモンだぜ」
「綿間部だけズルいです。私にも飲ませてください」
「わぁーってらぁ。ほらよ」
美味い酒、それも幻の名酒ともなればこの女が黙って見ていられるハズもなし。
酒好きの仙人が自前の升に注ごうとして、なぜか直前で手を止めた。瓶の口を見つめて、まるで引き寄せられるようにそこに自らの唇を重ねる。こくん、と小さく喉が鳴った。
瞼を閉じて後味までじっくり堪能して、ようやく目を開いて彼女はうっとりと恍惚の表情を浮かべた。
「不思議な味……甘酸っぱいようでいて、どこかほろ苦いような」
「あ？　そんな味したか？」
「え？　はい、しましたけど……」
仙人サマからボトルを奪い取ってもう一度飲んでみる。一口目はハードボイルドに相応しい深い渋みがあったのに、今度はさほど感じ

られない。明らかに異なったテイストに首を捻る。
　飲む人とかタイミングによって味わいが変わっていくとか？　その時々に似合う風味を生み出すように。あまりにデタラメな推測だが、どーせ元々が物語にしか存在しないリキュールなのだ。それぐらいの摩訶不思議があっても面白い。
　もしそうだとしたら、今のオレにはコレが似合うという偽電気ブランからのメッセージと受け取れる。ったく、どういうつもりなんだか。
　ひっそりと混ざった隠し味。渋さの中に際立つ――
「綿間部、次は私の番ですよ？」
「へいへい。しゃーねぇなぁ」
「本当にもう。大体、綿間部はエッチでいやらしくてスケベで、そのせいで私がどれだけ……」
「いきなり悪口やめーや。しかも全部一緒じゃねーかよ。そこまでエロくないわ」
「うるさいです馬鹿者……ング、ング」
「ちょオイ待て！　一気に飲むなよ無くなんだろうが!?」
「ぷはっ……知りません」
　甘い桃の風味が一匙ほど。

つづく

第四十六話　「玉座に座るのは誰だ」

『王様ゲームぅ？』

「うん、そう。お客さんならどんな遊びか知ってるでしょ？」

「そりゃーな」

草木も眠る丑三つアワー。赤蛮奇が働く酒場も客足が疎らになった。見知った顔のみがこうして残り、未だに帰らずダラダラと居座っている。

二時間前かそこらまで飲めや騒げやと宴の催しがあったのも、もはや過ぎ去りし過去のこと。兵どもが夢の跡。今は只ほどよい静けさと余韻に浸る。

そんな中、あざとい女将が脈絡なく王様ゲームなどと口にした。今夜はオフで完全にプライベートにもかかわらず、なぜかいつもの小豆色の和服姿でやってきた。この間までは洋服も着ていたらしいが、最近はもっぱらこの格好をするようになったのだとか。

オレからすれば逆にそっちのが想像つかない。カジュアルなファッションの女将とか。ま、似合ってんだろうけど。

ミスティアの問いかけにテキトーに相槌を打っておく。徳利の底に残った燗は元々の温度が失われて正直ビミョーな後味しかなかった。口当たりもハンパ臭くて旨いとは言い難い。さっさと飲んでおけば良かった。みみっちい後悔の念にかられる。

「つーか、どっからそんなモンが出てきた？」

「チルノたち――あぁ、あたしの友達ね。なんでも知り合いから新しい遊びを教えてもらったらしいんだけど、その人っていうのが外来人みたいなの。もしかしてお客さんだったりする？」

「人違いだ」

どこのどいつかは知らんが、なしてよりによってそのチョイスなのか理解に苦しむ。コンパじゃあるめぇしよ。他に思いつかなかったのか、その外来人は。合コンやっとる大学生かよ。

傍らで興味を持ったのか、それまでゴマ団子を頬張っていた華扇がしっかり飲み込んでから口を開く。

「綿間部もやったことがあるのですか?」
「おぉ、不本意ながらな」
「不本意って……まさか、いかがわしい遊びなんですか?」
「違ぇわ。大体そんなんだったらガキんちょにやらせねーだろ。不本意つったのは単純に巻き込まれたからってぇだけだ」
「それならよろしい」
すっと目を細めた仙人サマにぞんざいな口調で答える。変なところで警戒心が強い。
ひとまず納得したらしく、得意げなツラでお許しを出してくださりおった。何故そんな偉そうなドヤ顔で言えるのか。
さて、とてもじゃないがオレには不釣り合いな遊戯に付き合わされたのは、当然ながら夜の繁華街でのことである。そこそこ付き合いのある仲間が元凶だった。
あのヤロウ、なーにがイイトコロに連れていってやる、だ。それっぽいこと抜かしといて人をキャバクラに引きずり込みやがって。
懐かしい思い出、ただし黒歴史の一つ。思い出すだけで頭が痛くなってくる。何が悲しくて公衆の面前で野郎が半裸ストリップせにゃいかんのだ。
どういうワケかキャバ嬢たちの方が黄色い歓声を上げてまじまじと見入っていやがったし。挙句には腹筋に触っていいかとか聞かれる始末。断ったらケチ呼ばわりされたが。
「いいねぇ。あたいらもやってみようよ」
「あたしも賛成」
「まぁ、手持ち無沙汰でしたし……いいでしょう」
「オイオイ、マジか」
オレたちの会話に聞き耳を立てていた小野塚小町が面白そうだと身を乗り出してきた。気付けば他のメンツも乗り気になっている。
というかフツーにいんのな、お前な。
「店員さーん」
「はいはい。今行くから待ってて」
サボり魔の死神が店の奥にある厨房に呼び声を飛ばす。どのみち

オレらしか残ってねぇんだから、わざわざ大きく手を振る必要もないだろうに。ま、クセみてぇなもんか。

能天気な客のお呼びに答えつつ、赤マントのろくろ首が奥から姿をみせる。ホールスタッフらしくお盆を手にして。その上には湯飲みが一個だけ乗せられてあった。しかもよくよく見れば、箸入れさながらに割り箸が数本飛び出ている。

中身が茶どころか飲み物ですらない湯飲みをコトンとテーブルの真ん中に置かれる。

「お待ちどおさま。これで良い？」

「準備良過ぎんだろ。オレたちの会話聞こえてたのかよ」

「他に客もいないし声がよく通るのよ」

用件を済ませて再び店の奥に引っ込むかと思いきや、ポーカーフェイスの看板娘は戻ることなくそのまま空いている席に座った。休憩時間か？

「私も参加していい？　大将が今日はもう上がっていいって言うから」

休憩時間じゃなくてシフト上がりだったらしい。給仕服じゃないからわかりづらいことこの上ない。せめてエプロンくらいしろと言いたい。紛らわしいから。

「珍しいわね。バンキさんがこういうのやりたがるなんて」

「どうせこのまま帰っても暇だから」

「うふふ、それもそうね。一緒に遊びましょ」

ピンク色の髪な女将が愛嬌のあるスマイルで仕事上がりのバイトを受け入れる。この際一人増えようが二人増えようが大差あるまい。

しかしながら、周りは全て空席な状況と真逆にいって、このテーブルだけやたら人口密度が濃い。オレと華扇と小野塚小町とミスティアと赤蛮奇。カテゴリーで見れば、外来人と仙人と死神と夜雀とろくろ首という錚々たる個性的キャラの集まりときた。あと男女比もおかしい。

その後、店主のオヤジも出てきて保存が効かないからと余り物を提供してくれた。オレたちを除いて客もいないってぇのもあれば、時間

も時間だからというのもあるだろう。この手のちょっとしたサービスは何気に嬉しかったりする。

おこぼしが貰えて最もご満悦だったのは言うまでもなく仙人サマであった。まだ食う気かコイツ。サボりの死神も早速とばかりに酒に手を伸ばす。こっちもまだ飲む気かよ。

「王様ゲームすんじゃなかったのか。オメーが言い出しっぺだろうが」

「まぁ待ちな。その前に腹ごしらえさ。腹が減っては戦ができぬってね。そういうわけだからちょいタンマ」

「それなら私も混ぜてほしいかな」

「うぉっ!?」

不意打ちだった。

真後ろからか細い腕が首筋に回されて、茶目っ気を含んだ大人びた女の声が降り注いだ。反射的に振り返れば、赤いセミロングの頭髪に球体を被せた美人の顔が間近にあった。目が合うとパチッとウインクを決められる。

「ちゃお、将也くん」

「……あんたか」

「そ、私」

地獄の女神サマことヘカーティア・ラピスラズリ。「Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌ」とプリントされた黒い柄Tシャツが注目を集める。奇抜な個性派ファッションに反して当の本人はマトモな人格という。近所のおねーさんタイプなキャラである。

クラウンピースを引き連れていないのは意外だった。てっきり保護者に付きまとっていんのかと思ったが見当たらない。というかオレはあの金髪妖精じゃねーんだから似たようなスキンシップすんなや。

「と、とりあえず綿間部から離れてくれませんか？」

「あら、これはごめんなさい」

口の端っこをひくひくと痙攣させながら引きつった愛想笑いで華扇が告げる。それを受けてヘカーティアが素直に謝り、オレの首に絡

めていた腕を解いた。ついでにその辺の椅子に座る。って、ミニスカで足組むなよ。

飲んだくれていた小野塚小町が彼女を見て、わざとらしく目を丸くしながら大袈裟に仰け反った。

「おやおや、地獄の女神様がおいでなすった」

「女神だってたまには羽を伸ばしたいのよ。休むことの重要さなら、あなたが一番よくわかるでしょう？　あるいは私よりもかしら」

「違いないねぇ」

いかにも死神らしいあくどい笑みでくつくつと肩を震わす。なるほど、地獄繋がりで知り合いだった模様。それにしても死神と女神が来店する酒場とは、ありがてぇのか不吉なのかよくわからんな。とりあえずインパクトはありそう。

テーブルに頬杖をついて女神の瞳がオレを映す。

「さっきまでクラッピーも一緒にいたのよ。すぐ帰るつもりだったんだけど、何となく将也くんの顔が思い浮かんじゃって来ちゃった。ね、どうしてだと思う？」

「さぁな。偶々だろうよ」

「んもう、結構鈍いのね。ねぇ華扇さん？」

「ふへぇ!?　な、な、なんで私に……ッ!?」

いきなり矛先を向けられた桃色の仙人サマが素っ頓狂な声を出してツマミを取りこぼした。急に話を振られたからって驚き過ぎだろ。

ふと視線を感じてそちらを見やれば、小野塚小町がニマニマと意地悪いニヤケ顔を浮かべていた。人を肴に酒を飲んでいやがる。見世物ちゃうぞ。

「……んだよ」

「うんにゃ、べっつにぃ～？」

女はオレと目が合うとピュゥピュゥと軽快に口笛を吹く。含みのある態度にイラっとくる。これ見よがしにやってんのが尚更に腹立たしい。

「お客さんもまだまだね」

「同感」

「……」

女将と店員のコンビまでもが呆れ顔で口々に言葉の矢を放つ。やれやれと言わんばかりの塩対応で逆にこっちは言葉を失う。

なんだこの状況。いつの間にかオレだけアウェーになってんぞ。女特有のネットワークが利いてんのか。

華扇とも目が合う。そわそわと落ち着かない態度で視線を逸らされた。何でや。

「イエーィッ！　そんじゃ王様ゲームいってみよぉう！」

『ワーパチパチパチ！』

テンション上がった死神が高らかに宣言すれば、仙人サマを除く女性陣が合いの手を送る。これぞまさしく深夜のテンション。とっくに日付を跨いでなおこの盛り上がり。

「ったく、どうしてこうなった……？」

「仕方ありません。皆、楽しいことが好きなのですから。それに、娯楽を嗜めるのも心にゆとりがあればこそ」

「ま、別に嫌だっつってるワケじゃねぇけどよ。飲み会に多少の遊びがある分には文句も言わん。お前ともコイントスしたしな」

「あ……覚えてたんですか？」

「フッ、そう簡単に忘れるかよ」

「綿間部……」

「はいそこイチャつくなー。あたいの話を聞けー」

「だっ!?　誰がイチャついてなどいますか!?」

小野塚小町の棒読みに華扇がわかりやすく過剰反応して噛みつく。相変わらず煽り耐性のないやっちゃな。一方でオレには赤蛮奇のジト目が無言で突き刺さって地味に痛い。さっきからこんなんばっかりじゃねーか。

これで接客担当の看板娘扱いだというのだから驚きだ。営業スマイルとかゼッタイやらんだろ。

「バンキさんはそのままだから人気があるの」

「頼むからさらっと心読むな。女の洞察力怖ぇよ」

兎にも角にも王様ゲームである。概要をザックリ説明すると、

・参加メンバーはオレと華扇をはじめ、小野塚小町、ミスティア・ローレライ、赤蛮奇、ヘカーティア・ラピスラズリの合計六人。

・ルールは定番通り、例の掛け声に合わせて全員一斉にくじ（割り箸）を引き、先端が赤く塗られているものを引いたヤツが王様となり命令権を得る。

・命令を下された者はそれを実行しなければならない。拒否権はない。あと同じ命令も使えない。ただし、明らかに非常識なものやどう足掻いても不可能な内容は却下（クソマジメな仙人サマがそこは譲らなかった）

・あとは柔軟かつ臨機応変にやれ。以上。

いざ、開幕。

『王様だーれだっ！』

「わぁ、あたしみたいね」

和服女将が一つだけ先端の赤い箸を見つめて目を瞬かせた。

「さぁさぁ王様、ご命令をば」

すっかり司会役にハマった死神女が女王陛下に命令を乞う。鳥少女もまんざらでもなさそうに羽をパタパタと動かす。女将なら変なコト言わんだろうし、身構える必要もあるまい。気楽に待てる。

やがてアレコレ考えていたミスティアが「決めた」と両手を重ねた。

「それじゃあ、二番の人はあたしの肩を揉むこと」

「ってオレかよ」

「おめでとう。家来第一号ね」

「何だそのめでたくねぇ祝辞は……」

ポーカーフェイスで赤髪のろくろ首に無機質な拍手で祝われる。どう見てもおちょくられている。なので、こっちもしかめっ面で返してやった。そんなオレたちの減らず口に華扇とヘカーティアがくすくすと微笑を零す。なにわろてんねん。

渋々と席を立ち上がりミスティアの後ろに移動する。此度の王が今か今かとマッサージを待っておった。

「お客さん、お願いね」

「へーへー、仰せのままに」
臣下にあるまじき雑っぽい態度で応じながら、着物越しに女将の肩に両手を載せて親指にグッと力を入れる。
「んっ」
夜雀の唇の間から微かに上擦った声を含んだ吐息が漏れる。
「悪い、痛かったか？」
「大丈夫……続けて」
言われるがままに肩もみを続ける。しなやかな体付きは細く、これで日々の屋台を一人で切り盛りするのはキツかろう。今後は彼女の依頼をなるべく優先してやってもいいかもしれん。などと柄にもないお節介を思う。
らしくもない考えを誤魔化すように、凝りが目立つところを重点的に狙ってツボを刺激していく。
「んっ、ん……あぁっ」
しばらくやっていくうちに快感の混じった声音が耳に届く。オレの指裁きはなかなか好評のようであった。折角だ、もう少し強めにしてやろう。
湧いて出た出来心に促されてオレは親指をさらに深く捻じ込んだ。瞬間、ピンク髪の鳥娘が背中を大きく反らした。
「あぁぁッ！　つ、つよい……ぁん、お客さんってば上手なのね……？」
「フッ、そーか。オレにも才能があったってワケだ。ほれ、こういうのはどうだ？」
「んふっ……くぁあ！」
絶妙な力加減で波打たせると、夜雀の甲高い鳴き声が店内に響く。和服の首回りが徐々に緩んで薄っすらと汗ばんだうなじが見え隠れする。
肩もみなんざパシリの典型だというのに、いつしかオレも彼女のマッサージにのめり込んでいた。
指先の生む圧力が雄々しく、かつ荒々しいものに移り変わる。まるで力尽くで押さえつけているかのようであった。臣下が主を屈服さ

せる下克上。得も言われぬ背徳感が燻る。
「ふぁっ、あぁぁ♡　すごいのっ、もっと……イイ♡　気持ちいい♡」
「だったらもっと奥まで押し込んでやる……よっ！」
「ふぁあああああん♡」
　ますます興奮が昂ぶり、女将が呼吸を乱してよがる。いつも屋台でみせる愛嬌はなく、彼女目当ての男性客が見たら堪えられない絵面であろう。今すぐ目の前に回ろうものなら、涎を垂らさんほどに蕩けた顔を晒しているに違いない。
　ついにはラストスパートをかけるように力強さも激しさも急激に上げていく。もはや誰にも止めることなどできない。
「このまま一気にいくからな……！」
「あっあっあっ……だめぇえ♡　だめぇえええ♡　イッ――」
「なにやってんですか馬鹿者ォおおおおおおッ!!」
「グヘェッ!?」
　前言撤回。あっさりと止められちまった。
　華扇に後ろ襟を掴まれると同時に、凄まじい勢いで引っ張られて床になぎ倒される。引き剥がす手法があまりに強引過ぎる。思いっきり喉に食い込んだせいでヤバめな声が出た。危うく絞殺されるかと思ったわ。
　咽たり嘔吐しそうになったりしながらも犯人を睨みつける。
「オェっ、おまっ何しやがんだ!?」
「それはこっちのセリフです!!　こんのケダモノ！　どスケベ！」
「オイコラひでぇ言われようだな」
　茨華仙ならぬ怒り華扇が罵詈雑言を浴びせてくる。目尻を吊り上げて語気を強める気迫は凄まじく、あたかも猛獣が荒れ狂うかの如し。罵倒が終われば立て続けに説教が始まった。
「はぁ……はぁ……だ、大丈夫よ仙人様」
「どこがよ」
　熱っぽい息切れをしつつミスティアが華扇を止めようとする。が、すかさず赤蛮奇のクールなツッコミが入った。確かに目のやり場に困る格好なのは否定できない。

小豆色の和服が着崩れて肩回りまではだけておった。真正面からだと鎖骨のラインまでくっきり見えてしまい、白い肌に珠の汗が浮かぶ。和服だからこそできる官能的な色気が醸し出される。

言っておくが決して狙ったワケじゃねぇから。オレも女将もフツーに肩もみしていただけだ。そのハズだ。そのつもりなのだ。

「将也くんってば、やり過ぎ。私だったら拒みはしないけど」

「いやー、ないわー」

女神と死神の赤髪地獄タッグが揃って肩をすくめる。あっという間に女性陣が尽く敵に回っちまった。はたしてオレが悪いのか。というか、さり気なく女神サマがトンデモねぇこと口走ってなかったか。

そしてその間にも怒り心頭で荒ぶる桃色の仙人サマの説教が続く。

「そもそも！　女性の肩に軽々しく手を回すなんて軟派みたいな真似をすることに問題があります！　女の子なら誰彼構わず気安く触れるのですか!?　だから綿間部は破廉恥なんです！」

「そーいう命令だったんだからしょうがねぇだろ……あと破廉恥じゃねーよ」

飲み会のお遊び程度のハズがとんだ被害に遭ってしまった。つくづく世の中とはかくも理不尽なこって。

とりあえず、マッサージで腰砕けになっちまったミスティアは小上がりで休んでもらうことになった。

ってオイ、まだやんのかよ。

つづく

第四十七話　「慢心しなけりゃ王は勝つ」

第二ラウンド、開幕。
『王様だーれだっ！』
「フッ、オレだ」
見事勝ち取った王の証を見せつけてニヒルに気取る。
「あちゃ、取られた」
「私たちに何をさせる気かしら」
「いやらしいことだったら説教ですからね」
「オメーらはオレを何だと思ってんだ……」
死神が「あーあ」と残念がり、ろくろ首がヒソヒソと内緒話をするみてぇにジト目でぼやく。
仙人サマに至ってはさっきのがまだ尾を引いているのか、むっとした顔で牽制してきやがった。オレへの評価が辛辣過ぎる件について。
「で、どんな命令にするの？」
カジュアルなファッションの女神サマがニコニコと笑顔を浮かべながら問う。
ついでに彼女の後ろにある小上がりでは、和服姿の女将が火照った体を鎮めている。壁に寄りかかって揃えた足を崩した座り方も相まってどことなく煽情的だった。あまり凝視しないでおこう。また華扇がへそを曲げると面倒くせぇし。
さて、いざ命令権を得たもののどうしたもんか。この辺で一つマウントを取って悦に浸るのも一興だろう。が、かといってマジになってがっつくのもダサい。夜を生きる男にあるまじき無様ともいえる。やはりダンディかつハードボイルドな命令こそがオレに相応しい。
ふいに、ちょうど目の前にあった徳利が視界に入る。閃いた。
「じゃ、四番はオレにお酌しろ」
「あら。ふふ、呼ばれちゃった」
ヘカーティア・ラピスラズリが「４」と記された棒切れを全員に見せる。
仮にも女神とあろう者が命令される立場に堕ちるとは。そのわり

には嫌がる素振りがない。むしろ楽しんでいる節さえある。
　オレのすぐ右側に座っているしそのままでも実行できそうだ。ちなみに左側は華扇である。
「それじゃあ……よいしょっ、と」
「ちょ待てや」
「ん、なぁに？」
「いや何じゃねーだろ」
　ところが何を思ったのか、イカした柄Tシャツの女神はわざわざ椅子ごとオレに近付いてきた。二人掛けシートの如く隙間なくピッタリくっつけられる。
　それだけじゃ飽き足らず、露出した肩をオレに傾けてしな垂れかかってくる。今や肩どころか腕から足まで互いの半身が密着し、柔らかい肌の温もりが鮮明に伝わっちまう。
　誰もここまでやれとは言ってねぇ。キャバクラかよ。立ち振る舞いが妙に様になってんのが逆にスゲーわ。
　周りが、というより華扇がピシリと硬直した。周囲の反応など気にせず赤髪セミロングの女が整った顔立ちを寄せる。不覚にもこの前去り際に祝福のキスとやらをされた記憶がチラついた。つい彼女の小さな唇に目が行ってしまう。
「はい将也くん。一献どうぞ」
「……おう」
　何食わぬ顔でヘカーティアが律儀に命令をこなしてくる。離れろと突っ撥ねるタイミングも逃し、されるがままお酌を受けるしかない。
「……っふぅ」
　表面張力ギリギリまで注がれた日本酒を零さぬうちに一息で飲み干す。よく冷えて呑みやすく、その清涼感もあってアルコールは感じにくい。調子に乗って飲み過ぎると悲惨なパターンだ。
　男らしく一気飲みをキメたのがお気に召したらしい。しな垂れかかったままヘカーティアが歓声を上げる。
「きゃあカッコいい♪　もう一ついかが？」

いかが?とか言いつつすでに徳利の注ぎ口を向けている。こちらも無言で空になったお猪口を差し出す。おだてられて悪い気はしない。

ただでさえ狭い――というか無に等しい間隔をもっと詰めて、すかさず次の一杯が注がれる。わざとか、わざとなのか。ぶっちゃけデカい双丘も当たっている。

「おっと」

危うく溢れそうになり咄嗟に口をつけた。が、そもそも利き腕がある側に密着されたんじゃ飲み難くてしゃーねぇ。そのせいで口の端から一筋垂らしてしまった。

「あぁ勿体ない」

「ちょま――」

オレが手の甲で拭うよりも早く、女神サマの人差し指がこちらに伸びる。つう、と顎を逆撫でするように日本酒の雫を掬い取って、あろうことか女は湿った指先を自らの舌でペロリと舐めた。

「あはっ、美味しい」

まるで悪戯が上手くいったと言わんばかりに、ヘカーティアが目を細める。

大人びた容姿にお茶目な表情が合わさって、絶妙なバランスを成り立たせていた。しかも肉付きのイイ肢体もあってそこに色っぽさも上乗せされる。

だからこそ――

「んもぉおおおおおおおッ!!」

「んぐぇっ!?」

我慢の限界に達した華扇が怒りの咆哮とともにマジギレした。

またしても首根っこを鷲掴みにして強引に引き剥がされる。お前コレ二度目やぞ。

「言ってる傍から!! どうしてそうなるんですか!? そうやっていやらしいことばかり繰り返すからいつもいっつも碌な目に遭わないんですッ!!」

「バッ……首絞めながら怒んな……ッ!」

「うるっさい!!　口答えなど言語道断！　もう許しません！」
どうにも今宵は仙人サマがいつにも増して怒りっぽかった。というか早く首から手ェ離せよ！　窒息するわ！
暴走中の華扇を止めようとする勇者は誰もおらず。やがてオレの顔色が青くなり始めたあたりで、やっと小野塚小町が慌てて止めに入った。死神に命を救われるとは世も末である。

気を取り直して、第三試合――
「あ、私だ。それじゃ一番は全員に一杯ずつ奢ること」
「またオレじゃねーか!?」
赤蛮奇の命令に迷いはなかった。オレの財布が甚大な被害を受けた。泣けるぜ。

第四回戦。
「いよっし！　あたいが王様だ。いやぁハハハ、参っちゃうねぇ」
「白々しい。嬉しそうに何を言いますか」
ヘラヘラとおどける小野塚小町を華扇が半目になってあしらう。つーか、真っ先に「いよいっし！」とか抜かしてただろうが。
先端が赤く染まった割り箸を指揮棒の如く振りながら、怠惰な死神女がムダに勿体つけて他のメンツを見渡した。口元を弓なりに曲げてムフフ笑いでオレたちを煽る。
なんつーか、コイツ挑発だけはやたら上手いな。見習いたくねぇけど。
「早くしてください」
「それな」
「いやだねぇ。我慢のきかないカップルは長続きしないよ」
「は……はぁああ!?　だだ、誰がカップルですってぇ!?」
「ったく、どーでもいいところに食いつくなよ。余計遅くなんだろーが」
「……ドウデモ、イイ？」
「オイ待てなしてそこでオレを見る。やめろその感情のない目つきを

こっち向けんな怖ぇえよ！」

さながら深淵を思わせる光彩を失った瞳の仙人サマがうわ言のように呟いて振り返る。謎の恐怖感に思わず慄いてしまった。怒って説教されるよりこっちのがシャレにならんかった。

「そんじゃー、一番はあたいにご奉仕しとくれ」

「……ハァ、私じゃないですか」

うげ、と言いたげな苦渋のツラで華扇が名乗り出る。通常モードの仙人サマに戻ったのを確かめて安堵の溜息が出た。幸か不幸か、いっそ清々しいくらいに空気の読まなさっぷりを発揮してくれた小野塚小町に感謝を。

桃色ミディアムヘアの仙人サマが嫌そうなのに対し、赤髪二つ結びの死神は勝ち誇って口角を上げる。普段の付き合いを考えれば、なかなかイイ具合に罰ゲームになっていることだろう。

「ほうほう、こりゃいいね」

「なってしまったものは仕方ありません。それで私は一体何をすれば？」

「むぅ……そうだね。とりあえず膝枕で寛がせて」

小上がりを指さして怠惰な女王陛下が宣う。常日頃からサボって惰眠を貪るヤツらしい命令であった。ちなみに先に小上がりに居た女将も顔色が大分マシになっている。今も少しだけ和服がはだけてしまっているけど。

オレと目が合うと彼女は衣装の襟元をさっと締めた。女性陣の視線が痛い。誤解だ。

まず華扇が土足を脱いで小上がりに移って正座し、そこに小野塚小町が遠慮なく後頭部を載せる。傍から見ても天晴れな領域で寛ぐ。

「おー、快適快適。これならお金取れるんじゃないかい？」

「そのような商売はお断りします」

呵々と笑う小野塚小町を華扇が呆れた口調で一蹴する。

口うるさい腐れ縁を好き勝手にパシれてご満悦そうだった。ついには寝そべったままツマミを食べさせてもらう始末。「あー」と大きく口を開けて食い物を待つダラけた恰好に他の連中も苦笑い。

どこのキャバクラだ（既視感）
やることがいちいちオッサンくせぇよ。
それからもヤツは待ちに待った王様気分を思う存分堪能しておった。ますます調子に乗った女がオレにしたり顔でおちょくってくる。
「なぁ、お前さんも羨ましいだろう？　この膝ときたらかなり心地良いんだけどさ。代わってやれないのが申し訳ないねぇ」
「フン、わざわざ感想言わんでもとっくに知ってるっつの」
「え」
オレが鼻息を飛ばして言い返すと、からかい上手の小町さんが固まった。あ、ヤベ。
驚愕した表情を変えずに華扇を見上げる。視線が重なった瞬間、仙人サマがさっと顔ごと背けた。あからさまに不自然な態度で邪推されてもおかしくない。誤魔化すの下手くそかよ。
「あーぁ、妬けちゃうなぁ」
「……ねぇ。さっきから気になってるんだけど、もしかして彼狙いなわけ？」
「うん？　うふふ、さぁ。あなたはどっちだと思う？」
ヘカーティアと赤蛮奇が何やら喋っていたが運悪く聞き逃した。ま、どうせ大した話じゃないだろ。気にするまでもなし。
小野塚小町が気まずそうな面持ちで華扇の太腿から頭を上げる。ゆっくりと起き上がった彼女からは罪悪感がこれでもかと滲み出ている。
ポリポリと頬を掻きながら、死神が言葉を零した。
「あー……ごめん。すでにお前さんのモノだったとは知らずに」
オレは何も言わずに耳を塞いだ。この後の展開は何度も身をもって知っている。
直後、激情で沸騰した臣下が王様を怒鳴りつけた。
その後も、熾烈な戦いは幾度となく繰り返して行われた。
そして、ついにその時が廻ってきた。

「あ、私です」
茨華仙が王の座に君臨した瞬間である。何気にくじ運がないのかこれが初物だったりする。
「うむむ、どうしましょう……」
しかしながらこの女、普段のマジメさが仇となってすぐに命令が思いつかない。それどころか必要以上に悩んでしまう。番号だと誰に当たるかもわからんのも拍車をかけているのかもしれない。
「えっと、じゃあ四番と五番が握手――」
「ここにきてつまんない命令で白けさせるのは無しだと思わないかい？」
「ぐっ……!?」
無難に流そうとしたところを小野塚小町が割り込んだ。キャンセル技をくらって華扇が悔しげに唇を噛む。
些か意地が悪いと思わなくもねぇが、かと言ってわからんでもない。せっかく盛り上がっていた空気に水を差すのも無粋であろう。そんなことはあの女だってよくわかっているハズだ。
困惑して弱弱しいヘタレ顔でこっちを見てくる仙人サマに嘆息する。さすがに見兼ねたのでざっくばらんにアドバイスしてやった。
「んなモン深く考えんなよ。テキトーにやっとけ」
「ですが……」
適当、というのが特に苦手そうな女がますますドツボにハマる。そんな仙人サマに新たな助け舟が入った。満を持して復活を遂げた和服の少女が微笑む。
ミスティアが華扇の耳元に口を寄せて、彼女にだけ聞こえるようにコソコソと囁いた。
「仙人様。いいこと教えてあげる」
「いいこと、ですか？」
「うん。さっきチラッと見えたんだけどね、お客さんが持ってるの三番みたいなの」
「え……」
華扇が驚いて目を丸くする。よっぽど意外なコトでも言われたの

だろうか。夜雀は中華衣装の仙人に「頑張って」とあざとく声援を送ってそっと離れた。

あの女将はどんなアドバイスをしたのやら。当然ながらオレには知る由もなし。なのだが、心なしか二人ともこっちを見ているような気がしないでもなかった。なに見とんのや。

「すぅ……はぁー」

仙人サマが大きく深呼吸をひとつして。そして、決意した顔で口を開く。

「命令します。三番は、私と――」

「おぉーい、そろそろ店じまいにするぞー」

『……』

諸行無常、お約束なオチが待っていた。どうしようもねぇなオイ。

何も知らない店主のオヤジがのっそり顔を出す。間髪入れず、ブーイングと批判の眼差しのオンパレードが奴さんに浴びせられた。悲しきかな、慈悲はない。

「大将……さすがにそれはないわ」

「ねー」

「こりゃちょっと酷いんじゃないかい？」

「華扇さん可哀そう」

「なぁ、あんちゃん。こいつぁひょっとしたら何か悪いことしちまったのかい……？」

「ま、強いて言えばタイミングが悪かったわな」

女たちの集中砲火にオッサンもタジタジ。なぜかボロクソ言われたのだから唖然とするしかない。

なお、華扇は命令を言いかけたポーズのまま顔を赤くしてプルプルと肩を震わしておった。こっちもこっちでどんまいとしか言えんわ。

結局、ここでお開きとなり現地解散した。

酒場を出ると思い思いに帰路につく。

オレと華扇は二人並んで夜道を歩いていた。人里全体はすっかり寝静まって、二人分の足音と話し声しか聞こえてこない。もっとも、

暗い夜道もオレからすればいつもの光景だ。
「せっかくラストで王サマに当たったってぇのに残念だったな」
「別にいいです……ただの遊びなんですから」
口ではそう言うわりに未練タラタラで華扇が唇を尖らせる。変に気を回さないでさっさと命令していれば間に合っただろうに。マジメさ故に損をして勿体ねぇこって。
とはいえ、そのマジメさがコイツの取柄でもあり個性でもあるワケで。
「ちなみにあの時の三番はオレだ」
「そうですか」
反応が素っ気ない。だからどうしたと言いたげな投げやりな感じであった。不貞腐れているようでいて、わりとガチで気持ちが沈んでいるのもバレバレだ。
だが、コイツが自分で言ったようにアレはただの遊び。所詮、飲み会の余興でしかない。
負け惜しみも屁理屈も御託もいくらでも並べられる。わざわざ慰めるほどのことでもなく、いっそ笑い飛ばしてやるぐらいが丁度いい。
嗚呼、だというのに。
どうにも釈然としない。我ながらどういう心境の変化だろうか。この女が落ち込んでいる顔はあまり見たくなかった。
「……」
俯き気味の華扇を横目で見ながら、こうなりゃ勢いに任せて言い切っちまえと、密かに己を鼓舞する。柄じゃねぇのは百も承知。けれどこのまま終わらせるのも癪だ。
彼女とは反対方向の軒並みを眺めるフリをして、さり気ない一言を述べた。
「今度、二人で食べ歩きでもするか。奢ってやる」
「……え？」
「ま、何だ。やっと勝ち取った権利を目の前ではく奪されたらそら面白くねぇわな。こんなんで代わりになるたぁ思わねぇけどよ、一日ぐ

らいなら好きなだけ付き合ってやる。三番のくじ持ってたのはオレだしな。とりあえずそれで機嫌直せ」

華扇が立ち止まったのが気配で伝わった。あえてオレはそのまま歩みを進める。あたかも気付いていない素振りをして、まるで普段通りに見せかける。

あーくそ、何やってんだオレ。やっぱキャラに合わねぇことすんじゃなかった。

内心とてつもなくむず痒いことになってんのをおくびにも出さず、仏頂面で表情筋を固める。イロイロと堪えながらそそくさと早歩きで――

「綿間部！」

後ろから名前を呼ばれる。澄んだ声音が夜によく弾んでいた。

華扇が駆け足になって再びオレの隣に並び、手を取ってそのまま腕に抱きついた。満面の笑みでふくよかな胸部を押し当てられる。おま、だから無防備だと何度言えば（言ってない）

お互いの腕を絡ませて、赤みがかった瞳が上目遣いでオレを見つめる。ほんのり潤んでいるようにも映って、見入ってしまう。

「あの、食べ歩きだけじゃなくてもいいですか？　例えば……小物や飾り物のお店を覗いたり、人形遣いのお芝居を一緒に観に行ったり、とか」

「おぉイイぜ。王サマが満足するまでお供したらぁ」

「はい♪　約束ですよ。嘘ついたら針千本飲ませますからね？」

「お前がいうとジョーダンに聞こえねぇからヤメロ」

いつものように表情をころころと変えながら華扇が言葉を紡ぐ。あれだけ鈍かった足取りもすっかり軽くなっていた。やれやれ、現金なこって。

あそこに行きたいだのあれが食べたいだのと、やりたいことを次から次へと口にする。どんだけ楽しみなんだよ。

「綿間部」

「ん」

「その、ありがとうございます。えへへ」

「……フッ、まーな」

彼女の眩い笑顔を目の当たりにして、オレも口元が緩んだ。

そんじゃ、来たるべき日に備えて一稼ぎしておきますかね。このままじゃ幾ら飛ぶかもわかりゃしない。だが悪い気もしない。

夜は更けて、されど夜明けは遠く。さりとて日向のような温もりがオレの傍に寄り添っていた。

つづく

GW番外編　「屋根より高いコイゴコロ」

新緑に色付く季節に春風が吹く。

初夏来訪の前触れが告げられる。数日のうちに急に気温が高まった。暑さで汗ばむインナーに清涼な大自然の息吹が身に染みる。サンサンと日差しが降り注ぎ、太陽が眩しい。

「あっちぃ……全然夜じゃねーぞオイ……」

ぶつくさ文句を垂らしつつ作業を進める。

民家の屋根によじ登って鯉のぼりを吊るす。結び目が解けぬよう軒先に固く縛り付けた。やや強めに揺すってもビクともしない。これなら風で解ける心配もなかろう。

この家で八軒目の依頼であった。寺子屋、酒場、稗田邸など大なり小なりお呼びがかかる。あと偶々見かけたのだが、ミスティアの屋台もちっこい鯉のぼりを飾っていた。「可愛いでしょ？」とあざとく聞かれたので肯定しておいた。

「ありがとさん。じゃあこれお代ね」

「おう、次に依頼するときは夜にしてくれや」

「わかってる、わかってる」

肝っ玉母さんみてぇな恰幅のイイおばちゃんがオレの手のひらに小銭を落とす。これじゃ報酬というより駄賃に近い。ま、やったことが日曜大工と大差ねぇし、こんなもんか。何せこちとら何でも屋を名乗っている男。

駄賃のオマケに渡された飴玉を口の中で転がしながら、オレは次の鯉のぼりへと向かった。ハッカ飴はガキんちょには人気ねぇだろうな。

「お前んトコ一人娘だろ。必要あんのか？」

「細かいですねー。そういうとこで揚げ足取る男の人はモテませんよ？　やーい、非モテー」

「じゃかぁしいわ」

栗色のふわふわな髪を二つ結びにした小柄な娘っ子がブーブーと

ヤジを飛ばしてくる。
　読書家とは似ても似つかないおてんば娘は本日も騒がしかった。どーでもいいけど邪魔すんじゃねーぞ。
　ラストは人里で貸本屋を営む鈴奈庵であった。店の出入り口に竿竹を立てかけて、縦一列に頭を揃えた五月五日の風物詩がゆらり揺蕩う。貸本屋の看板が隠れないぐらいの大きさが丁度イイらしい。
　今や人里中を眺めれば、どこもかしこも色彩鮮やかな鯉の群れが風に泳ぐ。
　立ち止まったオレのすぐ脇をガキんちょ共が駆け抜けていった。カラス天狗が発行する新聞紙で作った兜を被り、同じく新聞を筒状に丸めた刀モドキでチャンバラごっこ。三月精のトリオもどこかで似たようなことやっていそうだ。
「精が出ますね。感心なことです」
「そりゃどーも」
　音もなく降り立った女の澄んだ声が耳に届く。柔らかな桃色のミディアムヘアに白いシニョンを括り、中華衣装にミニスカをあわせた格好。右手に包帯、左手に鎖付きのブレスレッドを嵌める。美しい顔立ちは人里でも目を引いた。
　茨木華扇はオレと目が合うとニコリと微笑んだ。ついでに両腕を組むと、ご立派な膨らみをもつ胸部が押し上げられる。余計なことを言うと説教が始まるので黙っておく。
　真っ当にオレが朝っぱらから働かされていたのが喜ばしいそうで、仙人サマが得意げな顔でありがたいお言葉を寄越してきた。
「頑張った綿間部にはご褒美をあげましょう」
「あ？　メシでも奢ってくれんのか？」
「それもそうですが、せっかくですしもっと人里を見て回りましょう。こんなにも良い天気なのですから」
　晴れ渡った青空を仰ぎ見て華扇が両手を広げる。爽やかな快晴に彼女も心が躍っているようだった。
　その仕草につられてオレも見上げてみる。遥か高くトンビが羽ばたいていた。いや、トンビかどうかは知らんけど。

「んー♪」
　買い食いの柏餅を手にして華扇がとても美味そうに舌鼓を打つ。仙人サマの髪の色とよく似ているせいか似合っていた。何ならハートマークも飛んでそう。
　こっちも柏餅を一口齧る。中身に詰まった餡子が甘ったるい。柏の葉っぱが出す僅かな苦みと混ざるとイイ塩梅になった。コレのおかげで手もベタつかないのはありがたい。
　二人で肩を並べて人里内を練り歩く。目線を巡らせれば必ずといっていいほど鯉のぼりが視界に入った。もはや鯉のぼりのバーゲンセールである。
　華扇もそれに気づいたようで、こんな話題を振ってきた。
「どうして端午の節句に鯉のぼりを飾るか知っていますか？」
「さーな。滝登りして龍になるためか？」
「あら、知っているの。意外でした」
「テキトーに言っただけだ。ホントのところは知らん」
　オレがそう返すと、仙人サマの解説が始まった。
「鯉のぼりは江戸時代に町人階層から生まれた節句飾りです。鯉というのは非常に生命力が強い生き物で、清流はもちろん池や沼でも生息することができます。登竜門、つまり鯉が急流を遡り竜門という滝を登ると龍になって天に登る。この伝説にちなんで子供がどんな環境にも耐え、立派な人になるようにと立身出世を願って飾られるのです」
「ほーん……要するに大和魂で立派な日本男児になれってか。いかにも鎧兜と日本刀のサムライ文化くせえな」
「ふふ、でも実は日本での端午の節句はもともと女の子のお祭りだったんですよ？」
「マジか」
「はい。田植えの時期になる五月に、稲の豊作をお祈りするために若い娘が小屋や神社に籠って穢れを払う『五月忌み』という風習があって、女性の厄払いの日とされていました」

「っかー、さすが仙人サマは博識なこって」
「勉強になりましたか？」
まぁな、と答えると華扇はしてやったりと言いたげに口元を緩めた。仙人サマは語りたかった模様。説教は長ぇし蘊蓄含蓄が好きなのは言わずもがな。上白沢女史と組んで教鞭でも振るえばいいんじゃなかろうか。
もっとも、最後の最後で詰めが甘かったみたいだが。フッとニヒルに笑ってさっきから気になっていたことを指摘してやった。
「それよか口に餡子ついてんぞ」
「へ……？　な、ななぁッ!?」
オレが指差すと、はじめはキョトンとしていた華扇だったが、すぐさま赤くなって口回りをくしくしと擦り始めた。そんな焦った様子をニヤニヤと眺めていたら膨れっ面で睨まれる。
「もう！　そういうのは早く言ってくださいっ」
「細けぇこと気にすんなよ」
「細かくないッ!!」
恥ずかしい思いをさせられたと桃色の乙女がオレに詰め寄ってくる。どうどうと宥めつつ、まぁ面白いモンが見れたなと愉悦に浸るのであった。
これも揚げ足取りに含まれるのだろうか。そらモテねぇわ。納得。

「あー！　あんた！」
遠慮のない大きな声が往来のド真ん中を突っ切って、オレの鼓膜まで刺さる。ただでさえよく通る声で叫ばれたら要らん注目が集まっちまう。
「うるせぇなオイ……フツーに聞こえるっつの」
「何よ？　なにか文句あんの？」
しかめっ面で振り返れば、天人娘と貧乏神の凸凹コンビと鉢合わせた。
コイツらの共通点といえば、青色系の長い髪――ただし水色と群青色ぐらいの差がある。あとは女にしちゃ一部分が貧相な身体つきっ

てぇところか。トドメに華扇と見比べてしまうとその差は歴然を通り越していっそ哀れなほど。現実とは残酷なものだ。

「あんた失礼なコト考えたでしょ。バカにされた気がするわ。怒らないから正直に言ってみなさい?」

「……いーや?　気の所為だろうよ」

あとそれゼッタイ怒るパターンだかんな。

「どうもぉ。こどもの日っていいですねぇ。こんなにおいしい葉っぱが食べられるんですもの」

「いや葉っぱだけじゃなくて餅も食えよ」

みすぼらしい恰好の貧乏神がマイペースに挨拶してくる。どこでお裾分けしてもらったのやら柏葉が仰山詰まった紙袋を抱えておった。一枚二枚と取り出してはもしゃもしゃと頬張っている。ヤギかオメーは。

日頃から得体の知れない雑草を食っている輩は格が違う。金持ち娘とつるんでいるのに貧しさが平常運転なのが逆に安心するわ。

貧乳コンビにたわわな仙人サマが世間話がてら質問を投げる。

「お二人も人里の鯉のぼりを見に来たのですか?」

「そ。天界からじゃよく見えないんだもの。紫苑もいるしわざわざ来てやったわ」

「それはそれは……」

当たり前のようなツラで何てことない口調で抜かす総領娘サマ。鈴奈庵の娘っ子がお転婆ならこっちは高飛車というべきか。それともただのワガママ娘か。

退屈に飽き飽きして天界を抜け出す不良お嬢サマが毎度の如く愚痴を零す。

「それより聞いてよもう。またお父様が私にはお淑やかさが足りないとか言ってくんの。ありえなくない?」

「有り得なくねーよ真っ当な評価だよ」

愚痴やら溜息やら吐きたいのはお目付け役の永江の方だろうに。

ここ最近は開き直って放し飼いにしているフシもあるが。できる女のスルー力がハンパない件について。

つーか、鯉のぼり上から見んなよ。せめて横から見ろや。

天秤（天貧）組からやっと解放されたのは昼過ぎ。

奴ら、というか天人が博麗神社に乗り込むと言って意気揚々と立ち去っていった。有頂天なテンションは留まるところを知らない。なお返り討ちに遭う展開まで想像ついた。

「ったく、ムダに疲れたんだが……」

「あはは……否定できません」

仙人という立場から華扇も強く出られない。苦笑いを浮かべて同意してきた。小野塚小町と同じく自力でコイツの屋敷に行ける輩だ。お茶出せもてなせとワガママ放題で手を焼いているのかもしれない。

ふいに、華扇がオレのシャツの袖を摘まんでくいくいと引っ張る。赤みがかった瞳が覗き込むように上目遣いになってほんのり潤んでいた。

「あの、綿間部……ちょっとだけ、ご休憩していきませんか……？」

切なげな甘い声音で、魅惑の誘い文句を囁かれる。

目的地がすぐ近くにあったらしく、桃色の女はオレをそこへ導くように摘まんだ指先を控えめに引く。気恥ずかしそうに、けれど精一杯の勇気を振り絞って思いを口にした。

「まだお昼も食べてませんでしたし……」

「腹減ってんなら最初からそう言えよ」

「だ、だって食い意地張っているみたいで恥ずかしいじゃないですか。私だって女の子なんですよ!?」

「へーへー」

さっきの誤解招く言い回しの方がよっぽどハズいと思うのだが。

右手包帯の女が指差す先に何の変哲もない定食屋が構えていた。昼飯時を過ぎたおかげで中は空いている。

とりあえず入ることにした。

「ご注文承りました。少々お待ちください」

注文を終えて、お品書きを閉じて元の場所に戻しておく。

しがない定食屋も目敏く季節モノで商売していた。こどもの日に限定した本日イチオシをやけに推されちまった。マジメな華扇は律儀に受けて特別メニューから選ぶ。

ほどなくして食事が運ばれてくる。仙人サマの前にはちらし寿司とタケノコの天ぷらが置かれた。前者は見た目も華やかでいかにも祝い事に相応しい。

「タケノコって五月五日と関係あんのか？」

「真っ直ぐに伸びる特徴から子供の成長とかけている、というのが通説ですね」

「っかー、単純だなオイ」

もっとも、理由付けなんざそんなものか。語呂合わせとか、それっぽいこじ付けが大半であろう。ご縁にちなんで五円玉で賽銭も然り。

ふと、数少ない知識と照らし合わせて考えてみる。

さっきオレたちが食い歩きした柏餅、それと華扇が今食っているちらし寿司。さらにこの女のイメージカラーでもあり、ついでに天人娘のところで採れる桃。

端午の節句とは直接繋がりはないが、ある意味では子供に関するネタで共通する。

つまるところ、子宝に恵まれる縁起物。

しょうもない思考にフッと鼻で笑ってしまった。そんなことすれば当然気付かれる。

「何を考えていたのですか？」

「ん、大したことじゃねぇよ。子作りについてちょっとな」

「ここっ子作り!?」

瞬間、華扇が赤面して店内で叫びやがった。お前今ナニ想像した。

頭から湯気を出してあうあうと狼狽える仙人サマをスルーして、山芋たっぷりのとろろそばを啜る。粘り気があって食が進む。

そういや、山芋も精のつく食材――いや何でもねぇわ。忘れろ。

腹を満たして定食屋をお暇する。

外に出れば、再び鯉のぼりが連なる景色が映った。今朝方よりも数

が増えているのは気のせいではあるまい。さながら鯉のぼりが特産品の観光名所の如し。

ぼんやり眺めていると、おもむろに華扇が可笑しそうに吹き出した。

「何や」

「いえ。ただ、一番上の黒い鯉は綿間部みたいだな、と」

「そーかぁ？」

確かに全身が真っ黒な特徴は似てなくもない。が、少なくともオレはあんなぬぼーっとした間抜け面を晒した覚えはない。断じてない。

黒い魚の真下に赤い魚が続くのもどこの家庭も皆同じ。偶然にもその色合いは、彼女が纏っている薔薇付きの中華衣装とよく似ていた。気高くも艶やかな紅い色が目に留まる。

ならばと売り言葉に買い言葉で言い返す。赤色の鯉を指差して答えてやった。

「フッ、あれがオレだってぇならあっちがお前で、その下に続くのがオレたちのガキってか」

「はへぇ!?」

またしても素っ頓狂な声を上げる仙人サマ。よくわからんが効果覿面。それにしても今日は一段と表情の変化が忙しいこって。

そんな彼女を放って歩き始めると、後ろから慌てたように追いかけてくる。

「ま、待ってください！　今の発言について詳しく」

「さーて、何のことだかサッパリわからんな」

「しらばっくれないでください。ちゃんとこの耳で聞いたんですからね？」

ぐいぐいと迫ってくる桃色ミディアムヘアの仙人をテキトーにいなしながら、頭上を見やる。

ヤツらは相も変わらず、お気楽そうに悠々と尾びれを揺らしていやがった。

番外編　完

第四十八話　「ビンボー神やっ！」

満ちた月に雲が覆い被さる。月明りが途絶えると暗さが際立った。田舎の夜景にありがちなフクロウの囀りが静かな宵の闇に溶け込む。

いくら夜目が利くといっても懐中電灯ぐらいは持ってくるべきだったか。人里を抜けて外域に出れば肌寒さすら感じる。深夜ともなれば気温も低い。

「つっても今から戻るのもメンドクセーか……」

だったらせめてさっさと終わらせてしまうに限る。早々にケリをつけるべく足早に踏み出す。さぁ、行動開始といこうか。

夜警、あるいは夜間の見回り。それが今回、オレが上白沢女史から引き受けた依頼である。

人目を忍んだ夜更けに事件は起こる。

誰もが寝静まった時間帯を狙い、人里外で畑荒らしや堆肥置き場が漁られる厄介事が相次いで発生。人里の守護者サマが相談を持ち掛けてきたのは、数日前まで遡る。

「つっても生ゴミなんざ食い散らかす時点で人間じゃねぇだろ。畜生か、物の怪か」

「私もそう思う。どうだろう、一つ力を貸してもらえないか？」

「そーだな……」

畑荒らしはいずれ野菜の収穫にも響く。一方で、堆肥置き場――平たく言ってしまえば生ゴミ捨て場ってか。そんな場所ならガサ入れされても大した被害はなかろう。と思いきや、最近になって住民が気味悪がっておちおちゴミ捨てにも行き辛いのだとか。

ま、確かに飢えた獣やら妖怪変化に襲われでもしたら、非力な凡人にはひとたまりもねぇわな。自分らが食われるモノになっちまうのがオチだ。笑えねぇブラックジョークだが。

聞けば、以前にも堆肥場で似たような珍事があったのだと。幸いにも当時の犯人は無害な人面犬。無害かどうかはさて置き、異世界クオリティを遺憾なく発揮している。都市伝説の具現化とか言われたがサッパリ理解できず、テキトーに頷く。

ともあれ、畑に生えとる生野菜やら廃棄された生ゴミやらを食い散らかす有り様に、さらに犯行時刻が真夜中に及ぶとなれば、あまり穏やかな内容でもなし。人里の守護者サマが気に病むのも至極当然のこと。

そこで、夜といえばあの男しかいないと女教師が頼ってきたのが、何を隠そうこのオレってぇワケだ。今や人里に何でも屋を知らぬ者はいないと言っても過言ではない。

おかげで、こうして人里周辺の巡回ついでに現行犯を見かけたら追い払ってほしいとかいう依頼を引き受けちまったのだが。ま、しゃーねぇ。上白沢女史は大事なお得意様だ。あと華扇と食べ歩きで奢ったのが地味に懐に効いているのも否めない。アイツは食い過ぎだ。

無理はするなと上白沢女史が気を使ってくれたが問題なし。噂の人面犬だろうがその辺の野良犬だろうが、いざとなったら切り札のピストルを一発鳴らせば逃げ散るハズだ。なぜならオレは夜に生きる男。

まずは第一の現場。堆肥置き場まで足を運ぶ。

ド田舎異世界の幻想郷はエコロジーなことに、ほとんどのゴミは資源として有効活用される。生ゴミで堆肥作りなんつーモンがその典型例。カンタンにポイ捨てする現代人にも見習ってほしいものだ。タピオカとかよ。

それはそうと、どこぞの捜査官が事件は現場で起きてんだとかいうセリフがあったが、まさにその通りだと思う。というのも、

「……」

何か居るんですけど。

堆肥置き場に行くと謎の人影が蠢くのを見つけちまった。周囲が薄暗い上に死角になっているため、ここからじゃ背中ぐらいしか確認できない。だが、人面どころか全身漏れなく人型なのは間違いなかった。

時間状況その他諸々全てひっくるめて不審者待ったなし。あの繁華街ならまだしも、よもや夜な夜な生ゴミをガサ入れする変質者が幻

想郷にもいようとは。人里の守護者サマの慧眼をもってしても見抜けなかったのも無理はない。

いや待て。単純にゴミ捨てに来ただけかもしれない。念のために確かめるべきか。どこぞの中華衣装な仙人サマみてぇに誤解して恥かくのは避けたい。

「オイ、そこで何してんだ」

「ひゃいっ!?」

不躾な声を飛ばすと謎の人影がビクッと震えた。ハイ怪しい。それと声のトーンからして若い女だと判明した。

そのうえタイミング良く、月を覆い隠していた叢雲が風に流されていく。夜空が晴れて月明りが差し込む。暗闇に隠されていた相手の顔が露わになった。

「あぅ、ううぅ……」

一言で片付ければ、貧しそうな女だった。？せぎすな身体は健康的とは言い難く、スリムと呼ぶには些か行き過ぎた。いかにも栄養が足りてなさそう。

あと着ているものもボロい。色褪せたパーカーみたいな半袖に、これまた飾り気のない短いスカートを着合わせている。どういうセンスしてんだか「差し押さえ」とか「請求書」と書かれた紙切れ（布切れ？）が張り付けられ、深く青みがかった長髪を結うリボンにもそれが行き届く。おまけに裸足ときた。

ホームレスばりにみすぼらしい女が狼狽えた様相でオレを見上げる。一歩進むと、反射的に頭を庇うようにガードされた。

「ごめんなさいぃ。ぶたないで、虐めないでぇ……」

「いきなり見ず知らずの女に殴りかかるほど外道じゃねぇよ」

はたしてオレがどんな男に映っているのか是非とも問い質したい。ま、華扇からも目つきが悪いとか言われているし、オレ自身も自覚があるのだが。

あまりに弱々しい態度に毒気を抜かれちまった。見た目も貧弱そうだし、コレが不審者だとしても微塵も恐怖がない。

というか、こちとら拳を振りかざしてすらいないってぇのに、涙声

で懇願されても困る。華扇に見られたら確実に早とちりされてオレが説教食らう構図でしかない。

溜息がてら何もしないから落ち着けと宥める。ヒステリーに陥られてないだけまだマシだった。ひとまず会話を試みる。

「そんで、お前は何者だ?」

「あ、はい……依神紫苑といいます。貧乏神です……ごめんなさいごめんなさい」

まさかの貧乏神であった。だからそんな恰好してんのか。納得、してイイのかわからねぇぞオイ……

懲りずに何度も頭を下げる深青色の女。そこから漂うネガティブなオーラがハンパない。これまでにないタイプの個性派キャラで扱い難い。

「謝らんでいい。じゃ、次の質問だ。ここ最近畑荒らしてたり生ゴミ漁ってたのもオメーか?」

「いぃっ!? いえいえそんな! 皆さんが丹精込めて大事に育てたお野菜を荒らすだなんてとてもとても! わたしはただ、捨ててしまう前に食べられそうなものを恵んでもらえないかと……それに今日は偶々来ただけなんですぅ、信じてくださぃ……」

「だーもう! わぁーったからいちいち泣き顔すんな」

貧乏神ってぇのがそういうモンなのかは知らんが、エラく自己肯定の低いやっちゃな。どうやらコイツがここ数日の犯人っつーワケでもなさそうだ。両手と首をブンブンと振って自らの潔白を訴える必死さに憐れみが伴う。

すると、今度は青髪のビンボー女がおずおずと手を上げた。

「あのぅ、わたしからもいいでしょうか?」

「おう何や。言うてみぃ」

「さっきも言いましたけど、わたし貧乏神なんです……普通なら嫌がったり避けたりするものだと思うんですけど、平気なんですか?」

「ハッ、んなモン知ったことかよ。すでに死神にも祟り神にも出会っちまってんだ。今さらちょっとビンボーな新キャラが出てきた程度じゃインパクト薄いわ。どーしてもオレをビビらせたきゃ邪神でも

名乗んだな」
「でも、わたしが言うのもなんですけど……」
「あと先に言っておくがオレに憑いても意味ねーぞ。こっちも収入不安定なテント暮らしだかんな」
わざわざ自分が貧乏神だと念押ししてくる不安の声を鼻で笑い飛ばしてやった。
何でも屋の仕事はいわば依頼次第の博打に等しい。相当なデカいヤマでもない限り儲かるのは稀なこと。そんなん貧乏神からすればしけたカモであろう。憑依したところで旨味なし。せいぜい一杯奢るのが関の山だ。
ところが、なぜか女――依神紫苑といったか、ヤツは指を折り組むと感激したように瞳を潤ませやがった。さながら天に祈りを捧げるかの如く万感の言葉を贈る。
「あぁ……！　なんていい人なんでしょう。神よ、感謝します」
「オメーも一応は神なんだろうが」
もはや単に貧しい女にしか見えない。この手合いはあまり出会わないから新鮮というか、どうにも調子が狂うというか。何つーか、無視して立ち去るのも気が引ける。
何となしにポケットに手を入れてみる。都合よく、キシリトール配合のガムが出てきた。
「オイお前。腹の足しになるとは思わんが、ガムでよかったらやるぞ」
「いいんですかぁ!?」
「お、おお。ほれ」
「わぁ……！　ありがとうございますぅ」
だからイチイチ大袈裟な反応はどうにかなんねぇのか。
この女が初めてみせた積極性に思わずたじろぐ。見た目はかなりボロボロだが近付かれた拍子にちゃんと若い女の匂いがした。
それとガムは飲むモンじゃねーぞ。今メッチャ飲み込む音したかんな。
「別についてくる必要ねぇぞ？」
「いいえっ！　貧乏神なのに虐げたりしないで、それどころか食べ物

まで下さったんですから、いくら感謝しても足りません。ここはわたしにも手伝わせてください」

見ての通り、依神紫苑とやらが仲間に加わった。

コンビニで百円かそこらで買った、しかも開封済みのガムごときでここまで気合入れられるとは思うまい。桃太郎印のきびだんごじゃあるめぇしよ。

兎にも角にも、堆肥置き場に居たのはコイツだけ。次の現場に移動するか。

そして人里外れた田畑に着いた時、オレたちはこの事件の真犯人と対峙することになる。

その生き物は己の巨体をもって作物を尽く蹂躙し、蹄のついた前足で土をほじくり返していた。大きな鼻穴から噴き出る息は荒く、湾曲した牙は猛者の象徴を示す。筋骨隆々な体躯は弱き者をいとも簡単に捻じ伏せる。

その正体は、クソが付くほどデッカイ猪が一頭。

山から下りてきたと思しき巨獣は、敵意を通り過ぎて殺意を飛ばす。その先にあるのは他でもないオレと依神。

呪いを疑うレベルの運の悪さと間の悪さ。あろうことかヤツと真っ向から睨み合うかたちで遭遇してしまった。緊張感が張り詰めて直立したまま冷や汗を流す。やせ我慢で乾いた喉から軽口を絞り出した。

「オイ……アレを仕留めれば残飯なんざオサラバしてイノシシ肉で肉鍋できんぞ。よかったなァ？」

「むっ、むりですぅ！　わたしみたいな貧弱な体じゃペシャンコに潰されちゃいますからぁあ」

半泣きで依神がいやいやと頭を振る。貧乏神パワーをもってしてもどうにもならないようだ。予想の範疇なのでそこまで悲観するほどでもなし。だよな、と軽く流す。

つーか何だよアレ。山神様かよ。今まで出会った中で一番ヤバイ奴な気がしてならないのだが。

一応、チラリと横を見る。深青色の貧乏神は文字通り全身が真っ青になっておった。

「ま、そんな貧相な体で肉弾戦なんざできるワケもねーか」

「あぅ、そうですよね……わたしみたいなおっぱいちっちゃい女の子なんて、全然魅力ないですよね……」

「んん!?　今そーいうハナシだったか!?」

泣き止んだと思ったら、慎ましい胸に手を当てて虚しい自虐とともに落ち込んだ。気にしてたんか。何かスマン。ま、どっかに需要はあると思うぞ。多分。

などと余計な漫才モドキをしている場合でもなかった。

とうとう大猪がブルル、と巨体を震わせてオレたちに狙いを定める。縄張りを横取りされてたまるかと交戦の姿勢に入っていやがった。自らのテリトリーに侵入してきた不届き者と見なされたのは火を見るよりも明らか。

「クソッ、侵入者はそっちだろうがよ……！」

まだ人面犬の方がどれだけマシだったか。未だかつてない危機的状況に歯噛みする。

どうする。空撃ちで威嚇するか。いや、得策とは言い難い。最悪の場合、冗談抜きで「よーいドン！」の合図になって突進してくる危険もある。追い払うつもりが逆効果じゃねぇか。

ならばオレたちが撤退するか。それも無理だ、恐らく逃げ切れない。野生の猪が突進するスピードが時速何キロを叩き出すか知らんが、少なくとも鈍足とは到底思えない。死因が猪に轢かれたからとか、無念過ぎて死んでも死に切れねぇ。

おまけに依神が「ひぇぇえ」とか情けない悲鳴上げてオレの腰にしがみついているせいで尚更動けん。ひぇぇえじゃねーよ離れんかい。

残酷にも時間切れとなった。

剛毛の獣が眼光に禍々しい攻撃色を灯し、夜天に目掛けて高く嘶いた。固い前足で地面を削り、突撃の体勢に入る。

カウントダウン開始。三、二、一……

ごちんっ!!

「……は」
「……えぇ？」
脳天に鈍器が叩き込まれた鈍い音が響き渡った。直後、凶暴さを滾らせていた大猪の巨体がゆっくり傾き、力なく真横に倒れた。ドスン、と身を伏した重そうな音だけが残る。
聞き覚えのない少女の声が貧乏神の名前を呼んだ。
「やっと見つけた紫苑。こんな所で何やってんのよ」
つづく

第四十九話　「これがキョウイの格差社会」

有頂天な声とともにその女は颯爽と登場した。

依神紫苑の群青色に近い髪色と比べるとニュートラルな青色。ストレートなロングヘアを伸ばし、桃の飾りが付いた黒い帽子は丸いデザイン。声だけじゃなく表情もやけに自信に満ち、勝気そうな瞳が爛々と輝く。白と青を組み合わせた衣服もどことなく高質な印象を受けた。

あと注連縄で括った拳大の石ころを片手に持っている。アレが犯行に使われた凶器なのは言うまでもない。

「て、て、天人様ぁあ」

「あーはいはい」

倒れ伏したデッカイ猪を素通りし、ブーツを踏み鳴らしながら歩み進む新キャラに貧乏神が膝立ちのまますがりつく。女は泣きつくビンボー女の頭にポンポンと手を乗せた。

腰にへばりつく依神を引きずって、青髪ロングな女がこっちに目線を向ける。

「ところであんた誰？」

「そりゃこっちのセリフだっつの」

「お二人ともわたしの恩人です。天人様天人様ぁ、この人わたしが貧乏神だと知っても嫌な顔一つせず、それどころかお菓子もくれたんですよぉ？　この依神紫苑、感激しました」

「へー。なかなか骨のあるやつじゃない」

そう言うと女は石ころをテキトーに放り捨て、ついでに貧乏神を引き剥がしつつオレに詰め寄った。珍しいモノを見る目で頭の天辺から爪先までジロジロと遠慮なく値踏みしてくる。

依神紫苑が女にしては背が高いってぇのもあるが、この二人が並ぶと身長差が顕著だ。もっとも、どちらも背の高さと態度のデカさは反比例しているようだが。それよりいつまで見とんねん。

ようやく満足したのか、青髪ロングの女は腰に手を当ててふんぞり返ってニッと笑った。いちいち決めポーズするあたり自己主張が強

いタイプかもしれん。
「見ない顔だから名乗ってあげる。天界に住む天人といったら誰もが知ってる比那名居天子よ。よく覚えておきなさい」
「あぁ？　天使だぁ？」
　そのわりには頭の輪っかもなければ白い羽も見当たらない。服装も、古代ギリシアの彫刻とかにありがちな白い布を身体に巻き付けたやつでもない。もちろん、フランダースの犬のラストシーンで降ってくるような全裸のガキんちょも連れていねえ。
　つまるところ、天の使いである要素がまるでなし。小野塚小町ですら死神のトレードマークを持ち歩いていたってぇのによ。職務怠慢ではなかろうか。
　疑惑が隠し切れずつい態度に出てしまう。すると、同じように比那名居何とやらも不機嫌そうに眉間にしわを寄せた。
「あんたが考えてる天使じゃないわよ。私の名前よ、な・ま・え！　天国の天に子どもの子で天子（てんし）って読むの！　この私の名前を間違えるなんて失礼しちゃうわ。あーやだやだ」
「初対面なんだからしゃーねぇだろうが。つまりテンコと書いてテンシってぇワケか」
「てんこっていうな!!」
　むきーっ！と不満を爆発させる比那名居テンコ。どうやらコイツの地雷を踏んだらしい。地団駄を踏んで喚く姿まったくもって天使とは言えず。やっぱテンコだわ。
「いいこと？　よーっく聞きなさい」
　やや吊り目がちな両眼に目力を込めて天人女が捲し立てる。至近距離で大声出すなや。
　兎にも角にも、ヤツの自分語りのマシンガントークをまとめると、だ。
　この比那名居天子とかいう女、天界なる場所ではイイトコロのお嬢らしい。父親が総領とかいうお偉いさんでコイツはその一人娘。そもそも、天人という種族が思ってたより上位な輩のようで、歌だの踊りだの釣りだのと優雅な暮らしをしてんだと。要するにセレブか。

総領娘サマはかのピノキオの如く鼻を高々と伸ばして胸を張っておった。その脇ではビンボー女が薄幸そうな尊敬の眼差しで拍手を送っている。子分かよ。そんな気はしてたわ。

もっとも、いくら胸を張ろうがふんぞり返ろうが比那名居天子のバストは平坦であった。依神紫苑と同じぐらいの貧乳ともいえる。金銭面で貧富の差はあれど、そっち方面は引き分け。普段からイイモノ食ってるからといって発育良好とは限らない模様。

「まぁいいわ。あんた、紫苑のこと悪く言わなかったんだっけ？　どこの馬の骨かもわからないけれど見どころはありそうじゃん。柄悪そうだけど気に入ったわ。私の家来にしてあげる」

「要らん、断る」

「なんでよー！」

コンマ一秒で断られたのが癪だったのか、比那名居天子がまたしても不満をぶちまける。

依神にどうにかしろと無言のメッセージを放つが、ふるふると力なく首を横に振られた。やはりというかコイツのが立場が下らしい。ま、金持ちと貧乏のコンビならそらそうか。

オレたちなんぞお構いなしにテンコのマシンガントークがガトリング砲の域まで加速進化していく。こっちが冷めた態度になってんのとは対極的にヤツはますます熱くなった。威張り散らすともいう。

「速攻で断るなんていい度胸してんじゃないの。いいこと？　この私に仕えるってことは天界でも滅多にないスッゴク光栄なことなのよ。それを地上の人間であるあんたが選ばれた！　それも私直々の指名で！　わかる!?　こんな美味しい話まずありえゴッ!?」

刹那、青髪天人が年頃の娘にあるまじき鼻の籠った声を吐き出し、その立ち姿がほんの一瞬だけブレる。さながら残像が生まれたかのような現象だった。

世界が停止したかと勘違いするほどの数秒のタイムラグ。謎のスローモーション感覚に襲われる。が、その直後にして比那名居天子が勢いよくブッ飛んでいった。

「うぎょぁあアアアアアア!?」

「て、て、天人様ぁ～!?」

依神の呼び声も虚しく、金持ちの天人サマは蹴られたサッカーボールみたいに遠くへシュートされる。

地面を何度も跳ねては転がっていき、やっとのことで濛々と土煙を上げつつようやく止まった。女は尻を高く突き出したうつ伏せの体勢でビクンビクンと痙攣している。凄まじい光景だったがとりあえず生きてはいるみてぇだな。

貧乏神が慌てふためきながら彼女のもとに駆け寄って、土埃塗れの体を懸命に揺する。高そうな衣服もあれでは台無し。なお、当人はだらしなく悦びの笑みを浮かべて、艶やかな熱の籠った息でハアハアしておった。コイツ、まさか……

しかしながら、安心している暇など欠片たりとも存在しない。

気を抜いたのも束の間、地を震わさんばかりの重々しい嘶き声が鼓膜を突き抜ける。

「げ……ッ!?」

危機的状況。

気絶していたハズの大猪が復活を遂げていやがった。筋肉質な四肢で猛々しく立ち上がる。怒気と凶暴性が倍プッシュし、もはや殺意の波動に目覚めた。どす黒い闘気は幻覚だと思いたい。

「はわわ……」

ビンボー女がベタなリアクションで顔面蒼白になって震え上がる。よもや不幸続きの原因コイツではあるまいな。

野獣は先ほど以上に鼻息を荒げて興奮している。自身に攻撃したテンコを真っ先にぶちのめすあたりムダに賢しい。しかし、まだまだ怒りが収まらないご様子。

「うぇえ、天人様ぁ。お気を確かに～」

「あへぇ……♡」

貧乏神が必死に起こそうとしているものの、肝心の天人サマは思春期の男児にはお見せできないアレな表情を浮かべており、意識だけが天界に帰っちまっていた。思いっきり背骨ごとイッてたわな。むしろよく生きてんなオイ。

てんやわんやと余裕を失ってモタついている間に、大猪が再度タックルの構えを取る。咄嗟に体が動き、女二人を庇う形で身体を張った。

不良やチンピラどもを蹴散らせてもイノシシ一匹に敵わないとは。ま、アレが化け物級に規格外サイズなのもあるが。それでもダセェのは変わらない。

「クソ、詰んだってやつかよ……ッ！」

「はへぇ……♡」

「あぁ……女苑、不甲斐ないお姉ちゃんでごめんね。せめてお姉ちゃんの分まで生きて、どうか幸せになって……」

オレは手汗を握り締め、比那名居天子は世にいうア○顔で昇天し、依神紫苑は辞世の句を読み始める。最後のやつ縁起でもねぇなオイ。

巨体の獣が身を低くし、後ろ脚に力を籠める。絶体絶命――

「そこまでです」

その時、凛とした声で救いの主が舞い降りた。

柔らかな桃色のミディアムヘアを夜風になびかせて、胸元に薔薇が咲く中華衣装を纏った女が荒ぶる獣の眼前に悠然と立ち塞がる。彼女は少しも臆することなく包帯の巻かれた右手を野獣の眉間に添えた。

真っ直ぐに芯の通った声音がこの場にいる全てを掌握する。

「お止めなさい。人間の作物を口にして味を占めたのでしょうけれど、このままではあなた自身が狩猟の標的となり撃たれてしまいます。それはあなたも望むところではないでしょう？」

動物を従える山の仙人、茨木華扇がその本領を発揮する。

彼女が言葉を紡ぐ毎に、もはや手に負えない域まで凶暴さを増していた巨獣が少しずつ怒りを鎮めていく。強面なのは変わらねど雰囲気は明らかに落ち着きつつあった。

宥め、鎮め、説得し、助言を授ける。説教も欠かさない。

つらつらと言葉が紡がれ、清流のように留まりなく進んで相手の心の内に沁み込ませていく。

ついに剛毛の獣から怒気と敵意が完全に消え失せる。只々、華扇の

言葉に耳を傾ける。
「これからは山の恵みでお腹を満たすこと。よろしいですね？　さぁ、お行きなさい」
仙人サマが優しげな口調で告げて、最後に額を一つ撫でてから右手を離す。すると、野生の獣はその巨体をあっさりと翻して田畑から去っていった。
さすがのお点前に感服するしかない。もう仙人なんだかもののけ姫なんだかわかんねぇな。
重い足音が遠くへ過ぎ去り、いつしか聞こえなくなる。その頃になって、ようやく桃色の女がこちらを振り返った。
月の光に照らされた彼女は美しく、今の状況もあって冗談抜きで救いの女神に見えた。
「皆さん、ご無事でしたか？」
「お、おぉ……今のはマジでヤバかったわ……」
「たた、助かりましたぁ～」
「あへぇ……♡」
一人だけ無事とは言い難いものの口々に生存を告げる。依神も女の子座りで腰を抜かしていた。テンコはもはや何も言うまい。
あーメッチャ嫌な汗かいた。もう二度とこんなヘマはしねぇぞ。次からは目眩まし用の閃光玉でも持ち歩く。幻想郷にそんなブツが売っていればの話だが。
全員が情けなく脱力している様を見て仙人サマが苦笑いを浮かべる。
「間に合って何より。綿間部にもしものことがあったら大変でしたから」
「サンキュー……ホント、お前がいてよかった」
オレがそう返すと、華扇は綺麗な顔ではにかんだ。
本日のＭＶＰ、茨木華扇。

その後。
「ここがあんたの家？　せっまいわねー。犬小屋かと思ったわ」

「そうですかぁ？　わたしはいいと思いますぅ。この狭さが丁度いいですもの」
「なしてテメーらまで居座ってんだオォン？」
「まぁまぁ。喧嘩腰はダメだと言っているでしょう、綿間部」
現在、オレのアジト内では四人がすし詰め状態で密集していた。
クソデッカイ猪の一件については明日にでも上白沢女史に報告するつもりだ。どのみち今夜はもう彼女も寝ている頃であろう。悪い知らせならいざ知らず、事件解決の朗報ならば急ぐ必要もなし。
それはそれとして、どーしてこうなってんだ？
快感トリップから正気に戻った天人とその取り巻きな貧乏神が、さも当然のツラしてテントに入り浸っていやがる。華扇ならともかくコイツらが居座る理由がわからねぇ。いや、オレたちの後ろをついてきたあたりから薄々嫌な予感はしてたんだが。
おまけに比那名居が随分な物言いをしてきたのはまだしも、依神までもが何気に失礼な評価を下す始末。凸凹コンビかと思いきや意外と相性がイイのかもしれない。どっちもまな板だしよ。
「ねー、喉乾いたー。飲み物ぐらいないの？」
「ったく、ワガママか」
早速お嬢が好き勝手なことをのたまう。両足を放り出してこの上なく寛いでいる有り様に嘆息した。つくづく遠慮のないやっちゃな。
「オイ華扇。お得意の説教でコイツ何とかしてやれ」
「あー……その、天人が相手となると少々分が悪いといいますか。勝手が違うのです……」
「なんだそりゃ」
「仙人の目標の一つに天界に行くというのがあります。だから立場上、天人に逆らうのは難しいの。それに、彼女自身も説教が通用しない性格であまり効果がなくて……なので、上手く褒めてそれとなく誘導するのが彼女への賢い応じ方ね」
「そーいうことかよ。押してダメなら引いてみろってか。メンドクセーなぁ……」
ま、エエか。

どーせこのお嬢サマもそのうち狭い空間に嫌気がさして出ていくハズだ。

時間の問題――

「うわなにこの本。下着姿の女の子ばっかり写ってるじゃない。やーらしー」

「は？　どういうことですか綿間部？」

「ちょバカお前っ、いやコレ違えよ万が一に備えて腹の中に仕込んでおくんだよオレの趣味じゃねぇから！」

やっぱ放置できねーわコイツ。

勝手にボストンバッグの中を漁った不良お嬢サマが、奥底に眠っていた青少年向け雑誌を発掘しちまう。よりにもよってグラビア集を広げて余計なコトまで口走りやがった。

すぐさま引っ手繰るが時すでに遅し。ゾッとするナニカを感じ取って思わず振り向いた。

華扇の赤みがかった瞳が光を失って暗くなる。無表情を通り過ぎて虚無の視線が浴びせられ、先ほどとは違う意味で命の危険を感じた。つーか仙人サマ目ぇ怖ッ！

「綿間部？」

「だから違ぇって」

「む、胸の大きいコばっかり……チッ」

「天人様ぁ、わたしも見ていいですか？」

「オメーらもじっくり読みふけってんじゃねーよコラァ！　つーか、いつの間に取り戻しやがった!?」

「ワタマベ？　キイテマスカ？」

「だから誤解だっつの!!」

だーもう！　いい加減にしろ！

ここからッ、出ていけぇえええええええ!!

つづく

番外特別回　「もしも茨木華扇とキャンパスライフを過ごしたら　前編」

「む……」

起床。

寝落ちしちまったらしい。フローリングの床に伏せたまま瞼を開く。こんな場所で雑魚寝したのが祟って体の節々が凝り固まっていやがった。

ボンヤリと部屋の中を見回して、薄らいだ記憶と照らし合わせる。乱雑に散らばった青年向けコミックの単行本。スミノフとジーマの空き瓶がそこら辺に転がる。飲みきりサイズの空瓶は六本を超えておった。ボーリングのピンにでも使えそう。

「……あぁ」

思い出した。昨夜は確か、新宿スワンを読みながら深酒してたんだっけか。幸か不幸か寝心地の悪さが目覚まし代わりとなったみてぇだな。

今何時だろうか。スマホを手繰り寄せてホームボタンを押す。

ＬＩＮＥの新着メッセージが来ていた。差出人はクソマジメな知り合いの女。一時間ほど前に受信したことが表示されている。

『今日は必修科目の講義があります。寝坊したり遅刻したりしないように！』

「わぁーっとるわい」

思わず口に出した独り言と全く同じ文面を打ち込み、送信をタップする。一分も経たないうちに返信が来た。腕を組んで頷くスタンプのみ。送り主はコレと寸分違わぬしたり顔を浮かべているに違いない。

邪魔な空き瓶を足で退かしながら洗面所に進み、顔を洗ったり歯を磨いたりと身支度を手早く済ませる。遅刻する心配はねぇがダラダラするだけの時間もなし。オマケに冷蔵庫には調味料しか入ってない始末。

整髪料を使って黒髪オールバックのヘアスタイルを整える。仕上がりは上々で悪くねぇ。フッとニヒルなキメ顔で鏡を見る。

「さぁて、行くか」

ローテーブルの上にあったスクーターのカギを拾い、オレは我が居城――大学までの近さが売りの学生向け安アパートの玄関扉を開け放った。

つまるところ、オレこと黒岩（本名は綿間部将也）は夜に生きる男……でありたい一介の大学生なのである。

「やれやれ……着きましたよっと」

バイク置き場のテキトーな空きスペースに愛車をブチ込む。どいつもこいつも所詮は大学生ゆえ、駐輪場は安物の原チャリで溢れていた。ま、オレのも中古で買ったポンコツなんだけどよ。

大学の敷地内に入れば大学生たちの姿をちらほら見かける。そらそうだ。キャンパスの中央に建つ時計を見上げれば、その針はすでに十時過ぎを指していた。

そこまで時間に余裕があるワケでもないので、掲示板はスルー。真っ先に足を運んだのは、講義室がある本館ではなく別館。大学生協やらカフェテリアがある憩いの場。

ひとまず大学生協に立ち寄った。せめてモーニングコーヒーぐらいは買っておきたい。何せこちとら夜型なのだ。カフェインでも摂取せねばアタマが働かねぇワケで。

「あー……今日はボスってぇ気分じゃねーな」

ジョージアと、あと何となく手に取ったファンタ（ピーチ味）を持ってレジへ。プリペイド機能付きの学生証でちゃちゃっと支払いを済ませる。残高１９３円。ぼちぼちチャージせねばなるまい。

別館の内装はわりとオシャレだ。学生たちの休憩スペースと謡われるだけあって広々とした造りになっている。開放的な空間を演出したつもりなのであろう。腰掛けシートがバラけた配置で設けてあり、講義室のような堅苦しさはなかった。

そこかしこから自由と青春を謳歌する若人どもの賑やかな声が飛

び交う。いつ来ても喧騒が尽きない。別に人間観察が趣味ってぇワケでもないのだがつい見渡してしまう。

次の講義までダラダラ時間を潰すヤツ。わざわざこんな騒がしい場所で課題に取り組む女子大生ズ。サークル仲間が集まってんのかムダにテンション高いチャラ男たち。特に用事もないけどとりあえず来てみたのであろうボッチ。

「お」

その中に見知った顔を発見した。

あっちはオレに気付いた様子もなく、窓から見える景色を眺めながらポッキーをポリポリと齧っている。コイツいっつも飲み食いしてんな。この間はデカい胸にタピオカ乗せたまま文庫本を読んでおったわ。

せっかくだし驚かせてやろう。オレの脳内で悪魔が囁く。よし、採用。

オレは忍び歩きで後ろに回り込むと、買ったばかりのよく冷えた飲み物を隙だらけの首筋にピッタリ当ててやった。

「ひゃぁあん!?」

一歩間違えれば誤解を招きかねない甲高い悲鳴が上がる。彼女はビクンッ!と思いっきり体を跳ねさせて、直後、勢いよくこちらを振り返ってきた。その動きに合わせて桃色のミディアムヘアが僅かに舞う。

柔らかな色合いに染まった艶やかな髪に、二つの白いシニョンが括られる。あどけなさと大人っぽさを均しく成り立たせた顔立ちは、誰が見ても美人だと認めるほどに整っている。ただし、よっぽどビビッたのか赤い宝石のような眩い瞳は今や涙目になっちまっていた。

なかなかどうして予想以上のリアクションであった。我ながらあくどいツラになってんのが自覚できる。我慢できずフッと鼻で笑ってしまう。

そして、はじめのうちはパチパチと瞬きしていた女だったが、

「あぁぁ……!」

仕掛け人がオレだと理解するや否や、目に見えて表情を変えていっ

た。
　頬っぺたを風船みたく膨らませて、肩を小刻みに震わせる。薄っすらと涙を浮かべていたハズの赤みがかった瞳は怒気を宿しておった。何なら炎すら幻視できる。
　ドツキリ番組のネタ晴らし気分で、オレはニヤリと口角を上げた。
「よう」
「よう、じゃありませんッ！　何するんですか馬鹿者ォオ!!」
　開口一番、芯の通った声音が衝撃波を生んで真正面からぶつかった。あまりの大音量に堪らず耳を塞ぐ。っかー、うるせぇ。相変わらず声デケェなオイ。
「あんま大声で叫ぶなよ。周りから見られんだろ」
「こんなことされたら怒るに決まっているでしょう!?　ビックリしたじゃないですか！」
　眉間にしわを寄せるお怒り顔も、遠くからでも聞こえるレベルの怒鳴り声もすっかり慣れてしまった。とはいえ別に普段から怒らせているつもりはねぇのだが。
　この女は茨木華扇。オレと同学年でかれこれ入学当初からの付き合いになる。ちなみに今朝ＬＩＮＥした相手もコイツだ。
　知り合ったきっかけは何だったか。新歓コンパだったような気がする。偶然、席が隣同士になったとかそんな感じ。何サークルの勧誘だったかすら完全に忘れちまったけど。
　オレも華扇も大学二年だ。一年以上もこーゆー感じが続いていると思うと感慨深い。いや、そうでもねぇわ。フツーだわな。
「こんな所で何してんだ？　お前だって授業あんだろ」
「あなたを待っていたんです！　それなのに、やっと来たと思ったらこんな意地悪して酷いと思わないのですか!?　今朝だって私がメッセージ送ったのに一時間も過ぎてからようやく返事しましたよね。どうせ夜更かしして危うく寝過ごすところだったんでしょう？　だから不規則な生活をしてはいけないとあれほど――」
「ったく、悪かったっつの。コレやるから機嫌直せ。な？」
　お得意の説教が始まりそうだったのを遮って、先ほど首筋に密着さ

せたファンタを突き出す。もともと華扇の差し入れ用に買ったやつだし問題あるまい。まさか怒りを鎮める貢物になるとは。

華扇はまだ恨みがましそうな目つきでオレを睨んでいたが、ひとまずブツは受け取った。

「もぉ、人を物で釣ろうとしないでください」

「へーへー、すまんこって。それよか早く行かねーと間に合わんぞ」

「それはこっちのセリフです。まったくもう、誰のせいでこうなったと思っているのですか」

「だったら先に行けばよかっただろ。つーかお前、よくオレがこっち来るってわかったな」

「綿間部のことですから。簡単にお見通しです」

「さよか」

桃色が似合う女子大生はエッヘンと得意げに笑みを浮かべて胸を張った。それからお菓子の空箱を近くのゴミ箱に捨てると、オレの手を引っ掴んで歩き始める。いやここまで来たら逃げねぇよ。

華扇に連行される道すがら、すれ違った男どもから舌打ちやら歯ぎしりやらが聞こえてきたのは気のせいだと思いたい。

「で、どこの教室だ？」

「ちゃんと掲示板を確認しないからそうなるんです。今日は５１４講義室よ」

オレが掲示板を素通りしたことも容易く見破って華扇が即答する。手を繋いだまま。

美人でスタイルもイイうえにマジメな性格。一見すると才色兼備なこの女の欠点は無防備さにある。ふとした仕草で距離が近かったり。オレじゃなかったら勘違いしてんぞ。

結局、講義室に着くまで華扇がオレの手を離すことはなかった。何でや。

「――このように、母集団の中に特異な値が単体で混ざっている場合においては、平均ではなく中央値を用いた方がより正確な統計データを測ることができますわ」

教壇に立った講師の声が反響する。この大学で一番大きい講義室にもかかわらず、彼女の説明は隅から隅まで行き届いた。壇上の美女はスクリーンに映るグラフや数式の解説を続ける。

ミス八雲。フルネームは八雲紫。持ち科目は統計学。

波打つ長い金髪をなびかせて謎めいた雰囲気を放ち、数字に秀でた理系でもありながら民俗文化の知識にも富んだ才女。そのミステリアスな美貌から男ばかりではなく女生徒からも羨望の眼差しが集まる。

ミス八雲が目的で履修した輩も少なからずいるハズだ。もし必修科目でなかったとしても受講者は仰山いたのはカンタンに想像できる。ま、オレは御免だが。できることなら全て午後のカリキュラムで固めたかった。

「……ぁー」

欠伸を噛み殺しつつ視線をミス八雲から隣に移す。マジメな女子大生が熱心にノートを取っていた。無意識のうちにその横顔を眺める。目鼻立ちが整っているおかげで横からでも美人ってか。しかしまぁ勉強熱心なこって。

「余所見してないでちゃんと聞きなさい」

華扇がこちらを見ずに前方を向いたまま小声で叱ってきた。さすがにこれだけ凝視してたら気付くに決まっている。

「ねみぃんだよ……あとでそれコピーさしてくれや」

「ダメです。自分の手で書き写さないと身に付きません。そうやって楽ばかりして後で痛い目をみるわよ」

「そう言うなって。ハーゲンダッツ奢ってやるから」

「……私のことを食べ物で釣られるチョロい女だと思ってませんか？」

「んなこたぁねーよ」

ちょっぴり不機嫌そうな声色で華扇が唇を尖らせる。さすが女の勘。

そう言うわりに高級アイスの名前を出した瞬間、思わず反応したみてぇだけど。当然見逃さない。ならばもう一押し。

「じゃあアレだ。今度の土曜とか映画でも観に行くか。チケット代はオレが持つ。それならどーだ？」
「えっ……ふ、二人っきりで……？」
「そらそうだろ。他のヤツの分まで奢る気はねぇよ。観るやつもお前に好きにしてイイ」
「……そ、そういうことなら？　まぁ、見せてあげないこともないです、けど？」
交渉成立。
前髪を指先でくるくると弄りながら華扇が控えめに頷いた。気になる映画があると零してたのを覚えているオレに抜かりなし。タイトルは確か、東方……扇なんとか。
ミス八雲にバレないように、テキストでスマホを隠しつつ近場の映画館を検索する。すると、華扇も肩を寄せてオレの手元の画面を覗き込んできた。いやお前は授業聞けよ。あと近ぇよ。
上映時間のリストを上からスクロールしていく。オレとしてはラスト上映がオススメなのだが……
「私は最初のが良いです。午前九時に駅前で待ち合わせするのはどうでしょう？」
「やっぱりそうくるわな。レイトショーの方が安いだろ」
「そこは大丈夫です。割引券を持ってますから、わざわざ最後まで待たなくても同じ値段で観れますよ。あ、でもノートのコピーが欲しいならハーゲンダッツも買ってくださいね。綿間部が言ったのですから」
「っかー、足元見やがってチクショウ」
「余計な出費が辛いならキチンと講義を受ければ良いだけでしょうに。まったく、何のためにここにいるんですか」
「それはそれってぇやつだ。お前の字が綺麗で見やすいんだよ」
「はえっ!?　そ、それは……ありがとうございます」
華扇が薄っすらと頬を赤らめてモジモジと照れている。ちょっと字を褒めただけで大袈裟なやっちゃな。
チャイムが鳴った。教壇のミス八雲が資料を片付け始める。

「それでは今日はここまでにします。そこの二人は次までに惚気話を用意しておきなさいな。講義中にイチャつくのは感心しませんわよ」
この距離でオレたちのヒソヒソ声が聞こえてたんかよ。それもう地獄耳ってぇレベルじゃねーぞ。怖ッ
チラリと横目で見やれば、華扇が顔を赤らめて口をパクパクさせていた。ドンマイと言わざるを得ない。

昼過ぎ。
講義も終わり、オレと華扇は再び別館に赴いた。ランチタイムのピークを過ぎてある程度空いている。なお、カフェテリアなどと洒落た言い回しをしているが実質はただの学食でしかない。
今月は中華フェアを催している。入り口にも期間限定キャンペーンのポスターが貼ってある。来月はフレンチではないかと専らの噂だ。
「またそれですか。栄養が足りてないのではありませんか？」
「しゃーねぇだろ。コスパからいってコレがイイんだよ」
華扇がオレの皿を一瞥してこれ見よがしに溜息を漏らす。カレー大盛り二九〇円。
オレがぞんざいな反論で迎え撃つと、華扇がむっと眉をひそめながらトレーを置いた。回鍋肉定食。さらにシュウマイを単品で追加。そのうえでハーゲンダッツを要求してくるのだからもはや何も言うまい。
強いて言えば華扇は中華が似合うイメージがあるってぇコトか。
いただきます、と両手を合わせてそれぞれ箸とスプーンを握る。
「このあとアルバイトですか？」
「いや、今日は何もねぇな。講義もなけりゃサークルもない」
「サークル活動もなにも、入学してからずっと無所属じゃない」
「うるへー。そらお前もだろうが」
ぶっきらぼうに言い返してカレーを掻っ込む。
ちなみにオレのバイトとは派遣登録タイプの便利屋。シフト制とも異なり、店に依頼があったときに電話がかかってくる。都合がつけ

ばそのまま現場に直行するシステムだ。
　小休止に水を飲んでいると華扇が「それなら」とこっちを見つめてきた。
「街に出掛けませんか？　あの子たちが元気か気になりますし」
「あー……いつものところか。いいぜ」
「決まりですね。それはそうと、やっぱりカレーだけというのは良くないと思います」
「まだその話すんのかよ……」
「当然です」
　マジメな茨木サンはどうにもカレー単品というのが看過できないようだ。言うほど不摂生でもねぇだろ。具無しカレーだけどよ。値段的にもそんなもんであろう。
　いつだったか、オレが栄養ブロックとゼリー飲料のスタイリッシュな現代メシで済ませてんのを見られたときは、それはもう口うるさく説教されたものだ。懐かしい。って、今も変わんねぇわな。
「旨い安い早いボリュームもあるっつー人気メニューだろ。どっちみち今から追加で何か注文すんのもメンドクセー」
「仕方ありませんね。でしたら私のを少し分けてあげます」
　そう言うと女はシュウマイを一つ箸で摘まんで、笑顔を綻ばせてオレの口元に寄せた。
「はい、あーん」
「待て待て」
「何か？　もしかしてもう満腹で食べられないのですか？」
「そうじゃねーよ……！」
　当の本人はまるで分かってないような無邪気な顔で小首を傾げていやがる。いくら何でも無防備過ぎんだろ。というか場所を考えろよ。大学のカフェテリアやぞここ。
「ほら、あーん」
「だーもう！　そういうとこやぞお前」
　半ばヤケになって一口でシュウマイにかぶりつく。噛むほどに溢れ出る肉汁を味わいつつ、ひたすら仏頂面で咀嚼する。こーゆーのは

意識した方が負けだ。
　黙って口を動かすオレをなぜか彼女は楽しそうに眺めていた。まさかコレで貸しイチとか言わねぇよな。ハーゲンダッツ追加とか止めろよ。
「やっほ、今日もお熱いわねお二人さん」
「私たちも同席していいかしら？」
　どこからともなく黒髪ショートと金髪ロングの女子大生がトレーを持って話しかけてきた。生姜焼き定食ときつねうどん。オレも人のことは言えんがこっちも中華フェアを清々しくスルーしていやがる。今のところ律儀に応えてるやつ華扇だけじゃねーか。
　見知った相手でもあり、華扇が快く迎え入れた。
「はい、どうぞ」
「いやー、悪いわね」
「お邪魔します」
　宇佐見蓮子、それとマエリベリー・ハーン。
　秘封？楽部なる非公認サークルを立ち上げた二人組。大学内では、ある意味じゃ有名人とも言えなくもない。ちょっとした武勇伝すらある。
　自分らが新入生という立場だったのもお構いなし。入学して早々にサークル勧誘のビラをキャンパス内でバラまいていたのは逸話じゃなく実話だ。ま、バラまいていたのは宇佐見だけでマエリベリーは困り気味だったけど。
　当初は見目麗しい女子大生コンビにホイホイ釣られた連中もいた模様。
　ところが、「世界の裏側を暴く」などと掲げた怪しすぎる活動内容によって、入部希望者が一人残らず辞退したってぇオチだ。哀れ。
　さもありなん。美人とオカルトのセットとか、どう考えても怪しい詐欺だわな。
　ちなみに秘封？楽部とのファーストコンタクトは、華扇が律儀にビラを受け取って話に耳を傾けたのが発端であった。
「ねー二人とも。今夜ヒマ？　サークル入らない？」

「夜は空いているが秘封?楽部には入らねーぞ」
「ぶー」
何かとつけてオレたちを勧誘してくる宇佐見の勧誘トークを、毎度の如くバッサリ切り捨てる。テンプレ化し過ぎてもはや一種の挨拶となっていた。
華扇ぐらいなら入ってやりそうなものだが、オレが断るとコイツも申し訳なさそうに首を横に振る。「綿間部が入らないなら……」となぜかオレのせいにされる。何でや。
秘封?楽部のメンバーではないオレたちなのだが、そのわりに頻繁に手伝ったり巻き込まれたりしている。この間は心霊スポットに拉致されたが、恐怖のあまり記憶がない。気が付けば頬に平手打ちの痕と、赤面して大きく息を乱した華扇がいた。ワケがわからない。
ぶー垂れる宇佐見の対面で、マエリベリーがお上品にうどんを啜る。サンドイッチとかが似合いそうだが何気に庶民派メニューがお好きらしい。
「そうそう。さっき蓮子と今夜飲みに行こうって話してたんだけど、よかったら一緒にどうかしら?」
「ほう、悪くねーな。だったら現地集合でもイイか? このあと予定があんだよ」
「ええ、構わないわよ。私たちもまだ今日の講義が残っているし。じゃあ店と時間が決まったらＬＩＮＥ送るわね」
「おぉ」
華扇に確認を取るのを端折ったが問題ねぇだろ。酒とメシでこの女が行かないなんざまずない。実際、隣を見やれば楽しみだと言わんばかりにニコニコしていやがった。予想通り。
「しっかしクロってば頑固よね。黒髪と金髪のピチピチギャルな現役女子大生が二人もついてくるのに。いい加減覚悟決めて入部しちゃいなさいよ」
「その下心で仮入部したヤツらが数日足らずで全員逃げたんだろーが」
「そーだけどー」

生姜焼きに七味唐辛子を振りかけていた宇佐見が未練がましそうにぼやいた。というか今時ピチピチギャルとか死語じゃねぇのか。久々に聞いたぞオイ。

辛さマシマシになった豚肉を口に入れて「からーい」とか抜かしている黒髪の女子に、金髪と桃色の女子たちも苦笑いを浮かべる。

コップの水を一気に飲み干して、宇佐見が深々と溜息を吐き出す。

「茨木さんみたいな綺麗な人といつも一緒にいるくせに、ちっとも浮ついた話も聞かないし。もしかしてホモかも？って思った時期もあったわ」

「遠い目で空恐ろしいこと言うなや」

さらりと衝撃の自白をかます黒髪ショートの女子大生に戦慄する。何と恐ろしいことを考えるんだ、この女は。こっちのが不思議発見である。主にアタマの中が。

しかしながら、これだけでは終わらせないのが宇佐見蓮子その人。続け様にとんでもないことを抜かしやがった。

「まぁ、それはないってわかったけどね。この間、深夜のコンビニでクロがエッチな雑誌を立ち読みしてるの見ちゃったもん」

「へー……そうなんですか？」

「仕方ないわ。彼だって男性だもの」

華扇が棒読みで疑問形の声を出す。平淡過ぎて地平線の彼方まで見えそうなトーンであった。赤みがかった瞳が仄暗くなっていることに嫌な予感しかしない。

さり気なくマエリベリーがフォローしてくれたが、顔では愛想笑いを浮かべていながら明らかに引いていやがった。中途半端な気遣いは逆にダメージを負わせると知ってほしい。

「綿間部？」

「い、いや違うだろ。どーせ宇佐見が誰かと見間違えたんじゃねーの……？」

「えー？　嘘言いなさいよ。アレ絶対にクロだったわよ」

「ハッ……んなワケねぇだろ」

おのれ、宇佐見のやつ。余計なこと言いやがってからに。だが、今

ならまだアイツの見間違いで押し通せる。証拠など何一つないのだから。大体、暇だったから何となく手に取っただけでオレは悪くねぇ。

そう勝利を確信したのだが、現実は非常であった。

「このむっつりスケベ、コスプレものが好きなんでしょー」

「後ろから覗き込んでんじゃねーよッ！　……あ」

「へー……そうなんですか、へー……」

その日、ノートのコピーは貰えなかった。

後編につづく

番外特別回　「もしも茨木華扇とキャンパスライフを過ごしたら　後編」

秘封？楽部は午後イチの講義が入ってるというので、連中とはカフェテリアで一旦別れた。逆に午後が丸ごとフリーなオレと華扇は時間を持て余してしまう。

どうせ大学に残ったところでやることもなし。ならばさっさと街に繰り出した方が好都合であろう。食器トレーを返却口に戻し「ボチボチ出るか」とぼやく。

「待ってください。その前に掲示板を確認しておきましょう」

「あー？　別に大した情報もねーだろ」

「そう言って講義室の場所も知らなかったのは一体何処の誰でしたっけ？」

「ぐぅ……しゃーねぇなぁ」

耳が痛い指摘に思わずしかめっ面でそっぽを向く。そんな態度すらも見透かしたように桃色の女はフッと鼻で笑った。それオレのマネのつもりか。似てねぇ。

一足先に歩き始めた華扇がこちらを振り返る。見返り美人、そんな単語がチラリと脳裏をよぎった。フッ、我ながら何考えてんだか。

「綿間部？　行きますよ」

「わぁーってるよ」

どのみち先を急ぐ必要もなし。寄り道の一つや二つあったぐらいが丁度イイかもしれない。

キャンパスの正門から入って右側に掲示板が数メートルにわたって並ぶ。

春先になればこの場所に受験番号がびっしりと張り出される。それもまた季節の始まりを告げる風物詩でもあった。

とはいえ何の変哲もない今の時期はただのお知らせコーナーに過ぎず。所狭しと大小様々な紙切れが張り付けられたボードに、時折学生たちが足を止める。

しっかりチェックするのは華扇に任せて、そこまで注意深くもなくテキトーに流し読みする。

本日休講のお知らせ。レポート未提出の学生番号と氏名の晒し上げ。イベント開催の告知もあれば、サークルメンバー募集のチラシもある。さすがに秘封？楽部のビラは残ってなかった。そらそうか。

ふいに、背後から肩を軽くポンと叩かれる。

「将也君見っけ♪」

茶目っ気ある大人びた女の声。

その声音には聞き覚えがあった。つーか、わざわざオレを下の名前で呼ぶ人物なんぞ一人しか心当たりがねぇワケで。

赤髪をセミロングに伸ばした女が立っていた。襟どころか肩回りまで肌を露出させたデザインの黒Tシャツは大学内でも人目を引く。「Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌ」のプリント文字からも独特のセンスが伺えた。仕上げに丈の短さがかなり際どいレインボーカラーのミニスカをあわせたコーディネート。何気に目立つカジュアルなファッションも悠々と着こなしてみせる。

ライブハウスやブティックが似合いそうな、これぞ陽キャと言わんばかりの年上の女。予想通りの相手に驚くこともなかった。

「センパイじゃねーの」

「そ、ヘカーティア先輩でした」

雑誌のモデルさながらにパチッとウインクが飛んでくる。この手の所作がイチイチ様になってんのは素直にスゲーと思う。近くにカメラマンが隠れてるとかねぇよな。

ヘカーティア・ラピスラズリ。

一コ上の先輩で、いつもニコニコと笑顔を絶やさない気さくで明るいおねーさんキャラ。後輩の口が悪いのも何のその。大人の余裕で受け流してくれる。

強いて言えばオレみてぇな男にも軽々しくボディタッチしてくるのが玉に瑕か。華扇に負けず劣らず異性との距離が近い。どうなってんだ。

「今日も黒いわね。さすが黒岩、なんてね」

「そー言うあんただって似たようなモンだろうが。プリント文字が違うぐらいで」
「あら。それならいっそのことペアルックにでもしちゃう？　私と、将也君で」
「勘弁してくれ」
　ちょっぴり前かがみになって、オレのシャツからズボンからついでに靴に至るまでチェックするオシャレなセンパイ。どうでもいいけど、襟のガードが緩い服装でその体勢は目のやり場に困る。
　やさぐれた態度でペアルックをお断りするとヘカーティアはクスクスと色っぽく笑った。一コしか違わないハズなのにこうも垢抜けているとは。
　ほどなくして、全ての掲示物を確認し終えた華扇が戻ってきた。まるで気付いていなかったらしく、赤髪セミロングの女を見て何度か瞬きする。
「あ、ヘカーティアさん。こんにちは」
「はぁい。華扇さんも一緒だったのね。あっ、そうだ。今度うちの店に新作入ったんだけど二人とも興味ない？」
「うちの店って……あんたアルバイトでしょうが」
「他にほとんどスタッフいないし、実質私が取り仕切っているようなものよ」
　あっけらかんと大それたことを言ってのける。が、そいつもほぼ事実なのだから侮れない。
　ファッション好きなことや持ち前の性格を活かして、センパイは小洒落たブティックでバイトしている。そのため黒系の新作ファッションが入るとオレに宣伝してくる。優秀なスタッフなこって。
　その後もファッショントークが続いたが、突然にヘカーティアが「いっけない」と口元に手を当てた。
「もうすぐ講義が始まっちゃう。それじゃあね二人とも」
「ったく、せわしねぇなオイ」
「綿間部ッ！」
　目上の人に対する口の利き方がなってないとマジメな女が目尻を

吊り上げる。細かいやっちゃな。本人もイイ言っとるやんけ。
説教かます華扇とげんなり顔のオレを交互に見て、ヘカーティアがくすりと微笑む。それからレインボー色のミニスカートを翻して軽やかな足取りで立ち去った。
その途中、ふと立ち止まるとこちらを振り返って、
「……ちゅっ♪」
ハートマークの籠ってそうな魅惑の投げキスを放ってきた。してやったりと小悪魔チックな微笑を浮かべると、センパイは何事もなかったかのように本館に歩いていく。
なしてあーいうのが似合っちまうんだか。ウインクとか投げキスとか。やっぱりモデルでもしてんじゃなかろうか。
ヘカーティアの後ろ姿を見届けながら、やれやれと頭を振る。
「デレデレしないでください。みっともない」
「してねぇって……」
なんか知らんが華扇が刺々しい口調で言いがかりをつけてきた。あと肘でも突いてきやがった。地味にイテェわ。

バイク置き場に着く。
今朝と変わらぬ状態で我が相棒がお待ちしていた。リアボックスを開けて予備のヘルメットを取り出し、華扇に放り投げる。予備どころかほぼコイツ専用みてぇなモンだ。
すっかり手慣れた所作で華扇がヘルメットを被る。柔らかな桃色の髪が隠れてしまうのが些か勿体ない気もした。
「安全運転でお願いしますね」
「言われんでも」
原付の一人用シートに二人乗り。
意外なことに、マジメなこの女なら嫌がりそうなものだと思いきや、むしろ気に入っている節さえある。自分から乗せてほしいと言ってくることはないが、オレが乗れっつーと途端に機嫌が良くなる。
しかし当然ながら間を詰めなければ二人も乗れない。必然的に体を密着させる形になる。オレの真後ろに華扇が跨り、両腕を腹に回し

てぎゅっと抱き着く。
「しっかり捕まってろよ」
「はい。んっ♪」
甘い声と一緒になって背中に柔らかいナニカが押し当てられる。つくづくデカい。いや、コレ狙ってたワケじゃねぇけど。誤解しないでほしい。
差し込んだキーを回す。定員オーバー気味の車体が小刻みに振動する。やっぱり重たかったか。スマンがちぃっとばかり耐えてくれや、相棒。
いざ、繁華街へ。排ガスを吹かしながらトロトロと走る。道すがら、景色がゆっくりと流れていく。のどかな時間。
赤信号で足止めされる。耳元から微かに華扇の鼻歌が聞こえてきた。
「……フッ」
夜じゃねぇけど、偶にはこんな日があっても悪くない。

繁華街に立ち並ぶ雑居ビルの一つにその店はひっそりと在る。
猫喫茶「マヨヒガ」
ファンシーなプレートが吊るされた扉がその店の目印だ。
ドアノブを捻れば、女子ウケしそうな可愛らしい内装のワンルームが広がる。来客を告げるベルが音色を奏で、甘いお菓子のような香りに鼻腔をくすぐられる。
「いらっしゃいませです」
短い茶髪の幼げな娘っ子がオレたちを出迎える。コイツの名前は橙。
念のために言っておくが、小学生を働かせるブラックなお店ではない。このガキんちょはオーナーの身内でもあり、ちょっとしたお手伝い係みてぇなモンだ。
「こんにちは。橙さん」
「よう、来たぞ」
オレたち——というか華扇が店に入ると、棚の上やらテーブルの下

やらに居た猫どもがピクリと耳を動かして顔を上げる。そうなったらあとはもうねこまっしぐら。ヤツらは我先にと彼女の元へスッ飛んできた。

あまりに見事な慕われっぷり。なお、オレのことはガン無視である。

「ふふふ、みんな元気そうですね」

「はいです」

桃色ミディアムヘアの女はその場に屈んで、集まってきた連中を一匹ずつ丁寧に撫でていく。愛撫で骨抜きにされたキャットどもはゴロゴロと喉を鳴らして寝転がるのみ。

この女、無類の動物好きなうえに動物を手懐けるのも上手い。野良猫だろうが野鳥だろうがお構いなしに難なく打ち解けちまう。いっそ仙人サマとでも呼んでやろうか。

「おや、お前たちだったか」

賑わってんのが聞こえたのか、スタッフルームの暖簾を潜って長身の女性が顔を覗かせた。短く切り揃えられた金髪とクールな佇まいのイケメン女子。インテリな風貌はデキる秘書みてぇだが、その素性は「マヨヒガ」のオーナー。名を八雲藍。

何を隠そう、ミス八雲の血縁者にあたる。ただし、同じ苗字なクセに姉妹ではなく従妹だと。紛らわしいなオイ。

「いらっしゃい。よく来てくれた」

「フッ、邪魔してんぜ」

「お邪魔してます」

「ああ、ゆっくりしていくといい」

これまた別の意味で女子ウケしそうな貴公子染みた微笑も相変わらず。オレがハードボイルド路線でなかったらキャラ被りが危ぶまれていたところだった。

今朝も飲んだばかりだがブラックコーヒーを注文する。華扇はミルクティーを選んだ。一応カフェの類に入るためドリンクとスイーツは揃っている。値段も良心的。

特にここのコーヒー豆は選りすぐりが使われているのがイイ。

あのミス八雲のお墨付き。それどころか当の本人が直々に海外から仕入れたという特級品ばかり。毎度ながらミステリアスで底の見えない才女だわな。

猫どもと戯れる女子大生と小学生を肴にコーヒーブレイクを嗜む。煎った豆が醸し出す苦み、その奥に眠っていた深みのある風味が香る。やはりコーヒーはブラックに限る。

天井にはシーリングファンが回り、店内のＢＧＭは耳に優しいオルゴールアレンジの旋律が流れる。居心地の良さは猫どもの寛ぎっぷりからも一目瞭然。

「ところで黒岩、近々、店の模様替えをするつもりなんだが少し時間を貰えないか？」

おもむろに藍オーナーからのご指名が入った。

この店のスタッフは女一人とガキんちょ一匹と猫が大勢。家具を動かす力仕事をやるには明らかに男手が足りていない。

「了解。都合つけとく」

「助かる。それと試作品があるんだ。よかったら味見してみてくれ」

オレが即決すると藍オーナーは安心したように相好を崩した。

前払いサービスなのかクッキーの小皿を置いていく。猫を見ながら猫型のクッキーってぇのもどうなんだ。

さらに藍オーナーは華扇にも声をかけた。

「茨木殿もどうかな。猫たちの相手をしてくれると作業が捗って助かるのだけど」

「そういうことでしたら喜んでお手伝いさせていただきます」

「わぁ、お姉さんが一緒なんですね。心強いです」

「ふふふ、任せてください」

品行方正なコイツが人助けを拒むハズもなし。案の定、淑女の笑みで快諾する。

華扇の手にかかれば、ここのキャッツなんざサーカスばりに統率が取れるであろう。確かに荷運び中に足元をウロチョロされては敵わない。

膝の上に猫を乗せて猫じゃらしを振っている動物好きな女を横目

に、猫型クッキーを一枚口の中に放り込む。
味は悪くなかった。
壁掛け時計が鳴った。
昔懐かしい童謡にありがちな振り子を左右に揺らす古時計がボーンボーンと重低音を響かせる。思いのほか長居しちまったらしい。そろそろお暇すべきだろう。
支払いを済ませて出口に向かう。オレたちの背中に猫たちの名残惜しそうな鳴き声が飛んでくる。全て華扇に向けて放たれたものなのは言うまでもない。どんだけ懐かれてんだ。
「またのお越しを」
「ありがとうございますです」
扉を閉める。またしてもベルがチリンと鳴った。

雑居ビルから外に出る。日が落ちて空は暗くなっていた。
街並みを人工の光が眩しく照らす。チカチカと目が眩みそうになるネオンライトの輝きは夜空の星をかき消してしまう。歩道橋の上から道路を見下ろせば、ヘッドライトの白光が縦横無尽に入れ乱れる。
「マエリベリーさんから連絡は？」
「さっき来た」
金髪の女子大生から送られてきたＬＩＮＥメッセージを再び開く。駅前にオープンした全国チェーンの大衆居酒屋。それに「待ってる」のスタンプが続いておった。
ここからなら十五分かそこらってえところか。
目的地に行くと既にマエリベリーが待っていた。
外国人の令嬢っぽい女が格安の飲み屋の前にいるのは、何とも奇妙なギャップが生まれる。とはいえそこは大学生。オシャレなフレンチなんざそうそう行けるもんでもない。
「よう」
「お待たせしました」
「ううん、時間ピッタリよ」

付近を見渡すが、もう一人の姿はなかった。今宵も遅刻魔は順調に連続スコアを更新している模様。もうほったらかしでいいんじゃないかな。

「ったく、いつも通りか」

「ごめんなさい。私たちが誘ったのに……」

「いえいえ、気にしないでください」

「とりあえず先に入ろうぜ。いつまでも店の前を陣取ってんのも邪魔くせぇしよ」

「ええ、そうね」

この場にいないのは宇佐見蓮子ただ一人。しかし心配する輩は誰もいなかった。ある意味コレも信頼の証。そんな信頼があればの話しだが。少なくともマエリベリーは怒っていい。

「さぁて、今回は何分後になるやら」

時計を見ずに現在時刻をドンピシャで言い当てる謎の特技を持っていやがるクセして、とんでもなく時間にルーズな黒髪ショートを思い浮かべる。せっかくの特技がクソの役にも立っとらん件について。

十分後。

「やぁやぁ諸君。やっとるかね？」

メニューを開いたりデンモクを弄ったりして時間を潰すオレたちの前に、意気揚々とヤツはやってきた。どこで影響を受けたのか重役出勤のお偉方を気取って、そのツラには反省の色が一切見られない。

マエリベリーは怒っていい（二回目）

「やってねーよオメーが来るまで注文待ってもらってんだよ」

「綿間部、口が悪いですよ」

「まぁ、蓮子にしては頑張った方じゃない？」

「そーよ。大目に見なさいよ。そんなんじゃ茨木さんに愛想尽かされるわよ」

「そそ、そのようなことは……!?」

「いいから早よ座れや」

思わぬ流れ弾に華扇が焦りを孕んだ様相で口ごもったところを強引に割って入る。

それもそうだと宇佐見はマエリベリーの隣に座り、寸分の迷いもなく呼び出しボタンを押した。ピンポーンと軽い調子の音が店内に響く。

「メニュー見ねぇんかい」

「ふふーん、必要ないわ」

その自信はどこから来るのかご教示願いたいものだ。いや、やっぱいらねぇわ。

軽口のジャブを叩き合っているうちにホールスタッフがやってきた。和風の制服からどことなく若女将を想像させる可愛らしい女子だった。華扇と似たピンク色のショートヘアが頭巾から覗ける。

「ご注文はお決まりでしょうか?」

「はいはーい。９０分飲み放題で、私カシオレね。皆は決まった?」

「私はファジーネーブルにしようかしら」

「えっと……それじゃあカンパリソーダで。綿間部、最初はビールでしたよね」

「ん」

おしぼりで手を拭きながら答える。毎度の如くお見通しらしい。

最初のオーダーだけあってドリンクもすぐに用意された。お通しは酢の物か。

キンキンに冷えたジョッキの取っ手に触れるとマイナス温度が伝わってくる。この瞬間、居酒屋にいるのだと再認識させられる。つい口の端が緩んだ。

各々がグラスを持ったところで、やはりというか宇佐見が音頭を取った。

「今日もお疲れ!　カンパーイ!」

「はいはい、カンパイ」

「乾杯」

「おー」

カチンとグラスを四方からぶつけ合わせ、女子大生ズの笑顔が咲く。ここにいる三人とも顔がイイし、他の野郎連中からすれば羨ましかったりすんのかもしれない。

白く泡立つ小麦色に口元を吸い寄せられて一気に煽る。凝縮された旨味が喉越しに雪崩れ込む。清涼感。嗚呼、至福。

しかし一方で、宇佐見がテーブルにグラスの底をダン！と力強く叩きつけた。あ、コレ面倒くせぇパターンだわ。

「もー飲まなきゃやってらんないわよ。ここんところ全っ然目ぼしいネタがないんだから」

「そらカンタンに見つかったら世の中トンデモねぇわな」

「そうなんだけどー。あ、すいませーん！」

開始五分足らずで呼び鈴を押すのも億劫になったのか、偶然近くにいた店員を直接呼びつける宇佐見蓮子。ついさっきまで手元にあったカシオレはとっくに彼女の胃の中、もはや氷しか残っていないグラスが一人寂しく取り残されている。

「初っ端から飛ばし過ぎじゃねーかオイ」

「今夜は飲みたい気分なのでしょう。ここは彼女の好きにさせてあげませんか」

そう言いつつオレと華扇のグラスも空であった。マエリベリーのファジーネーブルも半分以上なくなっている。これぞ大学生の本懐。

二日酔いを恐れぬ大学生たちはハイペースで呑み続ける。ま、飲み放題だし無礼講ってか。

「ジントニック一つ。他に注文する人―」

「それでは日本酒を一合でお願いします」

「おっ、さすが酒豪。顔は綺麗なうえにお酒も強いなんて憎いわねぇ」

「そ、そんな綺麗だなんて……宇佐見さんこそ美人ではありませんか」

「やだもー！」

「何だコレ」

早くも酔っ払いムーブかましてるヤツがいんぞ。

はしゃぐ相方をマエリベリーは聖母のような眼差しで温かく見守っておった。さり気なくオレと視線が交錯し、くすりと静かに笑みを零す。しなやかな指先でメニューのページを開いた。

「食べ物も入れておかないと悪酔いするわよ。えーと、シーザーサラダと鳥軟骨のから揚げ。あとは……黒岩君がいるならフライドポテ

トもかしら?」
「フッ、よくわかってんじゃねーか」
「さすがに一年も関係が続けば好みと傾向ぐらいは把握できるわ」
ついでにカルーアミルクを注文する金髪の女子大生に便乗してハイボールを追加する。
小さくも騒がしい宴会は続く。メンバーの半分が不思議発見サークルとなれば自然とその手の話題になる。真っ先に宇佐見が愚痴ってたのもあるけど。
「それで最近は変わったことはないのですか?」
「うーん……ちょっとした噂ならあるんだけどね。何だったっけ?深夜の公園のベンチに黒いツナギを着たイイ男が据わってるとか」
「それは不思議ではなく不審者ではありませんか……?」
酔いで頬を色っぽく赤らめた黒髪ショートの言葉に、華扇が曖昧な苦笑い混じりに頬を引きつらせる。そら明らかにオカルト要素皆無だわな。不審者呼ばわりも大概だけどよ。
桃色ミディアムヘアの女がもう一人の秘封?楽部にも尋ねる。
「マエリベリーさんもご存じなのですか?」
「いいえ、私も詳しくは知らないの」
女子大生トリオが話し合っているがオレはノーコメントを貫く。雉も鳴かずば撃たれまい。言わぬが花。できればさっさと別の話題に移ってほしい。
ところが、押し黙るオレのステルスも虚しく、無情にも乙女たちは真実に辿り着いてしまう。
「蓮子、他に情報は手に入ったの?」
「見た目なら聞いたわよ。ツナギを着ているから上下ともに真っ黒で、髪型も黒のオールバックにしているらしいってこと。それから、ちょっと人相が悪くて大学生くらいの若い男性……で……」
「え……」
「それって……」
最後あたりで宇佐見の声が尻すぼみになっていく。それと同時に、女三人揃えば姦しい視線がオレに集中した。特に宇佐見の目がアカ

ン。「嘘だと言って」という切実な思いが込められておる。
だが無意味だ。
そもそも隠す必要もあるまい。溜息を零しつつハイボールを一旦テーブルに置き、ぶっきらぼうに残酷な真実を告げてやった。
「ちょうど遊具のペンキ塗りの仕事があったんだよ。よかったな謎が解けて」
「いやぁーッ！　また一つのネタが消えたぁああ！　もういやぁあああ!!」
「おっ落ち着いてください宇佐見さん！　気を確かに！」
頭を抱えてキャラ崩壊を起こしかける秘封?楽部の片割れを華扇が一生懸命に宥める。動物ならいとも容易く手懐けるこの女も、ヒステリー気味な酔っ払い相手ではそうもいかんらしい。
そしてマエリベリー・ハーンは全くもって動じていなかった。
「黒岩君、サラダ食べる?」
「お前は落ち着き過ぎだろ」
「もう慣れたわ」
だとしてもこのタイミングでサラダ取り分けんでもエエやんけ。令嬢っぽいと思いきや、なかなかどうして神経が図太かった。やっぱり秘封?楽部の一員なのだと思い知る。
これだけ喚き散らしても摘まみ出されないあたり大衆居酒屋は偉大であった。今後とも経営を頑張ってほしい。
「次ッ！　カラオケ行くわよ！　こうなりゃとことんストレス発散してやるんだからーッ!!」
ジントニックを片手に宇佐見が叫ぶ。わかったから座れ。可愛い系ホールスタッフが笑ってんぞ。
兎にも角にも、夜は始まったばかりだ。

「じゃあねー！　クロ、あんた茨木さんのことちゃんと最後まで責任取りなさいよぉ?」
「はぃいいッ!?」
「帰り道も送り届けろってぇことだろうが。変なところで端折んじゃ

ねーよオイ」
「明らかに誤解を招く言い方になってるものね」
二度も延長したせいで終電時刻が差し迫っていた。
カラオケボックスを出る頃にはカンペキにへべれけでハイテンションな宇佐見が楽しそうで何より。酔っ払い女子大生を肩で支えながら、マエリベリーが呆れた様相で嘆息する。
ひとまず駅まで非公認サークルコンビと同行する。オレと華扇は電車通学ではないので改札口でお別れだ。スクーターは一晩放置するしかない。飲酒運転で捕まるのはシャレにならん。
「じゃあね二人とも。おやすみなさい」
「はい。お気をつけて」
「ヤバかったらすぐに電話しろ」
「だぁーいじょうぶだって！　クロは茨木さんのことだけ見てればいいの！　他の女の子に目移りしたらダ　メ　よ？」
「あんたァだぁーっとれい」
相方と肩を組んで戯言を抜かすオッサンみてぇな現役女子大生にこっちの頭が痛くなる、ぶっちゃけ不安しかねぇが、マエリベリーはしっかりしてるし恐らく大丈夫であろう。
駅のホームへと消えていく仲良しな後ろ姿を見送る。ありゃ二日酔いは避けられまい。せめて帰る道中でリバースして乙女のプライドが散らないことを祈っておこう。ま、ガンバレ。
やがて黒髪と金髪の女子大生コンビが見えなくなったところでコキリと首を鳴らす。華扇も安堵の吐息を漏らしていた。何はともあれ終電を逃す事態は避けられたワケだしな。
二人並んで駅を後にして、再び夜の繁華街へと繰り出す。
「ラーメンでも食っていくか。まだ入んだろ？」
「いいですね。あの二人には申し訳ないですけど」
締めの一品に誘うと華扇は声を弾ませてオレを見上げた。あれだけ呑んだというのに酔った素振りすらない。どうなってんだコイツ。
さぁ、ここから先はオレと華扇、二人だけの時間。まだまだ夜は終わらない。

ネオンライトが煌めく夜景の中を男女が連れ添って歩いていく。
「ねぇ、綿間部。昼間に言っていたこと覚えてますか？」
「映画だろ。忘れとらんわ」
「映画を観終わったらヘカーティアさんのブティックに行きましょう。それからマヨヒガにも」
「っかー、今日行ったばっかだろうが。どんだけ好きなんだよ」
「……はい、好きですよ？」
彼女が零した甘く蕩ける声音は、静かに夜の街に溶けていった。

「ってぇ感じの夢をみたんだけどよ」
幻想郷の数少ない屋台の一つ。あざとい夜雀が女将を務める店で名物ヤツメウナギの蒲焼を食いながら、何となく昨夜見た夢について語った。
それにしても謎にリアルな夢だった。しかもオレが大学生とか、さらに華扇まで女子大生とか。
我が夢ながらトンデモねぇ設定に失笑しつつ、日本酒を舌の上で転がす。
すると、ずっと隣で聞いていた華扇がモジモジと恥ずかし気に両手を擦り合わせた。密かにオレを覗き見ながら口を開く。赤みがかった瞳はどこか期待を孕んでいるようにも映った。
「あ、あの……それからどうなったのですか？　参考までに、ええ、あくまで参考までに聞きますけど」
「さぁな、そこで目が覚めたから知らん。どーせラーメン食って帰ったんじゃねぇのか？　あの流れだとよ」
「……」
「オ、オイ。どうした」
手の平を返したように仙人サマが押し黙っちまった。さっきまでの切なげな瞳はどこへやら、射止めんばかりの眼力が無言の圧力とともにオレに突き刺さる。いや怖ぇよ。
もはや破裂する寸前まで頬っぺたを不満で膨らませた女は、いつもの言葉を口にするのだった。

「馬鹿者」
「何でや」

「……鈍感」

番外特別回　完

第五十話　「やられたらやり返す」

「十一……で、最近はっ……十二……上手く、いってんのかッ？」
「はいです」
　天井辺りの壁の縁に指を引っ掛け、腕力のみで全身を持ち上げて五秒間キープ、それからゆっくり下ろす。テント内じゃ懸垂はできねぇし有効活用させてもらおう。
　ボロ家屋の和室はあちこちが痛んでいたが、見た目とは裏腹に存外頑丈らしかった。長年雨風に晒されて老朽が目立つものの原型は保たれている。むしろ年季が入っており、ちょっとやそっとで倒壊するほどヤワではない。
　自主トレの片手間に世間話に興じる。話し相手の引っ込み思案な猫娘が壁にへばり付くオレを物珍しそうに見上げた。チビッ子の周りには何匹もの野良猫が群がる。
　日暮れ時。場所はマヨヒガ。
　藍ネーチャンからマジモンの偽電気ブランを貰った時にコイツが会いたがっているとか言われちまった手前、ちょっくらやってきたのだ。我ながら律儀なこって。
　しかしいくらオレが夜に生きる男つっても、生粋の都会人が夜遅くにド田舎異世界の山奥に出向くのはちぃとばかし無理がある。そのため日が沈む前から行動開始するハメになった。
　ま、そこはしゃーねぇ。霧の湖と違ってマヨヒガは山奥の秘密基地。フラリと寄るには真夜中は分が悪い。マエリベリーの一件は例外中の例外だ。
「おにぃさんの服、この前のとは違うですね」
「あぁ。トレーニングウエアっつって運動するとき用のモンだ。似合うか？」
「コクコク」
　言わずもがなコレも黒カラーなのは譲れない。
　トレーニングウエアなんざいつ以来だったか。さすがにいつものスタイリッシュなコーディネートで筋トレはできまい。ちなみにこ

こに来る道中も一っ走りしてきた。傍からはアスリートにでも見えたりして。

ついでに橙にも筋トレに付き合ってもらった。重しがあった方が効果あるだろとコイツを背中に乗せて腕立て１００回。それが終わると懸垂にシフトしたのだが、猫娘に足にしがみついてもらった瞬間、壁の方からミシミシとヤベェ音がしたので降りてもらった。

「八十八、八十九……ぐぉおお……！」

指先どころか腕全体がプルプルと震えてきた。前はもっと回数をこなせていたハズだ。ちょっと間が空いただけでこのザマかよ。

「おにぃさん大丈夫ですか？」

「へっ……こんぐらい余裕だっつの」

ついにはガキんちょにまで心配される。我ながら情けねぇ。こんなんハードボイルド語れんだろうが。ただのモヤシじゃねーか。チクショウめ。

「九十七……九十八……」

この幻想郷において悪徳妖怪の退治は専ら博麗の巫女の仕事。極々偶に些細な揉め事が起こるレベルの人里にいる限り、繁華街と比べて平和ボケしやすい予感はあった。

あの日も、クソデカイ猪を前にしてアホみてぇに突っ立ってることしかできなかった。オレに実力胆力行動力があればもっと上手く立ち回れただろうに。失態。苦い記憶。

ギリィ、と歯ぎしりして悔しさをバネにラストまで一気に駆け上る。

「九十九……百ッ！　オイ、降りるから猫ども退かせろ」

「は、はいっ。ほらみんな、下がって下がって」

たどたどしい内気な命令にニャンコ連中はニャーニャーと鳴き声を上げながら素直に退いた。どうやら本人の言う通り、上手く統制がとれつつある模様。

ただし、足元にいた猫どもが時折飛びついて引っ掻いてきやがったせいでトレーニングウエアに解れができてる。どうすんだコレ。つーかオレは猫じゃらしか。

「よっと」
　畳の上に着地すると若干凹んだ感触がした。危ねぇ、フローリングだったら突き抜けていたかも。気が向いたら補強修理してやってもイイ。ひょっとしたら第二第三のアジトになるかもしれねぇし。
「精が出ますわね」
　橙とは似ても似つかない成熟した女の声。嗚呼、久々にお出ましってか。
「ミス八雲」
「お久しぶりですわ」
　波打つ長い金髪を靡かせて謎めいた美女が妖しく微笑む。
　神出鬼没なヤツばかりの中でもトップレベルに君臨する、底の見えない女。スキマなる亜空間を繋げ、どこからともなく現れる幻想郷の創造主。今も空間の亀裂から上半身だけ出しており、ファンタジーより若干ホラー寄りな演出になっておった。
「紫しゃま」
「橙。上手くやれているようね。さすが私の式の式」
「あー……そういやそーゆー繋がりだったか」
　言っちまえば上司の上司みてぇな存在なんだろうか。ま、猫娘がまだちんまいガキんちょなのもあってさほどスパルタにはなってなさそうだが。いや、山奥で野良猫と共同サバイバル生活させてる時点で結構ハードなのか……？
　八雲一家が定期報告にも似た会話を終えると、八雲紫が再度オレに視線を向ける。
「藍からも聞いているわ。なかなかどうして愉快にやっているそうね。私の見込んだ通りですわ。本当に、面白い」
「フッ、そいつぁどーも。こっちも楽しませてもらってんぜ？」
「そうでしょうね。真夜中に見晴らしのいい道端で茨木華扇に押し倒されて乳繰り合っていたらしいし」
「それは忘れろ……ッ！　つーか事故だし誤解だわ！」
　クールかつニヒルにキメたのが一転、感情表しのツッコミが炸裂した。

藍ネーチャンが報告したんだろうけどよりによってそこかよ。もっと他にも見せ場あんだろうが。マエリベリーの件とかあるやんけ。

ありのままを主に告げた忠義溢れる九尾サマのインテリスマイルを思い浮かべて苦々しいツラになる。そこに妖怪の賢者サマは笑みを崩さず容赦なく追い打ちをかける。

「私としましては二人の仲の進展に興味があるのですけれど」

「ったく、どいつもこいつも下世話な勘繰りしやがって。別に何にもねぇよ。あっちが不法侵入して朝っぱらから叩き起こしてきたり、何か知らんが行く先行く先でバッタリ出くわしたりするぐれぇだわ」

「それはそれは……」

「ホントによぉ、昼夜逆転の逆転が起こりまくって逆に不健康になりそうだぜ」

大変ですわね、薄っぺらい同情の籠った声音で相槌を打たれる。ホントにわかっとんのか、この賢者サマは。こちとらそのうちワンオペで二十四時間営業になりそうなんだが。かえって不規則だよコンチクショウめ。

すると、八雲紫から思いもよらぬ提案があった。初めて出くわしたときのように、どこからともなく取り出した扇子をパッと開き、

「でしたら、今度はそちらから出向いてみてはどうでしょう。聞けば先回りや先手を打たれてばかりのようですし、いつまでもやられっぱなしでは面白くないのではなくて？」

「へぇ……そりゃいいなオイ」

その悪巧みにはさしものオレも嗜虐心をくすぐられた。

小者臭いと蔑むなかれ。夜を生きる男、ハードボイルドな何でも屋として毎度毎度あの女にペースを握られたのでは沽券にかかわる。

最近じゃ人里の主婦層から「若いわねぇ」「青いわねぇ」などと生暖かいコメントすらいただく始末。青くねぇよこちとら黒岩じゃい。黒衣といいつつ青いヤツなんぞ工藤新一だけで十分だろ。

悪人ヅラで笑い合うオレたちを穢れを知らない猫娘が気の毒そうに見ておったが気にしてはならない。大人ってぇのは時として小狡

いモンだと知っとけ。
「善は急げ。早速仕掛けるとしましょうか」
わりと悪戯好きなのか八雲紫がノリノリで新たなスキマを開く。
コレを目の当たりにするのは幻想郷に拉致されたあの日以来だが、つくづく悪趣味なこって。真っ暗な空間に無数の目玉とか。
ま、夢の国ばりにファンシーな光のイルミネーションが煌めくトンネルだったらそれはそれで通り辛いけど。オレのキャラ的にもキツ過ぎる。独り身の野郎が単独でキラキラワンダーランドを体感ってぇのはもはや拷問に近い。
「この先は彼女の屋敷に繋がっていますわ。さ、いってらっしゃいな」
「っかー、仕事が早くて感心だこと」
「お褒めに預かり光栄ですわ」
余裕綽々な八雲紫とキョドる橙に軽く別れを告げてからスキマに身を投じる。
距離感も広さも掴めない亜空間に留まっていた時間は数秒にも満たなかった。身構える暇もなく、一瞬の間に闇が晴れる。
「う……」
短時間で明転と暗転を繰り返したせいで眩暈がしそうになり、思わず顔をしかめた。眼球が明るさに馴染んだところで少しずつ視界を確保する。
木々がさわさわと枝葉を揺らし涼し気な流れを生む。小鳥のさえずりが頭上を通り過ぎていった。穏やかな気候はここを天国と錯覚させる。厳しい暑さとは無縁の快い空気に包まれる。
そしてご立派な屋敷も見間違えるハズもなし。動物たちと暮らすあの女の家であった。
「こっちも久し振りか。ま、オレだけじゃ来れねぇしな」
つい独り言をぼやく。
ちょうど屋敷の裏手からのっそりと姿を見せる大きな体躯があった。黄金色の毛皮を纏った力強い迫力。マトモに暮らしていれば動物園でしかお目にかかれないであろう肉食獣。
「よう、寅さん」

華扇のペットでもある虎がオレを見つけてこっちに来る。
初遭遇時はトンデモねぇのを放し飼いにしてやがると度肝を抜かれたモンだ。あれから……そんなに経ってねぇのが驚きだ。
奴さんもオレをちゃんと覚えていたらしく問答無用で飛びかかってくることもない。マジメな飼い主によってよく手懐けられているうえに、こっちの言葉も通じる。挨拶代わりに低く喉を鳴らして応じてくれた。
「華扇はどこだ?」
雷獣のときといい、オレまで動物に話しかけるのがフツーになってきちまった。
すると虎は無言で踵を返し、今しがた通った道をこれまたのっそりと歩き出した。ついてこい、ってか。
黄金色の猛獣に導かれるまま、屋敷の裏手にまで回る。かくして探し人見つけたり。
大きな木に背中を寄りかからせて根元に座る茨木華扇がいた。膝の上に雷獣を乗せ、撫でていた手がそのまま残されている。天気が良かったから日向ぼっこでもしてたんだろうか。もう夕方だけど。
「すぅ……すぅ……」
女は眠っていた。
口うるさい説教を垂れ流すときとは打って変わって、静かに寝息を立てている。
瞼を閉じて、小さく開いた口から吐息を零す彼女の桃色に色付くミディアムヘアをせせらぎのような優しい風が梳いていく。
「んだよ。寝てんのかい」
木漏れ日が差し込み、きめ細かく色白な肌が照らされる。日焼けしなければイイが、そこまで強い日差しでもないし問題なかろう。
すぐ傍にまで歩み寄ってその場に屈む。不良座り(ウ○コ座りともいう)で目線の高さを合わせれば女の顔がよく見える。ついでに起きる気配もなし。
そらそうか。特殊な術でセキュリティ対策してるうえに警護の虎もいる。油断っつか気が抜けるのも当然といえよう。第一、気が休ま

らないアジトなんぞクソの役にも立たない。
「おーい」
「……」
試しに呼びかけるが反応なし。いや、わざと小声で言ったからなんだが。
目を閉じているおかげでまつ毛の長さが際立っている。そんなところからも女らしさを感じる。毎度ながら美人だと思う。繁華街でもここまで顔立ちの整った女は知らない。
知らず知らずのうちに華扇の寝顔に見入ってしまう。言うほど珍しいものでもねぇだろうに、どうしてか目が離せなかった。
「ったく、いつもは人を叩き起こしやがるクセによぉ」
やれやれと苦笑いで肩をすくめる。口では文句を垂らすが全く悪感情は湧いてこなかった。
何となく手を伸ばし、軽く指先で桃色の前髪を横に掻き分ける。指に沿った髪は滑らかな手触りで、絡まることなくさらりと零れ落ちた。
飼い主の膝の上で寛いでいた電気ネズミがモゾモゾと動いた。つぶらな瞳がオレを見上げ、パチッと控えめな静電気を放つ。こっちが先に起きやがったか。
「悪ぃがポップコーンは持ってきてねーぞ」
オレがそう告げるとヤツは「チッ……しけてんなぁ」と言いたげに華扇の膝から下り、ちょろちょろとどっかへ行ってしまった。オレ＝ポップコーンの図式が疑われた。
「ん……、んん」
「お」
オレが前髪に触ったり雷獣が動いたりしたせいであろう。華扇がおもむろに身じろぎし、瞼が微かに震えた。
仙人サマの瞼がゆっくりと開かれ、宝石めいた赤みがかった瞳が露わになる。まだ微睡みの中にいるようで目の焦点は定まっていなかった。
「……ぁ」

「よぉ、夢は見れたかよ」
「ふふ……」
「あ？　どうし――」
フッとニヒルに気取って茶化すオレに、桃色の仙人サマはふにゃりと緩んだ笑顔を浮かべた。そして何を思ったのか左右の手をこちらへ伸ばす。
不意打ちに意表を突かれている間にも、それぞれの手のひらが両頬を挟み込む。さらに華扇はオレのデコに自分の額を重ねた。女の体温が直に伝わる。
「ちょおまッ、何してんねん!?」
「んぅ♪　んふふ～」
って、コレ完全に寝ぼけてるやつじゃねーか!?
さながら風邪をひいたときみたく、おでことおでこをくっ付けて体温測定ごっこ。やがてそれだけじゃ飽き足らずスリスリと擦り合わせてきやがった。華扇から甘い匂いがますます鮮明になる。
「オイオイオイ……ッ!?」
これまでも手を繋がれたり腕を組んできたりはあった。が、顔が近いことはあっても実際に触れるまでは至らず。こんな猫のマーキングみてぇなマネゴト未だかつてない。それがオレの理性を揺さぶる。
いつもの無防備さとも違う感じの隙だらけな表情が数センチ先にあった。夢心地に蕩けたどこか色っぽい笑みと目と目が合う。不覚にもドキリとしてしまった。落ち着け、オレ。
「わたまべ……」
「お、おぉ」
ようやく華扇の額が離れていったが、両手は相変わらずオレの頬を抑えている。互いの吐息が当たるほどの間近で、眩いガーネットを彷彿させる瞳に映される。
華扇が再び瞼を閉じた。まさか二度寝か？と思ったがそうじゃなかった。
「んー……」
「――ッ!?」

瑞々しい唇をすぼめて華扇がもう一度だけ顔を近づけてくる。
桜色の蕾のようなソレが当たるまであとちょっと。このままでは食われると悟ったオレは、女の唇が届く前に肩を強めに掴んで揺すった。
「だーもう起きろって！　さっきから食い放題の夢でも見とんのかオノレは!?」
「んー……んぅ？　ぁ……ぇ？」
その甲斐もあってお寝ぼけ仙人サマがギリギリのところで動きを止める。虚ろだった瞳に少しずつ光が宿った。
おぼろげな口調で仙人サマがオレの名前を口にする。
「わたまべ……？」
「おう、目ェ覚めたかよ」
「は……え、ぇぇ？」
状況が飲み込めていない様子で疑問符を出しまくっている仙人サマ。が、意識は順調に覚醒しつつあるようであった。そういやさっきもオレの名前を呼んでいたような気もするのだが、聞き間違いか……？
やがて華扇が完全に目が覚めたのを見計らって、溜息がてら真っ先に一言。
「とりあえず手ェ離せ」
「へ？　あ、あっ!?　あぁああ……!?」
今もなおオレの頬っぺたを挟み込んでいやがるおかげで全く動けんワケで。
そこでようやっと自分が何してんのかを理解したらしい。目を見開き声を震わせながら華扇の身体が硬直した。いやだから固まんなよ逆だよさっさとどかんかい。
二人の鼻先がぶつかりそうなところまで差し迫ったまま見つめ合いが続く。その直後、桃色な乙女のお顔がボッと火山の如く一瞬にして燃え上がった。
「はわぁあああああああああッ!?」
とても寝起きとは思えぬけたたましい悲鳴が敷地内に響き渡った。

あとはもううるせぇの何の。
湯気を沸騰させた顔色でオレをドつき飛ばした女仙人は、いかにも生娘っぽく身を掻き抱いて喚き始めた。オレが地面を転がっていることに思うところはない模様。
「な、な、な、なんでここにいるんですか!?」
「いたら悪ぃかよ。お前だってオレのアジトに勝手に上がり込んでるじゃねーか。お相子だ、お相子」
「それとこれとは話が別ですッ！　それに屋敷には決まった道を通らなければ辿り着けないのに、一体どうやって……」
「フッ、ミス八雲の助力のおかげだ。偶にはこっちから仕掛けてやれってな。どんなモンよ」
「んなぁ!?　あんのスキマ妖怪ぃぃぃ！」
白いシニョンで括られた頭を抱えて仙人サマが呻きつつ蹲る。ミニスカで膝立てんなよ。下着見えたらどうすんだ。
しかしまぁ、これはもうドッキリ大成功と言わざるを得ない。ナイスなリアクションにニマニマとあくどい笑みが迸る。
そう勝ち誇っていると、ウンウン唸っていた華扇が恨みがましい目つきになってジロリと睨んできた。
「……見ましたよね？」
「あ？　何を」
「で、ですから……私の、その……ね、寝顔、とか」
「んだよ、別に心配すんなっつの。涎も垂らしてなかったしアホ面でもなかったし、綺麗なモンだったぜ？　ま、寝ぼけてうっかり食われそうになったのはヤバかったがな」
「な――!?」
人を肉まんか何かと見間違えたか知らんが、危うくパックリいかれるところであった。これで顔面に歯型でも付けられようものならギャグにしかならんわな。禁書目録かよってぇハナシだ。
ふと華扇を見やれば、先ほどよりも顔を真っ赤にして再び硬直しておった。パクパクと口を開閉して面白いことになっていやがる。つ

いでだし写メっておこうか。
しかし結論から言えば、この間にでもさっさと逃げるべきだったのだ。
いつしか華扇の身の回りに修羅の如き怒気が滲み始めた。それはあたかも空に暗雲が立ち込めるかの如く。不穏な予兆が空気を乱す。
そして、アレが始まる。
「こっ、こんの……馬鹿者ォオオオオオ!!」
さっきまで寝ぼけていたとは到底信じられない叫び声。突然の大音声に気圧され仰け反った。さらに続く矢継ぎ早な怒涛の説教と非難の嵐。
「綿間部！　そこに直りなさい！　いいですか、まず人の寝顔をまじまじと覗き込むこと自体デリカシーに欠けます！　ましてや男性が女性の寝顔をじっくり観察するなど、何を考えているのですか!?　まったくもっていやらしい！　だから綿間部はいつまで経っても破廉恥なのが治らないんですッ！」
「いやオメーだってオレの寝顔ぐらい見てんだろ。あと破廉恥じゃねーよ」
「口答えしない！　男と女では状況が違います!!　まさか、私が眠っている隙に変なことしてませんよね？」
「変なことって何やねん……マジックペンも持ってねぇし落書きもしとらんわ」
その手があったかと思わなくもないが、よくよく考えたらコイツの顔を汚すのは気が引ける。まぁ、その、何だ。綺麗な顔だしよ。
むぅう、と頬っぺたを最大限にまで膨らませた仙人サマが逃がさんとオレの手首を掴んだ。頬を挟んだ時のソフトタッチではなく、拘束っつー表現がピッタリの力強さで握り締められる。痛ぇよ。
「いいでしょう。今度こそその性根を叩き直してみせます。覚悟なさい」
「オ、オイ……何させる気だ」
「決まっているでしょう？　修行です。なんだか動きやすそうな恰好してるし丁度良いわね」

「待った待った！　鍛錬ならさっき済ませたばっかだから必要ねぇって。あと今回のはアレだ。ほんの出来心だ。だから大目に見てくれ。な？」
「つーん、知ったことですか。私の寝顔を見た責任とってもらいますから」
「うせやろ」
　このあとメチャクチャしごかれた。
　つづく

第五十一話　「宵に良い酔いヨヨイノヨイ」

鯢呑亭。

人里でひっそりと営む、知る人ぞ知る小ぢんまりとした居酒屋の名前である。所謂、隠れた名店とでもいうアレだ。かく言うオレも最近になってその存在を知ったワケで。

店内はカウンター席が一列と、あとはすぐ後ろに小上がりの座敷が少々あるだけ。如何せん店舗そのものが小さいがため、席数は限られてしまう。赤蛮奇のバイト先でもある酒場と比べるとその手狭さは尚更であった。

とはいえ、一日何組様に限定された高級料亭でもなし。運良く空いていれば難なく入れる。

あるいは？兵衛たちの穴場。ぐるなびとかだったら「隠れ家」のタグが付きそうな日本料理の飲み屋。それが鯢呑亭なのであった。

「ここの煮物が絶品なんです。これは是非、綿間部にも食べてもらいたくて」

「ほーん、そら楽しみなこって」

どうやら仙人サマはかなり高評価なレビューを付けておられるご様子。ここに来る道すがらの時点で既に上機嫌だった。

ま、気持ちはわからんでもない。旨い飯と美味い酒で評判の隠れスポット。そんな風に聞かされればオレだって期待するしかない。むしろ今まで見落としていたのが悔やまれる。ったく、オレとしたことが迂闊と言わざるを得ない。

何となしに店の中を見渡す。『鯢呑亭』っつー店名もそうだが、鯨をモチーフにしているらしかった。椅子の背もたれに鯨型の小穴が繰り抜かれていたり、皿もさり気なく鯨のイラストが描かれていたり。個性と遊び心が面白い。

そう言うと何となくファンシーでシャレオツな印象を受けるだろうが、現実はそうそう単純ではなし。実際のところ、いかにも古風な居酒屋なのであった。シーフードなフードバーを想像したヤツは残

念だったな。そもそも幻想郷に海はないのだとか。そのわりには鯨の存在は知ってんのな。

折り紙ぐらいの半紙に習字書きでメニューがあったので手に取る。名物の煮物の他にも川魚の素揚げやら玉子焼きやら、品揃えは豊富で飽きさせない。が、クジラ肉は綴られてなかった。今は食用が禁止されているんだっけか？

カウンターテーブルの木目調を挟んだ向かい側で、店の大将と思しき白髪ハゲのおやっさんが魚を捌いている。刺身に取り掛かっているようだ。熟練の手捌きは匠の技前。

とっくに最初の注文は済ませてある。かといって意地汚く催促するほど無作法でもねぇ。

「ま、気長に待つとすっか」

「そうですね。のんびりいきましょう」

欠伸混じりに背伸びするオレの隣で、華扇が穏やかな微笑で同意する。

ほどなく客足も増え、数少ない席数も埋まりつつあった。つーか来る客がどいつもこいつも中高年の男ばかりなんですけど。ポジティブに言えば渋みがある。ぶっちゃけるとむさくるしい。

そんな男くさい空間に華やかさが二つ咲く。一つは言わずもがな、オレの横で鼻歌まじりに酒と肴を待つ仙人サマ。そして、もう一つが

「どうぞー。日本酒と、筑前煮お待たせしました」

人懐っこい性格を体現したような明るいソプラノ声が流れて、わびさび田舎料理が目の前に滑り込む。食べ応えありそうな一口大に切られた煮物の香りにゴクリと唾を飲む。トドメとばかりに日本酒が溢れる寸前にまで入った徳利が置かれる。

給仕の女が手際よく品々を並べ終える。すると、そのパッチリした緑色の瞳がオレに向けられた。

「そっちのお客さんは初めましてだよね？　来てくれてありがとう。サービスするからゆっくりしていってね」

もう一つの華やかさってぇのがこの女だ。

クセっ毛めいた外ハネしたピンク色のショートヘアに、ひときわ特徴的なキュートな鯨の帽子を被った年頃の娘が佇む。藤色のスカートの上にこれまた鯨――ただしこっちは浮世絵風が盛り込まれた前掛けを重ね、水色のシャツは動きやすく腕まくりしている。襷っぽく白いリボンが胸元でクロスしているのだが、あえて何がとは言わんけどなかなか結構なことになっておった。

兎にも角にも上から下までクジラなピンク髪の女に、こちらも夜を生きる男らしくニヒルに気取って応じる。

「フッ、今夜が初めての一見さんだ。コイツに連れてこられた」

「む、コイツとは失礼ですね。コホン……今晩は、美宵さん」

「仙人さん、いらっしゃい」

華扇と仲居染みた格好をした若い女が和気藹々と話す。

何がスゲェってアイツの帽子。鯨のイラスト付きとかそんな生易しいモンじゃねぇ。ぬいぐるみを乗っけてんじゃないかと見間違うほどに、そのまんま鯨の形をしていやがる。どんだけ店のイメージを前面に押し出してんだ。

「さ、綿間部。飲みましょうか」

「それならまず私がお酌するね。結構ギリギリまで入れたから、持ち上げるのにちょっとコツがいるかも。はいどうぞ」

サービス精神も旺盛なのか、鯨帽子の女が魅力的な笑顔で徳利を差し出す。気前良さそうな陽気さをもつ働き者。そして当たり前のように顔もイイときた。飲み屋で働くにはコレは逸材過ぎんだろ。

「おぉ～い美宵ちゃ～ん」

「はぁい、ただいまー」

ピンクショートの仲居が今度は小上がりのオッサンどもに呼ばれて振り返る。その去り際に、こっちに向けてウインクを放ってきた。

どこぞの和服女将な鳥少女にも負けず劣らずあざとい立ち振る舞い。とりあえず箸を持って筑前煮をかっさらう。まずはレンコンからいただいた。

「うぉっ、ウマ」

「でしょう。萃香に教えられたのは癪だけれど、大当たりね。んー♪

本当に美味しい」
「あ？　萃香ってぇとアレか……あん時のチビくせぇ鬼か」
その節は睨み合い、というか華扇が一方的に敵愾心を剥き出しにしてた気もするのだが、そこまで仲違いしとるワケでもないのかもしれない。わざわざオススメの飲み屋を教えたりするぐらいだ。
当時を思い出しながらテキトーに相槌を打つと、仙人サマは曖昧な表情で頷いた。
「ええ、まぁ……それについては今は置いておきましょう。せっかくのご馳走なんですから」
「フッ、それもそーだな」
厄介事も余計なコトも後回しにして、再び筑前煮に箸を伸ばす。甘じょっぱい味付け、酒はもちろん白米にも合いそうな絶妙な濃さ。箸で持ち上げればずっしりとボリュームがあり、それでいていざ口に放り込むとほろりと崩れる。
特にニンジンがよく味が染みて旨い。ガンガン日本酒が進む。
ツマミと酒の黄金コンボをキメて思わず「クーッ」と小気味よく唸った。至福。
「ヤベェなコレ。職人の味だわ」
「ふふふ、鯨飲馬食には気をつけてくださいね」
オレの反応に大層満足したようで、朗らかに言いながら華扇は小魚の焼き物を一尾摘まんだ。いつの間に頼んだんだ。それオレにもくれよ。
「じゃあね～美宵ちゃぁ～ん」
「ごちそうさまぁ～……オフ、ゲップ」
「うわ汚ねぇなぁ、道端で吐いたらカミさんに言いつけっぞ？」
「うへぇ……やめてくれぇ……」
「どうもありがとうね。気をつけて帰ってね」
べろんべろんに泥酔した中年男どもがだらしないニヤケ顔で帰路につく。ありゃ二日酔いは確定だわな。おまけに下心も見え見えだ。男ってぇのは単純なこって。

「ったく、調子こいて潰れるまで飲んでりゃ世話ねぇやな」
「気持ちはわかりますけどね。お酒も料理も絶品ばかりでついつい飲み過ぎてしまいます」
　などと供述しているこの女に至ってはまだまだ素面なのであった。相変わらずのウワバミ。今晩この店で誰よりも飲んどるハズなのだが、もはや何も言うまい。
　やがて忙しさのピークも過ぎ去り、あらかた飲み客もいなくなった。一息ついたところに、見送りを済ませた鯨帽子の女がオレたちの傍まで戻ってくる。
「仙人さんのおかげでお店も繁盛してるし、こっちは大助かりなんだけどね」
「ほーん……ま、こんだけ飲み食いしてりゃ売り上げ貢献しまくりだろ」
「ひ、人を食いしん坊みたいに言わないでくださいっ」
「あはは、仲いいんだ」
　ピンクのクセっ毛な仲居が会話に交ざりながら、なぜか注文していないハズの徳利をこっそり置く。
　こんなん頼んでねーぞ、と訝し気に見やると、「サービス」と口の動きに合わせて人差し指を立てて唇に添える内緒のポーズで返される。何となく指使いに色気を感じる。なるほど、コレは男が通うわ。
　ところで、どうしようもなく今更ながら大事なことを忘れているのに気付いちまった。
「まだあんたの名前聞いてなかったな。美宵ってぇ呼ばれてたのは聞こえたけどよ」
「やだ私ったら！　ごめんね遅くなって。奥野田美宵です。鯢呑亭の看板娘なの」
「ってオイ、フツー自分で言うかそれ……」
「だって本当のことだもん」
　おどけたようでいて自身ありげに名乗った仲居コスの女――奥野田美宵。
　赤蛮奇に続く新たな看板娘キャラが出てきやがった。ま、あのクー

ル系ろくろ首とは性格のベクトルも全然か違う。キャラ被りの心配はあるまい。

それからも何だかんだで恐ろしく長居しちまった。酒と肴の魔力には敵わなかったわ。

鯢呑亭が暖簾を下げる頃にはオレたちを除いて客は誰もいなかった。おかげで奥野田とも話す時間は十分にあったワケだが。

「今日も大盛況でしたね。きっとあなた方の勤勉な姿を気に入って福の神が立ち寄ったのでしょう。それにこの店は居心地が良いですから」

「ありがたいことにね。博麗神社の宴会で煮物の差し入れ持って行ってから一気に広まったらしくて。なんだか流行りの波に乗っちゃったみたい」

鯨だけにね、などとぶっちゃけビミョーなオチで締めくくられた。さすがの本人も滑った自覚があったみたいで、誤魔化すようにペロッと舌を出した。あざとい。

男を勘違いさせる照れ隠しを引っ込めて、少し困ったような顔で奥野田は軽く肩を叩きながら零した。

「でも、おかげでちょっと人手が足りてないところなのよね。一時のものなんだろうけど、正直言うと今は大変。ほら、この店って私とおじさんしかいないから」

「下手に有名になり過ぎたおかげで今まで通りに対処し切れないってぇワケか。イイんだか悪いんだかよくわかんねぇな。ま、とりあえずブームが去るまで意地でも踏ん張るしかねぇだろ。せっかくの商売チャンスなんだからよ」

「そうだよねぇ……仙人さん、何か良い知恵ない？」

「うふふ。それなら良い考えがあります」

「えっ、本当!?　教えて教えて！」

何やらこっちもこっちで自信たっぷりの得意気なツラで、桃色の仙人サマが含み笑いしておった。迷える子羊に救いの手を差し伸べられて、仙人の本懐といったところか。っかー、満更でもなさそうにし

やがって。
　キラキラと期待の眼差しを送る仲居に、華扇は勿体つけて不敵に微笑むばかり。そんな三文芝居を見せつけられながらサービスしてもらった日本酒を飲む。タダってぇなら遠慮なく――
「よければこの綿間部を使ってください。彼、こう見えて何でも屋をやっていますから。雑用なら幾らでもこなせますよ」
「ぶぼっ……ッ!?」
「きゃあ!?　もうっ何をやっているのですか！　汚いですよ？」
「ゴホッ、ゴホッおま」
　まさかのオレ身売りによる解決策であった。ビックリし過ぎて思わず咽ただろうが。
　咳き込んで反論出来ぬ間にも、奥野田は緑色の瞳を輝かせて喜びに歓声を上げる。華扇も華扇で成し遂げたぜと言いたげに腕組みしていやがる。
「そうだったの!?　こんな偶然があったなんて、すごく助かっちゃう！」
「お力になれたようで何よりです」
「待てぃやコラ！　何やってんだはこっちのセリフだっつの勝手に決めんなや。言っとくがオレぁ料理なんざできねーぞ。悪ぃが臨時バイト探すなら他当たってくれ」
「必ずしも料理をするとは限らないでしょう。皿洗いでも芋の皮むきでもお勘定でも、やろうと思えば仕事は幾らでもあります。こういう時に働かなくて何の為の何でも屋ですか」
「ぐぬぬ……」
　ごもっともなご意見にぐうの音も出ない。あれ、最近のオレってばコイツの尻に敷かれてばっかじゃねぇ？　いやいや、そんなハズない。なぜならオレは夜に生きる男。ハードボイルドな何でも屋なのだ。だから違う。違うったら違うのだ。
　ところが無情にもさらに状況は劣勢に傾く。ついには外ハネ系ピンクショートの看板娘まで身を乗り出してくる。
「お願い！　ずっとじゃなくていいの。一週間……ううん、数日だけ

でもいいから。ダメ?」
「うぐぐぐぐ……ッ!!」
「綿間部。迷う余地などありませんよ。引き受けなさい」
赤みがかった瞳で真っ直ぐに見抜いてくる桃色の仙人サマ。半ば祈るように指を組んでウルウルお目目で懇願してくる鯨衣装の仲居。さらにはカウンター越しに包丁を研ぎ始める白髪ハゲの大将。ってオイ、なしてこのタイミングでそれすんだ。怖ぇよ。
三方向からのそれぞれベクトルの違った圧力に押し切られ、いよいよ退路を失った。もうどうにでもなれと背もたれに上体を放り投げて叫ぶ。
「だーもう!　しゃーねぇなぁ、やりゃエエんだろ?」
「ありがとぉー!　大好き!」
「はいいいいいい!?」
お望み通り引き受けてやったってぇのに華扇が一番びっくらこいていやがった。何でや。
つづく

第五十二話　「ピンク×ピンク×ピンク」

次の日から、オレの鯢呑亭で働く日々が開始した。

朝から出勤する事態は避けられただけまだマシであろう。料理の仕込みは従来通り二人がやるんだと。おかげでこっちは店を開ける時間までに顔を出してりゃ問題なし。

つっても、掃除やらテーブル拭きやら開店準備もあるためギリギリ滑り込みってぇワケにもいかない。ま、料理以外ならやってやるさ。何せこちとら何でも屋の看板背負ってんだからよ。

「クロくーん。これもお願い」

「へーへー」

ガシャガシャと使用済みの食器を洗っている傍ら、奥野田美宵が器用にも何枚も積み重ねられた皿を置いていった。テキトーに返事しながら泡塗れのスポンジを握り、ひたすら皿洗いに打ち込む。

雑っぽい音を立てちゃいるが、それで割ったりしたらシャレにならんのでそれなりに気を付ける。もっとも、繁華街でもグラス磨きとか似たような経験があるのだが。できねぇのはキッチン業務だけだ。

白髪ハゲの大将はカウンターで料理に専念中。ピンク髪の看板娘は接客をこなしつつ自らも料理を担当、かと思えば人懐っこい笑みでサービスにも余念がない。見ているこっちが目が回りそうなぐらい忙しなく狭い店の中を駆け回っていやがった。

このザマじゃ洗い物なんざするヒマもなくて当然だろうよ。そらバイトの一人や二人でも捕まえねばやってられんわな。洗い場だけでてんやわんやだ。

ともあれ受けた依頼はやるしかねぇ。アライグマにも引けを取らない皿洗いテクでありったけの食器を磨き上げる。

水気を切って立て掛けていると、看板娘のソプラノ声が飛んできた。

「ごめんクロくん！　カウンターに出てて！　お通しの作り置きあるから盛り付けておいてもらえる？」

「おー、今行く」

やれやれ、忙しいこって。
お呼びがかかって一旦洗い場を離れる。あとなんかさっきから大将じゃなくて奥野田が仕切ってんのだが。それでエエのか大将さんよ。
「待たせたな」
いきなり裏方から見慣れぬ野郎がしゃしゃり出てきて、常連どもが驚いたツラで目ン玉を見開く。
が、そこは気のイイ?兵衛の集まり。こーゆー時に限ってムダに適応力が高いと相場が決まっている。おったまげたのは最初のうちだけ、酒が入ったテンションと物珍しさで興味津々に話しかけてきやがった。
「あんちゃん新入りかい？　美宵ちゃん、いつの間に新人なんて雇ったんだ」
「ほほう。なかなか男前なのが来たじゃんか。なあ?」
「おほっ！　イイ身体してんねぇ～」
「オイコラ最後のヤツ」
仏頂面でぶっきらぼうなクソ接客も酔っ払い連中にはネタでしかない。どいつもこいつも機嫌を損ねるどころか逆に面白がってちょっかいをかけてくる始末。ニヤニヤ笑いで言いたい放題飲み放題と喧しい。ホントに隠れ家系の店だったのか疑わしくなってきたぞオイ。
ついには看板娘にまで酔っ払いの魔の手が及んだ。
「あんちゃんと美宵ちゃんが並ぶとなんだか夫婦で店やってるみたいだねぇ」
「んだ。あれだ、服も似てるからだな」
「えぇ～?　やだぁ。クロくんとはそんなのじゃないってば」
いかにも思わせぶりな態度で仲居がはぐらかすモンだから、ヒューヒューと口笛吹かして囃し立てられる。そこはフツーに聞き流せよ。ますます調子乗ってんだろうが。
「しかたねぇだろ。コレが仕事着だっつーんだからよ」
「おじさんが若い頃に着てたのだけど、サイズもピッタリで良かった

よね」

腰下の前掛けは「大漁」の太い文字に波飛沫の刺しゅうが入り、オールバックの頭にねじり鉢巻きを巻き付ける。唯一黒いのは無地の半袖シャツのみ。近日の筋トレ効果もあってガッチリ鍛えられた上腕筋をさらけ出す。

目つきの悪さも上乗せされ、腕組みして仁王立ちにでもなれば見た目だけなら気難しい頑固職人。もしくは体育会系のラーメン屋。

「若大将。焼酎、水割りで」

「誰が若大将だ、誰が。オイ奥野田、焼酎一本」

注文をそのまま外ハネ系ピンクショートの女に投げつけ、水差しの準備に取り掛かる。

「はいクロくん。それより奥野田なんて堅苦しい呼び方じゃなくて美宵って呼んでほしいな」

「うるへー。こっちのが呼びやすいんだよ。お前こそ、その変な呼び名やめーや」

「やだ。私だってクロくんが呼びやすいもん」

べー、と舌を出して抗議しやがるクジラ娘に男どもがデレデレと鼻の下を長くする。ったく、とんだ小悪魔がいたもんだ。

しばらくすると、ガラガラと引き戸が開かれて新たな来客が現れた。

「今晩は」

マジメそうな女の声音が凛と透き通る。

赤い薔薇が飾られた中華衣装と桃色のミディアムヘアが古びた店内だと一際目立つ。二日続けてのご来店。

「あ、いらっしゃい仙人さん」

「はい。お邪魔します」

華扇はわざわざオレの正面にあたるカウンター席に座り、真っ直ぐにオレを見つめてキレイに微笑んだ。

「あら、似合っているじゃないですか。見違えましたよ?」

「そりゃどーも。お世辞はいいから注文決めとけ」

「まったく……接客の方は今一つのようですね。くれぐれも他のお客さんに失礼のないように」
怒るというよりは予想通りと言いたげな呆れた声が返ってきた。
おしぼりで手を拭きながら、仙人サマが品書きを眺める。メニューは手元にあるやつとは別に、頭上に短冊みたく貼り付けてあるものも幾つか。ベタな居酒屋にありがちな類といえばわかるだろうか。
ただ、それを観ようとすれば必然的に見上げるようなかたちになる。そうすると自ずとオレのことも視界に入っちまうワケで。
「うん。やっぱり似合ってます」
「……そーかい」
賑やかな喧騒の中に、オレにしか聞こえないような小声が耳をくすぐった。
「クロくーん。ちょっと来てー」
「ほら、呼んでますよ」
「わかってらぁ。というか今のがオレだってわかるんかい」
「単純な足し算よりも簡単なことです。そもそも他に候補なんていないでしょう」
くすくすと笑う華扇の眼差しに見透かされているような気がして、誤魔化すように視線を逸らす。ここは戦略的撤退しかあるまい。
そそくさと奥野田のところへ行く。料理を担っている真っ只中で、緑の瞳が真剣に鍋の火加減を見極めていた。
「呼んだか」
「ちょっと待って……よし」
鍋の中を覗き見る。お得意の煮物がグツグツと煮えたぎっていた。
料理人が全神経を目の前に集中させ、「今だ」とタイミングを見定めて爪楊枝で具材を一つ刺す。熱々の煮汁から引き上げられた小ぶりの里芋は白い湯気を纏っており、出汁の香りが周囲に漂った。
「で、オレは何すりゃいいんだ」
「それはね……ふー、ふー」
息を吹きかけて具材を冷ます仲居コスの女。
そして爪楊枝を手にしたままこっちに向き直ったかと思えば、もう

片方の手のひらで手皿を型作り、
「はいアーン」
「あ？」
「あぁあああーーーーッ!?」
人懐っこい笑みとともに、爪楊枝の先にくっ付いた出来立てをオレの口元まで運んだ。ご丁寧に彼女の吐息で程よく冷ましたものを。
チラチラと様子見していた華扇が素っ頓狂な大声で叫び、同時に両手でカウンターを叩きながら勢いつけて立ち上がる。いやうるせぇよ。
仙人サマがお叱りの言葉を飛ばしてくる。ただ、その顔は怒りよりも焦りが滲んでいるように思えた。というか明らかに狼狽えている。
「ふ、不純異性交遊ですよ!?」
「大丈夫大丈夫、そんなのじゃないから。ただの味見。ほら、クロくん。零れちゃうから早く食べちゃって」
「おぉ……んぐ、んめぇ」
差し出された里芋を咥えた瞬間、ガーン！と効果音が付きそうな感じで華扇がショック顔を浮かべた。さっきから何なん。
ひとまず仙人サマの百面相は置いておくとして、行儀悪く咀嚼しながら味を確かめる。醤油とみりんが染みている。ほんのり甘いのは恐らく砂糖が少々。昨晩に続いて上等な仕上がりに文句なんぞあるハズもなし。
オレの感想を聞いて、奥野田は「やった」と嬉しそうにピースサインを決めた。あざとい。
「うぅ……」
「で、お前はなして頭抱えてんだ」
「……うるさいです。馬鹿者」
その一方で、いかにもやられたと謎の敗北感?にカウンターに突っ伏す華扇を見下ろす。表情豊かなのは見てて面白いとはいえ、まるでこの世の終わりでも目の当たりにしたかのような空気は勘弁願いたい。
「……あ」

ひょっとして、そういうことか？
ふと、これまでの状況から一つの心当たりに辿り着く。しゃーねぇ、ちっとばかしサービスしてやるか。
「悪ぃ。もう一つ貰うぞ」
「おっけー」
さすが鯢呑亭の看板娘。サービス精神のよろしいことで。
鍋に残っていた煮物を一つ、爪楊枝でプスッといっとく。せっかくなら特にイイ感じに濃いめの焦げ茶色に色付いた里芋を選んでやった。皿に移すのもメンドクセーし、このままでいいか。
カウンター越しに腕を伸ばして、キョトンとする華扇の口のあたりにそれを持っていった。
「ほれ、口開けろ」
「……はぇ？」
「はぇ、じゃねーよ。零れんだろ、いつもみてぇに一口でいけって」
爪楊枝を上下に揺らしながらぶっきらぼうに言ってやると、ようやっと華扇もその意図を察してほんのり顔を赤らめた。
ついでに周りの目を気にするようにモジモジと身体を揺らす。
「そ、そんな……恥ずかしいです。皆さん見てますし」
「いいから早よ食え。ほら、アーン」
「……あ、む」
半ば強引に促したことで華扇も根負けした。わざわざ瞼を閉じて、控えめに口を開く。ちょっぴり小恥ずかしそうに。
包帯の巻かれた右手で口元を隠しつつ、桃色の仙人サマは味見の品をじっくり味わってから飲み込んだ。
「ご、ごちそうさまでした」
「おう。味見だけじゃなくてちゃんと注文もしろよ」
「は、はい……」
急にしおらしくなった仙人サマを怪訝に思ったものの、再び洗い物が溜まり出したことに気付いたオレは手早く裏方に戻っていった。
どさくさに紛れてもう一度だけ華扇の方を振り返る。桃色ミディアムヘアの女は酔っているワケでもねぇのにポーッとした面立ちで

呆けていた。何というか頭がお花畑っぽい。大丈夫かよ。

「うぅむ」

やっぱりまだ熱かったんだろうか。食い終わってからも顔赤かったし、若干だけど目も潤んでいた。やっぱり軽く冷ましておくべきだったかもしれない。スマンな。

それからの日々は目まぐるしかった。

月月火水木金金もかくや、キッチリ一週間にわたってテントと鯢呑亭を往復する居酒屋ライフが続いた。

幸か不幸か、客足は日を追うごとに落ち着いていった。最終日にもなればもともとの二人で何とかやれそうな感じに収まった。とりあえずド派手な流行の大波は去ったらしい。そーゆーワケで当初の契約通り、一週間をもってオレの仕事は終わりを告げた。

ちなみオレが依頼を受けている間、華扇が一日足りとも欠かさず鯢呑亭に来やがった。どんだけ気に入ったんだ。確かに美味いのは認めるけど。

ともあれ、依頼も無事達成。オレと鯢呑亭の関係は元スタッフ――否、客の一人に元通りってな。

余談だが、もちろん今回に対する報酬もキッチリ貰っておいた。『給与』と記されたポチ袋で。って、これじゃバイト代じゃねーか。

ある日の夕暮れ。

毎度毎度あてもなく人里をぶらぶらしていると、和服女将な鳥娘とバッタリ鉢合わせた。今夜の営業に備えた買い出し中だった様子で、布製の買い物袋を手に提げている。

「あ、お客さん」

「おう」

オレの姿を見つけてミスティアがはにかむ。

ピンク色のショートヘアに頭巾を被り、渋い色の反物がどことなく落ち着いた雰囲気を醸し出す。そのうえ、愛嬌のある顔立ちの少女が着たことによって菫の如き雅さも生まれる。嗚呼、コレはモテるだろ

うな。
「考えてみりゃ実は結構久し振りなのか？」
「そうね。最近お店にも来てくれなかったから寂しかった……」
「あー……そらスマンかった」
しゅんと肩を落として悲し気に表情を暗くするミスティアに罪悪感が痛む。アカン、こんなん彼女のファンに後ろから刺されかねない。
しかし女将の屋台がすっかりご無沙汰になっちまっていたのもムリはない。この一週間は鯢呑亭で働いてたし、しかも仕事上がりはそのまま飲んでいた。ツマミは賄いと称して出してくれたおかげで懐も痛まない。イイコト尽くめだったのだ。
申し訳ねぇと零しつつ後頭部を掻くオレを見てミスティアはくすりと微笑み、今度は可愛らしく小首を傾げた。あざとい。
「今日は来てくれる？」
「そーだな。たまにはヤツメウナギの蒲焼きも悪くねぇ――」
「あれ？　クロくん？」
数日のうちに聞き慣れたソプラノ声が通った。
ぬいぐるみっぽい鯨の帽子と、浮世絵テイストな白鯨の絵が施された前掛けを組み合わせた仲居のような格好。外ハネしたピンクショートが特徴的な若い女が目を瞬かせる。
緑の瞳が不思議そうにオレに映した。
「ここで会うなんて奇遇だね。もしかして今夜もウチに来てくれるの？」
「あぁ、いや……」
別にやましいことは何もないのだが妙に言い辛くて口ごもってしまった。カッコつかねぇ。
そんな中で、客商売のプロが今しがたの短い受け答えで大方察してのけた。女将の名は、ミスティア・ローレライ。
「お客さん、美宵ちゃんのお店に行ってたんだ」
「ま、依頼でな。それも昨日で終わった」

「だったらもう大丈夫よね。今日はあたしの屋台に来てほしいな。土用の丑の日は終わったけど、まだまだ暑いしウナギで精力つけないとバテちゃうでしょ？」

そう言ってミスティアはオレの右手の甲に彼女自身の手のひらを重ねた。白魚のような綺麗な素肌の滑らかさが優しく撫でる。水商売をしているのに手荒れが微塵も見当たらない。

ところが、そこに鰻呑亭の看板娘が割り込んだ。

「ちょっと待って！　実はクロくんに食べてもらいたい煮物があるんだけど。ダメ？」

奥野田はオレを引き留めるように左腕を掴み、襷みたくクロスしたリボンで強調された胸元に抱え込んでくる。なかなか結構な膨らみがむにゅりと押し当てられた。予想を裏切らない柔らかさに一瞬頭が真っ白になりかけちまった。

「今夜はうちの屋台にしましょ？　お客さん」

「ミスティアさんズルいよー。鰻呑亭にしない？　ねっ、クロくん」

女将と仲居が左右それぞれからオレを引っ張る。

温和な性格の持ち主同士なのもあって険悪ムードには陥ってない。じゃれ合いに近いマイルドな大岡裁きが繰り広げられる。何だこの客引き対決。

かといって振り払う気にもなれず、されるがままに身体があっちへこっちへ交互に傾く。って、オレはヤジロベーか。それにこのままでは埒が明かない。

気付けば二人揃っても綱引きごっこを面白がっており、見るからに楽しそうにオレを引っ張っている。勝手に人をオモチャにすんなよ。

「何をやっているのですか」

おっとここにきて第三者が乱入してきた模様。

果たしてどこから見ていたのか、茨木華扇が据わった目つきでオレたちを射抜いていやがった。いやマジでいつからそこに居たんだ、お前。あと目がマジになってて怖ぇよ。

桃色ミディアムヘアに白いシニョンを括った女はオレの真ん前に立ち、オレの顔を覗き込んだ。顔が近い。宝石めいた赤みがかった瞳

にたじろぐ。
「綿間部？　今度は何をしでかしたのですか？」
「何にもしてねぇって。今日はどっちの店で飲むかで意見が割れてんだよ」
「はぁ……そういうことですか。人騒がせな」
女将と仲居に片腕ずつ拘束されたまま事情を話すと、思いのほか華扇はすんなりと理解してくだすった。
コホン、と軽く咳払いをかまして華扇が口を開く。
「えっと、そういう事情でしたら……」
「あ？」
トン、と。
おもむろにオレの胸の中心部に軽く握り拳を添え、上目遣いに見つめられる。白い肌の頬にほんの少しだけ赤みがさしていた。少しだけ、オレも緊張してしまう。
「今夜は一緒に外でお酒を飲みませんか？　きっと星空が綺麗でしょうから。私の手料理でよければ用意します」
「えぇー！　仙人様そんなのズルいわ」
「そうだよ仙人さん！　抜け駆け禁止！」
「オイどうすんだ余計収拾つかなくなってんぞ」
新たな選択肢、華扇と一緒に月見酒が解禁された件について。なぜにこのタイミングでそれを言う。まるで折衷案になってないんですけど。
夜雀の屋台でもなければ鯢呑亭でもない。ともなれば、当然なことに残り二人が大いに不満をぶちまける。むしろ泥沼化してんじゃねーか。
「ねぇ、お客さん」
右側から、そっと手を重ねたミスティア・ローレライが、
「クロくん」
左側から、豊かな胸にオレの腕を抱き込んだ奥野田美宵が、
「綿間部」
正面からは、密着すれすれにスタイル抜群の身体を寄り添わせた茨

木華扇がオレに迫る。
直後、偶然にも三人ともピンク髪な女たちが口を揃えて言葉を紡ぐ。そのセリフは寸分のズレもなくキレイに重なった。
『あなたは誰を選ぶの?』
おいぃ……
どうすりゃイイんだコレ……

その後、偶々通りがかった赤蛮奇がオレたちを見かけ、毎度のジト目がオレを狙って「さすが黒岩、ブタ野郎ね」と冷たく言い放った。
つづく

第五十三話　「仙人掌って読める人おる？」

暗闇を塗り潰す土砂降りの真っ只中、やるせない足取りでトボトボと歩く。

「あーあ、こりゃ酷い天気だわな」

豪雨に視界も遮られる。しかも、こーゆー時に限って街頭も灯ってねぇときた。それがますます漆黒の暗がりに拍車をかける。

風物詩たる入道雲が昇る夏空が広がっていたのも、今や見る影もなかった。時折、まるで記者会見の報道陣が一斉にフラッシュを焚いたかのような強烈な閃光が迸る。景色が暗転してから数秒の溜めが生じて、激しい雷の咆哮が鳴り響いた。

三日三晩続いた雷雨が、今宵で四日連続の新記録を更新しようとしていた。

「っかー、ずぶ濡れで気持ち悪ぃなチクショウめ……」

降りしきる雨粒やら地面を跳ね返る水飛沫やらで、ズボンはおろか靴まで浸水していやがる。足の裏が地面を踏む度に、内部のインソールから雨水が染み出してきてぐしゅぐしゅと不快な音を立てる始末。いっそ裸足の方がまだマシな気がしてきた。

怒涛の降雨にポッキリ逝っちまいそうな安物の折り畳み傘（黒色）をどうにか差して、人っ子一人いやしない人里の往来に佇む。まるでゴーストタウンじゃねぇか。天気もアレだしよ。

まさかここまで悪天候になるとは抜かった。小雨のうちに外に出たのが完全に裏目に出ちまった。

オマケにド田舎異世界の風潮なのか、雷が猛威を奮う晩に出歩くド阿呆はオレを除いて他におらず。誰もが家に引き籠っていやがる。酒場も鯢呑亭も例外じゃなく、無情にも臨時休業で締め切っていた。

「踏んだり蹴ったりってか。ついてねぇ」

折り畳み傘も無意味な濡れ鼠になりながら足早に急ぐ。我がアジトのテントまであと少し。

暗黒城もかくやな世紀末くせぇ荒天。

数奇な運命に引き寄せられたのか、オレは奇怪なモンを目の当たりにした。暗闇に際立つ異質な存在。目を引かないワケがなかった。

「何だァ、ありゃ……？」

はじめはどうせ稲光だろう高を括った。が、何となく違和感を覚えてしまう。急ぎ足を中断して立ち止まり、じっと目を凝らす。

上空に不可思議なブツが漂っていた。

そいつは、遠目からは光の球体のようにも映った。

「ＵＦＯ、か……？」

思わず呟く。イマドキ小学生でも言わないような寒いジョーク。だが、それっぽかった。

そいつはフラフラとこれといった目的もなさそうに浮遊していた。かと思えば、すばしっこい速度で雷雲の下を行き来したりと不規則な行動を見せる。明らかに稲妻じゃねぇナニか。

自然現象にしちゃどーにもおかしい。むしろ生き物っぽい動きでさえあった。

ところが、余裕ぶって傍観していられたのも束の間、

「げ……ッ!?」

急展開に目を見張った。

謎の光る物体はあろうことか地上目掛けて落下してきやがったのだ。

夜空に煌めく流れ星が地上に降ってきた、などと謡えられたのなら些かロマンチックもあっただろう。が、現実には生憎と隕石が墜落してきた印象を抱かざるを得なかった。

よりによって落下先はオレの視線の向こう、すなわち人里の中であった。なんつー確率論だ。

集落に住まう村人は挙って自宅に籠城中。現状、目撃者はオレのみ。第一発見者とかロクな目に遭わない気がすんのだが。

「オイオイ……宇宙人襲来とか言うなよ……」

激しい雷雨とともに突如として現れ、そして墜落していった未確認浮遊物体Ｘ。下手なゴシップ記事の見出しにでも使われそうなフレーズが走った。しかもノンフィクションという。

見なかったことにして素通りするには気になり過ぎる。それにだ。もし放っておいてトラブルのタネだったりでもしたら、真っ先に唯一の目撃者であるオレが叩かれちまうワケで。ド田舎異世界でも炎上騒動とか冗談じゃねぇ。

無視っつー選択肢は今後の可能性を考えるとあまりにも分が悪かった。ま、オレ自身気になっているってぇのもあるし、やることは一つってか。

「しゃーねぇ。行ってやろうじゃねーか」

フッとニヒルにキメる。

こうして、夜を生きる男は人知れず自警活動に乗り出すのであった。

目的のブツはわりかしすんなり見つかった。

例の物体は路地裏を所狭しと縦横無尽に飛び回っておった。

いざ近くで対峙してみれば、サッカーボール程度の大きさでしかなかった。思いのほか小さくて拍子抜けする。

「華扇のところの雷獣か……？」

いや、アレは違う。あの電気ネズミじゃねぇ。別物だ。

静電気を彷彿とさせる控えめな発電とは一味違った。便宜上、プラズマ球とでも名付けておこうか。兎にも角にも珍妙な発光体がいやがった。

「またけったいなモンが出てきやがったなオイ」

無意識にボヤくと、向こうもこっちの存在を察知したらしい。

謎の球電はニンジャかとツッコみたくなるムダにキレのあるアクションを起こした。瞬時に壁際から壁際へと飛び移る。あたかもオレを攪乱しているようでもあり、その実、目で追うのがギリギリだった。

「速――ッ!?」

予想外のスピードに意表を突かれてしまう。

俊敏な動きをする得体の知れない珍物から目を逸らさず身構える。

アレの正体がどうあれ、このまま目の前に棒立ちってぇのはマズイ。

奴さんは逃げるどころか仕掛けてきやがったのだ。最悪、好戦的な物の怪の類かもしれねぇ。

油断なく見据えつつ一歩ほど後ろに下がる。ところが、ヤツばかりを警戒していたのが災いして足元が疎かになっていた。すぐそこに水溜まりがあることに気付けなかったのだ。

「うおっ」

不用意に足が滑り、体のバランスが崩れてしまう。たった一瞬、致命的な隙が生じる。直後、狙いすましたようにプラズマ球が一直線に突っ込んできた。

「グ――!?」

確かな質量を持つ何らかの物体がオレの土手っ腹に深く減り込む。呼吸が詰まる衝撃が襲い来る。しかし本当の惨劇はこの直後であった。

同時に落雷を浴びたかと錯覚するほどの強烈な電撃が全身に走った。

「ガァアアアアアアッツ!?」

獣の断末魔にも似た叫びがオレの口から放たれる。

紫電の凶刃から幾度も袈裟斬りにされ、両手両足がバラバラに千切られそうな感覚に陥った。暗闇の悪天候にいたにもかかわらず、凄まじいスパークに目の前が真っ白に染まる。

衝撃そのままに後方へブッ飛ばされた。不運にも建築用の角材が並べて重ねられており、資材の山に背中からド派手に叩き付けられた。今度は背骨や肩甲骨が軋み、鈍痛に苛まれる。

「ガハッ……ァ!?」

肺の奥に詰まっていた空気を吐き出す。胃の中のモンをブチ撒けずに済んだのは奇跡に近い。

整頓されていた角材がバラバラに崩れ落ちる音が雨音に混じった。指先に至るまで身体中から感電している。未だに痺れが抜けない。

いつの間にか折り畳み傘も手放しちまっていた。容赦なく降り注ぐ大粒の雨をオールバックの頭から被る。視界さえも暗転し始めた。ザーザーと雨が滴る音がノイズとなって鼓膜を震わす。

「くそ、っ……たれが……」
口が上手く回らず言葉も覚束ない。
言うなれば強力なスタンガンを持ったヤツに体当たりされたも同然。そんなモンを防御もとらずにマトモに食らっちまえば、為す術もなく意識が刈り取られる。自明の理。
五感も痺れて使い物にならず、ついには意識も薄れいく。最後の最後に、微かにだが辛うじて耳に届いたのは――
ケケケ――と癪にさわる嘲笑であった。

誰かの声が聞こえる。
「――べ！　わた……べ！　――きてッ！」
若い女の声だ。どことなく、聞き覚えがあった。
イマイチ聞き取れない。脳ミソにフィルターが掛けられた状態というか、はたまた耳栓越しに聞かされているとでも例えようか。オレという存在が不明瞭な形になっているようで一箇所に定まっていない。
「起き……！　起――なさい！」
先ほどよりも声量が大きくなる。
少しずつだが、その声が聞き取れるようになった。あぁ、そうだ。この声は……
集合無意識らしき海底の奥深くまで沈んでいた自我が浮上していく。ついでに身体が揺すられているのも朧気ながら伝わってきた。
行かねぇとな。彼女がオレを呼んでんだから。
そして、薄っすらと瞼をこじ開けた。
「ぐ……イ、づぁ」
「綿間部ッ!?　しっかりして！　私がわかりますか!?」
「……ハ、わぁーってるから大声出すなや」
目を開ければ、桃色の仙人サマの整った顔立ちが視界一杯に広がっていた。赤みがかった瞳はちょっぴり潤んでいて、こんな時なのに綺麗だと思っちまった。ここだけの話。
空が眩しい。すでに日が差していた。台風モドキの土砂降りはひ

とまず止んだらしい。もっとも、ここのところ毎晩悪天候が続ているワケだが。下手すりゃ今夜も降るかもしれん。

朦朧とするアタマを雑っぽく振り被って、寝起きの減らず口を叩く。

「とりあえず顔近ぇよ。あと耳元で叫ばんでも聞こえるっつの」

「……もぉ！　どれだけ心配したと思っているんですか!?」

涙声に喉を震わせて、華扇がオレの胸におでこを落とした。こつん、と優しく触れあった際に彼女の頭髪が手近な位置に届く。きっとオレもまだ寝ぼけていたのだろう。何となく、気付いたら華扇の後頭部を撫でていた。

「ったく、大袈裟なやっちゃな」

「うるさいです……本当に、心臓が止まるかと思ったんですから」

「そらスマンこって」

「馬鹿者……無事でよかった」

柔らかな桃色に色付くミディアムヘアに手を置きながら、オレは周囲に目を配り密かに溜息を吐いた。シャツもズボンも生乾きどころかまだ濡れたまま。衣服どころか体もビミョーに煤っぽいし焦げ臭い。早うテントに戻って着替えてぇぜ。

ま、その前に、まずはぶちまけた木材を元の場所に戻すところから始めねぇといけなさそうだけど。

「それで昨晩は何があったのですか？　あんな場所でボロボロになって気を失うなんて只事ではないでしょう」

「あー……別に大したコトじゃねぇよ。ちぃっとばかしヘマこいたに過ぎん」

「誤魔化さないでください。詳しく教えてくれるまで離れませんから」

「ちょ待てバカお前っ、だから近ぇっつの！」

一晩ぶりに我がアジトに帰還し、膝小僧を突き合わせて向かい合う。

仙人サマからは頑なな意思を感じさせられた。ただし、マジメな面

構えで真っ直ぐに見つめてくるのはともかく、相も変わらず無防備に異性に詰め寄るのはいかがなものか。そーいうとこやぞお前。

その気になれば組み伏せられそうな近さからどうにか間隔を開ける。いや別にオレはやらんけど。

下手に黙秘権を貫くと押し倒されかねないので、オレは昨晩襲ってきたプラズマ球のことを包み隠さず打ち明けてやった。すると、仙人サマの顔つきがますます真剣味を帯びる。見るからに心当たりがある模様。

全てゲロし終えると、やはりというか、仙人サマがプラズマ球の正体を明かした。

「綿間部が見たもの、あれはトカゲです」

つづく

第五十四話　「仙人掌（サボテン）　花言葉は『枯れない愛』ですってよ」

「あ？　トカゲってぇとあのトカゲか？　爬虫類の」
「はい。もちろん、ただのトカゲではありません。彼の者は雷龍になる素質を秘めています。相応の力を有するのです」
「っかー、トカゲが進化したらドラゴンになんのかよ。まさかたぁ思うが、アレもオメーのペットだったりしねぇよな？」
「いいえ、紛れもなく野生のトカゲです。ただ、あの子が本当に龍になれたら手懐けてみたいとは思っていましたけど……」
　そこまで打ち明けるとおもむろに華扇は頭を下げた。何でや。
「ごめんなさい。あれの存在は知っていたのに、私の見立てが甘かった。力を得てあそこまで図に乗ってしまうなんて」
「別にお前のペットじゃねぇなら謝る必要もねーだろ」
　野生の爬虫類が暴走したことに対して華扇に非があるかと問われれば、否定しかない。仙人だろうが何だろうが、全くもって無関係なのは変わりあるまい。
　ところが、クソマジメな性格の華扇としてはそーゆーワケにはいかんらしい。神妙なツラで食い下がってきた。
「そうとも言い切れません。龍に至る試練を見守っていましたから。そのうえ、あれが人家に落ちれば火事になる危険性も知っていたのですよ？　当然、こちらも出来得る限りの手筈はしてきたつもり。でも、やはり万全とはいかないの。その所為で、綿間部が傷ついてしまったのですから……」
「はー、最近やたら火の用心キャンペーンしてると思ったらそーゆー裏事情かよ。合点がいったわ」
　上白沢女史を筆頭に寺子屋のガキんちょどもを引き連れていたのを思い出す。「火の用心、火の用心」としつこいぐらいに呼び掛けて打木を鳴らしながら人里内を練り歩いていやがった。コイツの入れ知恵だったか。

恐らく華扇がそれとなく火災に注意しとけと促したってぇところか。マジメな仙人サマからの意味ありげな忠告だ。人里の守護者サマが手を打たないハズがない。

この女なりに手は尽くした。それでもガイシャが出ちまった。そいつが偶々オレだっただけのこと。

んなコトにイチイチ華扇が責任を負うってぇのはお門違いだろうが。それにオレだってコイツが気に病むツラは見たくねぇのだ。

「んで、龍になれんのかそいつ」

「……素質はあったんです」

悔し気に言葉を絞り出しながら華扇が整った顔立ちを苦渋に歪ませた。行儀良く膝の上に乗っていた拳が握り締められる。女の心情がありありと見て取れる。

「さすがにこのまま放っておくわけにはいきません。残念ながら『不合格』です」

「ま、そんな感じはしてたわな」

あの耳障りな嘲り笑いが鼓膜の奥に残っている。完全に調子こいてるっつーかイキってるヤツの態度だった。そういった手合いは下手にほったらかしてたらロクなことにならない。

「どーする気だ？　まぁた得意の説教か？」

問題児を相手にするのだ。言ってしまえばこの女の独壇場であろう。思う存分小言ぶちかましてやればイイ。

が、返ってきたのは予想に反するものだった。どこか諦めを孕んだ自虐的な表情を浮かべて、彼女らしからぬ無慈悲な宣告が下される。

「自らに心酔しているあの子はもう誰の言葉にも耳を貸さないでしょう。私の説教も届かないと思います。きっと説得も通じない……だから、狩るしかない」

「……本気で言ってんのか？」

「民家が燃やされてからでは遅いわ。もはや無視できぬまでに己の実力を過信し、挙句には暴走してしまっていました。いつ被害が出るかわからない」

華扇の覚悟は決まっていた。

そうは言っても、瞳の奥に揺らぐ辛い気持ちはいくら隠そうと思っても隠しきれるものではなかった。ましてや普段から表情豊かなこの女なら。それを間近で見てきたオレには。

動物好きな女が、自ら手を下すようなマネをしたがるなんざ有り得んだろ。そんなん嫌に決まっている。

だったら――

「オメーは手ェ出すな」

「え……？」

オレの一言を受けて仙人サマが瞬きする。

そもそものハナシ、今回のはオレが情けなくブッ飛ばされたのがデカい。つまり、オレのヤマでもある。

借りはキッチリ返してこそ夜を生きる男。ハードボイルドな何でも屋。ぶっちゃけドラゴンとかトカゲとか知らん。やられたからやり返す、それだけのこと。ケジメはテメェでつけてこそ男の生き様ってな。

汚れ役はこっちで受け持つとか、そんな大義名分じゃねぇ。ただの尻拭いだ。

「心配すんな。こっから先は、オレの喧嘩だ」

「……」

赤みがかった瞳を見据えてハッキリと告げる。

しかし、強い意志の籠った視線を向けられても、華扇が頷き返すことはなかった。包帯の巻かれた右手と素肌の左手がオレの手を包む。

両手を重ねつつ、桃色の仙人サマが儚げに微笑んだ。

「いいえ。私たちの喧嘩です」

「つってもお前だって殺処分に加担したくねーだろ」

「それは……」

如何せん根っこがマジメ過ぎんのは美徳っつーか玉に瑕というか。

そらオレだって別にブッ殺してやりたいほど憎いってぇワケでもねぇけど……

あ。

その瞬間、天啓が下りた。

「なぁオイ、オレにちぃっとばっかアイデアがあんだけどよ」
「へ……？」
華扇がきょとんとした顔でオレを見やる。
いきり立つプラズマ球もといトカゲ（仮称）の鼻っ柱をへし折ってやって、かつ逆上したりとかお礼参りとか下らんマネしてこないように釘を刺しておく。要はそーゆーこった。手段はどうあれ、結果的にそうなれば文句なし。

その日の晩も、相も変わらぬ凄まじい雷雨が幻想郷を襲った。
この悪天候も例のトカゲとやらが原因だと。このまま続けば異常気象も免れないとか。というか既に異常気象に片足を突っ込んでいる気がすんのだが。いよいよもって放っておくワケにはいかなくなっていたワケか。
「来たか」
折り畳み傘も使わずずぶ濡れになって待ち構えていると、夜空に稲妻とは異なる光源――プラズマの球体らしきナニかが前触れなく出現した。ムダに眩しいため輪郭が掴めない。事前に正体がトカゲだと身バレしてなければ到底わかりっこねぇ。
その辺で拾った石ころをヤツに目掛けて投げつける。投石は雷トカゲの真横を素通りした。当てる必要はない。狙い通り、向こうもこっちに気付く。
「よお、昨日は世話になったな」
いっそわざとらしいまでの喧嘩口調で煽りにかかる。
「リベンジしに来てやったぜ。もうテメーの電気は効かねぇ」
目つきの悪さも相乗したあくどいツラで中指を立てる。さらに都合の良いタイミングで雷光が閃き、轟音が鳴り響く。恐ろしいまで絶好の演出が入った。ヤベェな、メッチャ悪役してるわ。
どこまでも舐め腐った挑発をかまされ、案の定、ヤツは激高した。
昨晩打ち負かした三下風情が性懲りもなくしゃしゃり出てきただけじゃ飽き足らず、完全に見下した煽り文句を放ってきやがったのだ。テメェの実力に酔ってる輩にとってこれほど目障りな存在はな

かろう。
プラズマ球がバチバチと派手な電光を纏った。
瞬く間に、空中から流星の如き一直線の軌道を描いてゼロ距離に差し迫る。
昨夜と同じ、下手すりゃそれすら上回る電撃を帯びた突進が土手っ腹にブチ当たる。ガラ空きの胴体をブッ飛ばそうとして――
「効かねーって言ったろ？」
まさかの予想を裏切って不発に終わった。
その瞬間、初めてヤツの動揺した素振りを垣間見た。強大な力に酔いしれ自惚れていたプライドが、確実に揺らいだ。
「どぉだ？　一撃ＫＯの思惑が外れた気分はよぉ」
ご自慢の電撃をその身に受けてもなお平然と喋りかける。一度マウントを取ったら最後、徹底的に畳み掛ける。
こちとらスタンガン対策なんざ繁華街にいた頃からとっくに実施してんのだ。仕掛けは何てことない。服の内側に工作用のゴム板を仕込んでおく。雑誌と同様、万が一に備えたセーフティーネットだ。
そんなカラクリを爬虫類が知るハズもなし。
往生際悪く、一旦飛び退いて初撃を超える激しさで帯電を始めた。チャージ完了と同時に獲物の懐を目掛けて全身全霊で突っ込む。
「――ッ！」
ありったけの放電を繰り返す。が、絶縁体の壁が感電を尽く妨げた。
その後もしつこく電撃が弾ける。
それはまるでトカゲの自己主張のようであった。こんなハズがないのだと喚き散らして、自分こそが強者なのだと言い張って。されど、雷エネルギーも無尽蔵ではなかったらしく徐々に威力が衰える。
もう何度目かも数え切れなくなった時、とうとう彼奴の動きが鈍った。疲弊したのは明白で、蛍光灯レベルの灯しか残されておらず。
そして、ここが勝負どころであった。
「華扇！」
「はい！　行って！」

仙人サマの合図とともに彼女の肩に留まっていた小さな影が飛び出す。その正体は、雷獣。

仕上げはこの電気ネズミの働きにかかっている。せめて日頃のポップコーン分のやってみせろや。

華扇のペットがスタミナ切れを起こす野生体の背中に飛び乗り、最後の悪あがきを真上から封じ込む。次の瞬間、雷獣もまた己が静電気を弾けさせた。

弱り切った電気に気力の滾った新たな電撃が喰らいつく。

そんじょそこらの静電気じゃない。アレが放つ電気には毒がある。かつてオレ自身が身を以て思い知らされた。

目には目を歯には歯を。電気には電気を。

プラズマ球だったモノを覆いつくす静電気が鮮烈に迸る。周辺に飛び散る雨粒にまで電撃が伝播しているのか、眩い閃光が広範囲に及ぶ。

やがて、強烈な光が収束していく。

お勤めを果たした電気ネズミがプラズマ球だったものから離れた。あらゆるフラッシュが消え去り、とうとう雷トカゲの全貌が露わになる。そこには確かにイグアナっぽい爬虫類が力なく突っ伏しておった。

「マジでトカゲじゃねーか」

決して疑っていたワケじゃないが、そんな言葉が口から出た。

その爬虫類は反撃に移る気力も残っておらず、再び暴走する兆しもなかった。たった一度だけ線香花火みてぇな弱弱しい火花を散らして、それで終わりだった。

キィ……と気怠げな鳴き声を一つして、やってらんねぇと言いたげにうつ伏せに寝そべる。だらけたザマからはヤル気の欠片も伝わってこない。こうなったら捕獲するのも容易かろう。虫取り網も必要ない。

「フッ、ざっとこんなモンだろ」

クールかつニヒルに決めゼリフを口にして、濡れ下がった前髪を大雑把に掻き上げる。ったく、オレのトレードマークの一つオールバッ

クが台無しじゃねぇか。
　殺処分になる原因だったのは力そのものじゃなくて、暴走した精神状態の方にあった。ならば、その好戦的なハイテンションをダウナーのどん底まで叩き落してやるまで。
　ま、途中から電気ネズミと雷トカゲのガチンコ対決になっちまっていたけど。
　あとはコイツを妖怪の山にでも放っておけば終い。クッソヤル気のねぇ変な爬虫類が時々目撃されることであろう。あるいはヤル気がなさ過ぎて住処からも滅多に出てこない希少種となるか。
　どっちにしろ、暴走するぐらい元気が有り余っていたヤツだし衰弱死することもねーだろうよ。それこそ、このトカゲがトウモロコシを芯ごとバリバリ食う気力が湧いてこない限りは。
「綿間部！」
「おう、どーよオレの奇策――」
「やったぁ！」
「うおおっ!?」
　華扇が駆け寄ってきて、ノンストップでタックルをかます。
　不意打ちだったのと、雷トカゲの体当たりとは質量に差があり過ぎて、あえなく後ろに引っ繰り返ってしまった。またしても運悪く背後には水溜まり。噴水ばりに跳ね返った泥水が顔にまで降りかかった。
「ちょおまッ何すんだコラ!?」
「あははっ、やりましたね！　こんな方法思いつきもしませんでした！」
　全身黒色から茶色に変色したまま声を荒げる。
　綺麗な顔も柔らかな桃色の髪も茶色い泥水で汚しながら、そんなコトもお構いなしに満面の笑みで両腕をオレの後ろ首に回す。殺処分しなくて済んだのがよっぽど嬉しい様子。そらそうか。動物好きなんだし。
　はしゃぐ彼女の笑顔はあどけなく、仙人なんつー仰々しさとはかけ離れた年相応の乙女でしかなかった。喜びに溢れたその表情に、知らず知らずのうちに毒気も抜かれる。

「……ったく」

終わり良ければ総て良し。となるハズが、よもやオチが泥水を頭から被るとかカッコつかねぇぜ。ついでにしばらくオレの上からどいてもらえそうもなかった。柔らかい肢体がむぎゅっと密着して落ち着かない。相変わらずこの女は……

華扇にしがみつかれたまま、やれやれと達観したように天空を見上げる。雷トカゲが大人しくなったおかげか雷雲もなくなり、あれほど続いた土砂降りも止んでいた。

いつしか夜空にはポツポツと星の光が点き始め、数日ぶりに平穏が戻りつつあった。

その後。

二人仲良く泥塗れになったオレたちがどうなったか――

『……』

なぜか華扇の屋敷にある浴場で、一緒に風呂に入っていた。

いやいやいや待て待て待て。

どーしてこうなった……!?

つづく

第五十五話　「Ｐｅ：フロから始まる同棲生活」

事の発端はアレだ。
時は作戦成功したところまで遡る。
「あはは……汚れちゃいましたね」
「ったく、誰のせいだ誰の」
仏頂面でツッコミを入れてやれば、桃色ミディアムヘアの仙人サマが頬を掻きながら笑って誤魔化す。なにわろてんねんと言いたい。
だーもう、ばっちぃなオイ。感電を避けるために折り畳み傘も置いてきたのもあって、ただでさえずぶ濡れな身の上だってぇのに。そのうえトドメに水溜まりに全身ダイブとか。泣けるぜ。
とはいえ、いつまでもネチネチと口撃するのも男として器が小せぇというもの。しゃーねぇなぁと零しつつ立ち上がり、ついでに華扇の腕も掴んで引っ張り上げる。水も滴るイイ女、と言えれば世話ねぇが、水は水でも泥水じゃどうしようもない。
ま、オレも似たようなモンだけど。やれやれってか。
「オメーも今日のところはさっさと帰って風呂にでも入れよ」
「綿間部は？」
「オレも帰る。どーせ客もおらんだろ」
ほんの少し前まで容赦ない雷鳴轟く大雨だった。まさか晴れた途端に人々が外を出歩き始めるハズもあるまい。だったら今宵は店仕舞い。どのみち依頼人探しても無駄足であろう。
つーか、まずこの悲惨な恰好をどうにかしたい。正直タオルで拭くだけじゃ物足りない。銭湯にでも行きたいがどうせ開いてないだろうよ。
しゃーねぇ。今夜は我慢して井戸水で頭と顔の泥だけでも落としてしまおう。
「じゃーな」
「待って」
短く告げて踵を返したオレを華扇が引き留めた。以前にもこんな展開なかったか？

「このままでは風邪をひいてしまいます。ちゃんとお風呂に入って温まらないといけません」
「フッ、このぐらいで風邪ひいてくたばるほどヤワじゃねぇよ。第一、銭湯もやってねぇだろ」
「む、そういう杜撰な考えはどうかと思います。それとご心配なく。私の屋敷に来てください。うちでお風呂に入ってもらいますから」
「マジか」
「マジです。それに不衛生な人は嫌われますよ」
　一瞬だけ呆気にとられたものの、コイツの家なら修行やら奇襲ドッキリやらで何度か足を運んでいる。今さら行くのを躊躇うような間柄でもなし。
　そもそも風呂にありつけるならオレにとっても何ら不都合はない。いくら夏場だろうと、真夜中に冷たい井戸水を頭から被るのと、程好い湯加減を浴びるのとじゃ百倍違うってぇモンだ。
「んじゃ、そーさせてもらうか」
「フフ、素直でよろしい」
「……泥塗れでカッコつけてもなぁ」
「なぁ!?」
　腕組みしてドヤ顔の仙人サマに嘆息気味にボヤくと、それこそ雷に打たれたように目と口を大きく開いて固まっちまった。ダメ押しにフッと鼻で笑ってやる。すると、桃色の女は風船みてぇな膨れっ面になってオレに詰め寄った。
「綿間部ッ！」
「へーへー、すんませんねぇ」
「もぉ！　そこに直りなさぁい！」
「静かにしろって。近所迷惑だろ」
　肩をすくめて飄々と宥めたが火に油だった模様。ますます怒ってお約束の説教が飛んでくる。説教は大鷲に運ばれている間も続いたのであった。
　あーあ、結局こうなんのかよ。チクショウめ。

まだ若干プリプリしとる仙人サマに引き連れられて、この女のハウスまでやってきた。
「さぁ、どうぞ。私は部屋にいますから」
「待てや。フツーは家主からだろうが」
さも当たり前みてぇなツラして先を譲るお人よしに待ったをかけた。言わずもがなこの女もまた泥水で髪や体のあちこちを茶色く染めている。
「お前が先に入れ」
「お気になさらずに。こうなったのも私の所為ですし……」
「いいから大人しく言うこと聞いとけって。言っておくが、ずぶ濡れの女をほったらかしてテメェだけあったかい風呂に入ってられるほど神経図太くねぇぞオレはよぉ」
「むっ、それを言うなら汚れたままの客人を差し置いて入浴する方も大概でしょう」
「っかー、この頑固者め」
「どっちが！　綿間部には言われたくありませんっ」
「ぐぬぬ」
「むむむ」
何とも不毛な争い。一番風呂の譲り合いならぬ押し付け合いが勃発した。
どちらかが潔く折れればそれで済むハナシだというのに、如何せん一仕事終えて高揚してんのか意固地になる。そのせいで両者とも引こうとしなかった。下らないことでムキになってんのとか言ってはならない。
オレ自身我ながらバカなマネしてんなと思わなくもない。が、そうかと言って濡れ鼠な華扇をそのままにもできねぇ。男の沽券とか甲斐性とか、そーゆーのが疑われる。夜を生きる男、ハードボイルドな何でも屋としてそれだけは許されない。
押し問答の末、先に臨界点を迎えたのは仙人サマであった。
「もぉ！　わかりました！」
しかし、勝ったと思ったのも束の間。そこからが予想外。

「それならこうしましょう！」
「ちょオイ!?」
なぜか桃色ミディアムヘアの女はオレの手首をガッチリと握って、勇ましい足取りで歩き出した。脱衣場へ向かって。当然、オレは困惑するしかない。
きっと華扇もテンパっていたのであろう。お目目グルグル状態で、もはや勢い以外の何物でもない折衷案が叩きつけられる。
「このまま埒が明かないくらいなら、いっそのこと二人一緒に入ってしまえば何も問題ありませんよね!?」
「いやその理屈はおかしい！　問題しかねーぞ!?」
久し振りに本気でおったまげた。これほどまでに度肝を抜かれたのは八雲紫に幻想郷に拉致されたあの日以来だろう。って、マジで一緒に入る気か……!?
しかもこの女、こーゆー時に限って相変わらず謎に力強い。あれよあれよという間にオレは連行されていく。

で。
気付いたら華扇と二人で既に浴室の中にいた。
わけがわからないよ、とどこぞのヘンテコな白いケモノが脳内で呆気にとられる。オレも同じ気持ちだ、ヤスベェ。
「あっあまりこっちを見ないでくださいッ……！」
「みみみ見とらんわ！」
頬を赤らめた華扇に言われて思わず顔を背ける。ナンダコレ。
入り口近くで男女二人が横並びに立つ。オレは腰に手拭いを巻き付けて、華扇も胴体をすっぽりと隠す大きめのタオルで包んでいる。言い換えれば、オレもコイツもそれしか身に着けてない。
ゴクリ、と生唾を飲む。大丈夫だ、やましいこともいかがわしいこともしていないのだから堂々としていればいい（※現在進行形で気になる異性と混浴しています）
手桶でお湯を掬い、妙な気を起こす前に泥諸共に何もかも洗い流す。それを見た華扇もハッとして桶を手に取り自らにお湯を浴びせ

た。

何度も頭から温水を被って、体に付いた泥をあらかた落とし終える。

「す、座ってください。背中流しますから」

「あ？　いや別にそこまでせんでも」

「いいからぁ！」

「お、おぉ」

半ば押し切られる形で浴室用椅子に腰かける。すぐ後ろに華扇が膝立ちする気配を感じ取った。手桶に張られたお湯に垢すりを浸す水音も聞こえる。些細な物音にさえ、否が応でも想像力を掻き立てられる。

やがて石鹸が泡立てられる音に変わり、桃色の仙人サマが緊張に声を震わせた。

「すー……はー……っ、いきますね」

「おぉっおう、いつでもこいや」

来いやじゃねーよオレ。止めろよ。

直後、背中に垢すりが当てられてゆっくりと上下に動き始めた。ぎこちない手つきで、しゅり、しゅり、と控えめに擦れる。

「く――」

ぶっちゃけ白状しちまうと、かなり気持ち良かった。いや、いかがわしい意味合いじゃなく。床屋のシャンプーとかそんな感じで。しつこいようだが他意はない。断じて。って、オレは誰に言い訳してんだ。

ほどなくして背中が終わり、次は肩へ。そのままの体勢では洗い難かったのか、寄りかかるように華扇の身体が近付く。同時に、しっとり湿った息吹と悩まし気な声色が耳たぶをくすぐる。

「ぁ……はぁっ……ん……」

ただひたすらに堪える。声すら出すまいと不動を貫く。顔が熱い。風呂場の湯気にでも当てられたか。まるでサウナだ。

背中を流すと言っておきながら女の細腕が前にも回される。抱きすくめるように左右の手がオレの胸板に触れた。その拍子に、洗って

もらったばかりの背中にむにゅりとデカい二つの塊が押し付けられ、柔らかく潰れて形を変えた。

いかん、鼻の奥まで熱くなってきた。一体どうなってんだ。コレは夢か。幻覚でも見てんのか。

そんな中、ふいに包帯の巻かれた左手のしなやかな指先が胸の中心部をなぞっていった。

「くあっ!?」

「あっ、ごめんなさい。くすぐったかった?」

華扇が気にして声をかけてくるがまともに返せなかった。平気だ、と独り言染みた小声を絞り出す。

ヤバイ。アタマがクラクラしやがる。のぼせて気絶するか意識がどうにかなりそうだ。まだ湯船にも使ってないってぇのによ。

その間にも華扇によるボディソープご奉仕が続く。

首筋から鎖骨の辺りを泡のついた手のひらで優しく撫で、腹筋の上を垢すりが円を描くように動き回る。洗う部位が上から下へと徐々に移動していく。へそ回りを経由して、ついにはその下まで及ぼうとした。ってオイイ!?

「ちょおまバカマジで待ったそこはいらん!!」

「ひひゃい!?」

まさに寸前、ギリギリのところで理性が間に合い、慌てて仙人サマの手を遮った。

危なかった、冗談抜きで危なかった。危うく大事故を招くところだった。というかナニしようとしてんだコイツはよぉ!?

どうにかこうにか仕上げにお湯を掛け流され、全身に纏わっていた泡が綺麗サッパリなくなる。

「っと……じゃ交代するか?」

「へっ変態! お、お、女の子の身体を洗いたがるなんて何を考えているんですかッ!?」

思いっきり罵倒された。振り返ってはないが顔を真っ赤にしているであろうことは想像に容易い。どうやら仙人サマも余裕がなかったご様子。

つーか、お前こそ今の今まで男のカラダ自分の手で洗ったばっかりやんけ。人のこと言えんだろ。

「とにかく！　綿間部はそのままでいてください。いいですか、絶対に振り返らないでくださいね？」

「わぁーってるっつの」

下手すりゃ何かの振りに思われがちだがこいつはガチのやつだ。ここで逆らうほど命知らずじゃねぇわ。

背後からぱさりとタオルを解く衣擦れの音が耳元をかすめた。確かにあのままだと満足に体を洗えない。至極当然の流れといえる。

つまりオレの真後ろでは、茨木華扇の一糸纏わぬあられもない姿があるということに他なく。

「――――」

止めろ。それ以上考えるな。この状況下で生理現象が起きちまったら言い逃れできない。隠す術もなく何もかも終わる。

というかお前も目隠しすらしてねぇ野郎の傍で体洗い始めんなよ！　それもう無防備ってぇレベルじゃねぇから！

等々、放送コードに引っ掛かるか否かの瀬戸際を幾度も往復したりして、

そして、ようやっと現在に至る。

『……』

二人で背中合わせになって湯船に浸かっていた。

さすが屋敷の浴場だけある。大浴場とまではいかないにせよ十分な広さを誇っている。少なくとも正反対の方向に目線を向けた男女が足を伸ばせるくらいには。

もっとも、それでリラックスできるかどうかは別問題である。

「……ぁ」

「……っ」

薄ら湯気が漂う中、相手の息遣いばかりが気になり、耳に残る。天井に留まっていた水滴が落ちて湯面にささやかな波紋を生んだ。それも数秒とせずに消える。

「なぁ」
「あの」
あまりにもベタな展開に思わず頭を抱えたくなった。もどかしい空気を変えるべく口を開けば、物の見事にタイミングが被ってしまう。
ただの偶然に過ぎない出来事だというのに得体の知れない気恥ずかしさが込み上げる。あぁくそ、らしくない。
オレは気持ちの揺らぎを隠すように雑っぽい口調で言葉を紡いだ。
「何や」
「えと、ありがとうございました」
さっきみたいな譲り合いの堂々巡りになる前に、ぶっきらぼうに続きを促す。返ってきたのはお礼の言葉だった。
「急にどうした？」
「綿間部のおかげで一つの命を奪わずに済みましたから。そのことに対しての『ありがとう』です」
「そらどーいたしまして。ま、作戦が上手くいったのは幸いだったわな」
「どうしてあそこまでしてくれたの？」
「あ？　どうしてって言われてもな……」
仙人サマに問われて自分でも理由を考えてみる。
やられた手前もあってオレ自身の問題でもあったから。何も殺す必要はないと思ったちっぽけな善意。力を制御できずに終わったトカゲへの同情もなくもない。それらしいモンはいくつか挙げられる。
その中で、一番を占めた理由は。多分、そーゆーコトなのだろう。
華扇が悲しむ可能性があったから。あの時、真っ先に思い浮かんだのはトカゲの亡骸を前にして涙を零す仙人サマの憐れな姿だった。
どうにもオレはそれが見たくなかったらしい。
「……フッ」
つっても、一つ一つをバカ正直に話すのもメンドクセー。あと何となく小恥ずかしい。だからオレはテキトーに一纏めにして答えた。
「ま、ワケとしちゃ色々だわな」

「色々、ですか」
「そんなモンだろ」
詳しく教えてくれなかったのが不服だったのか、華扇がちょっぴりつまんなそうにおうむ返しに呟いた。
おもむろに細い腕が下腹部に回され、オレの背中に彼女の体が密着した。湯とタオル越しでもその柔らかい感触は十分に発揮される。
「お、おい。いきなりどうした」
「……私にも色々あるんです」
「イロイロって、お前……」
つい今しがた自分が使った言葉をそっくりそのまま返されてしまい、上手く反論できなかった。されるがままに、甘んじて受け入れる。
首筋にも汗が滴る。体中が火照る。赤い熱の出所は、寄り重なる彼女の体温なのか、お湯の温度なのか、それともオレ自身によるものなのか。ひょっとしたら全部かもしれない。
「……ったく」
ホントにコイツは。わざとか、狙ってやってんのか。まったく、こちとら我慢の限界だってぇのによ。
「先に上がりますね」
あれから長時間風呂にいた。もはや体も温まるどころかのぼせる一歩手前までいった頃、華扇はそう告げて一足先に湯船から立ち上がった。
できることならオレもすぐにでも上がりたい。が、最低でもこの女が着替え終わって出ていくまでは待たなくてはなるまい。
しかし、そこで一つとんでもなく重要なことに気付いた。つまるところ、オレ着替え持ってきてなくね？と。
これはマズイ。このままでは風呂から出ても着るものがなく脱衣所で詰んでしまう。
「オイ華扇。ちょい待っ――」
その事実に行き当たったオレは仙人サマに着替えになる服を持ってきてもらおうと、咄嗟に声をかけた。

つい後ろを振り返りながら。

「え――」

急に名前を呼ばれた華扇が立ち止まる。彼女は脱衣所への入り口にちょうど手をかけたところであった。タオルを腕に引っ掛けた状態で。

おそらく濡れた体を拭くために巻き付けていたタオルを一旦解いて絞ったのだろう。そらそうだわ。身に着けたままお湯に入ったんだから。そうでもしなけりゃ使い物にならん。

問題なのは、タオルしか付けていなかった女がそれを外したらどうなるか。

オレのいる位置からは後ろ向きだった茨木華扇。その裸体が惜しげもなく晒される。

肩回りの繊細そうな曲線の僅か下に、湯上りでも色白を損なわない肌に肩甲骨のラインが薄っすらと浮かぶ。さらに背筋の窪みに汗か風呂湯の雫がつぅと一滴伝う。縦に通るそれに沿うようにして。そこには何とも言えない美しさがあった。

「ぁ……ぁ……」

「――」

そういや入浴のときもシニョンは外さなかった。それに包帯も解かなかったと遅れながら思い至る。されど、そんなのは些細なことだとばかりに別のものに目を奪われた。

スタイル抜群な腰のくびれを経て、それよりもっと下に。弾力のある張りとツヤを併せ持つ、形の良い丸みを帯びた――

「ひ……ひゃぁふぁあああああああああッ!?」

「ふべらぁッ!?」

次の瞬間、仙人サマの大悲鳴とコンマゼロ秒で眼前に差し迫った風呂桶の底を喰らって、オレは湯船の底に沈んだ。

つづく

第五十六話　「仙人ちゃんは語りたい！」

「ちょっと、聞いてんの？」
「……え？」
　強めの口調が耳元で放たれて、茨木華扇は上の空になっていた意識を現実に戻した。気を抜いてしまっていたらしい。やってしまった、と密かに反省する。
　深紅に染まる大きなリボンに紅白の巫女装束を纏った少女の鋭い眼差しが華扇を貫く。しばし目が合うと、博麗霊夢が面倒くさそうに溜息を吐いた。
「どうせ聞いてなかったんでしょ。仙人ともあろう者が人の話しを聞いてないなんてどうなのかしら」
「あぁ、ごめんなさい……少し考え事をしていました」
「そうだぜ霊夢。真面目な仙人様は考えなきゃいけないことが山積みなんだ」
　援護射撃のつもりなのか、白黒衣装の普通の魔法使い霧雨魔理沙が茶化すように割って入る。遠回しに小馬鹿にした風な物言いに、負けじと霊夢がむっと顔をしかめた。
「何よ、私が不真面目だって言いたいわけ？」
「真面目な巫女なら事あるごとに怠けようとしたり、姑息な金儲けを企んだりしないだろうな。あと賽銭集ったりもしないぜ」
「こら二人とも。こんな時によしなさい」
　口喧嘩から弾幕勝負に発展しそうな年頃の娘たちをやんわりと止める。もっとも、彼女たちに慎ましさを求めるのは土台難しいことである。喧嘩するほど仲が良いと言えば聞こえは良いか。
　幸いにもというべきか、良くも悪くも性格が飽きっぽい霊夢はそれ以上のことはしなかった。億劫そうにフンと鼻を鳴らす。ついでに話の矛先を華扇に戻した。あんたがぼんやりしてたんじゃない、と。
「勘弁してよね。まさかもう酔ったとか言わないでよ？」
「おいおいそれこそまさかだぜ。こいつの酒の強さ知ってるだろう？　鬼と飲み比べできるくらいだぜ」

「あはは、まぁできなくもありませんが……」
鬼、という単語にギクッと冷や汗を流した。どうにかバレないように愛想笑いでやり過ごす。
賽銭箱に続く石段に腰を下ろしたまま、愛用の百薬升を手に取って酒で唇を濡らす。霊夢と魔理沙も湯飲みやコップに日本酒を注ぐ。似たような光景があちこちで見られる。
今宵、博麗神社では宴会が催されていた。
「そういえばあの人は一緒じゃなかったの？　ほら、えっと……黒鍋？」
「違う違う、渡辺だぜ」
「綿間部です」
二人が揃って彼の名前を間違えてくれたのでキッチリ訂正しておく。そんなに覚えにくい名前だったかしら。ちょっぴり呆れた。
わざわざ本人もあだ名を優先して名乗るくらいだから、案外本当に紛らわしいのかもしれない。
「彼はいませんよ。そもそも、今日は人里に立ち寄っていません」
「何だ、そうなの」
華扇自ら告げた通り、今日はあの男に会えていない。今頃は真っ当に仕事に励んでいるはず。そう思いたいが、実のところどうなっているやら。
悶々とする気持ちの靄を胸にしつつも、目の前に広がる光景へと意識を切り替える。境内では数多の人妖が入り混じって酒と料理を楽しむ。
「んん～～ッ！　お、おいしいですぅ！　いつも食べている雑草とは格が違って……こ、これはもしや奇跡の雑草……!?」
「ふーん。いかにも庶民臭い味付けだけど、まぁたまには悪くないかもね」
青髪の貧乏神が感極まった形相で山菜の天ぷらを頬張っていた。隣には高飛車な天人の姿もある。いつも通り一言余計なのだが楽しんでいる様子だった。
仙人の視線の行き先を追いかけた霊夢が金持ちと貧乏の凸凹コン

ビを見つけて「ああ」と納得した顔になる。
「あんたが人里に行きそびれたのってアレが原因だったわね。こっちとしては大助かりだったんだけど」
「確かに。毒草みたいなマズイ雑草がツマミになるのはもう勘弁だぜ」
「そこは同意します」
一応、酒や料理は各々で持ち寄るのが暗黙のルールとなっている（気にしない連中もいるけど）
紅魔館ならメイド長が拵えた燻製肉が振る舞われ、魔理沙も魔法の森に自生するキノコを収穫してくるのがお決まり。華扇も屋敷の周辺に生えていたタケノコを採ってきた。永遠亭が準備した食材と被ってしまったものの問題ない。調理法は多岐にわたってしかも美味しいのだから、いくらあっても困ることはないのだ。
依神紫苑も例にも漏れず張り切っていた。ただ、彼女が持つ特性によってかつて難航を極めた前科もあった。
（性根は良い子なんだけど貧乏神というか、貧乏神なんだけど性根は良い子というか……）
依神紫苑その人は良い子だ。例え極限までお腹が空いていても畑泥棒など考え付きもしないくらいには。今回だって、皆にもお腹いっぱい食べてもらいたいという善意から来ているから、あまり無下にするのも可哀そう。
だからといって、そこかしこに生えていた本人すらよくわかっていない野草を籠一杯に摘むとなれば話は別である。
道端で雑草採取に勤しむ彼女を目撃してしまった華扇は迷うことなく止めた。それはもう即断であった。
このままでは宴会が苦みと渋みで満ちた修行にもならぬ苦行になると危惧。そこで貧乏神を引き連れて山菜について教示しながら食糧調達に同行することに。
結局、思いのほか時間がかかってしまい、納得できるだけの量が集まった頃には夜の帳が下り始めていた。そのまま博麗神社に直行せざるを得なかったのは、そういう訳だ。

「で、その人とはどうなのよ？」
「どう、とは？」
「どういう関係なのかってことよ。よく一緒にいるって聞いてるけど？」
「目に余る行動を起こしていないか監視するためです。ちょっとでも目を離したら何をしでかすかわかったものじゃありませんから」
霊夢の質問を毅然とした態度で返す。しかし今夜は無礼講、そうは問屋が卸さない。それが飲み会。現代社会でも幻想郷でもその辺は変わらなかった。
勘の鋭いことで有名な博麗の巫女が半目になって追及してくる。
「本当にそれだけ？　どうにも怪しいわね。別に隠すことないじゃないの。本心を言っちゃいなさいよ」
「ほほう、それは気になるぜ。ひょっとするとひょっとしちゃうのか？」
「あなたたち……」
博麗の巫女だけではなく普通の魔法使いも乗り気になって参入する。年頃の娘たちの好奇心レーダーに変なところで引っかかってしまった。気が付けば両者とも仲良く瞳を爛々と輝かせて迫ってきている。
「……コホン」
さて、どうしたものか。思考を凝らす華扇に新たな人影が近付く。
「皆で何の話しをしているのかしら？」
天使の歌声のような可愛らしい声が舞い降りた。
肩に届かないくらいの金髪のショートヘアと赤いカチューシャが目を惹く。精巧な人形のように整った容姿をしており、青い瞳はまるでガラス玉のように透き通っていた。鮮やかな青色を基調にスカートに仕上げた洋服もお洒落でよく似合う。
件の少女が可憐に微笑む。彼女の肩には女の子を模した小さな人形も連れ添っていた。
「私もご一緒していい？」
七色の人形遣い、アリス・マーガトロイド。

人里でも人形劇を披露することもあって評判が良く、穏やかな常識人だと認識している。おまけに同性の目をもってしても、とても綺麗で可愛い魅力的な女の子でもある。

霊夢がアリスに労いの言葉をかける。

「お疲れ。そっちはもういいの？」

「ええ。あとは早苗と鈴仙がやってくれるって言うからお願いしてきちゃった」

調理済みの品を持参する者は意外に少なく、大多数が生食材のまま持ってきたりする。なので誰かが料理を担当するしかない。具体的には日頃から家事担当する従者たちとか。

「ごめんなさい、アリスさん。私も手伝うべきだったのですが……」

「いいのいいの、気にしないで。こっちに来てすぐにこの二人に捕まったんだもの。それで、どんな話してたの？」

パタパタと手を振りながら、アリスも石段に座った。直後、彼女の親友二人が人形遣いに詰め寄って、よくぞ聞いてくれたとばかりに捲し立てる。

「それが聞いてよアリス」

「この仙人に最近気になっている男がいるんだぜ！」

「あ、魔理沙！　私が言おうとしてたのに！」

「ちょっと二人して何を言い出すのですか!?」

知らぬ間に脚色されて思わず茨華仙も驚嘆の声を張り上げる。

（いやいや、気にならないと言えばそれも違うのだけれどかといって深い意味はないというか……とにかく違うんですッ！）

騒ぎ立てる紅白巫女と白黒魔法使いの早口に、はじめは目を瞬かせながら聞いていたアリスも話の概要が掴めたようで、興味深そうに仙人を見やった。

「へぇ、そうなの？　もしかして人里の人かしら」

アリスがそう推理すると、魔理沙がチッチッと人差し指を振りながら勿体つけたモーションを交えて遮った。もう酔っているのかいつにも増してテンションが高い。むしろ霊夢がウザそうにしかめっ面になっているぐらいだ。

首をかしげる都会派魔法使いに、弾幕はパワーな元気娘がどんどん畳み掛ける。
「それがなぁ、ちょっと前に幻想入りしてきた外来人の若い男なんだぜ」
「外来人……」
「ああっと！　心配しなくていいぜ、優斗のことじゃないから大丈夫大丈夫」
「ふぇえ!?　ど、どうして優斗が出てくるのよ！」
白黒魔法使いが最後に付け加えた一言に人形遣いがカァアッと顔を紅潮させた。さっきまで落ち着いた物腰だったのに、今やわかりやすいくらいにあたふたしている。そんなアリスに対して魔理沙はニンマリと笑ってサムズアップした。やっぱり酔っている。
一方で聞き慣れない名前が出てきたので、こそっと霊夢に耳打ちする。
「優斗というのは？」
「ほら、あそこにいるでしょ。あの男」
博麗の巫女が境内のある方向を指差す。つられて華扇もそちらに視線を流す。
確かにそこには一人の青年がいた。茶髪なツンツン頭が特徴的で、年齢は何でも屋をやっている知り合いの男性と同じくらい。
その男は妖精たちや半人半霊の庭師を前に語り部を担っている。どうやら怪談話を聞かせているようだ。よくよく耳を澄ませば話の中身も聞こえてくる。
「バナナフィッシュっていう魚に出会うと……死にたくなるんＤＡ」
『ヒィイイイイーーッ!?』
はたしてあれがホラー話なのかどうか山の仙人の知識をもってしてもわからなかった。
しかも一番怖がっているのが、よりにもよって冥界に住む半人半霊の少女なのはいかがなものか。色々と心配になってくる。
「なるほど、彼が……」

どこかおちゃらけている、ともすればお調子者の印象すらあった。けれど、それは見方を変えれば親しみやすさとも受け取れる。明るさと優しそうな雰囲気が伝わってくるし、きっと誠実な人なのだろう。心優しい人形遣いとよくお似合いだと思う。

肝心のアリスはほろ酔い魔理沙からいいように絡まれて恥ずかしがっているけれど。

「そ、それで華扇さんが気になっているのってどんな人なの？」

「あちらの男性とは正反対ですよ。口調は粗雑で態度もぶっきらぼうでいい加減なところも多くて、おまけに目つきも悪い。あまつさえ夜型などと自称しては不規則な生活ばかり。そのうえエッチで破廉恥でいやらしくてスケベで」

「こ、個性的な人なのね」

次から次へと出てくるマイナス情報にさすがのアリスも困り顔を浮かべる。霊夢と魔理沙も「うわぁ……」とやや引き気味だ。このままではあの男の評判はガタ落ち待ったなし。

「ですが――」

でも、それだけじゃなくて。

出会ってからまだそんなに長く経っていないけれど、一緒に紡いだ思い出は確かにある。共に過ごした日々が、あの人の人となりを教えてくれた。

胸に灯る温かな気持ちに口元を綻ばせて、桃色の仙人が言葉を続ける。

「一度引き受けた依頼は何が何でもこなそうとしますし、人里の住民からは信用されているみたいです。あと、あんな見てくれなのに不思議と子どもに懐かれたりするんですよ。それに普段は雑っぽいくせに、さり気なく気にかけてくれたりもするんです。相変わらずぶっきらぼうに」

ここまで語っておいて、自分でも照れ臭くなってしまう。頬をほんのり染めてはにかみながら、おどけるようにして締めくくった。

「すみません、私ばかり喋ってしまって。しかもこんな内容つまらないでしょう」

「ううん、そんなことないわ。良いところも悪いところも含めてよく見てるんだなぁってわかったもの」
静かに耳を傾けていた少女は柔らかな声音でそう答えた。最後に、小さな問いかけを一つ投げる。
「華扇さん、その人と一緒にいるのは心地良い？」
「……はい、そうですね」
「ふふ、その気持ち大切にしないとダメよ。とっても素敵なことなんだから。特に女の子にとっては……ね？」
青く澄んだ瞳のウインクはとても眩しかった。これが彼女の人徳なのだろう。だからこそ、良き縁が結ばれた。そう信じずにはいられなかった。
ゆえに、華扇も感謝の念を込めて笑みを返した。
「あなたも素敵な恋人と巡り合えたのですね」
「ふぇえええええ!?」
「あ、あら？」
ところがどういうわけか、華扇の言葉を受けたアリスは一瞬にして顔を真っ赤にさせて狼狽えてしまった。まるでとんでもないことを言われたかの如く。
当然、想定外の反応をされてさしもの華扇も戸惑う。何か間違ったのだろうかと思い悩む。
「え、あれ……？　あちらの彼とお付き合いされているのでは？」
「ち、ちがっ――」
「それがねぇ、まぁ聞きなさいよ華扇」
「はい……？」
待ってましたと言わんばかりに博麗霊夢が身を乗り出す。
悪戯好きな猫みたいなニヤニヤ笑いで博麗の巫女が七色の人形遣いの肩を抱き寄せる。された方は動揺したまま身動きが取れず、それこそ人形になってしまったかのようであった。
「あんだけ色々あったのにまだ付き合ってないのよこの子ったら」
「れ、霊夢!?」
カミングアウトに華扇が驚くよりも先にアリスが大変になってい

た。目を見開いて大慌てしており、見るからに感情が追い付いていない。しかしそれだけじゃ終わらないのが宴会である。

今度は霧雨魔理沙がアリスの艶やかな金髪を撫で始める。いかにも訳知り顔でウンウンと頷きつつ霊夢と連携する。

「ホントになぁ。一緒に暮らしてて、しかもあいつは『外』の世界に帰るのを蹴って幻想郷に残ることにしたんだぜ。さてさて何の――いや誰のためかなぁ？」

「ねー」

「～～～～ッ!?」

親友二人に清々しいほどイイ笑顔で思いっきり弄り回されて、ついには人形遣いが耳まで紅潮させて湯気を立ち上らせ俯いてしまう。揶揄う二人はそれを生暖かい眼差しで見守った。絶対に楽しんでいる。

さらに――

「俺の名前が呼ばれた気がしたんけど、呼んだべ？」

何とも絶妙なタイミングで話題の中心人物がのこのことやってくる。

茶髪ツンツン頭の外来人、優斗が何も知らない顔で華扇たちの輪に入ってきた。

見れば、いつの間にか怪談話の語り部が小野塚小町に入れ替わっている。死神ならではの本当にあった怖い話を前にして、はたして魂魄妖夢の精神が保つかどうかは定かではない。

「むむむ？」

ほどなくして石段のところまで来ると、例の彼もアリス・マーガトロイドの様子がおかしいことに気付いた。愛しい女の子が赤面したまま固まってしまっているのだ。そりゃ気付くに決まっている。

「なぁ、アリス何かあったん？」

「さぁねー」

「知らないぜー」

「どうして知らないんですかねぇ……」

ひとまず両脇にいたアリスの親友二人に尋ねる。しかし返答は取

り付く島もない。あからさまに原因を知っているのを隠そうとしない態度に、青年もげんなりした表情で肩を落とす。

それから優斗は華扇に目先を変えた。なぜか紳士めいた物腰で桃色ミディアムヘアの仙人に尋ねる。

「お嬢さん、何かご存じありませんか？」

「い、いえ……残念ながら」

「そうでっか。まぁ、自由の意味も眠れぬ訳もビルの隙間じゃわからないって言いますしおすし」

いまいちよくわからないことをのたまう優斗氏。外来人にも色々な人がいるみたいだ。華扇がよく知る男性とは似ても似つかない。

そんな中、優斗が来たことで無事？にアリス・マーガトロイドが復活を果たした。

「なな、何でもないの!!　気にしなくていいから！」

「ファッ!?　いやでもアリス、本当に大丈夫か？　何なら居間で休ませてもらった方が」

「い、いいから優斗はあっち行ってて！　フランと弾幕ごっこでもしてて！」

「いや俺弾幕撃てないんですけどぉ!?（死亡フラグ）立ちましたぁ！」

急いで石段から立ち上がって彼の後ろに回り込む。背中をぐいぐいと押しながら、金髪碧眼の少女は状況が飲み込めない外来人を強制退場させていく。人形遣いの肩にいた愛らしい人形も「シャンハーイ」と鳴きながら彼の頭をポカポカと叩いた。

「アダ!?　あ、アリスさんや？　上海が反抗期を迎えてるんですが」

「知らない！　優斗のバカ！」

「なんでさ!?」

そうこうしているうちに男女は宴の喧騒の中に混じっていった。彼らの後ろ姿を華扇は何とも言えない表情で見届けるしかなかった。

夜はまだまだ続く。

あれから他の人たちにも挨拶しておこうと、華扇も霊夢たちと別れて境内を歩き回っていた。

真夜中であろうと、灯篭やかがり火もあって仄かに明るい。さらには弾幕の光も加わって酒宴の賑やかさを後押しするかのようであった。

「うふふ、皆さん楽しそうで何より」

吸血鬼に不評だったタンポポ料理を貧乏神が「それならわたしが……」と引き継いで、お茶漬けを啜る勢いで掻っ込んでいたり。

死神の演題が限界を超えるレベルで怖かったのか、半人半霊の庭師が半泣きで震えながら主の亡霊姫に引っ付いていたり。

寺子屋の教師が竹林に住まう蓬莱人と朗らかに酒を飲み交わしていたり。

幻想郷最速を自負するカラス天狗が月の薬師に取材していたり。

夜空では三月精や氷精たちが煌びやかな光弾をばら撒いて歓声を上げていたり。

幻想郷ならではの宴模様が描かれていた。

「あ、仙人さん」

ふいにクジラ帽子を被った人懐っこい笑みを浮かべた少女が華扇を呼び止めた。

「美宵さんも来ていたのですね」

「うん。もちろん料理は持参してね。それにしても食材のまんま持ってくる人が多くてビックリしちゃった」

そう言いながらも美宵は楽しそうに声を弾ませる。彼女の手前には鯢呑亭の名物料理でもある煮物が大皿に山の如く盛られていた。さすが飲み屋の看板娘。こういうことに抜かりはない。

「仙人さんもどうぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

ずい、と大皿を差し出されたので具材をいくつか小皿に移し替えさせてもらった。早速一つ口に含む。味が沁み込んでいて、絶品に等しい美味しさが広がった。

舌鼓を打っていると、美宵が思い出したように言った。

「あっ、そうだ。ところでクロくんこっちに来てない？　沢山作ったからお裾分けしようと思ったんだけど、人里のどこにもいなくて」

「そうなのですか？　生憎、私も別の用事があったので今日は人里を訪れていないのですが……」
「あー……そうなんだ。てっきり仙人さんと一緒にいると思ったんだけどな」
「彼なら人里にはいませんわ。それどころか地上のどこにも」
「わわっ」
「紫……あなたはまたそうやって」
　不意打ちで会話に入ってきた女性の声に、美宵は動揺してしまっていたけれど華扇は平然と応じる。この登場の仕方にももう慣れた。
　妖怪の賢者にしてスキマを操る大妖怪、八雲紫。ただし今はそのスキマから上半身だけを出して鯢呑亭の煮物を箸で拾っている。
「せめてスキマから出てきたらどうなんですか？」
「いいじゃない。この方が楽なんですもの」
　波打つ長い金髪を垂らして泡沫の月を眺める妖艶な容貌は誠に美しい。この場に絵師がいれば描き写したくなるであろうほどに。が、スキマ経由で上半分しか体が現れていないせいで、折角の絵面も台無しになっていた。
　何より聞き逃せない部分があった。華扇が顔を引き締めてスキマ妖怪を真っ直ぐに射抜く。
「綿間部は地上にはいないと言いましたね？　……まさか」
「フフフ、さすが仙人様は察しがよろしいようで」
　どこか胡散臭く口元を緩めながら、八雲紫ははっきりと口にした。
「彼なら地獄に堕ちましたわ。つい今朝ほど」
　つづく

第五十七話　「修学旅行のお土産といえば木刀か変なプリントTシャツ」

「起きろォー!!」
「ぬぉア……!?」
その日はヤツの奇襲から始まった。
昭和の頑固オヤジが卓袱台を引っ繰り返す伝統芸で叩き起こされる。容赦なく転がされ、ニマニマと口の端を歪ませる二本角ばかりやたら目立つちんまい鬼娘と目が合った。
言うまでもなく。オレが寝てたことからお察しまだ朝っぱら。
「おーおー、やっと起きたね。おはようさん」
「んだよ……華扇じゃねぇのか」
「ほおぅ?」
「……はッ!?」
気が滅入ってうっかり出た一言に瞠目する。オレ今何言った。どーしてここで仙人サマの名前が出てくんだ。
飛び起きたわりにまだ寝惚けちまっているみてぇだ。だから違ぇよ。深い意味はない。その腹立つスマイル無料を今すぐ止めーや。
「ククク。いやはや青いねぇ」
「クソッタレぇ……」
恨みがましく呪詛を唱える。それさえもヤツにとっては都合のイイ玩具らしかった。ますます助長しやがる。チクショウめ。
いや待て。冷静になれ。ヤツのペースに呑まれるな。今はこの不法侵入&安眠妨害をどうにかするのが先決だろ。
伊吹萃香、大酒飲みなチビ鬼にメンチ切る眼光で睨み返す。胡坐に頬杖をつき不快感丸出しで質問をぶつけてやった。
「で？　人の睡眠時間をブッ壊してまで何の用だ」
「本当に朝から寝てんだね……まぁいいや、ちょいとお前に頼みがあるんだよ。何でも屋」
「要するに仕事の依頼ってぇことか？」

「そうそう。この手紙を届けてほしいのさ」
そう言いながら伊吹萃香が虚空に手をかざす。すると、四方八方から塵芥が一箇所に集って形を成した。忍法みてぇだなオイ。さすがに鬼サマは芸達者なこって。
やがて実体を伴った一つの書物がヤツの手元に納まる。ただし便箋ではなく筒状だった。
「って、それ手紙じゃなくて巻物だろうが」
「どっちだっていいじゃあないか。ともかく、これを地底にいる星熊勇儀って奴に渡しておくれよ」
「地底だぁ？　つーか自分で行った方が早ぇだろ。んな便利な異能使えんだからよ」
「今日は博麗神社で宴会があるから無理だね。酒と肴を集めるので忙しいんだよ私は。だけどお前は暇だろう？」
「うるへー。勝手に暇人にすんなや」
わかってないねぇ、とやれやれ顔で肩をすくめて息を吐かれた。オレじゃなければ間違いなくキレていた。というか朝から宴会の準備に走るとか三日三晩で例大祭でもやる気なんか。
この時点ではあまり乗り気はしなかった。ぶっちゃけメンドクセーってぇのが上回る。
ところが、事態は大きく転がることとなる。
「もちろんタダとは言わない。これをやろう」
二本角の鬼が腰にぶら下げていた巾着袋をオレに放って寄越す。足元に着地したそれはズシリと重量のある音を奏でた。ついでに結び目が解けて中身が覗ける。指先サイズの金ピカの眩い粒ぞろいがぎっしり詰まっていた。
「なん、だと……!?」
金塊。ゴールド。しかもこれだけの量となれば価値は計り知れない。寄せ集めれば金の延べ棒程度の大きさは優に超える。目を疑った。
「マジか……ホンモノ、だよな？」
「そりゃそうだよ。旧地獄で採れた金粒さ。運が良ければお前も見つ

けられるよ。これから行くんだから」
「……フッ」
面白ぇ。地獄で採れる黄金の粒ってか。なかなかそそられる響きじゃねーか。金銭欲に目が眩んだワケじゃねぇがすっかり目も覚めた。一足先に地獄を見ておくのも悪くない。
巾着袋を拾ってポケットに捻じ込み、伊吹の手から巻物も掠め取る。ニヒルに指をパチンと鳴らしてキメてやった。
「いいぜ。その依頼引き受けた」
「そうかそうか。そりゃ助かる」
ケタケタと声を転がす鬼娘。それこそ霧のような掴みどころのなさで真意を上手く隠された。が、相手がどうあれ依頼受諾を宣言したからにはやるしかあるまい。
ま、郵便配達一回きりで稼げるならそこそこ儲けモン――あ。
しかして、ここにきて肝心なことに気付いちまった。
「なぁオイ。地獄だか地底だか知らんけどよ、どうやって行きゃエエんだ？　もしかしてコレ交通費も込みってぇクチか」
そもそも交通手段でどうこうできるモンなのかも不確かときた。あの世に行くなら軽く見積もっても仮死状態か幽体離脱か。地底とやらが文字通りの場所ならワイヤーフックないし命綱ってところか。
そんな重大な懸念をチビ鬼は軽い調子で吹き飛ばした。予想外の策でもって。
「あー大丈夫。その辺は助っ人呼んだから」
「はい。その助っ人ですわ」
「ミス八雲」
「ごきげんよう」
ノーモーションで紛れ込む金髪美女あり。相も変わらぬ底知れない微笑で伊吹萃香の呼びかけに応じる。
って、ここまでお膳立てが整ってんならいっそこの女が直接届けてやった方が手っ取り早いのではなかろうか。
「それは野暮というものですわ。今回の件、あなたが地底に行くことにも意味があるのよ」

「さらっと心読むなや。どいつもこいつも読心術しやがってからに」
「まぁまぁ。じゃ紫、いっちょ頼んだよ」
「ええ。承りましょう」
「な――」
猛烈に嫌な予感がした。急いで待ったをかけようとしたが間に合わず。
次の瞬間、オレが座っていた場所を中心にスキマが開く。束の間の浮遊感。そして有無を言わせぬ落下感に襲われた。
「うおぉおおい!?」
かくして。
オレは幻想入りしたあの晩と同じく問答無用で亜空間に呑み込まれた。恨むぞコラ。

知らない天井どころかそもそも天井が遠過ぎて見えなかった件について。
日の光も届かぬ奈落の底。前後左右どこもかしこも岩肌に覆われた代わり映えしない場所。スキマはとうに閉じており残滓すらない。現場主義にもほどがあんぞ。
「んで――ここが地底の世界ってか」
またの名を旧地獄。つまりオレは死せずして堕ちたってぇワケだ。フッと自虐の笑みを浮かべる。
わざわざ旧と付ける理由は、リニューアルして現在機能している本命、言うなれば新しい方の地獄が別にあるから。要するに此処は跡地。かつては嫌われ者やならず者はたまた罪人といった日陰者どもが蔓延る無法地帯だったという。スラム街かよ。
見渡す限り石だの岩だのと堅そうなものばかりの殺風景な空間だ。どっかの炭鉱か洞窟の中と大差ない。頭上が伽藍洞な真っ暗闇の青天井でなければ。
はたしてこの地点が地下何百メートル下手すりゃ何千メートルにあたるのか皆目わからん始末。つーか帰りはどうすんだ。探せばエレベーターでもあんのか？

「やれやれ……しゃーねぇ」
とりあえず進むしかあるまい。スタート地点で立ち往生なんざ愚策の極み。迷わず行けよ。行けばわかるさ。アントニオ猪木らへんもそう言っていたハズ。

視線、誰かに見られている。
尾行されている気配も微かに嗅ぎ取れた。
無意識の内側に溶け込もうとしている。そんな奇怪な感覚に付きまとわれる。そいつは予兆や勘に留まらない。
『もしもし、私メリーさん』
「――ッ、誰だ！」
咄嗟に振り返る。だが、誰もいない。今しがた通ってきたばかりの岩々しい道筋のみ。気のせいだと言い聞かせてやろうにも、そうもいかなかった。
『今あなたの後ろのいるの』
「クッ、今度はそっちかよ!?」
またしても背後から同じ声で囁かれて、体を反転させながら飛び引く。警戒して身構えて、無情にもホシの姿はなかった。
くすくす……
イタズラを成功させて喜ぶ童女の笑いが控えめに反響する。閉塞した環境も相まって、音があちこちで跳ね返る。
そこにいるようでもあり、どこにもいないようにも思わせる。そんな具合に矛盾をゴチャ混ぜにした不可解な曖昧さ。勘違いだったのではないかと疑いそうになる。
否。確かに聞こえた。己に誓って幻聴じゃねぇと断言できる。
「ったく……」
地底に来て早々に手厚い歓迎痛み入るぜ。こら一筋縄ではいきそうもない。かといって速攻で切り札を切るのも躊躇われた。現状、主導権は相手に握られているのだ。迂闊なマネはできない。
手厳しい状況に思わず愚痴の一つでも吐きたくなる。
「こんな調子でユーギとかいうヤツまで辿り着けんのかよ」

「？　勇儀に会いに来たの？　ならこっちこっち～」
「あ？」
これまでの幻聴と違って明確に声が聞こえた。
それだけじゃない。何者かがオレの手を掴んで引っ張り始める。
よくよく見れば半透明の輪郭が薄らと現れていた。時間をかけて少しずつ鮮明になっていく。
再び既視感。あぁ、コレはあの時と同じだわ。三月精の時と。
ついにはイタズラ犯がその全貌を明かす。
カンタンに見下せるぐらいの小さな背丈。丸っこいＵＦＯみてぇな黒い帽子の下から瑠璃色の髪が垂れ下がる。ダボついた長袖に緑色のスカートの出で立ちから女子とわかる。俗にいう男の娘とかいう女装男子でなければのハナシだが。
「ガキんちょ……？」
「むー！　レディをガキんちょ呼ばわりなんてなってなーい！」
プンスカと頬を膨らませて文句を上げる小娘。これまた三月精と似通った小学生レベルの見た目だった。そこまで再現せんでもエエだろ……
ガキんちょは古明地こいしと名乗った。
姉妹と数多のペットっつーそこそこの大所帯で地底に住んでいるそうだ。ちなみにコイツのが妹。とりあえず古明地妹と呼ぶことにした。あとファッションなのかアイデンティティなのか知らんけど閉じた目玉めいた奇抜なアクセサリー？が存在感を放っておった。どんな趣味してんだ。
そいつは外見年齢に相応しい爛漫さで案内役を買って出た。というか勝手にナビを始めた。
「本当にこっちで合ってんだよな？」
「んー？」
「んー、じゃねぇって。マジで大丈夫なのか……？」
どうにもこの小童、落ち着きがないっつーかイマイチ行動に芯が定まっていない節がある。早い話がフラフラしまくってんのだ。会話

の途中でも脈絡なく話題が飛びまくる。多感なお年頃の難しさよ。
その後の道中も、急に立ち止まったりおもむろに方向転換したり。なかなか前に進まない。チョウチョ追っかけて迷子になるタイプに違いねぇわ。頼むからオレを巻き込まないでほしい。
幸い、例の星熊勇儀が旧都なる場所にいるってぇことまでは聞き出せた。最悪オレ一人でさっさと――
「でねー、このあたりは怨霊がよく湧くの」
「……ア？」
「ほらほら、あそこにも」
無邪気に古明地妹がある方向を指差した。そして、オレは見てしまう。
その先に漂う浮遊物。ユラユラと揺蕩うドクロのツラした風船モドキを。尻尾みてぇに尻すぼみになった球体は誰もが思い浮かべる霊魂のイメージであろう。あからさまにこの世ならざる異形がそこにおった。
「――……」
サーっと頭から血の気が引いていく。おそらく顔面も真っ青になっている。脂汗が滝のように湧き出る。
お化け。怪奇。心霊現象。ホラー映画。ボロアパート。自殺した女の幽霊。本当にあった怖い話。同窓会。黒子野太助。ドラえもんの歌。
一部変なモンもあった気もするがあらゆるフレーズがエラー警鐘を鳴らして脳内をかき乱す。
「どうしたの？　早く行こうよ」
「……」
瑠璃色の髪したガキんちょが立ち尽くすオレの手を引っ張る。が、オレはその場から動かない。動けない。ただ一点、ふらりふらりと宙を泳ぐ人魂に目先が縫い付けられる。
限界まで残り。三、二、一、
「■■■■■■――――――――ッ!!」
「わぁ!?」

理性が焼き切れた。
狂戦士の咆哮を上げてちんまい手を振り解き、見当違いのルートを全力ＤＡＳＨ。既に自分で自分がわからなくなる。これまでの道のりをガン無視してあらぬ方角を奔走した。
本能の赴くままに。行き先はここじゃねぇ何処か。あのゴーストがいない安息の地へ。
「■■■■――ッ！」
「あはは！　待て待てー！」
古明地妹が両手を掲げてグリコ走りして楽し気に追っかけてくる。逃げる成人男性と追い回す幼女。立ち位置が逆なら逮捕案件である。
止まらない限り道は続く。
木桶に入った緑色ツインテのガキんちょの頭上を軽々と飛び越え、金髪エルフ耳の女に背中から抱き着くこれまた金髪お団子頭な女の百合絡みを素通りし、一輪車を押し運ぶ猫耳娘を後方から追い抜いた。
逃げて。逃げて。逃げ続けた。
もはやテメェが何から逃れようとしていたかすらうろ覚え。それでも進むしかない。いつしか古明地妹とはぐれちまったことにも気付かなかった。
あてもなく駆け抜けた矢先、前方方向に金持ちを匂わす立派な建物が見えてくる。アメリカンチックでフルハウスな海外ドラマを思い起こさせた。なぜこんな場所にだとか、誰の持ち家だとか考える暇さえなかった。心は一つ。
あの家に避難してやり過ごすしかない。
フルハウス（仮称）を目指してさらに加速する。死力を尽くしたラストラン。どこまでもトップを独走する。もうゴールしてやる。
玄関まで回り込んでチャイムを鳴らすなんざまどろっこしい。お邪魔すんぜェ！
「オラァアアアッ!!」
手近にあった窓から飛び込むように突き破った（※よい子は絶対にマネしないでください）

窓ガラスが割れて粉々に砕け散る。思わず耳を塞ぎたくなるような甲高い効果音に合わさって、大小さまざまな破片がキラキラと反射しながらそこらじゅうに飛び散った。

「Ｗｈａｔ☒ｓ!?」

謎にネイティブ発音で幼げなトーンのリアクションが続く。子供部屋だった模様。

オレは奇跡的に無傷で床の上を転がり行き止まりの壁際に背をつけて息を潜める。ここが正念場なのだ。

「すまねぇが静かに。追われてるかもしれねぇんだ。ちっとばかし匿わせてもら――」

「ブラザー!!」

「……あ?」

聞き覚えのある呼び名にはたと顔を上げる。

まさかの子供部屋のガキんちょの正体は、全身をアメリカ国旗染みたコスチュームに包んだ金髪フェアリーであった。部屋主のクラウンピースはといえば、自室の床一面にガラス片をブチ撒かれたってぇのに、んなモンお構いなしとばかりにさも嬉しそうに駆け寄ってくる。それでイイのか。

ハリウッドとか好きそうだしこの手のシチュエーションは全然有りなのかもしれない。並みのガキなら失禁してもおかしくねぇだろうに。デッドプール2でも観せてやろうか。

「なになに?　わざわざあたいのところまで遊びにきてくれたの?」

「頼むから静かにしろって」

見知った顔の能天気っぷりに毒気を抜かれる。おかげで明後日の向きにすっ飛んでいた理性が戻ってきた。ちぃと癪だが結果オーライといえよう。

若干の手遅れ感はあるものの、どうにかガラス片を踏まないように注意しつつ、エラく風通しの良くなった窓から外の様子を盗み見る。例のドクロ人魂はどこにもいなかった。

「撒いたか……それとも初っ端から追ってきてなかったのか?」

「ねーねー、お話ししようよブラザー」

「わぁーったから引っ付くなや」
じゃれつくアメリカン妖精をテキトーにいなして一息つく。そうしているとコンコンと控えめにノックが鳴り響いた。
「クラッピー？　すごい音したけど何か壊しちゃった？」
嗚呼、そうか。そうだった。
仮にも此処が地獄の一部でしかもこのガキんちょがいるってこたぁ、もう一人いそうな人物に心当たりがあったわな。
茶目っ気を滲ませた大人びた女の声。そいつがドアノブを捻る。当然ながら扉は難なく開いた。
赤髪セミロングに球体の帽子をアクセントにした女神サマが入ってくる。「Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌ」のプリントＴシャツとレインボーカラーのミニスカも変わりなし。
女は部屋に織り成す惨状――窓ガラスが歪にカチ割られてその残骸が床一面に撒き散らされ、にもかかわらず部下が不法侵入の野郎に懐いている有り様を目の当たりにする。次いでその瞳の行き先がオレに向けられた。
控えめに言っても阿鼻叫喚な光景にも眉一つ動かさず、地獄の女神サマは愉快そうに相好を崩した。あたかも客人を迎え入れるように。
「サンタクロースは煙突から入ってくるものじゃなかったっけ？」
「別にプレゼント配りに来たワケじゃねぇっつの」
何ならブラックジョークもかましてみせるほどに余裕綽々。さすが正真正銘の女神サマは器がデカい。ここまでくると逆にスゲーよ。
というか、あんたのアジトだったんだな。このフルハウス。
「う～ん……将也君に合うサイズっていったらこのあたりなんだけどな」
演劇の楽屋ばりに大収納なクローゼットを開けっ広げにして、ヘカーティア・ラピスラズリが服を選ぶ。ハンガーラックには隙間なく衣類が吊るされておった。セレクトショップかよ。
しかもこんだけ品揃え豊富なクセしてどれもが黒ベースでプリント文字付Ｔシャツときた。恐るべしコレクション趣味。

サイズもSからＬＬ、何ならＸＬまで一通り。どう考えてもこの女が着る用ではない代物までフツーに並んでいやがった。一体どこを目指しているのだ、この女は。

ちなみにヘカーティア・ラピスラズリの私室だった。そこにベッドもある。

「なぁオイ。どーしても着なきゃダメか？」

「もちろん。将也君の方から地獄に来る機会なんて滅多にないもの。さすがに全部は持ち歩けないし。窓ガラスも割ったんだからそれぐらい付き合ってくれるでしょう？」

「ぐ……しゃーねぇなぁ」

そいつを指摘されるとぐうの音も出ない。こうなりゃ女神サマがお気に召すままに従うしかあるまい。ほどなくして女も目星をつけたらしい。

ハンガーラックから二つほどチョイスして、それぞれを見比べさせるように左右の手で持つ。

「これと、あとこっちもかしら。将也君はどっちがいい？」

右側のシャツにプリントされた文字は「Ｔｏｏ　Ｙｏｕｎｇ　Ｔｏ　Ｄｉｅ」

左側のシャツにプリントされた文字は「Ｇｏ　Ｔｏ　Ｅａｔ」

「……」

どっちも英文字なのはこの女なりにこだわりがあんのか。コイツが着ているのもそうだしよ。

さらにクラウンピースまでもがマスターに追従して服選びに参戦してきた。一着選び抜きバッと広げてオレたちに見せつける。

「ヘカーティア様！　あたいこっちがいい！」

「あら、いいじゃない」

「イイわけあるか」

サイズは申し分ない。が、プリント文字が「メモリーＴ細胞」って何やねん。どんなセンスしてんだオメーは。むしろどこで買ったんだ、それ。

「ねぇねぇ！　こっちは？」

「お前はいつからいた」
　いつの間にか、はぐれたハズの古明地妹がちゃっかり合流しておった。あまつさえセレクトしたのは「燃えるゴミは月・水・金」ダメだ。昨今のガキんちょの流行りがまるで理解できねぇ。
　この中から選ぶしかないというのであれば、こんなん実質一択じゃねーか。
「コレでエエだろ」
「あら」
　赤髪セミロングの女神サマの手から「Ｔｏｏ　Ｙｏｕｎｇ　Ｔｏ　Ｄｉｅ」のシャツを引っ手繰りその場でぱっぱと着替える。下手なコスプレよりかは百倍マシであろう。色も黒だしそこまで抵抗もない。
　自分が選んだものが採用されたのもあってヘカーティアは上機嫌そうだった。
「これで満足か？」
「うん上出来。せっかくだからそれは将也君にあげる。そうだ、こっちに来てくれる？」
「今度は何や……」
　女に手招きされるままにスタンドミラーの前に立たされる。別に可笑しいところはなさそうに思うが――
「ウフフ、えい」
「うぉっ」
　思いがけず不意打ちに、迂闊にも間抜け臭い反応が出てしまう。何を思ったか隣に立ったヘカーティアがオレと腕を絡めてウインクとピースサインでポーズを取った。向かい合う鏡の世界でも同じようにペアルックの男女がオレたちに決めポーズを返していた。
　改めて客観視すると思いのほかムズムズすんのですがコレは。何だこのジワる姑息な羞恥プレイ。
　ついつい減らず口で誤魔化してしまう。
「っかー、記念撮影かよ」
「それいいわね。うん、将也君の地底デビュー記念」
「さよか」

「さよです」

ラピスラズリ、宝石の名を冠する女神サマがおどけるように受け答える。

ったくよぉ、そこにあんのはカメラじゃなくて鏡だろうに。

しかし、何というか。

Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌ（地獄へようこそ）とＴｏｏ　Ｙｏｕｎｇ　Ｔｏ　Ｄｉｅ（若くして死ぬ）とか我ながらトンデモねぇセットがあったもんだわな。

こら華扇が見たら何を言われるかわかったもんじゃねぇぜ。

つづく

第五十八話　「花の都のエイドリアン」

旧都。

旧い都たぁ言い得て妙なこった。街並みも古臭い長屋が続き、いや、時代を慮っていると言ってやるべきか。実際のところ人里とそこまで変わらねぇ。強いて言えばこっちのがどことなく粗削りした雰囲気があった。力強さとも言い換えられる。

あながち間違いでもあるまい。酒と喧嘩は江戸の華とでも言わんばかりに、街中を筋肉自慢の漢どもが闊歩している。それも人間じゃなく、絵本やらマンガやらに描いたような古典的な鬼がうろついていやがった。これも異世界クオリティか。

地下に根付く大都市。まさにアンダーグラウンド。心なしか喧騒が賭博黙示録染みている。

「旧地獄もすっかり天然温泉が名物になってね。地上からもよく人妖問わずお客が来るのよ？」

「地獄だったんじゃねぇのか。それただの観光地だろ」

「あはっ、実際そうかも。ちなみに温泉饅頭が美味いって評判よ。お土産に買っていく？」

「つかー、お気楽なこって。饅頭は考えとくけどよ」

地獄の女神サマが時には茶化しつつもご丁寧に教えてくれた。大人びた容姿にあどけなさが見え隠れする。俗にいうギャップというヤツか。

不可侵条約なんかもあったらしいがほぼ風化してあまり意味を為さず、八雲紫ですら「そういえばありましたわね」などと抜かすレベルだとか。それもう実質時効やんけ。

ちなみに、この女の本来の管轄域は新地獄である。フルハウスもいわば別荘に過ぎない。偶々地底に来ていたタイミングでオレが窓から飛び込んできちまったワケだ。そら災難だったわな。オレが言えた立場じゃねぇけど。

行灯や提灯が蜘蛛の巣の如く張り巡らされ、縁日を思わせる眩しさと賑やかさが旧都中を満たす。真っ昼間から酒屋が暖簾を軒先に掛

け、敷居越しにバカ笑いが遠慮なく飛び出してくる。下品なぐらいに騒々しいのもまた一興。

フッとニヒルに顔を緩める。都会の繁華街、夜を生きる男にとってはこの空気は嫌いじゃねぇぜ。

「楽しいでくれてるみたいでよかった。改めて旧都にようこそ。歓迎するわ」

「あぁ。むしろこーゆー空気のが性に合ってんだよ、オレはな」

「ならいっそのことこっちに住んじゃう？」

「Ｒｅａｌｌｙ!?　ブラザーも地底で暮らすの!?」

「勘弁してくれ。直射日光はアレだがモグラ生活する気はねぇよ」

旧地獄の中心街をオレとヘカーティア・ラピスラズリ、さらにクラウンピースと古明地こいしを交えたそこそこの大所帯で通り行く。

例の「Ｔｏｏ　Ｙｏｕｎｇ　Ｔｏ　Ｄｉｅ」なるプリントTシャツを着ているせいか、厳つい男鬼連中が奇異の目でオレを、

「ラピスラズリ様！　コンチハッス!!」

「はい、こんにちは」

「ラピスラズリ様ァ！　お疲れ様でごわすッ!!」

「そっちもご苦労様」

「押忍！　ラピスラズリ様！」

「ちゃお」

違った。どいつもこいつも赤髪セミロングの女神サマに送られた熱視線だった。舎弟さながらに直立不動の体勢で敬礼かましておった。ただでさえデカい声を余計に張り上げるもんで、周辺の空気が痺れるようであった。いやうるせぇんだが。どこの軍隊だ。

力こそ正義。強者が統べるは世界の理。

ましてや地獄を司る女神なんざ圧倒的な上位カーストどころかトップクラスであり、当然ながらその地位は揺るがない。もっとも、この女はそーゆーの興味なさそうだけど。

大声で挨拶する強面どもに女神サマは一つ一つ律儀に返していく。時折ひらひらと片手を振って、愛想よく振る舞う。芸能人のお忍び外出かよ。そのうちサイン求められんじゃなかろうか。

「ほーん、大した人気じゃねーか」
「へへっ、あたいのマスターだもん！」
「むー！　うちのお姉ちゃんだって負けてないもん！　ファンクラブだってあるんだから！」
「別に張り合わんでもエエだろうが。つかオメーの姉はアイドルでもやってんのか」
「お姉ちゃんじゃないけどアイドルは別にいるよ？」
「おるんかい」
　コレがホントの地下アイドルってか。
　その後もあっちからこっちから「ラピスラズリ様！」「ラピスラズリ様！」と挨拶と敬礼のセットで声援が捧げられた。ここまでくるともはや女王陛下のお披露目に近い。オレらの存在霞んでねぇか……？
「ハ、あんたも大変なこって」
「まぁね。私は普通がいいんだけどなー」
　とは言いつつも嫌な顔一つ見せずに男衆に応える。いつも通りの茶目っ気ある大人びた笑み。これしきのことで窮屈になるほど器の小さいヤツじゃねぇだろう。が、イマイチ釈然としない。何となくだがイイ気がしねぇ。
「なぁ、そこのあんた」
「あ？　オレか？」
　そんな中、鬼の一人がオレにも話しかけてきた。ようやくかと思いつつ、その反面そらそうかとも納得する。誰もがひれ伏す女神サマとほぼ同じカッコしとる野郎がいれば、疑問の一つでも抱いて当然といえよう。
　鬼らしく直球ストレートな質問が投げられる。
「お前地上の人間か？　何だってまたラピスラズリ様と同じ服着てんだ」
「黒岩だ。夜を生きる男にして何でも屋。あと服のことは気にすんな。オレだってどーしてこうなったかわかんねぇんだよ」
「何でも屋？　そんなやつが何しにここに来た」
　筋肉モリモリなクセして細かいところが気になるタイプのようだ。

ついでだ。コイツから情報を聞き出しておくのも悪くない。
「ちぃっと届けモン頼まれてんだよ。星熊勇儀ってぇヤツにな。聞いたハナシじゃこの辺にいんだろ？　知ってたら教えてくれや」
「お、勇儀の姐さんならそこの通りを行った酒場にいると思うぜ。わざわざ地上からご苦労だったなぁ。帰る前に温泉にでも入っていけ、疲れなんか一発で吹っ飛ぶからよ」
「フッ、お気遣いどーも」
何かフツーに良いヤツだった。やはり見た目で判断するのは早計ということか。オレもよく華扇から目つきが悪いだの言われるし、人のことはとやかく言えんけど。
とにもかくにも要人の居場所も突き止めた。となれば為すべきは一つ。
「下手に擦れ違ったりする前にちゃっちゃとケリつけるか。情報提供感謝すんぜ。行くぞヘカーティア」
「将也君……」
「お、お前、ラピスラズリ様に向かってなんて口の利き方ッ、しかも呼び捨てだと……!?」
「いいのよ。私がそうして欲しいって彼に望んだことだし」
「なんとぉッ!?」
あたかも落雷をその身に浴びたように、男鬼が大袈裟に仰け反って叫んだ。厳ついツラがますます険しくなってんぞ。金剛力士像もかくやな塩梅であった。
見れば、聞き耳立てていた通りがかった他の連中までもが目を丸くして硬直しているではないか。何だコレ。怖っ。
そんな周囲のリアクションなどお構いなしに地獄の女神が嬉しそうに隣に寄り添う。個性派プリントTシャツのコンビが並んだ。大丈夫かよ。滑稽に思われたりしてねぇよな？
「さ、行きましょうか将也君」
「おぉ……って、なして腕を絡めるんだ」
「ブラザー！　あたいも！」
「こいしもー！」

「だーもう引っ付くな暑苦しい！」

「ほうほう、萃香の依頼でアタシのとこまで来たと。そいつは難儀だったね。アンタも呑む？」

「要らん。何時だと思ってんだ。あと大した手間じゃねぇし、受けた依頼はキッチリこなすのがオレの流儀だ」

「職人気質ってやつかい。いいね、そういうの気に入った」

「そらどーも」

鍋の蓋を連想させる特大の盃を持った長い金髪の女と向き合う。まさしく姉御といった風格を漂わせ、一滴も零すことなく器用に酒を煽るのが様になっていやがった。

この女こそが今回引き受けた依頼の届け先、星熊勇儀。

「プハー、美味い」

「何時から飲んでんだよ」

「さぁねぇ。時間なんかいちいち気にしてたら酒が不味くなっちまうよ」

冗談とも本気とも取れる戯言で返される。コイツも酒豪か。華扇とイイ勝負すんじゃねーか。

女の中でもかなり長身の部類に入るだろう。赤髪セミロングの女神サマよりも背が高いと思われる。コイツに近いのは八坂神ぐらいではなかろうか。その身長を少しは伊吹萃香に分けてやりたい。

ラフな無地白の半袖に紅蓮と紺色が入り混じった縦縞模様の袴。最も特徴たらしめる、額に伸びる赤き一本角が天を突く。アレで頭突きされたらひとたまりもあるまい。刺さるわ。

「なるほど、なるほど」

鬼女が興味深げにオレと同伴者を交互に見やる。ついでに酒ももう一口クイッといく。

「まさか女神もご一緒とはねぇ。アンタら、ひょっとしてそういう関係なのかい？」

「あら」

「けっ、どーいう意味だってぇ？」

「とぼけるんじゃないよ。揃いの服着た男と女が二人並んで外を出歩いてんだ。ここまで言えばあとはわかるだろう？」
「Ｂｏｏ！　ヘカーティア様だけじゃないやい！　あたいだっているよ！」
「こいしも！」
「プ……あっはっはっ!!　そうだったそうだった。こりゃすまんねぇ」
「……ったく」
　ガキんちょどもの抗議の声を受けて、思わずといった具合に鬼女が気前よく笑い飛ばした。サバサバした性格がよく表れている。その大らかさ、姐さんと呼ばれるだけはありそうだ。
　それと似たような服着てるだけでそーなるってぇんなら中学高校なんざ多夫多妻の乱痴気パーティだろうが。
　ひとしきり笑い終えた星熊が「よっしゃ！」と膝を叩いた。パァン！と小気味良い音が鳴る。
「それはそうと本題だ。萃香のやつはアタシに何を寄越そうとしたんだい？」
「やっとそこかよ。手紙だ。つってもブツは巻物だがな。ま、オレは伝書鳩の代わりってこった」
「鳩というより烏だろうさね。この辺も地獄烏がよく飛んでるよ。見ていくかい？」
「ノーサンキューだ。烏でバードウォッチングする趣味はねぇよ。んなモン向こうに居たときから見慣れてらぁ」
　軽口を軽口で打ち返しながら預かり物をテキトーに放り投げる。星熊勇儀は盃を持ってない方の片手で難なく掴んだ。流れる動作で紐を解き、巻物を広げる。まるで龍の尻尾のように長い紙面が宙を薙いだ。
　というかどんだけメッセージ盛り込んでんだよ、あのチビ鬼。ＬＩＮＥだったら既読スルー案件やぞ。
　星熊が文字を目で追う。「ほう、華扇が……」「この男が……？」といった感想の独り言を漏らす。華扇の名前が出た時は僅かに反応し

ちまった。が、断じておくびにも出さない。
やがて読み終えた巻物を元の形に戻していく。直後、ヤツはオレを見据えて目を細めた。同時に剛力の余波が重く圧し掛かる。体感温度が急激に下がり、店内の空気が張り詰められた。
答え次第では覚悟してもらおう、と言外に込めて一本角の鬼がオレを威圧する。
「アンタ……」
ざわ……
ざわ……
「二股かい？」
「どーしてそうなったんかはあえて聞かねぇぞ。そもそも相手がおらんわ。零股だ」
「え、股がないって……お前さん実は女だったクチかい？」
「そうじゃねぇよ！」
「ｏｈ　ｍｙ　Ｇｏｄ！　ブラザーは本当はシスターだった……ッ!?」
「ほら見ろ真に受けたバカちんがおるやろが！」
衝撃の事実を知ってしまったとばかりに、金髪フェアリーがムダに彫りの深い面構えで慄く。おまけに口の周りを温泉饅頭の餡子でベトベトにしていやがった。食べ方汚ねぇなオイ。あとオメーの神なら隣にいんだろ。
「ってか古明地妹はどこ行った？」
挙句には頭数が一人減っておった。もはやワケがわからん始末。ツッコミ役が足りない。
オレの問いに星熊勇儀が「ああ」と今になって気付いたような声を上げた。あるいは、本気でわからなかったのかもしれない。
「そういや一緒だったね。なに、心配することはないよ。あれは無意識で動き回っている。いつものことさ。袖振り合うも他生の縁っていうだろう？　再び縁が交われば相まみえることもあろうさ」
「夢遊病者なのか？」
「中らずと雖も遠からず。もしかしたら姉のところに帰ったのかも

ね」
　知人からすりや慣れたことなのか、気にする輩は誰もいなかった。あのガキんちょは比喩抜きにして無意識の合間を縫って行動しているのであろう。オレ以上のステルスの使い手だったか。
「古明地妹の姉、か……」
　いやもうメンドクセーから古明地姉でいいか。あの無意識娘からしてどんなタイプなのかは想像もつかん。ま、ファンクラブがあるってぇなら見た目は良いと推測する。
　あと動物に囲まれているらしいあたり、ひょっとしたら華扇と気が合うかもしれない。
　何はともあれ、思いのほかすんなり用事が済んだ。おかげでやることが何もなくなっちまった。早い話が暇だ。
「急いで帰る必要はないんだろう？　せっかく来たならゆっくりしていきな」
「あぁ、そうさせてもらう」
　地獄の跡地に来て収穫なしってぇのもつまらねぇし勿体ない。本物の地獄はいずれ世話になるとして、今回はこっちを見て回るのも多少の退屈しのぎにはなろう。
　それ以前の問題に帰る手段がない。どのみち八雲紫が帰り便のスキマを開いてくれるまで待つしかねぇワケで。
　オレが自力じゃ帰れないことを告げれば星熊勇儀はニヤリと口角を上げた。
「なら丁度いいじゃないか。そのままそこの女神に付き添ってもらうといい」
「あら、いいの？」
「できれば友人の肩を持ちたいさ。だけどほら、アタシゃ鬼だからね。こういうのは正々堂々、正面切って勝負するのが筋ってもんだろう？　余計なちょっかい出して馬に蹴られるのも御免さね」
「いきなり何のハナシしてんだ」
　オレが割って入ると、呆れと憐れみが半々のビミョーな表情の鬼サマと可笑しそうに笑みを浮かべる女神サマの視線が交差する。だか

ら何やねん。
「いい男になりたいならその辺も鍛えておくんだね。これで察せないなんて、こりゃあアイツも苦労しそうだ。おっと、アンタもだったかい？」
「さて、どうかしら」
「くわー、掴みどころがないやつだねぇ」
やれやれと肩をすくめた星熊が再度盃を傾けようとして、どうやら中身が空だったらしい。日本酒の一升瓶を取ってドボドボと手酌し始めた。そこまですんならもう直飲みでもいいだろ。

鬼サマはまだまだ飲み足りないっつーので奴さんとはその場でお暇することになった。
「将也君はどこか行きたい場所ある？」
酒場を出てすぐ、ヘカーティア・ラピスラズリが前かがみになってオレの顔を覗き込む。肩回りが大胆に露出したデザインのおかげで谷間が見えそうになっていた。あざとい。ワザとやってんじゃねぇよな。
「どこ行きてぇってもな……」
パッと候補が思い付かず、立ち悩む。
ふと、温泉特有の臭いが鼻先を掠めた。硫黄か硫化水素か忘れたが独特の刺激臭を嗅ぐ。
「そういや温泉がウリなんだっけか」
「それなら一緒に入る？　混浴の露天風呂もあったと思うけど」
「は、はァン!?」
イタズラっぽく挑発的な一言に、先日の出来事がフラッシュバックした。
『綿間部……』
桃色ミディアムヘアの仙人サマが肢体にバスタオルを巻いただけの色っぽい立ち姿。背中を流された時に触れた、しなやかな指先の感触。二人で背中合わせになって浴槽に浸かった時の熱ささえも、一つ一つが生々しいまでに鮮明に甦る。

最後に見てしまった、彼女の生まれたままの裸体も――

「将也君？」

「はっ!?　な、いや。べっ、別に何も思い出してねぇぞ!?」

「うん？」

束の間だけ意識が過去に飛んでいた。挙動不審なオレの様子に、ヘカーティアが不思議そうに呼び掛ける。赤いセミロングの髪を耳に掛けながら「ん？」と年上っぽい仕草で見つめられる。

幸いにも追及されることはなく、地獄の女神の宝石めいた瞳がオレから他に移った。

「でも、あっちの混浴なら恥ずかしがらなくても大丈夫なんじゃない？」

「いや別に恥ずかしがってねぇけどよ。というか大丈夫な混浴って何やねん」

訝しみつつ女神サマが眺める方へと視線を飛ばす。答えはすぐに見つかった。

東屋だろうか。小さい屋根とその四隅を木の柱で支えただけの簡素な造り。屋根の下の空間からは雲そっくりな湯気が立ち上る。温泉特有の臭いの発生原はアレだったみてぇだ。

地面に杭が突き刺さった立て看板には「足湯」と書かれていた。

とんちかよ。確かに混浴と言えば混浴といえなくもねぇけどよ。

しかし考えてみれば結構な道のりを歩いてきたうえに、ドクロ人魂から逃げ回るのに全力疾走もした。遅れながら足にも疲労が溜まっている。

一休さんじゃねぇが、一休みするにはうってつけの場所とタイミングかもしれない。

「ま、悪くねぇな」

「Ｙｅａｈ！　みんなでＡＳＨＩＹＵだね。Ｌｅｔ☒ｓ　ｇｏ！」

「何だその中途半端な発音は」

「フフ、クラッピーったらご機嫌ね」

我先にと駆け出すアメリカン妖精に続いてオレたちも足湯に向かう。湯気に含まれた熱気が体や衣服に沁み込み、いよいよ温泉らしさ

を感じる。ここがかつて地獄だったとは信じ難い。
しかも利用客はおらず貸し切り状態ときた。ますます運が良い。
ヘカーティアがブーツを脱ぎ、裸足の爪先から湯面につけて膝下まで温泉に浸かる。レインボー色のミニスカが濡れないように裾をたくし上げ、縁側に座った。その拍子に太腿の際どい部分まで露わになり、キメ細やかな生足と湿った白い湯気の組み合わせが妙に艶めかしい。
「ふぅ……ん、いい湯加減よ。二人も早くいらっしゃいな」
「おお、つーかオメーはどうすんだ？」
「あたい？」
クラウンピースがきょとんとしたツラでオレを見上げる。そうだよお前だよ。
何せ全身タイツよろしく特殊なコスチュームしてんのだ。スカートやらズボンみたく巻き上げたりできない。まさか着衣したままってぇワケにもいかんだろ。
しかして、その心配は杞憂に終わる。ただし、もっと問題行動を起こして。
「そりゃ脱ぐよ？　……んしょっと」
「ぶほっ」
思わず変な咳が出ちまった。
あろうことかヤツは寸分の迷いもなく下のタイツをずり下ろした。おまっ、ロリコンの犯罪予備軍がこの辺にいたら戦争だろうが！
かろうじて、ギリギリで、あと一歩のところでパンツは見えていない。限りなくアウトに近いセーフな恰好で、クラウンピースは満面の笑みとともに己が主の隣に腰を落とした。
「あったかーい！　ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ！」
「こらこら、はしゃがないの」
他に客がいないのをいいことに両足でパシャパシャとお湯を蹴飛ばす金髪フェアリーを女神サマがやんわりとたしなめる。ついでにこちらを見やって反対側の空いているスペースに軽く手を置いた。どうぞ、とでも言いたげにオレを誘う。

しゃーねぇ。靴と靴下をその辺に脱ぎ捨て、雑にズボンを捲って足湯に入った。じんわりと天然温泉の温かさに包まれ、足に溜まっていた疲労が溶けていく。あっという間に力が抜ける。場所は旧地獄だが気分は極楽であった。

濁音混じりの低い溜息が出る。オッサンくせぇリアクションをかました真横で、女神サマがくすりと微笑む。

「八雲紫が迎えに来なかったらしばらくうちに泊まる？」

「あー……ま、マジでそうなったらそん時は頼むわ」

「うん。私のベッドの大きさなら将也君と二人で寝ても入るだろうし」

「いやそこは客間に通してくれや」

「なぁんだ。つまんないのー」

「じゃかぁしい」

女神サマのお茶目なジョークを軽く流して足湯を堪能する。星熊にはああ言ったものの少しばかり酒が欲しくなってきた。早くも地底の空気に影響されたのかもしれん。

クラウンピースが「ババンバ　バン　バン　バン♪」と口ずさんでいた。古っ。

「そういえば将也君」

「んだよ」

「さっきはありがとね。私のこと名前で呼んでくれて」

「……何のこったかな」

オレがぶっきらぼうに返すのを、ヘカーティアは温かい表情で見つめていた。

つづく

第五十九話　「そして彼はいなくなった」

足湯から上がったオレら一行は、テキトー＆気ままに旧都内を見て回った。大江戸の歓楽街染みた小粋な景観を眺めながら、時たまそこら辺の店にふらりと立ち寄っては食べ歩きに興じる。

何だろう。今やすっかり何するにしても気付けば食べ物片手にしているオレがいんのだが。オマケに自分でも違和感を抱かなくなってんだからどうしようもねぇ。いずれハラペコキャラの烙印を押されてしまうかもしれん。

それだけは避けねばアカン。夜を生きる男のハードボイルドとは程遠くなっちまうではないか。そーゆーのはあの仙人サマのがお似合いだろうに。

『失礼な！　わ、私だって食いしん坊じゃありませんからね!?』

奇妙な電波を受信したような感じがしたが、恐らく気のせいであろう。深く考えたら負けなアレな類だ。間違いない。

それはそうと八雲紫もいつ迎えに来てくれるのやら。日がな一日食べ歩きツアーを続けるのはカネとハラが保つかも怪しい。いや、金銭だけなら伊吹萃香に貰った金粒を使えばどうにかなりそうか。

「むぐ……」

アレコレ気にしつつも串焼きの最後の一つを引き抜いて咀嚼する。

『地獄鴉の獄炎焼き』なんつームダに仰々しい品名の焼き鳥だった。味は淡泊で肉質も硬め。ぶっちゃけビミョーと言わざるを得ない。百歩譲ってもB級グルメとは呼べねぇぞコレ。

ここの連中は酒のつまみになりゃ何でもイイのか。いっそ開き直って「食えりゃいいんだよ、食えりゃ」などと豪語しかねない。温泉饅頭は旨いってぇのによ。企業努力が足りん。

どうりで女神サマが「それ買うの?」とわざわざ聞いてくるワケだ。だったらせめて最初からそう言ってほしい。不味くはねぇが旨くもねぇ。ここまでくると珍味だわ。

そういえば昔、都会で増え過ぎたカラスを減らすためカラス肉を使った料理を出す店を聞いたことがある。今もなおあんのかは知ら

んけど。
　ま、いざ食ってみてわかったのは鳥肉はやはりチキンに限るってこった。なお、夜雀の女将の前で口走ったらもれなく菜箸を突き付けられるから迂闊には言えない。あの瞬間ばかりはあざとい和服少女が必殺仕事人になる。
「さてと、この後はどうしたもんか」
　どうにか食べ終えた後、行儀悪く串を咥えたまま気怠げに上下にユラユラと揺らして考えに耽る。
「はい、ブラザー」
「おお、スマン……ってアッツゥ!?」
「Ｗｏｗ！」
　その瞬間、文字通り目の前で燃え盛った炎にガチで度肝を抜かれちまった。いやマジでビビったんだが!?
　肌身を焦がす熱さに襲われて、ぼんやり上の空で浮ついていた意識が現実に急降下するに留まらず墜落した。情けない悲鳴を上げてしまい、口から離した串が地面に落ちる。もはや焦げ臭い炭と化した棒切れをすぐさま靴裏で念入りに踏み消した。
「オイコラいきなに何してくれてんだ……？」
　半ギレになって米国印の地獄妖精を見下ろす。ただし内心は心臓バクバクである。焼き土下座の映像がよぎった。
　ライター代わりに松明を差し向けてくるポーズがあまりにも自然体で違和感なかった。そのせいでこっちまでタバコ吸う感覚で答えちまったじゃねーか。危うく顔に火傷痕を負った個性派ワケありキャラになるところだっただろうが。
　しかしてクラウンピースは悪びれることなく、ついでにオレの睨みにも恐れることなく不満げに唇を尖らせた。
「だってブラザーってば赤ちゃんみたいにずっとお口にしてるんだもん。お行儀悪いよ？」
「だぁれが赤ん坊だってぇ？　んなアホな理由で悪質な悪戯を考えついたんはこのアタマかオォン？」
「ＡＨＨＨＨ!?　Ｎｏ！Ｎｏ！　Ｈｅｌｐ　ｍｅ！」

お仕置きにチビッ子のつむじをヘンテコな帽子越しに親指でグリグリと押し潰してやる。思いのほか地味に効いており、なかなか面白い反応が返ってきた。しばらく続けてやろう。反省せぇよお前。

オレとクラウンピースが茶番を繰り広げているのを、プリント文字付き黒Tシャツが似合う女神サマが微笑ましそうに見守っていた。人体発火する寸前だったのに大らか過ぎる。

「笑い事じゃねぇっつの」

「あはは、ごめんね？　楽しそうだったからつい」

「ついじゃねーよ危うく焔ビトだったわ……ったく、とりあえず腹も膨れたし金塊発掘にでも切り替えるか」

「う～ん、と。それはやめた方がいいと思うなー」

「あ？　何でや」

「Ｎｏｏｏｏｏ……！」

もしやこの女、まだ食べ歩きし足りなかったとでも抜かす気か？

それこそまさか。桃色ミディアムヘアで白いシニョンとミニスカ中華衣装な仙人サマじゃあるまいし『綿間部……？』いかん、またどこからともなく謎電波が。オイオイ、地底の最深部ならむしろ圏外じゃねぇのかよ。

妙な寒気を振り払いつつ赤髪セミロングの女神サマに説明を求める。

ＰＲＧゲームにありがちな財宝を守るボスキャラでもいるとか？

地獄だけにかの有名なケルベロスみてぇなバケモノを想像した。そんなのがいるならオレの手札じゃどうしようもないわな。こちとら大猪に轢かれかけた男やぞ。

かくして、予想とは違ったが割とシャレにならん事実が発覚する。

「残念だけど取れるのは金だけとは限らないの」

「石油でも湧くってか。それはそれで儲けモンだろ。そしたらオレは晴れて石油王だ」

「湧くのは間欠泉だけどね。そうじゃなくて、砒素とか水銀とか人体に有害な物質よ。もし金塊が取れたとしても、そういうのが少なからず混ざってるんじゃないかしら」

「うげ……マジかよ」
「うん、マジです。だから迂闊に触らない方がいいわよ」
「ｈｏｏｏｏｏ……ッ」
まさに地獄の所業。ヒトの期待をいとも容易く裏切る悪魔的情報に顔をしかめる。
純金じゃなくて混ざりモンときたか。それゼッタイに価値が下がるヤツだろうが。よりによって有害物質ってぇのも性質が悪い。鑑定されたら最後、足元見られて買い叩かれるのは明白だ。最悪の場合、門前払いもあり得る。
もっとも、この幻想郷にそれほどの目利きがいればのハナシだが。
「あ」
「どうかしたの？　将也君」
ふと気になって、ポケットに捻じ込んでいた巾着袋を引っ張り出す。幸いにも中身には素手で触ってなかった。それはイイが、せっかくのお宝がばっちぃナニカに思えてくる。あるいは金メッキのパチモンを掴まされた気分に陥った。
おのれあのチビ鬼、ぼったくりやがって。どうしてくれようか。
怒りに滾るオレの横で、ヘカーティアがひょいと巾着袋を覗き込んだ。「見てもいい？」と聞かれたので、伊吹萃香から貰ったブツだと付け加えてから貸してやる。
「多分大丈夫よ。その鬼って集めたり散らしたりする能力を持ってるんでしょ？　上手く金だけを集めたんじゃないかしら」
「何だ、それならエエわ。だーもう、焦って損したぜ」
「ウフフ、将也君って意外とうっかりさん？」
「うるへー、金塊に毒物仕込むなんざ米花町でもそうそうねーよ」
「ＡＨＨ！　そろそろ離してよぉっ」
とうとう限界が来たらしくクラウンピースから許しを乞われる。そういや女神サマと喋っている間もずっと折檻しっぱなしだった。ぼちぼち許してやるとするか。
親指を離すとアメリカン妖精は頭を押さえながら恨みがましい眼差しでオレを見上げてきた。ゲンコツじゃなかっただけマシだと思

えや。
「むぅ、これであたいの身長が伸びなくなったら責任取ってよね」
「やかましいわ。背ぇ高くしたけりゃ黙って牛乳飲んで煮干しでも食っとけ」
「えー、ミルクよりカフェラッテがいい。シュガーたっぷりで甘いの」
「っかー、オシャレ女子かよ」
コイツ何気にミーハーなのか。ガキんちょはココアで十分だろうが。そっちで背伸びせんでもよろしい。
ともかく、これで行き先候補リストが全て消え去った。食べ歩きもぼちぼちキツい。いよいよもって手持ち無沙汰になる。困った。
「あ、そうだ」
そんな窮地を打開したのは、球体を乗せた帽子がアクセントの女神サマだった。
「他に行く宛がないなら将也君に見て行ってほしいものがあるんだけど。どうかな？」
「イイじゃねぇか。そーゆー提案は大いに歓迎だ。で、何を見せようってぇんだ？」
「フフ、それはね――」
そこで一拍ほど置いてから、女は内緒を打ち明けるように片目を軽く閉じた。
「季節外れのお花見」

石桜。
それは地底でしかお目にかかれない自然現象。
桜の木の下には死体が埋まっていると、どこかで聞いたことがないだろうか。梶井基次郎の短編小説の冒頭である。
ところが、だ。創造の産物がフツーに実在したりするこのド田舎異世界において、そいつは作り話の範疇に収まらない。嘘か誠か、毎年春に綺麗な桜を咲かせるために必要な処置なのだという。ま、わざわざ掘り返して確認する気にはなれんが。
死体すなわち肉体はやがて土に還る。では、魂はどこに行く？

ろ過されるかの如く、ゆっくりと時間をかけて沈下していくのだ。下へ下へと沈んでいき、いつしか結晶化したものとなって地底世界に降ってくる。それも、ちょうど地上で桜が開花する時期と重なって。

故に、旧地獄にもまた春の風物詩は存在していた。

オレたちは旧都を外れ、間欠泉センターなる場所の近くまでやってきた。旧都の喧しさが嘘みてぇに、そこは静まり返っていた。

伽藍洞の上空から舞い降る輝きの儚さを目の当たりにした。雪の結晶のような小さな欠片が音もなく静かにオレたちのところまで下りてくる。ヒラリ、ヒラリと。

その光景はまさしく幻想的といえた。魂が結晶化したもの。なるほど、土産に持って帰るには些か過ぎた代物であろう。

「ほー……」

「どう？　綺麗でしょう」

「あぁ、確かに」

赤髪セミロングの女神サマの言葉に生返事で頷く。日の光が届かぬ地底世界にもたらされた僅かな光。幻惑に近い美しさに感嘆する。これが目を奪われるということか。

「石桜の量には毎年ばらつきがあって、今年は特に多かったの。それで春に結晶化されなかった分が今になって地底まで届いたみたい」

本来のシーズン外だからほんの少ししかないけどね。女が言葉尻にそう添えた。春の見頃だったら地底の空一面が石桜で埋め尽くされるらしい。それこそ桜吹雪さながらに。

結晶は小雨よりも疎らで決して多くはない。オレたちが立っている場所から数メートルも離れればあっさり範囲外になってしまう。

季節外れに春が残した置き土産。その少なさが却って得も言われぬ赴きを醸していた。

「Ｌａ　ｌａ　ｌａ～♪」

石桜が舞う真っ只中をクラウンピースが松明を片手にクルクルと回りながら踊っている。オレらより先に来ていた猫耳娘が一輪車に鉱物を積んでどこかに運んで行った。

さり気なくヘカーティアがオレと肩をくっ付けるように寄り添っ

た。仄かに女の匂いが漂う。華扇とも違う香りにほんの少しだけ気を取られてしまった。コイツも大概近い。美人な自覚あんのか。

「これはこれで素敵だけど、やっぱり春の見どころが一番オススメかな。ね、来年になったらまた地底に来て一緒に見ない？」

「そーだな。それも悪くねぇ」

「フフ、言質取った」

「物騒な言い方だなオイ」

「ブラザー！　こっち、こっち～！」

「あら。呼ばれているわよ、お兄ちゃん？」

「だから兄妹じゃねぇっつの」

ぶつくさ言いつつも金髪フェアリーの元へ向かおうとするオレに、女神サマがくすくすと可笑しそうに大人びた笑みを零す。

片や、アメリカン妖精は急かすように松明を振り回しながら喚いておった。周りが岩ばっかだからいいけど森林でやんなよ。山火事一直線だから。

「ったく、しゃーねぇなぁ……ん？」

ぼやいていると、ふいに目の前に一際大きな石桜が落ちてきた。何となしに手のひらで受け止める。氷雪と違って溶けることもなく、いつまでも手元に残る。どこからどう見ても結晶もとい鉱物だ。コレが紙吹雪みてぇにひらひら降ってくるのだから、物理法則も何もあったもんじゃねぇな。

手のひらに納まる石桜の花びら？を見つめて、フッとニヒルにキメる。その矢先――

ガブリ、と。

どこからともなく沸いたドクロ顔の人魂が飛んできて、オレが持っていた欠片に食いついた。

「……」

束の間、硬直。

脳ミソが理解するよりも体が反応を示した。まるで虫嫌いが昆虫

にうっかり触れてしまった時と同じく、気色悪い寒気が背筋を逆撫でてゾワゾワと肌が粟立つ。全身が痙攣する勢いで震える一方で足腰がすくむ。されるがままに霊魂の餌付が続く。

ついにはヤツが食事を終えるのと同時に、目と目が合った。光彩を伴わない深淵の眼が真っ向からオレを射抜く。死神の鎌が振り下ろされた。

「ヴェァアアアア――ゴハァッ!?」

この世のものとは思えない絶叫とエア吐血を撒き散らして地面に引っ繰り返り、オレの意識はあえなく暗転した。

「将也君っ」

地上からやって来た何でも屋の青年が、なんだかとんでもないリアクションをかましながら盛大に引っ繰り返るのを目撃してしまった。地獄を司る女神ヘカーティア・ラピスラズリもさすがに意表をつかれた。

石桜は怨霊の好物である。それを知らずに拾えば手元に怨霊を引き寄せることもある。ただし、春先は地底中が石桜で覆われるので滅多に起こるものではないのだが。つまるところ、今回は運が悪かったとしか言えなかった。

彼が怨霊ひいてはオバケの類が大の苦手だと察するのに時間はかからなかった。その前にも別荘の窓ガラスを割って逃げ込んでくるくらいだから本当に怖いのだろう。

ともあれ、あんなに派手に倒れられたら笑ってばかりもいられない。頭を打っていなければいいのだけど。と、ヘカーティアは現実的な心配をする。

倒れ伏している男性は泡こそ拭いてないものの微動だにしない。そんな彼の上を例の怨霊がぐるぐると巡回して――

青年の身体の中に吸い込まれるように溶けていった。

「え……？」

直後、地面に転がっていた外来人が瞼を開き、緩慢な動きで起き上がる。それから、あたかも体の調子を確かめる要領で両手を開閉し、

その眼で周囲を見渡した。
　黒い青年が口を開く。おどろおどろしい悪意の籠った声音が反響する。
『ククッ、クカカカカ！　これはこれは、とんだ拾い物をしてしまったぞ。凡庸な人間風情が気絶して転がっていようとは愉快過ぎて笑いが止まらぬ』
「ブラザー！」
「クラッピー、待ちなさい」
　思わず彼の元へ駆けつけようとした部下を咄嗟に止める。油断なく前を見据えながら、ヘカーティアは確信を胸にして問う。
「あなた、さっきの怨霊ね」
『いかにも、いかにも。浮遊するだけの霊魂となり果てて幾年も流れ、もう数えるのも飽きた。まさかこんなところで肉体を得られるとは思わなんだぞ。クカカ』
「気分が良いところ悪いんだけど、大人しく返してくれないかしら？」
『逆に聞くが、この機をみすみす逃すとお思いか？』
「でしょうね」
　地底の怨霊とは、成仏もできず、かといって地獄に行くことすら叶わなかった罪人の魂を指す。言葉を発することもできず、旧地獄を漂うばかりの哀れな存在だ。彼らの声を聞き取れるのは、地霊殿の主か死神あるいは閻魔くらいだろう。
　しかしながら、そんな彼らでもできることが他にもある。とびっきり厄介な芸当が。それこそが憑依である。
　彼らとて霊の端くれ。そこに器足りうるものがあれば憑り付くことができてしまう。求められるは死者の体ではなく、生きた肉体。ましてや、意識を失った非力な人間なんぞ恰好の操り人形でしかない。
　数年か数十年かそれとも数百年か。久方振りに血肉を得た罪人が、己の受肉を前にして悦びに震える。
『クカカ……クカカカカカッ!!　これは良い！　この体はよく馴染むッ、馴染むぞぉおおお!!』
　あの青年に似つかわしくない狂的な哄笑を飛ばし、汚らしく涎を垂

らしながらグシャグシャと乱暴に頭皮を掻きむしる。オールバックの髪型は無残に崩れ、爪を立てて何度も何度も力任せに掻いたせいで指先に赤いものが付着していた。

爪の先端に絡みついた僅かな血液を舌なめずりして見やり、ニチャァ……と不快な笑みを浮かべる。それが彼女の不快を煽った。

「クラッピー。わかってるわね」

「う、うん……」

クラウンピースが不安そうに頷く。この子も状況を理解しているようだ。さっきは危なかったけど。

今の彼は彼じゃない。それどころか、彼自身を人質に取られたも同然であった。

さらに、事態は悪化の一途を辿る。

「綿間部……？」

この場に居合わせた誰もが、第三者の声を耳にした。綺麗な淡い桃色に色付くミディアムヘアと白いシニョンを目にした

博麗神社での宴会を早々に切り上げ、彼に会うべく地底に赴いた乙女が一人。

茨木華扇が呆然とした面持ちで、変わり果てた青年の姿を見ていた。

つづく

第六十話　「怨念が中におんねん」

「うそ……」

茨木華扇がその場に降り立った時にはもう、そこに居たのは彼女がよく知る男性ではなかった。彼とは似ても似つかない有り様に少女は言葉を失う。

毎回オールバックに固めていたヘアスタイルは、ボサボサに掻き乱されて薄汚い浮浪者もかくやに落ちぶれてしまっていた。崩れた髪型の下で、血走った眼球がひん剥かれて狂気を醸す。口の両端を歪に吊り上げ、上体を振り子のようにゆらりゆらりと傾ける姿勢が不気味さを際立たせる。

耳を塞ぎたくなる哄笑が仙人の胸をざわつかせる。赤みがかった瞳に強い意志を宿して、彼女は黒い青年に憑く何者かを睨みつけた。

「綿間部をどこにやったのですか？」

『何もしていないとも。ただ落ちていた物を拾い有効活用したに過ぎぬ』

彼の口で、彼じゃない誰かの台詞が紡がれる。

その者は彼の眼を使って、華扇のスタイル抜群な肢体を舐め回すように眺めると、いやらしく目を細めて舌なめずりした。ちっとも隠そうともしない視姦行為に、少女の頭が怒りで煮沸する。その一方で、絶対零度に凍てつくゾッとする寒気も走った。

ただでさえ地底の怨霊を疎ましく思っているのだ。下卑た面相が見るに堪えない。よりにもよってあの青年の顔でされるのが辛かった。

仙人としての矜持がなければ殴りかかっていたかもしれない。それぐらい今の彼女は腹を立てていた。

「このような行いをして、どうなるか理解しているのですか」

『はて？　どうなるのだろうなぁ？　クカカッ』

「――ッ！」

こちらの神経を逆撫でする挑発めいた文句に華扇の顔がますます険しくなる。知らずうちに己が拳をキツく握り締めていた。

鬼にも匹敵する威圧感を放つ彼女に、地獄の女神ヘカーティア・ラピスラズリが静かに言葉を落とす。
「ごめんなさい。私が近くにいたのにこんなことになっちゃって」
「いいえ、悪いのは全てあれです」
桃色の髪をした仙人は赤髪の女神を責めはしなかった。そうだ。彼女に非などあるはずがない。
(なぜ地底で綿間部と一緒に行動していたのかは気になるところですけど)
きっとあの男が道案内でも頼んだのだろう。ただ、なんで彼が女神のとよく似た黒いTシャツを身に付けているのかはわからない。それについては後でじっくり問い質そう。
(そのためには、否が応でもこの状況を打破しなくては)
もとより交渉する気など微塵もないが、まずは罪人の魂と会話を交える。忌々しい怨霊が彼の体内に留まっている限り、慎重にならざるを得ない。
「何が望み?」
『クカカ、知れた事を。悠久の時を経て生き返ったも同然なのだぞ?この肉体で思うが儘に生を謳歌するまでよ。こやつの代わりにな。手始めに地上に赴き人間どもの集落に溶け込むとしよう。道往く者から財布を掠め取って無関係な輩に濡れ衣を着せてやろうか?誰もがいがみ合い憎しみ合い貶し合うような悪評を流して殺伐とさせようか?たらふく飯を喰ったうえで代金を踏み倒してしまおうか?軟弱な餓鬼を脅して恐怖に震わせるのも、非力な女を力づくで組み伏せて従わせるのもそそられる……嗚呼!嗚呼!どれもこれもが甘美な蜜よ!想像するだけで達してしまいそうになる!』
まるで演劇のように大手を掲げて醜い妄言を熱く語る。夢に魅入った恍惚の様相を浮かべており、なのにその瞳は濁りくすんでいた。
「最低ね。しかも地獄にも行けなかった罪人にしては少し考えが小者なんじゃないかしら?」
『ふん、ならば女子供を惨たらしく殺して見せようか?丁度、目の前

に上玉の女と餓鬼がおるようだしなぁ？　クカ、クカカカカ』
「……救いようがないわね」
　地獄の女神が皮肉を吐き捨てても、それがどうしたと言わんばかりに奴は面白がった。あまつさえ彼女たちをいたぶる場面を思い描いたのか、耳障りな高笑いが響き渡る。
　その最中に、かなり苛立ったクラウンピースが一歩踏み出して啖呵を切った。
「やい！　ブラザーの体から出ていけ！」
『威勢の良い餓鬼だ。嫌だと言ったらどうする？』
「あたいがお前をやっつけて追い出してやる！」
　小さき者の果敢な勇姿を、下劣な悪漢の魂はさも滑稽だと嘲笑った。あからさまに侮った態度をされて、地獄の妖精がますます憤慨する。地団駄を踏んで叫んだ。
「バカにするな！　これでもくらえ！」
　得意の弾幕を撃とうと身構え――
『おっと動くな？　この男の体がどうなっても知らんぞ？』
　しかして、妖精の動きは相手に先読みされてまんまと遮られてしまう。それも、わざとらしく人質を見せびらかして。
　次いで、操られた男は足元に落ちていた石桜を見下ろす。鋭く尖った欠片を拾い上げ、切っ先を金髪の幼き子どもではなく自らの腕に押し当てた。
　その途端、嫌な予感がして華扇が咄嗟に声を上げる。
「待って――」
『クカカ……！』
　仙人の制止に耳を傾ける素振りすらなく。彼に巣食う邪悪な霊はニチャァと口角を上げて、肘から手首にかけて容赦なく切り裂いた。右腕の肉が削がれ、抉じ開けられた傷口から赤く色付いた血液がドクドクと脈打ちながら滴り落ちる。
　あまりにも悲惨な光景を前にして、華扇は息苦しげに胸元を抑え込んだ。瞼の裏側が真っ白に焼き付く。
『アァアア、痛い……イタイ、イタイイタイイタイ！　カカカッ、痛み

なぞいつ以来であろうか!!』
「何てことを……ッ!?　よくも綿間部の体を弄んで！」
「やめてよ！　ブラザーにひどいことしないで！」
『ヒヒヒ、余計な真似をするともっと酷くなるぞ？　嫌なら大人しくするのだなぁ？』
　罪人の非道な行いによって、クラウンピースは心に怯えを植え付けられた。人を狂わす炎を宿した松明の持ち主が、唯々叱られた幼子と同じく小柄な肩を震わせてしまう。
「ごめんなさい……ごめんなさい……！」
　鼻水を垂らして泣きじゃくる妖精を女神が後ろから抱きしめた。
「大丈夫。クラッピーは悪くないわ。よく頑張ったわね。あとは任せて」
「彼女の言う通りです。心配いりませんよ。あれが綿間部を殺すことはないでしょうから。みすみす宿主を手放すなど到底あり得ません」
　褒められた言い方ではないが、この子が取り乱したのを見て幾分か冷静さを取り戻せた。自身にも言い聞かせるつもりで、華扇もヘカーティアと共にクラウンピースを慰める。
　嗚呼。だが、しかし。此処に蔓延る不運に終わりはなかった。残酷な運命は健気な乙女たちの想いをどこまでも踏みにじる。
『はたしてそう思うか？　これほどまでに塩梅の良い肉体を失くすには確かに名残惜しい。が、如何せん蘇ったばかりで加減が難しい。手元が狂ってうっかり殺してしまいそうだ……こんな風になぁ？　クカカッ』
「な――」
　それを見て、桃色の仙人が再び絶句する。
　黒い青年に憑依した禍々しい存在は彼の体を自在に操り、今度は鉱石の刃を首筋――人の急所たる頸動脈に刺し込み始めた。まだ辛うじて浅くても、あれの気まぐれ次第で一歩間違えれば深々と突き刺さってしまう。
　まるでカウントダウンを刻むかの如く、奴はじわじわと皮膚の上から凶器で脅かしてみせた。

おぞましい未来を仄めかされて、華扇の顔から血の気が引いた。包帯の右腕を使おうにも不意を突けるタイミングがない。間に合わない。嫌だ。失いたくない。

「や、やめて……」

『ヒヒヒ。良い、良いぞぉその顔ッ！　実にそそられる！　見たところ貴様はこの男を好いておるようだなぁ？』

「そ……そんな、こと……」

『さぞ殺し甲斐があるだろうなぁ？』

外道の高笑いが薄暗い空洞を伝って反響する。

最悪の手詰まり。気丈な仙人の心はすでに折れかけていた。

力なく項垂れて、淡い桃色の前髪が彼女の整った顔立ちを隠す。為す術を失った少女は、どうか許しを乞うように掠れた声を絞り出す。

「どうすれば、綿間部を開放してくれますか……？」

『クカカ。そうさな。その美しい顔が苦痛に歪んでいく様でも拝ませてもらおうか。なぁに殺しはせん。なにせ殺してしまってはそれまでだからなぁ』

「あ、う……」

『もしかすると満足すれば潔くこの肉体を手放すやもしれぬぞ？　ん？』

悪魔の囁きが嘯かれる。偽りと欺瞞に塗れた甘言が、たった一本の救いをもたらす蜘蛛の糸に映った。それがたとえ毒蜘蛛の罠だとわかっていても。

赤みがかった瞳が悲しみに濡れる。仙人ともあろう者が、こんな低俗な輩の言いなりになるしかないなんて。

でも、どんな責め苦を受けようとも、万に一つでも彼を助けられる可能性があるのなら賭ける。だって私は人を導く仙人なのだから。綿間部を見捨てるなんてできない。したくない。

「わかり、ました……」

『ヒヒ、良い返事だ。そこの女もだ。わかっておるな？　もし抵抗すればこの肉体を今すぐ切り刻むぞ？』

「女神に手を上げようだなんて、とんでもない不届き者がいたものね」

「そんな!?　ヘカーティア様ぁ！」
「大丈夫よ。クラッピー」
深い絶望の中、一縷の望みをかけて華扇とヘカーティアが僅かに目配せを交わす。
仙人と女神、どちらも並の人間よりは強い身体を有する。そう易々と敗れたりはしない。兎にも角にも耐えて、彼奴めの気持ちが一瞬でも緩んだ隙を突く。彼の中から怨霊を押し出すのだ。恐らくそれが最後のチャンスになる。
『さぁ、こちらに来るが良い』
命令に従順な振りをして、彼女たちは横並びに立たされた。両者ともに女として恵まれた身体をしているために、豊満な胸や短いスカートから剥き出しの太腿のあたりを粘っこい視線で撫で回される。
屈辱だった。けど、我慢するしかない。本来の彼だったらこんなこと絶対にしないのに。
「Ｐｌｅａｓｅ！　お願いだよぉ！　もうやめてよ！　ヘカーティア様っ、ヘカーティア様ぁ……っ！」
『心配せんでも良い。次は貴様の番ぞ？　乳臭い小娘が泣き叫ぶのは見ていて愉しいのでなぁ』
「まさかクラッピーにまで手に掛ける気？」
『クヒヒ、応とも。その前に貴様等よ。気道を塞ぎ息苦しさに喘ぐ面を愉しむとしようか。殴り倒してしまってはせっかくの顔が拝めんからなぁ？』
ご丁寧に前もって教えてくれる。所詮、不安を燻らせるだけの悪趣味でしかなかった。魂胆がわかってしまう分、悔しさが増す。
彼の――否、怨霊の腕が抵抗できない女たちの首元へ伸ばされていく。わざわざ彼女たちを並べたのは二人一緒にいただくためだったらしい。その強欲さに関しては罪人なだけあった。
「くっ……!?」
差し迫る辱めに華扇は身を固くする。負けてなるものかと奥歯を食いしばり、でも現実を直視したくなくてギュッと目を閉じてしまう。

ついに悪党の指が茨木華扇とヘカーティア・ラピスラズリの喉を鷲掴みにしようとした。

――が、なぜかその動きが寸前のところで突如止まった。

『……な、んだ。これ、は？』

「……ぇ？」

怨霊が口にした不可解な一言が聞こえ、桃色の少女が恐る恐る瞼を開く。

あの青年からは想像もつかないおどろおどろしい形相が眼前にあった。思わず悲鳴を漏らしそうになったのを必死に飲み込む。

何かが起こっていた。邪悪な彼奴が戸惑いを抱くほどの予想外の何かが。

男の足が一歩、二歩と後ろに下がる。まるで拘束された四肢を無理矢理にでも動かしているかのように。

そして彼の口から、静かな怒りに満ちた声が放たれる。ずっと聞きたかったぶっきらぼうな口調で、

「テメェ、この女に手ェ出したら骨十五本折って殺すぞコラァ……ッ!!」

「綿間部ぇ！」

「将也君！」

「ブラザーッ！」

「フッ、待たせ――」

『――この人間めが、自力で自我を奪い返しおったか!?　おのれ往生際の悪い――』

「――うるせぇバカヤロコンチクショウがオラァ！　よくもヒトの大事なモンをブチ壊そうとしてくれやがってよぉ！　あと勝手にオレの身体乗っ取りやがって不法侵入やぞワレェ！」

凄まじい激情がヒートアップし過ぎて、ぶっきらぼう通り越してヤクザ口調になりつつあった。正義の怒り？　違ぇよ。ただのマジギレだ。

オバケがオレの体内に住み着いているおぞましさもある。だが、そ

れ以上にオレの体を使って華扇とヘカーティアを傷つけようとしたのがダントツで許し難い。野郎ブッ殺してやる。

今にも泣きそうな赤みがかった瞳を見た瞬間、雁字搦めになっていたオレの理性が雄叫びを上げた。鬱陶しい呪いの鎖を引きちぎってみせた。

ゼッタイに、この女だけは何があっても傷つけさせねぇ……!!

「華扇！　オレごと殺れ！　死体になっちまえばコイツも操れねぇんだろ!?」

「で、でも……」

「でもじゃねぇ！　オレじゃこのバケモンを追い払えねぇんだよ――ぐおっ!?」

『――ヒヒヒ、わかっておるじゃないか？　おどかしおって非力な人間風情が――▪――なに!?』

「――テメェだってどーせくたばる前は人間だったんだろうが！」

まるで下手な一人芝居かパントマイムの如し。一つの体から二人分の言葉が交互に飛び出す。

目に見えない精神世界ではオレとヤツとのマウントの取り合いが勃発していた。取って取られて取り返して取り上げられて取り戻す。ゲシュタルト崩壊が起きしそうなレベルでワケがわからなくなってくる。

何度目かの主導権を奪取して、すぐさま仙人サマへ怒号を飛ばす。

「早うせぇや華扇！　オレがオレじゃなくなっちまう前に！」

「ま、待ってください！　他にも方法があるはずなの。だから、だからもう少し頑張って！　お願い……！」

またもや泣きそうなツラになって仙人サマが躊躇ってしまう。ここにきて最後の一手が決まらない。

いくらガンバレと言われてもこちとらすでに力負けし始めており、このままだと完全に乗っ取られるのも時間の問題。だとしても、オレっつー存在が消えてもなお体だけが己の意思とは無関係に悪事の限りを尽くすなんざ冗談じゃない。それもうゾンビと同類じゃねーか。

「!?」

ドクン、と重苦しい動悸が心臓に鳴り響く。脳ミソがやたらめったら乱高下して掻き回される。ヤバイ。また奪い取られちまう……!?

「ぐぉおおおああッ!?」

「綿間部!?　お願い、負けないで!」

「無茶言うなや……!　クソッ、こうなりゃヘカーティアでもクラウンピースでもいい!　やっちまえ!　オレごとブッ殺せ!　遠慮すんな!　祟ったりしねぇから!」

ありったけの声量を飛ばしてこの場にいる連中を叱責する。

そらオレだって好き好んで死にたくない。けどもう時間が残されていないのだ。もし自爆装置があったら迷いなく押していただろう。

ところが、桃色ミディアムヘアの女だけでなく女神サマもチビ妖精もこちらの要望に反して手を下そうとはしなかった。ヘカーティア・ラピスラズリがそっと瞼を伏せ、クラウンピースは大きく首を横に振って駄々をこねる。

「ごめんね将也君」

「Ｎｏ……嫌だよ、できないよぉ……」

「だーもうどいつもこいつもヘタレやがって――がっ!?」

とうとう力の均衡が揺らいだ。オレの中にあった何かが逆転する。

辛うじて自我は残っていた。しかし己の体が理性とは裏腹に動き始める。支配権が再びヤツの手中に落ちた証拠であった。

「げ……この、ヤロっ」

「綿間部!?」

「将也君!」

「オメーら離れてろ!」

怨霊のヤロウとてつもなく執念深かった。女二人の首を絞め落とそうと徒手が喰らいかかる。しかも逃げろつってんのに仙人サマも女神サマもこっちの心配をしていやがった。

「さっせるかぁぁあああああっ!!」

外道なんぞの好きにさせて堪るものかと全身全霊で抗う。手足を踏ん張り、思いがけず力が籠ったせいで腕の傷口からの出血量が増

す。だぁあクソ痛ぇ！　痛覚はオレ持ちかよ気が利かねぇな！

その時、不思議な事が起こった。

喉笛に噛みつかんとする指爪を地面へと逸らし、どうにか女二人から狙いを外す。

しかしそれも束の間、下向きに抑えつけていた両腕がまたも反旗を翻し、勢い余って振り上げられた。そいつはさながら象の鼻の如く天高く嘶く。

あろうことか、その際、荒ぶる左右の手が彼女たちのミニスカを捉えてしまった。

フックの形に折り曲げられた指先が、それぞれの短い裾に引っ掛かり絡まって、そのまま思い切り引っ張り上げられる。まさに風を巻き起こす大振りで、一切合切の遠慮なく。

捲られた二つの布地は、あたかも蕾が開花したみたいに眼前いっぱいに舞い広がった。

「え……？」

「あ……」

「――――」

小さな傷痕ひとつない真っ新な白い素肌が視界に飛び込む。

スラリと伸ばされたふくらはぎまでなだらかな脚線美が描かれ、瑞々しく肉付きの良好な太腿が余すことなく晒される。隙間なく閉じられた内股の上を繊細な布地が覆う。

レインボーカラーのミニスカの下に隠されていたのは、薄く透けた紫色のランジェリー。左右の腰の付近を紐で結び、Ｔ字型で布面積も際どいセクシー系であった。

緑色の短い裾が捲れて、持ち主の品行方正な性格に反してかなり攻めたデザインの黒いパンティが露わになる。レース生地の装飾が花びらのように施され、アダルトチックな色気を増した大胆さで魅せる。そのうえ、キメ細やかな美肌とのコントラストが芸術的に眩しかった。

この間、おおよそ五秒。

怨霊ヤロウも予想だにしなかったらしく、いつの間にか体の制御が

全てオレ側に戻っていた。
ただし、ヤツだけではなく仙人サマと女神サマも唖然とした顔で目を丸くしておった。もちろんオレも。誰もがその場に立ち尽くす。
『……』
一応、この上ない絶好の反撃チャンスとなったハズだ。今を逃せば次はないかもしれない。ならばもう一度、彼女たちに発破をかけるべき。そうするべきなのだ。
しかし悲しきかな、やっとこさっとこオレの口から出てきた言葉は決死の喝なんかではなく、コレであった。
「い、いや違う。今のはオレじゃねぇ。怨霊の仕業だ」
へっぴり腰で自由になった左右の手を慌ただしく振って言い訳を捲し立てる男がそこにいた。
必死に弁明するものの、紫色と黒色のランジェリーが記憶にこびりついて離れない。下があんな感じならブラもそれに見合ったものだろう。って、ナニ考えてんだオレは。
「もう、将也君ってば強引なんだから。そういうのはムードを考えてほしいな」
赤髪セミロングの女神サマが茶化す。彼女にしてはホントに珍しいことに、ほんのわずかに頬を染めてレインボー色の裾に手を添えた。大人びた女が恥ずかしがる仕草に不覚にもドキリとしちまう。
で、もう一人の女はといえば……
「ふふっ、ふふふふふふ」
それはそれは大変可笑しそうに笑っていた。
目がヤバかった。瞳から光が消失しておった。怨霊を上回る虚ろさで瞳孔が定まっていない。世にいうハイライトが消えた状態であった。
柔らかな桃色の髪を揺らして、白いシニョンと紅い中華衣装の仙人サマが一歩ずつ近寄る。オレは思わず後退してしまう。
「油断していました。ええ、油断してしまいましたとも。そうですよね。たかが怨霊に取り憑かれたぐらいで綿間部の破廉恥がなくなるはずなどありませんよね。私としたことが見誤ってしまいました。

考えを改めなくてはいけません」
「オ、オイ……」
　無機質な笑みで迫る仙人サマに恐れをなして、あっちが一歩前に進む度にこちらは一歩下がった。
　ちょっと前までの泣き顔が嘘だったかのように、女が豊かな胸元の前でコキリと指を鳴らす。何という臨戦態勢。表情は依然として変わらず、なれどドス黒い怒りのオーラが溢れ出る。一方こっちは冷や汗が止まらない。
「先ほど自分ごとやれと言いましたね？　ええ、わかりました。さぁ歯を食イシバリナサイ」
「いやちょいタンマ待った待った！　やっぱり前言撤回だ！　あとお前らの勝負下着見ちまったのはオレのせいじゃ――」
「うるっっさい!!　こんの……ド変態の色情魔ぁあああああああああッ!!」
「ごぼぉぉおおおおおおおおっ!?」
　張り手――否、八卦掌が炸裂する。
　音速を超えて撃ち出された掌が一撃必殺の威力をもってオレの鳩尾を内臓ごと押し潰す。想像を絶するパワーの暴発が爆ぜて、衝撃波が背中を突き破った。さらに飛び出たのは余波だけではない。
『――――!?』
　まさかの人魂ドクロの怨霊も出てきた。どうやらヤツも八卦掌の直撃を受けたらしい。これぞ一心同体の弱点であった。なおオレの身体は一撃ＫＯである。
　宿主の体内から引き剥がされて、悪しき人魂が猛スピードで一直線に吹っ飛んでいく。挙句の果てに、霊体の特性というか物理法則をガン無視して岩盤にブチ当たり、轟音を鳴り響かせて硬い壁面にヒビ入りの凹みが出来上がった。
　そしてトドメに、燃えカス同然となった死に損ないの目の前に、赤髪セミロングの女神サマと金髪フェアリーの地獄コンビが立ちはだかる。
「ちょっとおいたが過ぎたわね」

「I☒m　ａｎｇｒｙ！　もう許さないからな！」
犯罪係数許容外。断罪宣告が下された。
弾幕と思しき光弾が二人から放たれて怨霊を容赦なく撃ち抜く。エネルギーの弾丸に貫かれた人魂ドクロだったものは、青白い火の粉と化して散り散りになって消滅した。
悪の目論見は完膚なきまで滅びた。もう脅かす者は何もない。ない、ハズなのだが――こっちはこっちで大変なコトになっていた。
「まったくもぉ！　どうして綿間部はいつもいつもこんなことになるのですか!?」
「ォ……オゲェ……っ」
「わかっていますか？　そもそも精神が未熟だから煩悩にも塗れるし怨霊にも好き勝手にされるのです。本当にもう、あれだけ心配させておいて結局はスケベなままだなんて信じられません！　あんなに稽古したのに、まだまだ修行が足りないようですね。不規則な生活習慣も問題です。今回のことでしっかり反省して改めなさい。日の出とともに起床して、昼間は汗水垂らして懸命に働き、夜更かしなどせず安らかに眠る。そういう健康的な生き方をすることが大事なのです」
「おま、蹲って吐きそうになってるヤツに他に言うことないんか……？」
「あっ、そうです！　さっきはガッツリ見てましたよね!?　ちっとも目を逸らそうともせずに！　もぉ！　綿間部のエッチ！　エッチエッチエッチぃ!!」
「そっちじゃねぇだろ……！」
「あとその服は何ですか！　ま、まるで彼女とお揃いみたいじゃないっ」
もはや説教なんだか悪口なんだかわかんねぇ。ズキズキと痛む腹を抑えながら華扇の言及のマシンガンに打ちひしがれる。オマケに右腕からもかなりの血が失われてんのだが。誰か救急箱をくれ。
結局、地獄コンビが戻ってきてもそっちのけ。女神サマはニコニコしてるだけだわ、アメリカン妖精は満面の笑みで「バンザーイ！」とかやってるわ。いや万歳じゃねーよ急患だよ。

混沌の状況下にスキマが開かれて八雲紫がひょっこり現れる。
「お待たせしましたわ。そちらも用事が済んだでしょうしそろそろ地上へ――あらまぁ、地底で鬼と喧嘩でもしてましたの？」
「あー……ま、（説教の）鬼ならそこにおるわな」
「だだだっ、誰が鬼ですか!?　何の根拠もなしにいきなり変なこと言わないでください！」
何か知らんけど鬼呼ばわりされたことに華扇が過剰反応してます騒ぎ出す。顔を真っ赤にして説教の雨あられを浴びせてきやがった。いやうるせぇよ。
でもこれが平常運転になりつつあるあたり、オレはもう手遅れかもしれない。
「綿間部!!」
「だーもう説教よりも先に応急処置してくれマジで頼むからぁ！」
チクショウ、こんなの全然ハードボイルドじゃねぇぜ。

「あ、クロくんおかえり……わわっ!?　どうしたの!?」
「華扇に襲われた」
「お、襲ってなんかいませんッ!!」
つづく

第六十一話　「ケガニンスレイヤー」

半分の月が昇る夜空。

叢雲ひとつない宵闇の天を見上げて気分も上々……のハズだった。

「で、こりゃ一体どーゆー了見だァ？」

アジトから人里に繰り出して早々に華扇に捕獲され、「出掛けますよ」の一言でズルズルと引き摺られていったのが二時間前かそこら。お前コレ拉致じゃねーのか。

あれやこれやで辿り着いたのはいつぞや以来の博麗神社。しかもだ、これがまたかつてと同じ有り様でお出迎えときた。

まず石畳の境内に茣蓙が敷かれている。さらにキャンプファイヤーかとツッコみたくなるようなクソデカい焚火が燃え盛っておるわ、かがり火やら石灯籠やらも灯っておるわでとにかく明るい。誰が見ても紛うことなき宴の会場であった。

というか、とっくに数多の個性派キャラな女性陣がやいのやいのと酒盛りをおっ始めておった。

鳥居の前で立ち尽くし、胡乱な目つきを隣に並び立つ女に向ける。

「オイ華扇。どーなってんだ」

「どうって、見ての通り宴会ですけれど。何かおかしいところがありましたか？」

「ハナシが違ぇんだが」

「？」

柔らかな桃色が目を惹くミディアムヘアを仄かに靡かせて、白いシニョンを括った仙人サマが小首を傾げる。

コイツは知らんだろうけど、先日の伊吹萃香から引き受けた地底行きのすったもんだは、ヤツが宴会の準備で忙しいなどと抜かしやがったのも一端にある。

ところがだ。その宴会は今夜、今まさに目の前で催されているという始末。よもや前日から食材集めに奔走していたハズもなし。あのチビ鬼の性格を考えれば、なおのこと。それこそこの仙人サマじゃあるまいし。

「おや、お前も来てたのか」
「あ！　おうコラテメオイ」
「綿間部、まともな言動になっていませんよ。頭が悪そうに見えます」
「うるへー」
　噂をすれば、何食わぬ顔で下手人が暢気にしゃしゃり出てくる。二本角がやたら目立つちんまい鬼っ娘が、自前の瓢箪を弄びつつ酔っ払いの赤ら顔でちょっかいをかけてきた。
　明らかに宴会前から呑んでいた疑いあり。星熊勇儀もそうだが鬼ってぇのはこんなんばっかかよ。一人ぐらいマジメな鬼はおらんのか。
「オメーよぉ、宴会ってぇのは昨日じゃなかったんかい」
「いんや、昨日もあったよ？　今日は今日でまた宴会さ。ひょっとしたら明日もあるかもねぇ」
「何やそのデスマーチは」
　ニヤけたツラで空恐ろしいことをしゃべくるチビ鬼に軽く引いた。コンパ好きの大学生共ですらそこまでやらんだろ。幻想郷の連中の肝臓はバケモンかよ。
　ちんまい鬼は「イヒヒ」とメンドクセェ具合に笑いながら、のらりくらりと体を揺らす。性懲りもなく酔い踊る醜態に、華扇が溜息混じりで頭痛そうに額に手のひらを重ねた。
「まぁ、実際にそのような異変がありましたから。この萃香が犯人で、誰もが疑問を抱くことすらなく連日連夜に続く宴会を行ったというものですが」
「ああ、あったあった。懐かしいねー」
「それ異変ってぇレベルなのか？」
　三日三晩ブッ通しで飲み会やってただけとか、さして害はなさそう。もっとも、参加者全員が無自覚っつか違和感なしとなれば、それはそれで恐怖かもしれんわな。
　そんな折、チビ鬼がオレの腕の異常に気付いてしばし目を瞬かせた。肘から下にかけて巻き付けられた白い布切れ。当然、つい最近までそんなものはなかった。

「何だ何だ、右腕に包帯なんか巻いちゃって」
「地底で負傷したのです」
「そりゃ災難だったね。お気の毒に」
「まったくだ」
オレ自身も散々だったもんで記憶があやふやだが、クソッタレな怨霊ヤロウに身体を乗っ取られた時にやられた傷だ。リストカットじゃなかっただけマシだろうか。つっても痛いことに変わりはない。
治療の痕を伊吹萃香がまじまじと見つめる。それから口惜しそうに「うぅむ」と唸りながら腕を組んだ。てっきり見舞いの一言でも寄越すのかと思いきや、
「華扇とお揃いになったもんだから、二人が血の契りでも交わしたのかと思ったんだけどねぇ。ちぇー、違ったのか。残念残念」
「なぁあ?!」
華扇の素っ頓狂な裏声がその辺の雑音をかき消した。血の契りって何やねん。極道かよ。
言われてみりゃ確かに、オレも華扇も右腕に包帯を巻き付けている。ついこの間、赤髪セミロングの女神サマとプリント文字付きTシャツでペアルックしたばかりだってぇのに。ビミョーなところで偶然が重なったもんだ。
うっかり出た変な声を咳払いで誤魔化してから、マジメな顔つきになって仙人サマが鬼っ娘を嗜める。
「か、からかわないでください。本当に大変だったのよ」
「そうかい。そりゃ悪かった。ところで勇儀の様子はどうだった?」
「今のオメーと大して変わんねぇよ。真っ昼間から酒かッ喰らってたわ」
「ふっふー、それが鬼ってもんさ。なぁ華扇?」
「……知りません」
伊吹萃香がふらりとどこかへ消え、ひとまず見知った顔の何人かに声をかけておいた。
ついでに参加費代わりに例の金粒をいくつか賽銭箱に放り込んで

おく。それを見た博麗の巫女がすかさずグッと親指を立ててきた。神職なクセに俗物なやっちゃな。

その後はテキトーに隅っこで酒とツマミを片手にチマチマやらせてもらう。どいつもこいつもそれぞれが好き勝手にやっている印象があった。これが幻想郷の飲み会スタイルってか。

何となく箸を使う料理は避け、枝豆など手掴みで食えるものや爪楊枝でいけるものばかりに手が伸びる。これといって他意はないつもりだったが、目敏い付き人がそんな些細な傾向に気付いた。あまつさえ利き腕が満足に使えないのだと誤解まで招いちまった。

その結果がコレである。

「はい、あーん」

「……むぐ」

「他にも食べたい料理があったら言ってくださいね」

「いや自分で食えるっての」

「血が足りてないならお肉がいいでしょうか？　ちょっと待っててください。あちらも程好く焼けたようですので取ってきます」

「マジで頼むから聞けって」

こっちの制止もまるで届かず。オレに付きっきりだった華扇が今度はキャンプファイヤーのもとに向かっていく。ムダに手際がイイせいで見送ることしかできない。

轟々と燃え盛る焚火の上で、伊吹萃香が狩ってきたという巨大なイノシシの丸焼きがこんがりと出来上がっていた。天人と貧乏神コンビのときに出くわしたヤツではない。どことなくサイズが違う。別個体であろう。そう願いたい。

ド級の焚火の前に居座ってヤバいくらいに大量の汗水を垂らす水色のガキんちょを華扇が遠ざけさせる。アイツも妖精なのだろう。三月精と似たモノを感じる。

じっくり炙られたボリューム満点な肉塊をケバブみたいに削ぎ落し、取り皿に盛り付けて戻ってきた。

「お待たせしました」

「あぁ。さっきのガキんちょは大丈夫なんか？」

「ええ。氷の妖精なので万が一に備えて避難させましたけど。あの子は妖精の中でも力を持っている方ですから、なんだかんだ言っても大丈夫だと思います」
「アレ汗じゃなくて溶けてたんかよ」
さらりと言ってのけとるが、それ危うく酒の席で一つの生命が消えるところだったんじゃねぇかよ。さっきのチビはきっとバカなのであろう。自らの属性を忘れて弱点に接近するなんざ正気じゃねぇ。
「よいしょっと」
再び仙人サマがオレの隣に座って「あーん♪」とニコニコ笑顔で焼き肉を口元に運んでくる。赤みがかった瞳が心なしか輝いておった。そんなにコレ楽しいのか？
「……はぐ」
もうどうにでもなれと無心になって食いつく。別に嫌じゃねぇけど小恥ずかしい。もどかしい感情が表面に出てこないように仏頂面になって咀嚼する。
料理と一緒に羞恥プレイを味わわされていると、ミスティア・ローレライと奥野田美宵の居酒屋コンビがオレらのもとに来た。何気に宴会で会うのは初めてかもしれない。
「クロくん、仙人さんに食べさせてもらってるの？」
「え、お客さんどうしたの？」
すでにオレのダメージを知っている奥野田とは対照的に、これが初見の和服女将はオレの腕に巻きつけられた白い医療品に心配そうな視線を落とした。
そこまで大したことじゃねぇと、フッとニヒルに気取って右腕を掲げてみせる。
「仕事でちぃとやらかしてな」
「そうなの……またこんなにボロボロになって」
「もう慣れたことだ。今になって気にするほどじゃねぇよ」
「そんなこと言わないで。お客さんにもしものことがあってお店にも来なくなっちゃったら、あたし悲しいわ」
瞳を哀れみに濡らして、女将のほっそりした指が包帯越しの傷口に

添えられる。あざとい。
「むー」
その傍らで、華扇が頬っぺたを膨らませてオレに刺々しい眼差しをぶつけてくる。オレは何もしとらんやろ。
やましい気持ちはないものの、酒を取ってさりげなく和服鳥娘の手を解いておく。こんなことで説教されたら堪ったもんじゃねぇ。というかここだけピンク率高ぇなオイ。
「ま、テメエでメシも食えるし問題ねぇぜ。コイツが過保護なだけだ」
「何を言いますか。綿間部は怪我人なんですから、こんな時は大人しくお世話されればいいんです。そのために私がついているのですから」
「そのケガ人を飲み会に連れ出すのはどーなんだ……？」
毎度恒例の軽口減らず口を叩く。いや、飲み会は別にいいんだけどよ。さっきから自分で食えるっつってんだろうが。
そんな相変わらずなオレと華扇のやり取りを二人が微笑ましげに眺める。おもむろに、鯨帽子を被った外ハネ系ピンクショートの仲居が緑の瞳を輝かせて、こんなコトを言い出した。
「ねっ、私もクロくんにご飯あげてもいい？」
「あ、ズルい。あたしもやってみたいわ」
「え？　ええ。構いませんが……」
「いや構えよ」
どーゆーワケか動物園の触れ合いコーナーみてぇな流れになってきた。ウサギのエサやりちゃうぞコラ。あとなしてオレじゃなくて華扇に許可を求める。
悲しきかなオレの意見は見事にスルーされ、夜雀の女将と鯢呑亭の看板娘が楽しそうに料理を取り皿に移していく。
「やっぱり男の人ならお肉いっぱい食べたいよね」
「美宵ちゃん、鶏肉はやめてね」
「あんまり肉ばっかりにしない方がいいわよ。その人、ここ最近ずっとうちで肉料理しか頼んでないから」
『えっ』

どこからともなく赤マントとマフラーの女が会話に割り込んできた。赤蛮奇のクールな一言に、奥野田とミスティアだけでなく華扇までもが彼女に注目する。その瞬間、真偽を問うアイコンタクトが女たちの間で飛び交った。赤蛮奇がコクリと頷く。

ほどなくして、その視線がそっくりそのままオレに切り替えられた。

「綿間部？」

「クロくん？」

「お客さん？」

「しゃーねぇだろ……」

茨木華扇と奥野田美宵は偏った食事メニューを咎めるような眼差しでチクチクと、ミスティア・ローレライはチキン料理をたらふく食ったのではないかと問い質す鋭い眼光でジーっと。三者三様の反応でオレを見据える。赤蛮奇は言わんこっちゃないとばかりに呆れていやがった。お前が余計なこと言い出したからだろうがい。

こちとら繁華街で生きてきた男なのだ。偶には脂っこいジャンクフードに偏る日だってあるわ。言うても幻想郷にハンバーガーチェーンはねぇけど。串焼きとかそんなところだ。

「野菜のモンだって注文してんだろ。一応」

「お新香のこと言ってるの？」

『……』

アカン、ますますジト目が威力を増した。さすがに今のはダメだったか。

「綿間部、今夜はもうお肉禁止です。いいえ、今夜だけでなくしばらく控えてもらった方が良いかもしれませんね。これ以上は健康を損ねます。ですが、私がしっかり管理してあげますから心配いりません。ちょうど良い機会ですし、また修行しましょうか」

「ちょ待て」

せっかく取ってきた焼き肉をオレから隔離して仙人サマが告げた。美味そうなツマミが無慈悲にも引き離されるのを止めようとするが、マジメが入った女は待ってくれなかった。あげくに自分で食べてし

まう。ベタなことに頬に手をやって、わかりやすく美味しそうなリアクションが若干腹立たしい。
「大丈夫よ、クロくん。お野菜でも鉄分は取れるから。というわけでほうれん草のお浸しです」
「いや別に野菜嫌いってぇワケじゃねーぞ」
「じゃあ、アーン」
「だから」
「アーン」
「……あぁ」
どことなく逆らい難い謎のナニカを感じ取り、根負けして渋々と口を開く。
あっさりめの出汁を十分に吸ったほうれん草は噛めば噛むほど味が沁み出てくる。野菜本来のシャキシャキした歯触りも失われず、素材の旨味も引き立てられていた。脂っこいモノの後の口直しにもうってつけといえよう。
立て続けに、奥野田とは反対側からも料理を摘まんだ箸の先が寄せられる。
「ネギも美味しいわよ。焼くと香ばしい匂いもして、おつまみにはピッタリなんだから。はい、どうぞ」
「……あむ」
「あはは、お客さん雛鳥みたい」
ネギまのネギ単品に近い、言うなれば焼きネギというべき立派なツマミであろうか。コレが特に日本酒との相性がカンペキだった。
醤油あるいは味噌を塗って網焼きにすればネギ独特の香りも立ち上って、酒飲みも食欲をそそられる。焦げ目の僅かな苦みもあり、それでいて口から鼻に抜けるサッパリした後味が残った。
いや、美味ぇよ。美味いんだけどよ。いい加減に自分で食わしてくれや。
「ちなみに鉄分は枝豆やほうれん草の他にも春菊などにも多く含まれています。皆さんはちゃんと野菜も食べましょうね」
「なしてカメラ目線やねん」

つづく

第六十二話　「介抱と甘やかしプレイは全然違う」

あれからもピンクカラーな三人娘から代わる代わる食べさせっこ（ただし一方通行）させられた。いよいよ腹がパンクしそうになった頃、やっと食攻めから解放される。死ぬかと思ったわ……

食休みがてら酒を飲みながら談話に興じる。ようやく飲み会らしくなった。さっきまでのは一体何だったのか。当事者のオレですら未だにわからねぇ。謎に恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。

そんな折、奥野田美宵が思い出したように問うた。

「ところでクロくん。その怪我だと色々大変じゃない？　このままで大丈夫なの？」

「あー……そーだな」

腹八分をぶっちぎり満腹の限界ギリギリまで追い詰められたおかげで反応が鈍る。ちょっとした質問に答えるのにも一苦労だ。フォアグラってぇのはこんな感覚なのだろうか。

かろうじてゲップを堪えながら、少し間をおいて雑っぽく応じる。

「ま、別に骨が折れたわけじゃねぇし心配いらねーよ。どーにでもならぁ」

「そうなんだ。何か困ったら遠慮しないで言ってね？　私にできることならいつでも手伝うから。あ、でもお店のある時間はダメかもだけど」

「そらどーも。言っておくが、もうメシは自分で食うからな。ゼッタイに手出しすんなよ。わかったか？」

「うふふ、恥ずかしいからですか？」

「あぁそうだよ悪ぃかよチキショーめ」

仙人サマの茶々にしかめっ面で言い返して、悔し紛れに盛大に音を立てながら日本酒を啜った。つっけんどんな口調とは真逆に素直に認めたセリフのギャップがウケたらしく、桃色ミディアムヘアの女はくすくすと笑みを零した。なにわろてんねん。

すると、またしても何かしら思い付いたようで、鯨帽子の女がポンと両手を重ねた。ソプラノ声が楽しげに言葉を紡ぐ。

「あっ、そうだ。これでも私、耳掃除が得意なの」
「藪から棒に何だってぇんだ」
「だからクロくんにもシてあげる。お店が終わった時間に来てくれたら、こっそり内緒でサービスしちゃう。特別ね？」
「ハ――」
「はぃいいい!?」
なぜかオレじゃなくて華扇がおったまげた。うるせぇよ。周りの連中から変に目立つだろうが。
というか、看板娘の耳掃除とかどんな特殊オプションだ。知る人ぞ知る鯢呑亭の裏メニューかよ。それ違うタイプの店になんぞ。
「あはは、面白そうかも」
さらに、ヤツメウナギ屋台を営む和服の夜雀もこの流れに乗っかってきやがった。何人もの常連客もとい彼女のファンを生み出してきたであろう、愛嬌のあるスマイルをたたえて追撃に出る。
「そういうことなら、あたしは子守歌でも歌ってあげようかしら。歌には自信あるもの。怪我を早く治すのにも安眠は必要不可欠でしょ？　何ならお客さんが眠りにつくまでお腹ポンポンしてあげる」
「え――」
「え、えぇえぇ!?」
って、さっきからやかましいわ。お前オレのセリフ遮ってばっかりじゃねぇかよ。
「じゃ、じゃあ私は……！」
オロオロと焦った様相で華扇が勢いのままに口走ろうとしている。どこぞの漫才じゃあるめぇし張り合わんでもエエだろうが。
美宵の耳掃除（膝枕付き）もミスティアの子守歌（おそらく膝枕付き）も見方によってはカネが取れるサービスに違いない。二人とも容姿がかなりイイのもあって人気を博している女だ。が、耳掃除にしても子守歌にしてもわざわざケガ人に今すぐすることじゃねぇ。
念のため言っておくが、別にケガしてなくてもやってもらおうとか思っちゃいねぇぞ。ハードボイルドな夜を生きる男に甘やかしプレイなんざ一切合切断じて不要だ（つい先ほどまで可愛い女の子三人か

ら「あーん」してもらった男）
「ったく、ヘンなコトにいちいち気ぃ回さんでエエわ」
「そ、そうです！　どうしてもというなら私が――」
「嗚呼、おいたわしや何でも屋さん」
「ぬおっ」
　色香の濃さが漂い、しなを作ったような甘ったるい声音が後ろから絡みつく。するりと白い細腕が背後から伸びて、あすなろ抱きで胴体に回される。妙に艶めかしい香水の匂い。
「青娥……」
「あらあら、せっかくの楽しい宴会にそんな怖いお顔はご法度ですことよ？」
　華扇が同業者を相手にしているとは思えないほどに苦虫を噛み潰したみたいなツラをしておった。何となく理由はそれだけではなさそうだが。そういや直前に何か言いかけていた気がする。最後まで聞き取れなかった。
　しれっとオレの肩に顎を乗せて妖艶な顔を寄せるのは青い女仙人、霍青娥。またの名を青娥娘々。
「何の用だ」
「つれないことを言わないでくださいまし。何でも屋さんが痛々しい傷を負ったと聞き及びまして、わたくしこんなにも胸が張り裂けそうだったというのに」
　そう言いつつ両腕を組んで自らのご立派な乳を押し上げた。ただでさえ胸元がおっぴろげにした大胆な衣装だってぇのに、恥じらうどころか率先してご自慢の谷間を見せつけてくる。並みの男連中ならあまりのエロさに理性が酩酊しかねない。
　わざとらしさが見え透いてオレは興覚めするけど。ガン見したワケでもねぇのに赤蛮奇が冷たい視線を浴びせてくる。理不尽だ。
　神霊廟の連中は来ていないのかと探せば、豊郷耳神子をはじめとするメンツが守矢神社の神や巫女と座談会をしていた。宗教について熱く語っているのかもしれない。こっちもマジメか。
　オマケに喧しいヤツと並んでゴースト女が一緒にいるのも見つけ

て人知れず動揺する。地底での一件で苦手克服した気でいたのだが、どうにも思い違いだった模様。クソ、情けねぇぜ。

青髪をメビウスの輪の形に括った美女がつらつらと述べる。

「わたくしもお世話して差し上げたくてお声がけしましたの」

「っかー、聞いてたんかよ」

「何をするつもりですか。それよりもいい加減に綿間部から離れなさい！」

「あぁん、いけず」

臨戦態勢の華扇が霍青娥を力づくで引き剥がす。

紛らわしい嬌声を上げんじゃねぇよ。あと何故にどいつもこいつも次から次へとこっちに来るんだ。あえて隅っこに集まるとか逆に怪しいだろうが。

「ウフフ」

「ったく……」

霍青娥が唇を舐めて魅惑の流し目を送ってくる。

どこか意味ありげな女の表情は甘い罠。いとも簡単に男を落として沈める底なし沼か、あるいは蟻地獄の如きえげつなさ。使い手は蟻というより夜の蝶みてぇな女だが。いちいちエロいのはどうにかならんのか。

「クロくん……」

「お客さん……」

「これだから男は」

奥野田とミスティアもどことなく悲しそうな顔をしている。いやだからオレには効かないつっとるやんけ。軽薄な軟派チャラ男に思われるのは勘弁してほしい。あと赤蛮奇がさっきから辛辣過ぎる。オレがお前に何をした（パンツ見たことある）

どよめく周りなんざ知ったこっちゃないと、魅了の女仙人が口説くようにご奉仕を持ち掛ける。

「耳掃除や子守歌よりも切実な問題ですわ。利き腕がままならないのなら、用を足すのも一苦労でしょう？　ですので、わたくしが何でも屋さんの下の世話を。それに、殿方でしたら別の方も溜まっておられ

るでしょうし。わたくしでしたら何もかも気持ちよく全てスッキリさせてあげますわ。きっと心ゆくまでご満足いただけるでしょう。何でも屋さんが身を委ねてくだされば……ね？」

「ひゃぁ～……！」

奥野田が生娘めいた腑抜けた声を出して緑の瞳を丸くする。さすがのミスティアも霍青娥のねっとり生々しい言い回しには気恥ずかしそうにしていた。赤蛮奇はブレない。

オレの是非を伺おうと、色香に満ちた青い女仙人が密着せんほどに迫ってくる。甘ったるい香水の匂いが一段と近付く。群青色の瞳を潤ませてオレを見つめてきた。

「ねえ、いかが――」

「結構ですッ!!」

直後、火山が噴火したような大声量が響き渡った。桃色ミディアムヘアの仙人サマが霍青娥の色仕掛けを寸前のところで阻む。オレの左腕に抱き着くかたちで。こちらも引けを取らないデカさの胸が柔らかい感触を押し当ててくる。だからお前そういうとこやぞ。

オレを間に挟んで、マジメな仙人の鋭い視線と不埒な仙人の不敵な視線が交錯する。バチバチと火花が散った。意図せず仙人同士の口喧嘩が勃発する。

「そのようなふしだらな真似は断じて許しません！　ましてや、あなたに彼を任せたらどうなるかわかったものではないわ。どのみち碌なことにならないのは目に見えています。引き下がりなさい。あなたが出る幕などどこにもありません」

「あら、心外ですわ。わたくし、むしろこの手の行為は得意分野ですのよ？　こういうのは放っておくとかえって辛いというのに。ただでさえ痛みを背負っている身なのだから、例え気休めでも少しは苦しみを和らげてあげるのが優しさでしょう。嗚呼、それなのに慰めることすら許さず独りで我慢させるなんて酷いですわ。可哀そう」

あからさまに白々しい憐れむフリをして霍青娥が挑発をかます。それを受けて、華扇がますます眉間にしわを寄せて目尻を鋭くさせる。いつしか火花だけでなく地鳴りすら幻聴となって聞こえてきた。

あ、ヤバい。嫌な予感しかしねぇ。
やがて女仙人たちのキャットファイトはクライマックスを迎える。
案の定、どうしようもなく悪い展開に着地もとい墜落して。そして爆心地のド真ん中にいたオレは容赦なく巻き込まれた。
「そんなお固い態度ではいずれ愛想を尽かされてしまいますわよ？」
「余計なお世話です。あなたには関係ありません」
「まぁ可愛げのないこと。そもそも、わたくしを除け者にしたとして、あなたに彼の下のお世話ができまして？　どうせ経験もないでしょうに。かえって彼を痛がらせてしまっては身も蓋もありませんわ」
「それくらいできます！　あなたよりも私の方が綿間部を気持ち良くして中に溜まっていたものを全部残らず絞り出させてみせます！　彼の身体のことなら詳しく知ってますからッ!!」
「もうオメーら黙れよぉおおおお!!」
桃色な仙人サマの口からトンデモ宣言が飛び出して、間髪入れずオレの嘆きに近い叫びが人妖でごった返す博麗神社の境内に反響した。
夜の澄んだ空気も相まってムダにエコーがかかった。
やまびこのように音声を繰り返しながら、二人分の残滓が遠くまで届けて消えていく。
しん、と辺り一帯が恐ろしいまでに静寂に包まれる。
ありとあらゆる者共の目線がオレたちに集まった。ほとんどが年頃の乙女っつー状況も加わって、何とも形容しがたい居心地の悪さが圧し掛かる。オマケに薄らピンクに染まったむず痒い空気まで流れ始めた。
「――ハッ!?」
悲報、茨木華扇ようやく正気に戻る。
普段の品行方正かつ毅然とした凛々しい姿は何処へやら。美人な顔立ちを真っ赤にして羞恥と怒りに熱々の湯気を沸かす。一方でオレは逃げたかった。切に。今すぐに。
上白沢女史は物凄い気まずそうに目を逸らし、三月精はわかってないのかアホ面でハテナを浮かべておった。いや、スターサファイアは何かしら察してそうだった。どっちにしても、聞こえてなかったとい

う幸運なヤツはいないようだ。コレ詰んだわ。
　そんな中、モフモフの金色の九尾を揺らして藍ネーチャンが立ち上がり、イケメン女子な顔色を一切変えずにオレたちのところまで来ると、インテリっぽい澄まし顔で華扇の肩に手を置いた。
「床上手自慢の勝負事なら連れ込み宿でした方がいい。ここではやめたまえ」
「ち、ち、ちがっ!?　違いますからぁあああ!!」
　この晩、オレはしばらく博麗神社もとい幻想郷の宴会には近寄らないことを心に誓った。
　つーか便所だって一人でできるわ！

　後日。
　上白沢女史から耳寄り情報を聞き、「河童の秘薬」なるスゲー薬を持つ元漁師のジジイを訪ねた。そこで伊吹萃香から貰った金粒の大半を叩いた結果、あっさり腕のケガを治してもらうのに成功したのであった。
　って、最初からこーしておきゃよかったんじゃねーか……？

　つづく

バレンタインデー特別回　「恋と仙人とチョコレート」

「綿間部、今日が何の日か知っていますか？」
「節分はもう終わっただろうが」
「ひぅ!?」
　節分っつーワードを耳にした途端、右腕に包帯を巻いた女が怯えたように肩をすくませて短い悲鳴を上げてしまった。
　大豆アレルギーなのかイマイチよく知らんけど、茨木華扇は豆が苦手らしく下手すりゃ触るのもダメなのだとグチっていた。水膨れができるとかで乙女の肌に悪影響らしい。そら大変なこって。
　そのせいでか、かの仙人サマも来たる節分の日は難儀しておった。例えば外を出歩く際にはオレの背中に隠れるようにしたり。とにかく豆撒きの巻き添えに遭わないようにと細心の注意を払っていた。どーでもいいけどオレを盾にすんなよ。
　ちなみに当日、クラウンピースと三月精を筆頭にガキんちょ共がオレに豆をぶつけてきたので、ドスの効いたチンピラ顔で執拗に追いかけ回してやったのは記憶に新しい。
　ボケ―ッと回想に浸っていると、淡い桃色のミディアムヘアな女が拗ねた顔で頬を膨らませた。
「そうではありません。もぉ、今日は何月何日か言ってみてください」
「そら二月十四日だろ……って、まさか」
「はい。ばれんたいんでー、です」
　ようやく正解を引き当てられたのがご満悦なようで、華扇はにっこりと笑みを綻ばせた。何となく発音が中途半端だった気もするが、そいつはさて置き。
　本日はバレンタインデー。オレが元いた『外』の世界では今頃、全国の男子学生諸君が下駄箱の中やら机の中やらを入念に調べているのであろう。いや、今日は日曜だからそれすらも叶わねぇのか。人の夢と書いて儚いとはよく言ったモンだわな。

「つーか、幻想郷にもその文化あんのか」
「私も早苗から聞いただけなので詳しくは知らないのですけれど。女の子が意中の相手にチョコレートを贈る日、ですよね？」
「あー……ま、あながち間違っちゃいねぇけど」
　また随分と古典的というかマジメくさった知識が出てきやがった。確かに元ネタとしちゃそんなところだってぇのはハズレじゃない。いや、もっと歴史的な起源まで遡れば全然違ぇんだろうけどよ。オレもそこまでは知らん。誰か偉いヤツの生誕日だか命日だっけか？
　やにわに華扇が赤みがかった瞳を気恥ずかしげに逸らしながら、自らの人差し指同士をつんつんと突き合わせて言葉を零す。
「でも、外の世界の人間は大胆なことをしますね」
「んぁ？　何でや」
「だって、チョコレートをあげたということは即ち、自分がその人をお慕いしていることを伝えたのと同じではないですか」
「んな大袈裟な……」
「大袈裟なものですか。言わば恋文と同義でしょう」
「そーかぁ？」
「はい。そうですとも」
　クソマジメな仙人サマらしい深読みの凄さにかえって感心させられちまう。ここまでくるといっそ純粋に思えてくる。あるいは仙人たるもの清い心が必要なのかもしれない。なお、食べ歩きが好きなあたり既に俗世に染まっておる模様。
　半ば呆れていると、桃色の女がどこかもどかしそうにオレの顔を覗き込んだ。無自覚の上目遣いがあざとい。顔立ちが整っている分、ほんの少しだけ意識してしまう。
「ところで、綿間部は女の人からチョコレートを貰ったことがあるのですか？」
「さぁてな。そーゆーのにはからっきし無縁だったしよ。少なくともオレが覚えている範囲じゃ一個もねーな」
「そ、そうですか……よかった」
　バッチリ聞こえてんぞオイ。ったく、何がよかったんだか。

というか、そんなコトを確認するためだけに、わざわざ朝っぱらからオレんとこ押し掛けてきたのかよ。

「くぁあ……」

欠伸混じりに人里の往来を歩いていく。なしてこんな日に朝から見回りせにゃならんのだ。それも自主的に。ついてねぇ。

いかにも面倒くさそうにダラダラ足を動かして、仙人サマに「しゃっきりしなさい！」と喝を入れられる。そんな下りを数回ほど繰り返していたら、人里の守護者サマと道端で遭遇した。

「やぁ、黒岩に華仙殿。今朝は早いのですね」

「慧音さん。おはようございます」

「うす」

角ばったデザインの個性的な帽子が似合う女人がにこやかに挨拶してくる。

よくよく見ずとも綴り紐で結んだ昔ながらの製本と漆塗りの箱を携えていることに気付く。彼女のもう一つの職業、寺子屋の教師なる立場を考えられれば自ずと答えは導き出せる。

「これから授業か？　ご苦労なこって」

「こら綿間部、失礼ですよ」

「はは、彼らしくて結構じゃないか。ああそうだ。ここで会えたのも何かの縁だろう。よかったら二人にもお裾分けしよう」

好きなものを選んでくれ、と。そう前置きして、上白沢女史は手にしていた上質そうな箱の蓋を外す。すると、カカオ風味の甘い匂いがふわりと浮かんだ。一口大のチョコレートが仰山詰まっている。

可愛らしいスイーツに興味津々な華扇がまじまじと箱の中を覗き込む。

「これは？」

「今日はバレンタインデー。大人が良い子にお菓子を配る日なのだろう？　寺子屋で学びに励んだ教え子たちへのご褒美として、かねてより準備したものだ」

「いやそれクリスマスとハロウィンも混じったイベントになっとるが

な。あー、言うてもそこまで的外れでもねぇけどよ」
「そうなのですか？」
「まーな。義理チョコなんざ昔からあるし、最近かは知らんが友チョコつって女ダチ同士でチョコの交換会しとるのも珍しくねぇぞ」
「なるほど、そういうものなのか。ならばあとで妹紅にも用意しなくてな」
どうにも幻想郷のバレンタインデー文化は、正しく伝聞してんだかどうなんだかビミョーなところであるらしい。そこら辺は東風谷が上手く広げられるのかがカギとなるかもしれん。
とりあえず、チロルチョコっぽいスイーツはオレと華扇で一つずつ貰った。

意外なコトに、その後も女性の知り合いに会っては次から次へとチョコを恵んでもらった。冗談抜きでハロウィンかよ。
奥野田美宵とミスティア・ローレライはそれぞれの店に来てくれた客に、本日限定のサプライズとして仕込んできていた。不特定多数にあげるため質より量を重視しつつ、上白沢女史と同様にミニチュアなチョコを大量に蓄えていた。ただ、オレには心なしか一回り大きいチョコをくれた。言うまでもなく美味くて、どちらも舌の上でほどよい甘さが蕩ける。
稗田邸の前を通りがかれば、当主の令嬢が門番に差し入れているところに出くわした。そのまま世間話ついでになし崩し的にお零れを頂戴しちまった。名家らしい高級な味がした。
さらには貸本屋『鈴奈庵』の一人娘までもがチョコを備えていやがった。もっとも、こっちは栗色のツインテもどきを揺らしながら「お返し期待してますよ？」などと、商売上手っつーかちゃっかりしとる始末。ったく、お転婆なクセして抜け目がない。
「～～♪」
「やれやれ……」
そのうえオレと一緒にいたことで華扇もご相伴に預かれる。甘いお菓子いっぱいで仙人サマも鼻歌を口ずさむくらいにご機嫌であっ

た。満喫してんなぁコイツ。
「あら、将也君」
「珍しいじゃねーか。あんたがこっちに来てるなんてよ」
人里に流れる水路の川べり、そこに架けられた木造アーチ橋の手すりに赤髪セミロングの女が寄り掛かっていた。レインボー色のミニスカからスラリと生足を伸ばして、地獄の女神が大人びた微笑みをみせる。
ヘカーティア・ラピスラズリはどこで買ったのか細いスティックのビスケットにチョコレートをコーティングした菓子を摘まんでいた。どう見てもポッキーじゃねーか。
「わざわざこんな場所まで何しに来たんだ?」
「ちょっと気になるお菓子の噂を聞いてね、クラッピーの様子見ついでに買っていこうかなって」
「もしかしなくてもそれか?」
「うん、そう」
紙コップにも似た容器に何本もポッキーっぽいオヤツが入っており、ド田舎異世界なのにオシャレな街中のテイクアウト感を演出していやがった。年上めいた美人が橋の上でそれらしいポーズをとって佇んでいるのもあって、あたかもレディス雑誌で撮影するプロモーション写真の如し。
「将也君も一本食べる?」
「くれるってぇんなら貰うけどよ」
勧められるがままテキトーに一本だけ引き抜いて、懲りずにタバコ感覚で咥えた。クラウンピースがいないため、いつだったかと同じく火を付けられる恐れはない。アレしばらくトラウマになったかんな。
地獄を司る女神サマは仙人サマにも勧めていた。当然、華扇がそれを断るハズもなく、ポリポリとリスみたいに幸せそうに齧っていた。わかりやすいやっちゃな。
「あ、そうだ」
「ン?」
突然、ヘカーティアが悪戯っぽい表情を浮かべてオレの前に立つ。

何やら企んでいそうな女神サマと向かい合う。生憎とこっちはポッキーを咥えたままなのがカッコつかない。華扇もキョトンとする。
「動かないでね」
そう言って、女が背伸びしたかと思ったのも束の間――
「はむっ」
「ンンンッ!?」
「はわぁ!?」
あろうことか、赤髪セミロングの女神サマはオレが口にしているチョコ菓子の先っぽを、その艶やかな唇で軽く包んだ。その瞬間、美しい顔がかなり近くまで寄せられる。おまっ、いきなり何しやがんだ!?
ヘカーティアの後ろで華扇がとんでもなく驚いたツラしてんのが見えた。大きく目を見開いて衝撃エフェクトの落雷を浴びている。いっそオレよりリアクションがデカいまであった。
両方の先端を咥えた時間は長くは続かず、その名の通り真ん中のあたりがポッキリと折れた。おねーさんキャラな女が一歩後ろに下がる。
半分の長さになったチョコ菓子をぺろりと平らげたヘカーティアが、お得意のウインクをつけてお茶目に揶揄ってきた。
「ハッピーバレンタイン♪　外の世界にはこういうゲームがあるって聞いたんだけど、実際にやってみるとおもしろいわね。もう一本どうかしら?」
「……勘弁してくれ」
「う～～!!　何デレデレしちゃってるんですか馬鹿者ぉ!」
なぜか悔しそうに華扇がオレの襟首を掴んでガクガクと揺さぶってきた。
ちょバカやめろ揺らすなマジで!　あとデレデレしてねぇかんな!?
「もぉ!　ちょっと目を離したらこれなんですから、本当に油断ならない破廉恥な人ですね!?」
「さっきのはオレのせいじゃねぇだろ……」

「言い訳無用！」
「何でやねん」
おかんむりなワリには未だにオレと離れようとせず、あまつさえ仙人サマのお小言も止まらない。これぞ女心の難しさというヤツか。おかげでこっちはタジタジなワケだが。
プクーと頬を膨らませて華扇が疑わしげな眼差しでオレを見上げる。
「本当にこれまで貰った経験がなかったのですか？　今日一日だけではたして何人の女性からチョコレートを受け取ったことか」
「オメーと同じ数だよ。ずっと一緒におったろうが」
ぶっきらぼうに受け答えながら、白いシニョンと桃色ミディアムヘアの仙人サマと道を往く。余談だが今日貰ったチョコのほとんどはその場で食ったので持ち帰りの品はない。
とりあえず気持ちを切り替えてフッと一息つく。
「ま、なんにせよバレンタインがどんなモンかわかったろ」
「そうですね。想い人への気持ちだったものが、いつしか親しい間柄で贈り合う風習へと移り変わっていたのですね。思いやりに溢れてとても良いことだと思います」
「ったく、マジメか」
相変わらずな性格に苦笑しつつも、この女らしいとどことなく安心した。
それからも他愛のない会話をしながらのんびりと歩いていく。
「――あの」
ふと、華扇が立ち止まった。
夕日を背中に浴びた中華衣装とミニスカの女が茜色に染まる。何かを言い淀むようにして所在なさげに立ち尽くす。そんな姿でさえも、なかなか絵になっていた。
「えっと、あれだけ他の方々が配っていたのに私だけ渡さないというのも不義理ですし……その、どうぞ」
まるで精一杯の勇気を振り絞ったかのように、ギュッと目を閉じながら華扇が両手を前に差し出す。その手には、丁寧にラッピングされ

た小さな箱があった。
　いくらオレでも、この状況でわからねぇほどアホンダラではない。
「オレにか？」
「は、はい……」
　おそるおそる瞼を開き、華扇がオレを見つめる。ほんの一時の間だけ、仙人という立派な肩書きを置き去り、それこそ年頃の乙女のような期待と不安が入り混じった表情を浮かべる。頬も仄かに赤らんでいた。
　もう一度、確かめるように桃色の女が言葉を紡ぐ。ささやかな祈りを込めて。
「受け取ってくれますか……？」
「おお、サンキュな」
「――はいっ」
　ぱあっと本日一番の笑顔を咲かせる。そんな嬉しそうな様子を見せられて、ついついオレまで口元が緩んでしまう。
　せっかくだからコイツもその場で開封する。箱を開ければ、これまたベタなハート形のチョコレートが一枚ばかし入っていた。いかにもなバレンタインチョコに可笑しさが込み上げる。
　ふと思った。今日一日オレと共にいたワケだが、華扇がチョコを買っているところは見てないし、そんな素振りすらなかったハズだ。
　てことは、だ。ぶっちゃけ初っ端からコレを用意していたんじゃなかろうか。まったく妙なところで勿体つけおってからに。
「……」
　いや待てよ？　仮にコレが最初からあったとして、けれども今朝の時点ではまだ華扇はバレンタインを深読みしていなかったっけか。確か……
『女の子が意中の相手にチョコレートを贈る日、ですよね？』
『だって、チョコレートをあげたということは即ち、自分がその人をお慕いしていることを伝えたのと同じではないですか』
「綿間部？　どうかしました？」
「……フッ、何でもねぇ」

いやいや、まさかな。それこそオレの深読みというか勘違いだろう。義理チョコだ、義理。もしくは友チョコ。なんだかんだ言って付き合いの長さはそれなりになるワケだし。

いずれにしてもこのチョコは後で美味しくいただくとしよう。ここでちゃちゃっと食っちまうのは何となく勿体ねぇ気がする。

嗚呼、それと。

来月のホワイトデーは気合入れて三倍返しにしねぇといかんわな。

特別回ｆｉｎ

第六十三話　「バカとポン酒と幻想郷」

「見つけたわ！　あんたがクロワッサンね！」
「誰がパンだコラ」
「ち、チルノちゃん!?」
　暗い夜道に不釣り合いな威勢のイイ甲高い声が背中に刺さった。恐らくオレを目掛けて飛んできたであろうセリフに反射的に振り返る。場所は人里。夜を生きる男、何でも屋の黒岩は本日も営業中だ。つっても、まだ依頼は一つも来てねぇけど。
「で。誰だオメーら」
　未だかつてない名前の間違われ方をしたオレは、ぶっちゃけ面倒なことになりそうな予感を抱えつつも声の主をジロリと見据えた。黒岩さんとクロワッサン、似てなくも……ねーわ。コレは酷い。
　満月を背に往来のド真ん中で仁王立ちするちんまいガキんちょが一匹と、その傍らでオロオロしとるもう一匹のガキんちょが並んでいた。どちらも羽を生やしている。
　片割れは見覚えがあった。博麗神社の宴会で、キャンプファイヤー級の焚火の前で溶けかかっていた氷属性の妖精だった。
　まさしく氷を象徴したかの如き水色の短髪や青い服は、カラー的には上白沢女史に似てなくもない。が、身長とかオツムとか色々と圧倒的に足りてなかった。あと十、いや十五年ぐらいしたら大人に成長するのだろうか。むしろ不遜な態度がどこぞの天人サマを思い起こさせる。あっちも青だし。
　もう一人は、草原をイメージさせる緑色の髪をサイドテールに纏めた小娘。大人しい雰囲気や立ち振る舞いから利口そうな印象を受ける。透けた薄羽もあって今まで遭遇した中で最もフェアリーっぽい。少なくとも松明の火を振り回すアメリカンよりかは童話の妖精だ。
「あんたはカンゼンにホーイされてんのよ！　おとなしくお縄にチョーダイしなさい！」
「チルノちゃぁん！　声が大きいよぅ！」
　水色がサツみてぇな謳い文句を騒ぎ立て、緑色がビミョーに涙目に

なって止めようとしておった。それを見てコイツらがどんなコンビなのか何となく察した。というか二人だけで包囲もクソもねぇだろ。

現時点で既にグダグダな展開ときた。変なのに絡まれちまったと初っ端から気疲れに襲われる。無視するか。いやもう遅い。

とりあえず、マトモに会話が通じそうな緑色サイドテールの方に向き直った。

「オレに何の用だ。仕事の依頼か？」

「あのあのっ、さっきまで私たちミスティアちゃんのお店にいたんですけど」

「ほーん、女将のところにねぇ」

年端もいかないチビッ子がさも当然のように屋台で呑んでいやがった。もはや慣れたが。異世界に現代社会の常識は通じまい。

「はい。ミスティアちゃんと、えっとピンク色の髪の綺麗な仙人様がお話ししてて。あの、黒岩さんの話題だったもので」

「華扇もおるんかい。そんで、オレの悪口でもしてるってぇわざわざ教えにきてくれたのか？」

からかい混じりに意地悪いツラを浮かべて皮肉ると、純粋そうな生娘は予想を上回って慌てふためいた。開いた両手を前に出してブンブンと大袈裟に振って早口で捲し立てる。

「いえいえそんなっ!?　二人ともとっても楽しそうでした！　仙人様の笑顔なんて私までドキドキしちゃうくらい綺麗でしたもん！　見惚れちゃいました！」

「お、おぉ。そーか」

まさかそこまで言われるとは思いもよらず、逆にオレがどもっちまった。だーもう、小っ恥ずかしい。オレじゃなかったら勘違いしてんぞ。

大人しいタイプかと思いきや、ここぞという時に押しが強いキャラだったか。緑色サイドテール「あ、私は大妖精といいます」また心読まれたんだが。その大妖精の言葉を継ぐように氷属性の妖精――チルノとやらも「そうよ！」と前のめりに出しゃばってくる。

生意気そうな氷娘がビシッと人差し指を突き付けた。まるで犯人

はお前だと言わんばかりに、
「だからアタイらが連れてきてやろうってスンポーよ！」
「どこがどーなって『だから』なのか、まるでわからねぇんだが」
「すみませんすみませんっ」
なぜか大妖精がチルノに代わって何度も頭を下げる。保護者か。
ここで話が拗れると余計にメンドクセェことになりそうだ。嘆息しながらコイツらの要求をまとめる。
「要するに今から女将の屋台に行きゃエエんだろ？」
「そういうことよ！　あんた話わかるじゃない。アタイがレンコーしてやるんだから覚悟するといいわ！」
「チルノちゃん」
「だ、大ちゃん？」
穏やかそうだった大妖精から表情が消えた。喜怒哀楽の全てが抜け落ちたような無表情で抑揚のない声音を紡いだ。たった一言だけ、チルノの名を呼ぶ。瞬く間に、氷属性の妖精ですら背筋を凍らせる猛烈な寒気が吹雪いた。え、怖。
このまま放置しても面白そうだが、いつまでも居住地区でうるさくしていたら、それこそ上白沢女史がスッ飛んできて拳骨を落としかねない。下手すりゃオレまで責任追及される。
人里の守護者サマから「またお前か」などと濡れ衣着せられるのは勘弁してほしい。黒はオレのカラーだとしてもブラックリストだけは守備範囲外だ。
ま、それに華扇がいるというのなら行ってやるのもやぶさかでない。あ、いや。特に深い意味はねぇけどよ。って、誰に言ってんだオレは。
「別に抵抗しやしねぇよ。さっさと案内しろ」
「は、ははっ……！　むぁ、ま、まっかせなさいよアタイはサイキョーなんだから！」
「最強は急変した相方にビビって声を震わせたりせんだろ」
「ごめんなさい……チルノちゃんちょっとだけおバカなんです」
相方にまでバカ認定されてんぞお前。

今晩、ミスティア・ローレライの店は魔法の森の付近に構えられていた。

余談だがオレは魔法の森に入ったことがない。これまでその手の依頼がなかったから。魔女だか魔法使いだかが住んでいると聞く。だぜ系口調な白黒の魔法使いと、あと一人いるらしい。

「よぉ」

「へへッ連れてきたわよ！」

見慣れた赤提灯をぶら下げた屋台の暖簾を潜り抜ける。温かな湯気と酒匂が顔に張り付く。木目調のカウンターは渋みを滲ませており、下町暮らしの庶民には馴染み深い。

先客がいた。柔らかな桃色に色付くミディアムヘアを白いシニョンで括った女が、赤みがかった瞳をパチクリと瞬きさせてオレを見上げた。

「ほ、本当に連れてきたのですね」

「こっちの喧しいのがしつこかったんだよ」

「お客さん。いらっしゃい」

「おぉ、来たぜ」

和服と頭巾の女将スタイルな鳥娘にぶっきらぼうに告げて、偶々空いていた華扇の隣に座った。

さり気なくチラリと盗み見れば、オレたちが来るまでそこそこ飲み食いしていたようで空き皿が多い。相変わらずの食道楽っぷりなこって。しかも全然酔ってねぇのも平常運転ってか。

「聞いたぞオイ。オレのいねぇところで随分と盛り上がってたらしいじゃねーか。どんなネタで弄ってくれてたんだ？」

「ひ、秘密ですっ。そんなことまで詮索するなんてデリカシーに欠けますよ」

「そうだよ、おにーさん。ガールズトークに男の人が入っちゃダメだよ」

「オメーもいたんかよ」

「ふっふっふ、虫はいつだって身近なところに潜んでいるものなのさ」

ボーイッシュな恰好と澄まし顔の虫っ娘が「やぁ」と気さくに片手を上げる。こっちはブロッコリーにオクラにアスパラガスといった緑オンリーの山盛りサラダをチマチマ崩していた。あまつさえドレッシング無し。ダイエット中のＯＬみてぇなメニューしてんな。

すかさず氷属性の妖精が中央を陣取って、気前のイイ宴会部長ばりの音頭を取った。

「今日はアタイの奢りよ！　じゃんじゃん飲みなさい！」

「いい歳した男がガキんちょに奢られて堪るかい」

「そもそもチルノってお金持ってたっけ？」

「いつもお代は氷で貰ってたかなぁ。食材を保存するのに助かってるから、あたしはそれでもいいんだけど」

「ごめんなさい、チルノちゃんが好き勝手なこと言って……」

「元気があって結構ではありませんか。子どもはこれくらいが健全でしょう」

夜の野外に提灯の赤みと酒飲みの談笑が奏でられる。

ヤツメウナギの香ばしい匂いに混じって、屋台に賑やかな声が飛び交う。

テキトーに頼んだ酒とツマミを待つ間、華扇に話題を振って過ごす。

隠れた名品「雀酒」は只今品切れ中だという。惜しいことをした。飲んだ三月精が翌朝もハイになって踊るほどの代物らしいのだが。それだけ聞くと酒じゃなくて別のヤバい何かに思える。

「このガキんちょコンビとも知り合いだったのか」

「ええ。いつもは霧の湖にいるのですけど、妖怪の山で遊んでいることもありますからね」

オレと華扇の他愛のない会話を小耳に挟んで、リグル・ナイトバグもグリーンサラダを突きながら「そうそう」と交わってくる。輪切りのキュウリを発掘して小気味いい音を立てて噛み砕く。

「チルノたちがヤマイヌに追いかけられてるところを助けてくれたよね」

「あ！　あの時は本当にありがとうございました」

「いえいえ」
　大妖精がペコペコと頭を下げるのを仙人サマが柔和な笑みで受け止める。
　ヤマイヌの噂ならオレも聞いたことがあった。凶暴化した野犬の妖怪が山の麓まで下りてきちまったせいで、人里のヤツも何人かケツを噛まれただの襲われただのしたっつーハナシだ。
　博麗の巫女が動く前に片付いたそうだが、この女がその功労者ってぇオチか。動物絡みの厄介事ならコイツ以上の適役はいねぇわな。
「アタイ知ってる！　なんか違うヤツに変化したんでしょ？　えぇっと、そう！　送りオオカミ！」
「それ違う意味で危ねーヤツだろ」
「違うよチルノちゃん!?　送り犬だってば！」
　水色の妖精のトンデモねぇ失言をかまして、緑の妖精が顔を赤らめてすぐさま訂正する。送り狼がどんな輩を指すのか知っているみてぇだ。リグル・ナイトバグも同類なのであろう。片やこっちはクツクツと余裕ありげに笑っていやがった。
　お通しの小鉢が置かれた。なめこの茶色と大根おろしの白さ、それと大葉の緑が少々ばかり。とろみが光沢となってイイ味を演出している。なめこおろしか。フッ、悪くねぇ。
　次いでお猪口が一つ。そいつを手に取るとミスティアがあざとく微笑み、両手で徳利を持ってオレに差し向ける。こちらも無造作に腕を伸ばせば、トクトクと透明色の酒が注がれていく。
「今日もご苦労様」
「そこはお疲れ様じゃねぇのかよ」
「同じ意味じゃないの？」
「相手によりけりってこった」
　オレみてぇなヤツが国語のセンコーのマネゴトするなんざ性分じゃねぇ。ぞんざいな解説共々、まずは日本酒で駆け付け一杯。よく冷えた十パーセント程度のアルコール度数が喉を通り抜ける。
「……ふー」
　お猪口をひとまず置いて、お通しに切り替えて箸を手に取る。その

妨げにならないようにと、和服姿の若女将が残った徳利を隅にそっと置いた。
　その一連のやり取りをぼんやり眺めていたリグルが、アスパラガスを齧りながら何となく気になったぐらいの軽い口調でぼやいた。
「ミスチーが自分から客にお酌するなんて珍しいね」
「んー、そう？」
「そうだよ。ボクが知る限りじゃあまりなかったんじゃないかな。注ぎ足したりとか、そういう理由がなければ普段やらないでしょ。それなのにおにーさんには最初からしてあげるなんて特別扱いに見えるね」
「う～ん……言われてみればそうかも」
「そっ、そうなのですか!?」
　特別扱いを否定しなかったことを聞き逃さなかった桃色の仙人サマが、まるで危機感を抱いたように目を丸くして顔を上げる。その拍子に箸で摘まんでいたゆで卵が零れ落ちた。落下したのが皿の上でよかったな。
　というか鶏肉はアウトで玉子はセーフなのな、この夜雀。複雑な鳥心の線引きがわからない。
「どーでもいいけど、ちったぁ落ち着け」
「誰のせいだと！」
「え、オレが悪いのか……？」
　なぜかオレに理不尽の矛先が向けられた。何でや。
　ミスティアが一杯目を注いでくれるのはオレの中では割とフツーだったんだが。鯢呑亭でも奥野田が他の客に注いでやってるのをちょくちょく見かけているし。さして気にしたこともない。
　ちなみに赤蛮奇の場合は「自分でやって」と素っ気ない。そこがイイのだとか抜かす男衆も多いがオレには理解できん。ま、あのクールろくろ首がある日突然に可愛さアピールしてきたら偽物を疑うだろうけど。
「ちょっとー、このアタイを差し置いて目立たないでよね」
「チルノちゃん？　少し、頭冷やそうか」

「だ、大ちゃん……？」

大妖精から何らかのスイッチが入った気配がしたが見なかったことにした。大妖精と呼ばれるだけあって他の妖精共とは一味違った。そのうち精霊にでもランクアップするんじゃなかろうか。

喧々と何人もの声が飛び交う。古めかしい屋台だというのにうら若き乙女らで姦しい。幻想郷の片隅で営む小さな店には活気が溢れていた。商売繁盛、羨ましいこって。

やれやれと半ば呆れつつ、されどそれもまた満更でもなく。何だかんだで居心地の良さを感じる。寡黙を気取って、フッと密かにカッコつけてみる。

が、タイミングが悪かった。

「あーあ、おにーさんってば女の子に囲まれて嬉しいんだ。ニヤニヤしちゃって」

「へぇ。そうなのですか？　綿間部、そのことについてじっくり聞かせてもらいましょうか」

「ちょバカお前っ、そーゆーのじゃねぇよ勘違いすんなや」

「誰が馬鹿ですか馬鹿者！」

リグル・ナイトバグに指差され、華扇が据わった目つきで顔を寄せる。いつもながらの無防備さで美人な顔立ちが間近に迫った。淡い色合いの髪に似通う柔らかな香りを嗅ぐ。だから近ぇっての！

チクショウ、この女のおかげで全然ハードボイルドじゃねぇぜ。

つづく

第六十四話　「茨木華扇は○○が上手？」

メシも酒もあらかた食い尽くした頃。
「みんな、よかったらデザートも食べてみない？」
ミスティア・ローレライが隠し玉とばかりに趣向を変えてきた。
和服女将の鳥娘がタッパーを取り出して人数分の小皿によそうと、それぞれの前に手際よく配った。しばらくぶりにプラスチック容器を見たせいか、タッパーとかあんのかと場違いな感想が浮かんだ。
いや、よくよく考えたらタイムスリップしたワケじゃねぇ。そりゃあってもおかしくねぇわな。
白い皿に小ぶりな赤い果実が乗っている。か細い茎の緑色も組み合わさって俗に言うインスタ映えしそうなくらいには見栄えも良い。五月から七月が旬とされる果物であった。つまり、ちょうど今頃がシーズン。
全員に行き渡ったところに華扇が赤みがかった瞳を向けて答える。
「さくらんぼですか。美味しそうなとても良い艶をしていますね」
「でしょう？　チルノの氷でよく冷やしてあるから、新鮮な状態が長く保存できるの」
「へへッ、アタイってばサイキョーね！」
「まぁそこはチルノのファインプレーだよね」
「やったねチルノちゃん！」
ついさっき相棒に連行されていったおてんば娘が懲りずにふんぞり返っていやがる。
オマケに仲間たちにも褒め称えられて鼻まで高くしておった。やはりバカか。それとも底抜けにポジティブなのか。そういった意味であれば自称最強は伊達ではねぇわな。
「お先に。いただきまーす」
黒マントと短パンの蛍っ娘がもう我慢できないと手を伸ばす。サラダをたらふく食ったりフルーツに目がなかったり虫キャラとしての特性が垣間見える。コイツがただベジタリアンなだけってぇ可能性も否定できねぇけど。

大きく口を開いてパクッと一口で放り込んだ。てっきりそのまま食うものだと思っていたが、
「レロレロレロレロレロ」
はたしてどこでソレを会得したのか、ヤツは小ぶりな赤い実を舌の上で転がし始めやがった。しかもムダに速い。あまりにも自然にやるもんだから思わず二度見しちまった。
「って、花京院かオメーはよぉ」
「レロレ……だれ？」
「そーゆーことするヤツがいんだよ」
「いずれにしても、あまりお行儀が良いとは言えませんね」
「ふぁーい。ゴメンナサーイ」
ボーイッシュな虫っ娘が仙人サマに注意されて素直に従う。ちょい毒舌っぽいフシもあるとはいえ、こういうところは見た目通りガキんちょと変わらない。
その一方で、氷属性の妖精が茎から引き千切ったチェリーを丸呑みしてしまい、それを目撃した緑色のフェアリーが青ざめていた。
「ちちっチルノちゃん!?　種まで飲んじゃったの!?」
「し、しまったぁああッ!!　大ちゃんアタイ死んじゃうのかな!?　このまま死んじゃうのかなぁ!?」
「ダメッ！　死なないでチルノちゃぁん!!」
「自称最強はどこ行った。あとそんなんでいちいち死んだりせんわ」
腹の中で芽が出るワケでもあるまいに、さくらんぼの種一つでここまでギャーギャー騒げるとは。どんだけ元気有り余ってんだか。
チビッ子の戯れを横目にオレも小さな果物を一粒貰う。種もあって食べられる部分は少ないものの、甘酸っぱい果汁がしっかり濃いめの味を生み出す。こうやって食うのは久しい気がする。繁華街のバーでカクテルに添えられているのはよく見てきたが。アレはマラスキーノ・チェリーだっけか。
ふと、さくらんぼに関するネタを一つ思い出した。
「そういや、口の中で茎を結べるかどうかってぇのがあったな……」
「お客さん、それってなぁに？」

「ちょっとした都市伝説みてぇなモンだ」
「都市伝説、ですか？」
すぐ隣で聞き耳を立てていた華扇がその単語にやたら反応した。
その理由も聞かされる。
都市伝説に関連した異変。この仙人サマも結構深いところまで首を突っ込んで一悶着あったんだとか。何たらボールとかいうブツを集めるのが解決に導くカギだったらしい。お前それドラゴンボールじゃねぇのかよ。
もしや異変の続きも有り得るのではと身構えるクソマジメな女に、そうじゃねぇよと雑っぽく諭しておく。片手間に日本酒を舐めながらカンタンに説明してやった。
「都市伝説ってぇよりかは占いかおまじないの類に近ぇだろうな。ま、アレだ。靴を飛ばして表裏で明日の天気を予想とすんのと同じだ」
「ああ。そういうものですか……」
「そーゆーこった。チェリーの茎を口の動きだけで結べるかってぇルールなだけのお遊びに過ぎねぇよ」
「なるほど、それは――」
「フフン、そこまで言うならやってやろうじゃないの!!」
またしても会話の流れも場の空気もガン無視して、チルノが声高らかに宣言した。わざわざ立ち上がって握り拳を天に掲げるあたり、氷属性のクセしてムダに暑苦しい。コイツ自身はひんやり冷気を放っているというのに。
というか夏場でも元気過ぎる氷の妖精ってぇのもどうなんだ。そう考えれば確かに最強ってか無敵ともいえよう。冬になったらイキ狂ってんじゃねぇよな。
「はは、いいんじゃない？　せっかくだしみんなでやろうよ」
「あ、私もリグルちゃんに賛成です。ミスティアちゃんは？」
「あたしは見てるだけかな。ゴメンね、これでもお仕事中だから。のど自慢だったら参加してたかも」
「オレもパスだ」

男がやっても気色悪いだけだろ。んなモンどこにも需要がない。
しかしながら、オレと女将が不参加なのが気に食わないみたいで、水色の妖精が勝気そうな瞳をこちらに向けて不満を露わにした。
「何だよもー、ノリ悪いわね。そんなんじゃシュッセしないわよ」
「フッ、生憎と出世するような仕事じゃねーんでな」
「まぁまぁ。私はやりますから、ね？」
「お！　あんたはいいやつね！」
氷娘の手のひら返しが早すぎて目が追い付かねぇ。オセロかよ。
マジメな仙人サマはワンパクな幼心の扱い方を重々心得ていらっしゃるご様子。見事な手腕でおてんば娘の機嫌をあっさり取り戻した。あるいは氷娘が単純なだけなのかもしれん。
勝つ気満々に雄叫びを上げるおバカに見えないところで、大妖精が「ありがとうございます」と華扇にこっそり耳打ちしていた。やっぱり保護者じゃねーか。
「よぉし、いくわよー？」
「いつでもオッケーだよ」
「が、がんばります」
「フフ、そうですね。頑張りましょうか」
せーの、と。
掛け声に合わせて、オレとミスティアを除くメンツがさくらんぼの茎を一斉に口に放り込んだ。ゲームスタートってか。
「お客さんは誰ができると思う？」
「あー……リグルあたりじゃねーか？」
先ほど絶妙な舌技を披露していたし、成功率高そう。
どいつもこいつも片側の頬を不自然に膨らませたり、四苦八苦しながら顎をモゴモゴ動かしたり、うねるように舌を動き回したり。思い思いに試行錯誤を繰り返す。
揃いも揃って百面相している有り様。なかなかどうして傍から見ている分には面白かった。
数十秒……数分……
「っぷは。あーもうダメ、全然できそうにないや」

やがて限界が来たのかギブアップの声が上がっていく。
まさかのオレの予測に反してリグル・ナイトバグが真っ先に降参した。危ねぇ。下手に賭けてなくて助かった。
ともかくこれで残された挑戦者は三名。ますます勝負に熱が入る。
「……ッツ!?」
次にリアクションを起こしたのは水色の元気娘だった。
ただし勝利のVサインなどではない。むしろその逆で敗北宣言であった。
より具体的には、負けまいと意固地になり過ぎたのが災いして、哀れにも顎の筋肉をつったようだ。グルンと白目を剥いてド派手な音を立てながら引っ繰り返っちまった。事件現場かよ。
「チルノちゃぁあああん!!」
それにつられて緑色サイドテールの妖精っ娘もリタイア。悲痛な叫びを上げて、やや形容し難い表情で長椅子から転げ落ちたおバカな相方の元に駆け寄った。
嗚呼、こりゃどうしようもねぇ――
「……ん、出来ました」
『……え?』
阿鼻叫喚となっていた真っ只中、桃色ミディアムヘアの仙人サマがさらっと言ってのけた。
誰もが耳と目を疑って彼女の手元を覗き込む。包帯の巻かれた手のひらの上に、しっかり結び目が施されたチェリーの茎があった。
「うおー!・スゲー!・」
興奮のあまり一回休み状態だったハズのチルノが飛び起きた。復活するの早過ぎんだろコイツ。残機持ちか。
「本当に結んであるね」
「すっ、すごいです!・」
立て続けにリグルも感心した様子で、大妖精に至っては尊敬に瞳をキラキラと輝かせて見入っていた。
ガキんちょ共から羨望の眼差しを浴びて、華扇も得意気なのが見え見えのドヤ顔を浮かべておった。もとより表情豊かなヤツだ。それ

にしてもわかりやすいこって。
「さすが仙人様ね。何でもそつなくこなしちゃうんだもの。器用でいいなぁ」
「うふふ、それほどでもありません。どうですか、綿間部」
「ま、イイんじゃねぇの？」
「むぅ、何ですか。つまらない反応ですね」
ちょっぴり不服そうに頬っぺたを膨らます仙人サマ。んなコト言われてもオレにどうしろってぇんだ。
そんな中、ミスティア・ローレライが好奇心ついでに核心を突いてくる。愛嬌のある瞳がオレを映す。あざとい。
「それでお客さん。これができると何がわかるの？」
「ベロチューの上手さ」
「えっ」
「べ……ッ!?」
オブラートなんざ一切なしに包み隠さず教えてやった。
まず華扇が顔を真っ赤にして仰け反った。まさかそんな意味合いなどと考えもしなかったのであろう。その証拠にメッチャ動揺している。
その近くで大妖精も似たようなツラであわあわとテンパっておった。送り狼のフレーズに対する反応といい、清純派に見せかけた耳年魔タイプなのは把握できた。あと怒らせたらヤバい性質ということも。
「あはは……お客さんにとっては嬉しい？」
「オレに聞くな。頼むから」
場を和ますために和服女将が苦し紛れの冗談を口にする。しかしながら、今その手の話題は気マズさしかない。って、何でオレまで意識してんだ。違ぇから。別にヘンな想像してねぇから。
「リグル、べろちゅーって何よ？」
「大人のキスさ」
「あんたァだーっとれい！」
アホ面で質問するおバカに訳知り顔でボーイッシュな虫っ娘がキ

メ台詞っぽく言いやがった。つい謎口調になっちまっただろうが。
そこからの屋台はコントもかくや。バカにお利口に毒舌にあざといがてんやわんやの大騒ぎ。誰もがキャラの個性が強すぎるうえに、テンションが空回りしているのもあってますます収拾がつかない。もうどうなっても知らんとオレも酒に逃げた。
ただ一人、華扇だけが赤面したままプルプルと肩を震わせていた。やがて、ハッと我に返ってすぐさま必死になって取り繕う。時すでに遅しこの上ないが。
「ま、待ってください！　これは何かの間違いなんです！　わわっ、私はそんなはしたない行為したことありませんからッ!!　信じてください!!」
無自覚で自らに秘められたとっておきの特技を見せつけてしまったのだ。そらハズイわな。
しかも知らずにやった分、今になって羞恥心が急ピッチでこみ上げてきたのであろう。ましてや性根がマジメな仙人サマなワケだし。バレないように、つい彼女の唇に目が行く。
まぁでも何だ。もし、あのジンクスがマジモンだというのなら――
「綿間部!?　まさか、い、いかがわしいこと考えてませんよね!?」
「バッ!?　か、考えてねぇわ！」
「うそ！　ならこっちを見なさいッ！」
カンベンしてくれ。
つづく

第六十五話　「汝は仙人なりや？」

夜更け。

フクロウの鳴き声が間延びし、田畑から蛙の合唱が波を打つ。

マトモに舗装されてない田舎道をザクザクと練り歩く。足元から土を踏む音が伝わる。そのうちアスファルトの硬い感触を忘れちまいそうだ。

そよぐ夜風もなく、物の怪の鳴き声ばかりが漆黒の空に木霊する。

「くぁ……」

欠伸を噛み殺す。上白沢女史に夜警の見回りを依頼された。それ自体はイイがぶっちゃけ暇なのが何とも言えない。

あったことと言えば、道端の片隅で寝落ちしとった酔っ払いのオッサンを叩き起こしてムリヤリ帰路につかせたのみ。深夜徘徊する痴呆ジジィも家出中の女子高生も見当たらず。

時代劇さながらの異世界つっても普段はこんなモンだ。それこそ夜な夜な屋根から屋根へと飛び移る天下の大盗人がいるワケでもなし。天変地異レベルの大事件が時たま起こるそうだが、そーゆーのは「異変」と呼ばれて博麗の巫女とかが動く。オレの手に余るってこった。

「本日も平穏安泰。世は晴れて事も無し、ってか」

ま、あえて今から人里の外を丸腰で出掛けようものなら無事は保証できねぇだろうけど。

草木も眠る丑三つ時。コンビニも牛丼チェーンもそれどころか自販機すら置いてねぇときた。２４時間営業なんざ与太話だわな。元いた世界の過剰サービスが当たり前になっていた風潮について考え直させられちまう。

つっても、オレみてぇな夜型人間が心配できた義理じゃねぇんだけどさ。

「……ン？」

と思いきや、実はそうでもなかったり。意外とやっているところはやっている模様。

鯢?亭の前を通りがかったところ、微かに灯りが漏れていることに気付いた。店の前で聞き耳を立ててみれば話し声もする。看板娘ともう一人、聞き覚えのある女の声。

閉店後の片付けっつー雰囲気でもなさそう。かといって通常営業ともまた違う。なかなかに怪しい空気が漂っているじゃねーか。

「ちょっくら挨拶するぐらいエエだろ」

勝手知ったるとまではいかんけど、そんなに気負うほどでもねぇわな。軽く顔を出して、何なら店仕舞いの手伝いでも依頼されれば御の字であろう。多少の小銭稼ぎに繋がる。明日の飲み代の足しとして。

ハードボイルドとは思えぬショボい期待を抱きつつ、入り口の引き戸に手をかける。ガラガラと建付けの悪そうな物音が、呼び鈴の代わりに来客の存在を告げる。

「わ。なぁんだクロくんかー」

昔ながらのカウンターを挟んで、外ハネしたピンク色のショートヘアに鯨帽子の仲居もとい看板娘が立っていた。予想外の訪問者に最初こそビックリした反応でこっちを見たが、オレだとわかると安堵して頬を緩めた。

「よう、まだやってたんか」

「うんとね、この時間帯はちょっと特別なの。貸し切りに近いのかな。あ、でもクロくんなら大歓迎。いらっしゃいませ」

白い襷リボンがクロスしたなかなか大きな胸の前で両手を重ねて、奥野田美宵が健気に振る舞う。どんなに夜遅くても接客スマイルはお手の物という。

店内は仄暗かった。カウンターに鯨イラスト付きの行灯を一つ置いただけ、それ以外の灯りは全部消してあった。あたかも地下にひっそりと店を構えるオーセンティック・バーのように。

足を踏み入れると先客を見つけた。薄らボンヤリとした光の輪郭の中に、一人の後ろ姿が佇む。

桃色に染まるミディアムヘアに白いシニョンを結び、紅色の中華衣装が暗がりでも目を惹く。こちらの気配を察したのか、ゆっくりと振り返った。赤みがかった瞳がオレを映す。

美しく整った顔立ちに微笑みを浮かべて、女は穏やかに口を開いた。
「今晩は。よかったらご一緒しませんか？」
「フッ、いいぜ」
ニヒルにカッコつけて、誘われるがまま隣の椅子を引く。オレが座るとすかさず奥野田がおしぼりを持ってきた。受け取ると申し訳なさそうに眉尻を下げる。
「ごめんね。食べ物の注文はできないんだけど、お酒だけでもいい？」
「あぁ、構わねぇよ。鯨の息吹はまだあるか？」
「はーい♪　ちょっと待っててね」
いかにも女子らしいソプラノ声で愛想よく返事して、奥野田はパタパタと忙しなく準備に取り掛かった。鯨帽子の看板娘の仕事ぶりを眺めながら気楽に待つ。
その一方で、オレのすぐ横では相も変わらず先客が晩酌を愉しんでおった。寸胴型の貧乏徳利がやけに存在感を放つ。また随分と珍しいブツで呑んでいやがる。
「はい、お待たせ。一献どうぞ」
「おー、悪ぃな」
「いえいえ。好きでやってることですから」
手慣れた要領で一杯目は奥野田がお酌してくれる。お猪口の縁ギリギリまで日本酒が注がれていった。
「せっかくですので乾杯しましょうか」
「……ン」
桃色ミディアムヘアの綺麗な女が上機嫌そうに、包帯の巻かれた右手に提げた酒器を揺らす。その拍子に中に入った日本酒がチャプンと水音を立てた。
お猪口を軽く掲げて応える。下手に動かせば零しかねないのでコレが精一杯であった。フツーの乾杯みたいにぶつけ合わせるワケにはいくまい。
特に文句を言われることもなく、互いに自らの酒に口をつける。
『鯨の息吹』は鯢呑亭でしか飲めない代物。この店に来た客は誰も

がコレを呑む。中には一升瓶で頼むトンデモねぇおひとり様もいるとか。

「フッ……美味ぇな」

「えへ、ありがと」

一杯目を飲み干して二杯目を手酌していると、奥野田がオレの前に立った。

看板娘の屈託ない笑顔が人知れず咲く。行灯の灯りしかないせいか謎めいた儚さを纏う。容姿がイイから絵になる。

「今日もお仕事だったの？」

「あー……ちょっとした見回りはしてたが、言うても大したモンはなかったわな。せいぜい寝落ちした酔っ払いと野生動物ぐらいだしよ。コレでカネが入るのはイイがどーにも退屈だったわ」

「何の動物ですか？」

動物ネタに興味を引かれたのか、隣に座っていた桃色ミディアムヘアの女が会話に入ってくる。どこか探るような眼差しが些か気になった。

とりあえず質問には答えてやる。わざわざ隠すレベルの内容でもなし。

「野良犬とタヌキが数匹」

「へぇ」

特にタヌキを多く見かけた気がしないでもない。あるいは物珍しかっただけかもしれんけど。繁華街じゃ野良猫ぐらいしかいなかったから。あとは都会のカラスが関の山。

幻想郷じゃありふれた日常風景だろうに、意味ありげに女が目を細める。それも一瞬のこと。次に見た時には何事もなかったかのように笑みを戻す。

おもむろに奥野田が「そうだ」と声を上げた。

「クロくん、余り物のお刺身で良かったら食べる？」

「フードメニューはラストオーダーじゃなかったんかよ」

「今から料理するのはダメなの。これはもう包丁入れちゃったから、どのみち明日の夜まで保たないもん。このまま捨てちゃうのも勿体

ないでしょ？　お代はサービスだから気にしないで」
「そーゆーことなら遠慮なく貰うわ」
「あ、でしたら私にも分けてくださいな」
「ったく、ちゃっかりしてんなぁ」
「良いではありませんか」
さり気なく抜け目のない隣人に半ば呆れちまう。やれやれだぜ。
その後、オレたちは奥野田が出してくれた刺身を二人でシェアした。幻想郷に海はないっつーから川魚であろう。何の魚かまではわからん。日本酒によく合う。それだけで十分だ。
「美味しいですね」
「まーな」
桃色の女も一切れずつ箸で摘まんでパクッと一口で食べて「うーん♪」と頬に手をやって堪能していた。っかー、良いリアクションしてやがる。
夜更けがさらに深まっていく。他愛のない世間話にテキトーに合いの手を打った。酒に肴に美女二人ってか。なるほどこいつはある意味じゃ贅沢といえよう。
やがてオレの手元にあった徳利も底を尽いた。そろそろ頃合いか。オレはタイミングを見計らい、これ見よがしに息を吐く。傍らの桃色ミディアムヘアの女に対して、
「一つ聞くぞ」
「はい、もちろん構いませんとも。それで何でしょう？」
「誰だオメー」
「……え？」
オレが口走った瞬間。
ピシリ、と店内の空気が凍り付いた。
女の顔が強張る。信じられない、いや信じたくないとばかりに言葉を喉に詰まらせた。
接客中に笑顔を絶やさなかった奥野田でさえ、緑の瞳を真ん丸にして硬直してしまう。彼女の手からお盆がするりと床に落ちる。店中に乾いた音が反響した。思いのほか大きかった音量もあって女二人

がハッとした。
　すぐさま白いシニョンの女がどうにかこうにか上っ面の笑みを張り付ける。
「も、もう。嫌ですね。悪い冗談はよしてください」
「冗談だと思うか？　言っておくがオレはお前を知らん。もう一度言ってやんぞ。オメーは誰だ？」
「っ、そんな……」
　ただでさえ不評な目つきをますます鋭くさせて、ツッパリもかくやなガンを飛ばす。桃色の女はくしゃりと表情を崩した。悲し気に瞼を伏せて微かに肩も震わせる。
「ひどい……この顔を見忘れてしまったのですか？」
「……」
　今にも泣き出しそうな悲壮感を漂わせて、縋るように言葉を落とす。それに対してオレは無言を貫いた。
「クロくん！」
「んだよ」
「もー!!　何だよじゃないでしょ!?」
　もう我慢ならないと言いたげに奥野田がカウンターから身を乗り出してオレに詰め寄った。怒っているのがありありと伝わってくる。
あー、多分コレ勘違いしてるやつだわ。
　案の定、看板娘は誤解したままそこの女を庇った。
「どうして仙人さんのことわからなくなっちゃったの!?　お願いだから思い出してっ、こんなのあんまりにも可哀想だよ！　だって仙人さんはクロくんのこと――」
「いやコイツ華扇じゃねーだろ」
「な!?」
「ふ、ふえ～!?」
　怒り心頭で前のめりになっていたハズが、数秒とかからず困惑した顔になって仰け反った。前に傾いたり後ろに傾いたり忙しいやっちゃな。
　かくして、今度は茨木華扇を偽った何者かが焦りを含んだ様相で捲

し立てた。往生際の悪いことにまだ取り繕うつもりらしい。ったく、ムダな足掻きしやがってからに。

「そ、そんなの言いがかりです！　一体何を根拠に」

「ヤニ臭ぇんだよ。クソマジメな華扇がタバコなんざ吸うハズねぇだろうが」

こちとら夜の繁華街で生きてきたのだ。ニコチンとタールの臭いぐらいカンタンに嗅ぎ取れる。ハードボイルドを舐めんじゃねぇ。

確かにあの仙人サマは酒豪だし食いしん坊でもあんのだがそれはそれとして。だとしても、少なくともタバコだけはキャラ的にゼッタイにありえねーだろ。

「――」

華扇の紛い物は面食らったツラでオレを見つめ返した。が、ほどなくして表情に変化が訪れる。

「……ふ」

まるで今までの全てが演技だったかのように――否、マジでフリだったのであろう。クツクツといかにも意地の悪そうに口元を歪めた。赤みがかった目の色を茶色くして。

「ふぉふぉふぉ。さすがに手加減が過ぎたかのぅ。よもや外来人の若造に見破られてしもうたわ」

女性にしては低めの声、しかも謎に年寄り染みた口調でそいつは喋り出した。間髪入れず、ニセ仙人サマの全身からドロンと煙が吹く。

白々しい煙幕が晴れて下手人が素性を露にする。

丸い眼鏡を掛けた焦げ茶色の短髪をした女であった。頭髪と同じ色合いの丸みを帯びた獣耳とフサフサの尻尾が際立つ。あと何のファッションか頭に葉っぱも載せておった。トトロかよ。

華扇のパチモンの正体を暴き、それでいて最も驚いたのは鯨帽子の看板娘だった。

「わっ、マミゾウさんだったの!?」

「知ってんのか」

「うん。よくうちに来るお客さん」

「ふぉっふぉっふぉっ」

そのマミゾウとやらは年寄りなんだかバルタン星人なんだかわかんねぇ独特の高笑いを飛ばしていやがった。やたら明朗な風格もあるあたり、ボケ老人ってえワケでもなさそうだ。つーかそもそも見た目も老けてねぇかんな。どこかの方言かそれともキャラ作りなのか。

高笑いを引っ込めると、ヤツは丸眼鏡をキラリと光らせて名乗りを上げた。

「二ツ岩マミゾウじゃ。蚕食鯢呑亭に迷い込んだ人間よ、歓迎するぞい。ククッ、仲良くしようぞ若いの」

つづく

第六十六話　「仙人が絶対に負けないラブコメ」

「手加減したとはいえ狸の十八番をこうもあっさりと見抜きおったかー……やれやれ儂も老いたかの」

「あー嫌だ嫌だ」と冗談めかして茶髪の女が丸眼鏡を掛け直す。いかにもクサいおどけた芝居は八雲紫とか霍青娥とはまた別の胡散臭さが付きまとう。

その後はのらりくらりと自前らしき貧乏徳利で酒をかッ喰らう。そのザマは年季こそあれど老衰とはかけ離れていた。何なら老眼鏡っぽい眼鏡も伊達かもしれん。

やけに個性的なマイボトル持ってんなコイツ。ま、本物の華扇も百薬升を持ち歩いているワケだが。ついでに言えば伊吹萃香は瓢箪だ。

「結局何者なんだオメーはよぉ」

「だぁから二つ岩マミゾウだと言うたじゃろ。人の話しはちゃんと聞かんか、若造。耳垢が詰まっておるならそこの嬢ちゃんに耳掻きしてもらったらどうじゃ？」

「うるへー。大体、人間じゃなくてタヌキなんだろうが」

「それもそうじゃの。お主が外来人なら儂は『外』の世界からきた外来妖怪じゃ。佐渡と言えばわかるかぇ？」

「まーな」

オレの記憶違いでなけりゃ新潟にある小さい島の名称だったハズだ。しかも化け狸とはまた古典的な妖怪なこって。藍ネーチャンとの仲が気になる。マブダチかそれとも犬猿のライバルか。当人らは狐狸だけどよ。

一方その頃、奥野田美宵がぬいぐるみっぽい鯨の帽子ごと頭を押さえてショックを受けたツラで蹲っておった。お前どうした。

「うぅ、全然わかんなかった。これじゃあ接客業失格だわ」

「ったく、んなコトねーだろ」

「クロくぅん……」

さすがに極端過ぎんだろうが。そもそも変装なんつー生温いモンじゃなかったのだ。姿形ごと変えてこられたら、もはや接客スキルと

かあんま関係なかろう。万引きGメンだってそこまでのスキルねぇかんな。

野暮ったい口調でフォロー?してやると、外ハネしたピンクショートの女が緑の瞳を潤ませた。可愛い系で容姿もイイのもあって大した男殺しの技。ミスティアじゃねーけどあざとい。

「本当に? 見損なったりしない?」

「するか。オメーは自称看板娘なんだろうが。しゃきっとせぇや」

「うん、ありがと。クロくん優しいね」

「……っ、そーでもねぇだろ」

励ましにもならない雑な言葉であっても多少の効果はあったらしい。仲居コスの店員は立ち直って、ソプラノ声と和やかな笑みをオレに向けた。

あと、この会話を目敏く嗅ぎ付けて茶化す輩もおった。

「おーおー、見せつけてくれおって」

丸いレンズ越しに茶色い眼を愉悦で満たして、二つ岩マミゾウがやらしく口の端を吊り上げた。この手のツラには見覚えがある。コレはメンドクセェ絡まれ方するやつだ。

されど心配無用なことに、オレがどうこう言うよりも先に看板娘が慣れた様子で受け流した。百点満点のスマイルのオマケ付きという見事な手腕でもって。ただし、満更でもなさそうな感じに見えなくもないってぇのが些か誤解を招きかねない。

「もうマミゾウさんったら、そんなのじゃないよ」

「そうかの?」

「そうなの」

「何じゃつまらん」

「つまんねーじゃねぇぞコラ」

恋バナに興味あり、というよりただ単に面白そうなネタとして食い付いたのであろう。もっとも、奥野田があっさり否定してくれたおかげで拍子抜けしたようだが。

からかうネタを入手できなかったのを残念がり、タヌキ女が背もたれにグッタリ仰け反った。だらしない姿勢のままムダに男らしくデ

カい酒器を煽って、グビグビと豪快に喉を鳴らす。重くねぇのかソレ。

あまつさえ酒臭い息を深くブッ放して「じゃがなぁ……」とグチを零し始める。

「ここで引いたら負けっぱなしになってしまいぞい。こうなってはやられた分はやり返さんと儂の気が済まんぞ」

「いやその理屈はおかしい。全部あんたの自爆やんけ」

「そう言うでない。これでも儂は化け狸の頭領なんじゃ。外来人の若人に後れを取ったとなれば子分らに示しがつかん。矜持に関わる」

「っかー、ややこしいやっちゃな。だったらどーするつもりだってぇんだ」

「ふーむ、そうさな……どれ、ちと本気を出してみようかの」

「ハ……？」

そう言うや否や、再びドロンというベタな効果音とともに化け狸が白い煙に包まれた。つーかそんな頻繁に飲食店で煙焚くなよ焼き肉じゃねーぞ。

実際、不運にも近くにいたばかりに奥野田が白煙をモロに吸っちまったみたいだ。ヘンに気管に入ったのか可哀想なくらい咳き込んだ。ちょい前とは違う意味で涙目になっている。

「オイ、大丈夫か」

「こほっ、こほっ……あはは。うちは禁煙じゃないから平気。ちょっと不意打ちだっただけ」

『そらスマンかったな』

「え？　クロくん？」

「いや今のはオレじゃねーぞ」

されど紛うことなきオレ自身の男声であった。録音した音声を再生された時にありがちな違和感もない。あまりにもリアルな生の声を聞いた。もはやこの時点でイヤな予感しかしねぇ。

白っぽい煙幕が薄れていく。その中から全貌を現したのは一人の男。黒髪オールバックのヘアスタイルはワイルドに。黒カラーで統一したファッションはスタイリッシュに。まさに夜に生きる男を体

現したかの如きハードボイルドが気障ったらしく座っていた。
「フッ、こんなモンよ」
「げ――!?」
この女、よりにもよってオレのことパクりやがった……ッ！
化け狸の衆を統べるボスの本懐ここに極まれり。陳腐な例えだが、鏡の世界に映った己が現実に出てきたかと思うほど。完コピと認めざるを得ないクオリティをまざまざと見せつけられて顔面が引きつった。
顔かたちどころか声帯まで寸分の狂いもなく写し取った二つ岩マミゾウ（オレ姿）が、元々の口調に戻して勝ち誇る。
「どうじゃ？」
「うわわぁ……えーどうしよう、仙人さんになってた時もそうだったけど全然見分けられないかも。あれ？　どっちがどっち？」
「いや座っている位置からわかれよ」
「あっ、そうだね」
オレともう一人のオレ（正体マミゾウ）を交互に見やってガチ迷い中の看板娘に思わずツッコミを入れる。コイツ意外にポンコツなのか天然なのか。それとも狙ってやっとるのか。いや、それはねぇか。
「ったく」
気疲れを起こしてカウンターに頬杖を突く。すると、わざとらしく向こうもマネしてきやがった。目が合うとオレの見た目でウザったらしくドヤ顔をかます。やめーや。
その時、またもや鯢呑亭の入り口がガタついた音を立てて開いた。
「夜分遅くに申し訳ありません。こちらの店の灯りがわずかながら見えたものですから。もし邪魔でしたらすぐにお暇しますので」
マジメさが沁み込んだ澄み切った声音が店内を通り抜ける。
柔らかな桃色に色付いたミディアムの髪は夜桜のように美しく。白いシニョンを結わえて、ミニスカ中華衣装の雅やかな仙人サマが遠慮がちに顔を覗かせた。
「大丈夫よ、仙人さん。さぁさぁ入って入って」
「ありがとうございます」

奥野田に受け入れられてホッとした表情で華扇が鯢呑亭に入ってくる。

しかし、その足取りはすぐに止まった。そらそうだ。目の前でドッペルゲンガーもかくやな同一人物が横並びで座っておったのだから。誰だってそうなる。オレもそうなる。

「あ」

『よう』

だからマネすんじゃねーよ。見事にハモっちまったじゃねぇか。双子芸人みたいになってんぞ。

整った顔立ちが何度か瞬きを繰り返す。ガーネットを彷彿とさせる赤みがかった瞳は、オレと二つ岩マミゾウ（変化中）をバッチリ捉えていた。にしても、なんつータイミングの悪さだ。

「……」

仙人サマが黙り込む。コレはまた何事かと騒ぎ始める兆候か……？

ところが、予想に反して華扇はエラく落ち着き払っていた。それどころか納得した様子で顎に手をやって、

「なるほど、どうりで人里の中を何匹も狸がうろついていると思ったら。彼らの親玉がここにいたのですね」

「わかってんじゃねぇか。言っておくが本物はオレだかんな」

「違ぇわオレだよ。さらっとウソついてんじゃねぇ」

「このヤロ……ッ!?」

テメェ何てコトしてくれやがんだ!?

オレに化けた二つ岩マミゾウが、我こそがオリジナルなのだと悪ノリしてきやがった。もしかしなくてもオレへのリベンジ代わりに華扇を騙す腹積もりってぇのか。もし仙人サマが間違えればオレにも精神的ダメージがいく。ヤツにとっては一粒で二度美味しい仕返し。

華扇が動く。

注意深くオレと偽物をもう一度見比べ――ることすらしなかった。

ツカツカと淀みなく真っ直ぐにオレのところに来ると、ちょっぴり不機嫌そうに眉をひそめた。

「まったく、マミゾウと協力して私を困らせる算段だったのですか？
　こんな下らないことしてないで、もっと世のため人のために働きなさいと常日頃から言っているでしょうに」
「って、即答かい」
「？　綿間部とマミゾウを見間違える筈がないでしょう。こっちが本物です」
　キョトンとした顔で「何を当たり前のことを」と言いつつ包帯の巻かれた人差し指をオレに突きつける。だからって指差すなよ。
　これも仙人としての為せる技なのであろうか。全くこれっぽちも悩む必要がなかったのだと紛れもない本心で言っている。そして、心なしかそれを少なからず嬉しいと思っている自分がいた。何考えてんだオレは。
　今さらになってオレと顔を間近に寄せてまじまじと見つめて、桃色ミディアムヘアの女は綺麗な笑みを咲かせた。
「うん、やっぱり綿間部です」
「……あぁ、そーだよ」
　だから近ぇっつの。この異性に対する無防備さも本物の華扇で間違いなかった。
　そんな光景を目の当たりにした偽物のオレが、こりゃ敵わんと大っぴらに降参を告げた。
「あーあ、完敗じゃ。二人も立て続けに見破られたんじゃ立つ瀬もないわい」
　そう言うなり半ば諦めた態度で変化を解く。また奥野田が咽ないように気を使ってか、今度は煙控えめで正真正銘の素面に戻った。もう何もしないと意思表示に嘆息して両手をホールドアップしながら。
「してやられた。今回ばかりは相手が悪かったのぅ。愛の力を前にすれば変化の術なぞ何の意味の為さなかったか」
　化け狸のボスが丸眼鏡の弦を指でなぞりつつ言い訳をボやく。愛の力って何や。
「どういう意味ですか？」
「ふぉふぉ、聞きたいか？」

二つ岩マミゾウの発言に引っ掛かりを感じて華扇がヤツに向き直る。真面目な瞳と狡猾な瞳がしばし交錯する。もっとも、見えない火花が散るほどのモンでもなかった。

もはや隠す気もないらしく、頭に葉っぱを乗せた女が洗いざらい全部ぶちまけた。余計なコトまで。

「そこの若いのにも仕掛けたんじゃよ。お主に化けてな。だというのにこやつときたら、難なく儂がお主でないと見破りおった」

「あ、えっ、へ!?　そそ、そうだったのですか……？　へ、へぇ」

「そうとも。我ながら悪くない変化だったんじゃが、ちぃとも通用せんかった。悔しいことにのぅ」

「綿間部……ッ！」

何かを期待するかのようなキラキラした瞳で仙人サマがオレを見つめる。ほんのり上気した頬は色っぽく、少なからず興奮しているのは明らか。また何か早とちりしてやがんな。

しゃーねぇ。期待を裏切るのは忍びないが、勘違いは早めに訂正しておくのがせめてもの優しさってぇヤツだろう。それこそ変な恥をかく前に。

そう決めて、オレは仏頂面かつぶっきらぼうな感じに現実を教えてやることにした。

「タバコの臭いがプンプンしてんだ。イヤでも違和感に気付くだろ」

「あ……はは。そ、そうですよね。やだ私ったら」

「あぁ」

「あはは……」

桃色ミディアムヘアの女は指先で頬を掻きつつ愛想笑いで誤魔化していた。あれでも平常心で振る舞っているつもりなのだろう。けれど、寂しそうな笑みが隠しきれていなかった。

いたたまれない。つっても、別に嘘は言ってねぇ――

「でもクロくん。座る前から様子がちょっと変じゃなかった？　ねぇマミゾウさん」

「そうさな。一目見た時から儂のことを警戒しておったように思うぞ。まだ煙草の臭いなぞ嗅ぎ取れない距離だったろうに。ふぉっ

ふぉっ、おおよそ最初から彼女じゃないと気付いたのじゃろう。変化などでは到底真似できん二人だけの確かな繋がりでの」
「ブフッ!?」
奥野田美宵と二つ岩マミゾウのツープラトン攻撃をクリティカルにブチ当てられて、呑んでる途中でもないのにおもっくそ吹いちまった。ちょバカやめろ！
違う。そーゆーのじゃねぇから。そら一体いつからってぇ聞かれたら、確かに初っ端から怪しいと思った。百歩譲ってそこは認めよう。つっても何となくわかっちまったんだからしゃーねぇだろうがよ。オレは悪くねぇ。
「――ハッ!?」
いや待て。今のをしっかり聞かされたあの女はどうなっている？
恐る恐るそっちを見やると、
「……♡」
数分前よりも顔を赤くした仙人サマが両手で口元を隠していた。まるで嬉しくて思わずニヤけてしまったのを一生懸命に隠しているかのように。
そのうえ頬だけじゃなく目元も緩んでいる。さらにピンク色のどこか幸せそうなオーラをぽわぽわさせておった。早い話、どう見ても浮かれていやがった。
「や、やだっ。綿間部こっち見ないで！」
「ちょ待て。オレの話しを聞けって」
「う、うるさいです！　話ならあとで聞きますっ」
「だーもう！　いいからこっち向けって」
「ちょ、ダメぇ！　触らないでエッチ！」
「おま……ッ!?」
オレが見ているのに気付いた華扇が慌てて後ろを向いた。初心に恥じらう仕草がいつもの凛々しい立ち振る舞いとのギャップを生んで、不覚にも心臓が高鳴った。だから何やってんだオレ。
それを誤魔化すのと誤解を解くために華扇と取っ組み合いしていると、二つ岩マミゾウが堪えきれず吹き出した。まるで痴話喧嘩でも

見ているかのような生暖かい目をしながら、
「ふぉっふぉっふぉっ、青いのぅ」
「うるせぇよコンチクショウ！」
一泡吹かせてやったぜと高笑いするタヌキ女に、オレはなけなしの力で噛みつくしかなかった。負け犬の遠吠えでしかない。
嗚呼、ハードボイルドが遠ざかっていくぜ……

「どっこいせ、と。そろそろお暇しようかの。嬢ちゃんや、今夜もツケで頼むぞい」
「はーい、またのお越しをお待ちしております♪」
やがて満足したツラで丸眼鏡の女が帰り支度を始めた。やはり年寄りとは思えぬ軽やかな身のこなしで椅子から下り、あと最後にオレたちを見やってニヤリと口角を上げる。
「じゃあの」
「けっ、さっさと帰りやがれってぇんだ」
「こら。口が悪いですよ」
「ほいほい。あとは仲睦まじい同士でごゆっくり」
鯨帽子の看板娘の見送りに付き添われ、飄々と手を振りながら去っていく。その後ろ姿で焦げ茶と黒の縞模様なフサフサ尻尾が小躍りしていた。勝利の余韻に浸っているのが見え見えであった。今宵はヤツの逆転サヨナラ勝ちなのか？
店先で奥野田が「またのお越しを」をお決まりのセリフを口にした後、いい加減に直せよと言いたくなる建付けの悪い音を鳴らして引き戸が閉まる。
その直後、ヤツが鯢呑亭を出て行って間もなくして素っ頓狂な悲鳴が聞こえた。

『ぬぉおおお!?　儂の子分たちがへぶん状態で軒並み伸びておるー!?』

「オイ華扇。お前何した」

「失礼な。ちょっとお腹を撫で回しただけです」
ムツゴロウかよ。
今宵の真の勝者はこの仙人サマであった模様。
つづく

第六十七話　「ＭＥＧＡＮＥ」

「いらっしゃい。初めて見る顔だね」
「まーな」
　少女マンガに出てきそうな銀髪眼鏡の優男が薄く笑みを浮かべた。その気があれば夜の繁華街でホストにもなれる甘いマスク。年齢はオレよりもほんの少し上といったところか。あくまで外見は、だが。
　時代遅れのオモチャなどのガラクタ。何世代も前のもはや化石レベルの電化製品。それらの中にレアそうなブツもさり気なく混ざってあった。素人目だと奇抜なデザインのフラスコにしか映らない嗜好品――水煙草。
　わざわざ人里から離れた辺鄙な場所にある店つっても話の通じないキチガイではなさそう。一クセも二クセもある捻くれ者を危惧したのものの、どうにも杞憂で終わっちまった。
　幻想郷の古道具屋『香霖堂』の店主――森近霖之助が一番奥の専用席に陣取って悠々と来客を待ち構える。
「フッ、一見さんはお断りのクチか？」
「いやいやまさか。多少の冷やかしも歓迎しよう。もっとも、金を落としてくれる良識的な客であれば尚良い」
「っかー、ぶっちゃけたなオイ。ここにあんのが全部売り物なんか？」
「ああそうだ。ただし、僕が売っても良いと判断した場合に限る。あと言い値になるけど構わないかい？」
「客の足元見てイイ具合にぼったくってやろうってぇハラか」
「それもまさか。物の価値を正しく判断するだけの目利きはあるつもりだ。これでもれっきとした商人だからね。付け加えれば、この僕を納得させることができればそれなりに交渉にも応じよう」
　眼鏡のド真ん中を指でクイッと持ち上げて銀髪の男は言い切った。さほど明るくない店内にもかかわらずレンズに光が反射する。コナンかよ。
「心配には及びません」
　ニヒルな男同士の会話に女の声が入ってきた。マジメな性格が滲

んだかのような真っ直ぐに澄んだ声音が耳に心地よい。ガラクタに溢れた古道具屋に似つかわしくない桃色の華が咲いた。

オレと共に来ていた茨木華扇がやけに自信たっぷりに前に出しゃばってくる。

「もし暴利を貪ろうものなら私の手で正してあげます。覚悟することですね」

「しないって。少しは信用してくれ」

「フフ、まぁそこまで言うなら信じてあげないこともありませんよ？」

「やれやれ、世知辛いなぁ……」

仙人サマにしては珍しく？意地悪して愉しんでいやがった。美人な顔立ちに小悪魔チックな表情を浮かべて、銀髪眼鏡の男をチクチクと弄る。Ｓっ気な仙人サマに言い返せないのか、霖之助はガックリと力なく肩を落としておった。インテリ枠ホストな風貌もこれじゃザマぁない。

「この店は相も変わらず閑古鳥が鳴くのですね」

「ほっといてくれ。言っておくけど火の車ではないよ。アルバイトを雇えるだけの儲けはしっかり出している」

「あら意外」

華扇と森近霖之助の気兼ねしないやり取りに親しい間柄が伺える。この女にも食い物屋の他に行きつけの店があったのか。

「綿間部、今何かとんでもなく失礼なことを考えませんでしたか？」

「気のせいだろ」

いつものことながら何つー嗅覚の鋭さだ。それとも女の勘であろうか。オレってそんなわかりやすいか……？

ちなみに香霖堂に行くと言い出したのも華扇である。アレは昨夜のことだ――

『綿間部、明日は空いていますか？』

『あー……今のところ依頼はねぇから空いてるぞ』

『よかった。じゃあ出掛けましょう？　連れていきたい場所があるんです』

『そらいいけど、朝っぱらからは止めろよ』

『フフフ、善処します』

そして只今の時刻はおおよそ二時過ぎ。

もちろん午前ではなく午後、言い換えるなら十四時。紛うことなき真っ昼間。全然善処されてなかった。さすが仙人サマ、見事なまでに期待を裏切らねぇ。

とりあえず仙人サマと古道具屋が話し込んでいる間も、こっちはこっちでテキトーに物色させてもらう。

って、ガラケーどころかポケベルまで出てきやがった。むしろコイツを向こうに持ち帰ったら逆にプレミアが付くんじゃなかろうか。上手く行けば、あぶく銭ぐらいにはなるかもしれん。どうする。とりあえず買っておくか……？

「今日も董子君と待ち合わせかい？」

「約束はしていませんけど彼女のことですから。おそらく、そろそろ来る頃合いでしょう」

「まったく、うちは待ち合い茶屋じゃないんだが？」

「あら？　そう言うなら場所を変えても良いのよ？　それで困るのはどっちかしら」

「……前言撤回。好きなように使ってくれ」

インテリ眼鏡の伊達男が華扇にいいように言い負かされている。まさにタジタジといったカッコ悪さに見ていられない。冷静沈着な営業スマイルも心なしか引きつっていた。哀れ。

「弱みでも握られてんのか？」

「ははは、そんなところだ。『外』の世界と繋がる稀少な人物がいるんだけど、そのパイプ役が何を隠そう彼女なのさ。下手に機嫌を損ねれば数少ない入手ルートを失ってしまう。だからこちらは何を言われても従うしかない」

「何やその地味にえげつないやり口は……華扇オメー、んなコトしてんのかよ」

大人げなさに若干引きながら、桃色ミディアムヘアの女に疑惑の視線を投げつける。いくら何でも容赦なさ過ぎんだろ。

「ち、違います！　彼の過剰表現ですっ！」

そしたら、さっきまでの勝ち誇ったドヤ顔とは打って変わって、赤みがかった瞳をあっちこっちに流したり両手も振り回したりして仙人サマがあせあせと慌てふためいた。ちょっと面白い。

せっかくなので追い打ちをかけてみる。決して真っ昼間に外に引き摺り出された仕返しじゃねぇかんな。

「ホントにホントかぁ?」

「もお！　嘘じゃありません！　そんな脅すような真似するはずがないでしょう!?」

マジメなヤツほどこの手のからかいに耐性がない。華扇も例にも漏れず、ムキになって言い返してきた。

覚えておけよ華扇、弄ってイイのは弄られる覚悟があるヤツだけだ。

しかしながら、何事もやり過ぎればオチにしっぺ返しが来るのが世の常。そう、繰り返しになるが弄っても問題ねぇのは弄られる覚悟があるヤツだけなのだ。

いつしか華扇の表情が徐々に膨れっ面に移り変わっていく。オレが気付いた頃にはもう手遅れだった。

「……綿間部、私がそのようなことをすると本気で思っていたのですか？　へぇ、そうですかそうですか。これは少し話し合う必要が出てきましたね」

「あ、ヤベ」

「逃がすと思いますか?」

説教オーラを纏った華扇が据わった目つきですかさずオレに詰め寄る。むしろ勢い余って互いの身体が触れた。柔らかい肢体と女の匂い。なしてこーゆー時に無防備を晒すのか。

その頃、森近霖之助はといえば、華扇の矛先がテメェからオレに変わったことでちゃっかり難を逃れ、今や楽しげに対岸の火事を見物していやがった。オイコラ、笑ってんじゃねぇぞコノヤロウ。

「わ　た　ま　べ　?」

「だーもう近ぇって!」

両頬を風船みたく膨らませて、見るからに機嫌斜めな女に壁際まで

追い込まれる。
その最中、香霖堂の扉がぶち壊さんばかりに威勢良く押し開けられた。
「ちーっす！　店長ぉー、華扇ちゃん来てる～？」
女子高生が乗り込んできた。お下げにメガネという特徴は典型的な地味キャラのそれ。しかし侮るなかれ。やたらテンション高いうえに傍若無人そうな態度も相まって、なんつーかキャラが濃かった。
そんなＪＫオブＪＫな申し子の乱入に動じることなく、それどころか華扇は呆れた様相で向き直った。
「董子、やっぱり来ましたね。また居眠りですか？」
「いーじゃん、いーじゃん。ちょっとだけ！　先っちょだけだから！」
「まったく。後も先もないでしょうに」
董子と呼ばれた小娘が我が物顔で香霖堂に入り浸る。ちとエグい発言があったような気もするが。幸か不幸か仙人サマは気付いてない模様。
服装は紫ベースのチェック柄なスカートと同じカラーリングのベスト。その下に襟付きの白シャツを着ている。どこぞの制服の夏服バージョンといったところであろう。
そう、学校の制服だ。着物でも和服でもない。巫女装束でもなければ異世界チックな個性派ファッションでもない。ま、ちょいとコスプレっぽいデザインだけどよ。
華扇がその眼鏡女子を呼びつけて、オレの前に立たせた。
「綿間部、紹介します。彼女は宇佐見董子。この子もまた『外』の世界の人間です」
「ども！　宇佐見董子、花の女子高生！　秘封倶楽部の初代会長やってまーす」
「あぁ、オレは――って宇佐見だと？　オマケに秘封？楽部だぁ？」
「うえ？　そうですけど何かヘンでした？」
「こら、質問はちゃんと最後まで名乗ってからにしなさい」
華扇に小言を言われちまったが、今はそんなことどうでもいい。
あの女子大生コンビと同じサークル名だと。しかも、よりにもよっ

て黒髪ショートの方と苗字まで一致しやがった。行き過ぎた偶然に思わず二度見しちまう。ホントに偶然か……？

「あのー……？」

「いや、何でもねぇ。気にすんな」

「いやいやそれ逆に気になっちゃうやつだから」

つい深読みしそうになったが、ふと我に返って鼻で嗤う。

さすがに考え過ぎだ。宇佐見なんつー苗字はちったぁ珍しいかもしれんが別になくもない。サークル名がダブることだってあるわな。実際、そこまで奇抜なネーミングでもねぇし。

「華扇、コイツ知り合いか？」

「ええ。今日ここに来たのも彼女を紹介したかったからなんです。正確に言えば、幻想入りした外来人とは事情が異なるのですが……」

「あ？　どーゆーこった。ミス八雲に拉致されたんじゃねーのか」

「彼女の場合は夢幻病と呼ばれる症状によるものです。簡単に言ってしまえば、あちら側で寝ている時にだけ幻想郷に入り込めるの。ほら、前にも似たようなことがあったのを覚えていますか？」

「あー……マエリベリーの時と同じってぇワケか」

「厳密にいえばそれも違いますけどね。董子が自ら異変を起こしたりと色々ありましたから、その影響で発症したのでしょう」

「ちょっとー、人がイキッてた頃の黒歴史なんか勝手に話しちゃダメだってば。ちょっとは反省してるんだから」

「へぇ、ちょっとですか？」

「うそうそうそ！　思いっきり反省しました！」

華扇の眼光に気圧されて宇佐見董子が冷や汗混じりに敬礼をかます。こやつも仙人サマには敵わないらしい。

つーか、このＪＫ今以上に調子乗ってた頃があったのかよ。眼鏡のレンズ越しの吊り目が、密かに周囲を見下している姿を想像すると確かにしっくりきた。自分は他の連中とは違うとか自惚れてそう。

その自尊心を博麗の巫女に叩きのめされたか、それとも華扇に性根を叩き直されたか。どのみち負けたのは間違いあるまい。

先ほどの華扇のセリフからこの眼鏡っ娘が授業中に居眠りしてん

のも察した。
「ってこたぁオメーの本体は今もどっかの高校にあるワケか」
「そゆこと。あ、でもこっちでも実体はあるよ。ほらほら、こうやって物も持てるし」
さらりとタメ口になった宇佐見菫子が、昔流行った気色悪いフクロウみてぇな喋る人形を手のひらに乗せてみせる。幻影だったらこんな芸当は不可能だ。同じく霊体のセンも消える。
なお、電池切れなのか某人形はうんともすんとも言わなかった。
「ほーん、なるほどな……」
「言っておくけど、もし自分の手で確かめたくてもお触り厳禁だかんね？　生の女子高生の身体はそう安いものじゃないのよ。プププ、残念でした。目の前に可愛いＪＫがいるのにねー」
「まな板に興味ねぇよ」
「しばくぞワレ」
その瞬間、鬼の形相と化した宇佐見菫子がギラついた眼光でオレを睨み上げた。さらに異様に低くなった声色にも殺気が込められている。キレる十代かオメーは。つか目ぇ怖っ。
「まぁまぁ董子、落ち着きなさい、それに乱暴な言葉遣いはいけませんよ？」
般若ヅラの眼鏡ＪＫをなだめるべく、桃色ミディアムヘアの仙人サマが諭しながら割って入る。華扇も他意はなかっただろう。だが、タイミングが悪かった。
「――――」
「えっと、董子？」
宇佐見菫子の視線がある一点に釘付けになる。紅い中華衣装の真ん中あたり、薔薇の飾りと前垂れをハッキリと押し上げる。豊満な二つの膨らみ。
「？」
トドメに華扇が前かがみになれば柔らかく揺れた。圧倒的な差を目の当たりにした瞬間、眼鏡っ娘は死んだ魚の目にまで堕ちた。言うまでもなく勝敗は決した。

「大丈夫ですか?」
「うひひ、ダイジョウブ――じゃなぁあああいッ！　華扇ちゃんは巨乳だから持たざる者の気持ちがわかんないのよぉ！」
「きょにゅっ……!?」
　どこまでもオブラート引き剥がした直球ストレートに、さしもの華扇も目を丸くして固まってしまう。美人な顔を赤らめて胸元を腕で隠すのがあざとい。
　それでも華扇は頑張った。仙人の矜持かけて踏み止まり、どうにかいつもの調子を取り戻そうと凛として立ち振る舞う。
「コホン、いいですか。何も女性の魅力は胸に限りませんよ。心の在り方が美しければそこに惹かれる者もいます」
「でも華扇ちゃんの胸おっきいの事実じゃん。そこがイイって男だって絶対いるから。例えばその人とか！」
「ふへぇや!?」
「ちょバカこっち振んなや！」
　トンテモねぇキラーパスが飛んできて華扇だけじゃなくオレまで取り乱す。何さらしてくれとんのやオノレは。
　あまつさえメガネＪＫの暴走はまだまだ止まらない。桃色仙人のたわわな果実を悔し気にガン見する。オメー若干私怨も入ってねぇか?
　直後、ヤツは驚愕の発想を閃いて躊躇なく言い放った。まるで衝撃的な真実に気付いた名探偵の如く、
「――ハ!?　もしかして夜な夜な揉んでもらって大きくなったんじゃ!?　女性ホルモンとかフェロモンとかエッチなやつだ……ッ！」
「ば、馬鹿者ッ！　そんなはずあるわけないでしょう!?」
「本当に?　これまで！　一回も！　男性におっぱい触られたことないの!?　気になるあの人とかに！」
「そ、それは」
「一緒にお風呂に入って洗いっこしたり、どさくさに紛れて胸を押し当てたりしてないわよね!?」
「そっ、そこまではしてませんッ!!」

「そこまでは……？」
「……ぁ」
自ら墓穴を掘った失言に華扇が気付いた頃には手遅れ。すでに宇佐見菫子は口の端をひくひくと痙攣させておった。
そこで言い間違い聞き間違いだと言えればまだ間に合っただろうに、桃色の女はあまりにも正直すぎる反応をしてしまう。
「えぇっと」
赤みがかった瞳を色っぽく潤ませて、熱に蕩けた表情でオレをチラ見しながら指を絡ませる。そのせいでオレまでイロイロと思い出しちまった。うっかり顔に出さないよう咄嗟に明後日の向きへ目先を逸らす。って、オレまで何やってんだ。
オレたちのわかりやすい行動を眼鏡女子が見逃すハズもなかった。
「うがー！」
『!?』
いきなり叫び出した眼鏡ＪＫのケモノもかくやな豹変ぶりにオレと華扇は思わず肩が飛び跳ねた。そんなものお構いなしに、宇佐見菫子は帽子越しにガシガシと頭を掻きむしった。
やがて、今度は暴走したエヴァンゲリオンみたくユラリと脱力した体勢で、次の標的を定める。オレでもなければ華扇でもない。この場にいるもう一人。
直後、眼鏡女子の脚力が爆発した。今の今まで一人だけだんまりを決め込んでいた森近霖之助のところに突貫していった。
「テンチョー！　テンチョー!!　華扇ちゃんが、華扇ちゃんがぁあああ!!」
「ちょっと!?　董子待ちなさいッ！　何を言うつもりですか!?」
「君たち頼むから静かにしてくれないか」
この男、もしかしなくても苦労人かもしれん。

つづく

第六十八話　「暑中お見舞い申し上げます」

まだまだ夏の真っ盛り。天候は快晴。

直射日光が目を眩ませる。紫外線が地上を照り尽くし、猛暑によって遠目に陽炎が揺らめいた。

お天道様と共鳴するかの如く、アブラゼミがその名をほしいままに鳴き声を夏空に響かせる。さながら鉄板を熱したのと酷似したクソ暑苦しい協奏に、心の底からウンザリしちまう。

仮にも夕方のハズだというのに、どーゆーワケかまだ日没には至っていない。時計がなけりゃ昼と見分けがつかないだろう。この季節特有の日の長さというやつか。夜を生きる男には微塵も嬉しくねぇハナシだ。

オマケに此処はド田舎異世界の幻想郷。ロクに電気すら通っちゃいねぇ。

「ったく、エアコンもねぇとかどう足掻いてもキツ過ぎんだろ……」

「だからこうして涼を取っているのです。そもそも、暑さを凌ぐための手法などは考えればいくらでも思い付くというもの。かつて先人たちもそうやって知恵を絞り工夫を凝らして、真夏日の厳しい暑さを乗り越えてきたのです」

「へーへー、そらごもっとも。つってもしゃーねぇだろ。ちぃと前まで居た所と文明レベルが違い過ぎんだからよ」

「言い訳しない。ほら、早くしないと溶けちゃいますよ。んー♪　冷たくて美味しい」

茨木華扇が説教の片手間に持つスプーンも止めず、満開の笑顔で幸せそうに注文の品を堪能していた。頬に手をやり歓喜の声を零して束の間の幸福感を噛みしめている。誰がどう見ても一口の甘味に舌鼓を打つ年頃の娘でしかないが、これでも人に教えを説く仙人サマだってぇのだから驚きモンだ。

テーブルを挟んで真向かい同士に座るオレたちの間に、透明なガラス容器が二つ。

人の手で生み出された白い雪が山岳を象り、山の頂から赤透明の渓

流が下る。まさに季節外れの人工の雪は、しかして誰もが知る夏の風物詩といえよう。その名を、かき氷。

人里の甘味処もそれなりに長居できる数少ない避暑地であった。ま、エアコンどころか扇風機もねぇワケだが。だとしても炎天下から逃れるくらいはできる。

そういや、香霖堂にレトロな扇風機があったような。こんなことなら買っておくべきだったか。いや、コンセントの差込口がないなら無用のガラクタでしかねぇ。

ちなみに、妖怪の山の方が電気が普及していたりと生活レベルは高いらしい。鴉天狗が新聞記者だとか、河童が機械いじりに特化しているとか。さすがファンタジーな異世界。ワケがわからん。

「つーか電気通ってなかったんじゃねーのか。冷蔵庫も使えねぇのにどうやって氷なんか作ってんだ？」

「手段ならあります。氷の妖精にお願いするとか、魔法によって氷を生み出すことも可能でしょう。あとはそうですね……そういえば香霖堂が最近そのような商売を始めたと聞いたことがあります」

「あの古道具屋が氷の卸売りだぁ？　どーゆー風の吹き回しだってぇんだ」

「えぇと、確か『外』の世界の機械で氷を作り、冷気を維持できる特殊な箱に詰めて荷車で運ぶそうです。従業員に外来人がいると言っていましたから、その者の発想ではないかと」

「冷蔵庫とクーラーボックスと、荷台付きのチャリでもあればできなくもねぇわな。っかー、ウマいビジネス考えたもんだ」

あれだけ家電がごった返しているなら、何らかの発電設備があってもおかしくねぇだろ。ソーラーパネルか、それこそベタな自転車発電か。販売方法が昔のアイスキャンディー売りかよ。

「綿間部も見習ってはどうですか？　商売とは即ち、皆の要望を形にしたことにより相応の価値の金銭を受け取るもの。それ自体に善悪はありません。弱みに付け込んだ非道な商いをしない限り、世のため人のために適っているのです。香霖堂の氷売りも、人々がそれを望んでいたのもあって好評だそうですから」

「フッ、オレは今のままでイイんだよ。依頼があったら動く。それだけだ」
「はぁ……まったくもぉ」
勤勉勤労を宣う憎まれ口をこっちは減らず口で迎え撃つ。夜の繁華街で営む何でも屋。それこそがオレだ。
ま、そのおかげで今宵も依頼探しから始まるのだが。それを言っちまったらまた仙人サマに小言で弄られかねないので黙っておく。
「それにしても暑いのには変わりねぇ、か」
「心頭滅却すれば火もまた涼し。心構えが足りませんよ」
「オレのかき氷まで物欲しそうに見てるヤツに言われてもな」
「んな……!?　い、意地悪っ!!」
かき氷のシロップのように顔を赤らめながら華扇がオレを睨む。あれだけハイペースで平らげてよく頭痛にならねぇなオイ。酒豪だけじゃなくそっちも頑丈なのか。
あとオレたちが居座っているこの店だが、甘味処つっても時代劇な団子屋なんかじゃなく喫茶店をモチーフにしたハイカラ（死語）だった。壁のメニューを見れば、正直引くレベルのデカ盛りパフェなんかもある。食うヤツいんのか。いるな、目の前に。
そのうちカップルドリンクとか始めそうだわな。ま、オレには……関係ねぇな、間違いない。
「綿間部？　どうしてこちらをじっと見るのですか？」
「……何でもねぇよ」

「んじゃ、行くか」
「はい」
桃色ミディアムヘアの仙人サマを引き連れて、本日も平穏安泰な人里を歩き始める。残暑と呼ぶにはまだ一足早い。ひとまず、かき氷効果のおかげで多少は耐えられそう。
ふと周りに目をやれば、人里の至る所に夏の赴きが散りばめられていた。気にも留めなけりゃ見落としていたであろう些細な変化に気付く。

『せんせー、さようならー』
「ああ、気を付けて帰るんだぞ」
寺子屋の授業が終わったばかりのようだ。学び舎を背にして、上白沢女史が教え子のガキんちょどもが帰っていく背中を見送っていた。夏休みじゃねーのか。
去り行くちんまい後ろ姿を見届けた後、守護者サマがこちらを振り向く。
「おや、黒岩に華仙殿ではありませんか」
「よう」
「こんにちは。本日もご鞭撻お疲れさまでした」
「ははは、ありがとう」
元気が無尽蔵なガキんちょ連中を一人で相手していたってぇのに、疲労の片鱗すら見せず上白沢女史が聖人みてぇな笑みで受け答える。人里の守護者サマと言われるだけのことはある。この女がいる限り人里に災厄はなかろう。
で、上白沢女史はといえば、珍しいことに普段は真っ直ぐ下ろしている水色ストレートのロングヘアをポニーテールに束ねておった。長い髪に隠れていたうなじが露わになる。
「……むぅ」
見慣れない髪型に見入っている傍ら、華扇が自らの桃色の髪を指先でクルクルと弄っていた。コイツもポニテしてみたかったのだろうか。オレは今のが似合っていると思うんだが。
鯢呑亭を通りがかれば開店準備中の途中であった。
「んしょっ」
外ハネ系ピンクショートの看板娘が軒先に風鈴を吊るしていた。軽く背伸びして紐を結ぶ後ろ姿をぼんやりと眺める。そよ風に吊るしたばかりの風鈴がささやかな音色を奏でた。
暑苦しさに拍車をかけるアブラゼミの濁声よりも遥かに耳に心地よい。少しだけ暑さが和らいだ気がした。
「風流ですね」
「そーだな」

華扇と二人で風鈴の旋律に耳を澄ませる。
昔ながらの吊るし鐘のデザインかと思いきや、まさかのクジラの形をしていやがった。皿といい椅子といい、この飲み屋はどこまでクジラにこだわってんだか。
開店準備に勤しむ奥野田の邪魔をしては悪いと、あえて声はかけずにオレたちはその場を後にした。なお後で拗ねられるのはここだけのハナシだ。
「お客さん、仙人様」
「お」
ちょうど人里に来ていた彼女もまた夏ならではの装いに翻った。
焦げ茶色の和服から、清涼な薄い布地の浴衣に衣替えしていた。白い色調にほんの一滴の青が混ざり、紺色のアサガオが施される。上品な雅さと相まって、和の涼しさを誘う。
ミスティア・ローレライの風情ある衣装に仙人サマがたおやかな微笑みを浮かべる。
「こんにちは。素敵な浴衣ですね。よくお似合いです」
「ありがとう、仙人様。二人はこれからどこ行くの？」
「フッ、さてな。どーなるかは誰にもわかりゃしねぇよ」
「何をカッコつけているのですか。要するに仕事がないだけでしょうに」
「おまっ、それを言ったら元も子もねぇだろーが」
「事実なのですから仕方ないでしょう」
せっかくクールかつニヒルにキメたってぇのに、華扇の遠慮ない一言で台無しにされちまった。チクショウめ、ちったぁ空気を読まんかい。
そんなオレたちの会話を漫才トークと勘違いしてんのか、浴衣姿の鳥娘が可笑しそうに吹き出した。
「いつもそうだけど、相変わらず仲良しなんだから。ちょっと妬けちゃう」
「え……えぇえぇ!?　そそ、それはどういう意味で……!?」
「ったく、あんま変な冗談言うんじゃねーよ」

「あはは、ごめんね」
あざとい。
そのうえ水着と違って露出控えめだというのに、なんとも仄かな色気さえあった。素材が薄っぺらいせいで華奢な身体つきが一目でわかってしまう。雰囲気も少し違って見える。
「もし時間があったらお店にも来てね。お酒冷やして待ってるから」
「おー、後で行くわ」
「こら。その前にしっかり働くこと。いいですね？」
「わぁーってるっつの」
というより、オレらが行ったときに空席があるのかってぇ方が疑わしいんだけど。若女将の浴衣を一目見るべく男性ファンが殺到するんじゃなかろうか。
実のところ、さっきから道行く男どもがチラチラと鳥少女の艶姿に見惚れていやがる。
「ま、気が向いたらな」
「うん。その時はいっぱい労っちゃうから期待しててね」
「おー」
「むむぅ……」
上白沢女史の時と同じく仙人サマが面白くなさそうにオレを軽く睨んでいやがった。だから何やねん。
しかし浴衣姿の女から「お疲れ様」と気遣われながらお酌サービスされるなんざ、アレな店の有料オプションっぽい。追加料金とか取らねぇよな？
その後も華扇と肩を並べて歩いていくうちに、いつしか大通りまで足を伸ばしていた。しかも、行けば行くほど寄り道の度合いも増していく。
ついには依頼探しよりも店巡りが中心になっちまっていた。
「綿間部、どうですか？」
「お――」
立ち寄った傘屋で華扇が和傘を広げてオレに振り返った。

秋の紅葉を彷彿とさせる艶やかな紅い番傘の下で、柔らかな桃色のミディアムヘアの美人が照れたようにはにかむ。柄をクルリと回せば傘も風車のように動く。思わず目を見開いた。

紅い中華衣装とシニョンで括った女の振る舞いは、まるで絵画の切り抜きのようであった。

「フッ、なかなかイイと思うぜ」

「ありがとうございます。それじゃあ、これにしましょうか」

オレが褒めたのがそんなに嬉しいのか、仙人サマはそのまま購入する。この時間帯に日傘を買ってもあんまり出番はなさそうだが、かといって口に出すのは野暮ってぇモンだろ。

店を出る。一つの和傘に二人で入り、ゆったりと緩い足取りで進む。人里の古い町並みは日陰になる場所が少ない。思いのほか日傘は役立った。

しかし、そんなオレだけに悲劇が襲う。

曲がり角を出る。その瞬間、パシャッと音を立てて冷たい水が顔面にぶっかけられた。

「わぶッ!?」

「あ、ごめん」

季節外れのマントで首回りを覆い隠すろくろ首が店先に立っていた。これまで夏仕様の知り合いと立て続けにあったというのに、コイツだけは一人変わらずその恰好。赤髪に青リボンの女の手には墓参りで使いそうな柄杓と木桶を携えていやがった。どうやら店先で打ち水をしていた模様。

出禁にされたワケでもないってぇのに頭から水を被っちまった。ついでに少し口に入ってしまった水を道の隅っこに吐きながら文句を垂れる。

「ったく、オメーなぁ……」

「本当ごめんって。わざとじゃないから」

さすがのクール系ポーカーフェイスも罪悪感があったようで素直に謝ってくる。

しかしメンドクセェことになった。着替えなんかあるハズもなく、

かといって今からテントに引き返すのも億劫ではある。幸い、ぶっかけられたのはただの真水だ。泥水じゃない。一張羅を台無しにされずに済んだ。

「にしても何でこんな時間に水撒きなんかしてんだよ」

「綿間部、知らないのですか？　打ち水は朝や夕方の方が効果は長続きしますよ。撒いた水がすぐに蒸発しない分、時間をかけてゆっくりと地面の熱を奪っていきますからね」

「ほーん、そうなんか……って、どーして華扇の方は全然濡れてねぇんだ」

「立ち位置から綿間部が私を庇ってくれる形になりましたから。ふふ」

「こっちは笑い事じゃねぇんだが」

「あらら、かなり派手にやっちゃったみたいね」

聞き覚えのある大人びた女の声が割って入った。少しお茶目なおねーさん染みたボイスは忘れようがない。

「ちゃお、将也君」

「やっぱりあんたか」

球体と帽子がアクセントな赤髪セミロングの女神サマ、ヘカーティア・ラピスラズリが人里においでなすっていた。肩まで露出したプリント黒Tシャツやミニスカはこの季節に相応しい。

「来ちゃった。ひょっとして迷惑だった？」

「いーや？　全然」

「そう？　よかった」

「つーかよぉ、そんなモンどこで手に入れたんだ」

「ひ　み　つ♪　どうかな？」

いきなり現れた女神サマは洒落たサングラスを掛けておった。まさかこの女までサマーファッションの波に乗っているとは思わなんだ。

スッと外して額の上に持っていった拍子に、真夏の陽射しを受けてアクセサリーのようにキラリと反射する。しなやかな腰に手を当てて片目を閉じるポーズもキマっていた。あたかもモデルの写真のよ

うに。少年誌のグラビア集かよ。
　そんじょそこらの読モよりも格段に様になっている赤髪セミロングの女神サマに、せめてもの賛辞代わりに口笛を吹いてやった。微笑み返した女が今も水滴を滴らせるオレのすぐ傍まで歩み寄る。
「それはそうといつまでもびしょ濡れだと良くないと思うな。せめて服が乾くまで店の中で待たせてもらった方がいいんじゃない？」
「って、見てたんかい」
「ふふふ、バッチリ見ちゃいました。将也君ってたまーにどうしようもなく運が悪いのね」
「ぐ……ほっとけ。これでも悪運はあんだよ」
　その悪運のおかげかは知らんが、打ち水が直撃したのは上半分だけだった。ズボンまで濡れるっつーあらぬ誤解を招きかねないシチュエーションは避けられた。
　しかし真っ昼間ならいざ知らず、夕方間際に冷水を浴びるのはちぃとばかり堪える。ぶるりと体が震えた。
「へ……へ……イーッキシ！」
「ああ、彼女の言う通りですね。いくら夏とはいえ、さすがに濡れた服を着たままでは風邪をひいてしまいます。すみませんが、少しお邪魔してもよろしいでしょうか？」
「もちろん。そもそもこっちが水掛けたのが原因なんだから、お詫びくらいさせて」
「私もご一緒していいかな？　このまま放っておくのも気になっちゃうし」
　女三人寄れば姦しい。たかが服が濡れたくらいで良くも悪くも話が弾んでおった。というかせめてオレの意見を聞いてからにしろよ。ガイシャそっちのけで進んでんぞオイ。
　結局、依頼が待っているワケでもなかったので赤蛮奇の働く酒場で時間を潰すことになった。ま、断る理由もねぇしな。

「脱いで」
　だからってぇ店に入って最初の一言がそれとは夢にも思うまい。

つづく

第六十九話　「それでもオレはヤってねぇ」

「脱いで」

クール系で容姿もイイ女から開口一番にトンデモねぇコトを言われちまった。そいつがまたうら若き乙女とくれば、思春期や一部の変態どもが興奮を覚えることであろう。

「おぉ、頼んだ」

ま、オレはそんな歪んだ特殊性癖なんざ持ち合わせちゃいねぇんだけどよ。

「そんなに時間はかからないと思うから、適当に寛いでて。注文もあればどうぞ」

「フッ、そーさせてもらおうか。注文は気が向いたらな」

赤蛮奇の口調があまりに事務的で、皆さまが期待するような色気ある空気なんざ欠片もなし。例えるなら、医者から「聴診器当てるので上着脱いでください」と言われたに等しい。

オレから濡れそぼったシャツを?ぎ取った首が伸びないタイプのろくろ首はといえば、バイト中に食器を下げるのとまったく変わらない手つきでさっさと奥に引っ込んでいった。裏口に物干しがあったハズ。もしかしなくても吊るしに行ったのだろう。

今のオレは上半身は裸で下半身には黒のズボンを穿いているっつーＢＬ小説の表紙かジャッキーチェンみてぇな恰好となっていた。

いくら幻想郷が異世界といえど、半裸がデフォルトのキャラがいるほどファンタジーな世界観じゃねぇ。そうなったらこの女が黙っちゃいないワケで。

「こら。そのような恰好でうろうろしないでください。みっともないったらない」

「服持ってかれてんだからしゃーねぇだろ。どーせ客もしばらく来ねぇって。来たとしても野郎ばっかだ。だから気にする必要もねぇわ」

「そういう問題じゃありません！　身だしなみの乱れは心の乱れにも繋がります。そんなことだからいつもだらしないのです」

仙人サマがグチグチと小言をぶつけてくる。こちとら水ぶっ掛けられたってぇのに何たる理不尽な仕打ち。やれやれと辟易しつつ、手近にあった椅子をぞんざいに引いて座り込む。

かと思えば、地獄の女神サマがオレを――というよりもオレの腹から腕までまじまじと見ながら興味津々な表情を浮かべおった。

「わぉ、将也君って結構ガッチリした身体つきしてるんだ」

「そうですね。そこは認めざるを得ません。素直に評価しましょう」

「なして上から目線やねん」

「これで生活態度を改めれば完璧だと言っているのです。私が何度も朝起こしているのにちっとも反省しないで」

「オメーこそ性懲りもなく男の寝床に潜り込むのやめーや」

「んにゃ?!　だっ、誰がいつあなたの布団に潜り込んだというのですか!?」

「物の例えだっつの。誰も布団の中とは言ってねぇだろ」

その慌て様だと逆にホントにやったんじゃないかと疑われんぞ。え、マジでしてないよな？　ちぃと不安になってきたぞオイ。そこまでいったら無防備どころの騒ぎじゃねぇかんな。

オレたちが不毛な言い争いを繰り広げている間も、赤髪セミロングの女神サマは割れた腹筋をじっくり観察していやがった。何なら触りたそうな素振りまである。どんだけご執心なんだよ。

夜の繁華街で何でも屋なんてモンを生業にしてりゃ、荒事やら腕っぷし絡みの依頼も少ならずあった。冗談抜きで金銭に窮して夜間の道路工事の日雇いバイトで食い繋いだ時期もなくもない。んなワケで、腹筋もシックスバックが浮き彫りになるぐらいにはガタイは出来ている。そいつはオレも密かな自慢だ。

そうはいっても地獄だったら鬼連中の方が筋骨隆々だろうに。そーゆー意味じゃ地獄を司る女神サマからすればゴリマッチョなんぞ見慣れたモンではなかろうか。オレには女神の心境がわからぬ。

やがて、かの女はさり気なく女がオレの正面までにじり寄ってきて、

「えい」

「オイ」
「わ、かたぁい」
何食わぬ顔で人差し指を伸ばして腹筋の割れ目を突き始めた。って、ホントに触ってきやがった。
おねーさんキャラが子どもみたくはしゃぎながら、指先でツンツンと突いたり時々なぞったりして遊ぶ。面白いオモチャを見つけたと言わんばかりに。
痛くも痒くもないのだが如何せんくすぐったい。せめてなぞるのは止めろと言いたい。
「フフ、将也君のカラダ♪」
「……ったく」
ありのままの素顔で楽しげにされると、どーにも毒気を抜かれる。しゃーねぇ。女神サマが心ゆくまで我慢してやるか。
ふいに、今度は二の腕を誰かに掴まれた。あたかもマッサージの如くモミモミとほぐすように揉みしだかれる。女の手の柔らかさと体温の温かさ。ヘカーティアを除けばこの場にいる女なんざ一人しかいないのだが。
仏頂面で見やれば、思った通り華扇が負けじとオレの腕を触っている最中だった。どさくさに紛れて何やってんだコイツ。
「ふむふむ、均整の取れた好ましい筋肉の付き方をしています。実践で培われた賜物でしょう。大工か畑仕事に向いていますね」
「そら依頼があったらやってやらんでもないが、転職する気はねぇかんな」
なぜか審査員ツラで好き勝手にのたまう仙人サマにぶっきらぼうに答える。むしろ女神サマよりも食い付いていると言っていい。ぶっちゃけこっちの方がくすぐってぇんだが。
というか、だ。自分で言うのもアレだがコイツら二人とも半裸男の身体に嬉々としてベタベタ触ってくるとか。ちったぁ恥じらいの気持ちってぇのはないのか。
「やっぱり男の人って逞しいわね。私じゃこうはならないかなー」
「世の中の男が全員こーなってるワケじゃねぇだろうよ。つか何だ。

あんたも腹筋割りたいのか?」
「んー……そうじゃないけど、これでもお腹周りは気にかけているつもり。ほら」
チラリ、と。
Ｗｅｌｃｏｍｅ　Ｈｅｌｌの英文字プリントがされた黒いＴシャツの裾を捲って、地獄の女神サマは自らのヘソを露出させた。
細く引き締まったウエストは大人な女に見合ったくびれを生み、余分な脂肪も筋肉もなく理想的なスタイルを維持している。日焼けもなく滑らかな美白の肌。色っぽさを引き立てるヘソの小さな窪み。
美人な顔立ちとモデル体型が組み合わさって水着も難なく着こなせるだろう。黒のビキニとか似合いそう――
「ば、ば、ば、馬鹿者ォォオオオッ!!　何をじっくり凝視しているのですか!?　この変態!　ヘンタイッ!!」
「ぐおお……!?　耳元でバカみてぇに大声出すんじゃねぇよ鼓膜破れんだろうが!」
「うるさい!　いいから一刻も早く目を離しなさい!　あ、あなたも男性がいるのにみだりに素肌を晒すなんてはしたないですよ!?」
「あらやだ、怒られちゃった」
まさに怒髪天を衝く。端正な顔を真っ赤にした茨木華扇がオレとヘカーティア・ラピスラズリを叱り飛ばした。こっちに至っては変態呼ばわり。別にオレが見せろ言ったワケじゃねぇわ。
「もぉ!　綿間部のいやらしさは本当に油断なりませんね!　あなたはいつもいつも隙あらば――」
「ヒトを変質者みてぇに言うのやめい」

「しかしまだ乾かねぇのか」
「日も暮れてきたからね。昼間と同じってわけにはいかないのかも」
「そもそも綿間部が打ち水に気付けば避けられた可能性もあります。今回は双方の不注意によるもの。あまり彼女ばかり責めるのは感心しません」
「死角で気付くとかそれもう暗殺者じゃねーか」

今夜はまだ依頼がないので良くも悪くも急ぐ必要はない。
が、残り時間も不確定なうえに手持ち無沙汰ってぇのは暇すぎる。
オマケに下手に歩き回れば華扇が口うるさく文句言ってくる始末。
赤蛮奇もあれから顔を出してない。調理場でお通しの下準備でもしているのであろう。
トドメに来客も未だになし。もしや浴衣女将のところにどいつもこいつも流れていったのではなかろうか。だとしたら野郎どもの脳ミソ単純すぎんだろ。
ま、そのおかげで美女二人を侍らす上半身裸の男っつー悪評が人里に流れていないから好都合なんだけど。
「こんなんじゃ今夜の依頼もなさそうだな……」
そうボヤきながら椅子から立ち上がり、小上がりに移動して大の字で寝そべった。することがないなら仮眠でもしとけ。ここのところ日中は暑さで寝苦しかったし。
「ちょっと綿間部、行儀が悪いですよ」
「ズボン一丁で練り歩くよりかはエエだろ。赤蛮奇が来たら起こしてくれや」
「まったくこの人は……」
華扇が目敏く注意してくるのを半開きの瞼でテキトーに聞き流す。
畳のひんやりした感触が地肌に心地よかった。今日寝れるわ。
「それじゃあ私も」
「はい？」
「あ？」
おもむろにヘカーティアも席を立って小上がりに上がってきた。
そのままオレの隣に膝をつくと、さらに上体を傾けてピッタリとくっつきそうな真横に寝そべった。プリント黒Tシャツに隠された豊かな双丘が畳に押し潰れる。
うつ伏せになって、組んだ腕を枕に顎を乗せてしな垂れかかる。赤髪セミロングを揺らして、くすっと微笑みながら地獄の女神サマがオレを覗き込んだ。
「ね、一緒に寝よっか」

ほんの少し年上めいた女がイタズラっぽく目を細めて囁く。からかっているようでいて、まんざらでもなさそうに。巷で流行りのおやすみボイスさながらの吐息混じりの小声が耳朶をくすぐった。

お互い横になっているので必然的に目線の高さも同じになる。そのせいで、いつにも増してヘカーティアとの距離の近さを感じる。おねーさんキャラのどこか期待が込められた瞳が真正面からオレを見つめる。いや待て、どーしてこうなった。

「そそそっ、そんなのゼッタイにダメに決まってますッ!!」

その直後、華扇が物凄く焦った声を張り上げた。

やけに焦燥に駆られた彼女はオレたちがいる小上がりまで突進する。ただし、明らかに冷静さを失っていたのでは足元が疎かになろう。そして予感は的中した。

段差を乗り越えようとして失敗。目の前で躓いてしまった。

「きゃ……!?」

予期せぬアクシデントに文字通り足元をすくわれ、前のめりにバランスを崩す。そこから勢い余って倒れ込むようなかたちで、オレの下腹部を目掛けてドスンと尻餅をついた。

「はわぁ!?」

「ごほぁ……ッ!?」

ヒップドロップに匹敵する衝撃がガラ空きの土手っ腹を圧迫した。数秒ほど酸欠になって意識が遠のく。赤髪二つ結びのサボりな死神女が微かに見えた気がした。

「ごっ、ごめんなさい！」

「いいから早く退け……重――」

「そ、それ以上は言わせませんよ！　いくらなんでもデリカシーがなさすぎますッ！」

女にとっての禁句を口に出させまいと、華扇がオレに乗ったまま猛抗議して暴れる。

実際そこまで重くはなかった。あんだけ食い意地張ってるワリには華扇も抜群にプロポーションが整っている。食った分が全て説教でカロリー消費しているのであろうか。栄養の行き先は何処へ。

だとしても、女子供だろうと一人分の体重が助走もつけて飛び乗ってきたのだ。誰だって苦しいに決まっている。
「大丈夫？　将也君」
「コレが大丈夫そーに見えんのか……？」
「いつまでそうしているつもりですか!?　不純です破廉恥です今すぐ離れなさい!!」
「その前にオメーが早く下りんかいっ」
今もなおちゃっかり添い寝している女神サマをムリヤリにでも引き剥がそうと、華扇がオレを（物理的に）尻に敷きながら騒ぎ立てる。それがさらなるピンチを招いているとも知らず。
「くぉ……!?」
ヒップドロップのダメージが収まったものの、華扇の臀部からハリのある弾力がヘソの下を擦った。ほどよい肉付きの尻がもどかしい刺激を与えてくる。
微弱な摩擦に身の危険を感じる。未だに馬乗りになったまま一向に離れない華扇を振り下ろさねば大惨事になりかねない。そう危惧したオレは力づくで足掻いた。
「だーもう！　さっさと退けっつのオラ」
「あ、んっ！　き、急に動かないでぇ……っ、やぁん！」
「ちょバカおまッ、なんつー声出してんだ!?」
むしろ状況がバチクソ悪化した件について。
あろうことか仙人サマが我慢できないとばかりに甲高い声を上げやがった。もはや傍からは嬌声と聞き間違えられそうな上擦った女声が酒場に響いた。桃色の女のあられもない姿にオレまで余裕を失う。
「ぐっ、キツ……ぅ！」
「ふーっ、ふーっ……んんぅ！」
なりふり構わずオレが動く度に、華扇は必死に声を押し殺そうとしてくぐもった息遣いで身体をビクつかせる。胸元に置かれた両手がムダに強張っているせいで、あたかも上から押さえつけられているかのように起き上がれない。しかも、なぜかヘカーティアは眺めている

だけで何もしてくれない。いや退かすの手伝えよ。
クソッタレ。こんな場面を何も知らないヤツが見たら――
「これお詫びに出しておくからよかったら飲んで――は？」
『あ』
諸行無常。最悪過ぎるタイミングで赤蛮奇が戻ってきた。
バイト娘が持つお盆の上に、キンキンに冷えた麦酒のジョッキが三つばかり乗っている。どうやら被害者のオレだけじゃなく仙人サマと女神サマの分もサービスしてくれるらしい。随分と気前のイイこって。
しかし、今この瞬間だけはタダ酒ラッキーと思えなかった。
赤蛮奇のポーカーフェイスが、オレと華扇とヘカーティアの三者三様な有り様を余すことなく目の当たりにする。
上半身を裸になった男が仰向けで寝っ転がり、その股関節あたりに桃色の仙人サマが跨って、胸板に手を置いて（テンパったり怒鳴ったりで）息を乱しながら身体が跳ねるように上下運動する。
華扇が熱っぽい瞳で腰を浮かすと不規則に際どいところを掠っていく。その度にオレまでヘンな声が出そうになっちまっていた。
さらにもう一人、ズボン一丁の男からあまりにも近い距離で横たわる地獄の女神サマ。赤蛮奇から見える角度からいけば、レインボー色のミニスカから伸びる生足が艶めかしく映っているだろう。ここにいる女どいつもこいつもミニスカじゃねーか。
「……」
赤髪ショートのろくろ首が蔑んだ目でオレを見下ろした。夏バージョンの知り合いに連続して会った中で、この冷たい視線だけは暑い夏にまったくこれっぽっちも嬉しくねぇ。
まるで取り調べ室のかつ丼のように、赤髪に青リボンの女が無機質かつ無言でテーブルに麦酒を置いていく。
最期に、
「嫐るなら他所でやってくんない？」
真っ先に華扇が否定の叫びを上げたのは言うまでもないだろう。

その後しばらく赤蛮奇からオレだけ変態呼ばわりされた。泣けるぜ。

つづく

第七十話　「酒は飲んでも死ぬな」

「ハァ!?　奥野田が昏睡状態ぃ～?」
「そんな……」
　只事ではないネタにヘンな感じに声が裏返った。オレの隣にいる茨木華扇も赤みがかった瞳を見開く。さもありなん。知り合いが危篤と聞けば誰だってそうなる。オレもそうなる。というかなった。
　ソプラノ声で愛嬌を振り撒く鯨帽子の看板娘は、この場に居なかった。
　夜更けの鯢呑亭に物寂しさが漂う。閉店が近いのもあって客はオレと華扇の二人だけ。もっとも、それを差し引いてもここ数日は客の出入りは疎らであった。
　マジメな仙人サマが慎重に言葉を選びながら看板娘の安否を問う。
「それで彼女の容態はどうなのでしょう?　お医者さんには診てもらいましたか?」
「お医者さんて」
「う、うるさいです。どこか可笑しいですか」
「まー、別に可笑しかねぇけどよ」
　やたら可愛げのある言い方につい反応しちまった。華扇も恥ずかしそうにほんのり頬を赤らめて、ぷいとそっぽを向いて拗ねる。悪かったって。
　ともあれトンデモねぇ事態が明らかとなったワケで。どーしてこうなった。
　しばらく姿を見かけてなかったから気にはなっていた。せいぜい風邪が長引いているモンだと高を括っていたのだが。まさかこんな重苦しい展開になっていやがったとは、よもやよもやだ。何か聞いたことがあんな今のセリフ。
　桃色の女が投げた問いかけに、白髪ハゲの大将は首を横に振ってからショボリとうな垂れた。
　頑固職人の背中が柄にもなく小さく見える。どっちかっつーと、愛娘の不幸を嘆く父親のそれであった。このオヤジ、もし奥野田に好き

な男ができたら気でも狂うんじゃなかろうか。包丁が捌くのは、はたして食材か別の獲物か。

「というか、幻想郷には凄腕の医者がいんだろ？　そいつに治してもらえば万事解決ちゃうんか」

　オレが聞くと、鯨呑亭の主人は弱弱しく手を振って苦渋の面容を浮かべた。そもそも口数が少ないのもあってか、ポツポツと顛末を喋っていく。

　医者側の見解によると病気の類ではなかった。正確には、タイミングが良いのか悪いのか人里に来ていた薬売りのウサミミな若い女がおって、ソイツが診察したそうだ。余談だが、噂の凄腕ドクターも女医らしい。ブラックジャックの女バージョンか。

　どーでもいいけど、バニーガールがヤクを売り捌いているとかイロイロと大丈夫なんか。どうせソイツも美人なんだろ。いつもの幻想郷パターンだわな。

「綿間部、何やら破廉恥な想像しませんでしたか？」

「してねぇって」

「ふーん」

　華扇がジト目でオレに疑いの眼差しを差し向けた。この洞察力の鋭さは一体どこから来てんだろうか。

　当たらずとも遠からずなので目を逸らして咳払いで誤魔化す。しばらく嘘くさそうに見据えられたものの、ほどなくしてヤツは追及を諦めて渋々と引き下がった。「それにしても」と仙人サマが話を戻す。

「医者の目には原因はわからない、ですか」

「つっても何日も起きないってぇんじゃ、ただの寝坊じゃねーわな」

「そうですね……とにかく今は、彼女が一日でも早く目覚めることを信じるしかありません」

　オレのぼやきに華扇も頷き返す。下手すりゃ植物状態と変わりない。そらオッサンも心配して当たり前だろうよ。

　ちなみに頭を打った形跡もなかったという。外傷もなく病気でもない。しかして眠り姫は夢現に囚われた。こんなん迷宮入りレベルの難事件だろ。

もはやお手上げ。オレと白髪ハゲのオヤジが揃って腕を組んで唸る。すると、おもむろに仙人サマが包帯の巻かれた右手を上げた。
「あの、もしよろしければ彼女に会わせてもらえませんか？」

「ほーん、ここが奥野田の部屋か。案外フツーだなオイ」
「あんまり女性の部屋をみだりに見回すものではありません。ましてや当人は眠ったままなのですよ」
「わぁーってる。ま、むしろ騒がしくした方がコイツも起きんじゃねぇの？」
「そういう問題ではありません！　まったくもぉ、この人は本当にわかっているのかしら……」
奥野田美宵は何の変哲もない畳敷きの和室に寝かされていた。
布団に包まれて静かに寝息を立てている。女性らしい長いまつ毛は伏せられ、眩い緑の瞳を覗くことはできない。毎度お馴染みの鯨帽子は壁に掛けてあった。外ハネしたピンク色ショートが枕に広がる。
「ふむ」
顔色も悪くねぇし、うなされている様子もなし。この上なく安らかな眠りに就いている。こいつは確かに病に侵されているヤツのツラじゃねぇな。
それはそうと、もとの素材がイイだけあってキレイな寝顔してやがる。何となく鯢呑亭の看板娘の寝姿に見入る。
が、いきなり後頭部を軽く小突かれた。振り返れば、桃色ミディアムヘアで白シニョンの女が膨れっ面をしていた。というか顔が間近にあった。だから近ぇよ。
「何しやがんだ」
「それはこっちのセリフです！　女の子の寝顔をジロジロと眺めるなんて無神経にもほどがあります！」
「顔色チェックしてただけやんけ……」
「いいから綿間部は出て行ってください。彼女の身体に邪なものが巣食っていないか私の方で確かめます。衣服も少しはだけさせますから」

「へーへー、そーゆーことなら任せましたよっと」
肩をすくめてこの場は大人しく退室する。さすがに服を脱がすと予告されて居座るワケにもいくまい。
病気でもケガでもないときたら現代社会ならどうにもできねぇ。ところが、此処はファンタジー異世界の幻想郷。となれば、よくわからん術だの呪いだのという摩訶不思議な力が働いているセンもありえる。
なら、オレはオレで他に手がかりを探すとしよう。原因もなしに何日も昏睡するとは到底考えられねぇかんな。
華扇と別行動を取り、オレは再び店側に足を運んだ。
この怪事件の数少ない証人、白髪ハゲのオヤジから聞き込みをするのが狙いだ。依頼でもないのに調査なんざらしくねぇけど、知り合いのピンチならやるしかあるまい。
それに事情を知っているヤツがいないとはいえ、奥野田が意識不明となった鯢呑亭は通夜みたいでいけ好かない。
「で、だ。こうなる直前まで奥野田がいつもと違うことしてなかったか？　些細なことでもイイからよ」
どうせなら腹を割って話そうやと、互いにお猪口を手にして男同士のサシ飲みと洒落込んだ。
時間も時間だったため、店の表に吊るす暖簾もすでに下げてあった。コレもいつもなら奥野田の仕事なんだがな……
初っ端から遠慮のない取り調べに、酔いの入った赤ら顔が困ったように薄い頭髪を掻く。それでも頭も首も捻りに捻って記憶の粒を掘り出していく。やがて、奴さんはあることを思い出す。
曰はく、奥野田が秘蔵の酒をチェックするため試飲した。
「秘蔵の酒ぇ？」
あからさまなフラグの臭いにさらに質問を畳み掛ける。
聞けば、奥野田が開店祝いにどっかの客から贈り物として受け取ったブツだそうだ。ボトルの造りなどから外来の酒だと推測される。しかしながら、あまりにもドギツイ度数は焼酎なんぞとは比べ物にならず、誰もがひと舐めしただけで顔をしかめて敬遠してそのままお蔵

入り。そのせいで開封したきりちっとも減ってないのだとか。
「っかー、幻想郷ですら店の奥に封印されてたんじゃ世話ねぇやな。ちぃと見してくれや」
　オレがそう言い出すのを予想していたのか、オヤジはこれだと言わんばかりにカウンターの上に酒瓶をドンと乗せた。
「ほーん、コレがねぇ……」
　洋酒のボトルにしてもかなり小さい。５００ミリのペットボトルと大差なかった。透明かつ細身の瀟洒なデザインはいかにも『外』の世界にある代物。そのうえ中身まで透明ときた。この時点でウイスキーやホワイト以外のラム、ゴールドテキーラのセンはなくなった。というか……
「まさか」
　オレはこのボトルの正体を知っていた。後ろ向きになっていたラベルを回してこっちに向ける。
『ＳＰＩＲＹＴＵＳ』
「いや死ぬだろ」
　オレのツッコミにオヤジがギョッと目ン玉ひん剥いて腰を抜かす。アカン、言葉をマズッたか。
　スピリタス。
　ポーランドを原産地とするウォッカ。
　アルコール度数は驚異の九十六度を誇り、世界最高の純度をもつ酒として有名である。そのキツさは単純計算にしてビールのおよそ二十倍に迫り、日本酒と比べても十倍近くある。まさしく正真正銘のバケモン酒である。間違っても冗談半分で火を近づけてはいけない。
　とはいえ、ビミョーな疑問も残った。
　こんなんマトモに飲んでたら酔い潰れてもおかしくなかろう。かと言って、何日も目覚めないのはいくらなんでも度が過ぎる。
「しっかし、今一番アヤシイのもコイツなんだよなぁ……？」
　ガイシャが普段と違う行動を取ってこの酒を飲んだのは間違いない。現時点において最有力候補の手がかりといえよう。まだ原因と断定したワケじゃねぇが、誰がどう見ても怪しさしかない。

物は試しにお猪口にほんの少しだけ注いでみる。まず匂いを嗅ぐ。もともとウォッカは無臭の特徴をもつ。この酒も例外ではなくヘンな匂いはしない。お次はいよいよ味見といこう。

「……さて」

いざという時に備えて手元に水も準備しておく。もしヤバイ代物だったら速攻で便所に駆け込んで何もかもリバースするしかない。ま、客からの貰い物ならそこまで大惨事にはならんだろ。多分。

深く息を吐いて、覚悟を決めてグイッと煽る。直後、喉が焼けた。

「――っ!?　がはっ、ゲホッ!?」

ほんの一瞬の出来事であった。

強烈なアルコールの熱が喉の奥まで張り付き、気管に炎症を起こす。僅か一口にも満たない少量にもかかわらず、それがどうしたと世界最強の純度が王者の猛威を振るう。何度も咳が止まらない。

その瞬間、視界がぐにゃりと歪んだ。

「……あ?」

どういうワケか目の焦点が合わない。目の前にある景色がまるで下手くそな絵画みたくグチャグチャに滲み、崩れる。

戸棚に並んだ日本酒や焼酎のビンも、張り出されたお品書きに記された文字も、すぐそこにいるオヤジの顔かたちですら。もはや作画崩壊レベルであらゆるものの輪郭がブレまくって、世界そのものがボヤける。

「ぐ――」

グラリ、と体の重心が傾く。自分が座っている感覚もなくなった。脳ミソに靄がかかったように意識が朦朧とする。何だ、コレ。

オレの様子がおかしいことに気付いた鯢?亭の大将が心配そうに声をかけてくる。だというのに、何を言っているのか理解できない。頭がイカれたせいか、聴覚にまで影響が出ていた。

マズい。酔いが回ったなんて生易しいモンじゃねぇ。まるで睡眠薬を盛られたレベルの即効性が身体中に及ぶ。やっぱりコレが原因なんじゃねぇかよ。

「くそ……油断した……」

力を振り絞って手探りで水の入ったコップに手を伸ばす。しかし、遠近感がオシャカになった今のオレに物が持てるハズもなし。掴むどころか行き過ぎてコップを倒してしまう。中身が零れてテーブルの上に水溜まりが広がった。

ロクに体も支えられずカウンターにガツンと頭突きをかます。

「かせ、ん……」

なぜか最後に桃色ミディアムヘアの仙人サマの名前を呟き、オレの意識は途切れた。

つづく

第七十一話　「あと五分で本当に起きれるやつはいない」

「はぁ……はぁ……もう、だめ」

終わりの見えない重労働に疲労が溜まる。休む間もなく走り回った足はすっかり棒となり、目の回る忙しさに息も上がった。どうしてこうなってしまったんだろう。

（多分、あの洋酒を飲んでしまったのが原因だよね……）

疲れ果てた彼女を気遣う常識人は一人もいない。

ある者はテーブルを乱暴に叩いて少女に向かって怒鳴り、またある者は食器もろとも引っ繰り返す。あちこちで同じように客が暴れていた。食べ物は行儀悪く食い散らかされ、空き瓶をそこらに投げ捨てられる。そこはならず者どもの悪質な溜まり場だった。

女子供など一飲みしてしまいそうな凶悪な顔立ちと異色の肌の巨漢の群れ。ゴブリンとも鬼とも違う。トロールという種族であっただろうか。

そして、粗暴な化け物たちの宴会の給仕はたった一人だけ。囚われの身でもある奥野田美宵に全て押し付けられていた。

「よいしょ、よいしょ……お、お待たせしましたぁ～」

大皿に盛りつけられた豚の丸焼きを卓上に乗せる。しかし、特大の肉料理はむんずと片手で掴み上げられた。その数秒後には残骸の骨だけが床にバラバラと撒き散った。

「うぅ……」

怯える彼女が献身的に給仕したとしても、運べど運べど料理は瞬く間に平らげられ酒は一飲みで干されてしまう。あげくには早く次を持って来いと凶暴さで脅される。

もはや限界などとっくに超えていた美宵はとうとうその場にへたり込んでしまった。

「もう、少しは休ませてよ！」

悪夢の酒宴から逃れたいと、少女は縋るように懇願する。しかし、

彼女の切なる願いは慈悲もなく握り潰される。むしろ事態を悪化させるものでしかなかった。

この場に一人しかいない給仕係が手を休めたせいで酒も料理も滞る。そのことに化け物どもは尽く憤慨した。あまりにも低すぎる怒りの沸点にあっさり達したのだ。

出鱈目に投げつけた皿が壁にぶつかって甲高い音を立てて割れた。力任せに振るわれた豪腕の拳にテーブルがいとも容易く砕ける。同じように壊された椅子の木片が美宵がいる場所にも降りかかった。

「ひいっ!?」

飛び交う怒声と破壊音に美宵は鯨帽子ごと頭を抱えて蹲る。

ついには、怯える彼女を使って憂さ晴らしをしてやろうと悪漢どもが丸太さながらの腕を一斉に伸ばす。異形の群れが少女を狙っておぞましく迫りくる。醜悪な息遣いにゾッと寒気が走った。

「あ、あぁ……」

逃げなきゃいけないのに、疲労困憊な美宵は動けずにいた。

慰め者にされる未来を思い浮かべ、少女は緑色の瞳に涙を滲ませる。夢ならどうか覚めてほしいと祈りを捧げても、その想いは決して届かない。

美宵の瞳から一筋の涙が頬を伝った。

「やだ、助け……だれか、クロく――」

「ったく、鯢呑亭はお触り厳禁だっつの。マナー守んねぇヤツは全員出禁にすんぞコラ」

「え……?」

その声に、美宵が恐る恐る顔を上げる。誰かが自分の前に立ち塞がっている。まるで彼女を守ろうとするかのように。

黒髪のオールバックで全身真っ黒な服装。誰に対してもちょっぴり口の悪いぶっきらぼうな男の人。夜にしか働きたがらない自称ハードボイルドを気取った何でも屋さん。

黒岩こと綿間部将也が、奥野田美宵を庇うかの如くどこからともなく現れた。

「オイ、大丈夫か？」
　ようやく見つけたと思ったら、女一人で化けモンどもの奉仕させられてるとは予想外にも程がある。夢だってぇのに愛も希望もねぇな。もはや世紀末じゃねーか。
　スピリタスを飲んだ瞬間に気絶したっつー直前の記憶も都合よく残っている。おかげで此処が現実じゃないと何となく勘付いた。やれやれ、得体の知れねぇ酒飲んだら夢の世界に引きずり込まれるとか。つくづくイカれた世界観してやがんな。
　これまで奥野田を散々扱き使ってくれたであろうクズ連中どもにメンチ切ってやる。
「オラ散れ散れ。これでお開きだゴゲバァッ!?」
「クロくんっ!!　クロくん、クロくんッ……うぇぇえん」
「あっがぁ……ッ!?」
　メシメシとヤバい音を軋ませて背骨が逝った。オレの断末魔なんぞお構いなしに、感極まった涙声で奥野田がオレにすがりつく。よく夢の中は痛みを感じないと言われるが、バチクソ痛い。
「グスっ……」
「だーもう泣くなっつの」
「だってぇ……」
　せっかく後ろに庇ってやったというのに不意打ちで体当たりしてきやがってからに。ついでに腰に抱き着かれているせいで、桃色ミディアムヘアで白シニョンの仙人サマともイイ勝負の柔らかい膨らみがむにゅりと押し当てられる。どこ意識してんだオレは。
「私のこと助けに来てくれたの？」
「あー、いや。オメーが飲んだ酒をオレも飲んだら、何か知らんけどここに来ちまってた」
「え、えぇ～……」
「オイコラ、あからさまにガッカリしてんじゃねぇよ」
「ふふ、冗談冗談。クロくんが来てくれてすごく心強いの」
「フッ、さよか」
　さっきまでの絶望に染まったツラもどこへやら。ちったぁ余裕を

取り戻したらしい。冗談を笑ってかませるぐらいには持ち直せたなら上出来なこって。

それにしても鯢呑亭の看板娘の笑顔を見たのはいつ以来だったろう。さっさとこんな場所オサラバして飲み直したいモンだぜ。ここには華扇もいねぇし。

ところが、貴重な感動の再会シーンだってぇのに汚らしい咆哮が響き渡った。

「……チッ」

痺れを切らしたクレーマーどもが癇癪を起しちまった。念のため、奥野田美宵を引き剥がしてをさらに後ろに下がらせる。

「どうするの!?」

「さぁてな。どーするかなんざコイツら全員シバキ倒してから考えりゃエエだろ」

軽く首やら肩やらをウォーミングアップに鳴らして、その辺に転がっていた折れたテーブルの脚を拾い上げる。肩に担いでフッと不敵にキメてみせた。コイツをイジメてくれた借りはキッチリ返してやるぜ。

こんな状況、夜の繁華街でどれだけ経験してきたと思っていやがる。

「テメェらには恨みしかねぇが……かかってこいよ」

「――うぁ?」

「あら、起きましたか?」

「華扇? ッつ、アイデデ……」

「まったく、テーブルに頭突きなんてするからです。ほら、おでこも赤くなっているじゃないですか」

「そー思うんならちったぁ心配してくれ」

地味に痛む額を擦りながら突っ伏していた上体を起こす。中華衣装の仙人サマがやれやれとでも言いたそうな目で呆れていた。そして、その傍らにはもう一人。

「ごきげんよう。目覚めはいかがかしら?」

「……ぶっちゃけビミョーなんだが」
　波打つ金色の長髪と得体の知れない微笑をたたえる美女が、妖しくも悠然とカウンター席に座っておった。オレを幻想郷に拉致したご本人こと、八雲紫のお出ましであった。
　相変わらずミステリアスな妖怪の賢者サマがスピリタスのボトルを指先で弾く。コンと小気味の良い音が奏でられた。よくよく見れば中身も空になっていた。いつの間に。
「まさか貴方たちが飲んでしまうなんてね」
「紫、説明しなさい。そのために連れてきたのです」
「ってオイ、あんたが関係してんのかよ」
　どーやらオレが眠っちまった間に仙人サマが重要参考人として連行してきた模様。恐らくは調べたらこの女の痕跡が見つかったのだろう。しかし、どこにそんなヒントがあったというのか。
「ほら、ここ」
「あ？」
　これ見よがしに華扇がビンの底をオレに示す。
『祝　鯨呑亭開店　八雲紫』
「ヒントどころか答えじゃねーか!?」
「ろくに確認もせず怪しい酒を飲む人がありますか。毒でも盛られていたらどうするのです」
「むむむ」
「何がむむむですか、馬鹿者」
　ごもっともな正論に返す言葉もない。
　ダサくもオレが歯噛みしていると、八雲紫がわざとらしい柏手を打って自らに注目を促した。
「話を続けてもいいかしら？」
「っと、本題がまだだったな。で、どーなってんだ？」
「この酒は私があの子に贈ったもので間違いありません。酒癖の悪い不埒な輩が入り浸るようならこれを飲ませなさい、と注釈もつけたのですけど。何分とっておきの魔酒なものでして」
「その心は？」

「飲めばたちまち眠りの中に誘われ、悪漢たちの宴に配膳係として長らく扱かれる。そういう悪夢に囚われます。早い話、クレーマーを黙らせるついでにお灸も据えられる便利な防犯グッズですわ」
「なるほど、酔魔ですか」
「ご名答」
仙人サマと賢者サマが頭よさげなトントン拍子に会話しておられる。サッパリわからん。上白沢女史でないとついていけんのではなかろうか。
防犯グッズかよ。いや、年配オヤジと若い女の二人だけで切り盛りしてんなら必要なのか？
だとしてもスピリタスの魔改造とかもはやオーバーキルやんけ。華扇もしたり顔で頷いてる場合じゃねぇぞ。
「酔魔だか大麻だか知らねーけど、んなモン飲んじまったせいでこちとら危うく永眠するところだったんだが？」
「そこまで強力な術は施してないわ。長くてもせいぜい一カ月くらいで効果は切れます。まぁ、飲み方が悪ければその後も酷い二日酔いに悩まされるかもしれませんけど。それに悪夢から脱する方法はありますわ」
そこで言葉を一旦切り、さりげなく仙人サマから奪い取った空きボトルの口を桃色ミディアムヘアの女に差し向けた。
「一つは、この酒を飲み干すこと」
「華扇……オメー、この酒一人で全部飲んだんかい」
「ええ。なかなか美味でした。少しばかり辛めでしたけど」
「うせやろ」
この女、世界でも最高純度のアルコールをたった一人で飲み干しやがったというのか。それもう酒豪とかそーゆーレベルじゃねーだろ。コイツの体どうなってんだ。鬼か。
キチガイ級の離れ業に戦慄するオレと、何食わぬ顔で平然とする仙人サマ。そんなオレたちを見交わして、滑稽なギャップにウケたのか幻想郷の創設者が吹き出す。
あんたもあんたでよりにもよってスピリタスを選ぶなよ。それだ

けで十分ヤバいかんな。
「そうそう、悪夢から解き放たれるもう一つの方法ですけど」
「他にもあんのかよ」
意外と抜け道あんのな。
胡散臭さ漂う賢者サマを胡乱気な眼差しで見やる。オレに睨まれても八雲紫は余裕を崩さず、今度は空きビンをオレの前にそっと置いた。
「これは外側からではなく内側からの突破口ですわ。すなわち、延々と囚われる悪夢の宴に終止符を打つこと。例えばそう、飲んだくれの化生たちを一匹残らず打ち倒すとか」
「……フッ、そーゆーことか」
「ふぁ……あふ。みなさんおはようございまぁす」
「お」
ようやく眠り姫のお目覚めってか。
ピンク色ショートが寝ぐせでさらに外ハネした看板娘が、まだ眠そうに瞼を擦りながらオレたちのところに戻ってきた。寝起きすぐにこっちに来たのであろう。まだ少しボンヤリしておった。
真っ先に奥野田を気遣って、茨木華扇が穏やかに声を掛ける。
「もう平気ですか？」
「う～ん、まず水が飲みたいかも」
「そらスピリタスなんざストレートで呑んだらそうなるわな」
「うん……ものすごく強烈なお酒だったよ。あれ？　でも空っぽになってる……？」
空になったスピリタスのボトルを見つけて、奥野田が緑の瞳をパチクリと瞬かせる。寝起きだというのにイイ観察眼してやがる。これも職業病ってぇやつか。
空きビンを鷲掴みにして逆さに引っ繰り返すが、残り酒が一滴たりとも垂れてこなかった。苦笑まじりの半笑いで数日ぶりの寝坊助に教えてやる。
「あー、それならコイツが全部飲んだ。これじゃ防犯にはならねぇな」
「失礼な。誰が飲み逃げなんてしますか。ツケで呑もうとするのは霊

夢と魔理沙くらいなものです」
「最近はちゃんと払ってくれてるよ。森の人形遣いさんが言って聞かせてくれてるみたい」
「つーか片方は巫女だろ。ツケで居酒屋に通っててエエのか」
「まぁ、霊夢ですし」
「そうですわね。霊夢ですもの」
「そうね、霊夢さんだから」
「どんな理屈だオイ」
　ま、神社が宴会の催し場になってるくらいだ。オレが元いた世界の常識で考えるのも馬鹿馬鹿しい。清楚で育ちが良さそうな東風谷でさえ飲酒しとるしよ。最初見たときは思わず二度見しちまったわ。
　何はともあれ迷宮入りの難事件は解決したワケで。これでまた明日からこの店もいつもの賑わいを取り戻すハズだ。鯢呑亭は看板娘が居てこそ。口数少ない頑固オヤジも菩薩みてぇな温和なツラで何度も頷いている。さりげなく混ざってんじゃねぇよ。
　水瓶から汲んだ水を飲んでから一息ついた奥野田が、ふと思い出したようにオレに緑の瞳を向けた。
「ありがと」
「何のこった？」
「夢の中まで助けにきてくれたでしょ？」
「……覚えてんのか」
「あはは、忘れないよ」
　水を飲んでようやく完ペキに目が冴えたようで、気付けばいつものハツラツとした表情で看板娘が笑顔を咲かせる
「ね、仙人さん。クロくんって素敵だね。ドキドキしちゃった」
「!?　わ、綿間部！　彼女に何をしたのですかッ!?」
「ったく、何もしてねぇって」
「嘘つかないでください！」
「いや嘘じゃねぇよ!?」
「あらあら、夢現の檻で勇ましく大立ち回りした何でも屋さんも、一人の女性には敵いませんのね」

「うるへーー!」

それからも店仕舞い後の鯢呑亭は明け方まで賑やかな声が途絶えないのであった。

ちなみに後日、アル中の生き霊が鯢呑亭に出る噂が広まって、オレが行かなくなったのを奥野田に問い詰められて弱点バレたり、ヤル気全開の華扇と一緒に生き霊の出所を探ったりするのだが……

ま、それはまた別のハナシってぇやつだ。

つづく

第七十二話　「見える男くん」

怪談を一つ語ろう。

白く透けた月明りが差し込む夜のことだった。

その日、オレは稗田邸の蔵出し（要するに大掃除）の助っ人として力仕事に駆り出された。やけに金払いの太っ腹な依頼だったが、こいつがまた思いのほか重労働が待ち受けていたワケで。

人里が誇る名家が所有する倉庫。デカくて重くて持ちづらいクセに丁重に取り扱わねばならん年代物も多い。奉公人の若い衆やら生涯現役の爺やと慎重に運び出した。続々と搬出される値打ちモノに香霖堂がガラクタ屋敷に思えてくる。さすが上客。

ただでさえ薄暗い場所のため真夜中にやるワケにもいかなかった。おかげで寝ぼけ眼を擦りながら働くハメに。全部片付いた頃にはすっかり日は沈み、朧げな月が出ていた。

「ま、今日の稼ぎとしちゃ申し分ねぇわな」

独り言をボヤきつつ、高額報酬が入って膨れた財布を軽く叩く。宵越しの銭も得た。景気づけに一杯引っかけていくのも悪くなかろう。

あざとい和服女将の鳥娘が営む屋台に赴くか。それともクジラ帽子の看板娘に会いに行くのもありだろう。はたまた赤髪ショートで青リボンのろくろ首のバイト先に乗り込むのもまた一興。

次から次へと知り合いの店を思い浮かべていく。そんな折に、向かい側からも通行人の影が垣間見える。

「見かけねぇ顔だな……」

未成年くらいの小柄な若い娘だった。

白髪を短くカットして、黒いリボンのカチューシャが年頃のオシャレを醸し出す。まだ幼さの残る顔立ちを、どこぞの仙人サマを彷彿とさせるマジメそうな感じに引き締めておった。

さらに膝丈より下ろした緑色スカートの腰には二本の刀。

白髪ショートなうえに洋服ファッションっつー出で立ちだが、いかにも真っ直ぐそうな侍キャラであった。

「ンン……ッ!?」

しかして、侍っ娘の姿を目の当たりにした途端、オレは思わず息をのんだ。

そのうち人気ランキングで一位になりそうな容姿に見惚れたワケでもない。ましてやマジモンの日本刀に恐れ戦いたかと言えばもっと違う。

そいつの体に、真っ白い霊魂っぽい浮遊物が纏わり付いておったのだ。

雲と餅を足して二で割ったような白い楕円形。その本体?から先細りの尾が伸びる。夜風の流れに逆らい重力の影響も受けず、あてもなく白髪ショートの傍らを揺蕩う。片時も離れることもなく。

どう見てもあっち側のお仲間であった。精一杯のオブラートに包めば、この世ならざる類いかそーゆー系列のヤツに違いない。

厄介なのが、当人たる女侍キャラには視えてないフシがあった。ほぼゼロ距離で纏わり付かれているにも拘わらず、これっぽっちも気にした素振りもなくフツーに歩いてやがる。

ゼッタイに視界に入っとるハズだというのに、カンペキなまでのノーリアクション。あえて無視しているとか?いや、そんな生温い対応じゃねぇ。アウトオブ眼中にしても達人レベルで自然体過ぎる。やはり視えてない説が濃厚では――

「あの、私に何か?」

「うぉおお!?」

「わぁ!?」

ヤバい。やっちまった。

どうやら考え込んでいる間に接触を許してしまったらしい。立ち止まってガン見すりゃそうなるに決まっているだろうが。バカかオレは。よく華扇にも馬鹿者呼ばわりされるけどよ。

女子中学生くらいの低身長も相まってこちらを見上げられる。

「大丈夫ですか?　顔色が悪いですよ。それに汗の量もすごい……もしかして体調が優れないのでは?」

「ア、ぃや」

「身体もそんなに震えてますし、よかったら永遠亭までお連れしま

しょうか」
心配そうに白い短髪の侍少女がまた一歩近付く。あくまで善意なのだろう。ただし白い物体を引き連れて。むしろそこに問題しかなかった。
案の定、少女の気遣いすらも台無しにして、オレは反射的に後ろに下がってしまった。
「え？」
もう一度言おう。やっちまった。
さて、この展開を相手の立場で見たらどうなるか。
真っ青な顔色でダラダラと冷や汗もしくは脂汗が止まらず、（白い浮遊物を見まいと）目を合わせようとしないばかりか質問にもマトモに答えようとしない。あげくには、こちらが近付けば不自然に距離を取られる始末。
結論、どう見ても後ろめたいコトを隠している不審者でしかない。
「怪しいですね」
日本刀持ち女子の眼つきが警戒を帯びる。戸惑いも通り過ぎて、猜疑的な鋭さを宿してオレを射抜く。貫通しそうな眼力で凝視され、
「――くっ!?」
と思いきや、焦った様相で財布と愛刀が無事なのを確かめ出す。アカン、スリと疑われている。別に何もしてねぇのに状況がどんどん悪化していく。
もし下手すりゃ冤罪で豚箱にブチ込まれる。幻想郷なら警察じゃなくて奉行所ってか。どっちにしても前科持ちになっちまう。冗談じゃねぇ。
目の前を泳ぐアレから精一杯に目を逸らし、緊張で掠れた喉を絞り出す。
「ち、違う。あんたの、その、白……」
「白？」
白髪ショートが瞬きしてオウム返しする。頼むから気付け。あんたの身だって危ねぇんだよ。ヤツが寄生しているのはオレじゃなくてこの小娘なのだから。

「あぁ!?」
突然に、少女は瞳を大きく見開くと緑色スカートの裾を両手で抑えた。頬を朱に染めて恨みがましい目つきでオレを睨む。違う、そうじゃない。
「み、見たんですか……？」
見てねぇよ。別のナニカが視えとるわ。
あたかも電車で痴漢に遭った女学生のように、若干涙目になって小さく震えながら侍ガールが問い質す。そこから逃がすまいと踏み込んだ拍子に、白い霊魂も一緒に眼前まで迫りくる。
ヒンヤリと異様に冷たい空気がオレの手の甲に触れた。
「オレの傍に近寄るなぁあああああッ!!」
「逃げた!?」
恐怖が限界を超えて、気付けばオレはどこぞのラスボスっぽいセリフを叫んで逃亡していた。
チクショウこんなところに居られるか！　オレは自分のアジトに帰らせてもらう！　逃げるんだよぉおお！
「ま、待ちなさい！　やっぱり後ろめたさがあるんですね!?　この場で成敗します！」
「ちっげぇよ！」
「嘘か真かどうか斬ればわかりますッ!!」
「コイツ辻斬りかよォ!?」
鞘に納まった白刃を抜き放たんと、居合切りの要領で柄に手を掛けたまま侍っ娘が追いかけてくる。取り憑いた白いヤツも一心同体さながらに追従する。あれもうお祓いしないと手遅れじゃねえの!?
もはや一体化してんじゃねーか！
「お覚悟！」
「ひぃいいい……ッ」
かといってあの白いヤツがオレに乗り移らないとも限らない。むしろ新しい宿主を探しているかもしれん。何せ、こちとら一度怨霊に身体を乗っ取られたことがあるのだ。経験者は語るってぇヤツだ。
かくしてオレは『真夜中の道端で刃物を持ったこの世ならざる存在

に憑かれた通り魔の女』などという控えめに言ってもサイコパスに命を狙われ、人里の中を逃げ回るハメになった。

大通りから路地裏まで、とにかくメチャクチャに走りまくる。夜の繁華街でヤのつく職業の連中や半グレのチンピラ不良の集団から追われた時以来だ。ここまで身の危険を感じたのは。泣けるぜ。

「綿間部？　どうしたのですか、そんなに慌てて」

「華扇か!?」

その真っ只中、オレにとって最も聞き馴染んだ声に呼び止められた。

桃色ミディアムヘアに白いシニョンを結んだ中華衣装の仙人サマが、不思議そうに小首を傾げていた。

月夜の散歩と洒落込んだのであろう。美人が月下に佇む情景はなかなか絵になる。柔らかな桃色の髪が月明りに照らされる。儚げな雰囲気にしばし目を奪われた。

って、今はそれどころじゃねぇ。何も知らずにキョトンとする仙人サマに簡潔かつ早口で捲し立てる。

「トンデモねぇヤツに追われてんだよ！　じゃーなッ！」

「あ、こら！」

有無を言わさずに走り去ろうとするものの、オレの異常事態っぷりを見た華扇が包帯の巻かれた右手を伸ばす。

悪ぃがこんなところで暢気に立ち話しとる暇なんざねぇ。モタモタしてたらヤツが来る。というかもう来ていた。

死神の鎌もとい日本刀を携えた白い悪魔が、桃色の仙人サマに向かってムダに通る声を張り上げた。

「華仙さん！　その人を捕まえてください！　不届き者ですッ！」

「え、えっ？　何かあったのですか？」

「痴漢の容疑者です!!」

「は？」

侍っ娘のその一言に、華扇の瞳が絶対零度まで冷え込んだ。人里に身も心も凍る寒波が押し寄せる。そこからが早かった。

桃色ミディアムヘアの仙人サマが色彩を失った虚ろな眼で、瞬時に

オレの腕を絡め取ってギリギリと締め上げた。骨が軋み、堪らず悲鳴を上げる。
「アデデデッ!?」
「ワタマベ　マタデスカ?」
「違う!　ちがぁあああう!」
遠目から見れば華扇がオレの腕に抱き着いているように見えなくもない。が、その実態は某孤独なグルメのマンガに匹敵するアームロック。それ以上いけない。
あと豊かな胸を押し付けるっつー無防備のお約束も忘れない。痛みだけじゃなく柔らかい感触もあって複雑な心境になる。だからお前そーゆーとこやぞ。オレが抜け出そうとすると、負けじと華扇もますますオレの腕にしがみ付く。もうなんか色んな意味で危なかった。
「いいから離せって!　ヤツが来てんだろうが!」
「いいえ離しませんッ!　観念して罪を白状してください!」
「だーもう!!　じゃあこのままでエエからオレと一緒に逃げんぞ!　来いッ!」
「ふぇや?!　いいい、一緒に駆け落ちしようだなんて何を考えているのですか!?　そ、そういうのはお互いがキチンと正しい順序を踏んでからするものであって、それでしたら私もやぶさかではゴニョゴニョ……」
「オメーこそ何言ってんだァ!?」
マズイ。混乱のあまり我ながらワケわからんことを口走っちまってる。ついでに何故か仙人サマにも焦りが伝播していやがった。なしてお前までテンパるのか。どーしてこうなった。
綺麗な顔立ちを赤らめて華扇が嬉し恥ずかしそうにクネクネと身を捩った。同時にアームロックの締め付けがキツくなる。オ〝ァアアアア関節が外れる!?
「はぁ、はぁ……ようやく追いつきましたよ。神妙にしてください」
「げ」
もはや混沌に陥った現場にさらなる爆弾が投下される。すでに鯉口を切った辻斬り少女がオレたちの前に降り立つ。さすがに走り疲

れたのか呼吸を乱しておった。
「ちょおまバカ、こっちくんな」
「ひ、ひどい！　私だってこれでも女の子なんですよ!?」
　意外にピュアだったのか小柄な少女が傷ついた表情で言い返してきた。オレが青ざめたツラで後退る態度に少なからずダメージを受けたらしい。ここにきて年相応な反応をみせられた。
　しかしそれも束の間、「やっぱり許せません……！」と日本刀を迷いなく抜き取った。半人前な女剣士の勘違いっぷりに、さすがに腹立ってきた。わずかに怒りが恐れを克服する。
「だぁからあんたじゃねーよ！　オメーに取り憑いてるヤツに言ってんだよ！」
「――ひ」
　そう言い放った途端、白髪ショートの女武士は上段に構えた姿勢で硬直した。ぞわりと背筋を粟立たせて、サーッと血の気が引いていく。真っ青な顔面のまま足腰もガクガクと震わせる。お化け屋敷に一人だけ取り残されたかのようであった。
「う、うそですよね……？」
「冗談でこんなコト言うかよ。いんだよ、あんたのすぐ近くにおぞましいヤツが！」
「いやぁあああああ!?」
　怖がっている少女に鬼畜の脅しをかける。しかし紛れもない真実の追い打ちだ。オレが白い物体を指差すと少女は悲鳴を上げて全力で飛び引いた。
「どどどどこですかぁ!?」
「どこもなにも体に絡みついてんだってばよ！　ほら今もそこに!!」
「うっ、うぁあああん！」
「ちょおま危なッ!?」
「きゃっ」
　さっきまでの凛々しかった表情を今や恐怖と泣き顔に崩して、白髪の切り裂き魔が二刀流を振り回す。暴走した切っ先が掠めそうになり、華扇を抱き寄せてギリギリのところで避ける。あっぶねぇ……！

辻斬り乙女は泣き叫びながらメチャクチャに空振りしまくっている。悲しきかな、例の存在にはちっとも当たっておらず撃退できてなかった。

「二人とも落ち着いて。ほら、深呼吸して？　綿間部も妄言で煽らないでください」

「妄言じゃねぇよ華扇だって見えんだろアイツに憑いてる化けモンがよぉ！」

「えっと、何もありませんよ？」

「おるやん！　白いヘンなのが！」

「……はい？」

やけくそ気味に喚くと仙人サマは再び呆然の表情を浮かべた。付け加えて、赤みがかった瞳はしっかりとあの白い物体を捉えておった。ちなみにオレの腕の中に収まったままだった。

「もしかして、あれですか？」

「って、見えてんじゃねーかっ」

「はぁ……やれやれ、大山鳴動して鼠一匹ですね」

たちどころに、右手包帯の仙人サマがあらゆるものを悟ったような表情で嘆息した。

「大丈夫ですよ。彼が言っているのはあなたの半霊のことでしたから」

「うわぁあああああ――え？」

鶴の一声。デタラメな百裂剣をキメていた侍少女が桃色仙人の説得によって、ピタリと動きが止まる。

まだ半泣きの顔のまま小柄な女が縋るように口を開いた。恐怖が抜けきっていないせいでちょっぴり舌足らずになっていたが。

「はん、れい？」

「はい、半霊です」

「おばけは？」

「いません」

「……っ、はぁあ～～」

溜まりに溜まった長い吐息を漏らしながら、白髪ショートがその場

にへたり込んだ。緑色スカートが蓮の葉のように地面に広がる。どうやら腰が抜けちまったようで斬りかかってくる心配もなかった。
「こ、怖かったぁ～」
「お騒がせしてごめんなさい。彼ってば幽霊が苦手なんです」
「オイ」
「あ、いえ。私も早とちりしてしまって」
「オイオイオイ待て待て待て」
『何ですか？』
「何ですかじゃねぇよ」
フツーに話し始めた女二人にストップをかける。いやいや、まだコイツに憑依してるんですけど。なーに一件落着っぽい雰囲気出してんだ。
健在する幽霊からじりじりと距離を取りつつ警戒する。オレのへっぴり腰な恰好を見て、華扇が可笑しそうに吹き出した。なにわろてんねん。
「心配いりません。それは彼女自身の一部ですから、怨霊のように他人に乗り移ったりしません。まぁ、霊体であることに変わりありませんけど」
「あ？　そうなんか？」
「えぇと、はい。そうですね」
オレが問うと、女々しく座った侍ガールがおずおずと頷いた。
つまるところ、何だ。アレは例えるなら幽波紋みたいなモンで、生命力とかその辺が具現化したってぇイメージであろうか。そんでもってこの小娘は視えてなかったんじゃなくて、いるのが当たり前だから注目する必要もなかったと。
やっと理解した。と、同時にオレまで全身から脱力しちまったのを誰が咎められよう。
「っだー、なんつー人騒がせな」
「すみません。あなたが言いかけた白いのって私の半霊のことだったんですよね？」
「あーそうだよ。だから別にお前の白いパンツ見たワケじゃねぇかん

な」
「みょんッ!?」
「こんの馬鹿者!」
個性的な驚き声とマジメな仙人サマの怒り声、それと後頭部を叩く音が重なった。
最近のお前、説教よりも先に手が出てねぇか……？
白髪ショートの侍っ娘の名前は魂魄妖夢といった。
白玉楼なる屋敷に務めており、庭師とか剣術指南役とか付き人とか全部ひっくるめて一人でやっているらしい。ブラック企業かよ。ちなみにコイツの主と八雲紫はマブダチなんだそうだ。ってことは藍ネーチャンと従者仲間ってぇところだろうか。
「あの！　この度は本当に申し訳ありませんでした！」
「気にしないでください。お互い様です」
「それオレのセリフなんだが。つかオレなんも悪くなくねぇ？」
帰り際も、魂魄妖夢は何度も振り返ってはペコペコと頭を下げてきた。
最初にオレを気にかけてくれたときのような真摯さ。やはり性格の根っこがマジメなのであろう。この仙人サマと同じく。
だから、斬ればわかるとか血迷ったコトを抜かしてたのは、きっと気が動転したからだろう。多分。そうに違いない。
「あー……疲れた」
「綿間部が余計に騒ぎを大きくして事態をややこしくするからです。」
「しゃーねぇだろ。あんなん初見で半分だけ幽体離脱してるヤツだってぇわかんねぇよ」
「だとしても、これは精神修行が足りませんね。こんなことでいちいち狼狽えるなんて情けない」
「じゃかぁしい。お前だってさっきテンパってただろ。一体何考えてたんだオイ」
「あっ、あれは綿間部がいきなり変なこと言うからです！」
頬っぺたをフーセンみたく膨らませて華扇が不満そうに詰め寄った。相変わらず表情がコロコロ変わるやっちゃな。ま、そーゆーとこ

ろは悪くねぇんだが。ただ毎度毎度に近ぇよ。
　オレたちのしょうもない言い合いを嘲笑うかのように、どこぞの犬の遠吠えが夜の月に昇っていった。

「そういや、ミス八雲のマブダチってぇのはどんなヤツなんだ？」
「冥界の管理を任されている亡霊です」
「よしわかったゼッタイ会わねぇ、ゼッタイにだ」
　つづく

第七十三話　「頭文字ミッドナイト早朝版」

夜明けが来る。

人静かな通りに朝霧が仄かに立ち込める。薄っすらと白い霞のベールに包まれて静謐な空気に澄む。早朝ならではの冷え込みに微かな肌寒さを感じてしまう。

「寒っ」

この時ばかりは夏であることも地球温暖化なんぞも疑う。間もなく明け方に染まっていく人里の軒並みを突っ切って先を急ぐ。

日の出とともにシャッターを下ろす夜間営業のハードボイルドな何でも屋。それがオレだ。なのだが、どーしたものか今から仕事に向かう最中だったりする。

こんな朝一番の仕事ってぇと牛乳配達か新聞配達か。答えは似て非なる。

「正解は博麗神社までの豆腐の配達ってか」

何でもを看板に掲げて商売をしてるからにはイチイチ文句も言えん身の上。こちとら日銭を稼がねば生きられんワケで。ましてや此処はファンタジーなド田舎異世界の幻想郷。アウトローな言い方をすればロクに法律なんざなかった。そこまで世紀末じゃねぇけど。

ひっそりと、って程でもないが小ぢんまりした店舗が見えてくる。さらに近付けば店先に二人分のシルエットが霞越しにボンヤリと佇む。片方はこの店の親父。そしてもう一人は……

柔らかな桃色の髪に白いシニョンを結って、薔薇が飾りの中華衣装を着た仙人サマが、オレを見つけて「あ」と声を上げる。そこで笑顔を咲かせるならまだしも、すぐさま腰に両手を当ててあざといくらいの『怒ってます』ポーズを取った。

「やっと来ましたね」

「おー、今来たところだ」

「開き直らない！」

まだ朝日すらマトモに昇ってない時間にもかかわらず、到着するなりムダに通る声で叱咤される。お前こそご近所連中が寝てんだから

静かにせんかい。
　遠目でチラッと見えたときは余所行きの営業スマイルで談笑していたってぇのに、オレが現れた途端に百パーの素になりおってからに。ま、今になってネコ被る間柄でもねぇか。
「つーかまた来たのかよ。よく飽きねぇなオイ」
「当然です。綿間部が朝早くから労働に勤しむ貴重な機会ですから、しっかり見届けないと」
「さいですか」
　この仙人サマ、ようやくオレが日中に働く真っ当な人間になったとかで、この間からエラく上機嫌なのだった。しかも「私も一緒に行きます」などと宣いやがった始末。ちなみに豆腐デリバリーの依頼はコレで五回目かそこら。
　いつの間にか噂が噂を呼び「クロくんが持ってきてくれるならうちもお願いしようかな」「えっ、お客さんが届けてくれるの？　それならあたしの屋台にもお願い」「うちはいいわ。必要ならこっちから買いに行くから」と口コミが広がり大人気。最後のろくろ首だけ辛辣だった。あとなぜか華扇が途中から膨れっ面だった。
　既に荷車の台に水を張った木箱が積まれ、中を覗けば角ばった豆腐がギッシリ詰まっている。冷蔵庫がないのがフツーなこの幻想郷じゃ、こうやって日持ちしない生モノ食材をこまめに届けるのも珍しくないそうだ。いつかの華扇の話だと、噂の氷の妖精とかの力を借りれば冷蔵保存はできるらしいが。生憎とオレは会ったこともない。ちなみに雪女もいるらしい。冬眠ならぬ夏眠でもしてんのか。
　ま、元いた世界でもウーバーなんちゃらで食料のデリバリーも多くなってきた。案外どの世界でも大差ないのかもしれんわな。
「どっちにしたって多くねぇか？」
「最近、霊夢が豆腐に凝っているそうなんです。なんだかんだ言っても博麗神社は訪問客も多いですし宴会場所にもなりますからね。その分思いのほか減りが早いのでしょう。食材を無駄にしないだけマシです」
「こーしてリアカーに積むほどとか一日二日でどんだけ食うんだ

か。ったく、お前じゃあるめぇしよ」
「むっ」
油断してうっかり出た軽口にも華扇は耳聡かった。失礼な、と言いたげに眦をキツくしてオレの脇腹を肘鉄で小突く。地味にイテェからやめーや。
いざこざやってると、店の奥に引っ込んでいた豆腐屋の親父が戻ってくる。片手に持つのは何の変哲もない湯飲み。中身もただの水。そいつを荷台と木箱の隙間に差し込んだ。
ヤニ咥えた糸目の中年オヤジが『文々。新聞』を広げつつ、投げやりにお決まりのセリフをぶつける。
「零すなよ。豆腐が崩れる」
「へーへー、わぁーってらぁ。その言葉だけで耳にタラコができとるぜ」
「タラコではなくタコです、馬鹿者」
不愛想な豆腐屋のオヤジとぶっきらぼうな何でも屋のやり取りを聞いて、桃色ミディアムヘアの仙人サマが呆れ顔でツッコむ。うるへー。わざとだ、わざと。
「だーもう！　ぼちぼち出んぞオラ」
「はい。では行ってききます」
ハンドルと呼ぶにもショボい棒状の取っ手を握り、豆腐屋の荷車（通称「八郎」。あのツラで愛車に名付ける謎のギャップ）を引き摺る。華扇はオレの隣を並んで歩く。ホントに見守るだけで手伝わない。
ふと思い出したように華扇が振り返って豆腐屋に声を飛ばす。
「あ、お豆腐は戻ってきてから貰いますね！」
「取り置きしてんのかい」

博麗神社。その本殿に続く長ったらしい石段のスタート地点までどうにか辿り着いた。
田舎道の凸凹を進んだせいで湯飲みの水がちぃとばかり零れてしまった。が、とりあえず豆腐は無事だったからエエだろ。これでも安全運転してきた方だ。

「お豆腐屋さん、華扇様！　本日はお日柄も良く！」
石段の麓でオレたちを待ち侘びていたちんまい小娘がハキハキした声量を飛ばしながら大きく手を振っていた。
苔色の長めな髪に渦巻き――ルナチャイルドみたくお嬢様テイストの縦ロールじゃなくて鳴門もかくやなグルグル模様。頭の天辺から三角錐の角が突き出る。星熊勇儀と比べると尖がりの鋭さもなく短い。それでも当たると痛そうだけど。
先日の魂魄妖夢よりも背丈が低い娘っ子の名は高麗野あうん。自称、生きた狛犬。犬型ゴーレムとかじゃなくれっきとした生身をもつ。幻想郷ならよくあるハナシだろう。慣れたわ。
朝イチの元気な挨拶に品行方正な仙人サマが穏やかに顔を綻ばせた。
「おはようございます。今朝も早起きですね。結構なことです」
「えへー、ありがとうございます！」
「どーでもいいけどオレは豆腐屋じゃねぇっつってんだろうが」
「？　でも今日もお豆腐持ってきてくれたんですよね」
「そらまぁ、そいつが依頼だからな」
「じゃあやっぱりお豆腐屋さんです」
「オイ」
「プフッ、もう二人して笑わせないでください」
これまで何度か豆腐を届けに上がって面識を持ったまではイイが、どうにも間違った方向に覚えられとる。その度に訂正しても無意味だった。解せん。
この先は徒歩。まさか荷台を引っ張って石段に挑むわけにもいくまい。
とりあえず木箱の一つを狛犬に押し付けてやると、高麗野は嫌な顔しないどころか意気揚々と石段を駆け上っていった。マジで元気なやっちゃな。
「さて、もうひと踏ん張りしましょうか」
「フッ、そーだな」
小さいヤツが頑張っている手前もあってか、今度は華扇も自ずと手

伝った。数段上の所で『待て』状態の狛犬のもとまで追いつく。
「霊夢はまだ？」
「ですね。昨晩も萃香さんが妖精さんたちを連れてやってきまして、そのまま宴会でした」
「それはまぁ、後片付けも期待できませんね……」
「あうぅん……そうなんです」
女同士の会話を小耳に挟みながら、伊吹萃香が三月精やらクラウンピースやらを引き連れている場面を思い浮かべる。ダメだ。先頭に立つガキ大将とその子分のチビ共に見えてきた。
とりとめのない雑談をしながらも石段を最後の一段まで踏み越えて、神社のシンボルたる赤い鳥居を潜った。境内は石畳ばかりで散らかっていない。どうやら室内で呑んでいたようだ。
ちょうど縁側に続く障子戸が開けっ放しになっている。そこから居間の内が覗けそうだ。華扇と共に様子見がてら回ってみると、
「うぉ」
「はぁあ……予想はしていましたけど、まったくもってはしたない」
それはそれは散々たる有り様であった。
博麗霊夢はそこで眠っていた。いびきこそかいちゃいないが、折り畳んだ座布団を枕にして、その辺にあったであろう布を腹に覆って雑魚寝していやがった。
卓袱台も空になった大皿に数人分の箸が無造作に放り込まれている。トドメに中身が空っぽなのをいいことに酒瓶が横向きに転がっているわ、まだ底に若干残っている盃が畳に直置きされてるわ。
まさに宴の後の残骸を呈しておった。一言でいえば杜撰。コレはヒドイ。
「オイオイ、一人暮らしの女子大生かよ」
おっと、そいつも偏見か。下手すりゃ女子会に夢見る純朴な青少年たちの夢を砕きかねない失言であった。忘れてくれや。
数少ない女子大生の知り合いでもあるマエリベリーなら育ちも良さそうだし、こんな痴態は晒すまい。ただし宇佐見はあり得る。どっちかっつーともう一人の宇佐見、メガネＪＫの方がもし進学したらこ

うなるかもしれん。セクハラ教授に日頃の鬱憤を溜めて居酒屋でチューハイのジョッキ片手に憂さ晴らししてそう。

ひとまずグースカ爆睡中の巫女は放置して、目的のブツを調理場まで運んでしまおう。しかしよくよく考えれば確かに、奇襲からの宴会コンボが事あるごとに起こるならあっという間に食い尽くすのも頷ける。醤油かければそのまま食えるし、酒のアテとしちゃド定番だかんな。

全員が木箱を調理場の片隅に置いたところで、華扇が「よし」と妙な気合を入れた。何となく面倒そうな予感がしてならない。そして案の定、

「新鮮な豆腐もあることですし、お味噌汁でも作ってあげましょう」

「っかー、そこまでやるたぁ気前のイイこって。大層なアフターサービスじゃねぇか」

「フフ、ついでですよ。折角ですから私たちもご相伴に預かりましょうか」

「みんなで一緒に朝ごはんですね!?　大賛成ですよ！」

万歳する狛犬に微笑み、お優しい仙人サマは壁際に吊るしてあった割烹着に袖を通した。博麗霊夢のサイズに合わせてあるため一部が盛り上がって窮屈そうだった。あえて何も言うまい。というかオレはどこ見て考えてんだ。

「二人は居間の片付けと洗い物をやっておいてください。あのままでは朝餉も並べられませんから。あと霊夢はまだ起こさなくてもいいですよ」

「はーい！　お任せください華扇様！」

「って、オレもかよ」

「つべこべ言わない。ほら行った行った」

こっちの苦言も容易く受け流され、華扇はパンパンと手を叩いてこの場を取り仕切る。お袋じゃねーか。

「行きましょー、お豆腐屋さん」

「だから豆腐屋じゃねぇっつの」

朝っぱらからテンション高めな渦巻ヘアスタイルの狛犬に急かさ

れ、あれよあれよと飲み会の後始末に駆り出される。依頼達成してんのにまだしばらく帰れそうもなかった。泣けるぜ。

「いやー、こんなことまでしてもらっちゃって悪いわね」

朝食のイイ匂いで目を覚ます、っつー何とも羨ましい起床を迎えた紅白巫女が悪びれない笑顔でしれっと告げた。ホントそれな。

白米、味噌汁、冷奴に白菜の浅漬け。牛丼チェーンのモーニングメニューみたいな質素な献立が食卓を占める。味噌汁の具材は豆腐の他にも刻み葱と椎茸が薄切りにしてあった。

円い卓袱台を四方から囲み、それぞれ自らの食事に箸を伸ばす。

「それにしても霊夢、ここのところ豆腐ばかり食べてはいませんか？」

「体に良いでしょ。よく言うじゃない。豆は畑のお肉だって。大体暑くて夏バテするのよ。でも冷奴なら手間もかからないし食べやすいしね。あとお手頃。これぞ万能食だわ」

「だからといってそれのみで済ませるのは感心しません。このままだと夏バテを前に栄養が偏って体調を崩します。食欲がないのを甘んじて受け入れるのではなく、少しでも食べやすいように工夫を凝らすべきです。特に夏野菜は体を冷やす作用がありますから、この時期だからこそ率先して摂るようにしないと。それに旬のものを食べるというのは、その季節を味覚で感じ取れてなかなかに風情があるものですよ」

「うるさいわねぇ……食材があればちゃんと食べるわよ。だから買いに行けるようにお賽銭ちょうだい」

「賽銭箱さえも通り越して直接手渡し要求してきやがったぞオイ」

白メシに味噌汁ぶっ掛けそうなズボラな口振りに反して、紅白巫女は正座の姿勢を崩すことなく白米を口に運ぶ。華扇は言うまでもなく背筋を真っ直ぐに伸ばして行儀良く食事を進める。

「あうーん、おいしいです！」

「あぁ、うん。そらよかったな」

意外なことに高麗野あうんが味噌汁茶漬けやってた。小柄なクセに豪快に汁だくの丼飯を掻き込む。狛犬なのにねこまんまとは。

そいつはさて置き、だ。実をいうとさっきから気になっていることがあった。
「なぁ華扇。豆腐は平気なんか？」
「えっと……？　平気とは何がでしょう？」
「いや何がってオメー……大豆アレルギーだったんじゃねぇのかよ」
「そうなの？　あー、そういえば節分のときも私が豆炒ってたらすごーく嫌そうな顔して遠ざかってたわね」
「ほーん、やっぱお前――」
「そ、そんなことよりもっ！　おかわりはいかがですか!?　ご飯も沢山炊いてありますしお味噌汁も多めに作りましたからまだまだありますよ！　ね!?」
あからさまに誤魔化しが見え透いた早口トークで、桃色の仙人サマがこの手の話題を強引に断ち切った。理知的な女に似つかわしくない手口に博麗霊夢も面食らう。「え、ええ。じゃあ味噌汁ちょうだい」と半ば困惑しながらもお椀を華扇に預けた。押し切られたともいう。
おかわりを貰いつつ紅白巫女がオレに視線を移す。
「わたなべも遠慮しないで食べてっていいわよ。あうんと一緒に片付けしてくれたみたいだから」
「フッ、もとより遠慮するつもりはねーよ。タダ働きほどわりに合わんものはねぇだろ」
「同感ね」
「こら！　貴方たちは変なところで意気投合するんだから。さ、綿間部もお椀貸してください」
「おー、悪ぃな」
さりげなく博麗巫女がオレの名前を呼び間違えたが、こんなん日常茶飯事に過ぎない。三月精だって今でもワタナベさん呼びだしよ。
先ほどから口数少なくなっていた狛犬を見れば、味噌汁茶漬けに浅漬けをトッピングして味変を試みている途中だった。いよいよもってズボラ飯やんけ。もっともさすがに冷奴は乗せないようだが。
紅白巫女も暢気に味噌汁を一口啜って、ほうと一息ついた。
「宴会の翌朝に飲む味噌汁は格別ねぇ」

「あー、そらわからんでもない」
オレも華扇によそってもらった二杯目の味噌汁を啜る。
ほんの少しだけ薄味な気もするが、飲み会の次の日と思えば程好く胃に優しい仕上がり。何なら慣れない早朝働きしたオレにとっても丁度イイ。
そもそも薄味といっても貧相さを微塵も悟らせない。それどころか料亭のお吸い物のような上品な味わいが口に広がる。味噌のふくよかな香りが湯気と一つになって身も心もほぐす。
「確かに美味ぇぜコイツは」
「うふふ、ありがとうございます。そう言ってもらえると作った甲斐がありました」
いつも食べ歩きばかりしているようでいて自炊も上手い。何でもそつなくこなすのはさすが仙人といったところか。しみじみと感想を呟く。
「こーゆー味噌汁なら毎日でも飲んでみてぇかもな……」
ガチャーンッ!!
のどかな食卓をブチ壊す物音が響き渡った。その場に居た誰もが驚いて犯人に注目する。
「はぇ、ぁ……ぇぅ……ッ!?」
白米のおかわりを盛ろうとしていた仙人サマがそのままの体勢で硬直しておった。
彼女の手から零れ落ちた茶碗が畳の上を転がる。よそう前だったのがせめてもの救いであろう。
桃色の女は赤みがかった瞳を大きく見開いて口をパクパクさせている。酸欠ではなく、何か言おうとしても上手く言葉が出てこない様子。相変わらず表情豊かなこって。
数秒後、まるで沸騰したように真っ赤になった華扇が怒涛の剣幕でオレに食ってかかった。
「な、なな、な――何てことを言い出すのですかこんな人前だというのに!!」
「いや別に下ネタかましたワケでもねぇだろうがい。お前こそどーし

た大丈夫か?」
「う、うるさーい！　このばかっ、ばかもの！」
　食事中でなければ駄々っ子パンチでも繰り出しかねない。この女が拳を叩き込むと冗談じゃすまないから助かった。さりとてイマイチ理解が追いつかない。どーしてこうなった。
「本当にもぉ！　綿間部はこれだから！」
「いいから落ち着けや。ホレ、味噌汁飲むか?」
「こんのっ……誰のせいだと!!」
　説教なんだか地団駄なんだかとにかく騒がしい仙人サマが感情を爆発させる。もう一方で、オレは箸とお椀を持ったままなぜか責められる。状況が謎過ぎんだろ。何だコレ。
「はぁ、ご馳走様ご馳走様」
「あれ?　霊夢さんもう食べないんですか?」
「そういう意味じゃないわよ」

　朝メシだけでなく、ついでに食後のお茶もちゃっかり一服してから博麗神社をお暇した。
　あくまで配達そのものが依頼だったので帰る時間が遅くなったとしても支障はない。
　石段を最下段まで下り、路駐していた荷車を回収して人里に向けて再び歩き始める。
「……」
　華扇はなぜか荷車の後ろにくっついてきて、行きは手伝わなかったのに帰りはこっそり押してくれている。ぶっちゃけ荷物もなくなって軽いから押さなくても平気なのだが、何となく言わないでおいた。
　それはそうとお茶飲んでいる時もビミョーにニヤけていたのが気になった。よくわからんがオレが知らん間にイイコトがあったらしい。ったく、羨ましいこって。
　とりあえず帰ったら寝るか。どーでもいいことを考えていたら後方から話しかけられる。
「綿間部っ」

「あー？　何や」
「……こ、今晩は何が食べたいですか？」
「ン――!?」
あまりにも脈絡のない問いかけに足を止める。
晩飯をご馳走してくれるってことだろうか。にしては、どこか甘く震えた声音に言外に込められた別の意味がありそうな気もした。
今の華扇がどんな表情をしているのか見たくなって振り返ろうと――
「な、なーんちゃってぇ！　冗談ですよ冗談ウフフ綿間部ったらもぉ本気にしちゃってイヤなんですからぁ♪」
「ってうぉオイイ!?　ちょおまバカ押すな押すな下り最速になっちまうだろがぁアア!?」
突如急加速した荷車のドリフト音と華扇のテンションおかしい歓声さらにオレの絶叫に近い叫びが、ようやく本格的に朝を迎えた幻想郷の果てまで行き渡った。
豆腐屋に戻ってきた時には湯飲みの水は全部飛び散っていた。オレは悪くねぇ！
つづく

第七十四話　「旧都アンダーグラウンド」

沈黙。

仄暗い座敷に屈強な漢の衆が窮屈そうにひしめく。誰も彼もが物々しく身構えており、さながら巨山の体躯が胡坐をかく。一人がゴクリと固唾を飲む。

蠟燭台の灯火が僅かな明かりをもたらす。煤で薄汚れた壁面の人影が揺らぐ。

唐突に、何かを転がすカランと乾いた音が鳴った。その瞬間、緊張感が張り詰めた空気が最高潮に達し、ついに破裂した。

「さぁ、張った張った！」

活気の漲った掛け声を合図に、客席のあっちからこっちから「丁！」「半だ！」と怒号が飛び交う。もう後がないのか眼球を血走らせ床を拳で殴る猛者もいた。皆が一様に興奮して仕掛け人の手元を、賽の目が包み隠された筒に目先を注ぐ。

知る人ぞ知る、二個のサイコロを投げた合計が奇数か偶数かを当てる博打。

今時流行らねぇ古臭い賭け事だった。確かシュレディンガーの猫っていったか。こーゆー蓋を開けてみるまでわからねぇやつ。

裏の賭博場には金に目が眩んだ欲望が渦巻く。かくいう今のオレもそこに居座る一人なワケだが。夜の？華街にあったカジノと一味違う。刺激的なギャンブルに変わりなし。気分が乗ってきて自然と口角が上がる。

そう、オレは夜に生きる男。この手のスリルを何度も潜り抜けてきた何でも屋。最近じゃ誤解されがちだがクールでニヒルなハードボイルドだ。

「ほれ、あんちゃんどっちだ？」

「そーだな……」

アウトローな優越感に浸っていると仕掛け人が勝負を差し向けた。

この間のヘカーティア・ラピスラズリ（とクラウンピース）と並んで歩いていた一件ですっかり顔バレしておった。つっても、そのおか

げでよく見える最前列ド真ん中のＶＩＰ席に座れてんだから上等。地獄の女神サマの名は伊達じゃねぇってか。

「やっぱ丁にしとくわ、ここは」

要は偶数になる組み合わせの方が多いっつー単純思考。イカサマなしの確率論ならコレで十分だろ。二つのサイコロで偶数になる確率の正確な答えは知らねぇけど。また今度にでも上白沢女史に聞いてみるか。

どうやらオレが最後だったらしい。カジノでいうところのディーラー役が烏合の衆を見渡して、やたら勿体つけてから大きく頷いた。

「では、ご開帳――」

「フッ、勝っちまった」

勝利の余韻にほくそ笑みながら街並みを歩く。今日は悪運の他にもツキも回っている。ひょっとしたら赤髪セミロングの女神サマが加護をもたらしたのかもしれない。何せ此処は……

立ち止まり、頭上を仰ぎ見る。月光はおろか星々の瞬きすら存在しない。漆黒の闇が果てまで広がる。いや、此処に限って言っちまえば昼も夜も関係あるまい。

目線を前方に戻せば、そこは喧騒すら蔓延る歓楽街。提灯行灯が軒並み照明を絶やさず、豪傑笑いの益荒男どもが道往く。やんややんやと賑わう声に混ざって、酒や食い物の匂いまで放浪しており食欲をそそられる。

「悪くねぇぜ。時々こーゆーのがねぇとな」

人里どころか地上ですらない。ド田舎ファンタジー異世界な幻想郷。奈落の深みに落ちた地の底。

彼の地は文字通りの地獄。オレは再び旧都まで乗り込んでいた。移動手段は言わずもがな八雲紫のスキマで、もちろん帰りも頼んである。片道切符はシャレにならん。

もっと言っちまえば華扇には内密にして来た。ここ数日ほど依頼がない、つまり仕事がないのを口実にギャンブルしてると知られたら説教が飛んでくる。そらもう間違いなく。あのクソマジメのことだ

から賭け事そのものに文句を言ってくるリスクも有り得る。
やれやれ、こちとら偶にはプライベートな休日を満喫しようってぇだけなのによ。
「ねぇちょっと。そこの羽振りの良さげなオニーサン♪」
「あ？　オレのこと言ってんのか」
「そうそう。わかってるじゃない」
おもむろに何者かに袖を引かれて振り返る。そしたら、クソ派手な身なりの女が蠱惑の笑みを浮かべつつ、甘々なぶりっ子を演じてオレを見上げていやがった。
見覚えがある。賭博場にいた女だ。
テメェじゃ賭けずに近くの野郎を囃し立て、そいつが大負けした途端に忽然と姿を消した。その悪辣さ、いっそ清々しいぐらいにわかりやすい美人局であった。
オレンジ色の巻き髪スタイルに丸型サングラスを額に掛けて、低身長に不釣り合いなボディコンっぽいブランド服。煌びやかな指輪に腕輪にネックレスといったアクセサリーをこれでもかと身に付ける。さらには女モノの香水らしき匂いもかなり濃かった。
高度経済成長期とかバブル期みてぇなファッションセンスしてんな。行き過ぎたオシャレから溢れんばかりの成金オーラが凄まじい。十中八九、騙した男に貢がせたカネで買ったんだろうけど。
「オメー、さっきいたヤツだよな」
「あら！　覚えててくれたの？　嬉しい♪」
「けっ、わざとくせぇなオイ。どーせ尾行してきたんだろうが」
「それだけアナタが魅力的ってことよ♪（金銭的に）」
ブランド品だらけのゴージャスな女が猫撫で声を囁いて、オレにしな垂れかかる。肩を摺り寄せられてキツい香水の匂いがますます染み付く。
見るからに男を手玉に取るのに慣れていた。霞青蛾みてぇな色香で惑わすやり口とは違えどチョロい男心をその気にさせる手練れ。これまで何人の単細胞がまんまと騙され唆され挙句の果てに絞りカスにされたことやら。

おおよそ賭博場で消えた時も、隠れて誰がボロ儲けするか見定めていやがったに違いない。その結果、タカリが次に狙ったカモってぇのがオレだったワケで。

が、生憎とこちとら夜を生きるハードボイルドときた。何もかも計算された色仕掛けなんざ通じねぇ。

「ねぇ～、これから一杯やるんでしょ？　アタシも連れてってほしいな～」

「じゃかぁしい、どーせオレの奢りになんだろうが」

「そんなこと言わないで。おねがぁい」

チラッチラッ、と女の魅力をアピールしてタカリ女がおねだりしてくる。あざとさの作り物っぷりが余計に胡散臭い。　ダメだ、全然なっちゃいねぇ。和服女将のヤツメウナギ屋台でそっちの修行でも積んでから出直してこい。

メンドクセェしテキトーにずらかるか。でもコイツの感じだとどこまでも追いかけてきそう。下手すりゃ店の中はおろか図々しく相席してくる。当然、会計の伝票はオレに押し付けるカタチで。

「あれ、女苑……？」

「えっ？」

「ン？」

ふと、知り合いの声が貧しく流れてきた。

クルクル巻き髪な女と同時に声の主を見やる。そこにはかつて大猪から生き延びた同士でもある青髪ロングの貧乏神が居た。なぜか居酒屋の軒下で薄幸そうに座り込んでいる。もし段ボールに入っていたら完全に捨て猫であろう。

「げ……姉さん」

「ネェサンだぁ？」

「あ、はい。わたしたち姉妹なんですよぉ」

「うせやろ」

嫌そうにツラをしかめるゴージャス女に代わって、ボロい薄着の貧乏神がふにゃけた口で答える。

もはや富豪と貧民じゃねぇか。身なりのレベルが違い過ぎる。経

済格差が天と地ほど離れた二人組に思わず二度見して見比べてしまった。

依神紫苑を姉さんと呼んだってぇことはコイツ妹なのかよ。

「ってこたぁオメーも貧乏神なんか?」

「失礼ね。そこの見るからにみすぼらしい身内と一緒にしないでほしいわ。この格好のどこに貧乏な要素があるとでも?」

「だろうな。だからつって福の神でもねぇだろ。せいぜい得してんのはテメェだけってぇオチか?」

「ぴゅ~♪」

オレが胡乱気な目つきで一睨みしてやると、女苑と呼ばれた金持ち妹がコミカルな口笛とともに目を逸らした。図星かよ。

大枚叩いて貢いだのにポイ捨てられたカモ連中からすれば貧乏神と似たモンだろう。それどころか精神的ダメージも負わされたなら疫病神ともいえる。まだキャバ嬢かレンタル彼女にでも費やしていた方がイイ思いできただろうに。

それでホンモノの貧乏神はといえば、居酒屋の入り口から数歩ほど離れた小窓の真下を陣取っていた。開けっ放しのそこからモクモクと漏れ出た芳しい煙に鼻をヒクつかせて。もはやこの時点でロクでもない予感しかしない。

「そんで? そんな場所で姉さんこそ何してるわけ」

「ふふ……匂いをおかずにご飯を食べてる気分を味わっているの」

「うわ貧乏くさっ!!」

バブルなファッションした女が白目を剥いて絶句する。その傍ら、縁が欠けたヒビ入り茶碗と木の枝くせぇ箸を持った依神紫苑が不憫さを漂わせる。

よくよく見れば、メシ茶碗は空っぽで米粒の一つも付着してなかった。

「全部エアやんけ」

「で、ですから気分だけでも……」

コイツはこれからも霧か霞でも食って生きていくつもりなんか。

昔話の長老仙人かよ。むしろ本物の仙人サマが食べ歩きばっかりし

とるわ。オマケに酒豪だしよ。
　こっちが憐れんでいるのにも気付かず、青髪ロングの貧乏神はクルクル髪な妹にやつれた笑みを向ける。この女そのうち衰弱で死ぬんじゃなかろうか。
「女苑はなんでここにいるの？」
「ふっふーん、このステキなオニーサンにご馳走してもらうのよ」
「ふわぁ……！」
　再会した姉すら足蹴にして、オホホと高笑いを飛ばす依神女苑。まるで悪役令嬢の高慢ちきな自慢オーラを撒き散らす。だというのに依神紫苑はキラキラお目目で羨ましがった。ホントに姉妹なのか疑わしい。
　って、待てやコラ。聞き捨てならない発言があったんだが。
「オイコラ。勝手に決めてんじゃねぇ」
「えぇ～、だめなの……？」
『きゃるんっ♪』とでも効果音が付きそうなおねだりでボディタッチ。猫かぶりキャラすぎんだろ。コレに騙された野郎がいるのか。情けねぇ――
　ぐぎゅるるるる
　突如、どこからか獣の唸り声かドリルの回転音をイメージさせる低音が鳴り響いた。もはや誤魔化す必要もない。犯人に声を掛ける。
「オイ、今の音」
「あう……」
　案の定、貧乏神が腹を抱えながら蹲った。メシの匂いで満足しなかった腹の虫が最期の断末魔を上げた模様。むしろ逆効果だったんじゃねーか。
　オレが見下ろすと、依神紫苑がおずおずと遠慮がちに手を上げる。
「あ、あのぅ」
「何や。言うてみぃ」
「で、できればでいいんですけど、わたしもついていってもいいでしょうか……？」
「っかー」

嘆息しながらオールバックの前髪を無造作に掻き上げる。依神姉がビクッと怯えたように肩をすくませた。なんかオレが借金の取り立てみたいじゃねーか。

タカリの妹だけならテキトーにあしらっていたところだが、さすがに腹ペコで行き倒れそうな知り合いを見捨てるのも寝覚めが悪い。

「しゃーねぇ。お前も来い」

「うぅっ、ぁりがとうございます……！」

「キャー！　オニーサンってばイケメン！」

所詮ギャンブルで稼いだあぶく銭、ましてやそんなモンを後生大事に貯金するなんざガラじゃねぇ。ならばとことん豪遊して羽目を外すまで。それが歓楽街の醍醐味ってぇモンよ。

感涙に噎び泣きながら依神紫苑がオレの手にすがりつく。こっちはこっちで煙をモロに浴びていたから体中に食い物のニオイがこびり付いていやがる。どさくさに紛れて同行する気満々の依神女苑もこれ見よがしに離し立てておった。

オレに引っ付く依神姉妹だったが、何やら姉の方が眉をひそめて妹に向けてポツリと一言だけ放つ。

「女苑、ちょっと臭い」

「姉さんに言われたかないわよッ!!」

意外と息ピッタリじゃねぇのかコイツら。

つづく

第七十五話　「ゴッドシスターズ」

祇園。

その言葉が思い浮かぶ。旧地獄でもとりわけ敷居の高い料亭。古き良き伝統ある老舗にオレら一行は足を運んだ。由緒正しき店構えは、豪華絢爛とわびさびが絶妙に成り立つ。はたして入店を許されるのか。一見さんお断りされてもおかしくねぇぞ。

「女苑様。ようこそおいでくださいました」

「どもー。また来ちゃったわ」

「マジか」

まさかの依神女苑の顔パスで通れちまった。解せん。いや、何となく察したけどよ。

恭しく頭を垂れる女中らを目の当たりにしてビミョーな気分になる。どうにも納得いかねぇ。コイツ今まで一度たりとも自腹で払ったことねぇだろ。びた一文たりとも。

悠々と広い和室に案内されると、次から次へと料理が運び込まれる。

まずは舟盛りの刺身。細かい造形の木船が真っ白な帆を張り、面舵一杯で大漁を謡う。赤身や白身の瑞々しい丁寧な盛り付けも輝かしく、ご立派な鮮魚のお頭と尾びれが颯爽と反り返る。初っ端からご馳走に早くも圧巻されてしまった。

山菜尽くしの天婦羅、若鶏の照り焼きが続く。茶碗蒸しの蓋を外せば三つ葉を添えたお上品な黄金色が輝く。最後にせいろ蕎麦で仕上がった。徳利とお猪口も欠かさない。

「つかー、こりゃまたスゲェなオイ」

「だっしょー？」

「なしてオメェが威張るのか」

「ふわわ……ご馳走ばかりです。こ、こんな贅沢しちゃっていいんでしょうか？」

キャラ属性が正反対の疫病神と貧乏神の姉妹コンビと共に宴の席に着く。心なしか座布団まで座り心地がヤバい。特に依神姉はおそ

るおそるといった様子。畏れ多さに今にも拝み出しそう。
今さらだが、字面にするとトンデモねぇ連れだわな。ま、こちとら地獄の女神サマと顔見知りなワケで、何一つ気負うモンもねぇけど。
かくして酒宴の幕は開けり。手始めの余興も引けを取らない。
『〜〜〜〜♬　〜〜〜♪』
琵琶と琴の美しい音色が奏でられる。
極彩色の屏風を背にして若い女が二人。それぞれ楽器にしなやかな指を這わす。
琵琶を抱えている娘は、青紫色の長い髪を後ろで二つ分けに束ねたヘアスタイルが特徴であった。スカートの裾は透けており、さながら天女が纏う羽衣を彷彿とさせる。
琴の調べを生み出すもう一人。こっちはクセのない茶髪ショートボブに紫色のカチューシャを飾る。白い長袖シャツに黒いスカートと、わりと現代テイストなコーディネートが却って目新しい。
茶髪ショートボブの琴娘は弦楽器を持っていない。黒色スカートに巻き付く光線を撫でて演奏している。相方の琵琶も楽器こそあれど同じ類いの弦が張られていた。
清らかな渓流のような旋律が音符の船を乗せて客間に粛々と流れる。
「ふふ」
琴担当と目が合ってニコリと微笑まれる。
九十九姉妹と言ったか。最初にあの二人の奏者をその名で紹介された。どうやら姉妹で協奏しているらしい。見た目もなかなかイイし演奏も上手かった。純和風な客間の雰囲気にも相応しい。
そーいや、こっちの連れも一応は姉妹だったな。
「あとねぇ、これとこれ。あとこっちも。それからお酒も追加よろしく〜」
まだ料理が残っているのもお構いなし。クルクル巻き髪の依神妹が女中を呼びつけ、オレの許可なく好き勝手に追加で注文を重ねる。やがてやってくる新たな料理たちがテーブルを占領していく。当然、会計も膨らむ。

もはや店に入ったことで猫を被る必要がなくなったのであろう。とうとう化けの皮が?がれてきていやがった。コノアマやっぱ置いてくべきだったか。

「おいひぃっ、おいひいよぉ。うっうぅ……」

それに対して、依神姉が滂沱の涙を垂れ流して逸品の数々に舌鼓を打っておった。泣き過ぎだろ。ドン引きどころか逆に怖ぇよ。

演奏が終幕を迎える。オレだけが拍手を送ってやると、九十九姉妹が屏風の前からオレの両隣に腰を下ろす。流れるような動きに自然と受け入れちまった。

琵琶を携える青紫色の女がさり気なく徳利を取って、お酌する手振りを見せる。

「さ、どうぞ」

「おー、すまねぇな」

「あんなに熱心に聴いてくれたんですもの。これくらいしなくちゃ」

「フッ、イイ演奏だったぜ」

ちぃとキザに褒めながら、豊潤な香りと湧き水の如き澄んだ口当たりの日本酒を嗜む。つっても、ここはクイッと一息に。

「おぉっ！　いい飲みっぷり」

「そらどーも。あんたらまだ時間あるか?　どうせだし食ってけよ」

「いいの!?」

テーブルを埋め尽くす大量の料理を親指で指し示す。

気付けば、依神女苑のせいで少し目を離した隙にエライことになっちまっていた。その元凶はどーしたかといえば、素知らぬツラで高値を張る酒を手酌で一人気ままに飲んでいやがる。もし支払いが足りなければコイツを皿洗いにでも売り飛ばしてやろう。

オレの誘い文句に、茶髪ショートボブが目を輝かせて食い付いた。演奏中はお淑やかな印象だったようでいて、素顔は結構ハツラツした性格のようだ。

「どー見ても三人分じゃねぇかんな。このまま高級食材の残飯にしちまうのも勿体ねぇし、遠慮しなくてイイぜ。それともハラ減ってなかったか?」

「ううん全然！　ありがと！　実はお腹ペコペコだったんだよね。あ、その前に私からもお酌させて」
「おっと、こいつぁすまねぇな」
今度は琴の娘が徳利を向けてきたのに合わせて、こちらもお猪口を差し出す。
茶髪ショートボブが日本酒を注ぐためにオレに身を寄せる。何つーか、芸者か舞妓でも侍らせとる気分だ。見方によっちゃ両手に花とも言えなくもない。
博打に勝った者だけが見られる甘い夢。桃源郷の美酒を飲み干す。嗚呼、夢見心地に酔っちまいそうだ。でもまぁ、たまには悪くねぇだろ？
やがて宴もピークを過ぎ、しばしの静寂を肴にして一人で黄昏れる。
依神女苑は「新しいカモを探してくるわ！」と本性剥き出しで部屋を飛び出していった。眩しいグッドサインを残したのが記憶に新しい。今日一番イキイキしていたように思う。
依神紫苑の方は「た、食べ過ぎました……」とヨロヨロ歩きで手洗いへゴー。貧相な体ゆえに小食だった模様。せっかくご馳走の山を前にしたのに食い溜め出来てなかった。哀れ。
「フッ……イイ眺めだ」
この客間は上の階に位置するため、窓を開ければ旧都の街並みを眺められる。目下で提灯が連なり、人妖も多々に行き交う。コレで祭囃子でも聞こえてくれば縁日と変わらない。ま、残念ながらそこまで揃っちゃいねぇけど。
その代わり、店の奥へと耳を澄ませば、他所で始まった九十九姉妹の曲が控えめに揺蕩う。そういや両方の名前を聞くのを忘れとったわな。どっちが姉で妹なのかもわからずじまい。ま、エエか。
「にしても今日はツイているよな」
フツーならそう易々と入れねぇ高級料亭に入り浸り、旨いメシを堪能して麗らかな生演奏に耳を傾ける。まさに豪遊の至り。これを贅沢と言わずして何と言おう。

夜通し明かりの途絶えない歓楽街を遠くまで一望しつつ、潤沢な風味の日本酒で口を湿らす。酒と雰囲気とニヒルな己に酔い痴れる。今だけは許されるハズだ。

どうせ今夜限りのビギナーズラック。恐らく次のチャンスはない。ましてや地獄の賭博場で大負けした後のことなんざ想像したくもねぇ。過酷な肉体労働の強制とか？

「ン？」

トットットッと足音が近付いてくる。

またしても巻き髪ロールの疫病神が追加オーダーした品が運ばれてきたのか。さすがに腹一杯なんだが。

『失礼します』

足音が部屋の前で止まり、やはり女中と思しき声が襖の向こうから届く。

って、いや待て。聞き間違いかもしれんけど、メッチャ聞き覚えのある声だったような気がしてならない。例えるなら、いつもオレに付きまとって口うるさく説教かますクソマジメな――

『随分と楽しんでいるみたいですね……綿間部？』

「ブホォ……ッ!?」

そのセリフを聞いた途端、貴重な高級酒を堪らず吹き出しちまった。数秒と掛からず酔いが覚める。あと咽た。

鼻にも若干アルコールが入ってのた打ち回る。その傍ら、襖越しに「すぅ……」と息を吸い込む気配が伝わってきた。オイオイオイオイ!?

そして、満を持してあの女が現れる。

「こんの馬鹿者ォォオオオッ!!」

スパーン！と大きな音とともに襖が吹っ飛びそうな勢いで開け放たれた。

柔らかな桃色のミディアムヘアに白いシニョン。薔薇が目立つ紅色の中華衣装と緑色ミニスカがひらりと翻る。赤みがかった瞳と美人な顔立ちは人目を惹いた。ただし、マジメそうな面持ちも今や怒りに沸々と煮えておった。

人に教えを説き導く仙人サマ――茨木華扇がオレを真っ直ぐに見据えて目を吊り上げる。

かの桜代紋ばりにド派手に真打ち登場であった。

かくして桃色の仙人サマはお得意の腕組みポーズでニッコリと満面の笑顔をたたえる。まだビミョーに眉がヒクついているけど。

「こんばんは。ご機嫌よろしいようで何よりです。ええ本当に」

「お、お前っ。どーしてここがわかった？」

「紫が教えてくれました」

「チクショウ身内の裏切りじゃねーか！」

思わぬ伏兵に悪態を吐きながら畳に四肢を着く。我ながら情けねぇ。

そら確かに口留めはしなかったけどよ。せめてそこは空気読めって。この女にオレがギャンブルしてることがバレたらこうなるに決まってんだろうが。むしろそれが狙いだったのか。

「さて、綿間部。私が言いたいことがわかりますか？」

「あー……できればわかりたくねぇけどな」

「黙りなさい。依頼が来ないのはこの際大目に見てあげます。商売とは何時如何なる日も順風満帆とは限りませんもの。時にはままならないことがあるのは認めましょう。ですが、現状を打破するための努力も怠り、すぐ諦観して甘んじて受け入れる姿勢はいただけません。ましてや、束の間の英気を養うならまだしもこの体たらくは何ですか。あれだけの目に遭ったにもかかわらず性懲りもなく地底に出向いて、目先の利益に囚われて賭け事に手を染めたうえに、あまつさえ身の丈に合わない贅沢三昧だなんて！　あまりに傲慢が過ぎます！

これではまるで欲望に溺れた遊び人ではありませんか！」

「いつにも増して説教長ぇなオイ……!?」

「誰のせいだと思っているの!!」

クドクドクドと正論の連撃を叩き込みながら仙人サマが客間に踏み入る。

もとより窓際にいたオレに逃げ場なんざない。かといって窓辺からやがて飛び立つワケにもいくまい。かつてボロアパートの二階か

ら宇佐見とマエリベリーを担いで飛び降りたことはあったが。
あっという間に華扇はオレの眼前にまで迫り、膝立ちの姿勢で整った顔立ちを間近まで詰め寄せる。だから近ぇと何度言えば……！
「いつまでそのような有り様では――？」
ところが、どーゆーワケかお小言が脈絡なく止まった。よくわからんけど助かった、のか？
さらに桃色の仙人サマはスンスンと鼻を啜り始める。まるで警察犬が犯人の臭いを辿っているかのように。念入りに、じっくりと、決して言い逃れできない証拠をかき集める。
赤みがかった瞳がこちらを捉え、静かな口調で語りかける。
「ねぇ、綿間部」
「な、何や」
「どうして貴方の体から女性の香水の匂いがするんですか？」
チョコレートみたいな甘ったるい声が鼓膜をくすぐった。
中華衣装の仙人サマが可愛らしく小首を傾げてオレを見つめる。見る者を一目惚れさせかねない微笑み。しかし、その奥にある瞳は微塵も笑ってない。それどころか虚無に堕ちていた。怖。
「フフフ。賭け事や豪遊に飽き足らず、ついには女遊びですか。ほんとうに、どうしてくれましょうか」
「いやちょっと待てオメーまた何か誤解してんだろ!?」
身の危険を感じて咄嗟に逃げる体勢に入る。しかし、そうはさせまいと華扇が両膝を開いてオレの太腿に乗せた。ついでに左右の肩にも手を重ねて、前のめりになって真っ向から動きを封じられる。
「逃がしません！　今日という今日は絶対に許しませんから！」
「ちょバカお前ッ、何する気だ!?　ナニする気だコラァ!?」
「男の人っていつもそうですね……！」
「だーもう話聞けって！　つーかどっかで聞いたセリフだなオイ!?」
負けじと華扇が密着してくるせいで、ますます互いの身体が触れ合う。
まさに体を張ってでも止めようと躍起になっている桃色の仙人サ

マ。当然、オレもやられっ放しにはならず抗う。わずかに体勢がブレて華扇がオレの太腿の上に座ったポーズになる。

緑色ミニスカから晒された素肌の柔らかさが、ズボン越しに伝わってくる。華扇の体から女性らしい匂いが漂う。そのうえ豊かな二つの膨らみが当たる。体を動かすほどに泥沼の深みにハマっていく。

「んっ、んんっ……この、無駄な足掻きを――んぁッ！」

「ちょバカおま、声抑えろって」

「だ、だって……やっ、ぁん！」

敏感な部分を擦れたのか、華扇の口から艶っぽい嬌声が上がった。熱っぽく湿った吐息が耳元で囁かれる。オレまで顔面が火照り始める。脳ミソがクラッとした。醒めたハズの酔いが回ってきたのだろうか。

ヤバイ。もはや自分たちでさえ何がどーなってんのか――

「やー、お待たせお待たせ。ガッポリ稼いできた……わ……」

圧倒的な間の悪さ。

突然のタイミングで戻ってきた依神女苑が、客間に入ってコンマ一秒で固まった。満面の笑みのまま石像と化した。つられてオレたちも硬直する。

傍からは男女二人が個室で絡み合っている真っ最中。そんな行為をまざまざと見せつけられたバブルでアゲアゲ女は次の瞬間、

「ほげぇえええええ」

吐いた。リバースした。

吐瀉物こそ撒き散らしちゃいないが潰れた声を出して倒れちまった。猫かぶりなぶりっ子キャラを完膚なきまで崩壊させて。予想外のリアクションにこっちも困惑してしまう。

「あ……が……」

どうにも男に貢がせる悪女と思いきや、そのクセして成人向けの生々しさに耐性がなかったらしい。意識を失って引っ繰り返って、とても人様にはお見せできない痴態を晒している。

「ごめんなさいぃ、道に迷っちゃいました……あ」

さらに不運が重なり、依神紫苑までもが立て続けに戻ってくる。こ

んな時だけ息ピッタリかよ。
　はじめ青髪の貧乏神は驚いたようにオレと華扇を見やり、それから床で気絶する妹を見下ろす。その後はハッと何事かに気づいた様相で襖の裏に隠れた。そしておずおずと、
「わ、わたしたちのことは気にせず……どうぞ」
「いやどうぞじゃねーよッ!!」
　とんでもなく見当違いな気遣いに条件反射でツッコミが炸裂する。おかげで正気に戻ったって？　やかましいわ。
　依神姉妹の面白リアクションが功を為し、ようやく今になって桃色ミディアムヘアの仙人サマも己が織り成す状況を知った。その際どい体勢と、とんでもない誤解を招いていることを。
　赤みがかった瞳を大きく見開き、オレを引き剥がそうと膝の上で暴れる。
「は、離れてくださいケダモノ!!」
「バッ!?　誰がケダモノだオメーが自分からオレに跨ってきたんだろうが！」
「んな!?　私のせいだとでも言うのですか!?」
「だーもう、いいから早よ降りろ。いつまで座ってんだッ」
「ふやっ、ど、どこ触ってるんですかスケベ！」
　人のことをケダモノだのスケベだのと喚きながら仙人サマが身を捩る。いよいよ人目もあって羞恥に堪えられなくなった模様。あと依神妹は白目を剥いているが、依神姉は襖の裏からこっそり覗き見していた。って、見てんじゃねーか。
　ついには騒ぎを聞きつけて、別間での演目も終えた九十九姉妹までもがやってきた。ちゃっかり野次馬に加わる。こっちの姉妹はオレたちを見るなり「あらまぁ」と口元を手で隠す。
「いつからここは遊郭になったのかしら」
「んー、どっちかというと旅籠じゃない？」
「いやどっちも違ぇからな！」
「そそそうですっ違いますからぁ！」
　数分後、すっ飛んできた女中に「うちでそういう行為は厳禁です！」

と華扇共々しこたま叱られた。支払いに詫び金を上乗せして出禁は免れ、博打で得た金は一銭も残らず消失した。すっからかんだしもう帰ろう。

「私の説教はまだ終わっていませんよ……？」

「うげ……」

嗚呼、どうやら今回もダメだったらしい。泣けるぜ。

つづく

第七十六話　「逮捕されちゃうぞ！」

「綿間部。これは何の道具ですか？」
「あー？　こいつか」
茨木華扇が興味深そうにオレの手元を覗き込む。
柔らかな桃色に染まるミディアムヘアがテント内のランタンの光を受けて煌めく。ガーネットめいた赤みがかった瞳が揺らめいた。美人な顔立ちと容姿レベルの高さにつくづく感心する。
今宵、オレはアジトに籠ってボストンバックを真っ逆さまに引っ繰り返した。荷物整理と称して中身をブチ撒ける。野宿にも使えるアウトドア道具やら保存食の缶詰やらが続々と転がり出る。おかげで足の踏み場すらなくなった。
マジメな性格の仙人サマも散乱っぷりに「片付けなのか散らかしているのかわかりませんね」と皮肉交じりに呆れる。またコイツちゃっかり入ってきおってからに。家が隣同士の幼馴染じゃねぇんだからよ。
あれやこれやでテント内がごった返す。オレの隣に僅かな余裕が辛うじて残っていた。華扇は迷わずそこに座って、狭さから自然と肩を密着させる。その軽率さはどーなんだ。ホントに無防備なやっちゃな。
「もぉ、もったいぶってないで教えてください」
「別にもったいぶってたワケじゃねーよ」
桃色仙人が拗ねたように頬を膨らませる。細やかなイタズラとして二の腕を突いてきた。くすぐったいからやめーや。
目下に視線を落とす。金属製のダブルの輪を一本の鎖が繋ぐ。どことなく年季も入っており、所々に錆が見受けられる。ひんやりした冷たさと重量感が手のひらに納まる。
夜の繁華街で知り合った老年刑事から譲り受けたんだっけか。防犯ショップで在庫処分の余り物だったか。もはや入手経路さえも忘れちまった。思い出の品と語るには多少物騒だけど。
「見ての通り手錠だ。幻想郷にはこーゆーブツはねぇのか」

「手錠……手枷、拘束具の類ですか。なぜそのようなものを？」
「そら何かと便利だからに決まってらぁ。お尋ね者をとっ捕まえた時に、獲物を抵抗できなくさせられるだろ。あとはアタッシュケースを運ぶ時にもテメェに繋いでおけば引っ手繰りの予防線にもなる」
　これまでこなしてきた依頼の数々を思い返す。我ながら『外』の世界ではきな臭い仕事ばかりであった。それこそがオレの生き様なのだ。今も昔も変わらねぇ。なぜならオレは夜に生きる男。ハードボイルドな何でも屋なのだから。
　その一方で、包帯が巻かれた右手とは反対側にあるアクセサリーを指差す。
「というか、だ。お前だって似たようなブツ付けとるやんけ」
「これは腕輪です。手枷と一緒にしないでください」
「へーへー、そらすまんこって」
　左の手首にブレスレット（ガントレット？）が鈍く光る。模様すらない無骨なリングが目に留まる。飾り気のない鎖がジャラリと垂れ下がった。
　紅い中華衣装や緑のミニスカと見比べれば、ぶっちゃけ地味なデザインと言えなくもない。ところが、シンプルな装飾品も華扇が身に付けると不思議と似合う。容姿の良さが為せる技ってか。
「そーいや、伊吹萃香と星熊勇儀もそれと同じモンしとったな」
「はひゃ!?」
　ふと思い至ったことを呟いたら、面白い声がすぐ横から聞こえてきた。
　桃色の仙人サマがやたら狼狽えたツラで腕輪を右手で覆い隠す。冷や汗も流して。見るからにワケあり臭い。挙動不審にも程がある。
「動揺するほどじゃねぇだろうに。それとも人には言えない秘密でもあんのか？」
「あう、それはその……」
「ン、待てよ？　ひょっとしてお前――」
「そそ、そんなこと今はどうでもいいではありませんか！」
「お、おお」

言いかけた言葉を寸前のところで強引に遮られる。有無を言わさぬ気迫にたじろいで口を噤んだ。あまりにも必死の形相でちょいと引いた。

あの鬼連中とファッションセンスが被ったのがそんなに嫌なんかい。仲が良いのか悪いのかイマイチわからん。ドロドロした関係ではなさそうだが。アイツらどっちかというと拳で語り合う昭和ヤンキーに近い性格だろうよ。

照れ隠し?でオレから拾い上げた手錠を弄る姿に嘆息する。しゃーねぇ、あえて何も言うまい。

「ま、確かにどーでもいいけどよ。それよか下手に触らんほうがエエぞ。鍵も失くしちまって外せねぇかんな」

「んなっ!? そういうことはもっと早く言ってください! 危ないではありませんか!」

すかさず華扇が怒った口調でオレを睨んできた。さっきまでオロオロしとったクセに変わり身の早いこって。

「そーは言ってもな、最近じゃ遊びにも使われているみてぇだぞ」

「? どういうことですか?」

ちょっと気になったのか、華扇が目を瞬かせる。相変わらず表情が豊かだ。

「アレだ。手錠に繋がれた二人がその状態で丸一日過ごすんだと」

「ふむ? それのどこが面白いのですか。ただ不自由なだけではありませんか」

「っかー、それ言っちまえば身も蓋もねぇわな」

ウケる要素が皆目見当つかないようで、仙人サマが理解すべく熟考に入った。何個もハテナマークを浮かべては怪訝な顔をする。いやクソマジメかよ。

さりとて、この女の凝り固まったアタマでは到底わかるまい。かくいうオレ自身も動画サイトでネタを知っているだけで詳しくねぇけど。所詮にわか知識に過ぎない。

ゆえに迂闊にも口走ってしまった。この後に波乱を巻き起こすトリガーを引いてしまう。愚かにも知る由もなく。

「二人組ってぇのは男女ペアでっつー意味だ。つまり風呂もトイレも同行しなきゃならねぇってこった。その辺が見どころなんじゃねーの」

「ひぁ!?　なななっ、なんですかその不健全な行いは!?」

フッとニヒルにカッコつけるオレに対して、華扇は初心染みた声音を出した。

清々しいほど期待通りのリアクション。どうやら具体的なシチュエーションを思い浮かべてしまった模様。危うく手錠を取りこぼしそうになっておった。

端正な顔立ちから湯気が出て、目もグルグルと渦巻いている。体温も急上昇。あまりの鮮明な脳内イメージにのぼせてしまったみたいだ。どんな妄想したのやら……

「この変態！　どっどうして私が綿間部と一緒に厠に行かなければならないのですか！　絶対に嫌です！」

「は？　いや別にオレたちでやるなんざ――」

「こんなもの一人でやってくださいッ！」

ガチャンッ!!

「……ンン？」

はて、今メッチャ嫌な音がしなかったか。

恐る恐る見下ろす。ご丁寧にもオレの両手首に金属製の手枷がガッチリとハメられておった。ってオイィ!?

「ちょバカおまっ、何つーことしてくれたんだァ!?」

よもやテメェの手に輪っぱが掛けられる日が来ようとは思わず。驚きを通り越して愕然とする。こちとら元いた世界でも逮捕歴なんざねぇわ。

「ぐぬぬ……ッ！」

力任せに引っ張ってみたものの、チェーンがガチャガチャいうだけでビクともしない。さすが本格仕様。いやいや褒めとる場合じゃねぇ。コレはアカンやつや。

誰もがビックリの惨状に仙人サマも「しまった」と顔を歪めた。やっとモザイクな妄想ワールドから帰ってきやがったか。どんな展

開をイメージしたのか問い詰めてやりたいところだが止めておこう。なぜか逆にオレまでダメージを負いそうな気がしてならない。

赤らめていた顔色を今度は青ざめさせて、桃色ミディアムヘアの女が手錠の鎖を握った。

「えぇっと、ひとまず鎖を引き千切って壊しましょうか？」

「初っ端から脳筋過ぎんだろうが。両手はフリーになるのと引き換えに輪っぱが一生残っちまうわ」

いきなり最終手段を実行しようとするやや暴走気味の仙人サマを押し留めた。下手すりゃこの女の馬鹿力に耐え切れずフレームが歪んで一切外れなくなる。もしそうなったらガチでオシマイだ。

「でも、肝心の鍵がないのでは……」

「落ち着けって早まるな。鍵がなくても壊さなくても外すことができんだよ」

「そうなのですか？」

「ああ」

実は手錠の構造は意外と単純だと聞いたことがある。それこそ針金でもあればカンタンに解除できると。鍵穴の奥に何か差し込んで、ピッキング感覚で施錠をどうにか解除できればイケる。

ざっくばらんに説明してやると、華扇も安堵したように頬を緩ませた。

それでも喜んでばかりもいられねぇ。丁度良く荷物整理中で全部の持ち物を調べたワケだが、上手く使えそうな道具は見当たらなかった。もう夜中だし、人里には金物屋もあるが閉まっているだろう。

「ふーむ」

腕組みはできないため、拘束された姿勢で思考を巡らせる。

このまま大人しく両手を塞がれながら一晩明かすのもキツい。オレにとっちゃこれからが本格的な活動時間なのだ。まだ深夜というほど夜更けでもない。だとすれば起きている連中も多かろう。

ならば結論は一つ。悩むまでもない。

「知り合いに借りるのが手っ取り早い。つーかそれしかねぇわな。しゃーねぇ、みんな寝静まっちまう前にちょっくら行ってくるか」

「でしたら私もご一緒します。何かと不便でしょう。もし道で転びでもしたら受け身も取れずに怪我をしてしまいますもの」
今こそ名誉挽回のチャンスと心得たらしい。桃色の仙人サマが「任せてください！」と胸を叩いた。かつてないほどの気合を入れておった。
善は急ぐのだと言わんばかりに、オレの腕に両手を回して立ち上がらせる。
「いや自分で立てるわ」
「いいからいいから」
華扇が笑顔でオレの腕に抱き着く。何か嬉しそうだなオイ。
ボリューム満点な双丘が惜しみなく押し当てられ、マシュマロみたいな柔らかい感触を味わえる。やっぱりデカい。って、何意識してんだオレは。
ヤル気を漲らせた華扇は、ついぞオレの心境なんぞ気付く素振りもなし。ぐいぐいと腕を引いてテントの外に連れ出す。外出後もエスコートの気分でますます体を寄せる。
「こうなったのは私にも非があります。この責任、ちゃんと体で支払ってみせますから」
「……だーもう」
これもう確信犯だろ。もはや無自覚ってぇレベルじゃねーぞ。
溜息が零れて夜風に溶けていく。とにかく手早く済ませるしかあるまい。あらぬ誤解が人里を駆け巡る前に。そう心に誓った。

「く、黒岩。お前とうとう……」
「オイコラとうとうってぇどーゆー意味だ」
「ま、待ってください。違いますから」
人里の守護者にして寺子屋の教師が、愛想笑いすら消失したドン引きの様相で後退った。失望と諦観が混ざった眼差しがこちらの精神を容赦なく抉る。華扇が間に割って入ってなければどうなっていたことか。
って、よく見たらオメーもちょっと笑ってんじゃねーか。上擦った

声だったのは吹き出すの我慢してただけかよ。チクショウ、なにわろてんねん。

「これはその、不慮の事故といいますか。とにかく彼が悪事を働いて御用となったわけではありませんので」

「あ、あぁ……そうでしたか。すまない、私としたことが邪推してしまった。しかし手を拘束される不慮の事故とは一体？」

「あんま深く考えねぇ方がイイぜ。つーか考えないでくれ」

余計なコトにならないよう牽制しながらも、どうにかこうにか女教師の思い違いを正すことに成功した。出くわしたのが話がわかる相手で助かった。

のっけからこれじゃ先が思いやられる。はたしてこんな調子で大丈夫であろうか。

「何はともあれ事情を聞いても良いだろうか？」

「おー。実はな……」

手短に経緯を伝えておく。手錠がオレの持ち物であり、針金かそれに近しいブツがあれば外せることも含めて。もっとも、トチ狂った華扇がオレに輪っぱをかけた犯人だと聞かされたときは、向こうさんも返す言葉に困っていた。すまんな。

あと華扇からも「そこまで言わなくてもいいじゃないですか」と不服そうに頬を膨らまれた。どさくさに紛れて恥ずかしい失敗をバラされたのが減点なご様子。腹いせに両腕の力を強めてきた。大きな胸がむにゅりと押し潰れる。だからお前そーゆーとこやぞ。

一縷の望みをかけて人里の守護者サマに救いの手を求める。

「つーこって、何か使えそうなやつ持ってないか？」

「重ねてすまない。生憎とそれらしき持ち合わせはないんだ」

「だろうな」

ダメもとで聞いただけで落ち込むほどでもなし。大体、常日頃から針金なんぞ持ち歩いているヤツとか、どー考えてもピッキング予備軍を疑われても文句は言えねぇ。

あまつさえ何一つ責任がないハズなのに、上白沢女史が己の至らなさに眉を下げる。

「大変な目に遭っているのに、役に立てずに申し訳ない」
「フッ、気にすんなよ。オレを誰だと思ってやがる」
「手枷を付けたままカッコつけないでください。馬鹿者」
仙人サマの的確なツッコミが入る。それを言ったら戦争だろうがよ。
オレと華扇のやり取りを聞いて気が軽くなったのか、女教師は微笑を浮かべた。さらにこんな申し出も。
「すぐ家に戻って探してこよう。見つかったら届ける」
「おぉ、ありがてぇ」
「何から何までありがとうございます。慧音さん」
「いやなに、これも人助けだ。できる限り力になろう」
さすが人徳に溢れた教職は格が違う。寺子屋のガキんちょどもの初恋の相手はこの女かもしれない。
そうは言ってもお言葉に甘えて暢気に待つワケにもいかない。こっちも引き続き他所をあたってみるべきだ。少しでも早く解除できるに越したことはあるまい。
そして、人里の守護者サマは去り際にこんな餞別まで寄越してくれた。
「そのままでは見た目も悪影響だろう。よかったらこれで隠しておくといい」
そう言って、上白沢女史は懐から取り出した手拭いをオレの手首にそっと被せた。
布切れで手錠が覆われる、これで人目に付く心配もなくなった。上白沢女史と目が合うと穏やかな表情で小さく頷かれた。彼女の気遣いと信頼を肌で感じる。
「さ、行きましょう。綿間部」
「あぁ……」
申し訳なさに背中を丸めながら、オレは仙人サマに連行されていく。その後ろ姿を、寺子屋の教師は目を細めて見送った。
パトカーの赤灯とサイレンが遠退いていく。いつの日か、男が大手を振ってシャバに戻れる日を信じて。

「だから逮捕されたワケじゃねぇっっーの」

サスペンス劇場のクライマックスみたいになっちまったじゃねーか。

とりあえず手拭いは返しておいた。

つづく

第七十七話　「人は見た目で判断されがち」

「うそ……そんな、クロくん!?　ううん、大丈夫。例えクロくんがどんな嗜好してても私、ちゃんと受け入れてみせるから！」

ガラリと引き戸を引いた直後、鯢呑亭に入るなり熱烈な歓迎されて言葉が出てこなかった。

鯨帽子がトレードマークの看板娘がオレの変わり果てた姿に悲しみ、すぐさま立ち直って眩い瞳に揺るぎない決意を篭らす。ぎゅっと握った両手を胸元に持ってくる女子らしい気合ポーズと合わさって、カワイイ系の顔を真剣そうに引き締める。

こっちがツッコミを入れる前に自己完結された件について。のっけからコレかよ。泣けるぜ。

オレの仏頂面と華扇の乾き切った愛想笑いから、どうにも思っていたのと違うと悟ったらしい。奥野田美宵は覚悟ガン決まりのツラからいつもの愛嬌ある表情に戻って、パチクリと瞬きする。

「え、違うの？」

「ったりめーだ。どーゆー風に見えてんだ」

「なぁんだ。てっきり女の子に両手を縛られて外を連れ回されることに悦びを見出したのかと思ったから。ビックリしちゃった」

「どんだけ空恐ろしいコト考えてんだ!?　オレの方がビックリだわ！」

手錠キャラすら生温かった。そこまでいったらただの変態でしかねぇ。あわや歪んだ性癖の持ち主にされるところだった。あまりの仕打ちに肝を冷やす。

上白沢女史といい奥野田といい、コイツらはオレを何だと思ってやがんだ。

「こうなった原因はオレじゃねぇ。コイツの仕業だ」

「仙人さんの趣味!?」

「ち、違いますッ!!」

薔薇が咲く紅い中華衣装をぶっきらぼうに指差す。そしたら被害

が拡大してしまった。
　もともとパッチリした緑の瞳をさらに見開いて、看板娘が付き添いを二度見した。あっという間にソプラノ声が店中を駆け巡り、何事かと店内全ての視線が仙人サマのもとへ注がれる。ざわざわと不穏な空気が流れた。
　案の定、とばっちりを受けた華扇が羞恥と怒りに顔を赤くして否定の声を張り上げる。これまで築き上げたマジメな仙人サマのイメージを壊されかねないし、ヘンな注目のされ方して恥ずかしかったに違いない。
　邪な濡れ衣を着せられたのを根に持った恨みがましいジト目でオレを一瞥しつつ、桃色ミディアムヘアに白いシニョンの女がどうにか口調を落ち着かせる。
「まぁ、何と言いますか……色々とありまして。ご覧の通り、鍵を失った枷が彼の手首に嵌って外れなくなってしまったのです」
「そーゆーこった。鍵穴に針金でもブッ刺せればどうにか解除できるんだが、置いてねぇか？」
「あ、そういうことだったんだ。勘違いしちゃってごめんね。でも、お料理で針金なんてそうそう使うことないから……おじさん、ないよね？」
　奥野田がカウンターの向こう側に投げかける。手際よく魚を捌いていた白髪ハゲのオヤッサンが手を休め、無言で首を横に振って肩をすくめた。寡黙なこって。奥野田がいなかったら店が回らなくなるんじゃなかろうか。
　やむを得ず外ハネ系ピンクショートの看板娘もキッチンに回り、それとなく使えそうなものがないか調べていった。そのうち一つを手に取ってパタパタと駆け寄ってくる。
「お待たせ。刺身包丁でもいいかな？」
「イイワケねーだろ」
　一輪挿しの花茎を両手で持つかのような儚さに、研がれた刃物の先端がギラリと反射する。看板娘の容姿とのギャップが凄まじい。何つーか怖ぇよ。

物怖じしない仙人サマですら困惑していた。引きつった表情を浮かべてかろうじてフォローする。
「そ、そうですね。その大きさでは鍵穴にも入らないかと。竹串や爪楊枝はどうでしょう?」
「仙人さんナイスアイディア!」
「最初からそっち持って来いよ……」
よもや鯢呑亭の看板娘に包丁の切っ先を突き付けられる日がこようとは思わなんだ。華扇と奥野田に挟まれながら冷や汗をかく。オイコラ誰だ今修羅場つったの。
あれから爪楊枝も試してみたものの、残念なことにこっちも上手くいかなかった。おのれ小癪な。
苦虫を噛み潰したようなツラで手首のブツを見下ろす。左右から仙人サマと看板娘が顔を見合わせて苦笑する。
「お店が終わったら住居も探ってみるね。よかったら飲みながら待ってる? 今日の一押しはなめこおろしなの」
「ふむ。当てずっぽうにいくよりも、ここは機を伺うのが得策でしょうか。綿間部どうします?」
ちゃっかり宣伝と客引きをこなす抜け目ない鯨帽子の娘に乗せられて、紅い中華衣装の女もしたり顔になって頷く。それっぽいこと抜かしとるが、まさか食い物に釣られただけじゃねぇよな。
おもむろに意見を求められたオレは、これ見よがしに手錠の鎖をジャラジャラ鳴らしてやった。
「この手でどーやって飲み食いしろってぇんだ」
赤みがかった瞳と緑の瞳が揃って鉄製の輪っぱに目線を下げる。利き手どころか両手とも不自由なのにメシなんざ食えるか。
ところが、なぜか奥野田が「大丈夫!」と自信たっぷりに胸を張った。こっちもデカい。って、こんな時にオレは何考えてんだ。
「仙人さんに食べさせてもらえば平気。この前だって、ケガしてた時もそうしてもらってたでしょ? 私とミスティアさんも手伝ったもん」
「ええ、私もそれで構いませんよ」

「オレが構うわ！」
　何が悲しくて両手を塞がれたまま女に手ずから餌付けされねばならんのだ。
　想像してほしい。行きつけの居酒屋のカウンター席で、ガッチリと手錠された黒ずくめの男に桃色ミディアムヘアの仙人サマがニコニコな笑顔で「はい、あーん」と食べさせている場面。
　おわかりいただけただろうか。控えめに言ってドン引きだろうが。

「別に恥ずかしがらなくてもいいと思いますけど。私なら気にしないのに」
「だからオレが気にすんだよ。んな情けねぇザマ晒すなんざ男の恥だ。名残惜しそうにしてっけど、オメーが腹減ってるだけじゃねぇのか？　そんなになめこおろし食いたかったのかよ」
「ぼ、馬鹿者！　そんなわけないでしょうッ!?　本当に失礼な人ですね、まったくもぉ……」
　風船みたく頬っぺたを膨らませて華扇がオレを睨み上げる。
　あどけなくもあざとい。コレで長年修業を積んだ格の高い仙人なのか疑っちまう。そのうえ容姿レベルが高いのもあってどんな表情も絵になる。ま、コイツ自身はいつも通り無自覚なんだろうけど。
　鯢呑亭から遠ざかっていき、次の行き先を考えながらボヤく。
「上白沢女史と奥野田の方はひとまず待つとして、残るは赤蛮奇のいる酒場か稗田邸ぐらいか？　せめてヘカーティアが通りがかってくれりゃ幾分マシになんだが……」
「むっ、どうしてそこで彼女の名前が出てくるのですか」
　オレが地獄の女神を名指しした途端に、華扇が不機嫌そうに半目になって唇を尖らせる。ホントに感情豊かなやっちゃな。どーして怒ってんのか知らんけどよ。
「そらアレだろうよ。こう、女神の力で何とかしてもらおうとな」
　あわよくば女神サマの不思議なパワーでサクッと片付いたりしないもんかと思った。ただ、現実はそこまでご都合主義にはいかねぇようで。あと、さり気なく華扇がほっとした顔をしていた。何でや。

そう、女神はいねぇが仙人はいた。もっとも、仙人サマのパワー（物理）ならチェーンを引き千切るのは造作もないそうだ。脳筋かよ。

「なぁオイ、解呪の仙術とかねぇのか？」

「なくもないですけど、今必要なのは解呪ではなく開錠ではありませんか。それは呪われた道具ではないのでしょう？」

「そらそーだが」

サラッと言いやがったが解呪の技はマジであんのな。もしやいつぞやの腹パンのことではあるまい。思い出すだけで鳩尾が痛みそう。

ひゅう、と夜風がオレたちの間を通り抜けた。あわせて下腹部に違和感が生じる。人体ひいては生き物である以上は避けられぬ生理現象。即ち、尿意。

焦りはしない。もし後ろ手に拘束されていたらマズかったが、幸いにも両手とも前側にある。これならチャックも下ろせるし用も足せる。そうだ、何も問題はない。

「華扇、ちょっとイイか」

「はい？　どうかしたのですか？」

「いや、ションベンしてぇんだけどよ」

「え、え？　えぇえぇ!?」

何故にそこまで驚くのか。夜を生きるハードボイルドな何でも屋はトイレ行かないとでも思ったんか。昔のアイドルじゃあるめぇしよ。

オレが呆れる傍らで、ミニスカ中華衣装の仙人サマは落雷を受けたかの如き険しい様相を浮かべる。さながら危惧していたことがついに訪れてしまったといわんばかりに硬直していやがった。

「……わかりました。こっちです」

「案内せんでもいいって。便所の場所ぐらい知っとるから」

真顔になった仙人サマに再び腕を掴まれて、ズルズルと引っ張られていく。聞けよ。

人里にも公衆トイレ――幻想郷の世界観でいうならば厠がある。いくら時代劇チックな文明だとしても、どいつもこいつもワン公みたく所構わず立ちションしたりはしねぇのだ。そいつはテント暮らし

のオレにとっても必須のスポットだった。
つまるところ、オレが戻ってくるまで華扇はその辺で待ってくれればそれでイイんだが。どーゆーワケか何処かへ連れて行こうとしている。それもオレが知る目的地とは正反対の方向に。
「オイ――」
「いいから黙ってついてきなさい」
「お、おぉ……」
有無を言わさぬマジトーンに語尾が弱弱しく消沈していった。急にシリアスになるのやめーや。
何となく女の尻に敷かれているような気がして情けなくなってきた。チクショウ、こんなんオレのキャラじゃねーだろ。
くだらない茶番を繰り広げている間にも桃色ミディアムヘアに白いシニョンの女に半ば強引に連行されて――
そして、気付けばオレたちは人里の外にまで出たのであった。
「いやいやいや、どこまで行く気やねん」
「しっ、静かに」
唇に人差し指を立てて窘められる。いやお前、静かにじゃねーよ。
幻想郷が織り成す豊かな自然を見渡せる。曲がりくねったあぜ道が遠く何処までも続く。路傍に沿って自生した木々が生い茂り、フクロウの鳴き声が星の少ない夜空に溶ける。
言わずもがな、便所はおろか掘っ立て小屋の一つも見当たらない。どーすんだコレ。
「こっちです」
呆気にとられる暇もなく、華扇がまたしてもオレの腕を引く。しかもキョロキョロと周囲に満遍なく視線を配っていた。
「……ここなら大丈夫そうね」
ほどなくして、足を止めて独り言のように呟く。
齢数百年を迎えようかというほどの大きな樹木の裏側であった。一人ぐらいなら難なく隠せてしまう図太い幹を誇る巨木が、夜空を目掛けて天高く聳える。今宵は月明りも乏しいため、どこか畏怖めいた雰囲気が漂った。

わざわざこんな場所まで足を運ぶ必要はなかった。はたして一体何を用心していたのやら。賢い仙人サマの考えることがイマイチわからん。

ま、何だってエエわ。とにかくやることさえ済ませれば。ムダに歩かされたせいで結構危うかったりする。

「じゃあオメーはしばらくあっちに――」

「では失礼します……ッ！」

「ハ？」

オレの言葉を遮って、華扇が固い口調でそんなことを口走った。間髪入れず真正面に膝立ちになる。女の目線というか頭の高さがちょうどベルトの位置と同じぐらいに届いた。

そしてあろうことか、桃色ミディアムヘアの仙人サマはオレのズボンへとその手を伸ばす。

「ちょぉおおおお!?　バッ、バカおまっ、何やってんだァ!?」

「で、ですから！　私が下のお世話をしてあげると言ってるんですッ！　私だって恥ずかしいのに言わせないでください！」

「いらんわ！　そんぐらいテメエでするって！」

「いいえ、こればかりは絶対に引きません！　そもそもこうなった原因は私なのですから、しっかり責任は果たさなければ気が済まない！　仙人としても！」

「それもう仙人とか関係ねぇだろ!?」

どうにか押し退けようとするものの、その抵抗がむしろ仇となり、ますます華扇が意固地になって腰にしがみ付こうとする。あまつさえ手どころか顔や口元が股間のすぐそこまで差し迫った。

吐息が当たりそうな距離に、背筋を逆撫でするような感覚に襲われて身震いする。

「ぐぅお……!?」

ア、アカン！　さっき下手にツッコミしたせいで膀胱にヘンな力が入っちまった。わりと冗談抜きで限界が近い。

「いいからそこどけって！　このままじゃ（小便が）顔にかかっちまうぞ!?」

「そ、それも全て覚悟の上ですッ!!」
どーゆー覚悟の決め方してんだコイツは!?
オレの意味不明な脅しにも華扇は屈しない。意地かプライドかはたまた別の欲求が彼女を突き動かすのか。
今やすっかり茹蛸みてぇに顔が赤らんでいるクセして、けれども決して引くまいと茨木華扇が粘る。もはや手段と目的が入れ替わっていることにも気付いていない。
とうとう業を煮やして仙人サマが力づくでオレの手を払い除ける。その一瞬を暴走気味とはいえコイツが見逃すハズもなかった。
「ちょま……ッ!?」
「ふー、ふー……いきますっ！」
興奮のあまり息遣いも熱くなって、包帯の巻かれた細い指先が、高まる緊張で震えながらもズボンのチャックを摘まもうと――
「何してるわけ?」
冷ややかな声が浴びせられた。瞬く間に世界が凍り付く。
赤い短髪に青リボンのろくろ首が、野菜屑やら魚の骨が載った籠を片手に突っ立っていた。そういや生ゴミ捨て場がこの近くだったっけか。などと他人事のように場違いな思考が過る。
その一方で、現実は非常であった。数秒前までの威勢はみるみるうちに消え失せて、オレたちの顔色が青ざめていく。
「もう一度聞くけど、何してんのよ」
赤蛮奇が同じ質問を重ねる。ただし、そのポーカーフェイスは目の前の全容を余すことなく捉えておった。
夜更けにこっそり人里を抜け出した、男女二人。
人目を忍んで木陰に身を潜めて、誰の目にも憚れることなく二人きりの秘め事にしけ込む。
片や男はただ棒立ちになり自分では何もせず、片や女は跪いて自らの手や口を使って相手に尽くす。それは一方的な奉仕に他ならず。されど、背徳に浸り夢中になっていくうちに女も肢体を火照らせて――
「最っ低。マニアックすぎて引くんだけど」

赤蛮奇の蔑んだ目がオレだけに突き刺さった。どう見てもオレが華扇にイロイロと強要したことになってやがる。これまでで最も酷い勘違いだ。

マズイ。この流れでいくとドグサレクソ外道の烙印を押されちまう。何とかしなくては。下手すると人里を追放されかねない事案になる。

「違ぇよ！　よく見ろ。コレ、コレがあんだろ！」

ろくろ首の見当違いな妄想を打ち破るべく、オレは唯一の物的証拠たる手錠がハマった両手を掲げてみせた。

赤蛮奇の目が汚物を見下すものにランクアップした。

「汚らわしい……」

生ゴミを捨てにきた女に汚らわしいと罵声を吐き捨てられた。どうやら自縛手錠プレイの趣味まで上乗せされた模様。誤解が誤解を及ぼす大惨事。これは酷い。

「ま、待ってください！」

そこでようやく、未だに熱が引かない赤みを帯びた頬で華扇が割って入る。いかに自分がギリギリアウトなことをしていたか、やっと気付いたらしい。かなり手遅れだけど。

胡乱な眼差しを差し向ける赤髪のろくろ首に、桃色ミディアムヘアの仙人サマは必死になって弁明をする。

「これはその、決していかがわしい行為をしていたわけではなくてですね？　とと、とにかく違うんです！」

「まるで説得力がないんだけど」

「はうっ!?」

が、赤蛮奇にバッサリと論破された。あの説教好きが言い負かされるとは、まだ本調子ではなかったらしい。それ以前に赤蛮奇のセリフが正論過ぎてぐうの音も出ない。

つーか、こっちだってそれどころじゃねぇ。いよいよ漏れる瀬戸際まで来ちまったオレは切実な叫びを上げるしかなかった。

「どーでもいいけどお前らどっか行けよぉぉおお！」

トイレは間に合った。

問題の手錠も、偶然にも人里に来ていた博麗の巫女が針を持っていたおかげで無事に解除できた。

後日談。

「将也君、今度は私と手錠で繋がってみる？」

「勘弁してくれ……」

どこからか噂を聞いた女神サマに笑えない冗談でからかわれ、オレは二度とあの手錠を出さないと固く誓った。

つづく

第ｉｆ話「少年は自転車に乗った瞬間から少しだけ大人になる」

月が導くある晩。

なぜか知らねぇけど、茨華仙の屋敷にどー見ても似つかわしくないブツが置いてあった。

「なぁオイ、華扇」

「はい？　何ですか？」

「いや何ですかってぇ……なしてオメーんところにチャリなんざあんだよ」

オレが素朴な疑問を投げつければ、柔らかな桃色の仙人サマは赤みがかった瞳をキラリと光らせてドヤ顔で両腕を組んだ。薔薇が飾られた中華衣装の前垂れごと豊満な膨らみが押し上げられる。しょっちゅうそのポーズしとるけどお気に入りなんか。

この場にいないハズの依神紫苑と比那名居天子のチベットスナギツネみてぇなツラが脳裏を過った。ま、コイツと彼奴等じゃ圧倒的に格差がありすぎる。中には見るに堪えず「もうやめてあげて！」と懇願する輩も現れよう。

「オレを呼んだのもコレが理由ってか」

「まぁそうですね」

あっさり華扇が白状した。なお、呼ばれたと言ったものの現実はこの女に連れてこられたのだが。正規のルートで行かねば辿り着けないとかオレにどうしろと。

中国四千年の歴史を匂わせ、しかもトラまで放し飼いにしている旧い立派な屋敷。その庭先に通学用っぽい自転車が紛れ込んでいやがった。瞬きしようが瞼を擦ろうが目の前にあるものは同じ。

いくらド田舎ファンタジー異世界の幻想郷つってもさすがに違和感だろ。ミスマッチっぷりがハンパない。まるでド素人が作った出来の悪い合成コラ画像みてぇだわな。

何ともアンバランスな光景にオレの方がチベットスナギツネさな

がらの乏しい面構えになっちまった。
「ほっ」
　華扇が一歩前に躍り出てこっちを振り返った。美人な顔立ちもあってあざといスキップさえも見栄えする。説教がうるさかろうが容姿は抜群にイイのだ。本人には言わんけど。
「これを綿間部に見てもらいたかったんです。そのためにわざわざ香霖堂から借りてきたのですよ？」
「買ったんじゃなくてレンタルかよ。ったく、こんな山奥までどーやって運んだんだか。まさかお前、コレ乗れんのか？」
「いいえ。この屋敷までは紫にお願いしました」
「つかー、あの女もいたんかい」
「ええ、わりと来ていますよ？」
　例のガラクタショップ、閑古鳥の巣窟かと思いきや意外と人の出入りはあるらしい。ただし、買い物客よりも見物客の方が多いし店主も商売っ気のねぇ骨董マニア。そんなん博物館の間違いじゃねぇのか。
「ま、エエわ。んで？　何でまた急にこんなモン持ち帰ったんだ？」
　この女がクソマジメな仙人でありながら、実を言うと食道楽かつ酒豪で俗世にも興味津なのはオレも知っている。というより、わりかし周知の事実ではなかろうか。
　だとすれば、おそらく幻想郷じゃ珍しい部類の自転車に関心を持つのも頷ける。もっとも、腹の足しにもならんチャリンコよりもタコ焼き機とかの方が喜びそうな気がするけど。
「綿間部？　今とても失礼なことを考えませんでしたか？」
「気のせいだろ」
「まったく白々しい。本当に貴方という人は、どうしていつもそうなのですか」
「だから気のせいだって」
　紅い中華衣装の仙人サマに赤蛮奇ばりのジト目で疑われる。図星を突かれたが平然としらを切っておいた。それでも小言は避けられなかった。いきなり察しが良くなるのやめーや。
　しばらくオレに非難の眼差しとネチネチ説教を続けていた華扇

だったが、自ら話を脱線させていたことに気付いて「こほん」と咳払いした。
「えっとですね。魔法の森に人形遣いと外来人が住んでいるのは知ってますよね？　この間、彼らが楽しげにこれに乗っていたと聞かされまして」
「聞かされて？」
テキトーな相槌で続きを促すと、桃色ミディアムヘアの仙人サマは目を泳がせながら人差し指をつんつんと突き合わせた。
「それなら同じく外来人の綿間部も心得があるのではないか、と」
「ほーん、要するに自分も乗ってみたくなったってぇクチか？」
「……はい」
そう問い質すと、どこか照れ臭そうにコクリと小さく頷かれた。いじらしい態度になられて僅かに戸惑う。あざといなチクショウ。オレじゃなかったら勘違いしてんぞ。
事情はどうあれ、魔法の森で暮らしているそのカップルの二人乗りが羨ましかったらしい。乗り方を教えてくれじゃなくて乗せろときたか。ま、コイツも虎だの儂だの背中に跨っているし、そんなモンか。
「フッ、やれやれ」
「むぅ」
これ見よがしに余裕ぶったツラで肩をすくめる。オレの見透かした態度が気に食わなかったのか、華扇がわかりやすく頬を膨らませた。さっきまでしおらしかったのに、相変わらず表情がコロコロ変わるやっちゃな。
しかし揶揄えたのも束の間。すると今度は華扇の方が何かに勘付いた様子でハッとしたかと思えば、どーゆーつもりかニヤニヤと口角を上げた。あまつさえこんなコトまで言い出す。
「もしかして綿間部には荷が重かったのでしょうか？　ごめんなさいね、できないなら正直に言ってくれてもいいんですよ？　別に恥ずかしくないですから」
「んだとコラ。上等だコノヤロウやってやろうじゃねーか見てやがれ」

「……うふふ。思いのほか単純な人ですよね」
「うるへー。男ってぇのはなぁ、なめられたらオシマイなんだよ」
挑発的な煽りにまんまと乗せられて、売り言葉に買い言葉で受けて立つ。幼稚と言うなかれ。
オールバックの髪型を指で梳きつつ、チャリンコの前に座り込んだ。手始めにコキコキと指を鳴らすオレを見つめて、華扇は包帯に包まれた指を口元に添えてほくそ笑む。なにわろてんねん。
先客がいたおかげであろう。チェーンの回転も悪くないしタイヤの空気も充分に残っていた。せいぜいサドルの高さを調整するだけで片付く。
「手慣れてますね」
「まーな。チャリのメンテぐれぇできなきゃ何でも屋なんかやってられねぇさ」
「ふぅん、少し見直しました」
「少しだけかよ」
「先ほどみたいに意地悪するからです、馬鹿者」
カチャカチャと器用に弄るオレの隣にしゃがんで華扇が小さく唇を尖らせる。やはり興味が沸いたのかそのまま作業を見守る。というか近ぇって。ちょいちょい肩が当たってんじゃねーか。ったく、この無防備め。
その辺で寝そべっていた虎が、主と客人をチラリと一瞥して退屈そうに欠伸をかます。昔そんな感じの歌があったな。アレは駐車場の猫だったか。
そうこうしているうちに仕上がった。試しに乗っかってみたがイイ塩梅の高さだ。悪くねぇ。
「ま、こんなモンだろ。オイ華扇、二ケツすんぞ」
「け……ッ!?　へ、変態！　私のお尻でナニする気ですか!?」
緑のミニスカごと臀部を両手で覆い隠しながら、すかさず華扇がオレから飛び引いた。整った顔立ちを赤らめながらも鋭い目つきで睨みつけてくる。オメーこそ何考えてんだ。
毎度お馴染みの勘違い仙人サマに呆れ顔で憐れみの視線をぶつけ

つつ、後ろの荷台を顎で示してやった。
「後ろに乗せてやるって言ってんだよ。お前がリクエストしたんだろうが」
「んなっ!?　そそっ、それならそうと初めから言ってください紛らわしい!!」
「向こうじゃ二人乗りのことそー言うんだっつの……」
理不尽な仕打ちにゲンナリするオレの後ろで、まだおかんむりな仙人サマが口とは裏腹に素直に荷台に跨った。さりげなく自然とオレの腰に両腕を絡める。
「……フッ」
まさか異世界でチャリに乗るハメになるとは思わなかった。ま、久しぶりに夜道のサイクリングと洒落込もうか。
ライトの光が暗闇の前方を照らす。
頭上に木枝が生い茂って月明りも遮られていた。夜行性らしき野鳥の囀り。自転車の滑車と小刻みにブレーキ音が鳴り響く。
華扇の屋敷から麓まで下り峠が続いた。まとまりのない山道コースをハンドルとブレーキで捌き切る。アスファルト舗装されてない天然の砂利道なせいで路面が凸凹しやがる。せめてコレがマウンテンバイクならまだマシなんだが。
そんな中でも、真後ろに座る桃色ミディアムヘアと白いシニョンの女はご満悦で感想を述べる。
「なかなか上手いですね。てっきり転がり落ちていくものかと思いましたけど、速さも制御できるものなのですか?」
「そら今はブレーキ握ってっからな。もし手放したらそうなるだろうよ。試してみるか?」
「結構です。余計なことはしないでください」
「へーへー」
仰せの通りに手綱をしっかり握りしめて、Uターン染みた急カーブを一気に曲がる。夜目が効いてなかったら今のでコースアウトしていたかもしれん。しかしオレならできる。なぜならオレは夜に生きる男。

それはそれとして、心には時として天邪鬼が影を差す。早い話、そー言われるとやりたくなってしまうってぇのが人の性とでもいおうか。ま、そんなワケで。

「え……？」

さすが仙人サマは察しの良いこって。だがもう遅い。

停止装置を担うグリップからパッと手を離す。間髪入れず、フツーのチャリンコが傾斜に沿って爆走し始めた。

向かい風を突っ切り、土と砂利に細身のタイヤが激しく浮き沈みする。サドルまでもが衝撃にガタガタと揺らいだ。

下り坂に身を委ねた暴れ馬をハンドルだけ駆使して乗りこなす。なかなかにスリリングだ。頭文字な漫画で池谷も言っていた通り。とくでもなくヤバいぜ、下りは……！

「きゃああ!?」

「オ〝ゲェッ!?　ちょば、苦し……ッ!?」

女らしい悲鳴を上げて華扇が落ちないようにオレに強くしがみ付く。

可愛らしい声音に反して実際には万力のベアハッグが襲い来る。両手が塞がってガラ空きのボディを内蔵諸共に締め上げられた。ほんの一瞬、手元が狂う。

前輪が石ころを踏んでしまった。

「げ」

その後はあたかも走馬灯もかくやのスローモーションだった。

タイヤが地面を離れる。一昔前の有名な洋画――少年がカゴに宇宙人を乗せたチャリで夜空を駆けるやつ、みたくはならなかった。そんなスムーズな展開にはいかず、それでも車体は宙に浮く。

つまるところ、ただ空中に放り投げられただけであった。

「うぉおおお！」

「ひゃあああ！」

いつの間にかオレも仙人サマもすでにサドルや荷台に座ってなかった。チャリンコ本体も含めて三者三様、もはやギャグ漫画の如くバラバラになって前へ投げ出されていた。

「アイデッ」

ムダにキレーな放物線の軌道を描いて、真っ先に背中から草むらに叩きつけられた。平地だ、地面が斜めじゃない。どうやら猛スピードで下っているうちに麓に到着していたらしい。草の青臭さを吸い込み、嘆息する。

数秒後、派手な物音とともに自転車が転倒するのを視界の隅に捉えた。ヤベ、借り物つってたけど壊れてねぇよな……

そんな心配も間もなくかき消される。ある存在によって。

真上から落下してくる人影があった。両手両足を大の字に伸ばして仰向けになったオレを目掛けて、そいつはどんどん近付いていき――

「あう！」

「ブボォッ!!」

茨木華扇がボディプレスの勢いで墜落してきやがった。

肺にあったハズの空気が根こそぎ吐き出される。一時的な酸欠に陥って視界がチカチカ眩み、脳ミソがボヤけて意識が霞んだ。赤髪二つ結びの死神女が見えた。またサボってんじゃねーよ。

「いったぁ……」

「いつつ……」

だーもう、とんだ誤算だったぜ。背中は痛むわ、網膜が眩しさと暗さが交互に入り乱れるわ。悪運に多少の自負はあったが、今回ばかりは己が不運を呪った。

ほどなくして視界が回復してくる。そしてオレは思い知ることになる。

ミニスカ越しに女の尻が目の前にあった。

ほどよい肉付きの健脚が、太腿の付け根あたりまで惜しげもなく曝け出されている。きめ細かな素肌の生足が大胆に開かれてオレに跨っていた。

滑らかな丸みに質感も漂う。均整の取れたラインがくっきりと浮かび上がって、フリフリと左右に揺れる。その魅惑的な有り様に、オレは我を忘れて言葉を失う。

「――ハ!?」

いやいやいや何をじっくり凝視してんだオレは。

そこでふと気付いた。こんな時にこそ真っ先に騒ぎ出しそうなコイツが未だに何も言ってこないことに。いくら何でもおかしい。一体どーした――

「……」

オーケー。ちょいと落ち着こう。

どうにもミニスカ中華衣装な女の眼差しが、ちょうどベルトの下らへんに注がれている気がしてならない。こっちの勘違いかもしれんが、そのわりに部分的に熱い視線を感じる。誤解だったとしても意識してしまうとむず痒い。

かろうじて首を動かしてそっちを見やる。柔らかな桃色の髪から覗く耳も朱が差していた。あと一向にオレから退く素振りすらない。

ごくり、と生唾を飲む音が聞こえた。

「いやゴクリじゃねーよ」

「ひゃっ!? こ、これは違――きゃあああッ!! どどっどこ見てるんですかぁ!!」

「どこって――」

「や、や、やっぱり最初から私のお尻が狙いだったんですね!? こんのケダモノ!!」

「いや違ぇから! どー見ても事故だろ事故!」

「うるさいスケベ! いいからあっち向いて!!」

華扇の臀部がオレの目と鼻の先にある現状に気付くや否や、あたかも痴漢に遭ったみたいに叫びやがった。ついでに暴れ出した。

人の上にうつ伏せで圧し掛かっているのもお構いなしに両足をバタつかせる。顔面を蹴り飛ばされかねない。身の危険を感じて冷や汗が溢れる。というか誰がスケベでケダモノだコラ。

シニョンの共通点もあり、ストリートファイターの春麗の如き蹴り技を浴びせてくる。足癖の悪い女から我が身を守るべく、オレは眼前に迫る太腿に指を這わせた。

「んやぁあっ! ダメ、そこは――ぁっ、あん!」

「ちょおま――うくっ!?」
瑞々しい唇から艶やかな嬌声を漏らして、華扇がビクンッと官能的に背筋を仰け反らせた。それによって柔らかく押し潰れていた胸がオレの下腹部をシゴくような動きで擦り上げた。
衣服の上からでもマシュマロめいた感触が肌に伝う。むにゅりと形を変える。焦らされているようで、もどかしい微弱な刺激に頭が甘く痺れる。思わず歯を食いしばった。ヤ、ヤバい……!
それでも力を弱めてはならぬと、両脚を抑えつける手を決して緩めなかった。ふとした拍子に指先にも微かな握力が加わった。ますます華扇が切なげに呼吸を乱す。
「はぁ、はぁ。やだぁ、そんなところひろげないでぇ……っ」
「ばっ、変な声だすんじゃねぇ……うっ、くぅ!?」
「だ、だって――あぁっ、はぁん!」
宵の深まった草原に、互いの熱く湿った息遣いが荒く混ざり合う。時折、どこか甘くも切羽詰まった女の声が夜風に溶けていった。月下の人静けさに、男女の体が煽情的にうごめきながら折り重なる。
どーにかしなきゃいけないってぇのに、体が思うように動かない。ついには緑のミニスカから下着までもが晒されかけていた。目の前の景色に釘付けになる。だから見てんじゃねぇ!
「はっ、あぁ……あっ、んんぅ!」
「く……お!?」
僅かに残った理性が打開策を求める。何か、何かねぇのか。
視線を巡らす。少し離れた場所に無造作に引っ繰り返った自転車。ダメだ、使い道がない。
もっと遠くに目線を飛ばした。その先に、見慣れた暖簾と赤提灯の屋台が確認できた。
「……何、だと?」
あれだけ朧気だった意識が瞬く間にブッ飛んで正気に戻った。先刻までとは違う意味で冷や汗をダラダラ流しながら二度見する。
屋台のすぐ傍ら。和服鳥娘の女将が驚いた様子であざとく口元に手を当てておった。もちろんオレともバッチリ目が合ったってオイ

イイイイ!?

目と目が合う瞬間どうたら。女将ことミスティア・ローレライがそれこそファンが見たら狂喜乱舞しそうな恥じらいにポッと頬を染めて、気遣うように言った。

「あはは、お邪魔しちゃった?」

その直後、第三者がガン見していると知った仙人サマの本日最大の悲鳴とともに、全力の後ろ蹴りがオレの顎をカチ割った。

ＥＮＤ